

茨城県教育財団文化財調査報告第6

一般国道125号道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

西郷遺跡 南丘遺跡
長峰遺跡 数光遺跡
宮塚遺跡 右粃館跡
内路地台遺跡

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第64集

一般国道125号道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

にし	ごう	遺	跡	みなみ	おか	遺	跡
西	郷			南	丘		
なが	みね	遺	跡	すう	こう	遺	跡
長	峰			数	光		
みや	づか	遺	跡	みぎ	もみ	やかた	跡
宮	塚			右	粃	館	
ない	ろ	じ	だい				
内	路	地	台				遺跡

平成 3 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県南部は、東京通勤圏の拡大と筑波研究学園都市の建設・整備により、大きな変貌を遂げようとしております。このような情勢下で、本県における交通網の整備は、県南地方や本県全域ばかりではなく、首都圏全域をも含めた調和のとれた発展のためにも、緊急かつ重要な課題であると言わざるを得ません。

一般国道125号は、新東京国際空港から県南・県西を經由して埼玉県東部までを結び、その地域の発展にとって必要不可欠のものです。土浦市付近の一般国道125号バイパス建設予定地内には、西郷ほか6遺跡が所在し、その発掘調査を財団法人茨城県教育財団が茨城県から委託を受けて実施いたしました。この調査によって郷土の歴史の解明に必要な数多くの資料を検出することができました。

本書は、昭和63年度・平成元年度に発掘調査を実施致しました一般国道125号バイパス建設予定地内に所在する西郷ほか6遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として活用されることを切望致しております。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた御協力に感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会・阿見町教育委員会並びに土浦市教育委員会をはじめとする関係各機関及び関係各位からいただいた御指導・御協力に対し、衷心より謝意を表します。

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 礮田 勇

例 言

1 本書は、昭和63年度及び平成元年度に、茨城県の委託により財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡阿見町・同土浦市に所在する西郷遺跡他6遺跡の発掘調査報告書である。

なお、7遺跡の所在地は次のとおりである。

にしごう 西郷遺跡	稲敷郡阿見町阿見字香取前2929番地外
みなみおか 南丘遺跡	土浦市烏山字南ヶ丘1907番地外
ながみね 長峰遺跡	土浦市右靱字長峰1134番地外
さうこう 数光遺跡	土浦市右靱字数光2544番地外
みやづか 宮塚遺跡	土浦市右靱字宮塚2552番地外
みぎもみ 右靱館跡	土浦市右靱字小山1194番地外
ないろじだい 内路地台遺跡	土浦市右靱字内路地台1064番地外

2 西郷遺跡他6遺跡の調査及び整理を行った当教育財団の組織は、次のとおりである。

(平成2年度初めの組織替えにより、従来の調査課(企画管理班, 調査一・二・三班, 整理班)は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課, 調査課, 整理課をおき、調査課には調査第一・二・三の三つの班をおくこととなった。)

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	小 林 元	昭和63年4月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 男	昭和61年4月～平成元年3月	
	小 林 洋	平成元年4月～	
事 務 局 長	坂 場 庸 克	昭和62年度4月～平成元年3月	
	一 木 邦 彦	平成元年4月～	
埋蔵文化財部長	石 井 毅	平成2年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行	平成2年4月～
	課長代理	水 飼 敏 夫	平成2年4月～, (昭和62年4月～平成2年3月企画管理班長)
	主任調査員	山 本 静 男	(昭和61年4月～平成元年3月 企画管理班)
	主任調査員	小 河 邦 男	(平成元年4月～平成2年3月 企画管理班)
	主任調査員	小 山 映 一	平成2年4月～
	係 長	園 部 昌 俊	昭和63年4月～
	主 任	山 崎 初 雄	(昭和60年4月～平成元年3月 企画管理班)
主 事	大 部 章	(昭和61年4月～平成2年3月 企画管理班)	

	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～
	主 事	大 貫 吉 成	平成2年4月～
調 査 課	課 長	青 木 義 夫	昭和59年4月～平成元年3月
	課長(部長兼務)	石 井 毅	平成元年4月～
	調査第三班長	加 藤 雅 美	昭和63年度
	調 査 員	西 野 則 史	昭和63年度調査
	調 査 員	浅 井 哲 也	昭和63年度調査
	調査第一班長	沼 田 文 夫	平成元年度
	主任調査員	柴 正	平成元年度調査
	主任調査員	根 本 康 弘	平成元年度調査
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫	平成2年4月～
	主任調査員	根 本 康 弘	平成2年度整理, 第1～3・5～10章執筆, 編集
	調 査 員	浅 井 哲 也	平成2年度整理, 第4章執筆

- 3 本書に使用した記号等については、第3章遺構・遺物の記載方法を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、石器の石質鑑定について蜂須紀夫氏（茨城県立下妻第一高等学校）から、土師器・須恵器について福田健司氏（東京都教育庁文化課）、田熊清彦氏（栃木県文化振興事業団）、川井正一氏（茨城県立歴史館）から御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表する次第である。

目 次

序

例言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
第3節 調査経過	3
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 遺構・遺物の記載方法	12
第1節 遺構・遺物の記載方法	12
第2節 表の見方	12
第4章 西郷遺跡	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 基本層序	14
第3節 遺構と遺物	14
第4節 考察	146
第5章 南丘遺跡	167
第1節 遺跡の概要	167
第2節 基本層序	169
第3節 遺構と遺物	169
第4節 考察	233
第6章 長峰遺跡	237
第1節 遺跡の概要	237
第2節 基本層序	238
第3節 遺構と遺物	239
第4節 考察	297
第7章 数光遺跡	307
第1節 遺跡の概要	307
第2節 基本層序	308

第3節 遺構と遺物	309
第4節 考察	314
第8章 宮塚遺跡	316
第1節 遺跡の概要	316
第2節 基本層序	317
第3節 遺構と遺物	318
第4節 考察	328
第9章 右廻館跡	330
第1節 遺跡の概要	330
第2節 基本層序	331
第3節 遺構と遺物	333
第4節 考察	346
第10章 内路地台遺跡	348
第1節 遺跡の概要	348
第2節 基本層序	349
第3節 遺構と遺物	350
第4節 考察	360
結語	361

挿 図 目 次

第1図 調査区名称図	2	第12図 第4号住居跡出土遺物実測図	25
第2図 周辺遺跡位置図	10	第13図 第6号住居跡実測図	27
西 郷 遺 跡			
第3図 西郷遺跡土層柱状図	14	第14図 第6号住居跡竈実測図	28
第4図 西郷遺跡全体図	15~16	第15図 第6号住居跡出土遺物実測図	28
第5図 B3区内土坑群遺構配置図	17	第16図 第7号住居跡実測図	30
第6図 第1号住居跡実測図	18	第17図 第7号住居跡竈実測図	31
第7図 第1号住居跡出土遺物実測図	19	第18図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)	32
第8図 第2号住居跡実測図	21	第19図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)	33
第9図 第2号住居跡・竈実測図	22	第20図 第8号住居跡実測図	35
第10図 第2号住居跡出土遺物実測図	23	第21図 第8号住居跡出土遺物実測図	36
第11図 第4号住居跡実測図	24	第22図 第9号住居跡実測図	38
		第23図 第9号住居跡出土遺物実測図	39

第 24 図	第10号住居跡・竈実測図 ……41	第 55 図	第 2 号掘立柱建物跡実測図(2) ……73
第 25 図	第10号住居跡出土遺物実測図 ……42	第 56 図	第 3 号掘立柱建物跡実測図(1) ……74
第 26 図	第14号住居跡実測図 ……43	第 57 図	第 3 号掘立柱建物跡実測図(2) ……75
第 27 図	第14号住居跡出土遺物実測図 ……43	第 58 図	第 4 号掘立柱建物跡実測図 ……76
第 28 図	第16号住居跡実測図 ……44	第 59 図	第 1・2 号溝, 第 3 号道路跡実測図 ……77
第 29 図	第16号住居跡出土遺物実測図 ……44	第 60 図	第 1・2 号溝出土遺物実測・拓影図 ……79
第 30 図	第17号住居跡実測図 ……46	第 61 図	第 3・4号溝実測図……………81
第 31 図	第17号住居跡出土遺物実測図 ……47	第 62 図	第 4 号溝出土遺物実測・拓影図 ……83
第 32 図	第22号住居跡実測図 ……49	第 63 図	第 1・2 号道路跡実測図 ……85
第 33 図	第22号住居跡出土遺物実測図 ……49	第 64 図	第 1 号道路跡出土遺物実測図 ……86
第 34 図	第25号住居跡実測図 ……51	第 65 図	第 1 号井戸実測図 ……87
第 35 図	第25号住居跡出土遺物実測図 ……51	第 66 図	第 2 号井戸実測図 ……89
第 36 図	第27号住居跡実測図 ……53	第 67 図	第 3・4・5 号井戸実測図 ……91
第 37 図	第27号住居跡竈実測図 ……54	第 68 図	第 1・2・3・5 号井戸出土遺物実測図 ……93
第 38 図	第27号住居跡出土遺物実測図 ……55	第 69 図	第 1 号性格不明遺構実測図 ……95
第 39 図	第28号住居跡実測図 ……56	第 70 図	第 1 号性格不明遺構出土遺物実測図(1) ……97
第 40 図	第28号住居跡出土遺物実測図 ……58	第 71 図	第 1 号性格不明遺構出土遺物実測・拓影図(2) ……99
第 41 図	第30号住居跡実測図 ……59	第 72 図	第 1 号性格不明遺構出土遺物実測図(3)……………101
第 42 図	第30号住居跡出土遺物実測図 ……59	第 73 図	第 1 号性格不明遺構出土遺物実測図(4)……………102
第 43 図	第 3 号竪穴遺構実測図 ……60	第 74 図	第 1・2 号地下式墳実測図……………104
第 44 図	第 3 号竪穴遺構出土遺物実測図 ……62	第 75 図	第 1 号地下式墳出土遺物実測図(1)……………105
第 45 図	第12号竪穴遺構実測図 ……63	第 76 図	第 1 号地下式墳出土遺物実測・拓影図(2)……………106
第 46 図	第12号竪穴遺構出土遺物実測図 ……64	第 77 図	第 3 号地下式墳実測図……………109
第 47 図	第19号竪穴遺構実測図 ……65		
第 48 図	第19号竪穴遺構出土遺物実測・拓影図 ……66		
第 49 図	第29号竪穴遺構実測図 ……67		
第 50 図	第29号竪穴遺構出土遺物実測図 ……68		
第 51 図	第31号竪穴遺構実測図 ……69		
第 52 図	第31号竪穴遺構出土遺物実測図 ……69		
第 53 図	第 1 号掘立柱建物跡実測図 ……70		
第 54 図	第 2 号掘立柱建物跡実測図(1) ……72		

第78図	第4号地下式墳実測図……………111	第106図	須恵器坏の口径・底径比較……………152
第79図	第5号地下式墳実測図……………112	第107図	須恵器坏口径・器高比較……………152
第80図	第2・3号地下式墳出土遺物 実測図……………113	第108図	須恵器坏の法量比比較……………152
第81図	第3・4・5号地下式墳出土 遺物実測・拓影図……………114	第109図	住居跡・竪穴遺構規模ドット図…156
第82図	第122号墓墳実測図……………116	第110図	西郷I期住居跡・竪穴遺構の規 模・方向と出入口り施設……………157
第83図	第122号墓墳出土遺物実測・ 拓影図……………117	第111図	西郷II・III期住居跡・竪穴遺構 規模・方向と出入口り施設……………158
第84図	土坑実測図(1)……………122	第112図	西郷IV・V期住居跡・竪穴遺構 規模・方向と出入口り施設……………158
第85図	土坑実測図(2)……………123	第113図	時期別遺構配置図……………159
第86図	土坑実測図(3)……………124	第114図	西郷遺跡地形図……………163
第87図	土坑実測図(4)……………125	南 丘 遺 跡	
第88図	土坑実測図(5)……………126	第115図	南丘遺跡周辺地形図……………167
第89図	土坑実測図(6)……………127	第116図	南丘遺跡全体図……………168
第90図	土坑実測図(7)……………128	第117図	南丘遺跡土層柱状図……………169
第91図	土坑実測図(8)……………129	第118図	第1号住居跡実測図……………170
第92図	土坑実測図(9)……………130	第119図	第1号住居跡出土遺物実測図……………170
第93図	土坑実測図(10)……………131	第120図	第2号住居跡・竈実測図……………172
第94図	土坑出土遺物実測図……………132	第121図	第2号住居跡出土遺物実測図……………173
第95図	ピット出土遺物実測図……………132	第122図	第3号住居跡・竈実測図……………175
第96図	遺構外出土遺物拓影図(1)……………135	第123図	第3号住居跡出土遺物実測図(1)…177
第97図	遺構外出土遺物拓影図(2)……………136	第124図	第3号住居跡出土遺物実測図(2)…178
第98図	遺構外出土遺物拓影図(3)……………137	第125図	第4号住居跡実測図……………179
第99図	遺構外出土遺物拓影図(4)……………139	第126図	第4号住居跡出土遺物実測図……………180
第100図	遺構外出土遺物拓影図(5)……………141	第127図	第5号住居跡実測図……………181
第101図	遺構外出土遺物拓影図(6)……………143	第128図	第5号住居跡出土遺物実測図……………182
第102図	遺構外出土遺物拓影図(7)……………144	第129図	第6号住居跡・竈実測図……………183
第103図	遺構外出土遺物実測図……………145	第130図	第6号住居跡出土遺物実測図(1)…185
第104図	土師器甕分類図……………147	第131図	第6号住居跡出土遺物実測・ 拓影図(2)……………186
第105図	土師器坏, 須恵器坏, 須恵器蓋 分類図……………149	第132図	第7号住居跡実測図……………187

第133图	第7号住居跡出土遺物実測図…188	第163图	第2号性格不明遺構実測図……………223
第134图	第8号住居跡実測図……………190	第164图	第2号性格不明遺構出土遺物 実測図……………224
第135图	第8号住居跡竈実測図……………191	第165图	第3号性格不明遺構実測図……………226
第136图	第8号住居跡出土遺物実測図…192	第166图	第3号性格不明遺構出土遺物 実測図……………227
第137图	第9号住居跡実測図……………194	第167图	遺構外出土遺物実測図(1)……………228
第138图	第9号住居跡出土遺物実測図…195	第168图	遺構外出土遺物拓影図(1)……………229
第139图	第10号住居跡・竈実測図……………197	第169图	遺構外出土遺物拓影図(2)……………230
第140图	第10号住居跡出土遺物実測図…198	第170图	遺構外出土遺物実測図(2)……………232
第141图	第11号住居跡実測図……………199	第171图	時期別遺構配置図……………235
第142图	第12号住居跡実測図……………200	長 峰 遺 跡	
第143图	第12号住居跡出土遺物実測図…201	第172图	長峰遺跡周辺地形図……………237
第144图	第13号住居跡出土遺物実測図…202	第173图	長峰遺跡全体図……………238
第145图	第13号住居跡実測図……………202	第174图	長峰遺跡土層柱状図……………238
第146图	第14号住居跡・竈実測図……………203	第175图	第1号住居跡竈実測図……………239
第147图	第14号住居跡出土遺物実測・ 拓影図……………205	第176图	第1号住居跡実測図……………240
第148图	第15号住居跡実測図……………206	第177图	第1号住居跡出土遺物実測図(1)…241
第149图	第15号住居跡出土遺物実測図…207	第178图	第1号住居跡出土遺物実測図(2)…242
第150图	土坑実測図(1)……………209	第179图	第2号住居跡・竈実測図……………245
第151图	土坑実測図(2)……………210	第180图	第2号住居跡出土遺物実測図…246
第152图	第1号土坑出土遺物実測図…210	第181图	第3号住居跡実測図……………247
第153图	第1号溝実測図……………212	第182图	第3号住居跡竈実測図……………248
第154图	第1号溝出土遺物実測図……………213	第183图	第3号住居跡出土遺物実測図…249
第155图	第2号溝実測図……………214	第184图	第4号住居跡・竈実測図……………251
第156图	第2号溝出土遺物実測図……………215	第185图	第4号住居跡出土遺物実測図…252
第157图	第3号溝実測図……………217	第186图	第5号住居跡実測図……………253
第158图	第3号溝出土遺物実測図……………218	第187图	第5号住居跡竈実測図……………254
第159图	第4号溝実測図……………219	第188图	第5号住居跡出土遺物実測図(1)…255
第160图	第4号溝出土遺物実測図……………219	第189图	第5号住居跡出土遺物実測図(2)…256
第161图	第1号性格不明遺構実測図…220	第190图	第6号住居跡・竈実測図……………259
第162图	第1号性格不明遺構出土遺物 実測図……………221	第191图	第6号住居跡出土遺物実測図…260

第192図	第7号住居跡・竈実測図	261
第193図	第7号住居跡出土遺物実測図	262
第194図	第8号住居跡実測図	265
第195図	第8号住居跡竈実測図	266
第196図	第8号住居跡出土遺物実測図	267
第197図	第9号住居跡・竈実測図	268
第198図	第9号住居跡出土遺物実測図	269
第199図	第10号住居跡実測図	271
第200図	第10号住居跡出土遺物実測図	272
第201図	第11号住居跡・竈実測図	274
第202図	第11号住居跡出土遺物実測図	275
第203図	第12号住居跡実測図	276
第204図	第12号住居跡竈実測図	277
第205図	第12号住居跡出土遺物実測図 (1)	278
第206図	第12号住居跡出土遺物実測図 (2)	279
第207図	炉穴・土坑実測図(1)	281
第208図	土坑実測図(2)	282
第209図	土坑実測図(3)	283
第210図	土坑実測図(4)	284
第211図	土坑実測図(5)	285
第212図	土坑実測図(6)	286
第213図	土坑実測図(7)	287
第214図	土坑出土遺物実測・拓影図(1)	290
第215図	土坑出土遺物実測・拓影図(2)	291
第216図	土坑出土遺物実測・拓影図(3)	292
第217図	第1号性格不明遺構実測図	295
第218図	第1号性格不明遺構出土遺物 実測図	296
第219図	長峰遺跡時期別遺構配置図	306

数 光 遺 跡

第220図	数光遺跡周辺地形図	307
第221図	数光遺跡全体図	308
第222図	数光遺跡土層柱状図	308
第223図	第1号土坑実測図	309
第224図	第2号土坑実測図	310
第225図	遺構外出土遺物実測図(1)	311
第226図	遺構外出土遺物拓影図	311
第227図	遺構外出土遺物実測図(2)	313

宮 塚 遺 跡

第228図	宮塚遺跡周辺地形図	316
第229図	宮塚遺跡全体図	317
第230図	宮塚遺跡土層柱状図	317
第231図	第1・4号土坑実測図	318
第232図	第1号地下式墳実測図	319
第233図	第2号地下式墳実測図	321
第234図	第3号地下式墳実測図	322
第235図	第1号溝実測図	323
第236図	第2号溝実測図	324
第237図	宮塚遺跡出土遺物拓影図	325
第238図	宮塚遺跡出土遺物実測図	327

右 靱 館 跡

第239図	右靱館跡周辺地形図	330
第240図	右靱館跡全体図	331
第241図	右靱館跡土層柱状図	332
第242図	右靱館跡内郭全体図	333
第243図	右靱館跡コンタ図	334
第244図	第1号堀跡実測図	336
第245図	2・4トレンチ土層断面図	337
第246図	6・7トレンチ土層断面図	340
第247図	第1号塚実測図	342
第248図	第2号塚実測図	343

第249图 塚出土遺物実測・拓影图……………345	第254图 炉穴出土遺物実測・拓影图……………353
内路地台遺跡	第255图 第8号炉穴出土遺物実測图……………354
第250图 内路地台遺跡周辺地形图……………348	第256图 第1号住居跡実測图……………355
第251图 内路地台遺跡全体图……………349	第257图 第1号住居跡竈実測图……………356
第252图 内路地台遺跡土層柱状图……………350	第258图 第1号住居跡出土遺物実測图(1)…358
第253图 炉穴実測图……………351	第259图 第1号住居跡出土遺物実測图(2)…359

目 次

表1 周辺遺跡一覧表……………11	表5 長峰遺跡土坑一覧表 ……………288
表2 西郷遺跡土坑一覧表 ……………118	表6 数光遺跡土坑一覧表 ……………310
表3 西郷遺跡出土土器一覧表 ……………164	表7 宮塚遺跡土坑一覧表 ……………318
表4 南丘遺跡土坑一覧表 ……………208	表8 内路地台遺跡炉穴一覧表 ……………352

写真图版目次

西 郷 遺 跡

P L 1 西郷遺跡全景	出土状況
P L 2 調査前全景・遺構確認状況・第1号住居跡	P L 13 第1・2号地下式壙，土層，第1号地下式壙遺物出土状況
P L 3 第2・6・7号住居跡	P L 14 第3号地下式壙，土層，遺物出土状況
P L 4 第8・9・10・14号住居跡	P L 15 第4・5号地下式壙
P L 5 第16・17・22号住居跡	P L 16 第122号墓壙，第4・11・22・25・44号土坑，第41号土坑遺物出土状況
P L 6 第27・28・30号住居跡	
P L 7 第3号竪穴遺構遺物出土状況，第3・29号竪穴遺構	P L 17 第71・82・83・89・93号土坑，土坑群
P L 8 第1・2・3・4号掘立柱建物跡	P L 18 出土土器(1)
P L 9 第2号井戸土層，第2・3号井戸	P L 19 出土土器(2)
P L 10 第1・2・3・4号溝，第3号井戸・第3号道路跡	P L 20 出土土器(3)
P L 11 第1・2号道路跡	P L 21 出土土器(4)
P L 12 第1号性格不明遺構，土層，遺物	

- P L 22 出土土器(5)
- P L 23 出土土器(6)
- P L 24 出土土器(7)
- P L 25 出土土器(8)
- P L 26 出土土器(9)
- P L 27 土製品・石器・石製品・鉄製品・古銭
・馬齒
- 南 丘 遺 跡**
- P L 28 南丘遺跡調査前・終了時全景
- P L 29 調査終了時全景
- P L 30 第1～8号住居跡
- P L 31 第9～15号住居跡
- P L 32 住居跡竈・遺物出土状況, 第1・6～
8号土坑
- P L 33 第14号土坑, 第1～4号溝, 第1～3
号性格不明遺構
- P L 34 南丘遺跡出土遺物(1)
- P L 35 南丘遺跡出土遺物(2)
- 長 峰 遺 跡**
- P L 36 長峰遺跡調査前全景・伐開後風景
- P L 37 遺構確認状況, 調査終了時全景
- P L 38 第1～7号住居跡
- P L 39 第8～12号住居跡, 第1号性格不明遺
構
- P L 40 住居跡竈, 炉穴, 第4・9・10号土坑
- P L 41 第11・12・19・21・22・24・26・27号
土坑
- P L 42 長峰遺跡出土遺物(1)
- P L 43 長峰遺跡出土遺物(2)
- 数 光 遺 跡**
- P L 44 数光遺跡調査前・終了時全景
- P L 45 第1・2号土坑, 出土遺物
- 宮 塚 遺 跡**
- P L 46 宮塚遺跡調査前・終了時全景
- P L 47 第1～3号地下式墳, 第1号溝
出土遺物
- 右 廻 館 跡**
- P L 48 右廻館跡調査前全景, 伐開後風景
- P L 49 調査終了時全景
- P L 50 第1号土塁, 1～4トレンチ断面
- P L 51 6～7トレンチ, 第1号堀跡
- P L 52 第1・2号塚, 青面金剛像
- P L 53 出土遺物
- 内 路 地 台 遺 跡**
- P L 54 内路地台遺跡調査前・終了時全景
- P L 55 第1号住居跡
- P L 56 第2号炉穴
- P L 57 出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

一般国道125号（以下「125号」という）は、千葉県佐原市を起点とし、茨城県土浦市・同下妻市を經由して埼玉県熊谷市までを結び、茨城県南部や西部における陸上輸送の中心となっている。しかし、土浦市付近では道路の混雑が著しく、幅員が狭い事と相俟って慢性的な渋滞が見られた。かねてからこの混雑緩和が叫ばれていたが、125号が土浦市街地の中心部を通過していたため、幅員は極めて困難であった。そこで、建設省は土浦市街地を迂回するバイパスを建設することになった。路線は、土浦市街地の地形的な理由から市街地の南側を通すこととし、新東京国際空港と土浦市や筑波研究学園都市との輸送力増強をも併せて目指すことになった。

バイパスの区間は、稲敷郡美浦村受領から土浦市中村までとし、土浦市中村地内で主要地方道土浦・野田線につなぐ事になった。この区間のうち、美浦村受領から主要地方道竜ヶ崎・阿見線と交差する地点までの9,940mを美浦・阿見バイパス、主要地方道竜ヶ崎・阿見線との交差点から土浦市中村までの4,120mを阿見・土浦バイパスと称し、美浦・阿見バイパスは昭和48年から、阿見・土浦バイパスは昭和56年から事業が開始された。

昭和62年5月、茨城県（土木部道路建設課）から茨城県教育委員会（以下県教委という）に対して、一般国道125号改良工事予定地に関する「埋蔵文化財の有無及び取扱いについて」の照会がなされた。県教委は、予定地の所在する稲敷郡阿見町教育委員会・土浦市教育委員会の協力を得て調査を実施し、文化財保護の立場から、工事予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて茨城県と協議を重ねた。その結果、阿見町に所在する西郷遺跡、土浦市に所在する南丘遺跡・長峰遺跡・数光遺跡・宮塚遺跡・右籾館跡及び内路地台遺跡については、現状での保存が困難であるとして記録保存の措置を講ずることになり、県教委は調査機関として茨城県教育財団を茨城県に紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県と協議し、埋蔵文化財調査委託契約を結んで調査を実施することになった。昭和63年度には西郷・南丘両遺跡に関する発掘調査委託契約を結び、さらに平成元年度には長峰遺跡ほか4遺跡の発掘調査委託契約を結び、発掘調査を実施した。

第2節 調査方法

1 調査区設定

西郷遺跡ほか6遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系に基き、各遺跡内に以下の基準点を設けて行った。

西郷遺跡 X=4,400m Y=33,960m

南丘遺跡 X=4,720m Y=33,420m

長峰遺跡 X=4,840m Y=32,840m

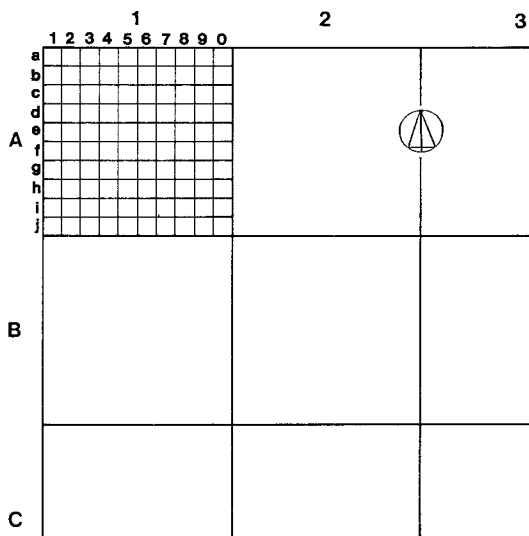
数光遺跡 X=4,840m Y=32,760m

宮塚遺跡 X=4,880m Y=32,640m

右籾館跡 X=5,120m Y=32,160m

内路地台遺跡 X=5,280m Y=31,960m

上記の基準点を中心に40m方眼を設定し、この40m四方の区域を大調査区（大グリッド）とした。さらに大調査区を東西・南北に各10等分して4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。すなわち、40m四方の大調査区内に、4m四



第1図 調査区名称図

大調査区は、北から南へ「A」・「B」・「C」……、西から東へ「1」・「2」・「3」……とし、その組合わせでA1区・B2区……とした。小調査区は、北から南へ「a」・「b」・「c」……「i」・「j」とし、西から東へ「1」・「2」……「9」・「10」と表した。各小調査区は、大調査区と合わせて「A1a₁」・「B2b₂」のように表記した。

2 遺構確認

西郷・南丘両遺跡は、道路用地の中心杭に合わせて、20m間隔に道路の方向と直交させた幅2mのトレンチを入れ、トレンチの間10m毎に2m四方の小グリッドを設けて試掘を行った。いずれも密度の高い遺構検出が予想され、しかも遺構確認面までが深く、篠竹の根がはびこっている等の状況から、重機による表土除去を行った。

長峰・宮塚両遺跡は、中心杭を基準とする仮グリッドを設定して試掘を行い、数光・内路地台両遺跡は、仮グリッドと一部トレンチを併用して試掘を行った。長峰遺跡は遺構の検出密度が高く、遺構確認面までの深さが60~70cmと非常に深かったことから、重機による表土除去を実施した。数光・宮塚・内路地台の各遺跡は遺構の検出密度が低かったことから、遺構確認面までの深さは様々であったが、人力によって仮グリッドを拡張して確認面における遺構全体を露呈させることとした。一方、右籾館跡については、伐開終了時に調査区全体が遺構であることが確認されたこと、平坦部で検出が予想された遺構は掘立柱建物跡が中心でありグリッド等では見逃す可能性が高いこと及び篠竹の根が著しくはびこっていることの三点から、平坦部のみについて重機による表土除去を行った。

3 遺構調査

住居跡の調査は、長（主）軸とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設けて掘り込む四分割法で実施した。土坑・井戸は、規模に応じて適宜二分割法、四分割法を使い分けた。溝・堀等長大な遺構は、数か所に土層観察用ベルトを設けた。

遺構の平面実測は、座標北をもとに水糸方眼地張測量で行うことを原則としたが、西郷遺跡と右籾館跡では写真測量も併用している。土層や遺構の断面実測は、すべて標高を基準に行った。

土層の分類は、色調・含有物・粘性・しまり・吸水性等を総合的に観察して実施した。遺物の取り上げは、出土遺構・遺物番号・遺構内の位置・標高等を記録して収納した。

第3節 調査経過

発掘調査は、昭和63年度に西郷遺跡・南丘遺跡、平成元年度に長峰・数光・宮塚・右籾館・内路地台の各遺跡において実施された。以下、時間の経過を追って略述する。

〈昭和63年度〉

- 10 月 月上旬に事務所を建設し、発掘器材を運び込んだ。11日から作業員を投入して西郷遺跡の除草・整地を行い、13日には鍬入れ式を挙行了。18日から西郷遺跡の試掘を行う一方、24日から南丘遺跡の伐開・焼却作業を進めた。
- 11 月 月上旬に南丘遺跡の試掘を行った。14日から西郷遺跡で重機による表土除去を実施し、併せて遺構確認作業を進めた。22日に遺構確認状況の写真を撮影し、遺構の掘り込みに着手した。28日からは、南丘遺跡でも重機による表土除去を開始した。
- 12 月 西郷遺跡の遺構調査、南丘遺跡の表土除去・遺構確認作業を併行して進めた。南丘遺跡の遺構確認作業終了後、西郷遺跡の遺構調査を進め、月末までに住居跡17軒、土坑1基の調査を終了させた。井戸等深い掘り込みを有する遺構は、年末・年始の休業期間中の事故に備えて安全対策を施し、26日を以って現場を閉鎖した。
- 1 月 5日に現場を再開し、西郷遺跡の住居跡・土坑・井戸の調査を進めた。B3区では土坑が密集して検出され、実測の遅れが予想された。このため、23日に調査計画を再検討し、写真測量を採り入れて実測の遅れをカバーすることになった。
- 2 月 土坑を中心に調査を進めた。8日には測量のための写真撮影を実施した。西郷遺跡の遺構調査が終わりに近付いたので、14日から南丘遺跡の遺構調査を開始した。
- 3 月 17日には西郷遺跡の航空写真を撮影した。18日には、西郷・南丘両遺跡の現地説明会を行った。27日に南丘遺跡の遺構調査を終え、深い掘り込みを有する遺構等の安全対策を講じて、昭和63年度的全調査を終了した。

〈平成元年度〉

- 4 月 5日には本年度調査予定である5遺跡の現地踏査を行い、調査計画を作成した。その結果、未解決地が少ない数光遺跡・内路地台遺跡の調査を先行させることとした。10日に現場事務所を再開し、諸準備を進めた。17日から作業員を投入して数光遺跡の伐開・焼却・試掘を開始した。27日には数光遺跡の試掘・グリッド拡張が終了し、同日中に内路地台遺跡の畑地部分の試掘作業にとりかかった。
- 5 月 内路地台遺跡の畑地部分の試掘、山林部分の伐開・焼却作業を進めた。
- 6 月 内路地台遺跡の試掘・伐開・焼却作業を進めた。調査区の南東部で遺構状の落ち込みが確認されたので、20日から拡張作業に入った。
- 7 月 上旬には内路地台遺跡の試掘が終了し、直に遺構調査を開始した。11日から作業員を二手に分けて、長峰遺跡の伐開・焼却作業を始めた。
- 8 月 内路地台遺跡の遺構調査、長峰遺跡の伐開・焼却を進めた。18日から、長峰遺跡の試掘を開始した。31日には、内路地台遺跡の遺構調査が終了した。
- 9 月 長峰遺跡の試掘を進め、11日には、内路地台遺跡の航空写真を撮影した。18日からは長峰遺跡で重機による表土除去を開始し、併せて遺構確認作業を行った。28日から、宮塚遺跡の除草・試掘にとりかかった。
- 10 月 長峰遺跡の遺構調査、宮塚遺跡の拡張作業を進めた。12日から数光遺跡の遺構調査を行い、31日に終了した。右杖館跡の業者による伐開が24日から開始された。
- 11 月 長峰遺跡・宮塚遺跡の遺構調査を進めた。右杖館跡の未解決地の調査が可能となり、28日に地主の立会いを得て、伐開の手順を決めた。
- 12 月 長峰遺跡・宮塚遺跡の遺構調査を進める一方、7日から右杖館跡の清掃を始めた。11日は、重機によって長峰遺跡の未解決地の表土除去を行った。15日には宮塚遺跡の遺構調査が終了し、器材を右杖館跡に移動した。右杖館跡では、8本のトレンチを設定して調査を始めた。長峰遺跡の遺構に安全対策を施し、年末・年始の休業のため、26日を以って現場を閉鎖した。
- 1 月 5日に現場を再開し、長峰遺跡の遺構調査、右杖館跡のトレンチ調査を行った。8日には長峰・数光・宮塚各遺跡の航空写真を撮影し、右杖館跡の石仏を調査区外へ移動した。長峰遺跡は、9日を以って全調査を終了した。22日から、塚の調査に着手した。
- 2 月 右杖館跡のトレンチ調査を進めた。上旬に重機による表土除去を行った。13日には、土塁・堀の断面を実測した。
- 3 月 右杖館跡の堀やトレンチの写真測量のため、6日に写真撮影を行った。また、14日に航空写真を撮影し、15日から補足調査を行った。17日に現地説明会を実施し、19日に調

査を終了した。22日に堀の埋め戻しを行い、26日に発掘用器材を引き揚げた。翌27日に事務所を引き払い、現場での全ての作業を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

西郷遺跡は茨城県稲敷郡阿見町に、南丘遺跡ほか5遺跡は同土浦市に所在する。

阿見町及び土浦市は茨城県南部のほぼ中央に位置し、東京から北東へ約40km、茨城県の県庁所在地である水戸市から南西へ約40kmを測る。阿見町は、北は霞ヶ浦に面し、東は稲敷郡美浦村、南は同江戸崎町、西は牛久市に接し、北西側は土浦市に境を接している。土浦市は、北から東にかけて新治郡新治村・同千代田村・同出島村に接し、南東は霞ヶ浦に面する。さらに、霞ヶ浦の南側で阿見町に接し、南は牛久市、西はつくば市に接する。

阿見町は、東西約9km、南北約11km、面積約71km²を測り、人口は、42,189人（平成2年10月1日現在）を擁する。土浦市は、東西約13km、南北約15km、面積約92km²を測り、人口は127,470人（平成2年10月1日現在）を擁する。阿見町はかつては純農村であったが、東京通勤圏の拡大や常磐自動車道の建設により、工業団地や宅地の造成が進み、町の北西部（JR常磐線荒川沖駅東側）や阿見地区を中心に急速に市街地化が進んでいる。土浦市の市街地は、土浦城下（現在のJR常磐線土浦駅西側）を中心に陸前浜街道（現在の国道6号の旧道）沿いに細長く形成されたものであったが、現在ではJR常磐線荒川沖駅・同土浦駅・同神立駅の周辺と国道6号・125号の道路沿いに拡大している。さらに、筑波研究学園都市の整備・発展や東京通勤圏の拡大等の影響から、台地面を中心に住宅地・工場用地の占める割合はかなりの勢いで増加している。

阿見町と土浦市の地形を概観すると、土浦市北部の新治台地、同中央部の桜川低地、及び阿見町と土浦市南部の筑波・稲敷台地（郡・市域により筑波台地・稲敷台地と呼称されるが、一連の台地であり明瞭な境界も無いので一括して呼称する）に分かれる。台地面は、住宅地・畑地・平地林に利用されている。桜川下流域の沖積低地には土浦市の中心である市街地が形成されているが、他は水田で、水稻や蓮根の栽培が行われている。

阿見町・土浦市付近の筑波・稲敷台地は、標高24m内外を測り、台地面は平坦である。台地の北寄りの部分を花室川が南東流して台地を刻み、その左右には多くの谷が開析されている。これらの谷は樹枝状に分岐して大小の支谷を派生し、台地縁辺部は複雑な地形を呈している。西郷遺跡は阿見町北東端に、他の6遺跡は土浦市南東端付近に位置しており、花室川右岸の谷・支谷によって形成された舌状台地を中心に分布している。

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦沿岸地方は、利根川下流域や東京湾沿岸地方とともに多くの遺跡が所在することで知られ、霞ヶ浦西岸に位置する阿見町・土浦市もその例にもれない。

阿見町・土浦市における先土器時代の遺跡は、8⁽¹⁾遺跡が知られている。全て土浦市に所在し、その中の4⁽²⁾遺跡が筑波・稲敷台地上に位置している。同じ台地の南縁である竜ヶ崎市でも先土器時代の遺物が報告されていることから、同じ筑波・稲敷台地にある阿見町で新たに先土器時代の遺跡が確認されることは十分考えられることである。

縄文時代には、霞ヶ浦沿岸に住んだ人々によって多くの貝塚が形成された。筑波・稲敷台地では、美浦村に所在する⁽⁴⁾陸平貝塚、土浦市に所在する⁽⁵⁾上高津貝塚が名高い。また、阿見町では15か⁽⁶⁾所、土浦市の筑波・稲敷台地側では上高津貝塚のほか4⁽⁷⁾か所の貝塚遺跡が知られている。この時期の他の遺跡を筑波・稲敷台地における阿見町・土浦市及びその周辺に限定して見ると、早期は土浦市に⁽⁸⁾木の宮南遺跡B・⁽⁹⁾ビヤ首遺跡があり、阿見町では⁽¹⁰⁾下小池東遺跡がある。前期では、土浦市の⁽¹¹⁾向原遺跡・⁽¹²⁾宮前遺跡・⁽¹³⁾右靱貝塚東遺跡等があり、阿見町には前述の小池東遺跡のほか⁽¹⁴⁾宮平貝塚等が知られている。中期になると、土浦市に接するつくば市下広岡の⁽¹⁵⁾下広岡遺跡があり、該期の大規模な集落が調査されている。また、阿見町では先述した宮平貝塚の盛期が中期と考えられている。後・晩期は、土浦市では前記した上高津貝塚が、阿見町では⁽¹⁶⁾阿見貝塚・⁽¹⁷⁾一区北貝塚・⁽¹⁸⁾廻戸貝塚等があり、当時盛んに貝塚が形成されていたことが分る。弥生時代では、土浦市では⁽¹⁹⁾ながくに遺跡・⁽²⁰⁾ししづか遺跡・⁽²¹⁾ほうしやくじ遺跡等で該期の住居跡が調査されているが、確認された遺跡数は少ない。阿見町においても同様で、弥生時代の遺物が見られる遺跡は6か⁽²²⁾所に過ぎない。それぞれ実際にはもっと数が多いと思われる、今後の調査の進展が待たれる。

古墳時代には、随所に大小の集落が営まれ、多くの古墳が築造された。土浦市では、⁽²³⁾桜ヶ丘古墳・⁽²⁴⁾かすみがおか古墳・⁽²⁵⁾ほうせんじ古墳群等があり、土浦六中の南側の台地上にも数基の古墳が見られる。阿見町では、⁽²⁷⁾まるやま古墳群・⁽²⁸⁾あおやど古墳群・⁽²⁹⁾たてこし古墳群等がある。集落は台地上の河川や霞ヶ浦に沿った低地に面した位置、或いは支谷を取り囲むような形で形成されていると考えられるが、その詳細はまだ解明されておらず、発展・移動の様子についてもなお不明な点が多い。この時期の調査・報告例には、土浦市では⁽³⁰⁾からすやま遺跡・⁽³¹⁾じゅうさんづか遺跡等が、阿見町では、⁽³²⁾おおむら遺跡・⁽³³⁾下小池東遺跡・⁽³⁴⁾みやわき宮脇遺跡等がある。

阿見町・土浦市の地域は古くは筑波評(郡)・茨城評(郡)に含まれたらしいが、『常陸國風土記』⁽³⁵⁾が成立した頃には筑波郡・茨城郡・河内郡・信太郡に属した。土浦市の桜川以南の大部分と阿見町全域は⁽³⁷⁾信太郡に含まれ、今回調査した7遺跡はすべて⁽³⁸⁾阿彌郷の区域内に位置する。式内社である「阿彌神社」は、阿見町竹来の阿彌神社と同町阿見の阿彌神社に比定する2説がある。

信太郡は小野川を境として東条と西条に分かれ、西条は平安末期までに信太⁽³⁹⁾荘として立荘された。信太荘は、鎌倉末期に後宇多院の寄進によって東寺⁽⁴⁰⁾領となり、15世紀中頃までに小田氏の支配下⁽⁴¹⁾に入ったと思われる。当時の他の地域と同様に信太荘にも複雑な地形を利用して数多くの城館⁽⁴²⁾が築かれ、阿見町では14か所を数える。土浦市では、今回調査した右⁽⁴³⁾籾館跡が挙げられる。

江戸時代には、領主の交替はあったものの、幕末の段階では現在の土浦市域は大半が土浦藩領、現在の阿見町域の大半が仙台藩領であり、一部が牛久藩領・旗本知行地⁽⁴⁴⁾になっていた。

註

- (1) i) 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 1987
- ii) 『土浦の遺跡』 土浦市教育委員会 1975
- iii) 『向原遺跡』 土浦市教育委員会 1987
- iv) 『木田余台』 土浦市教育委員会 1989
- (2) i) 上高津貝塚 (土浦市上高津字貝塚, 1976国指定)
- ii) 小松貝塚 (土浦市小松町字池ノ平, 湮滅)
- iii) 摩利山貝塚 (土浦市右籾町字峰崎, 湮滅)
- iv) 宮脇遺跡 (土浦市西根町字宮ノ脇)
- (3) (1)の i) に、大羽谷津他 5 遺跡が挙げられている。また、同市の山王台遺跡でもナイフ型石器が発見されている。
- (4) 稲敷郡美浦村土浦字陸平。大小 8 か所の貝塚が台地周辺の斜面に分布する。縄文時代中・後期。明治 12 年、飯島魁・佐々木忠次郎が、日本人の手によるわが国初の学術調査を実施した。
飯島魁・佐々木忠次郎 「常州陸平介墟報告」(『学芸志林』6) 1880
- (5) (2)参照。標高22m, 低地との比高10mの台地周辺及び斜面に馬蹄形に貝塚が形成されている。縄文時代中～晩期前半。明治以降, 数回にわたって調査された。
慶応義塾高等学校考古学会 「茨城県土浦市上高津貝塚発掘調査報告」(『Archaeology』19) 1955
小宮 孟 「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」(『第四紀研究』19巻4号) 1980
- (6) 『阿見町史研究』6 阿見町教育委員会 1985
- (7) (1)の i) と同じ。
- (8)・(9) (1)の ii) と同じ。
- (10) 『下小池東遺跡発掘調査報告書』 阿見町教育委員会 1979
- (11) 『向原遺跡』 土浦市教育委員会 1987
- (12)・(13) (1)の ii) と同じ。
- (14) (6)と同じ。

- (15) 『茨城県教育財団文化財調査報告X』 茨城県教育財団 1981
- (16)~(18) (6)と同じ。
- (19) 『永国遺跡』 土浦市教育委員会 1983
- (20) 『常陸宍塚』 国学院大学宍塚調査団 1970
- (21) (1)のiv)と同じ。
- (22) (6)と同じ。
- (23)~(25) (1)のi)と同じ。
- (26) 実数は不明。運動場造成で削平されたが、2基は一部が残存している。
- (27)~(29) (6)と同じ。
- (30) 『烏山遺跡』 土浦市教育委員会 1988
- (31) 『茨城県教育財団調査報告第60集』 茨城県教育財団 1990
- (32) 『大室城跡発掘調査報告書』 大室城跡発掘調査会 1984
- (33) (10)と同じ。
- (34) 『宮脇遺跡』 阿見町教育委員会 1985
- (35) 『新編常陸国誌』 「建置沿革」。阿見町の西端と土浦の西半分が筑波評、他は茨城評に含まれたらしいが、詳細は不明。
- (36) 和銅6年(713)以降、霊亀元年(715)以前の成立。同書に「信太郡」「河内郡」と見え、この頃までに両郡が成立していたことが分る。なお、(35)では両郡の設置を「白雉四年」(653)としている。
- (37) (35)の「郡名」及び「郷里」。土浦市佐野子及び矢作は、河内郡に含まれた。
- (38) 『倭名類聚抄』(元和古活字本)。高山寺本には「河弥」と見えるが、「阿弥」の誤記であろう。比定地は、(37)による。
- (39) 「八条院領目録」(安元2年—1176)に「常陸國信太」と見える。
- (40) (35)の「庄保」に、「應長以來被經再往之沙汰被寄八箇之寺領」とあり、「信太」と見えることから応長元年(1311)のことと思われる。
- (41) (40)と同じ。
- (42) (6)と同じ。
- (43) 『東村誌』 矢口豊司 1934 本書第9章参照。
- (44) 「各村舊高簿」(『茨城県史料—維新編—』) 茨城県 1969



第 2 図 周辺遺跡位置図

表1 周辺遺跡一覧表

番号	名称	種類	時代				番号	名称	種類	時代							
			先土器	縄文	弥生	古墳				奈・平	鎌・室	江戸	先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平
1	亀井遺跡	包蔵地					35	右柳館跡	城館跡								
2	宮久保遺跡	包蔵地				○	36	内路地台遺跡	集落跡							○	
3	阿ら地遺跡	包蔵地				○	37	右柳十三塚	塚							○	
4	油麦田遺跡	包蔵地				○	38	牧の内遺跡	包蔵地							○	
5	いさろ遺跡	包蔵地				○	39	念代遺跡	包蔵地							○	
6	桜ヶ丘遺跡	包蔵地				○	40	平坪遺跡	包蔵地							○	
7	桜ヶ丘古墳	古墳跡				○	41	沖の台遺跡	包蔵地							○	
8	内出後遺跡	包蔵地				○	42	堂地塚遺跡	包蔵地							○	
9	神出遺跡	包蔵地				○	43	松原遺跡	包蔵地							○	
10	震ヶ岡遺跡	包蔵地				○	44	永峰遺跡	集落跡							○	
11	内根C遺跡	包蔵地				○	45	宮塚遺跡	包蔵地							○	
12	内根B遺跡	包蔵地				○	46	敷光遺跡	包蔵地							○	
13	内根A遺跡	包蔵地				○	47	長峰遺跡	集落跡							○	
14	ひさご塚古墳	古墳				○	48	烏山A遺跡	包蔵地							○	
15	大岩田貝塚	貝塚				○	49	烏山B遺跡	包蔵地							○	
16	木曾北遺跡	包蔵地				○	50	一区北遺跡	包蔵地							○	
17	木曾遺跡	包蔵地				○	51	一区北貝塚	貝塚							○	
18	中内山古墳群	古墳群				○	52	小西遺跡	包蔵地							○	
19	五蔵遺跡	包蔵地				○	53	北平南遺跡	包蔵地							○	
20	丸山古墳群	古墳群				○	54	葦後遺跡	包蔵地							○	
21	法泉寺古墳群	古墳群				○	55	南丘遺跡	集落跡							○	
22	馬遺跡	包蔵地				○	56	北平北遺跡	包蔵地							○	
23	馬遺古墳群	古墳群				○	57	立の越館跡	城館跡							○	
24	南達中遺跡A	古墳跡				○	58	西郷遺跡	集落跡							○	
25	谷原門遺跡C	包蔵地				○	59	宮脇遺跡	包蔵地							○	
26	木の宮南遺跡C	包蔵地				○	60	阿見貝塚	貝塚							○	
27	峰崎遺跡C	包蔵地				○	61	熊野脇遺跡	包蔵地							○	
28	峰崎遺跡B	包蔵地				○	62	立の越古墳群	古墳群							○	
29	峰崎遺跡A	包蔵地				○	63	青宿古墳群	古墳群							○	
30	権現前遺跡	包蔵地				○	64	ピタラ塚古墳	古墳							○	
31	宮前遺跡	包蔵地				○	65	廻戸城跡	城館跡							○	
32	右柳貝塚東遺跡	包蔵地				○	66	廻戸遺跡・廻戸貝塚	包蔵地							○	
33	宮塚遺跡	包蔵地				○	67	岡崎古墳	古墳							○	
34	小谷遺跡	包蔵地				○	68	岡崎館跡	城館跡							○	

第3章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構・遺物の記載方法

1 使用記号等

○本書で使用した記号は、次のとおりである。

住居跡	土坑・地下式壙・墓壙	堀・溝	塚	掘立柱建物跡	道路	井戸	不明
SI	SK	SD	SA	SB	SF	SE	SX

○遺構・遺物の実測図を掲載する際に、必要に応じて以下のスクリーントーンを使用した。

焼土・竈  繊維土器(断面)  黒色処理  施釉 

第2節 表の見方について




1 土坑一覧表

○方向は、主軸・長軸・長径の示す方向である。

○平面形（方形と長方形，円形と楕円形）は，次の基準を設けて分類した。

- ・方形（短軸：長軸 = 1：1.1未満のもの）
- ・長方形（短軸：長軸 = 1：1.1以上のもの）
- ・円形（短径：長径 = 1：1.2未満のもの）
- ・楕円形（短径：長径 = 1：1.2以上のもの）

○壁面の傾斜は，次の基準を設けて分類した。

 81°~90°—垂直  65°~80°—外傾  65°未満—緩斜  一段状

○坑底は，次の基準を設けて分類した。

平坦  皿状  凹凸  傾斜 

○覆土は，自然堆積をN，埋め戻されたものをBと表記した。

○地下式壙・墓壙は一覧表から除外し，文章で記述した。

2 遺物観察表

○遺物の法量は次のように計測し，堆定値には()を付した。

A—口径 B—器高・長さ（現存高・現存長） C—底径 D—高台径

E—高台高 F—つまみ径 G—つまみ高

第4章 西郷遺跡

第1節 遺跡の概要

1 地形概観

西郷遺跡は、稲敷郡阿見町大字阿見字香取前に所在する。調査の対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス建設予定地内の同所2929番地外16筆、3466㎡である。

西郷遺跡の北西端の支谷は、北東へ1km程台地を刻んで花室川河口から約1km程上流の谷に開口する。一方阿彌神社の北西側には、900m程の長さの支谷が南西に向かって入り込んでいる。この二つの谷によって挟まれた舌状台地は、基部において300mの幅を有しているが、先端では100m前後に減少する。

当遺跡は、この舌状台地上の基部に位置している。台地面と低地面の比高は7m内外、台地先端部までの距離は約1.2kmである。当遺跡付近は、緩やかな起伏を有し、標高は20～25mを測る。調査区域の土地利用状況は、全体が畑地であった。

2 検出遺構

西郷遺跡は『阿見町史研究』によると、縄文式土器片や土師器・須恵器の破片が出土し、遺跡の北側に鹹水産の貝や縄文式土器片（前期～後期）を出土する阿見貝塚が所在することが報告されている。当遺跡は、縄文時代、及び古墳時代から中世の遺跡として周知の遺跡であったが、今回の発掘調査によりほぼ同時期の遺構・遺物が検出された。

当遺跡において検出された遺構は、竪穴住居跡16軒、竪穴遺構5軒、掘立柱建物跡4棟、溝4条、道路跡3条、井戸5基、性格不明遺構1基、地下式墳5基、墓墳1基、土坑99基である。竪穴遺構については、当初竪穴住居跡として調査を進めたが、竈等の焼成施設が伴わないことから整理の段階で竪穴遺構として取り扱い、記号は竪穴住居跡と同様にSIを使用した。

遺構番号については、調査の過程で遺構の種別毎に調査順に付したが、整理にあたり遺構でないかと判断したものは欠番とした。

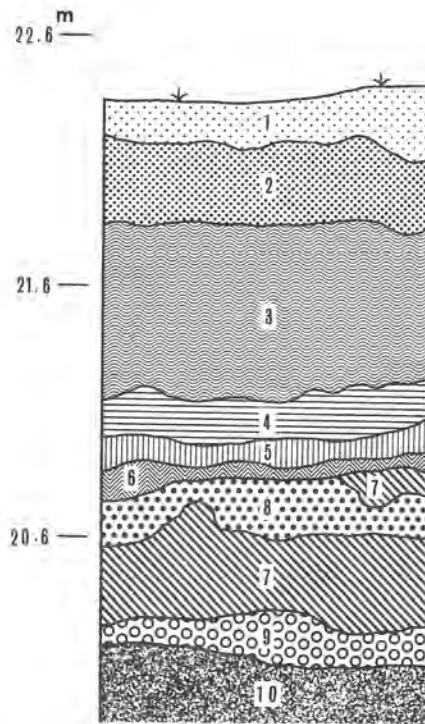
竪穴住居跡は古墳時代後期から奈良・平安時代に属するもので、土師器・須恵器が多数出土している。掘立柱建物跡・溝・道路跡・井戸・地下式墳は、中世に比定されるもので、内耳土器・陶器などが出土している。縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代草創期から後期にかけての土器片が出土しており、当該期の集落が周辺に所在するものと思われる。

これらの遺構は調査区域のほぼ全域に分布しているが、古墳時代の竪穴住居跡は調査区域の東側に、奈良・平安時代の竪穴住居跡は西側に多く分布している。

第2節 基本層序

第3図は、西郷遺跡の北西部 A2h₆区で調査したテストピットの土層図である。

第1層は耕作土(表土)で、厚さは20~30cmである。第2層は褐色のソフトローム層で、30~35cmの厚さに堆積している。本層の上面が「遺構確認面」に当たる。第3層は褐色のハードローム層で、50~70cmの厚さに堆積している。第4層は褐色のハードローム層で細かい黒色土粒子が含まれ、15~30cmの厚さに堆積している。第5層は褐色のハードローム層で、粘土が含まれ、10cmの厚さに堆積している。第6層はにぶい黄褐色の粘土層で粘性・締まりとも強く、5~10cmの厚さに堆積している。第7層はにぶい黄橙色の粘土層で、酸化された鉄分を含み、橙色に変化している。第8層は黄褐色の粘土層で、鉄分が最も多く含まれ、15~40cmの厚さに堆積している。第9層は明褐色の粘土層で、微細な砂粒が含まれ、15~20cmの厚さに堆積している。第10層は浅黄色の粘土層で第9層よりも砂粒が多く含まれている。



第3図 西郷遺跡土層柱状図

「地下式墳」の底面は本層まで達しているものも見られる。第6層から第10層は、いわゆる常総粘土層と呼ばれる凝灰岩質粘土層で古東京湾の海退の末期に、低湿地に降下した火山灰が堆積したものとされている。第10層以下は、細礫を含むクロスラミナの発達した黄褐色の細粒砂層である龍ヶ崎砂礫層へと漸移していくものと思われる。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

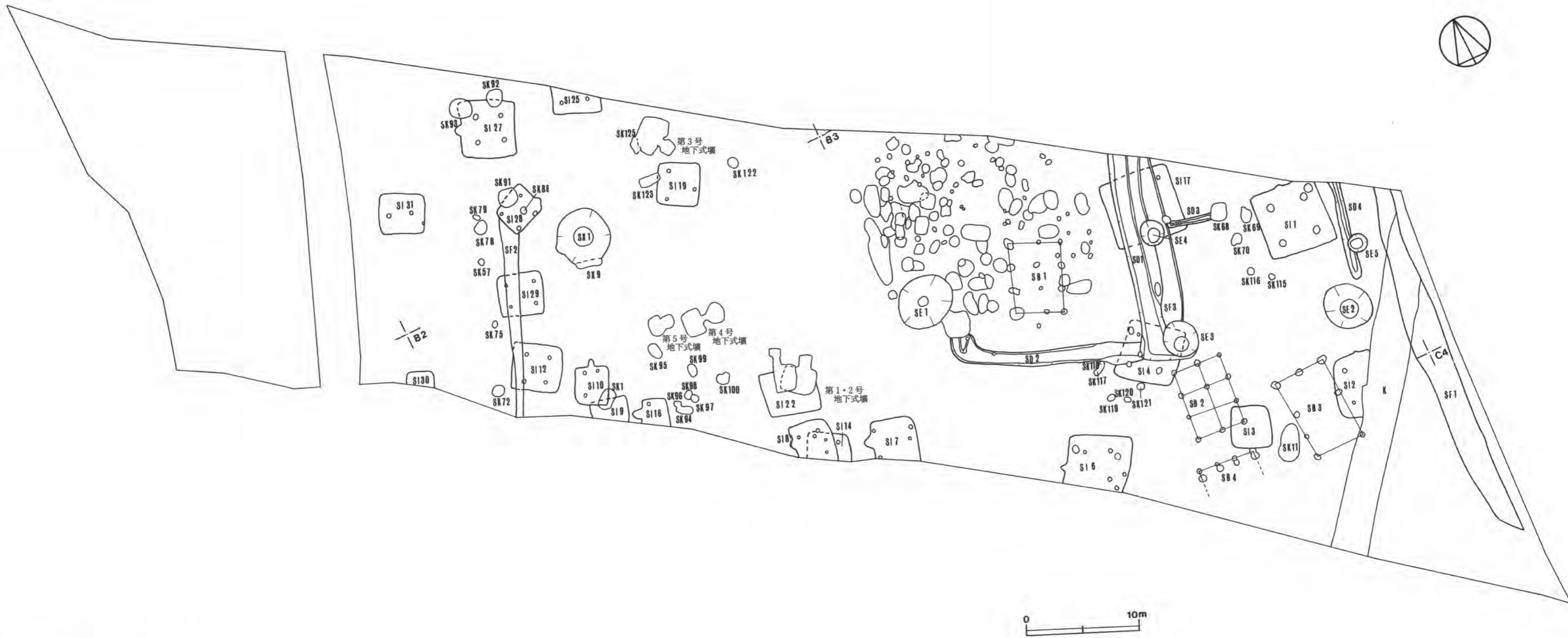
第1号住居跡(第6図)

位置 調査区の東部 B3g₆区を中心に確認された住居跡である。

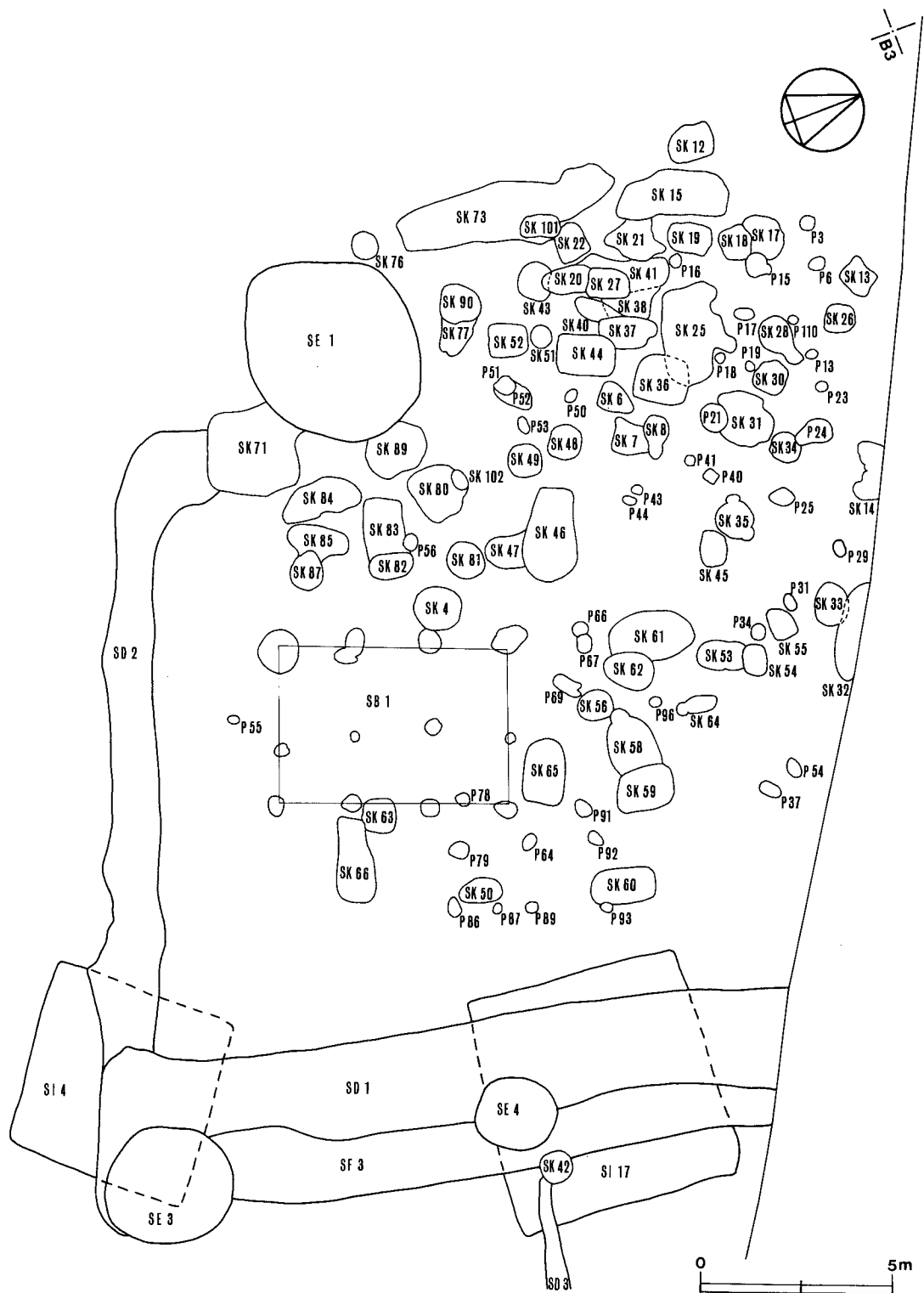
平面形 北東コーナーが調査区外になるが、長軸6.05m、短軸6.00mの整った方形を呈している。

主軸方向 N-4°-E

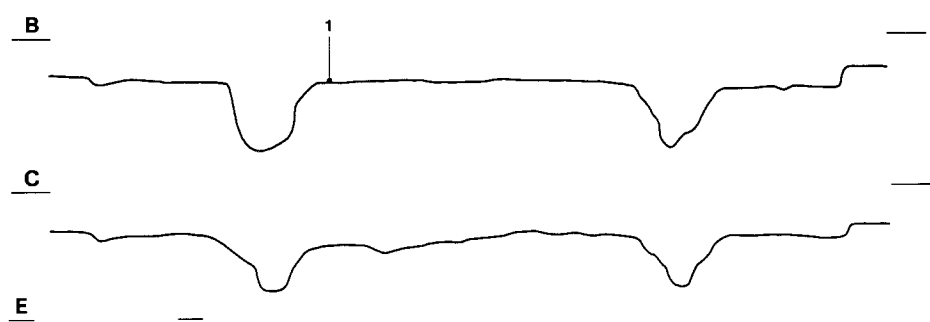
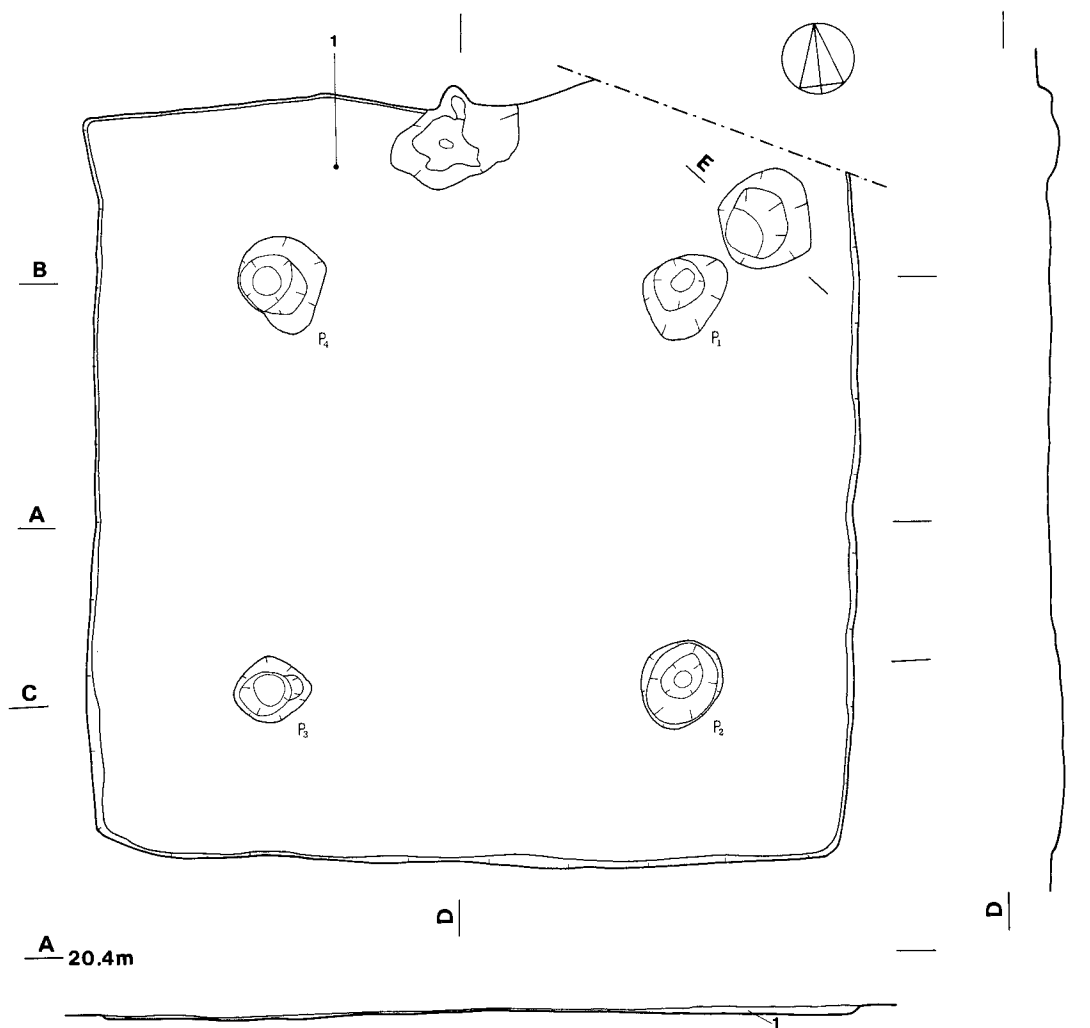
壁 残存している壁高は西壁で8cm、東壁で16cmを測り、外傾して立ち上がっている。



第 4 図 西郷遺跡全体図



第 5 図 B 3 区内土坑群遺構配置図



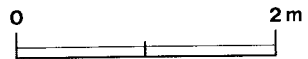
SI-1 《土層解説》

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。

《貯蔵穴土層解説》

1 黒褐色 ローム粒子少量。

2 黒褐色 ローム粒子少量，粘土少量。



第 6 図 第 1 号住居跡実測図

床 中央部は硬いロームの直床で、他はローム混じりの黒褐色土を叩いて貼床している。

ピット 4か所検出され、規模や配列からすべて支柱穴と考えられる。P₁~P₄は上端径55~75cmの円形を呈し、浅いすり鉢状に掘り込まれ、さらに中央部が深さ18~28cmの円筒状に掘り込まれている。

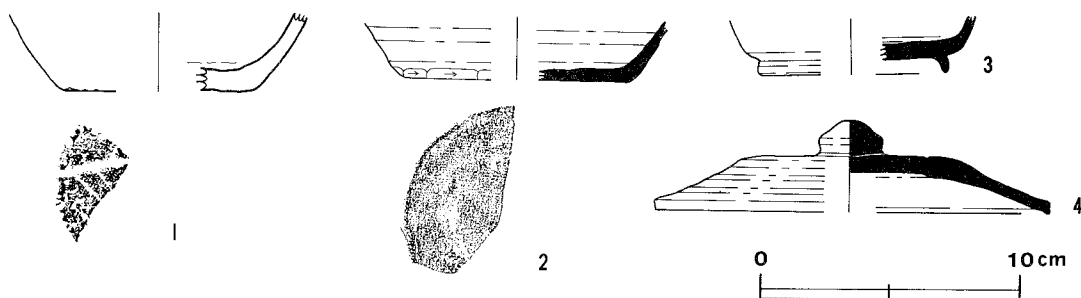
貯蔵穴 北東コーナー付近に付設され、径80cmの円径を呈し、深さ21cmを測る。

竈 北壁中央部に付設され、規模は長さ76cm・幅100cmで、壁への掘り込みは20cmである。粘土・砂で構築されているが、大半は崩れ遺存状態が悪い。火床は床面を7cm程掘り窪め、焼土粒子が少量検出される程度で焼き締まりは弱い。

覆土 残存している覆土は5cm前後と浅く、全体にローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器146点（甕1・甕片・坏片）、須恵器19点（坏1・高台付坏1・蓋1・甕片・坏片）。遺物は小破片が多く、特に土師器のほとんどが甕の胴部片である。1の甕が竈西側の床面から、3の高台付坏がP₁内の覆土から出土している。その他覆土から2の坏、4の蓋、鉄滓、土製支脚片、内耳土器片、縄文式土器片などが出土している。

所見 本跡は遺構の形態や遺物から奈良・平安時代に比定される住居跡と思われる。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	甕 土師器	B (3.0) C [7.8]	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。底部に木葉痕。	胴部外面横位のヘラナデ。内面はナデ。	砂粒・長石・石英にぶい橙色普通	P2 5% 竈西側の床面
2	坏 須恵器	B (2.5) C [8.8]	平底。体部は底部との境に幅狭な面を有し、直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外部横ナデ後外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒黄灰色普通	P175 20% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 3	高台付坏 須恵器	B (2.2) D [7.2] E 0.7	平底。体部は外傾して立ち上がる。高台はやや開き気味で、壘付は丸みを帯びる。	底部回転ヘラ削り(左)。高台貼り付け。	砂粒 青灰色 良好	P1 5% P ₁ 内の覆土
4	蓋 須恵器	A [15.4] B (3.6) F 2.4 G 1.3	天井部は、頂部が平坦で外周部へ向かってなだらかに下降する。口縁部は屈曲して短く垂下する。つまみは宝珠形を呈する。	内・外面横ナデ。天井部は径8cmにわたり回転ヘラ削り(右)。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P176 60% 覆土

第2号住居跡(第8・9図)

位置 調査区の東部 B3j₉区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 南西コーナー付近を第3号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

平面形 北東部から南壁中央部にかけて攪乱を受けているため明確でないが、一辺が5.4m前後の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-13°-E

壁 残存している壁高は15~21cmで、全体的にほぼ垂直に立ち上がり締まっている。

壁溝 上幅8~15cm・深さ5cm程で、壁よりやや内側を廻っている。攪乱を受けている部分は不明であるが、本来は、壁下を全周していたものと思われる。

床 壁際は硬いロームの直床で、他は第1号住居跡と同様黒褐色土を叩いて貼床としている。

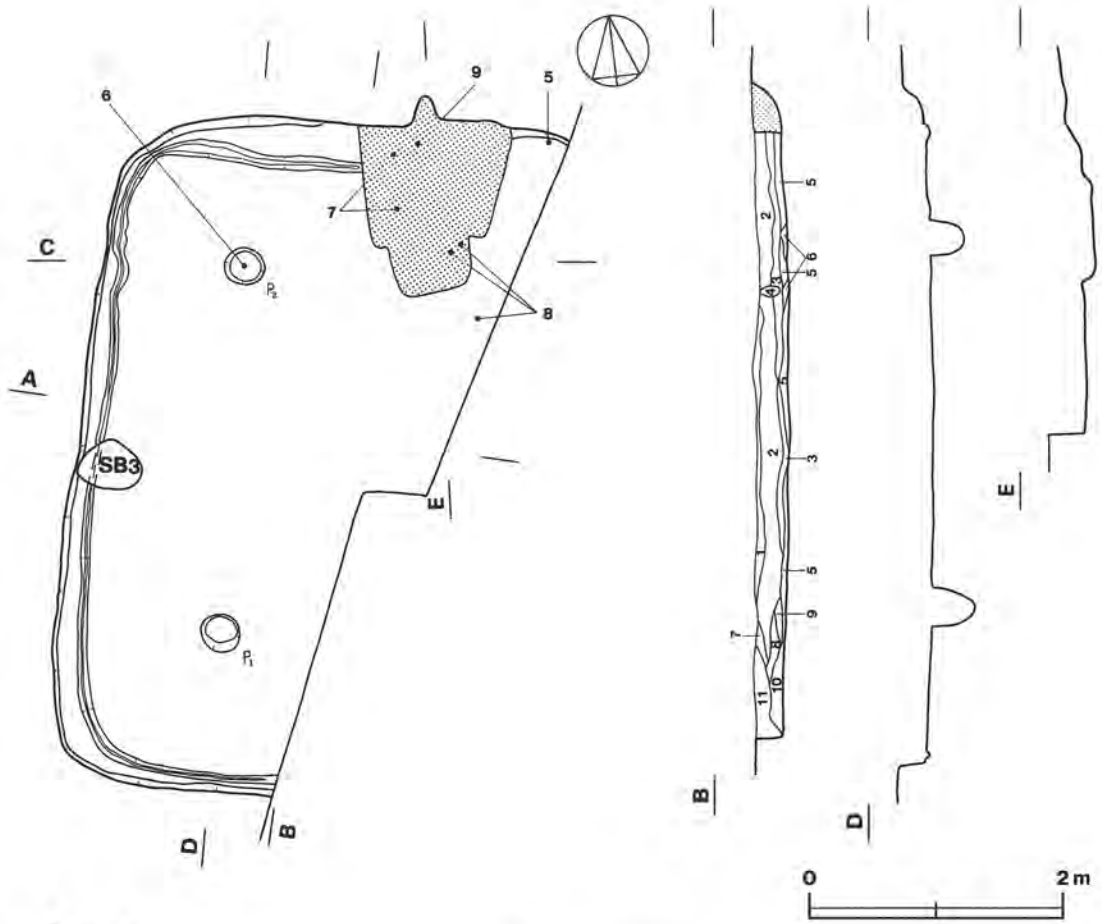
ピット 2か所検出され、位置や規模からどちらも支柱穴と考えられる。P₁・P₂とも径30cmの円形を呈し、深さ32cmと27cmを測る。本来は攪乱で不明な東側にも2か所存在し、4本の柱で上屋を支えていたものと思われる。

竈 北壁中央部に付設され、規模は長さ155cm・幅108cm・焚口幅64cmを測り、主軸方向N-3°-Eを指している。砂質粘土を主体として構築されているが、大部分は崩れ、袖部がわずかに残存しているにすぎない。火床は床面を10cm程掘り窪め、良く焼けている。火床から長さ19cm・幅12cmの凝灰岩製の支脚が正位の状態で出土している。

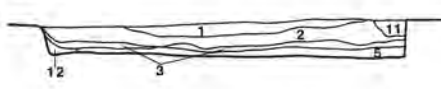
覆土 全体的にローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器445点(甕4・甕片・坏片)、須恵器53点(甕片・坏片・蓋片)、土製品1点(不明1)。遺物は竈やその周辺に集中し、土師器のほとんどが甕の胴部片である。5の甕の口縁部が竈付近の床面から、6の甕の口縁部がP₂内の覆土から、7の甕の口縁部が竈燃焼部の覆土から、8の甕が竈付近の床面から出土している。その他、覆土から鉄滓、縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は遺構の形態や遺物から奈良・平安時代に比定される住居跡と思われる。



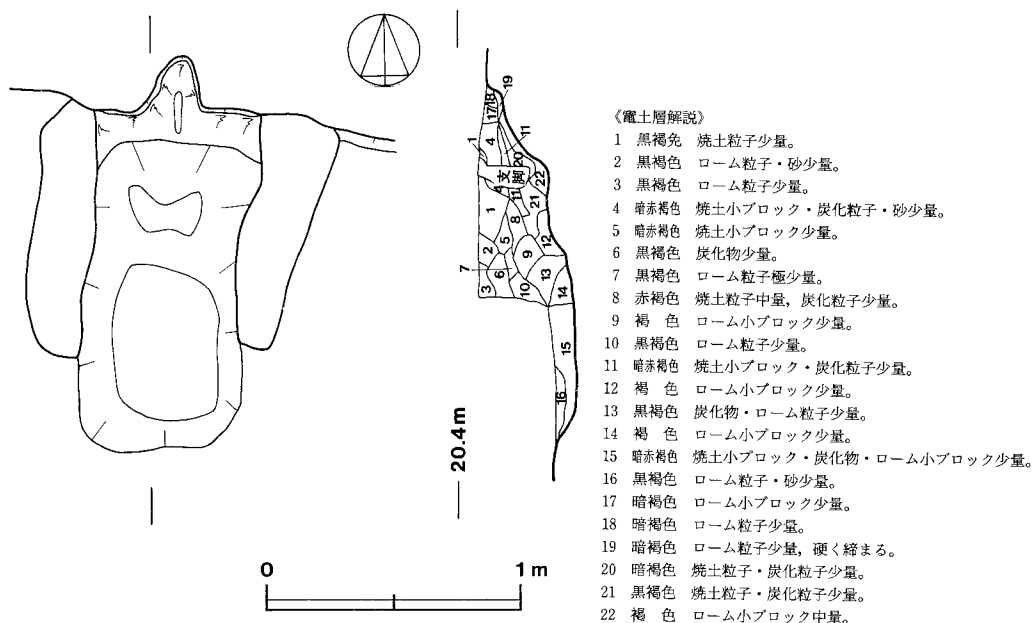
A 20.4m



SI-2《土層解説》

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，硬く締まる。
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土少量，粘性強く，硬く締まる。
- 4 褐色 ローム粒子中量，粘土少量，粘性強く，硬く締まる。
- 5 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック少量。
- 7 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 黒褐色 ローム粒子極少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子・粘土少量，粘性強く，硬く締まる。
- 10 黒褐色 ローム小ブロック・粘土少量，粘性強く，硬く締まる。
- 11 浅黄色 粘土中量，焼土小ブロック少量，粘性強く，硬く締まる。
- 12 黒褐色 ローム小ブロック少量。

第 8 図 第 2 号住居跡実測図

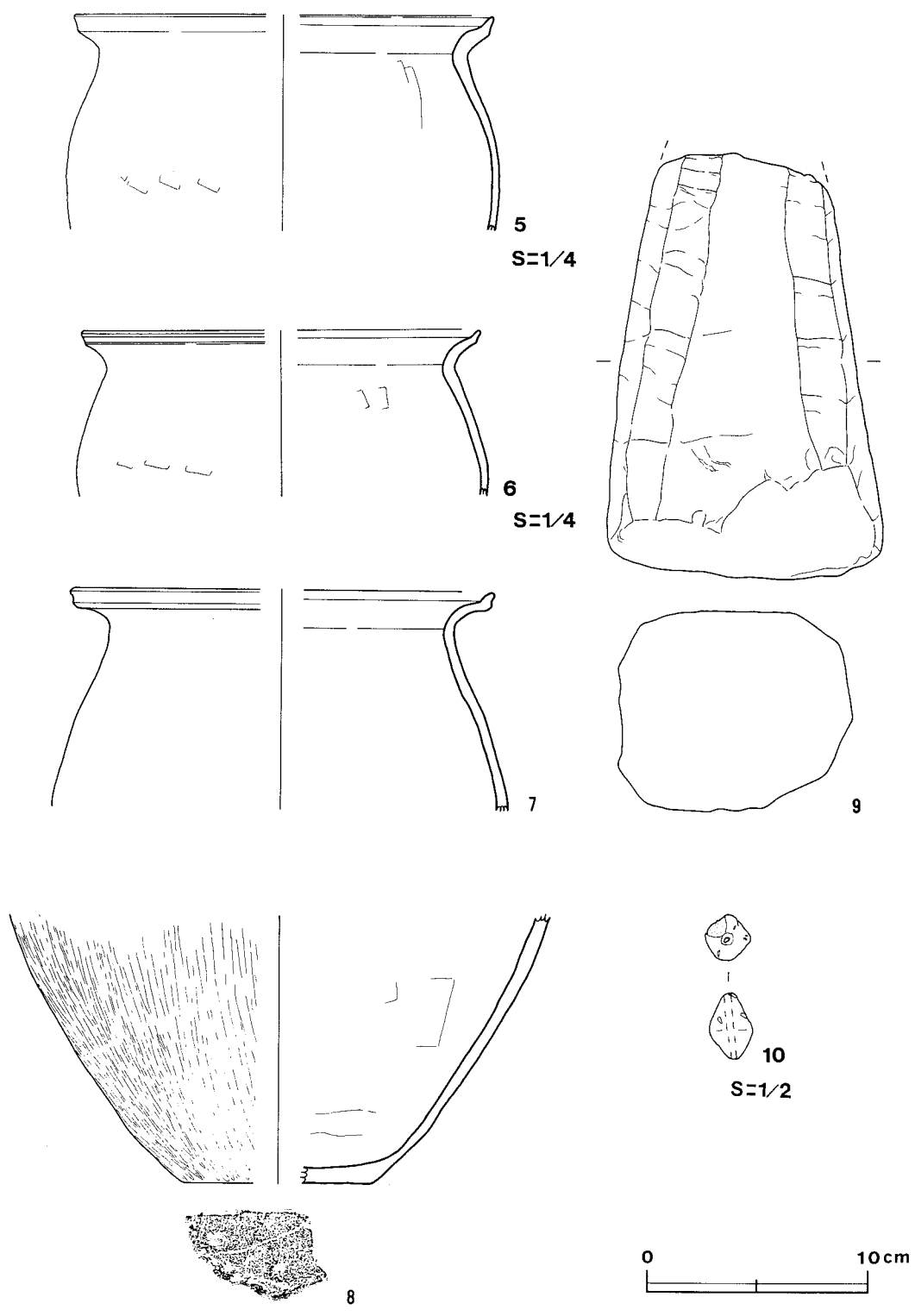


第 9 図 第 2 号住居跡竈実測図

第 2 号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 5	甕 土師器	A [25.2] B (13.2)	やや張りのある胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。胴部最大径は上位(26.4cm)。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面上位に横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい橙色普通	P3 10% 竈付近の床面
6	甕 土師器	A [24.0] B (10.1)	やや張りのある胴部から頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。口縁端部の外面は浅く凹む。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい赤褐色普通	P5 10% P ₂ 内の覆土
7	甕 土師器	A [19.2] B (10.1)	張りの弱い胴部から、頸部を強く外反させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面上位に横位のヘラナデ。	砂粒・長石にふい赤褐色普通	P4 10% 竈燃焼部の覆土
8	甕 土師器	B (12.3) C [8.8]	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。底部に木葉痕。	胴部外面下位縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラナデ。胴部内面下端から底部周縁は指ナデ。	砂粒・長石褐色普通	P6 20% 竈付近の床面

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
9	支脚 石製品	上径7.6 基径 12.7 高さ (19.6)	(1,871)	凝灰岩 円柱部は縦位の削り。 竈の火床 DP1
10	不明 土製品	長さ2.0 幅1.3 孔径0.15	3.3	覆土 DP2

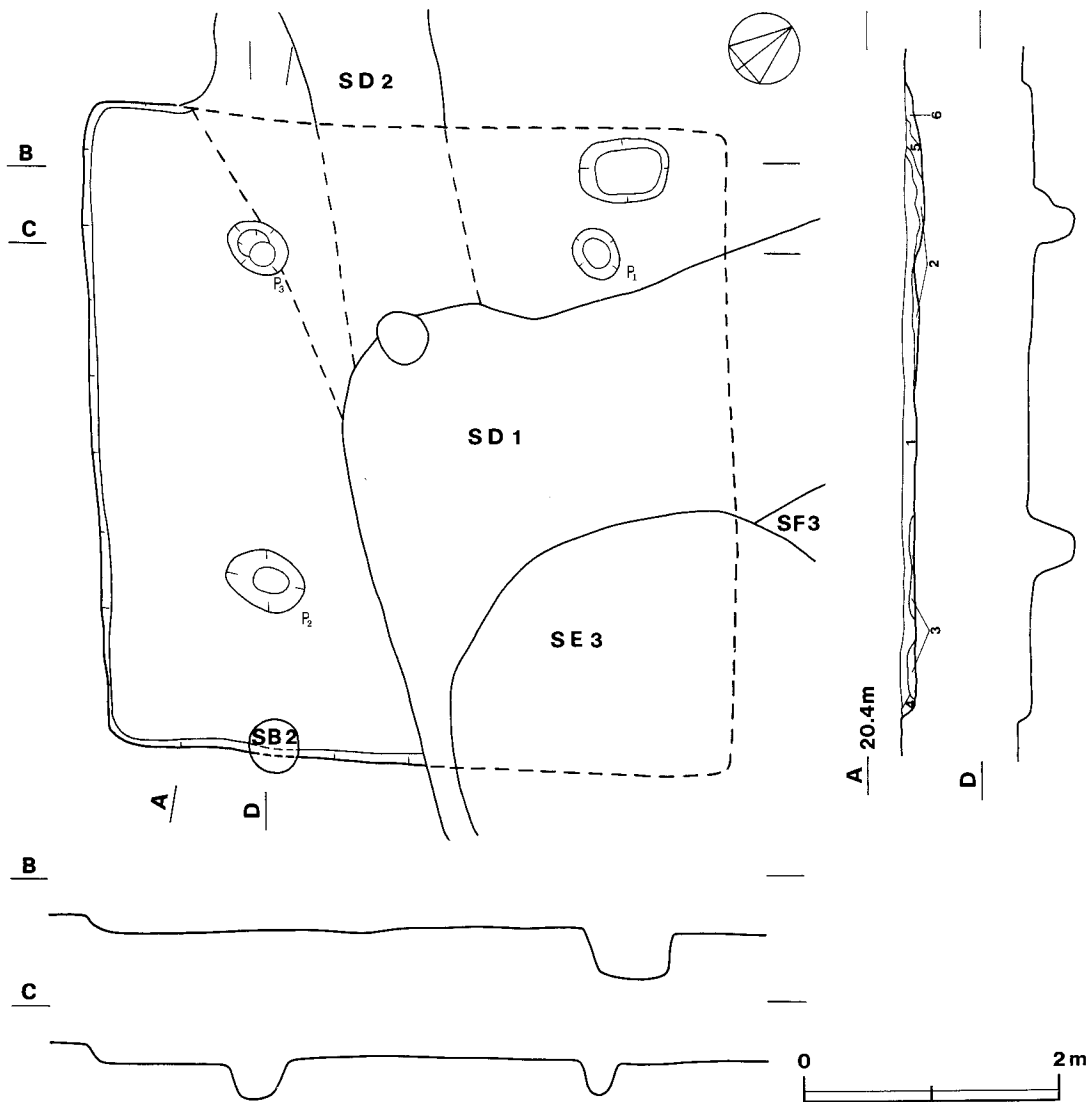


第 10 图 第 2 号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡（第11図）

位置 調査区の東部 B3h₅区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 南コーナー付近を第2号掘立柱建物跡に、北東部を第1号溝・第3号井戸・第3号道路跡に、北西部を第2号溝によって掘り込まれている。



SI-4《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 黒褐色 ローム粒子少量。
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。

第11図 第4号住居跡実測図

平面形 重複する遺構に壁や床の大部分を掘り込まれ、南西壁と南東壁の一部だけしか検出できなかった。残存部分から、一辺が5.1m前後の方形状を呈する住居跡と思われる。

主軸方向 N-51°-W

壁 残存している壁高は北西壁で8cm、南西壁で13cmを測り、緩やかに立ち上がっている。

床 全体に平坦で良く踏み固められ、特に中央部が堅緻である。

ピット 3か所検出され、規模や配列からすべて支柱穴と考えられる。P₁は長径43cm・短径35cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。P₂は長径63cm・短径44cmの楕円形を呈し、深さ34cmを測る。P₃は長径51cm・短径38cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

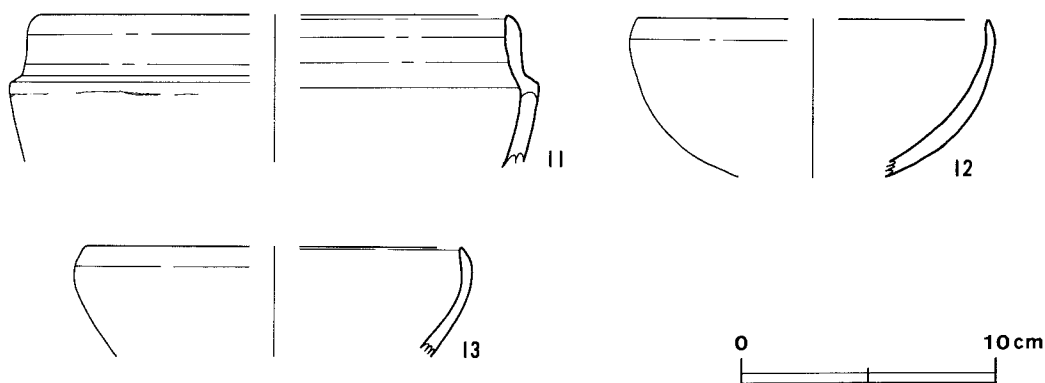
貯蔵穴 北コーナー付近に付設され、長径70cm・短径50cmの隅丸長方形を呈し、深さ38cmを測る。

竈 検出されなかった。

覆土 全体にローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器112点（鉢1・坏2・甕片・鉢片・坏片）、須恵器12点（甕片・坏片・蓋片・盤片）。11の鉢が北部の覆土から、12の坏が東部の覆土から、13の坏が貯蔵穴の覆土から出土している。その他、覆土から土師質土器片、陶器片、縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は住居跡の規模や形態から第6号住居跡と同タイプの住居跡と考えられるが、竈が検出されなかった。竈については、第6号住居跡が北西壁に付設されていることから、本跡も第2号溝に掘り込まれている北西壁に付設されていたものと推定される。本跡は遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第12図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 11	鉢 土師器	A [18.4] B (6.0)	体部と口縁部の境に明瞭な稜をなす。口縁部は内・外面に弱い稜を有し、やや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P14 10% 北部の覆土
12	坏 土師器	A [13.8] B (6.3)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境界ににぶい稜をなす。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P16 10% 東部の覆土
13	坏 土師器	A [14.8] B (4.3)	体部は緩く内彎しながら、外上方へ開く。口縁部は内傾し、厚みを減しながら口唇部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒 淡赤橙色 普通	P17 10% 貯蔵穴の覆土

第6号住居跡（第13・14図）

位置 調査区の東部 B3j₃区を中心に確認された住居跡である。

平面形 南西側3分の1程が調査区外になるが、一辺5.6m程の方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-60°-W

壁 残存している壁高は北東壁で4cm、北西壁で12cmを測る。南東壁は攪乱を受けて、不明である。

壁溝 北西壁の北側と北東壁に認められ、上幅13~15cm・深さ5cm前後を測る。

床 ローム混じりの黒褐色土を叩いて貼床としている。全体に平坦で良く踏み固められている。

ピット 6か所検出され、P₁~P₃が主柱穴で径35~54cmの円形を呈し、深さ54~57cmを測る。P₄は入口部に伴う梯子ピットと考えられ、径28cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。P₅とP₆はそれぞれP₂とP₃の補助柱穴と考えられ、径30cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。

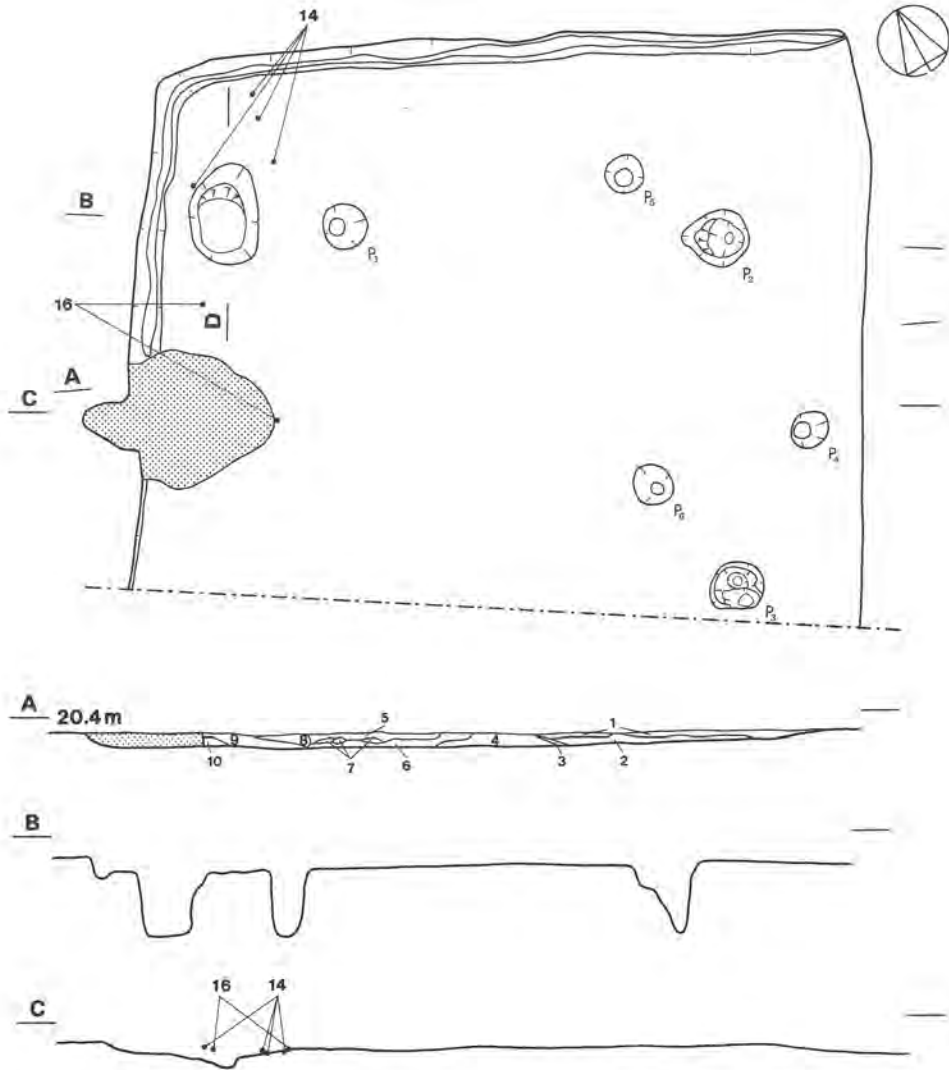
貯蔵穴 北コーナー付近に付設され、長径80cm・短径53cmの楕円形を呈し、深さ51cmを測る。覆土は、ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

竈 北西壁中央部に付設され、規模は長さ164cm・幅109cmで壁への掘り込みは50cmである。砂質粘土を主体として構築され、両袖部を残し天井部は崩落している。火床は床面を10cm程掘り窪め、長径42cm・短径35cmの楕円形を呈し、良く焼けている。

覆土 10cm前後と浅く、ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器183点（甑1・坏2・甕片・坏片）、須恵器2点（甕片）、土製品1点（球状土錘1）。14の甑が北コーナー付近の床面から潰れた状態で、15の坏が竈燃焼部の覆土から、16の坏が竈付近の床面から出土している。その他、覆土から縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

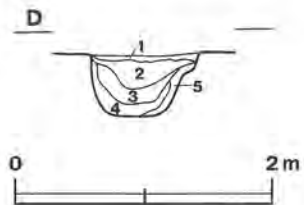


SI-6 (土層解説)

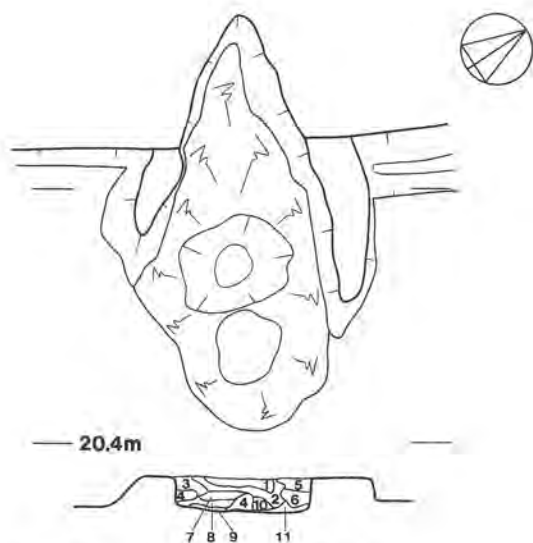
- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 6 黒褐色 ローム粒子少量。
- 7 褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 9 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 10 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。

〈貯蔵穴土層解説〉

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 黒褐色 ローム粒子少量。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量。

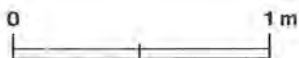


第13図 第6号住居跡実測図

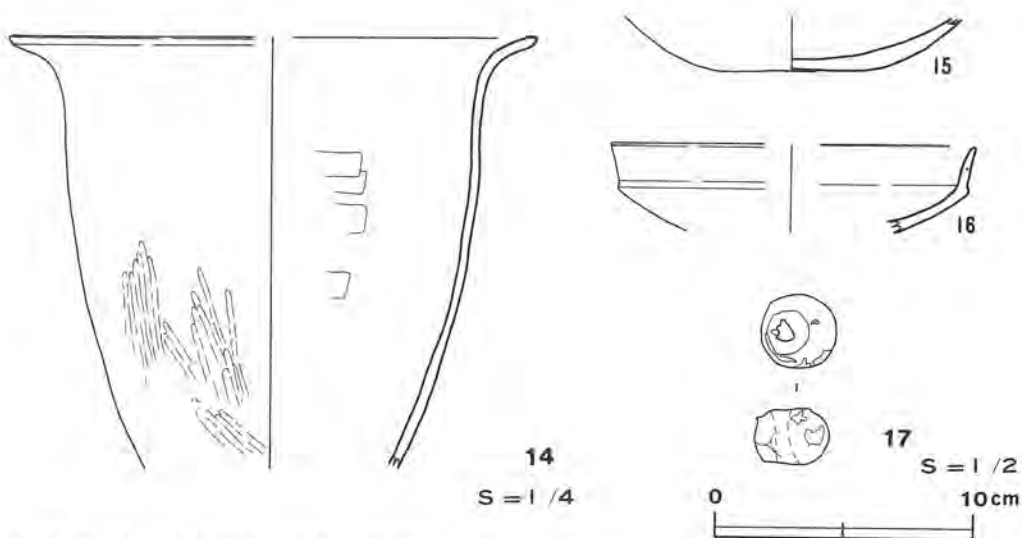


《竈土層解説》

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量。
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・砂少量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・砂少量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量。
- 5 赤褐色 焼土中ブロック・炭化粒子少量。
- 6 黒暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・灰少量。
- 7 赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量。
- 9 黒褐色 ローム粒子少量。
- 10 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量。
- 11 黒褐色 ローム粒子少量。



第14図 第6号住居跡竈実測図



第15図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 14	甕 土師器	A [27.6] B (22.6)	胴部は外傾して立ち上がり、頸部を強く外反させる。口縁端部の外面は面状を呈する。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ、下位に縦位のヘラ磨き。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石にふい橙色 普通	P18 60% 北コーナー付近の床面
15	坏 土師器	B (2.2)	平底気味。体部は緩く内彎しながら、外上方へ開く。	体部外面ヘラ削り後ナデ。体部内面横位のナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P19 30% 竈燃焼部の覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 16	坏 土師器	A [14.2] B (3.5)	体部は内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に明瞭な稜をなす。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P20 30% 竈付近の床面 二次焼成
図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考		
17	球状土錘 土製品	長さ1.5 幅2.0 孔径0.5	6.0	北西部の覆土 DP3		

第7号住居跡（第16・17図）

位置 調査区の中央部 B2g₉区を中心に確認された住居跡である。

平面形 南側3分の1程が調査区外になるが、一辺が3.9m前後の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-68°-W

壁 残存している壁高は北壁で20cm、東壁で4cm前後を測り、緩やかに立ち上がっている。

床 やや凹凸状を呈し全体に良く踏み固められて、特に住居跡の中央部付近が堅緻である。

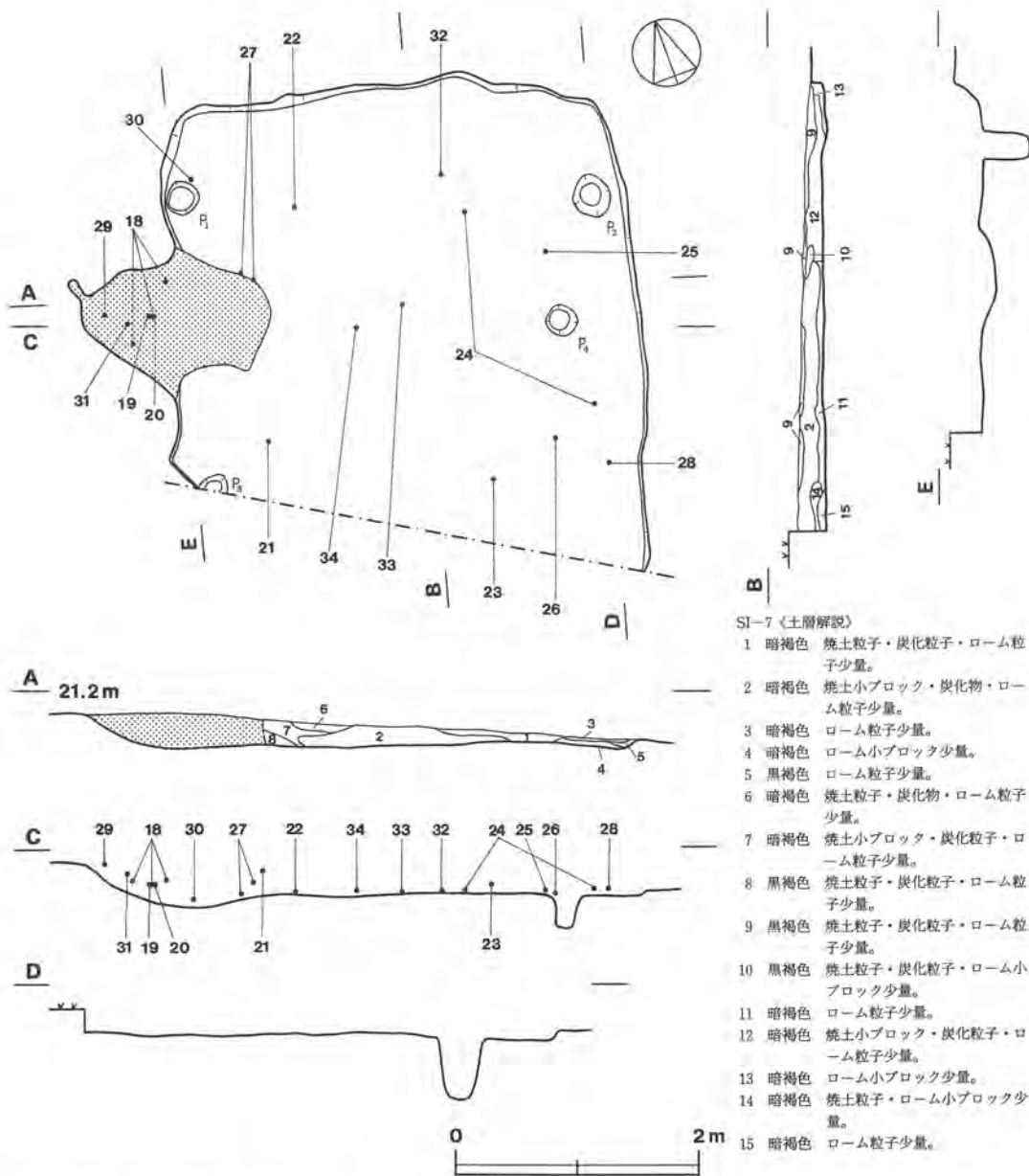
ピット 4か所検出され、規模や配列からP₁~P₄が支柱穴と考えられる。P₁は径28cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。P₂は径37cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。P₃は径24cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。P₄は入口部に伴う梯子ピットと考えられ、径26cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。

竈 西壁中央部に付設され、規模は長さ158cm・幅105cmで、壁への掘り込みは82cmである。砂質粘土によって構築されているが、天井部は崩落し両袖の遺存状態も悪い。火床は床面を10cm程掘り窪め、長径29cm・短径22cmの楕円形状の範囲内に焼土ブロック・炭化粒子・灰が堆積している。

覆土 上層にはローム粒子を少量含む黒褐色土が、下層には焼土小ブロックを少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器226点（甕4・高台付坏3・甕片・坏片）226点のうち内黒土器10点含む、須恵器110点（甕4・甌1・坏4・盤1・甕片・壺片・甌片・坏片・高坏片・盤片・蓋片）。本跡に伴う遺物は住居内全体から出土し、特に竈内に集中している。18の甕・29の坏・31の高台付坏が竈燃焼部の覆土から、25の甕・32の高台付坏（底部に墨書）が北東部の床面から、26の甌が南東部の床面から潰れた状態で、33の高台付坏・34の盤が中央部の床面から出土している。その他、覆土から縄文式土器片が出土している。

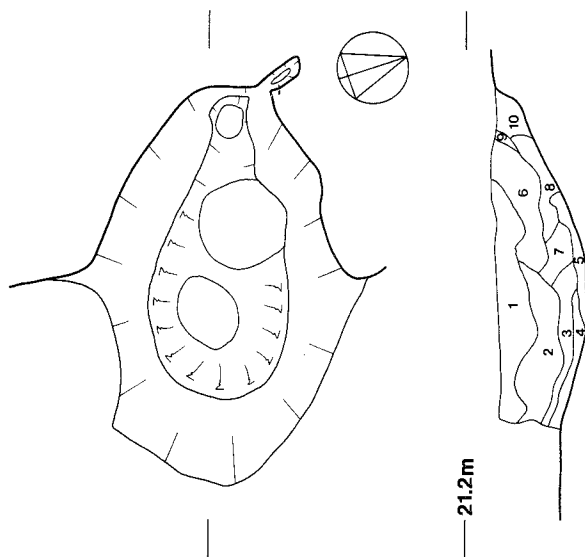
所見 本跡の支柱穴は西壁や東壁の壁際から検出され、当遺跡においては、本跡だけが壁に近い位置から支柱穴が検出されている。本跡は遺構の形態や遺物から平安時代に比定される住居跡と思われる。



第16図 第7号住居跡実測図

第7号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 18	甕 土師器	A [20.0] B (18.8)	やや張りの弱い胴部から頸部を丸く外反させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。口縁端部の外面はやや凹む。胴部最大径は上位(23.8cm)。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面上位に横位のヘラナデ、下位に縦位のヘラ磨き。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P22A 30% 甕燃焼部の覆土



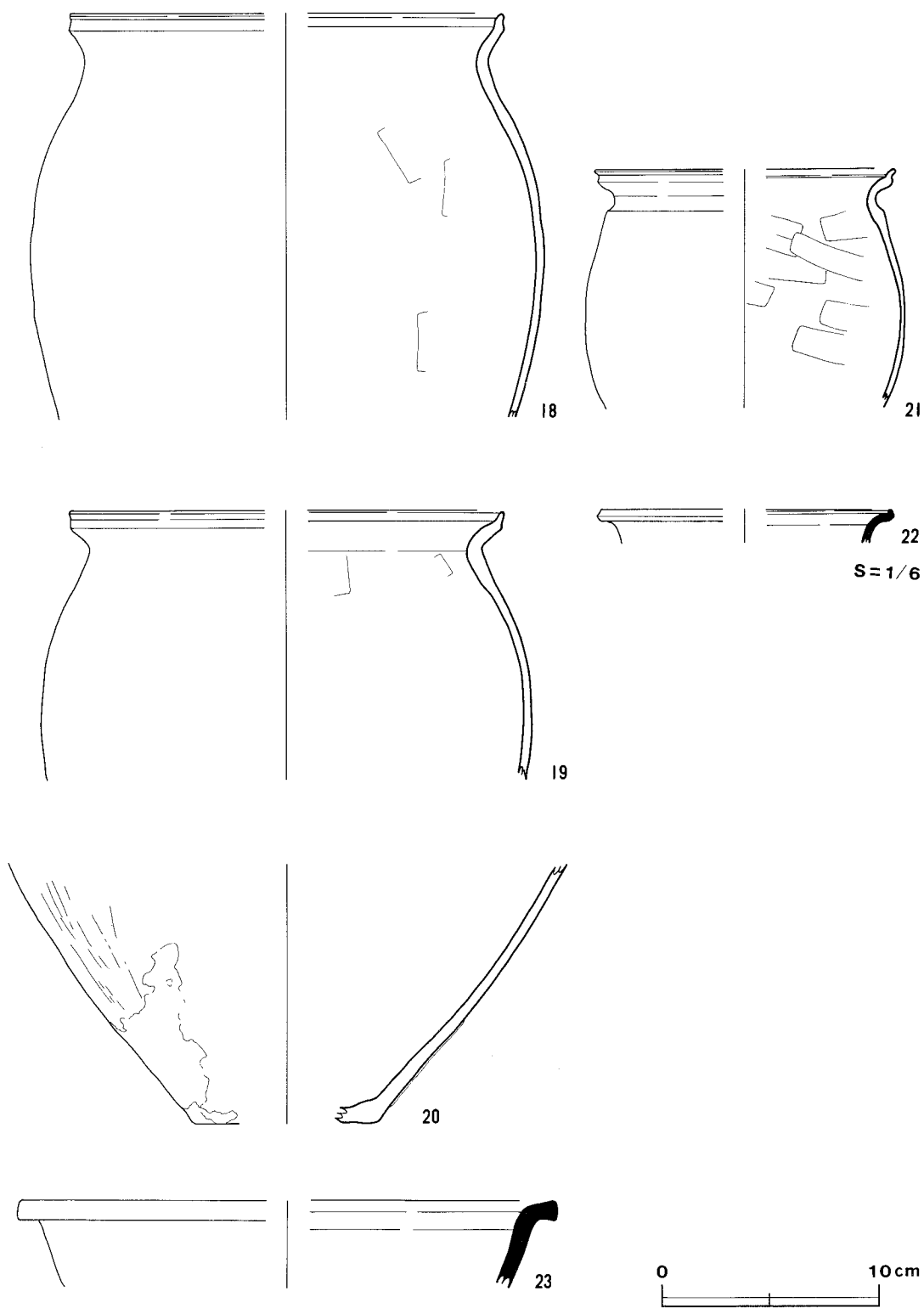
《竈土層解説》

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土少量。
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土少量。
- 8 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 9 暗赤褐色 焼土少ブロック・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 10 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。

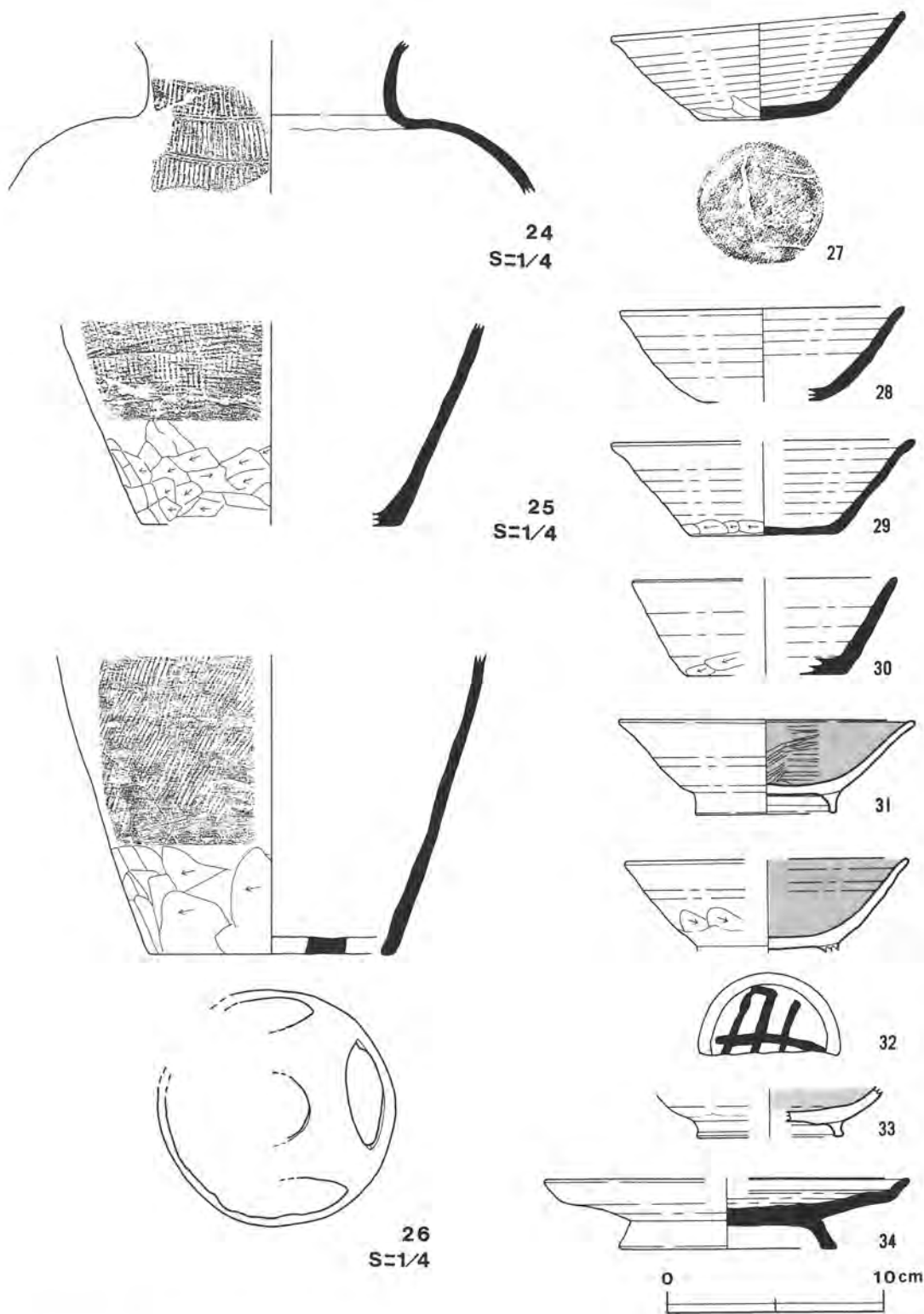


第 17 図 第 7 号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 19	甕 土師器	A [20.0] B (12.6)	やや張りのある胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁部を外上方へつまみ出す。胴部最大径は上位(22.7cm)。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面上位に横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P22B 30% 電燃焼部の覆土
20	甕 土師器	B (12.1) C [8.4]	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。胴部外面に付着物が認められる。	胴部外面下位に縦位のヘラ磨き。胴部内面下位に横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P22C 10% 電燃焼部の覆土
21	甕 土師器	A [13.8] B (11.1)	張りの弱い胴部から、頸部を丸く屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。口縁端部の内・外面は凹む。	口縁部から胴部上位にかけて内外面横ナデ。胴部外面中位に横位のナデ。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P23 20% 竈付近の覆土上層
22	甕 須恵器	A [26.8] B (3.2)	頸部は強く外反して、口縁端部を内傾させる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面平行叩き。	砂粒 褐灰色 普通	P2 15% 北西部の床面
23	甕 須恵器	A [24.6] B (4.1)	頸部は強く外反して、口唇部はやや肥厚する。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面平行叩き。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P26B 5% 南東部の覆土下層
第19図 24	甕 須恵器	B (9.5)	胴部は球状を呈する。頸部は直立気味に立ち上がり、上位で外反する。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面平行叩き。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P24 5% 東壁中央部付近と北東部の覆土下層
25	甕 須恵器	B (12.5) C [16.0]	平底。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部外面中位格子目叩き、下位以下横位の手持ちヘラ削り。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	P25 20% 北東部の床面
26	甗 須恵器	B (18.5) C [14.8]	五孔式。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部外面上位から中位は平行叩き、下位以下横位の手持ちヘラ削り。胴部内面丁寧なナデ。	砂粒 内・外面黒色 良好	P26 60% 南東部の床面
27	坏 須恵器	A 13.5 B 4.5 C 6.1	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。体部内・外面の稜強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後多方向の手持ちヘラ削り。体部下端横ナデ後手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P27 60% 竈付近の覆土中層



第 18 图 第 7 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 19 图 第 7 号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 28	坏 須恵器	A 13.2	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。体部外面の稜強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部及び体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 褐灰色 普通	P28 50% 南東部の覆土 中層
		B 4.4				
		C [5.4]				
29	坏 須恵器	A [13.8]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。体部内・外面の稜強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後多方向の手持ちヘラ削り。体部下端横ナデ後手持ちヘラ削り。	砂粒 黄灰色 良好	P29 35% 竈燃烧部の覆 土 逆位
		B 4.4				
		C [6.6]				
30	坏 須恵器	A [12.1]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。体部内・外面の稜弱い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部一方向の手持ちヘラ削り。体部下端横ナデ後部分的に手持ちヘラ削り。	砂粒 暗緑灰色 普通	P30 30% 北東コーナ の付近の覆土 下層
		B 4.5				
		C [7.2]				
31	高台付坏 土師器	A 13.8	平底で、直立する高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。体部外面の稜弱い。	口縁部及び体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き後黒色処理。底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	P31 60% 竈燃烧部の覆 土 正位
		B 4.5				
		D 6.4				
		E 1.1				
32	高台付坏 土師器	A [12.9]	平底。高台は欠損。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。体部外面の稜弱い。	口縁部及び体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き後黒色処理。体部外面下位以下手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P32 40% 北東部の床面 正位 底部に墨書 「卍」か
		B (4.3)				
		E (0.3)				
33	高台付坏 土師器	B (2.3)	平底。わずかに外反する高台が付き、畳付はやや肥厚する。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部外面下位手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き後黒色処理。底部回転糸切り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P33 25% 中央部の床面 逆位
		D [6.6]				
		E 0.8				
34	盤 須恵器	A [16.8]	平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の畳付は平坦。口縁部は体部から、短く外反して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P34 70% 中央部の床面 逆位
		B 3.3				
		D 10.1				
		E 1.3				

第8号住居跡(第20図)

位置 調査区の中央部 B2f₈区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 中央部から南東部にかけて第14号住居跡と重複し、第14号住居跡の上に床を貼って構築されている。

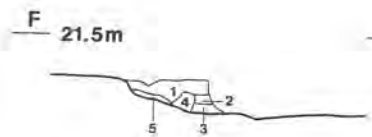
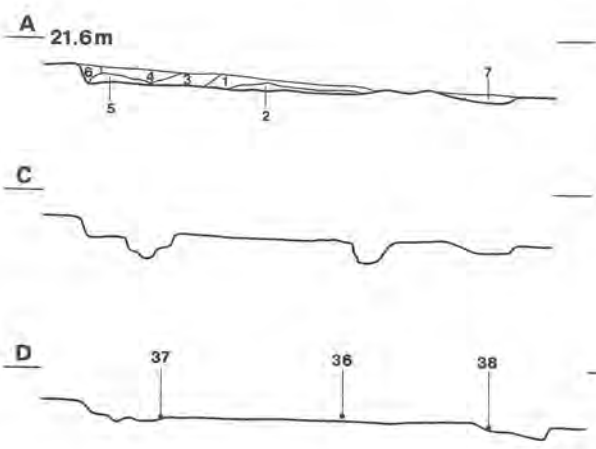
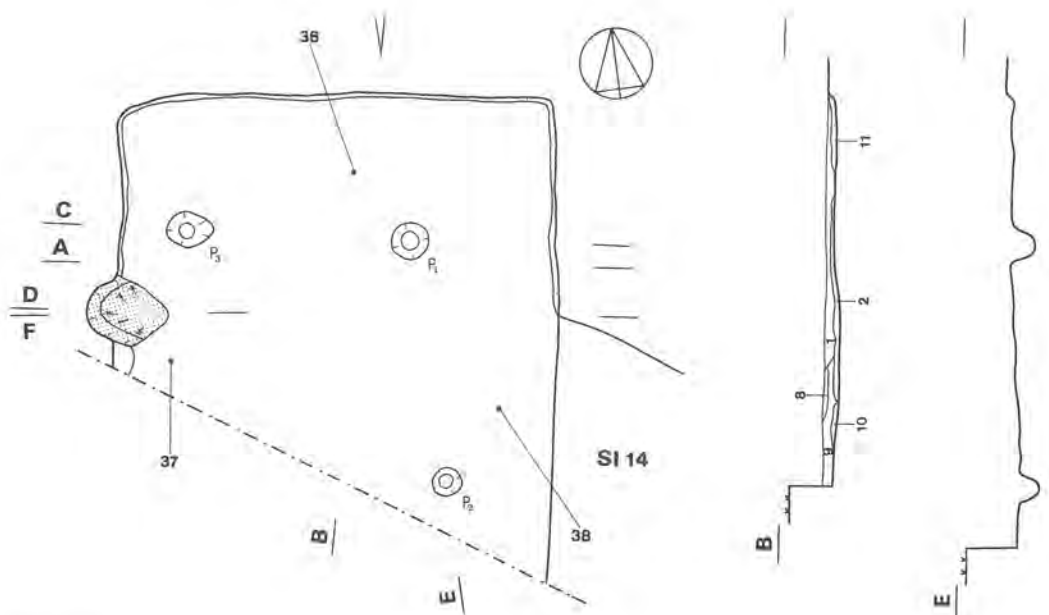
平面形 南壁側が調査区外になるが、支柱穴の位置から判断して南北が4m前後、東西が3.42mの長形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-82°-W

壁 第14号住居跡との重複で東壁は不明瞭であるが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がり締まっている。残存している壁高は西壁で15cm、北壁で10cmを測る。

床 各コーナー付近が軟弱でやや窪んでいるが、他は凹凸が激しく硬く締まっている。第14号住居跡と重複する部分は、ロームを叩いて貼床としている。

ピット 3か所検出され、規模や配列からすべて支柱穴と考えられる。本来は、調査区外の南西部にも1か所存在し、4本の柱で上屋を支えていたものと思われる。P₁~P₃は径24~37cmの円形を



〈電土層解説〉

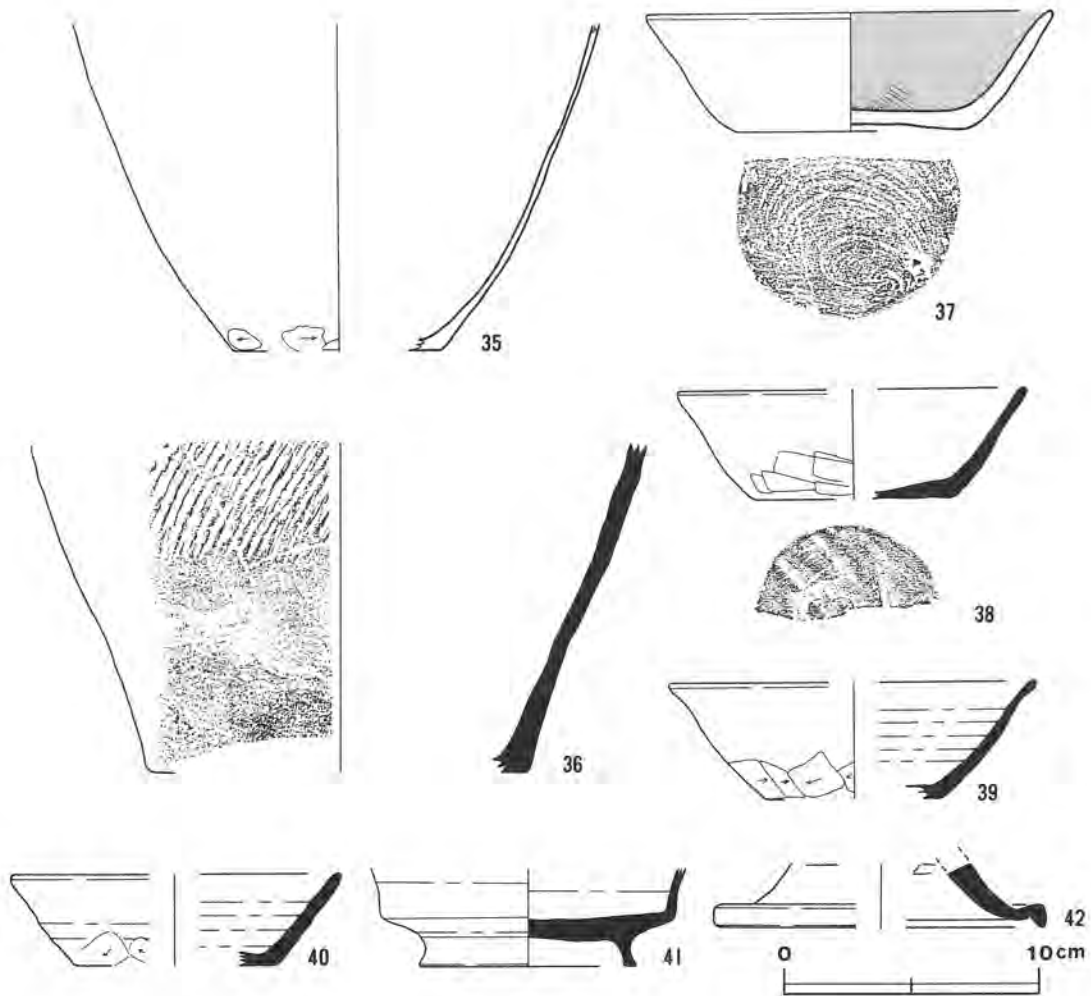
- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・灰少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。

SI-8《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、縮まり弱い。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、縮まり弱い。
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・砂少量。
- 7 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、縮まり弱い。
- 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 10 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 11 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・砂少量。



第 20 図 第 8 号住居跡実測図



第 21 図 第 8 号住居跡出土遺物実測図

呈し、掘り込みは17~19cmと全体にやや浅くなっている。

竈 西壁中央部に付設され、規模は長さ64cm、幅53cmで、壁への掘り込みは20cmである。砂質粘土を主体に構築され、両袖の遺存状態が悪い。火床は床面とほぼ同じ高さで、焼き締まりは弱い。

覆土 全体にローム小ブロック・焼土粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器188点（甕1・坏1・甕片・坏片）188点のうち内黒土器4点含む、須恵器87点（甕1・坏3・高台付坏1・高坏1・甕片・甗片・坏片）、陶器3点（壺片）。遺物は本跡の北側と竈内に集中している。36の甕が北壁中央部付近の床面から正位の状態、37の坏が竈付近の床面から、38の坏が南東部の床面から正位の状態出土している。その他、覆土から縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は遺構の形態や遺物から平安時代に比定される住居跡と思われる。

第8号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 35	甕 土師器	B (12.9) C [8.2]	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。全体に器厚は薄い。底部に木葉痕。	胴部内・外面丁寧なナデ。胴部外面下端ナデ後横位のヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P35 30% 南東部の覆土
36	甕 須恵器	B (13.0) C [14.4]	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面中位平行叩き、下位ナデ。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P36 10% 北壁中央部付近の床面
37	坏 土師器	A 15.9 B 4.7 C 9.0	上げ底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	口縁部及び体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き後黒色処理。底部回転糸切り(右)後周縁ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P37 70% 甕付近の床面 正位
38	坏 須恵器	A [13.4] B 4.4 C [7.6]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下位以下横ナデ後手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒 赤灰色 普通	P38 40% 南東部の床面 正位
39	坏 須恵器	A [14.4] B 4.6 C [7.0]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下位以下横ナデ後手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	P39 20% 北東部の覆土
40	坏 須恵器	A [12.8] B 3.6 C [7.9]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下位以下横ナデ後手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 良好	P40 10% 南東部の覆土
41	高台付坏 須恵器	B (3.9) D 8.5 E 1.2	平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は器厚を減しながら直立し、中位で外反する。	体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P41 50% 南東部の覆土
42	高坏 須恵器	D [13.0] E (2.6)	脚部は緩やかに外反して裾部に至る。裾部は強く外反して、端部をほぼ直角に屈曲させる。	裾部内・外面横ナデ。透窓はヘラで穿たれる。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P42 10% P ₁ 内の覆土

第9号住居跡(第22図)

位置 調査区の西部 B2d₄区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 北西コーナーから北壁中央部付近にかけて、第10号住居跡・第1号土坑によって掘り込まれている。

平面形 南側の2分の1程が調査区外になるが、一辺が3.3m程の方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-75°-W

壁 北壁は第10号住居跡・第1号土坑に破壊され不明瞭であるが、東壁と西壁は壁高が22~30cmで垂直に立ち上がり、旧状をよく留めている。

床 本跡の北側は耕作による畝状の攪乱や第10号住居跡・第1号土坑との重複により凹凸状を呈し軟弱である。南側は平坦で良く踏み固められている。

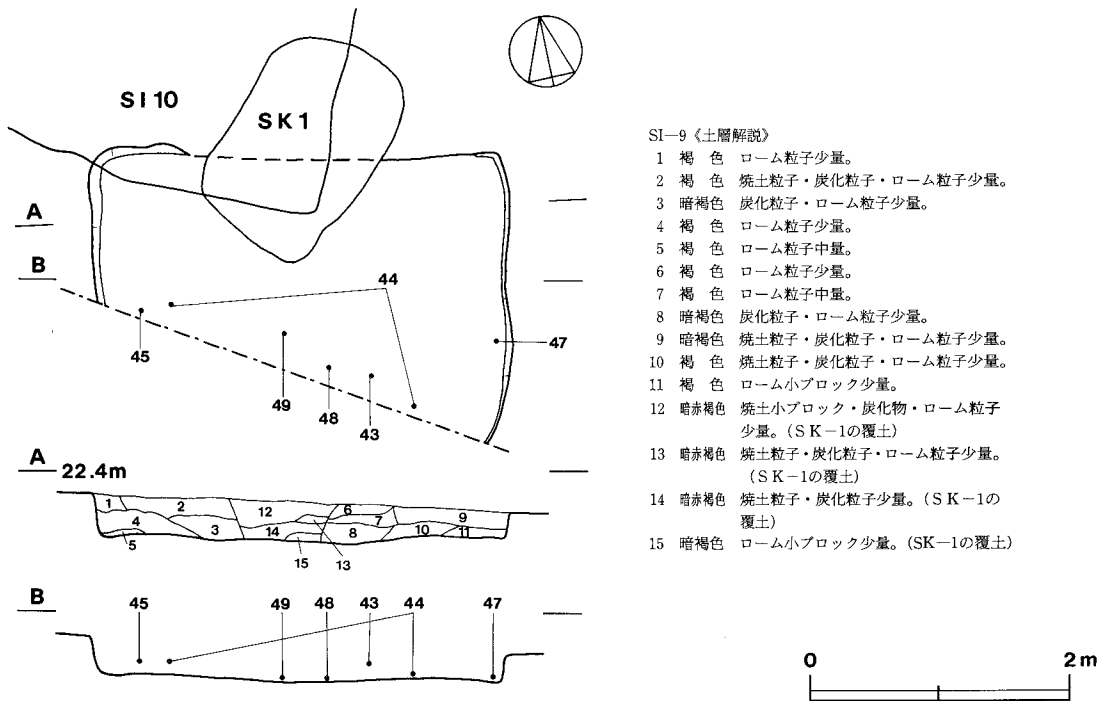
ピット 検出されなかった。

竈 調査した範囲では検出されなかった。

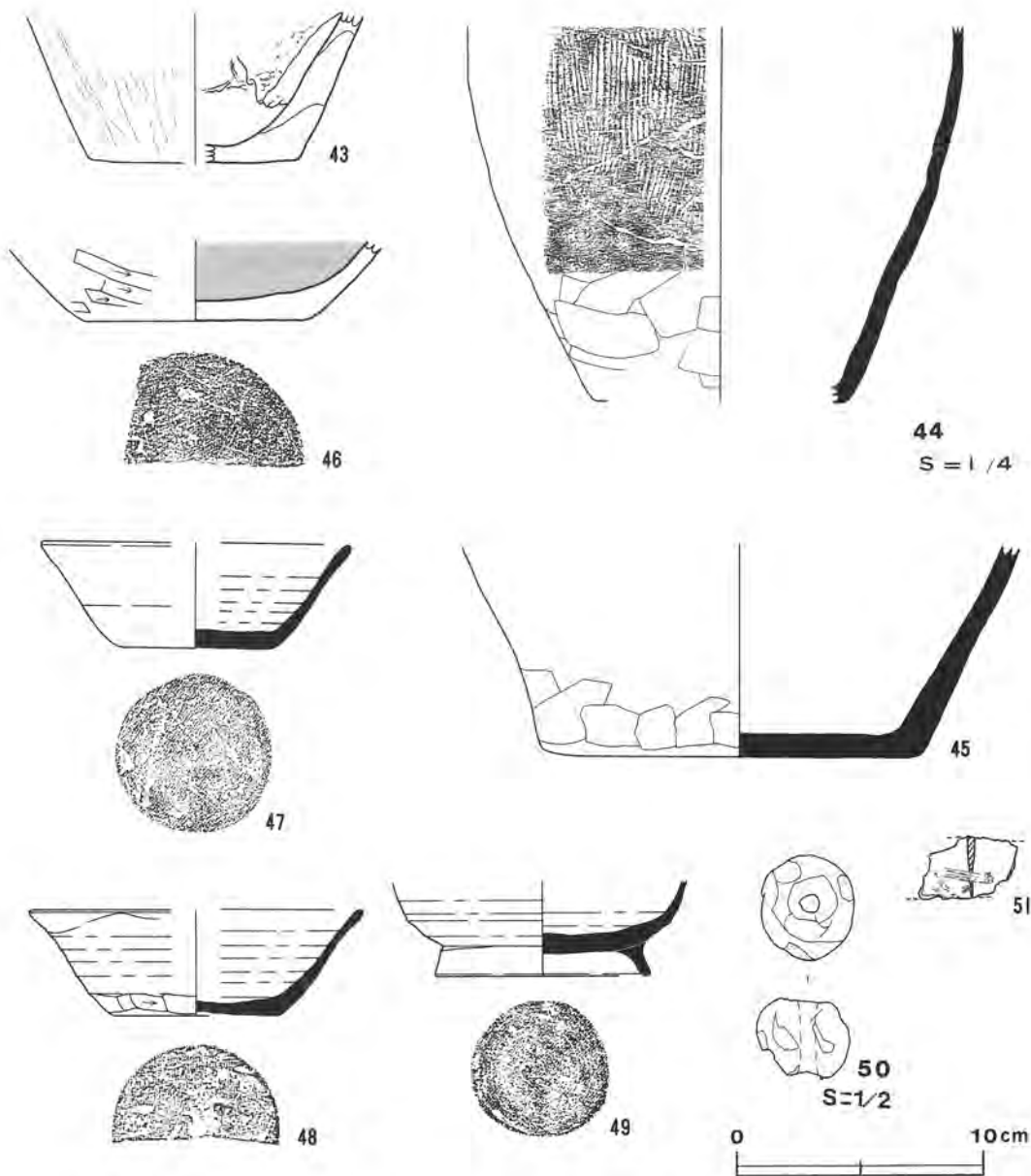
覆土 上層は焼土粒子を少量含む褐色土が、下層はローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器99点（甕1・鉢1・甕片・坏片）99点のうち内黒土器2点含む、須恵器14点（甕2・坏2・高台付坏1・甕片）、土製品1点（球状土錘1）、鉄製品1点（鎌か1）。遺物は本跡の中央部付近に集中している。43の甕が中央部付近の覆土下層から、45の甕が西壁中央部付近の覆土下層から伏せた状態で、47の坏が東壁中央部付近の床面から正位の状態で、48の坏が中央部付近の床面から正位の状態で、49の高台付坏が中央部付近の床面から伏せた状態で出土している。その他、覆土から縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったが、概ね同時期に比定される他の住居跡が西壁に竈をもつことから、本跡の西壁の調査区外の部分に付設されている可能性が考えられる。本跡は遺構の形態や遺物から平安時代に比定される住居跡と思われる。



第 22 図 第 9 号住居跡実測図



第 23 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図

第 9 号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 43	甕 土師器	B (6.1) C [8.5]	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。内面に鉄付着。底部に木葉痕。	胴部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石にぶい黄褐色普通	P43 5% 中央部付近の覆土下層
44	甕 須恵器	B (20.3) C [13.6]	平底。胴部は緩く内彎しながら、外傾して立ち上がる。	胴部外面上位から中位は平行叩き。下位以下横位の手持ちヘラ削り。内面横位のヘラナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P44 40% 東壁と西壁中央部付近の覆土下層

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第23図 45	甕 須恵器	B (8.5) C 15.5	平底。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部内・外面横位のナデ。胴部外面下端横位の手持ちヘラ削り。底部ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P45 30% 西壁中央部付近の覆土下層逆位
46	鉢 土師器	B (3.2) C [9.0]	平底。体部は内彎しながら外上方へ開く。	体部外面横ナデ，下位以下横位の手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き後黒色処理。底部多方向の手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P46 20% 中央部付近の覆土
47	坏 須恵器	A [12.4] B 4.3 C 6.2	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部で軽く外反する。内面の稜強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端軽いヘラナデ。底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒 暗灰黄色 普通	P47 60% 東壁中央部付近の床面正位
48	坏 須恵器	A [13.4] B 4.3 C 6.7	やや上げ底。体部は器厚を減じながら，直線的に外傾して立ち上がり，口縁部で軽く外反する。内・外面の稜強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。口唇部は粘土紐を貼ってから横ナデ。体部外面下端横位の手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P48 50% 中央部付近の床面正位
49	高台付坏 須恵器	B (3.9) D 8.6 E 1.2	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の壘付は丸みを帯びる。体部は底部との境ににぶい稜を有し，器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂・礫 オリブ灰色 普通	P49 50% 中央部付近の床面逆位

図版番号	器 種	法 量 (cm)	重 量 (g)	備 考
50	球状土錘 土製品	長さ2.2 幅2.6 孔径0.5	17.2	中央部付近の覆土 DP4
51	鎌 鉄製品	全長(4.1) 最大幅2.7 最大厚0.3		刃の一部と思われる。木質付着。 中央部付近の覆土 M1

第10号住居跡（第24図）

位置 調査区の西部 B2c₄区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 南東部で第9号住居跡と第1号土坑と重複している。本跡は，第9号住居跡の上に床を貼って構築され，第1号土坑に掘り込まれている。

平面形 長軸3.21m，短軸2.96mの方形を呈している。

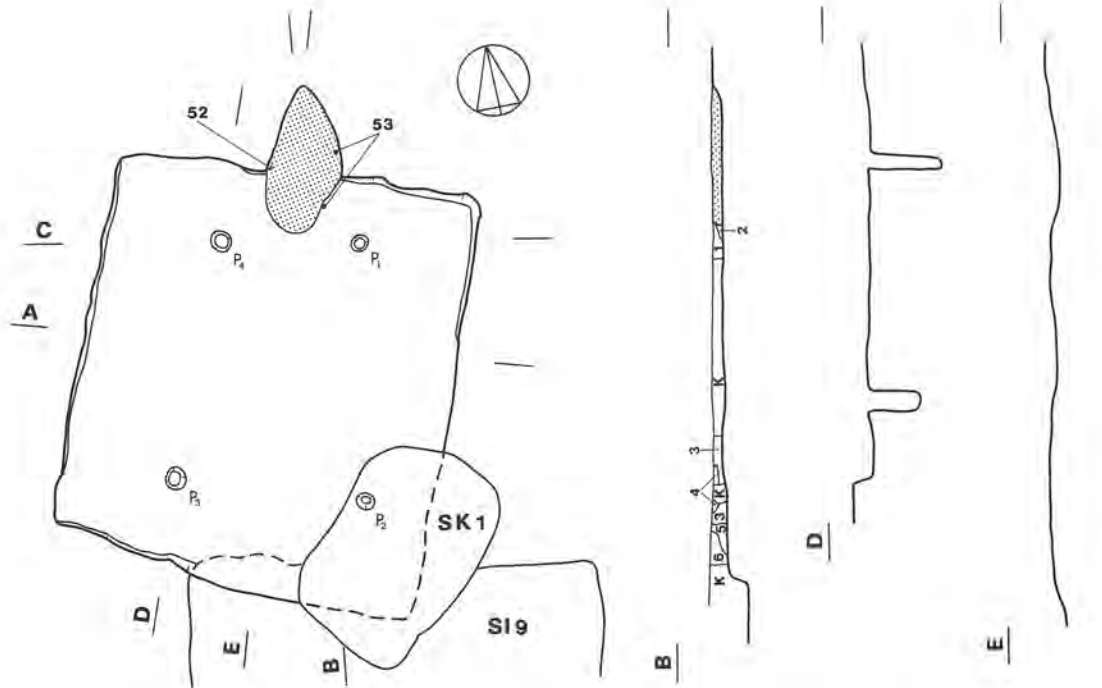
主軸方向 N-22°-E

壁 西壁及び南壁の一部を除き，重複や削平により湮滅している。残存している壁高は西壁で10cm，南壁で15cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床 カマド付近や中央部に平坦で硬い部分が認められるが，大部分は耕作による畝状の攪乱で，凹凸状を呈している。第9号住居跡と重複する部分はロームを叩いて貼床としている。

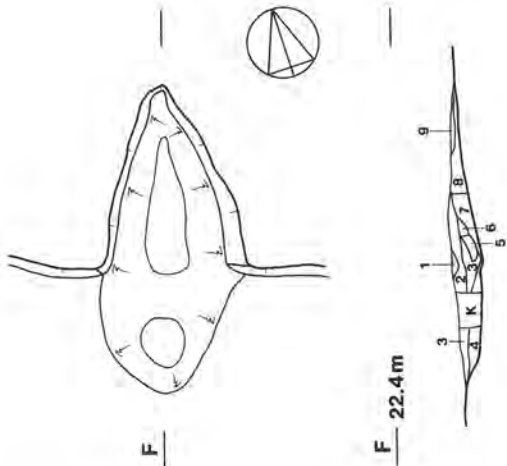
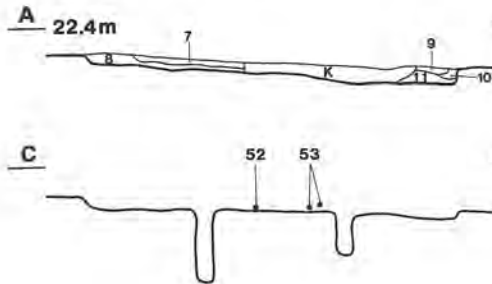
ピット 4か所検出され，規模や配列からすべて支柱穴と考えられる。P₁~P₄は径14~18cmの円形を呈し，深さ32~57cmを測る。

竈 北壁中央部に付設され，規模は長さ120cm，幅60cmで壁への掘り込みは70cm程である。砂質



SI-10《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 褐色 ローム小ブロック少量。(SK-1の覆土)
- 4 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量。(SK-1の覆土)
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。(SK-1の覆土)
- 6 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。(SK-1の覆土)
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 8 褐色 ローム粒子少量。
- 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 10 褐色 ローム粒子少量。
- 11 褐色 ローム小ブロック少量。



《竈土層解説》

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 4 暗赤褐色 ローム粒子少量。
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・灰少量。
- 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。



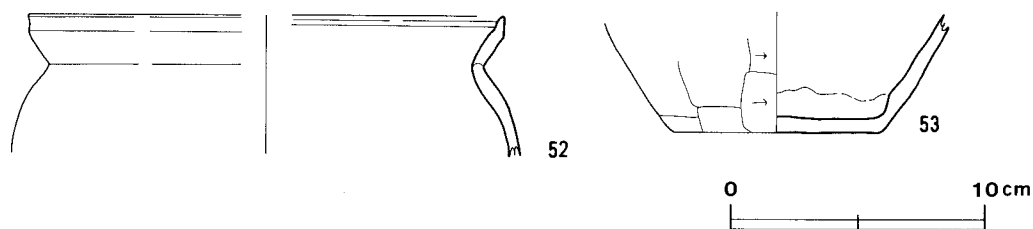
第24図 第10号住居跡・竈実測図

粘土を主体として構築されているが、大部分は崩れ遺存状態が悪い。火床は床面を10cm程掘り窪め、部分的に焼土粒子が検出される程度で焼き締まりは弱い。

覆土 極めて浅く、上面から攪乱を受けているため、ローム粒子を少量含む暗褐色土が部分的に観察されただけである。

遺物 土師器75点（甕・甕片・坏片）75点のうち内黒土器2点含む、須恵器3点（甕片・坏片・高台付坏片）。土師器のほとんどが甕の胴部片である。52・53の甕が竈の火床から出土している。その他、覆土から縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は出土した遺物が少なく時期を明確にすることはできないが、第9号住居跡より新しいことから平安時代に比定される住居跡と思われる。



第25図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 52	甕 土師器	A [18.6]	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部をほぼ垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面横位のナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P50 5% 竈の火床
		B (5.5)				
53	甕 土師器	B (4.8)	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	胴部外面下位に横位の手持ちヘラ削り。胴部内面及び底部ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P51 5% 竈の火床
		C 8.2				

第14号住居跡（第26図）

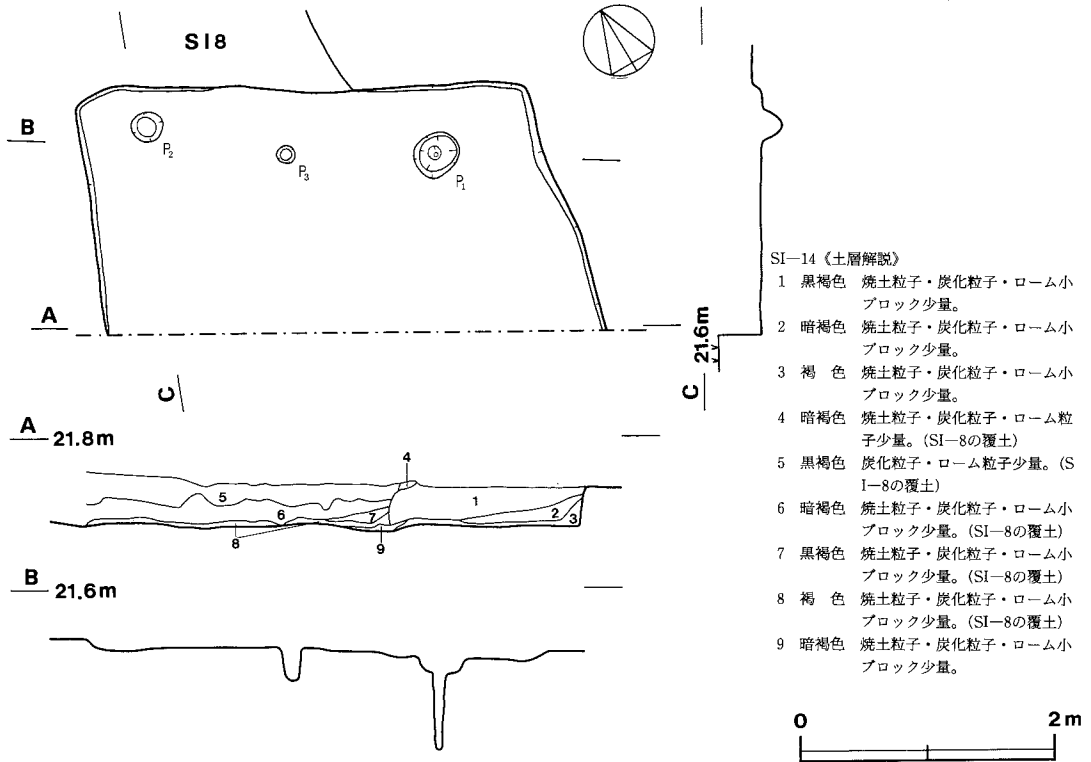
位置 調査区の中央部 B2g₈区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 北西部を第8号住居跡によって掘り込まれている。

平面形 南側2分の1程が調査区外になるが、一辺が3.9m程の方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-59°-W

壁 北西壁と北東壁の大部分は第8号住居跡によって破壊されている。残存している北東壁は壁高12cmを測り、外傾して立ち上がっている。南東壁は壁高6cmを測り、緩やかな傾斜で立ち上がった



第 26 図 第14号住居跡実測図

ている。

床 全体に平坦で、良く踏み固められている。第8号住居跡と重複している部分では、第8号住居跡の貼床の下に本跡の硬い床面が検出された。

ピット 3か所検出され、位置や規模から P₁の1か所だけが支柱穴と考えられる。P₁は径34cmの円形を呈し、深さ73cmで2段に掘り込まれている。

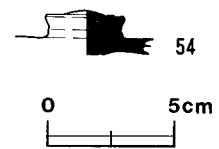
P₂と P₃は径25cmと径15cmの円形を呈し、深さ16cmと26cmを測る。

竈 調査した範囲では検出されなかった。

覆土 上層にローム小ブロックを少量含む黒褐色土が、下層にローム小ブロックを少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器30点(甕片・坏片), 須恵器21点(蓋1・甕片・坏片・蓋片)。54の蓋の鈕が P₁内の覆土から出土している。土師器のほとんどが甕の胴部片で、胴部下位にヘラ磨きが施されているものが認められる。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったが、南側2分の1が調査区外になるため、その部分に付設されている可能性がある。本跡は遺構の形態や遺物から奈良・平安時代の住居跡と思われる。

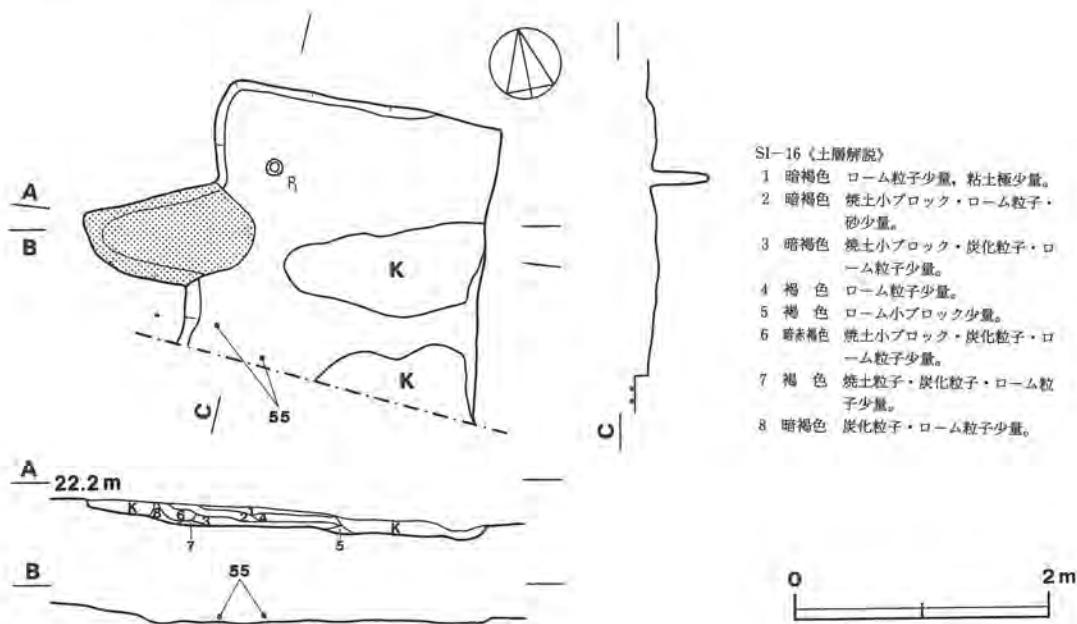


第 27 図 第14号住居跡
出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 54	蓋 須恵器	F 3.2 G 1.1	つまみは扁平な擬宝珠形を呈する。	つまみは貼り付け後横ナデ。	砂粒 灰色 良好	P52 5% P ₁ 内の覆土

第16号住居跡 (第28図)



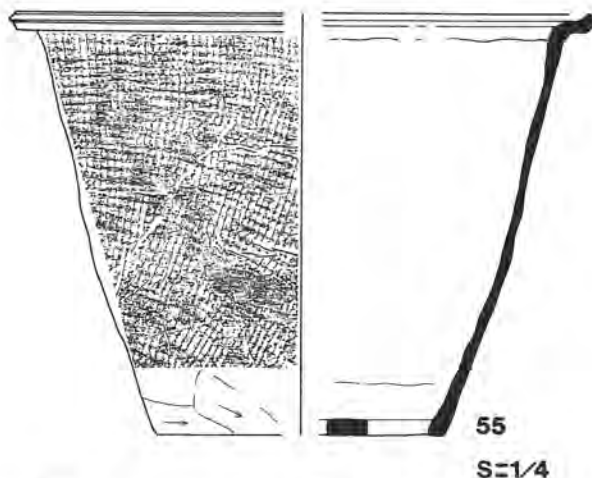
第 28 図 第16号住居跡実測図

位置 調査区の西部 B2d₈区を中心に確認された住居跡である。

平面形 南側の3分の1程が調査区外になり、東壁が攪乱を受けていることから平面形や規模等の詳細は不明である。残存する部分から推定すると、一辺が2.4m程の方形状を呈する住居跡と思われる。

主軸方向 N-67°-W

壁 東壁は攪乱により湮滅している。他の壁は緩やかな傾斜で立ち上



第 29 図 第16号住居跡出土遺物実測図

がり、残存している壁高は5cm前後を測る。

床 中央部から西側は平坦で硬く踏み固められている。東側は攪乱を受けて、凹凸状を呈し軟弱である。

ピット 北西部に1か所検出され、位置や規模から支柱穴と考えられる。P₁は径13cmの円形を呈し、深さ46cmを測る。

竈 西壁中央部に付設され、規模は長さ135cm・幅80cmで、掘り込みは92cm程である。砂質粘土を主体に構築されているが、攪乱を受けて袖や天井部の遺存状態が悪い。覆土に焼土ブロックが少量含まれているが、火床はほとんど焼けていない。

覆土 全体に焼土小ブロックやローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器25点（甕片・坏片）、須恵器15点（甑1・甕片・甑片・坏片）。55の甑が竈南側の床面から潰れた状態で出土している。竈燃焼部の覆土から出土している土師器の甕片は、口縁端部が短くつまみ上げられている。その他、覆土から陶器片、内耳土器片が出土している。

所見 本跡は遺構の形態や遺物から平安時代に比定される住居跡と思われる。

第16号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 55	甑 須恵器	A [30.0] B 22.3 C [15.0]	多孔式と思われる。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部で強く外反する。口縁端部は外上方に立ち上がる。頸部内面の稜強い。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面格子目叩き、外面下端横位の手持ちヘラ削り。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・礫 灰褐色 良好	P53AB 50% 竈南側の床面

第17号住居跡（第30図）

位置 調査区の東部 B3e₆区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 中央部を南北に延びる第1号溝・第3号道路跡に、南東部を第3号溝・第4号井戸・第42号土坑によって掘り込まれている。

平面形 長軸6.30m、短軸6.21mの方形を呈している。

主軸方向 N-10°-E

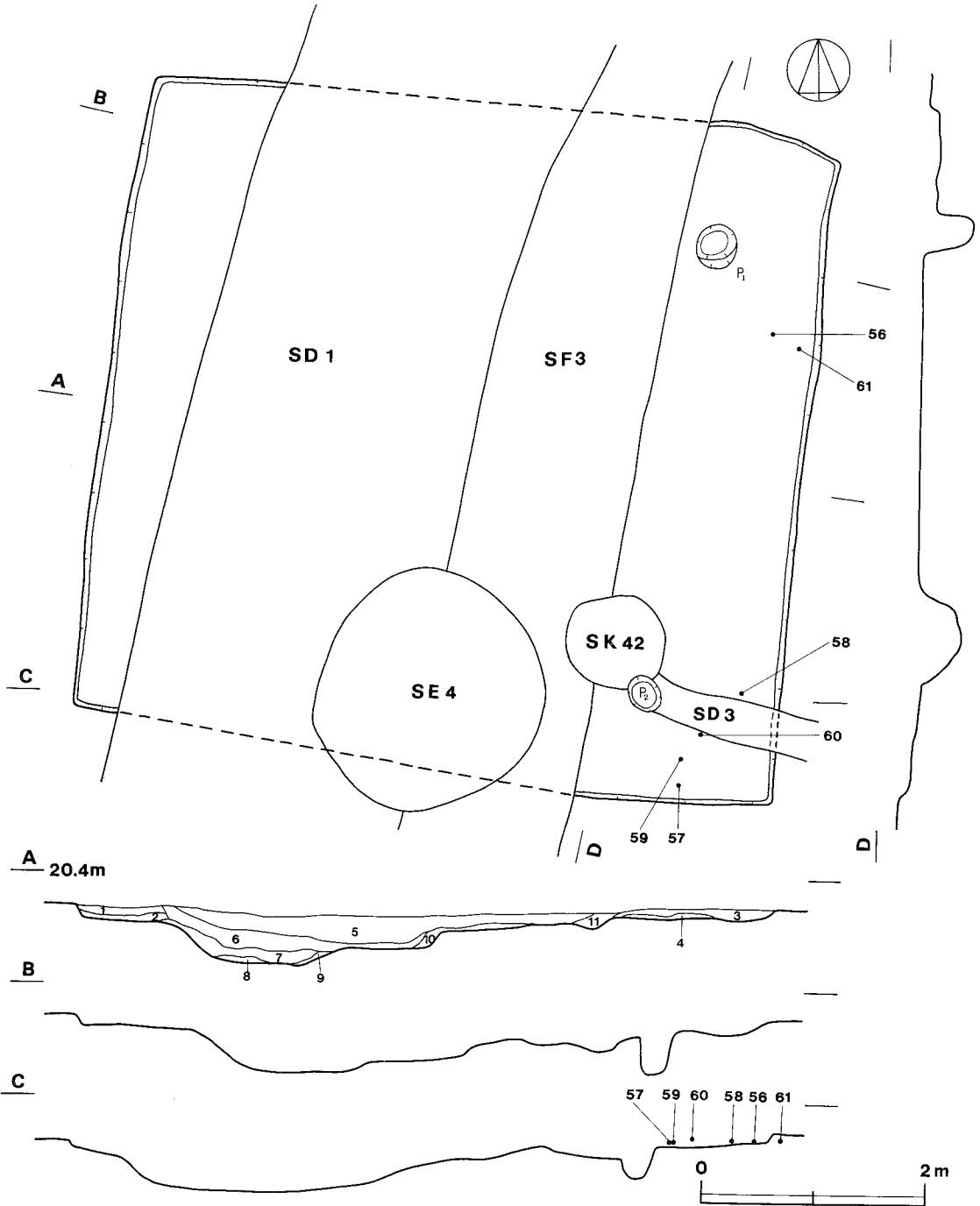
壁 残存している壁高は4~12cmを測り、緩やかに立ち上がっている。

ピット 2か所検出され、規模や配列からどちらも支柱穴と考えられる。P₁は径40cmの円形を呈し、深さ37cmを測る。P₂は長径35cm・短径28cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る。

床 全体に平坦で良く踏み固められている。

竈 検出されなかった。

覆土 上層にローム粒子を少量含む黒褐色土が、下層に炭化粒子やローム粒子を少量含む極暗褐



SI-17《土層解説》

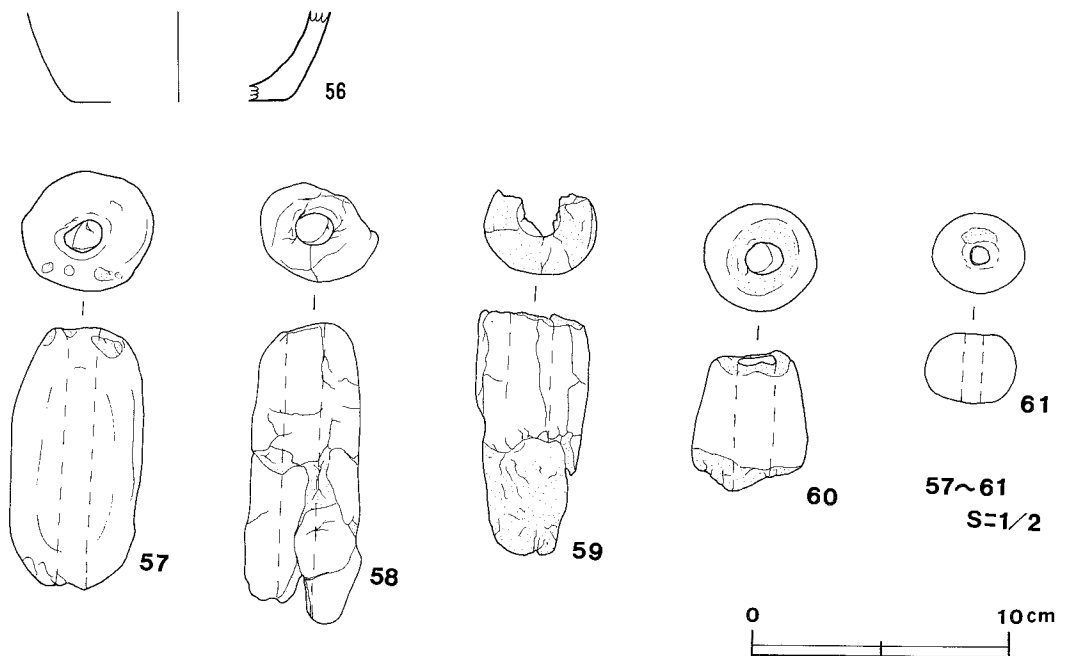
- | | | |
|---|--|---|
| <p>1 黒褐色 ローム粒子少量。
 2 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、粘土極少量。
 3 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
 く、硬く締まる。(SD-1の覆土)</p> | <p>5 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。(SD-1・SF-3の覆土)
 6 黒褐色 ローム小ブロック・粘土少量。(SD-1の覆土)
 7 黒褐色 ローム粒子・粘土少量、粘性強く、硬く締まる。(SD-1の覆土)
 8 灰黄褐色 白色粘土多量、粘性強く、硬く締まる。(SD-1の覆土)</p> | <p>9 黒褐色 白色粘土中量、焼土粒子少量、粘性強く、硬く締まる。(SD-1の覆土)
 10 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、硬く締まる。(SF-3の覆土)
 11 暗褐色 ローム粒子・粘土極少量、硬く締まる。(SF-3の覆土)</p> |
|---|--|---|

第30図 第17号住居跡実測図

色土が浅く堆積している。

遺物 土師器36点（甕1・甕片・坏片）36点のうち内黒土器1点含む、須恵器10点（甕片・坏片）、土製品5点（管状土錘4・球状土錘1）。56の甕の底部片が北東部の床面から、57・58・59・60の管状土錘が南東コーナー付近の床面から、61の球状土錘が北東部の床面から出土している。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったが、遺構の規模や形態から、近接する第1号・第2号住居跡と同タイプの住居跡と考えられる。第1号・第2号住居跡の竈が北壁に付設されていることから、本跡も溝や道路跡に掘り込まれている北壁に付設されていた可能性が考えられる。本跡は遺構の形態や遺物から奈良・平安時代の住居跡と思われる。



第31図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 56	甕 土師器	B (3.5) C [8.4]	平底。胴部は内彎気味に外張りして立ち上がる。	胴部外面へラ削り後ナデ。胴部内面ナデ。	砂粒・長石・礫 赤褐色 普通	P54 5% 北東部の床面
図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考		
57	管状土錘 土製品	長さ6.9 幅3.4 孔径0.99	63.1	南東コーナー付近の床面 DP6		
58	管状土錘 土製品	長さ7.9 幅2.9 孔径1.00	(49.1)	一部欠損 南東コーナー付近の床面 DP7		

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
第31図 59	管状土錘 土製品	長さ(6.4) 幅3.0 孔径1.13	(32.8)	欠損 南東コーナー付近の床面 DP8
60	管状土錘 土製品	長さ(3.8) 幅3.0 孔径0.97	(23.8)	欠損 南東コーナー付近の床面 DP9
61	球状土錘 土製品	長さ1.8 幅2.3 孔径0.50	8.7	北東部の床面 DP10

第22号住居跡 (第32図)

位置 調査区の中央部 B2e₃区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 北東部を第1号・第2号地下式墳によって掘り込まれている。

平面形 北壁は第1号・第2号地下式墳によって掘り込まれ、さらに攪乱を受けているため明確ではないが、一辺が4.5m前後の方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-15°-E

壁 残存している壁高は10cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 中央部付近に硬く踏み固められた部分が検出されたが、全体に耕作による畝状の攪乱で凹凸状を呈している。

ピット 検出されなかった。

竈 検出されなかった。

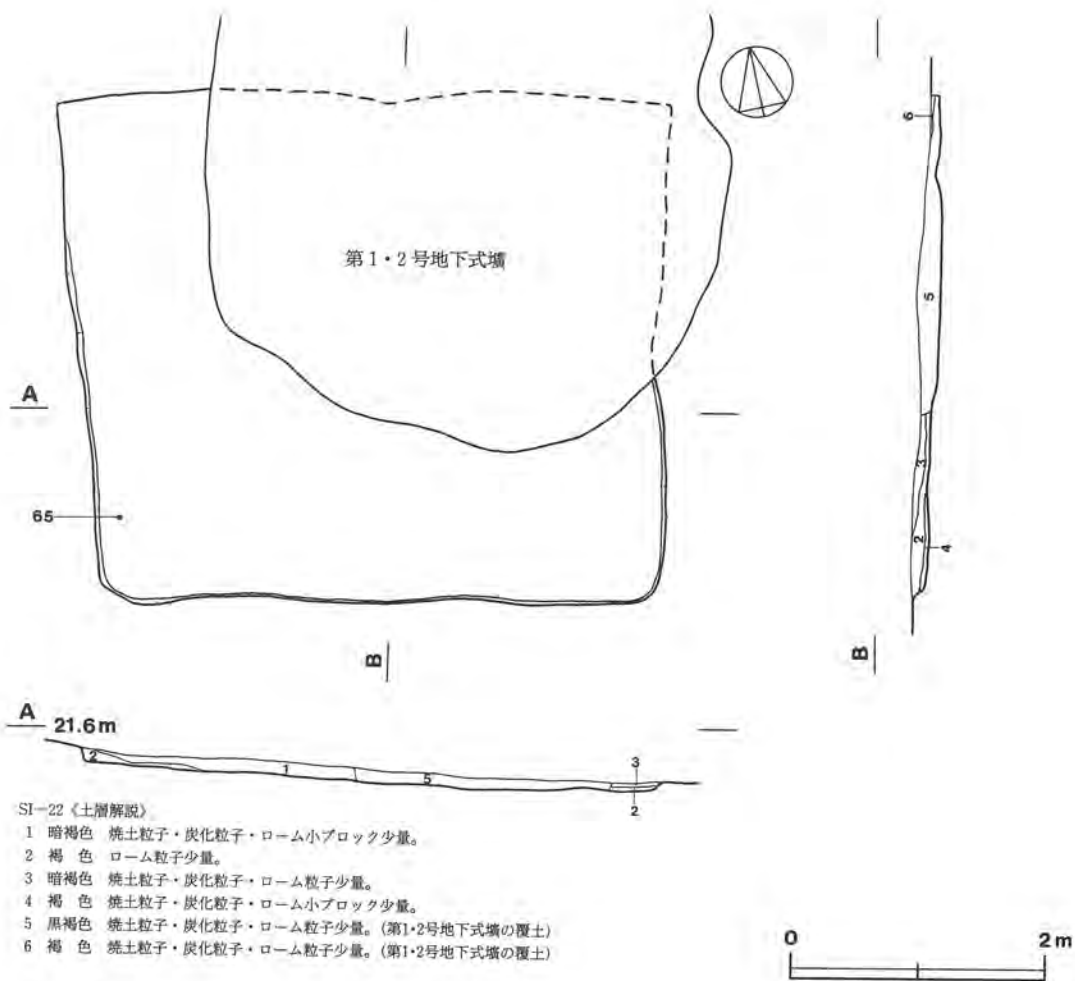
覆土 上層はローム粒子を少量含む暗褐色土が、下層はロームブロックを少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器260点(甕1・坏1・高台付坏2・甕片・坏片) 260点のうち内黒土器17点含む、須恵器52点(甕片・坏片), 土製品1点(球状土錘1)。62の甕の底部片が南東部の覆土から、63の坏・64の高台付坏が中央部付近の覆土から、65の高台付坏の高台部片が南西コーナー付近の床面から出土している。その他、覆土から66の球状土錘、陶器片、縄文式土器片が出土している。

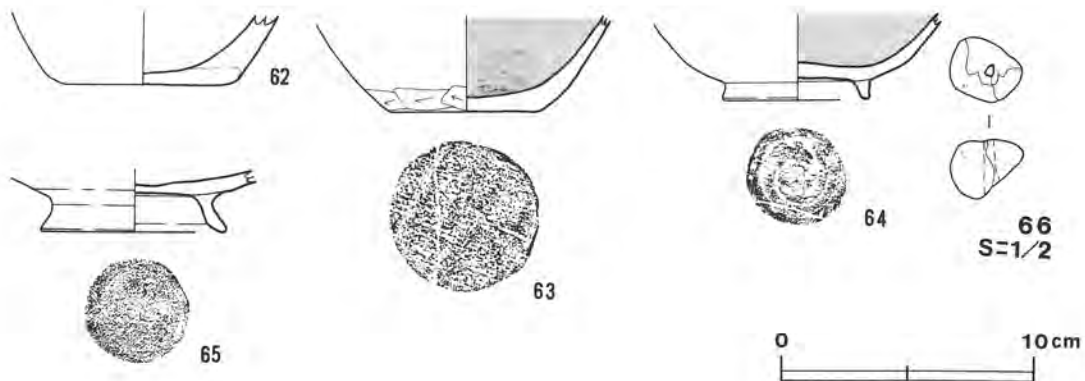
所見 本跡は炉や竈が検出されなかったが、概ね同時期に比定される他の住居跡が西壁又は北壁に竈が付設されていることから、第1号・第2号地下式墳に掘り込まれている北壁に付設されていた可能性が考えられる。本跡は遺構の形態や遺物から平安時代に比定される住居跡と思われる。

第22号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 62	甕 土師器	B (2.8) C [7.4]	平底。胴部は外傾して立ち上がる。底部に木葉痕。	胴部外面縦位の雑なヘラ磨き。 内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P58 5% 南東部の覆土



第32図 第22号住居跡実測図



第33図 第22号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 63	坏 土師器	B (3.8) C 5.9	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ、下端横ナデ後横位の手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き後黒色処理。底部一方の手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P59 40% 中央部付近の覆土
64	高台付坏 土師器	B (3.4) D 5.8 E 0.7	平底で、ほぼ直立する高台が付く。高台の畳付は平坦。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ。内面ヘラ磨き後黒色処理。底部回転ヘラ切り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P60 40% 中央部付近の覆土
65	高台付坏 土師器	B (2.5) D 7.2 E 1.6	平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の畳付は丸みを帯びる。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 良好	P61 20% 南西コーナー付近の床面

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
66	球状土錘 土製品	長さ1.5 幅1.9 孔径0.22	(3.3)	一部欠損 覆土 DP11

第25号住居跡（第34図）

位置 調査区の北西部 A2h₆区を中心に確認された住居跡である。

平面形 北側の2分の1程が調査区外になるが、一辺が4.3m程の方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-22°-E

壁 残存している壁高は南壁で15cm、東壁で12cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 全体に平坦で良く踏み固められており、特に中央部付近が堅緻である。

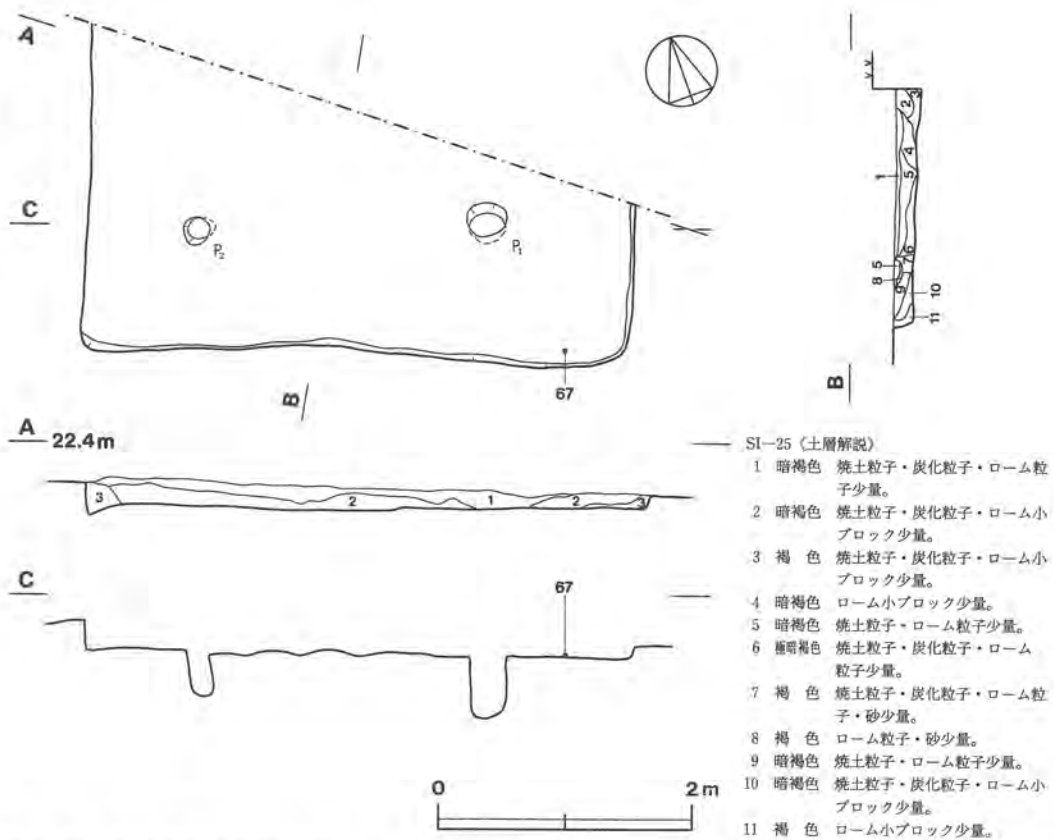
ピット 2か所検出され、P₁とP₂のどちらも主柱穴と考えられる。P₁は長径32cm・短径27cmの円形を呈し、南側へややオーバーハングして50cm掘り込まれている。P₂は径22cmの円形を呈し、東側へややオーバーハングして35cm掘り込まれている。

竈 調査した範囲では検出されなかった。

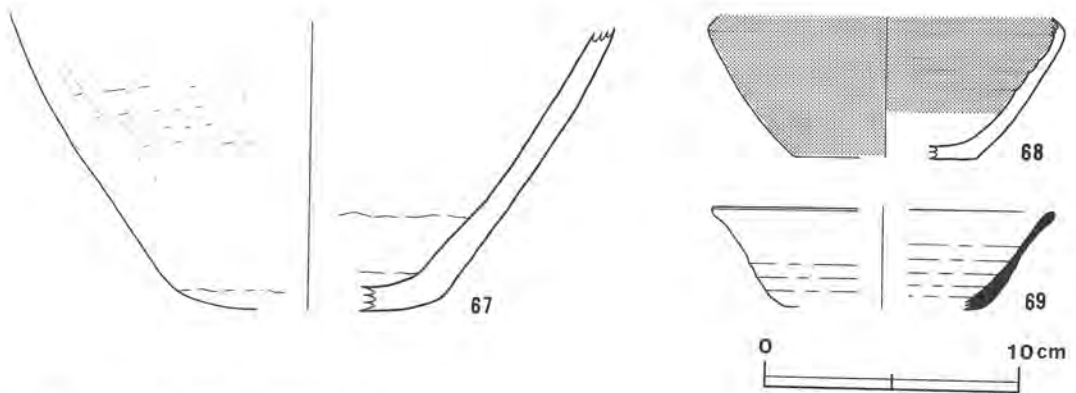
覆土 全体にローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。壁際ではローム小ブロックの混入が多く認められる。

遺物 土師器80点（甕1・甕片・坏片・高台付坏片）、須恵器9点（坏1・甕片・坏片・蓋片）、陶器1点（壺1）。67の甕が南東コーナー付近の床面から潰れた状態で、68の壺・69の坏が南西部の覆土から出土している。その他、覆土から縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったが、北側の2分の1程が調査区外になるため、その部分に付設されている可能性が考えられる。本跡は遺構の形態や遺物から奈良・平安時代に比定される住居跡と思われる。



第34図 第25号住居跡実測図



第35図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 67	甕 土師器	B (11.4) C [10.6]	丸底気味、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	胴部外面斜位のヘラ磨き。胴部内面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・長石・礫にふい赤褐色良好	P63 30% 南東コーナー付近の床面

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 68	壺 陶器	B (5.6) C [7.2]	平底。胴部は外傾して立ち上がり、肩が張る。内面の水挽き痕強い。内・外面自然釉付着。	水挽き成形。	(胎土)明緑灰色 (釉)オリブ灰色 (焼成)普通	P64 20% 南西部の覆土
69	坏 須恵器	A [13.4] B 3.9 C [7.6]	平底。体部は器厚を減じながら、内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部は外反して、口唇部を丸くおさめる。体部内・外面下位の稜が強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P65 20% 南西部の覆土

第27号住居跡（第36・37図）

位置 調査区の北西部 A2g₄区を中心に確認された住居跡である。

重複関係 北壁の中央部付近を第92号土坑に、北西コーナー付近を第93号土坑によって掘り込まれている。

平面形 長軸5.13m、短軸4.83mの整った方形を呈している。

主軸方向 N-67°-W

壁 残存している壁高は15～21cmを測り、外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周し、上幅15～35cmでU字状に10cm程掘り込まれている。

床 全体に平坦で良く踏み固められており、特に竈付近から中央部付近にかけて硬く締まっている。

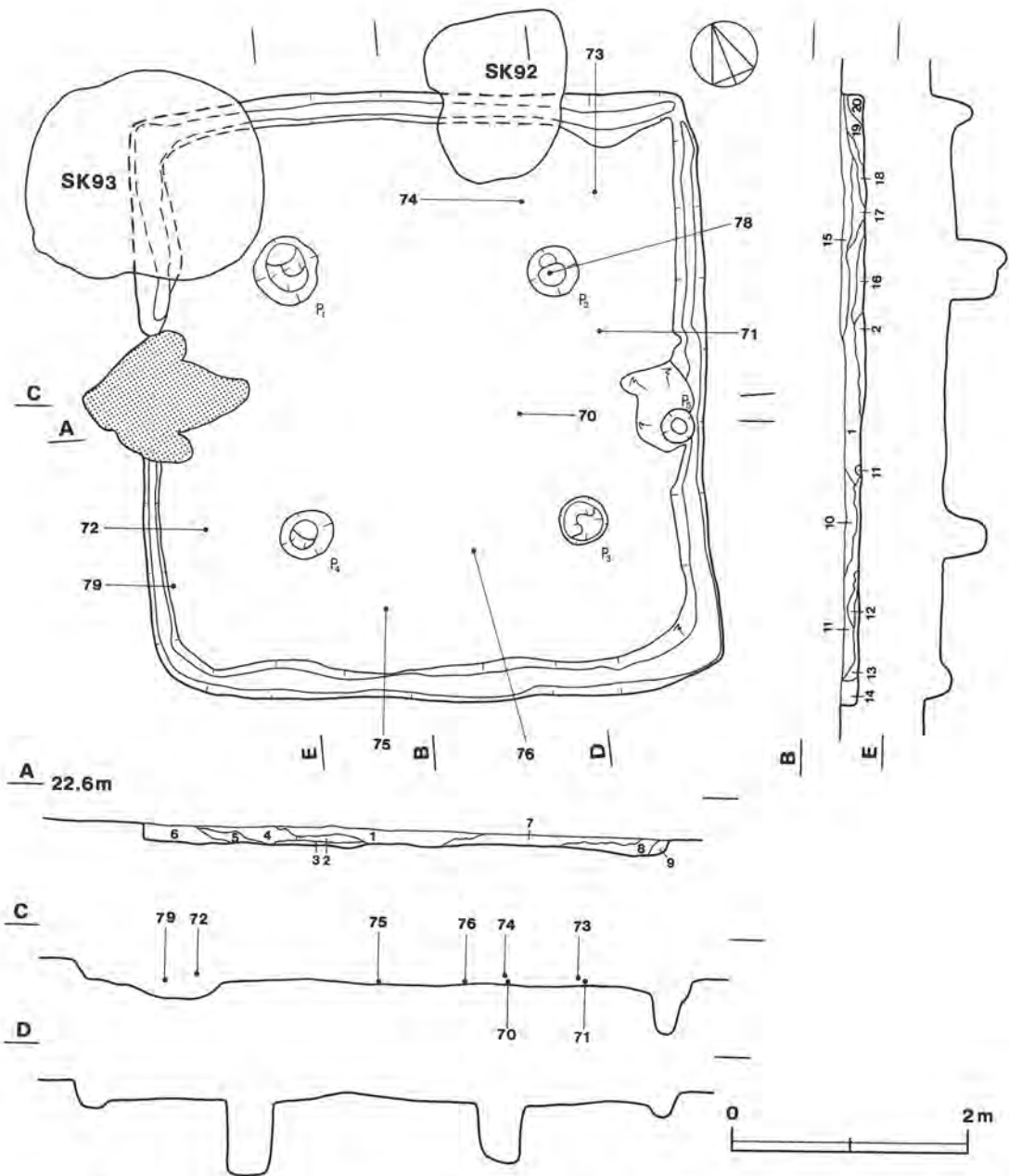
ピット 5か所検出され、規模や配列からP₁～P₄が支柱穴と考えられる。P₁～P₄は径40～58cmの円径を呈し、深さ36～63cmで底面が硬く締まっている。P₅は入口部に伴う梯子ピットと考えられ、径30cmの円径を呈し、深さ34cmを測る。

竈 西壁中央部に付設され、規模は長さ142cm・幅118cmで、壁への掘り込みは50cm前後である。砂質粘土を主体として構築され、当遺跡で検出された竈の中では最も遺存状態が良好である。火床は床面を18cm程掘り窪め、レンガ状に硬く焼き締まっている。煙道部及び袖の側壁はかなり焼けており、長期間使用されていたものと思われる。

覆土 上層に焼土粒子を少量含む暗褐色土が、下層にローム小ブロックを少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器229点（甕2・甕片・坏片）229点のうち内黒土器4点含む、須恵器13点（坏3・蓋2・坏片）、土製品3点（球状土錘2・紡錘車1）。遺物は本跡の北東部に集中している。70の甕の口縁部片が中央部付近の床面から、73・74の坏の底部片が北東部の覆土中層から、76の蓋が南東部の床面から、75の蓋・79の紡錘車が南西部の床面から出土している。その他、覆土から陶器片、縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は遺構の形態や遺物から奈良時代に比定される住居跡と思われる。

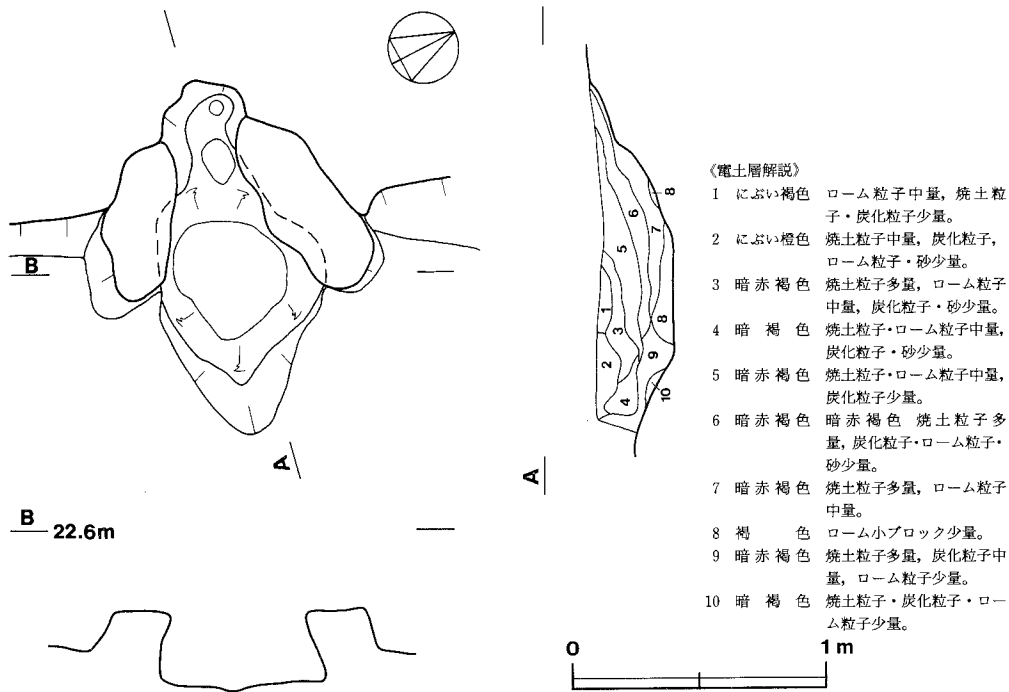


SI-27 (土層解説)

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 6 褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 8 褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量。
- 9 褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 10 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。

- 11 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 12 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 13 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量。
- 14 褐色 炭化粒子・ローム粒子中量。
- 15 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 16 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 17 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 18 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 19 褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 20 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。

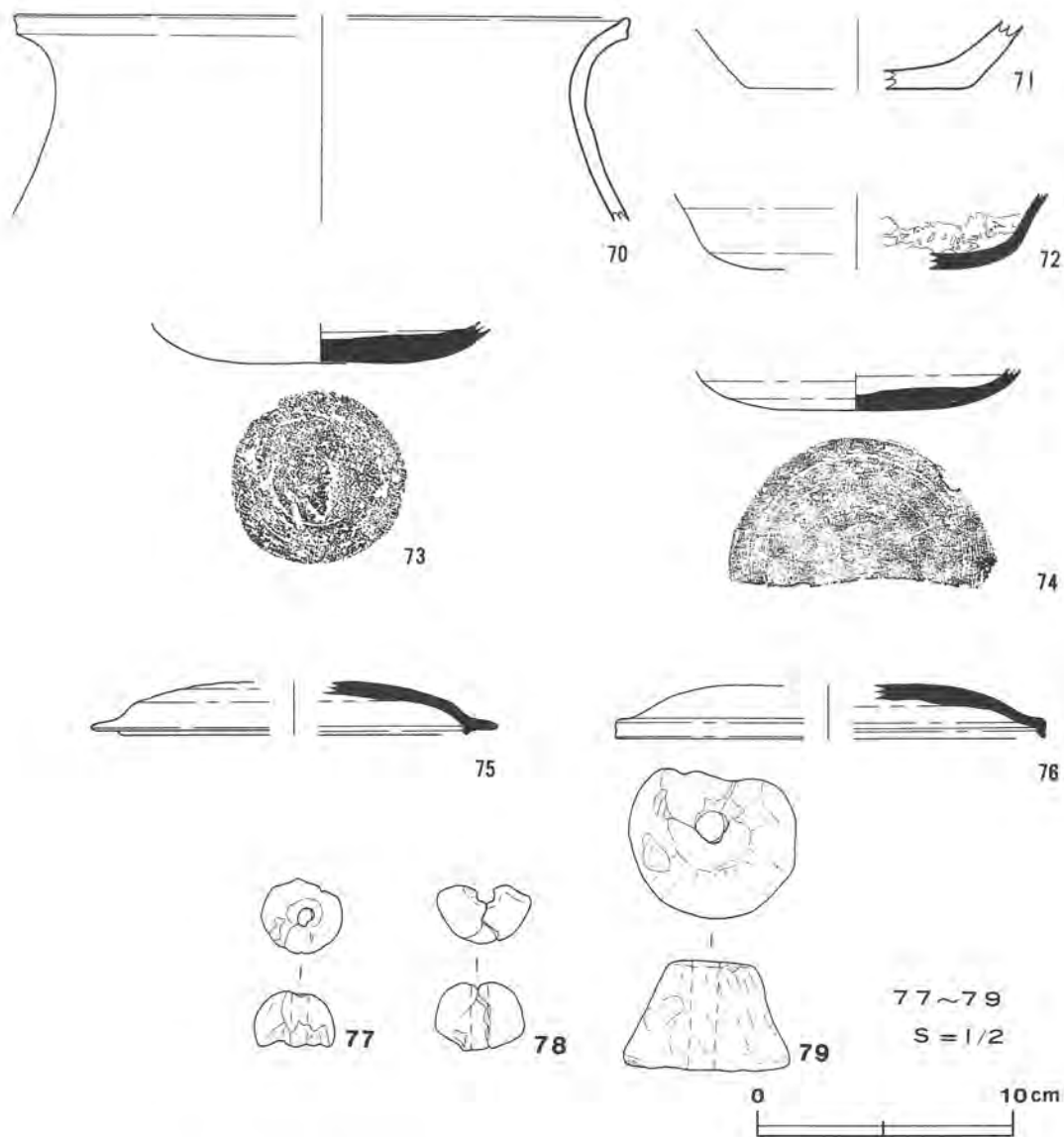
第36図 第27号住居跡実測図



第 37 図 第 27 号住居跡竈実測図

第 27 号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 70	甕 土師器	A [24.0] B (8.2)	頸部は丸みをもって外反し, 口縁瑞部をわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P 66 5% 中央部付近の床面
71	甕 土師器	B (2.5) C [8.6]	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面縦位のヘラ磨き。内面及び底部ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 67 5% 北東部の床面
72	坏 須恵器	B (3.0)	丸底気味。底部と体部の境は丸みを有し, 体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内面下端に漆附着。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り(右)。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 不良	P 68 20% 竈付近の覆土下層
73	坏 須恵器	B (1.6)	丸底気味。底部と体部の境は丸みを有する。	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り(右)。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P 69 30% 北東部の覆土中層
74	坏 須恵器	B (1.6)	丸底気味。底部と体部の境は丸みを有する。	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り(右)。	砂粒・礫 灰白色 普通	P 70 20% 北東部の覆土中層
75	甕 須恵器	A [15.8] B (2.1)	天井部は平坦な上位から緩やかに下がり口縁部に至る。口縁部は屈曲して外下方に下がり, 内側にかえりを有する。	内・外面横ナデ。天井部上位から中位にかけて回転ヘラ削り(右)。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P 71 20% 南西部の床面



第38図 第27号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 76	蓋 須恵器	A [16.8] B (2.1)	天井部は平坦な上位から緩やかに下がり口縁部に至る。口縁部は屈曲して、口縁端部を短く垂下させる。	内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 やや不良	P72 20% 南東部の床面
図版番号	器種	法量(cm)		重量(g)	備考	
77	球状土錘 土製品	長さ(1.4)	幅2.1 孔径0.43	(4.2)	欠損 南東部の覆土 DP12	

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
第38図 78	球状土錘 土製品	長さ(1.8) 幅2.3 孔径0.44	(4.4)	欠損 P ₂ 内の覆土 DP13
79	紡錘車 土製品	長さ[4.0] 幅4.3 厚さ2.8 孔径0.75	(35.1)	一部欠損 南西部の床面 DP14

第28号住居跡 (第39図)

位置 調査区の北西部 A2i区を中心に確認された住居跡である。

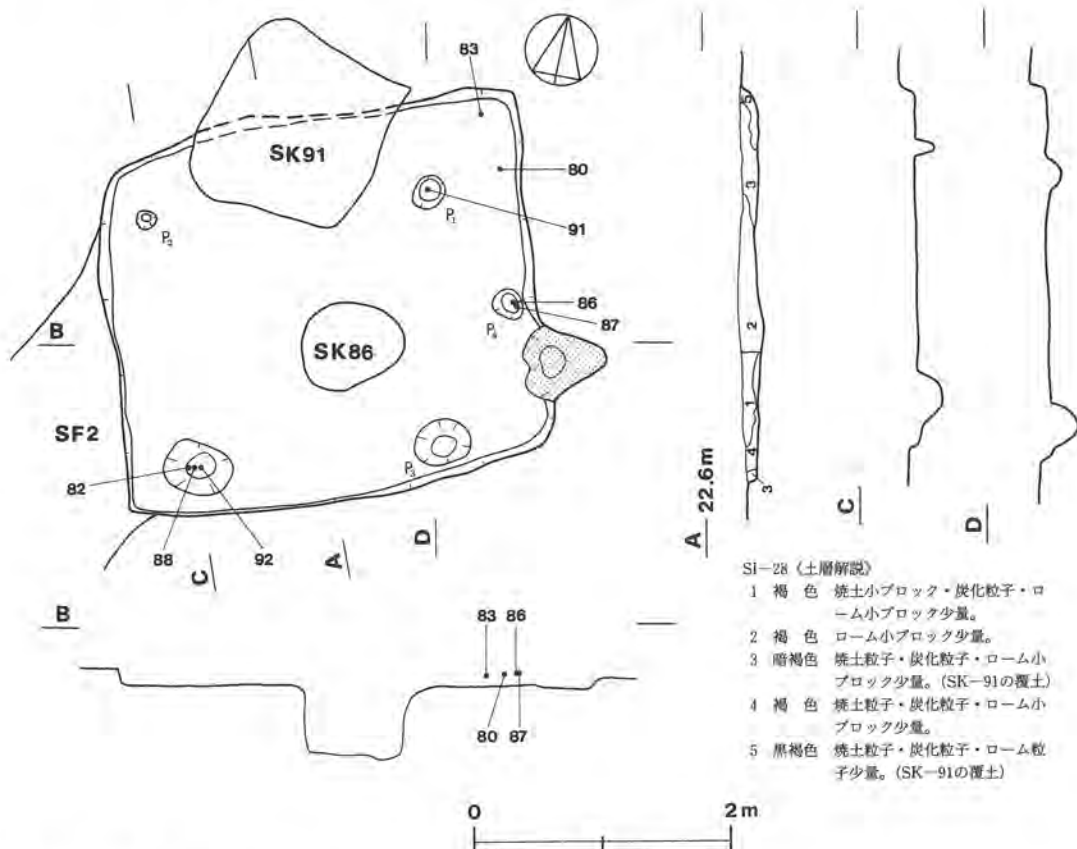
重複関係 北壁中央部を第91号土坑に、中央部付近を第86号土坑によって掘り込まれている。西壁で第2号道路跡と切り合うが新旧関係は不明である。

平面形 長軸3.37m、短軸2.91mの長方形を呈する住居跡である。

主軸方向 N-66°-E

壁 残存している壁高は10~15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 全体に平坦で良く踏み固められ、特に中央部から竈付近にかけて堅緻である。



第39図 第28号住居跡実測図

ピット 4か所検出され、規模や配列からP₁とP₂が支柱穴と思われる。P₁は径26cmの円形を呈し、深さ13cmを測る。P₂は径15cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。P₃は長径45cm・短径35cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。P₄は長径27cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。

貯蔵穴 南西コーナー付近に付設され、長径50cm・短径40cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

竈 東壁の南東コーナー付近に付設され、規模は長さ59cm・幅57cmで、壁への掘り込みは45cm程である。大部分は崩れ、覆土に灰や焼土がわずかに認められる程度である。

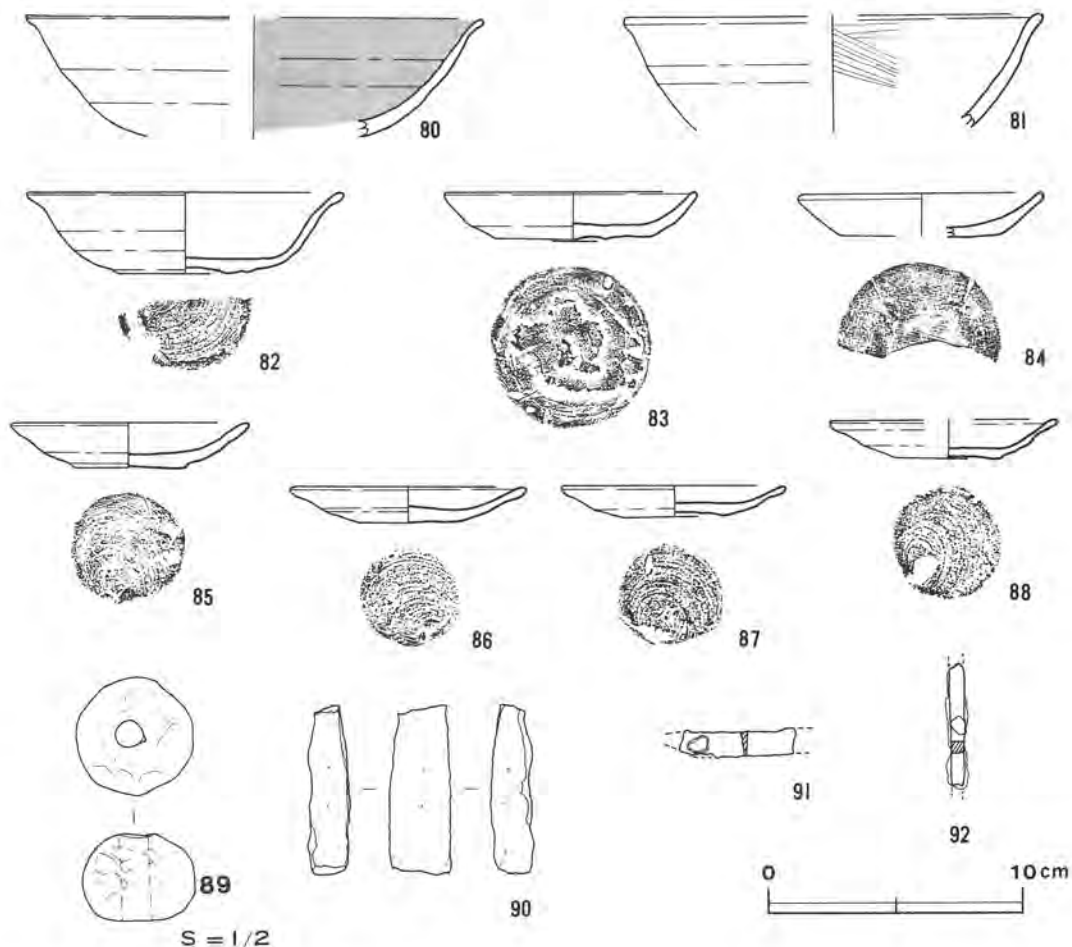
覆土 全体にローム小ブロックを少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器92点（埴2・甕片・甑片・坏片・高台付坏片）92点のうち内黒土器6点含む、須恵器5点（甕片・坏片・蓋片）、土師質土器11点（皿7・皿片）、石製品1点（砥石1）、土製品1点（球状土錘1）、鉄製品2点（刀子1・不明1）。遺物は北東部や貯蔵穴付近に集中している。80の埴が北東部の覆土下層から、81の埴が竈燃焼部の覆土から、82・88の皿が貯蔵穴内から、83の皿が北東コーナー付近の覆土下層から正位の状態で、84・85の皿がそれぞれ北東部と南東部の覆土から、86・87の皿がP₄付近の覆土下層から重なった状態で、91の刀子片がP₁内から出土している。

所見 本跡のP₃は、底面が硬く締まり、覆土に灰や焼土が層状に堆積している状況が観察された。本跡は遺構の形態や遺物から平安時代に比定される住居跡と思われる。

第28号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 80	埴 土師器	A [18.0]	体部は器厚を減じながら、内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、口唇部を丸くおさめる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ後へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 にぶい 橙色 良好	P73 10% 北東部の覆土 下層
		B (4.8)				
81	埴 土師器	A [16.4]	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ後へラ磨き。	砂粒 にぶい 赤褐色 良好	P74 10% 竈燃焼部の覆土
		B (4.5)				
82	皿 土師質土器	A 12.5	平底で、やや突出する。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒 橙色 普通	P75 60% 貯蔵穴内の覆土
		B 3.2				
		C 5.2				
83	皿 土師質土器	A 10.0	平底。体部は下位ににぶい稜を有し、外傾して立ち上がる。整形(成形)時の道具圧痕が、体部下端に二か所対称の位置に残る。	水挽き成形。底部回転へラ切り(右)。	砂粒・スコリア にぶい 橙色 普通	P76 80% 北東コーナー 付近の覆土下層
		B 2.0				
		C 6.3				
84	皿 土師質土器	A 9.4	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部丁寧なナデ。	砂粒・雲母 にぶい 橙色 良好	P77 40% 北東部の覆土
		B 1.8				
		C [6.4]				
85	皿 土師質土器	A 9.1	平底で、やや突出する。体部は下位ににぶい稜を有し、外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒 にぶい 赤褐色 普通	P78 60% 南東部の覆土
		B 1.8				
		C 4.2				
86	皿 土師質土器	A 9.2	平底。体部は下位ににぶい稜を有し、外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒 にぶい 褐色 良好	P79 60% P ₄ 付近の覆土下層
		B 1.4				
		C 3.8				



第40図 第28号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 87	皿 土師質土器	A 8.7	上げ底気味。体部は下位に い稜を有し、外傾して立ち上 がる。	水挽き成形。底部回転糸切り (右)。	砂粒・スコリア に い い 褐 色 普 通	P80 90% P ₁ 付近の覆 土下層
		B 1.3				
		C 4.0				
88	皿 土師質土器	A [8.8]	平底で、やや突出する。体部は 下位に い 稜 を 有 し、 外 傾 し て 立 ち 上 が る。	水挽き成形。底部回転糸切り (右)。	砂粒・スコリア に い い 褐 色 普 通	P81 50% 貯蔵穴内の覆 土
		B 1.6				
		C 4.2				

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
89	球状土錘 土製品	長さ2.2 幅3.0 孔径0.72	19.9	北西部の覆土 DP15
90	砥石 石製品	長さ6.6 幅2.5 厚さ1.7	44.0	流紋岩質凝灰岩 3面に使用痕が認められる。 北西部の覆土 Q2
91	刀子 鉄製品	全長(4.6) 最大幅1.1 最大厚0.3		刀身の一部。 P ₁ 内の覆土 M2
92	不明 鉄製品	全長(5.0) 最大幅0.6 最大厚0.5		棒状を呈する。 貯蔵穴内の覆土 M3

第30号住居跡（第41図）

位置 調査区の西部 B1a₀区を中心に確認された住居跡である。

平面形 南側の2分の1程が調査区外になるが、一辺が2.3m前後の方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向 N-66°-W

壁 残存している壁高は北西壁で10cm、北東壁で14cmを測り、外傾して立ち上がっている。

床 全体に平坦で良く踏み固められ、特に中央部が堅緻である。

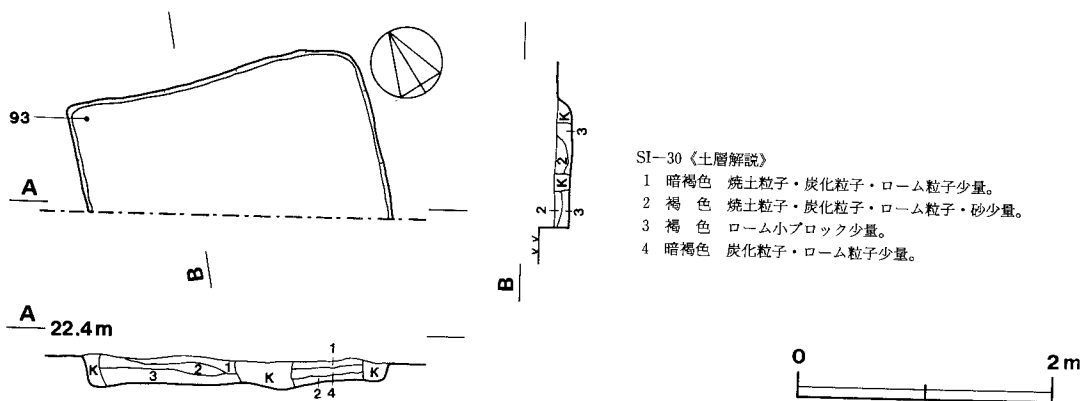
ピット 検出されなかった。

竈 調査した範囲では検出されなかった。

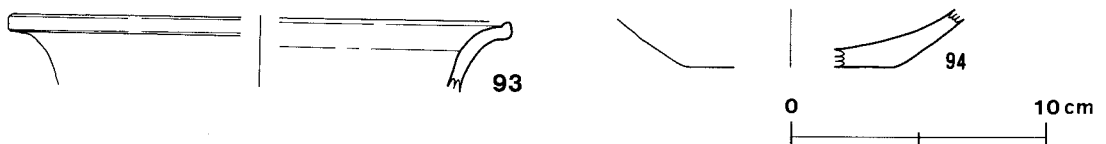
覆土 部分的に攪乱を受けているが、上層は焼土粒子を少量含む暗褐色土が、下層はローム小ブロックを少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器43点（甕2・甕片・坏片）43点のうち内黒土器1点含む。遺物量は少なく、北壁中央部付近に集中している。93の甕の口縁部片が北西コーナー付近の床面から、94の底部片が北東部の覆土から出土している。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったが、南側の2分の1程が調査区外になるため、その部分に付設されている可能性が考えられる。本跡は出土した遺物が少なく時期を特定することはできないが、遺構の形態や遺物から奈良・平安時代に比定される住居跡と思われる。



第41図 第30号住居跡実測図



第42図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 93	甕 土師器	A [26.2] B (3.7)	頸部は強く外反して、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 普通	P84 5% 北西コーナー 付近の床面
94	壺 土師器	B (2.3) C [8.4]	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P85 5% 北東部の覆土

2 竪穴遺構

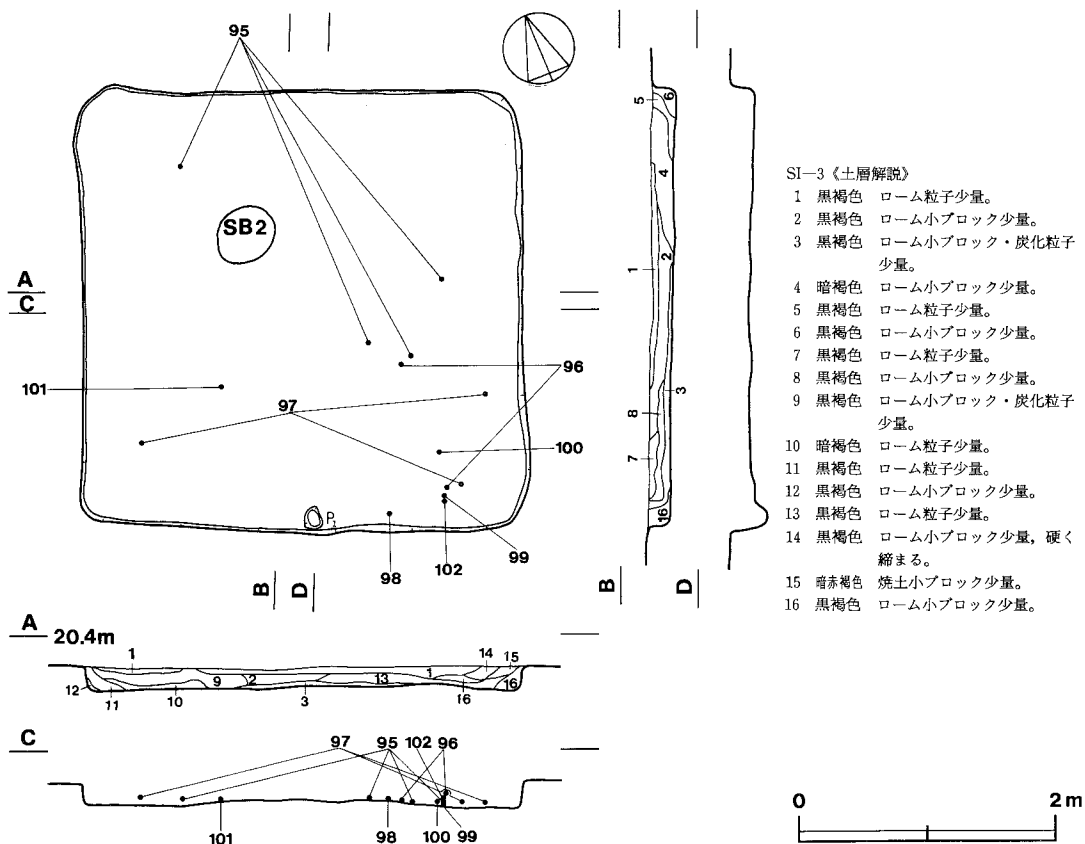
第3号竪穴遺構 (第43図)

位置 調査区の南東部 B3j₆区を中心に確認された遺構である。

重複関係 北西部から南壁中央部にかけて第2号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

平面形 長軸3.50m、短軸3.45mの整った方形を呈している。

主軸方向 N-22°-E



第43図 第3号竪穴遺構実測図

壁 残存している壁高は西壁で17cm, 東壁で21cmを測り, ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ローム混じりの暗褐色土を叩いて貼床としている。全体的に平坦で良く踏み固められ, 中央部付近が特に堅緻である。

ピット 南壁中央部の壁直下に1か所だけ検出されている。P₁は径15cmの円径を呈し, 深さ10cmを測る。

竈 検出されなかった。

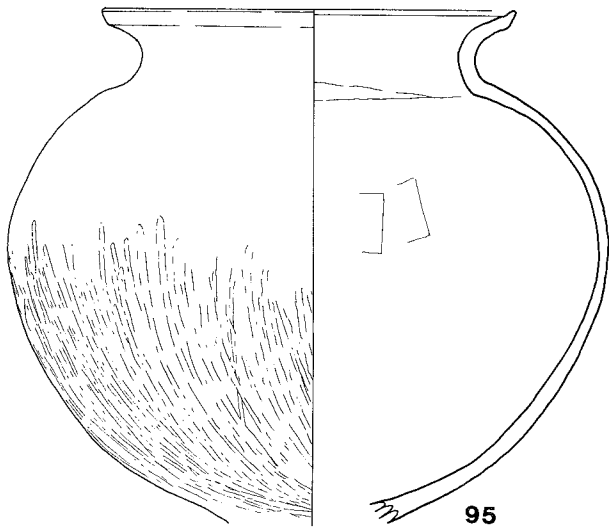
覆土 全体にローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器88点(甕3・鉢1・坏3・甕片・鉢片・坏片), 須恵器2点(坏片), 石製品1点(砥石1)。遺物は中央部から南東コーナーにかけて集中している。95の甕が中央部からやや東壁寄りの床面から潰れた状態で出土している。96の甕・99の坏・102の砥石が南東コーナー付近の覆土下層から, 坏→砥石→甕の順番に3個体重なって出土している。その他, 覆土から鉄滓, 土師質土器片が出土している。

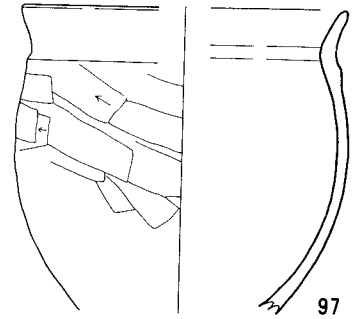
所見 本跡は炉や竈が検出されなかったため, 堅穴遺構として扱った。しかし, 床面の状態や遺物の出土状況から住居跡として使用された可能性も考えられる。本跡は, 出土している遺物から古墳時代後期に比定される遺構と思われる。また, 遺物が集中的に出土している中央部から南東コーナーにかけて, 床面から10cm程浮いた状態で焼土ブロックが数箇所検出されている。

第3号堅穴遺構出土遺物解説表

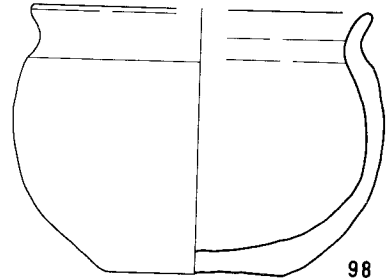
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 95	甕 土師器	A 21.1 B (27.3)	胴部は球状を呈し, 胴部最大径は上位(31.1cm)。頸部は強く屈曲して, 口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面上位丁寧な横位のヘラナデ。胴部外面下位に縦位のヘラ磨き。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 に お い 橙 色 普 通	P7 85% 中央部からやや東壁寄りの床面
96	甕 土師器	B (24.6)	胴部は内彎しながら立ち上がり, 胴部最大径は上位(28.6cm)。	胴部外面上位に横位のヘラナデ。胴部外面下位ヘラ磨き(縦一斜め)。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P8 40% 南東部の覆土下層
97	甕 土師器	A [12.6] B (12.2)	口縁部はやや内傾してから, 丸みをもって外反する。胴部最大径は中位(12.9cm)。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面斜位のヘラナデ。胴部内面ナデ。	砂粒 橙 色 普 通	P10 50% 南東部及び南西部の覆土下層
98	鉢 土師器	A [13.0] B 10.5 C 6.8	平底。体部は球状を呈し, 口縁部との境に稜をなす。口縁部は内傾してから, 丸みをもって外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 不良	P9 45% 南東コーナー付近の床面
99	坏 土師器	A 13.2 B 4.9	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き, 口縁部との境に明瞭な稜をなす。口縁部は直立し, 上半からやや外反する。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P11 100% 南東コーナー付近の覆土下層



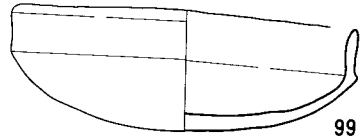
95
S=1/4



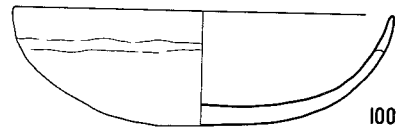
97



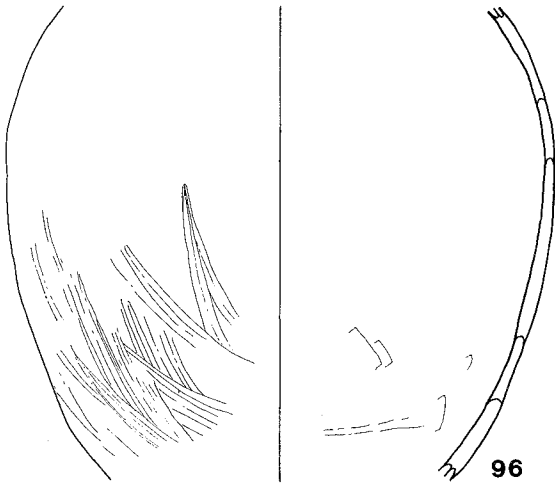
98



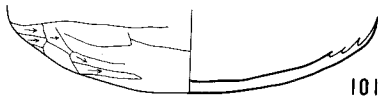
99



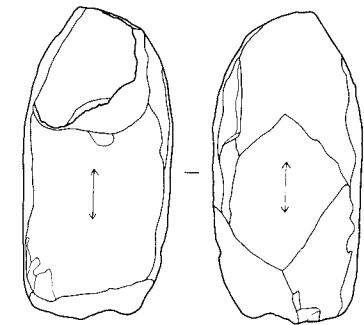
100



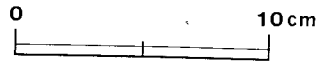
96
S=1/4



101



102
S=1/6

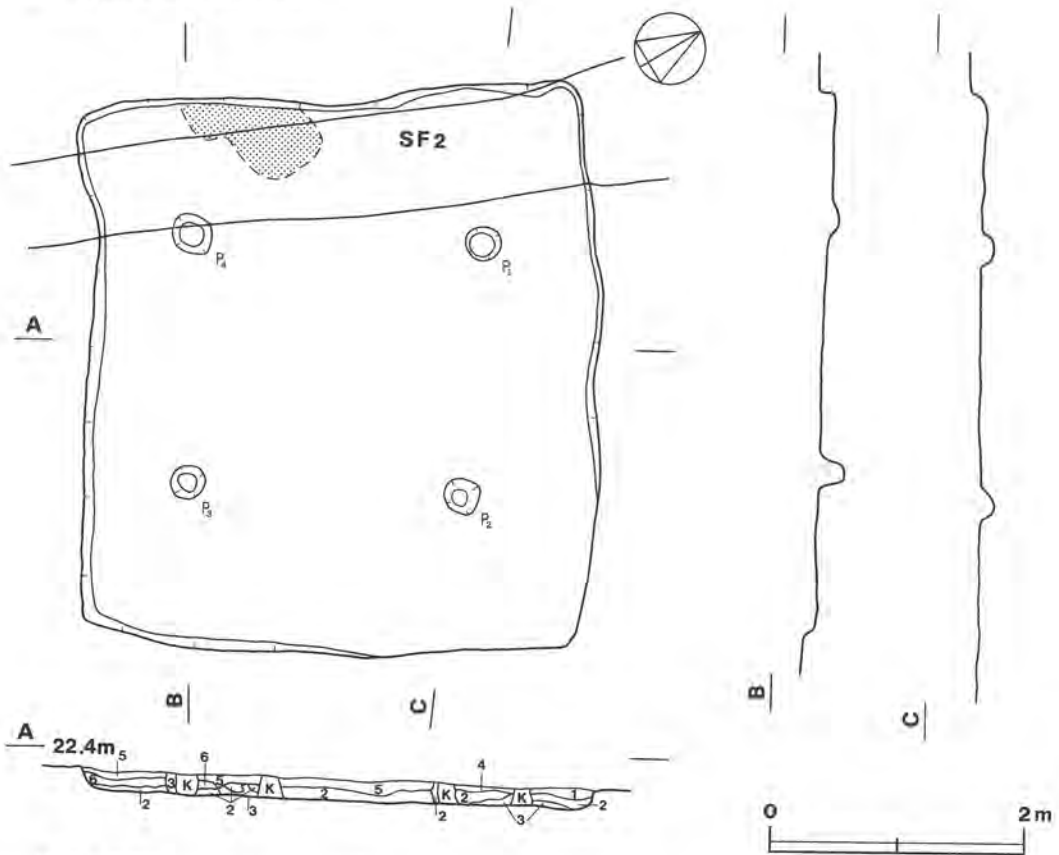


第 44 图 第 3 号竖穴遺構出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 100	坏 土師器	A 15.0 B 4.6	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に不明瞭な稜をなす。口縁部は直立気味に立ち上がる。稜の下に巻き上げ痕残る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。底部内面ナデ。	砂粒 橙色 良好	P12 60% 南東部の覆土 下層
101	坏 土師器	B (3.3)	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に不明瞭な稜をなす。	体部外面へラ削り。体部内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P13 50% 南西部の床面

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
102	砥石 石製品	長さ24.8 幅11.6 厚さ5.7	2240.6	粘板岩 表・裏面に使用痕が認められる。 南東コーナー付近の覆土下層 Q1

第12号竪穴遺構 (第45図)



SI-12《土層解説》

- 1 にぶい褐色 炭化物中量、ローム中ブロック少量。
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。
- 4 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・ローム粒子中量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。

第45図 第12号竪穴遺構実測図

位置 調査区の西部 B2b₃区を中心に確認された遺構である。

重複関係 北コーナー付近から西コーナー付近にかけて第2号道路跡によって掘り込まれている。

平面形 長軸4.50m, 短軸4.03mの長方形を呈している。

主軸方向 N-55°-W

壁 東コーナー付近が攪乱を受けているが, 残存壁は外傾して立ち上がり, 壁高は9~12cmを測る。

床 耕作による畝状の攪乱を受けて, 全体に凹凸状を呈し軟弱である。

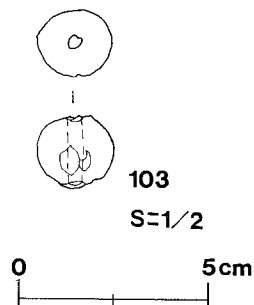
ピット 4か所検出され, 規模や配列からすべて支柱穴と考えられる。P₁~P₄は径26~30cmの円形を呈し, 深さはP₁~P₃が11~20cmでP₄が5cmと全体に浅い。

竈 北西壁中央部からやや西寄りに, 焼土粒子・炭化粒子が確認されたが, 第2号道路跡に掘り込まれたうえに攪乱を受けていることから竈としてはっきり捉えることはできなかった。

覆土 上層はローム粒子中量・焼土粒子を少量含む褐色土が, 下層はローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器69点 (甕片・坏片), 須恵器6点 (坏片), 内耳土器片1点, 土製品1点 (球状土錘1)。ほとんどが小破片で, 図示可能な遺物は認められなかった。土師器の甕の口縁部片は頸部のくびれが強く口縁端部を短くつまみ上げるものである。

所見 本跡は炉や竈が明確に捉えられなかったことや床面の状態から, ここでは竪穴遺構として扱った。また, 本跡は出土した遺物が少なく, 時期を特定することはできなかった。



第46図 第12号竪穴遺構出土遺物実測図

第12号竪穴遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
第46図 103	球状土錘 土製品	長さ1.9 幅2.0 孔径0.4	6.6	東部の覆土 DP4

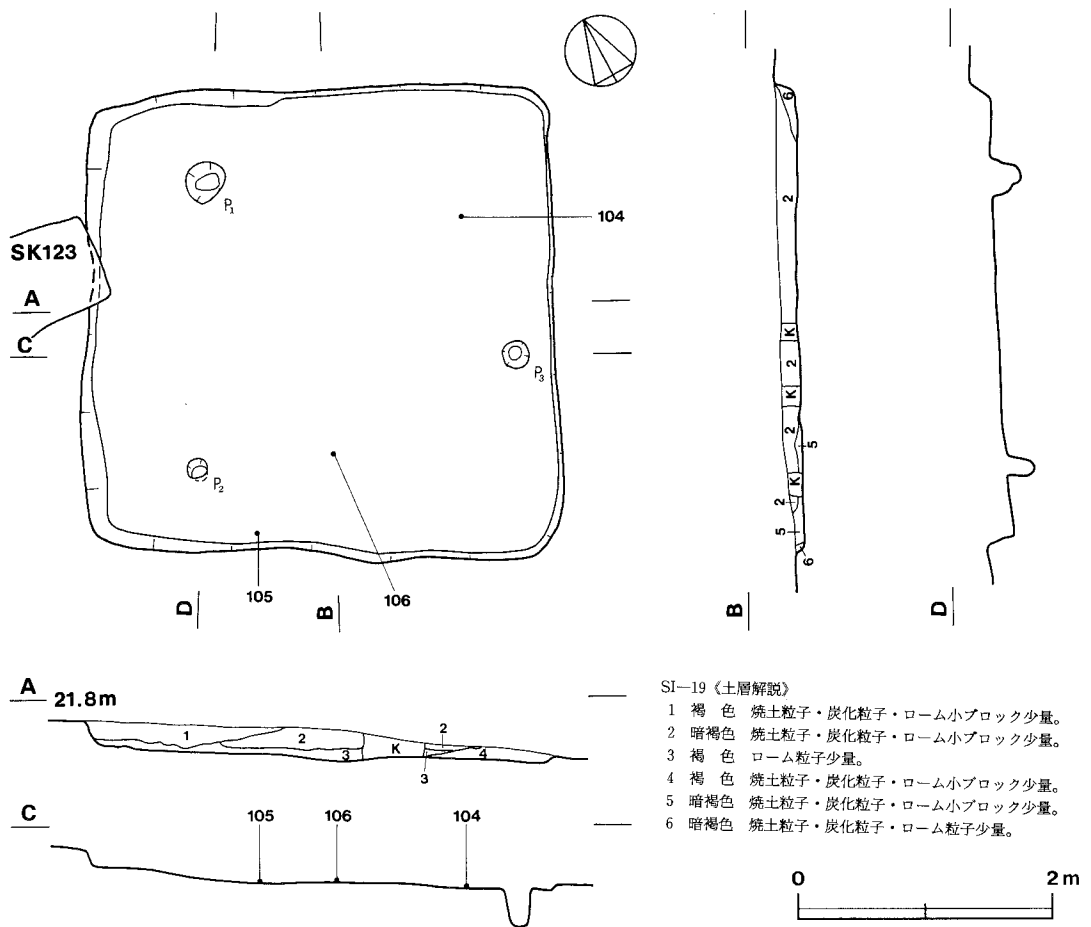
第19号竪穴遺構 (第47図)

位置 調査区の北西部 A2j₇区を中心に確認された遺構である。

重複関係 北西壁中央部付近を第123号土坑によって掘り込まれている。

平面形 長軸3.77m, 短軸3.74mの方形を呈している。

主軸方向 N-60°-W



第 47 図 第19号豎穴遺構実測図

壁 残存している壁高は南西壁で20cm，南東壁で7cmを測り，緩やかに立ち上がっている。

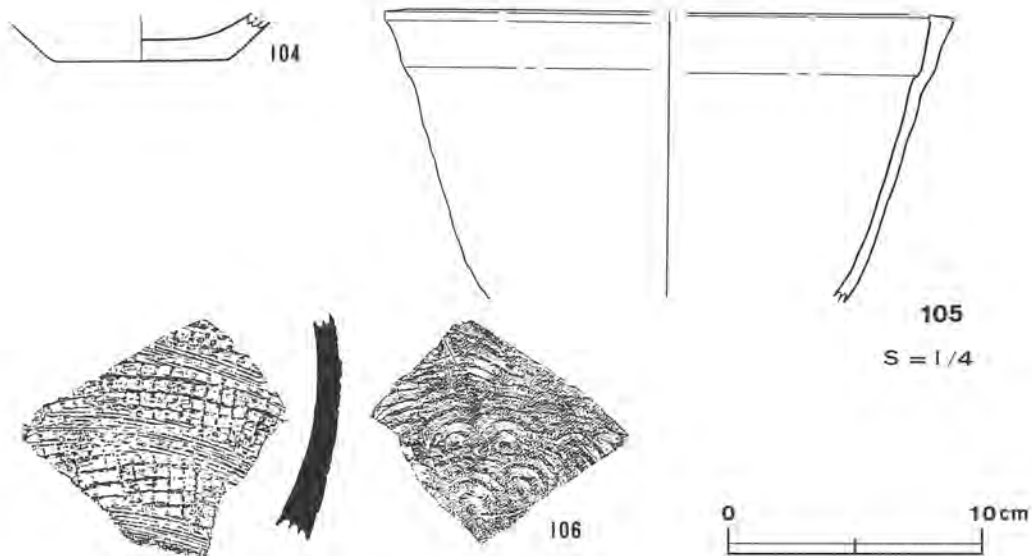
床 北東側から南東側に向かって緩やかに傾斜している。中央部に硬い部分が認められるが，大部分は畝状の攪乱で凹凸状を呈し軟弱である。

ピット 3か所検出され，規模や配列から P_1 と P_2 が支柱穴と考えられる。 P_1 は径30cmの円形を呈し，深さ24cmを測る。 P_2 は径17cmの円形を呈し，ややオーバーハングして22cm掘り込まれている。 P_3 は径22cmの円形を呈し，深さ30cmを測る。

竈 検出されなかった。

覆土 上層にローム小ブロックを少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器83点（甕1・甕片・坏片）83点のうち内黒土器1点含む，須恵器18点（甕1・甕片・坏片・蓋片），陶器1点（碗片），内耳土器片24点（実測1点含む）。104の甕の底部片が北東部の床



第 48 図 第19号竪穴遺構出土遺物実測・拓影図

面から、105の内耳土器が南西壁中央部付近の床面から出土している。北東部の覆土から天目碗の破片が出土している。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったため、竪穴遺構として扱った。しかし、床面の状態や遺物の出土状況等から住居跡の可能性も考えられる。本跡の時期については、出土している遺物にばらつきがみられるため特定することができなかった。

第19号竪穴遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 104	壺 土師器	B (1.8) C 7.0	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面及び底部手持ちヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P55 5% 北東部の床面
105	内耳土器	A [29.8] B (15.2)	体部下半は内彎気味に、それ以上は直線的に外傾して立ち上がる。頸部は外反し、内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に鍋墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 灰赤色 普通	P56 10% 南西壁中央部 付近の床面
106	壺 須恵器		壺の胴部片。	外面格子目叩き後三段の横位のカキ目。内面当て具による同心円文。	砂粒 灰色 普通	TP33 5% 南西壁中央部 付近の床面

第29号竪穴遺構 (第49図)

位置 調査区の西部 B2a₃区を中心に確認された遺構である。

重複関係 中央部から西側が南北に延びる第2号道路跡によって掘り込まれている。

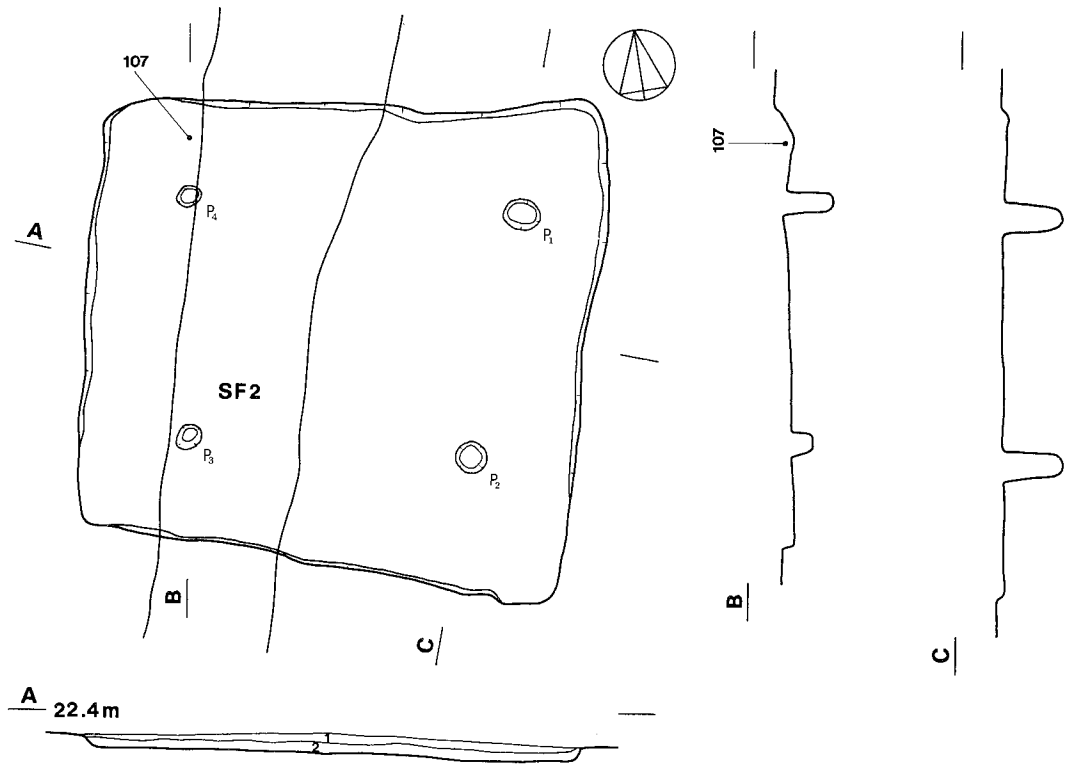
平面形 長軸3.89m・短軸3.88mを測り、西辺が他辺より60cm程短いため、少し歪んだ方形形状を呈している。

主軸方向 N-70°-W

壁 残存している壁高は5~10cmを測り、緩やかに立ち上がっている。

床 全体に平坦で良く踏み固められており、特に中央部から南側が堅緻である。

ピット 4か所検出され、規模や配列からすべて支柱穴と考えられる。P₁は長径30cm・短径24cmの楕円形を呈し、深さ47cmを測る。P₂は径25cmの円形を呈し、深さ46cmを測る。P₃は長径23cm・短径18cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。P₄は長径20cm・短径17cmの楕円形を呈し、深さ39cmを



SI-29《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 2 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。

第49図 第29号竪穴遺構実測図

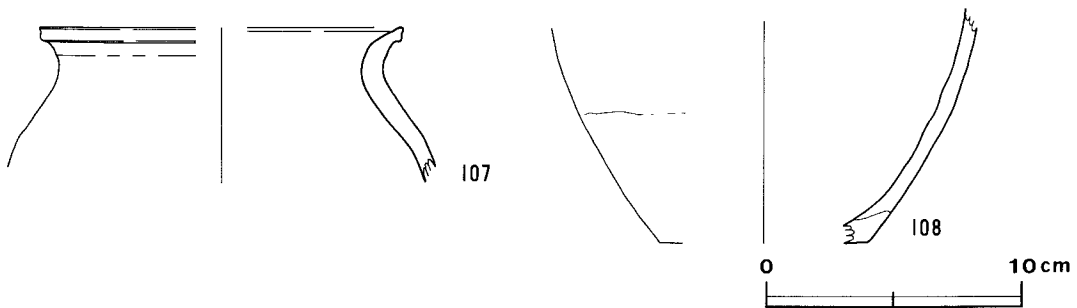
測る。

竈 検出されなかった。

覆土 全体にローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器81点（甕・甕片・坏片）81点のうち内黒土器1点含む、須恵器3点（甕片）。遺物量は少なく、土師器のほとんどが甕の胴部片である。107の甕の口縁部片が北西コーナー付近の床面直上から、108の甕の底部片が北西部の覆土から出土している。

所見 本跡は炉や竈が検出されなかったため、竪穴遺構として扱った。しかし、遺構の規模や床面の状態、さらに支柱穴の規模や配列から住居跡の可能性も考えられる。本跡は、出土した遺物から奈良・平安時代に比定される遺構と思われる。



第 50 図 第29号竪穴遺構出土遺物実測図

第29号竪穴遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 107	甕 土師器	A [14.2] B (6.1)	頸部は肥厚し、丸みをもって外反する。口縁端部は外上方へわずかにつまみ上げられる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 82 10% 北西コーナー付近の床面直上
108	甕 土師器	B (9.3) C [8.2]	平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	胴部外面中位ナデ、下位以下横位の手持ちヘラ削り。胴部内面ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P 83 10% 北西部の覆土

第31号竪穴遺構（第51図）

位置 調査区の北西部 A2h₂区を中心に確認された遺構である。

平面形 削平されており、形状や規模等の詳細は不明である。

壁 床面が露出して検出され、壁の立ち上がりは認められない。

床 平坦なロームで、北東部に硬く踏み固められた部分が検出されている。南西部の床面が1m四方の範囲で焼けており、焼土粒子が検出されている。

ピット 3か所検出されたが、規模や配列が不規則で支柱穴として捉えることはできなかった。P₁

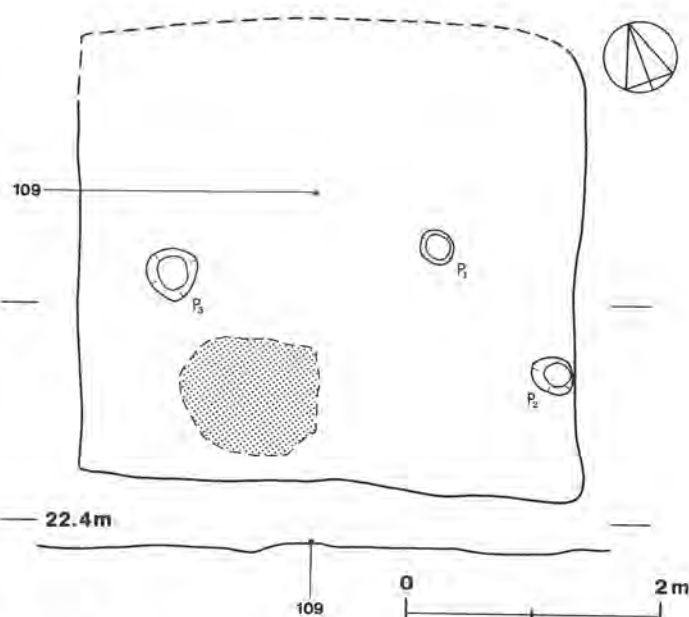
は径30cmの円形を呈し、深さ49cmを測る。P₂は径31cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。P₃は径42cmの円形を呈し、深さ33cmを測る。

竈 検出されなかった。

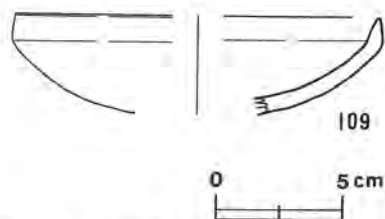
覆土 削平されており、土層観察用ベルトを設定することができなかった。

遺物 土師器60点（坏1・甕片・坏片）。遺物量は少なく、実測可能な遺物は中央部付近の床面から出土した109の坏1点だけである。

所見 本跡は住居跡の可能性も考えられるが、大部分が削平されており遺構の規模や炉・竈を捉えることはできなかったため、竪穴遺構として扱った。本跡は、出土した遺物から古墳時代後期に比定される遺構と思われる。



第51図 第31号竪穴遺構実測図



第52図 第31号竪穴遺構出土遺物実測図

第31号竪穴遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 109	坏 土師器	A [14.3] B (3.9)	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に におい稜をなす。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面横位のヘラ削り後ナデ、内面 ナデ。	砂粒 におい褐色 普通	P86 40% 中央部付近の 床面

3 掘立柱建物跡

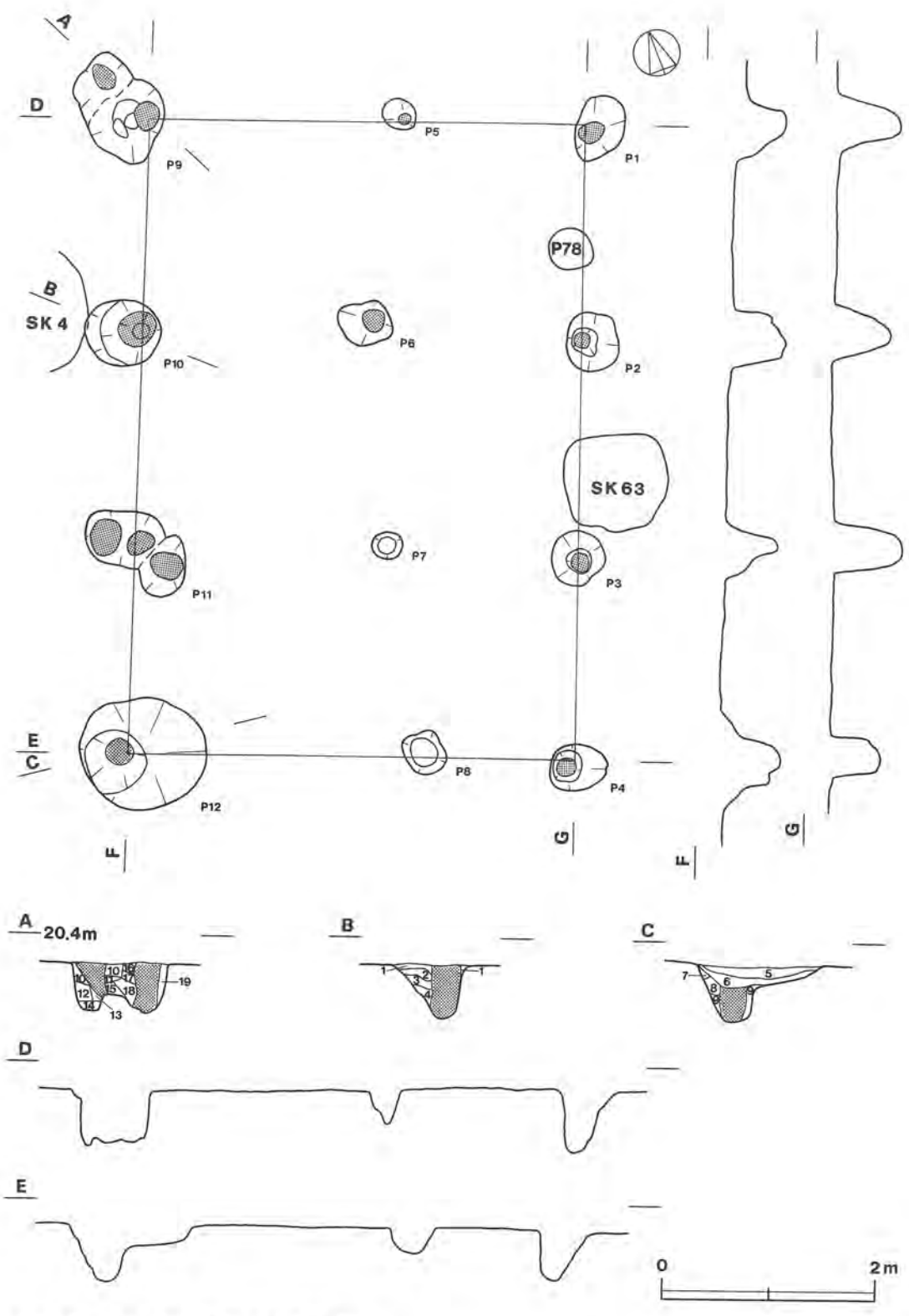
第1号掘立柱建物跡（第53図）

位置 調査区の東部 B3e₄区を中心に確認された建物跡である。

重複関係 第4号土坑・第63号土坑・P78と重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形 3間（6.03m）×2間（北側4.08m・南側4.20m）で、南北棟の総柱の可能性のある建物である。

長軸方向 N-23°-E



第 53 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図

SB-1《土層解説》

1 褐色	ローム小ブロック・粘土少量。	10 暗褐色	ローム小ブロック少量。
2 黒褐色	ローム小ブロック・粘土少量。	11 褐色	ローム小ブロック少量。
3 黒褐色	炭化粒子・ローム小ブロック・粘土少量。	12 黒褐色	ローム粒子・粘土少量。
4 褐色	ローム小ブロック中量。	13 暗褐色	ローム粒子少量。
5 黒褐色	ローム粒子少量。	14 暗褐色	ローム粒子・粘土少量。
6 暗褐色	ローム小ブロック少量。	15 褐色	ローム粒子中量。
7 褐色	ローム小ブロック中量。	16 褐色	ローム粒子・粘土少量，硬く締まる。
8 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。	17 黒褐色	ローム粒子少量。
9 黄褐色	粘土中量，ローム粒子少量。	18 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土少量。
		19 褐色	ローム小ブロック少量，硬く締まる。

柱間寸法 桁行は1.89～2.09m。梁行は西間で2.13～2.80m，東間で1.40～2.00mと西間が広く，特に南妻の西間が2.80mと広がっている。

柱穴掘方 P₁ (61×45cm, -57cm), P₂ (55×47cm, -54cm), P₃ (52×49cm, -64cm), P₄ (53×44cm, -46cm), P₅ (34×28cm, -33cm), P₆ (47×39cm, -37cm), P₇ (30×25cm, -22cm), P₈ (38×35cm, -23cm), P₉ (80×70cm, -46cm), P₁₀ (73×62cm, -50cm), P₁₁ (76×54cm, -48cm), P₁₂ (118×106cm, -55cm)。P₇とP₈を除いて，いずれも柱痕跡が確認されている。

掘方内覆土 粘土を少量含む黒褐色土とローム小ブロックを少量含む褐色土が互層をなして硬く締まっている。

遺物 出土していない。

第2号掘立柱建物跡 (第54・55図)

位置 調査区の南東部 B3i₆区を中心に確認され，本跡の東側5m程に第3号掘立柱建物跡が，南側2.5mに第4号掘立柱建物跡が位置している。

重複関係 P₄が第3号竪穴遺構，P₈が第4号住居跡と重複し，本跡のほうが新しい。

平面形 3間 (6.14m)×2間 (4.38m) で，南北棟の総柱の建物である。

長軸方向 N-5°-E

柱間寸法 桁行1.99～2.14m，梁行2.08～2.31m。

柱穴掘方 P₁ (40×35cm, -68cm), P₂ (52×46cm, -41cm), P₃ (39×37cm, -50cm), P₄ (50×43cm, -40cm), P₅ (50×40cm, -45cm), P₆ (37×36cm, -17cm), P₇ (50×41cm, -51cm), P₈ (45×43cm, -35cm), P₉ (44×40cm, -42cm), P₁₀ (35×32cm, -52cm), P₁₁ (42×38cm, -42cm)。P₁・P₂・P₄・P₅・P₉・P₁₁で柱痕跡が確認されている。

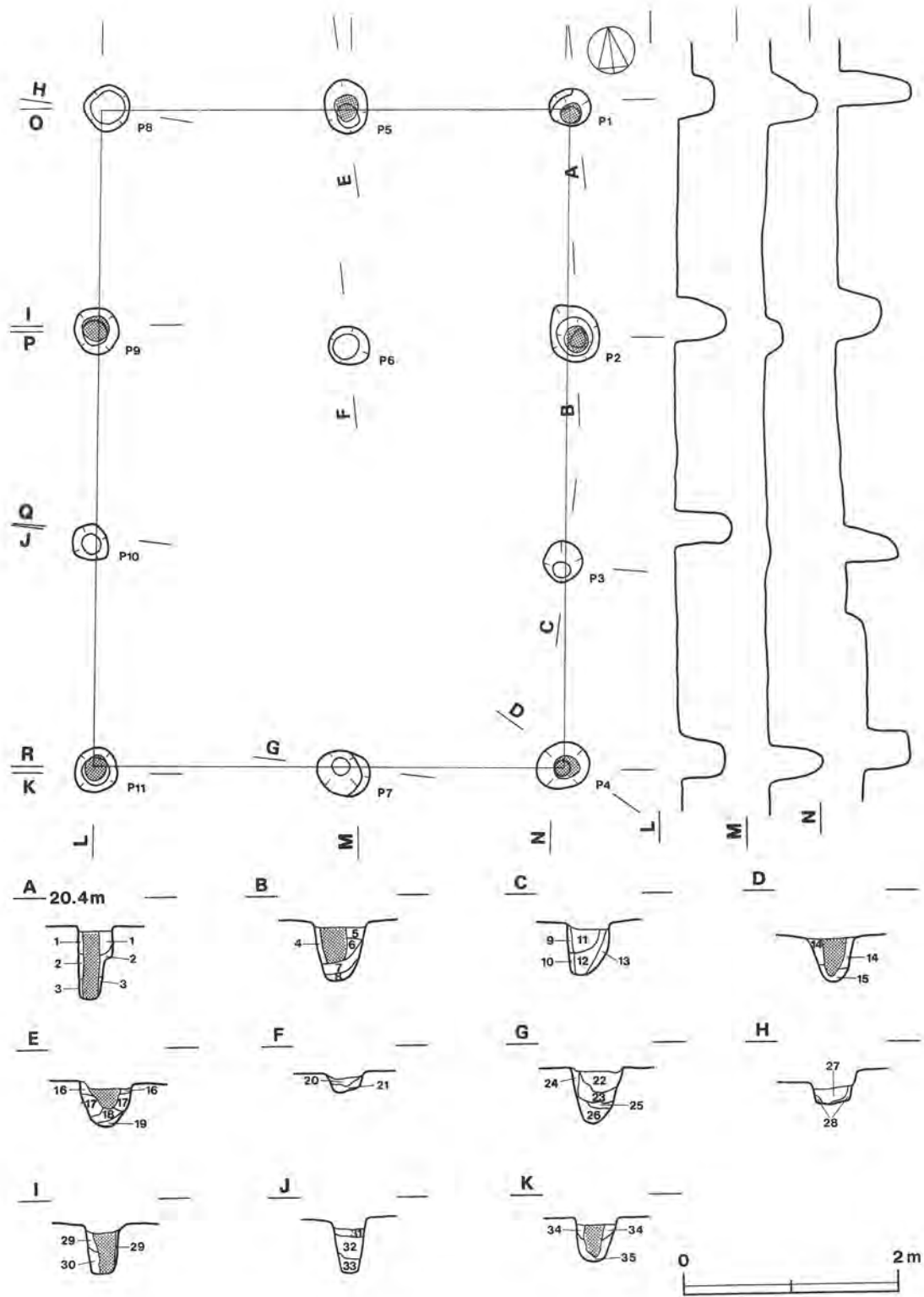
掘方内覆土 ローム小ブロックや粘土を含む黒褐色土で，いずれも硬く締まっている。

遺物 土師器20点 (甕片・坏片)，須恵器4点 (甕片・坏片・蓋片)。遺物はいずれも小破片で，図示可能な遺物は認められなかった。

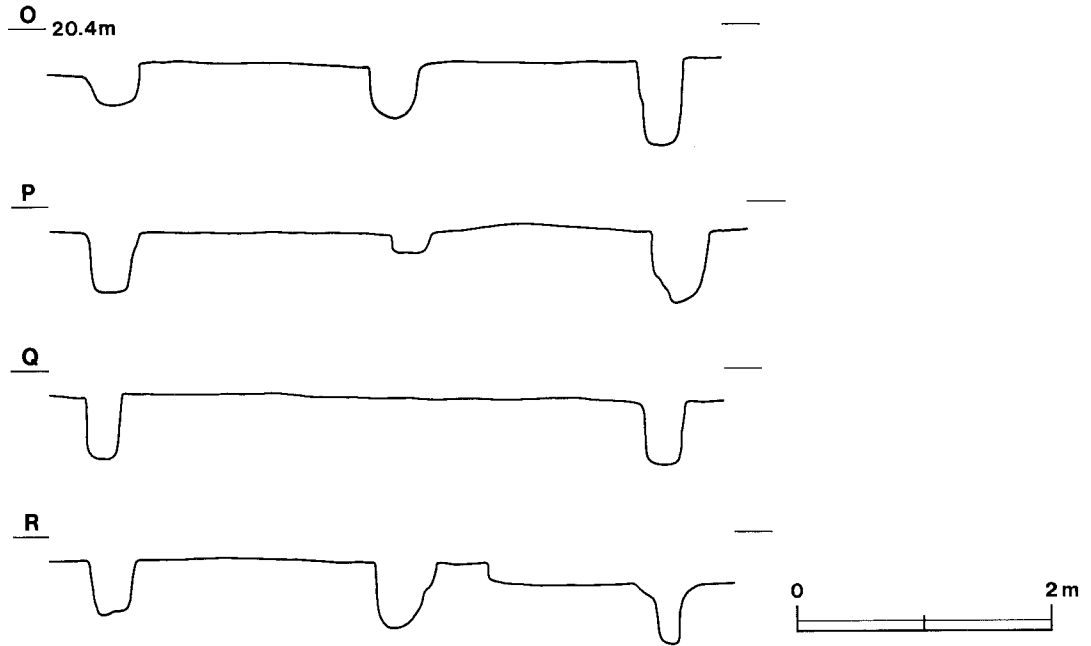
第3号掘立柱建物跡 (第56・57図)

位置 調査区の南東部 C3a₈区を中心に確認された建物跡である。

重複関係 本跡は第2号住居跡と重複し，本跡のほうが新しい。



第 54 图 第 2 号掘立柱建物跡実測图(1)



SB-2《土層解説》

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土少量。 | 18 黒褐色 炭化粒子・ローム少ブロック少量, 硬く締まる。 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。 | 19 黒褐色 ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。 | 20 黒褐色 ローム粒子少量。 |
| 4 褐色 ローム小ブロック中量, 硬く締まる。 | 21 褐色 ローム小ブロック・粘土中量。 |
| 5 明褐色 ローム小ブロック中量。 | 22 黒褐色 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量。 |
| 6 黒褐色 ローム粒子・粘土少量, 硬く締まる。 | 23 黒褐色 ローム粒子少量。 |
| 7 黒褐色 ローム粒子少量, 硬く締まる。 | 24 黒褐色 ローム小ブロック少量。 |
| 8 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。 | 25 黒褐色 ローム粒子極少量, 硬く締まる。 |
| 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 26 黒褐色 ローム粒子・粘土少量, 硬く締まる。 |
| 10 黒褐色 ローム粒子極少量。 | 27 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 11 黒褐色 ローム粒子少量。 | 28 褐色 ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 12 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。 | 29 黒褐色 ローム中ブロック少量, 硬く締まる。 |
| 13 暗褐色 ローム粒子少量。 | 30 黒褐色 ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 14 黒褐色 ローム粒子少量。 | 31 黒褐色 ローム粒子少量。 |
| 15 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, 硬く締まる。 | 32 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 16 黒褐色 ローム粒子少量。 | 33 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 17 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。 | 34 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| | 35 黒褐色 ローム小ブロック少量。 |

第 55 図 第 2 号掘立柱建物跡実測図(2)

平面形 3間 (7.33m)×2間 (4.59m) の南北棟の建物である。

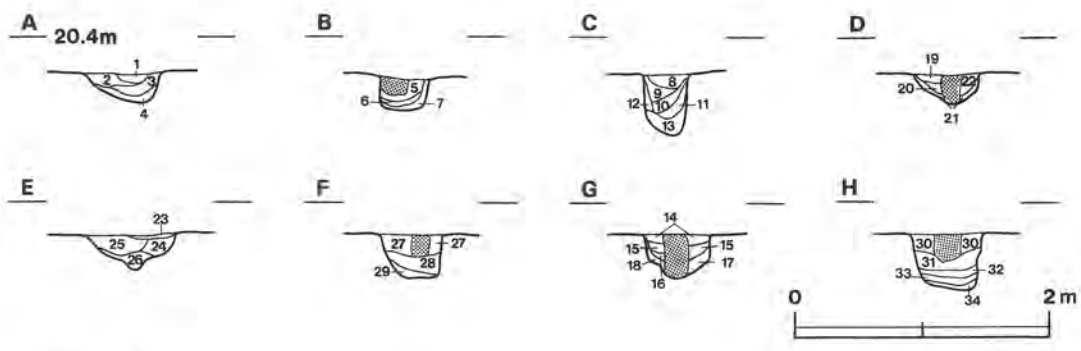
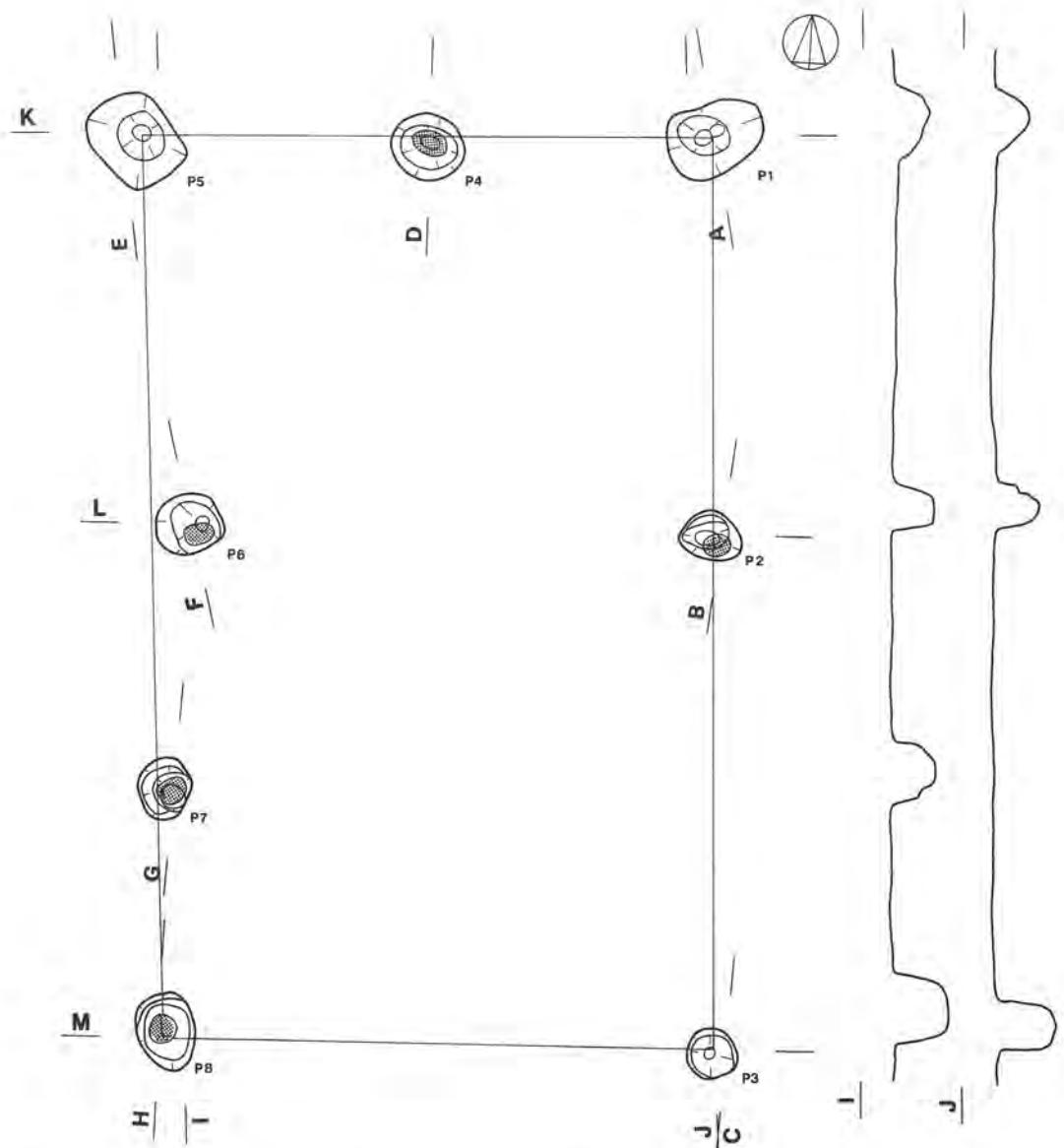
長軸方向 N-5°-W

柱間寸法 桁行は北から1間が3.30mと広く, 他は1.91~2.08mである。梁行は北妻が2.29mで, 南妻は中間の柱穴が検出されず不明である。

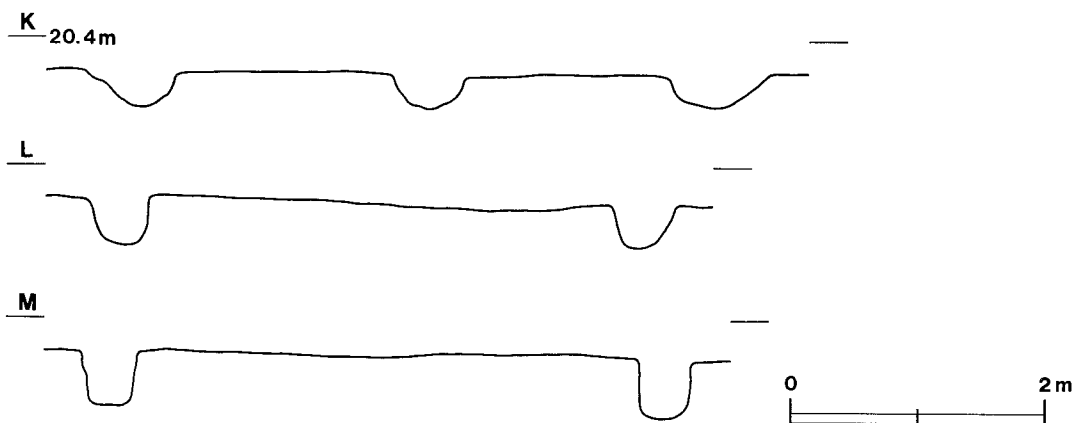
柱穴掘方 P₁ (80×56cm, -26cm), P₂ (50×40cm, -36cm), P₃ (40×39cm, -47cm), P₄ (60×55cm, -27cm), P₅ (77×60cm, -28cm), P₆ (55×49cm, -37cm), P₇ (50×44cm, -34cm), P₈ (63×47cm, -43cm)。P₂・P₄・P₆・P₇・P₈で柱痕跡が確認されている。

掘方内覆土 ローム小ブロックを含む褐色土と黒褐色土が互層をなして硬く締まっている。

遺物 土師器14点 (甕片・坏片)。いずれも小破片で, 図示可能な遺物は認められなかった。



第 56 图 第 3 号掘立柱建物跡実測図(1)



SB-3《土層解説》

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量。 | 18 褐色 | ローム小ブロック少量。 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック少量。 | 19 褐色 | ローム小ブロック少量。 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 20 褐色 | ローム粒子少量。 |
| 4 褐色 | ローム小ブロック中量。 | 21 褐色 | ローム小ブロック少量。 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量，硬く締まる。 | 22 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量。 | 23 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 7 暗褐色 | ローム小ブロック少量。 | 24 褐色 | ローム小ブロック少量。 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 25 黒褐色 | ローム粒子極少量。 |
| 9 暗褐色 | ローム小ブロック少量。 | 26 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子少量。 | 27 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 11 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 28 黒褐色 | ローム粒子極少量。 |
| 12 褐色 | ローム小ブロック少量。 | 29 褐色 | ローム粒子少量。 |
| 13 明褐色 | ローム粒子・粘土少量，硬く締まる。 | 30 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 14 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 31 黒褐色 | ローム小ブロック少量。 |
| 15 黒褐色 | ローム小ブロック少量。 | 32 暗褐色 | ローム小ブロック少量，硬く締まる。 |
| 16 褐色 | ローム小ブロック少量。 | 33 暗褐色 | ローム粒子少量。 |
| 17 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 34 褐色 | ローム小ブロック少量。 |

第 57 図 第 3 号掘立柱建物跡実測図(2)

第 4 号掘立柱建物跡 (第58図)

位置 調査区の南東部 C3a₅区を中心に確認され，本跡の東側5m程に第3号掘立柱建物跡が，北側2.5m程に第2号掘立柱建物跡が位置している。

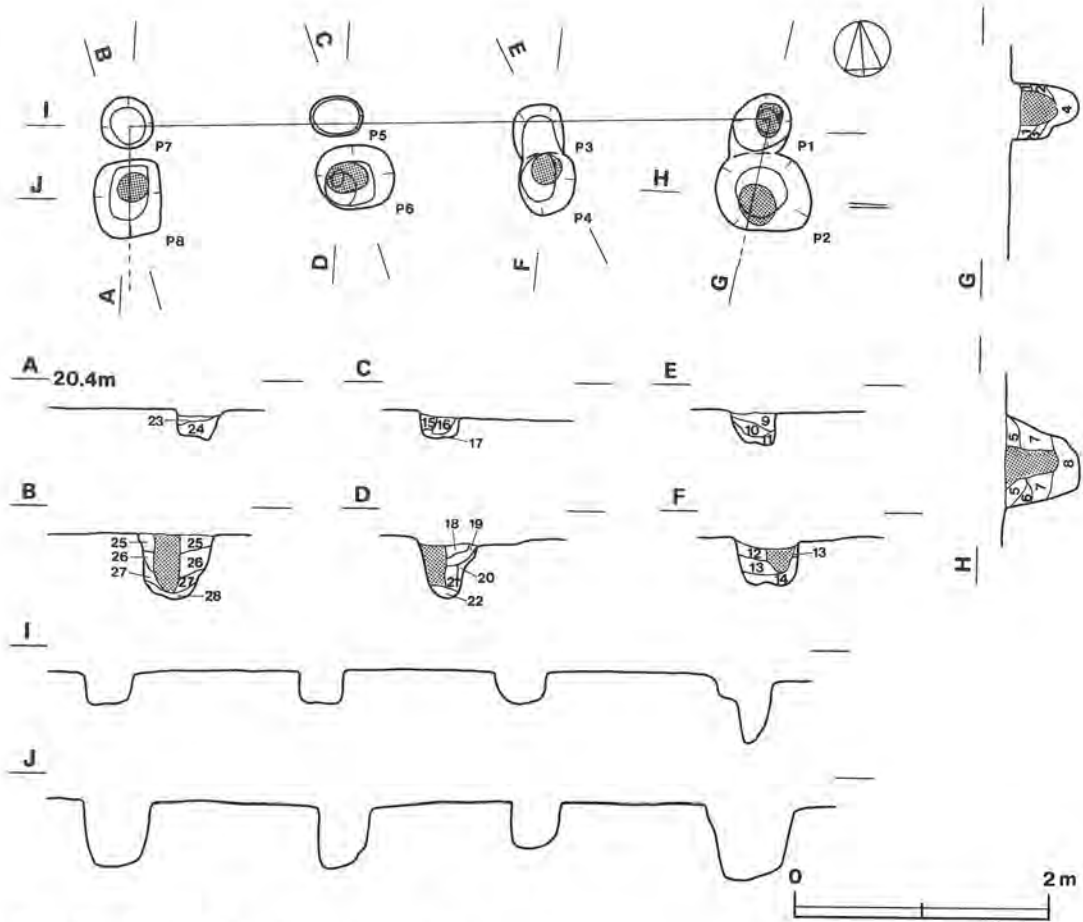
平面形 検出されたのは3間(4.94m)だけで，他は攪乱を受けていることや調査区外になることから明確にできなかった。

柱間寸法 1.60~1.70m。

柱穴掘方 柱穴はそれぞれ大小が対になって，計8か所検出されている。P₁(51×40cm，-50cm)，P₂(75×62cm，-58cm)，P₃(40×36cm，-24cm)，P₄(48×44cm，-37cm)，P₅(40×32cm，-25cm)，P₆(62×51cm，-48cm)，P₇(40×40cm，-25cm)，P₈(62×54cm，-51cm)。P₁・P₂・P₄・P₆・P₈で柱痕跡が確認されている。

掘方内覆土 ローム小ブロックを含む褐色土と黒褐色土が互層をなして硬く締まっている。

遺物 出土していない。



第58図 第4号掘立柱建物跡実測図

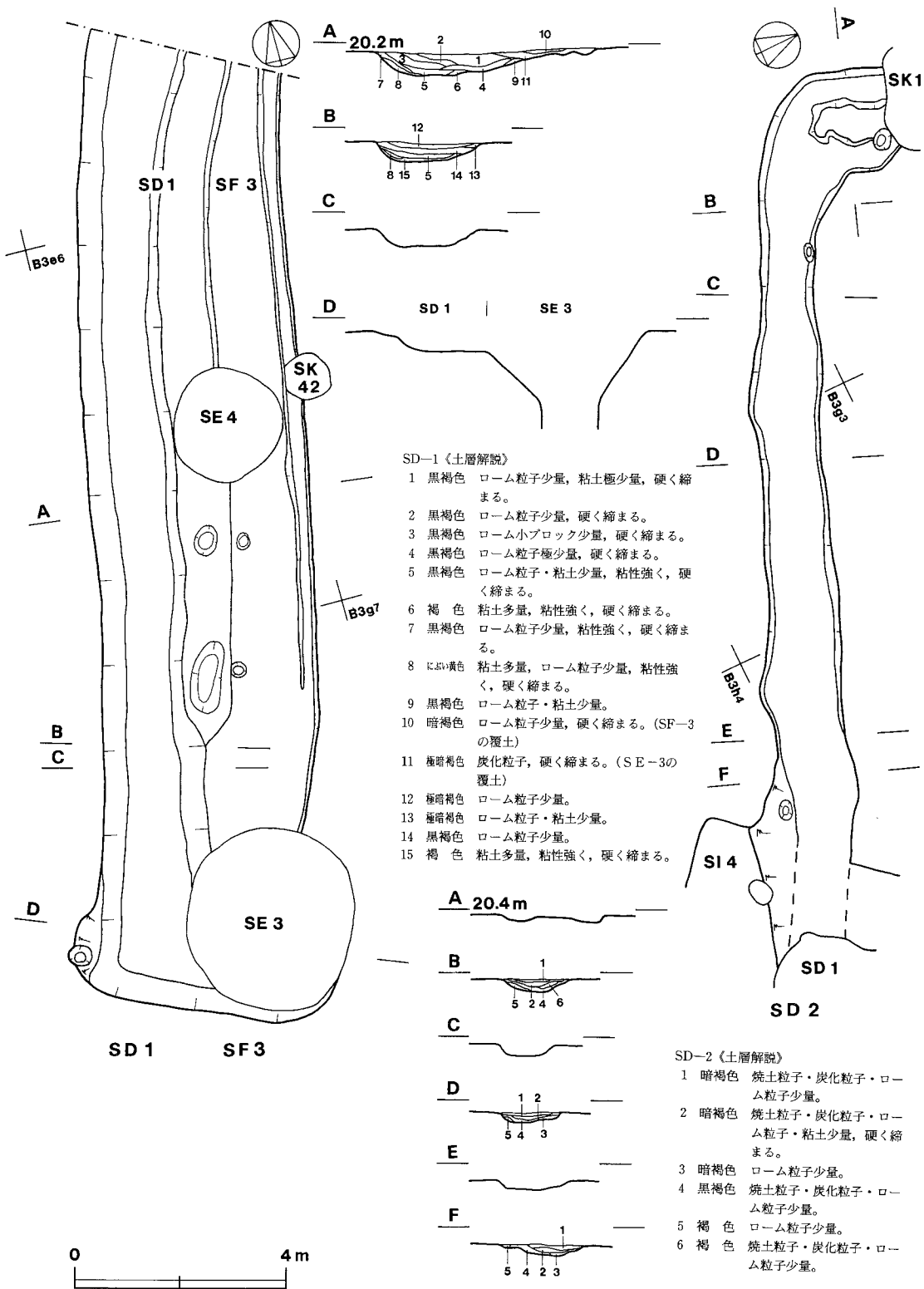
SB-4《土層解説》

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 18 明褐色 | 粘土中量, ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック少量。 | 19 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 20 黒褐色 | ローム粒子中量, 硬く締まる。 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子極少量, 硬く締まる。 | 21 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・粘土少量, 硬く締まる。 | 22 黒褐色 | ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック少量。 | 23 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量。 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子極少量, 硬く締まる。 | 24 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 8 暗褐色 | ローム小ブロック少量, 硬く締まる。 | 25 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 9 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。 | 26 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量。 |
| 10 黒褐色 | ローム小ブロック少量。 | 27 黒褐色 | ローム粒子少量。 |
| 11 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量, 硬く締まる。 | 28 明褐色 | 粘土中量, ローム粒子少量, 硬く締まる。 |
| 12 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | | |
| 13 黒褐色 | ローム粒子少量。 | | |
| 14 褐色 | ローム小ブロック・粘土少量, 硬く締まる。 | | |
| 15 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | | |
| 16 黒褐色 | ローム小ブロック少量, 硬く締まる。 | | |
| 17 黒褐色 | ローム粒子少量。 | | |

4 溝

第1号溝 (第59図)

位置 調査区の東部 B3区に確認された溝で, 第3号道路跡・第3号井戸と同時期に存在していた遺



第59図 第1・2号溝，第3号道路跡実測図

構と考えられる。

重複関係 第4号・第17号住居跡を掘り込んで構築され、第4号井戸によって掘り込まれている。B3h₅区で第2号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

規模 全長18.31mで、上幅1.53～1.87m、下幅0.83～1.31m、深さ0.34～0.51mを測る。

方向 ほぼ南北（N-15°-E）へ直線的に延びて、溝の北端はさらに調査区外へ延びている。

形状 壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈している。B3g₆区から北側では、溝の東側に幅0.81～1.04mのテラス状の平坦な部分が認められ、断面形は「┌┐」状を呈している。

覆土 全体に硬く締まり、上層はローム粒子を少量含む黒褐色土、下層は粘土を多く含む褐色土が自然堆積している。

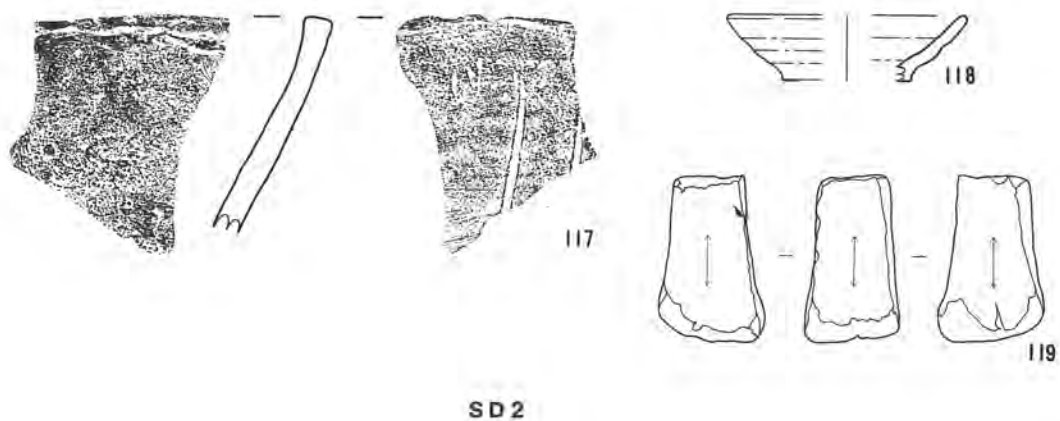
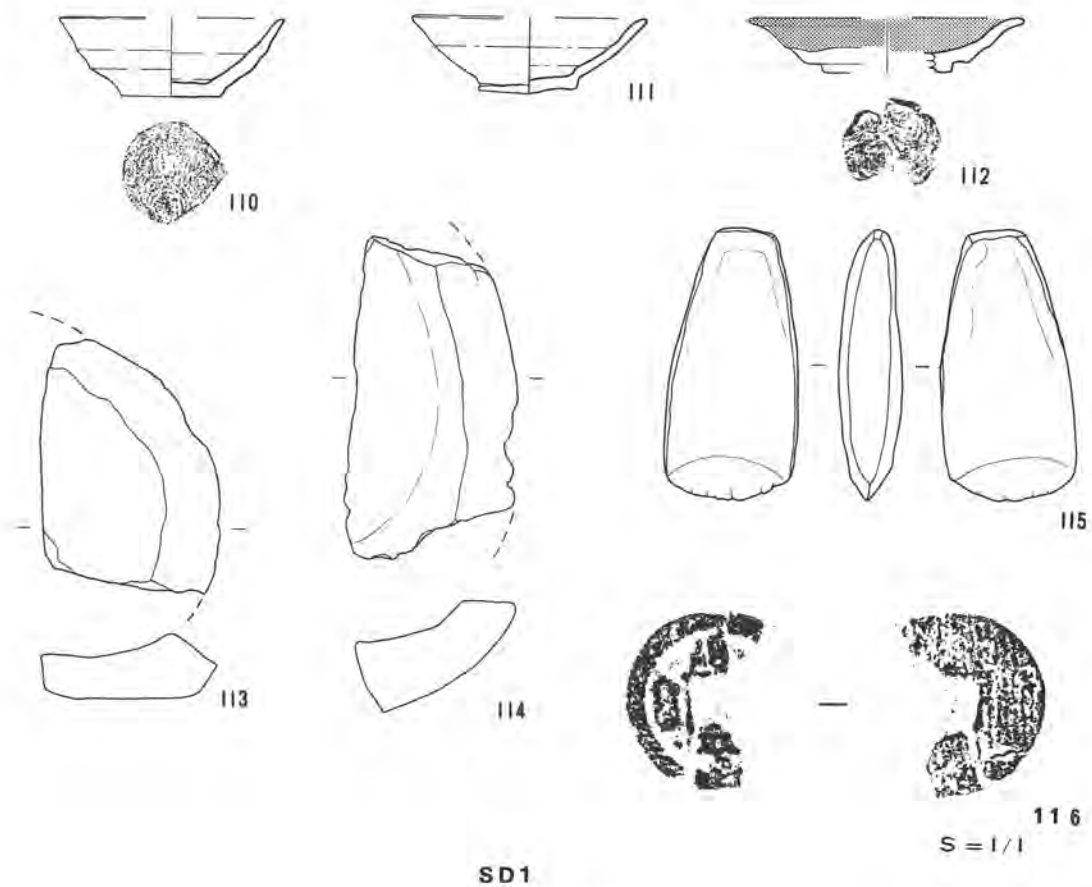
遺物 土師器112点（甕片・坏片）、須恵器43点（甕片・壺片・坏片・高台付坏片・蓋片）、土師質土器11点（皿2・皿片）、陶器17点（皿1・甕片）、内耳土器片20点、縄文式土器片7点、石器2点（磨製石斧1・石皿1）、石製品1点（石鉢1）、古銭1点。110・112の皿が中央部付近の覆土から、111の皿が北部の覆土から、113の石鉢の底部片が南部の覆土から、116の古銭（摩滅が著しく判読不明）が中央部付近の覆土から出土している。

第1号溝出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 110	皿 土師質土器	A [8.8]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、中位に二か所にふい稜を有する。内面の底部周縁は、浅い溝が周回している。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒・スコリアにふい黄褐色不良	P107 50% 中央部付近の覆土
		B 3.1				
		C 3.8				
111	皿 土師質土器	A [9.1]	平底で、やや突出する。体部は直線的に外傾して立ち上がる。内面の底部周縁は、浅い溝が周回している。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒 淡褐色 不良	P108 60% 北部の覆土
		B 3.1				
		C 3.8				
112	皿 陶器	A [10.2]	低い削り出し高台。体部は外傾して立ち上がり、中位にふい稜を有する。口縁部は外反して口唇部を丸くおさめる。体部外面下半以下露胎。内面に細かい貫入が見られる。	水挽き成形。高台削り出し(右)。	(胎土)淡褐色 (釉)オリーブ灰色 (焼成)良好	P109 20% 中央部付近の覆土
		B 2.2				
		C [5.0]				
113	鉢 石製品	B (2.7)	平底。体部は外傾して立ち上がる。		砂岩	Q6 5% 覆土
		C [17.0]				

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
114	石皿 石製品	高さ(4.5) 内面は平滑である。		安山岩 北側の覆土下層 Q12
115	磨製石斧 石器	長さ10.8 幅5.2 厚さ2.6	255.8	輝緑岩 定角式磨製石斧。 南側の床面直上 Q11

図版番号	名称	初鋳年(西暦)	備考
116	〇〇〇寶	—	中央部付近の覆土 M16



第60图 第1・2号溝出土遺物実測・拓影図

第2号溝（第59図）

位置 調査区の東部 B3区に確認された溝で、北側2m程に第1号井戸、東側5m程に第3号井戸が位置している。

重複関係 B3h₄区で第4号住居跡を掘り込んで構築されている。B3h₅区で第1号溝、B3f₁区で第71号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模 全長16.4mで、上幅0.98～2.10m、下幅0.71～1.85m、深さ0.13～0.23mを測る。

方向 第71号土坑との重複部 B3f₁区から南西方向（N-165°-E）へ8m程延びた所で、南東方向（N-112°-E）へほぼ直角に屈曲し、直線的に延びて第4号住居跡・第1号溝に達している。

形状 壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈している。底面は凹凸が激しく、B3f₁区付近が高く（標高20.180m）、南東部へ向かうに従い低くなり、B3h₄区付近が最も低い（標高19.865m）。

覆土 全体にローム粒子や粘土を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器31点（甕片・坏片）、須恵器4点（甕片・蓋片）、土師質土器1点（皿1）、陶器2点（甕片）、石製品2点（砥石1・石鉢1）、内耳土器片26点、播鉢片1点。117の播鉢と118の皿が B3g₂区の覆土から出土している。

第2号溝出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 117	播鉢 陶器		体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。内面に二本の溝が縦位に施されている。外面に煤附着。	体部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒 灰赤色 普通	TP66 5% B3g ₂ 区の覆土
118	皿 土師質土器	A [9.4] B 2.6 C [5.0]	平底。体部は外傾して立ち上がり、中位にふい稜を有する。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 橙色 良好	P110 20% B3g ₂ 区の覆土

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
119	砥石 石製品	長さ(6.6) 幅4.2 厚さ3.8	(136.0)	流紋岩質凝灰岩 全面に使用痕が認められる。 覆土 Q7

第3号溝（第61図）

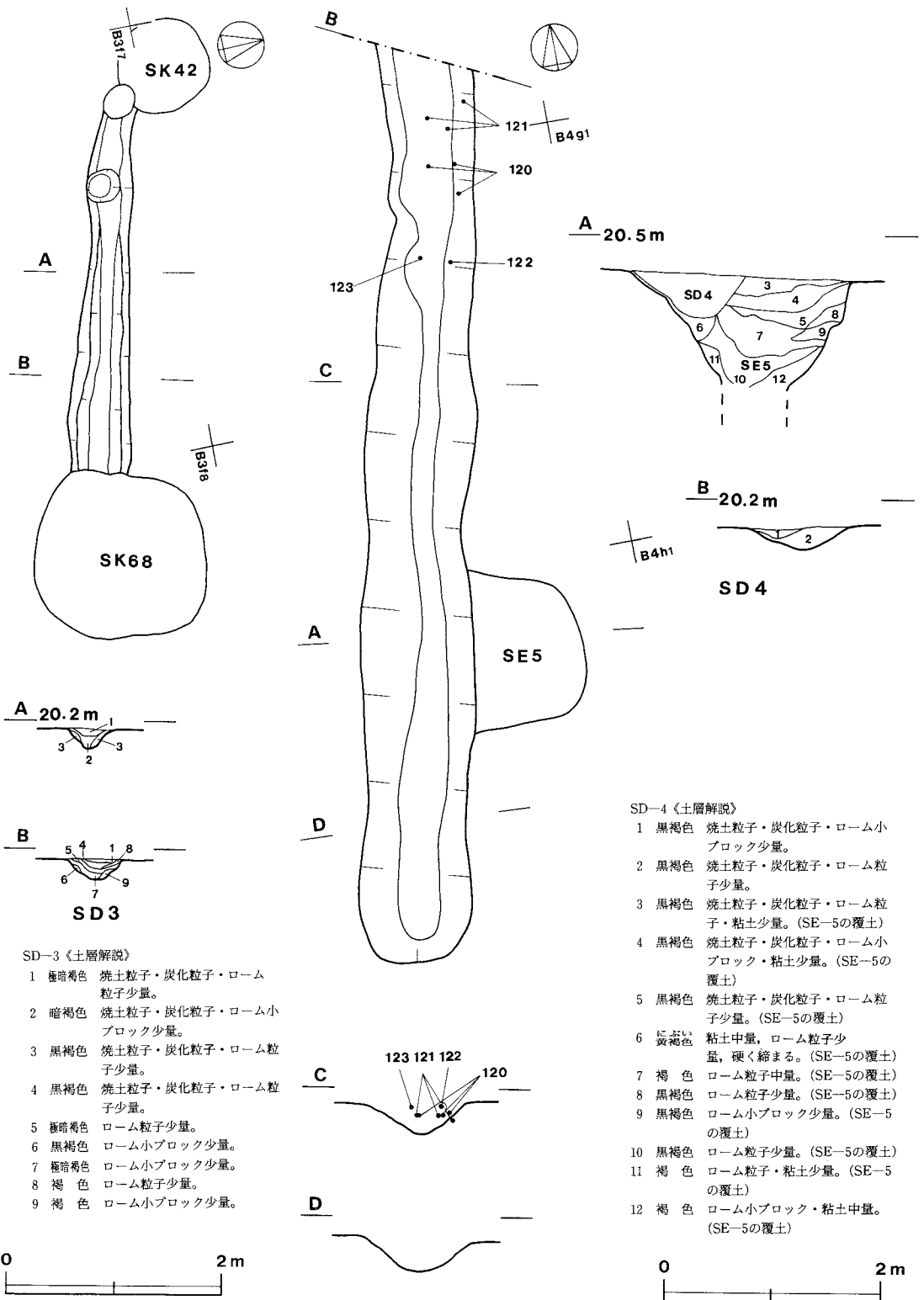
位置 調査区の東部 B3区を中心に確認された溝で、西側0.5m程に第4号井戸が位置している。

重複関係 B3f₇区で第17号住居跡を掘り込んで構築されている。B3e₇区で第42号土坑、B3f₈区で第68号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模 全長3.31mで、上幅0.31～0.58m、下幅0.09～0.22m、深さ0.18～0.20mを測る。

方向 第42号土坑との重複部 B3e₇区から東方（N-102°-E）へ直線的に延びて、第68号土坑に達している。

形状 壁は段状を呈し、断面形は「┌┐」状を示している。底面は平坦で、若干東側へ傾斜して



第 61 図 第 3・4号溝実測図

いる。

覆土 黒褐色土の自然堆積で、下層にローム小ブロックを少量含んでいる。

遺物 須恵器2点（甕片）が出土している。

第4号溝（第61図）

位置 調査区の東部 B3区に確認された溝で、南側0.5m程に第2号井戸が位置している。

重複関係 B3h₀区で第5号井戸を掘り込んで構築されている。

規模 全長8.53mで、上幅0.74～1.07m、下幅0.15～0.42m、深さ0.22～0.29mを測る。

方向 ほぼ南北（N-12°-E）へ直線的に延びて、溝の北端はさらに調査区外へ延びている。

形状 壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈している。底面は皿状を呈し、南端と北端の高低差はほとんどなくほぼ水平である。

覆土 全体にローム小ブロックを少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器16点（甕片・坏片）、須恵器3点（高台付坏1・甕片）、陶器片2点（甕片）、内耳土器片40点（実測2点含む）、播鉢片2点。遺物は北部の B3g₀区に集中している。120・121の内耳土器、122の播鉢、123の高台付坏が B3g₀区の覆土中層から出土している。

第4号溝出土遺物解説表

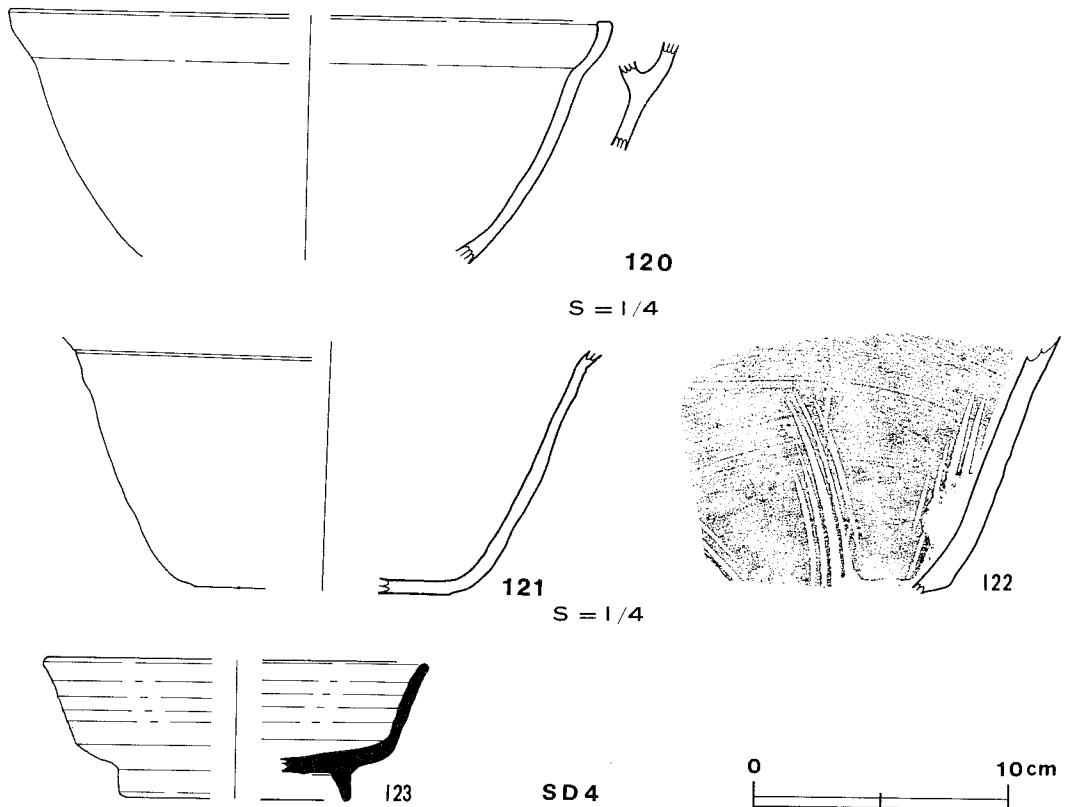
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 120	内耳土器	A [31.2] B (13.0)	体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に鍋墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P111 20% B3g ₀ 区の覆土 中層
121	内耳土器	B (13.1) C [13.4]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部と口縁部の境は一条の沈線でご画される。外面に鍋墨付着。	体部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。底部ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P112 30% B3g ₀ 区の覆土 中層
122	播鉢 陶器		体部は直線的に外傾して立ち上がる。内面に五本一単位の櫛目が縦位に施されている。	体部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	TP68 5% B3g ₀ 区の覆土 中層
123	高台付坏 須恵器	A [15.0] B 5.5 D [9.2] E 1.2	平底で、ほぼ直立する高台が付く。体部は底部との境ににぶい稜を有し、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P113 30% B3g ₀ 区の覆土 中層

5 道路跡

第1号道路跡（第63図）

位置 調査区の東端部 B4・C4区に確認された道路跡である。

規模 本跡の南側と北側が攪乱を受けており、北・南・東側は調査区外になるため道路の全長・道路幅を捉えることができなかった。調査した範囲では長さ32.5m、道路幅1.52～3.03mで、地山を0.15～0.30m掘り込んでいる。掘り込みは、東側へ向かうに従って深くなる。



第 62 図 第 4 号溝出土遺物実測・拓影図

方向 ほぼ南北（N-2°-E）へ直線的に延びている。

形状 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈している。底面は東側のほうが低く、全体に凹凸が激しい。C4a₁区から C3d₀区にかけての中央部付近には、上幅0.30～0.45mで深さ0.1m前後の溝状の凹みが認められる。また、道路全域から直径0.5m前後で深さ0.20～0.30mのピットが不規則に認められる。

覆土 道路最下面から確認面まで上層に黒褐色土、下層に暗褐色土の堆積層が2層認められる。このことから、道路面が次第に高くなり、最終的にはほぼ確認面と同じレベルで使用されていたものと考えられる。

遺物 土師器85点（甕片・坏片）、須恵器35点（甕片・坏片・高台付坏片）、陶器11点（甕1・甕片・壺片）、内耳土器片54点（実測1点含む）、縄文式土器片4点、石器1点（打製石斧1）、石製品（砥石1）、土製品3点（管状土錘片）、鉄製品1点（鏃1）。遺物は少なく、土師器や須恵器のほとんどが小破片である。125の内耳土器が C3c₀区の道路最下面から15cm程浮いた状態で出土している。124の甕の口縁部片と126の砥石が C4b₁区の確認面と道路最下面との間の覆土から出土している。

第1号道路跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 124	甕 陶器		口縁部の縁帯断面は「+」状を呈し、肩との間にはすきまを有している。外面に釉付着。		(胎土) 灰黄褐色 (釉) 灰色 (焼成) 普通	TP73 5% C4b ₁ 区の覆土
125	内耳土器	A [34.6] B (11.3)	体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に鈎墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P114A 30% C3c ₆ 区の覆土

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
126	砥石 石製品	長さ(5.2) 幅3.5 厚さ(2.6)	61.0	ホルンフェルス 一面に使用痕が認められる。 C4b ₁ 区の覆土 Q8
127	打製石斧 石器	長さ11.3 幅7.6 厚さ2.6	204.7	安山岩 C4c ₁ 区の覆土 Q13
128	鎌 鉄製品	全長(5.5) 鎌身長4.0 鎌身幅3.5 筥被長1.5 筥被幅0.7 最大厚0.4		覆土 M17

第2号道路跡(第63図)

位置 調査区の西部 A2・B2区に確認された道路跡である。

重複関係 B2b₂区で第12号住居跡, B2a₃区で第29号住居跡を掘り込んでいる。また, A2i₃区で第28号住居跡と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模 本跡の南側は調査区外になるため, 道路の全長を捉えることはできなかった。調査した範囲では全長16.1m, 道路幅0.68~1.58mで, 地山を0.05~0.12m掘り込んでいる。

方向 南北(N-21°-E)へ直線的に延びている。

形状 底面はA2j₃区で凹凸状を呈しているが, 他は平坦で, 断面形は皿状を呈している。

覆土 道路最下面から確認面までローム小ブロックを含む硬化した褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器21点(甕片・坏片) 21点のうち内黒土器3点含む, 土師質土器1点(皿片), 縄文式土器片1点。遺物は少なくほとんどが小破片で, 図示可能な遺物は認められなかった。

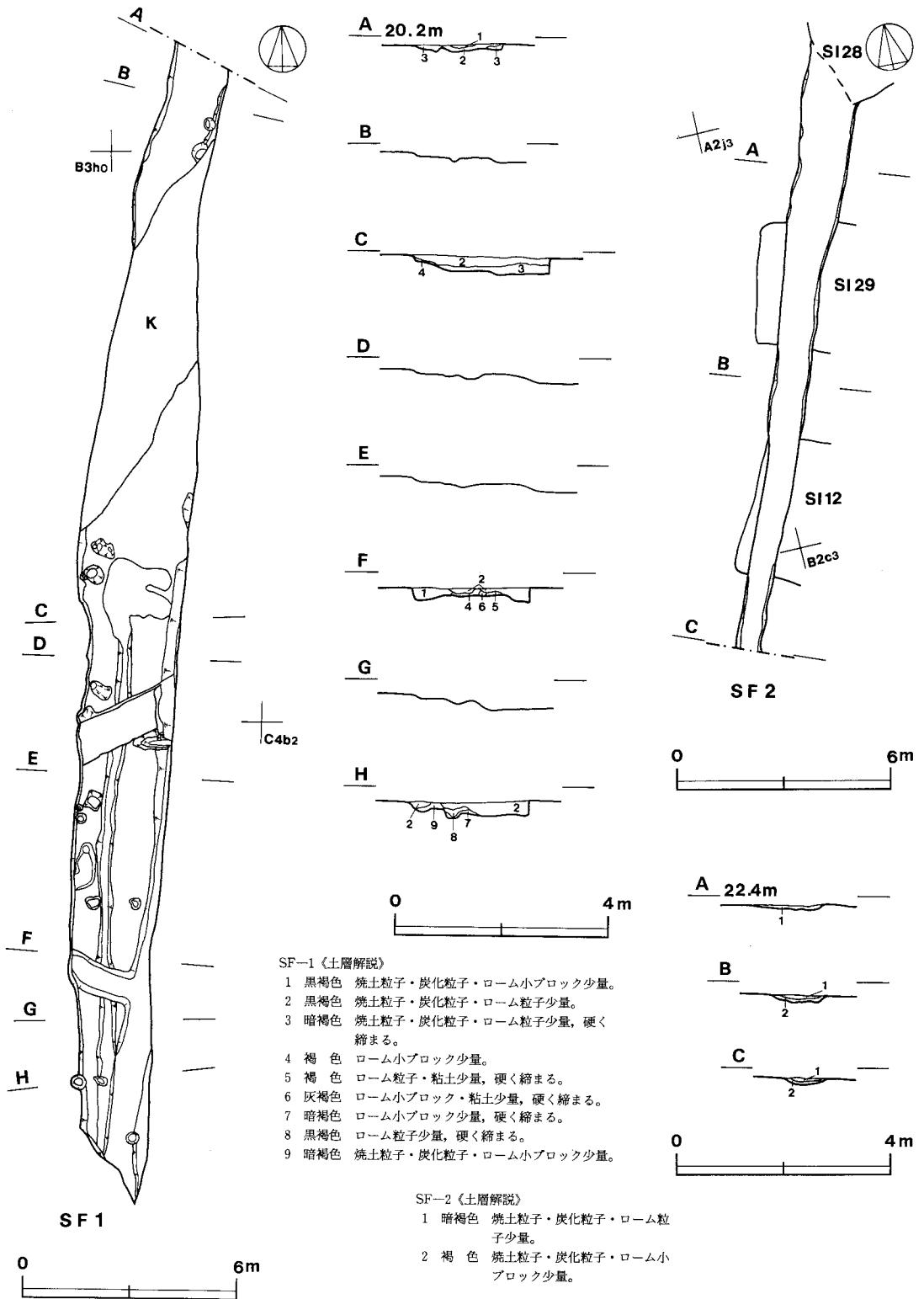
第3号道路跡(第59図)

位置 調査区の東部 B3区に確認された道路跡で, 第1号溝・第3号井戸と同時期に存在していた遺構と考えられる。

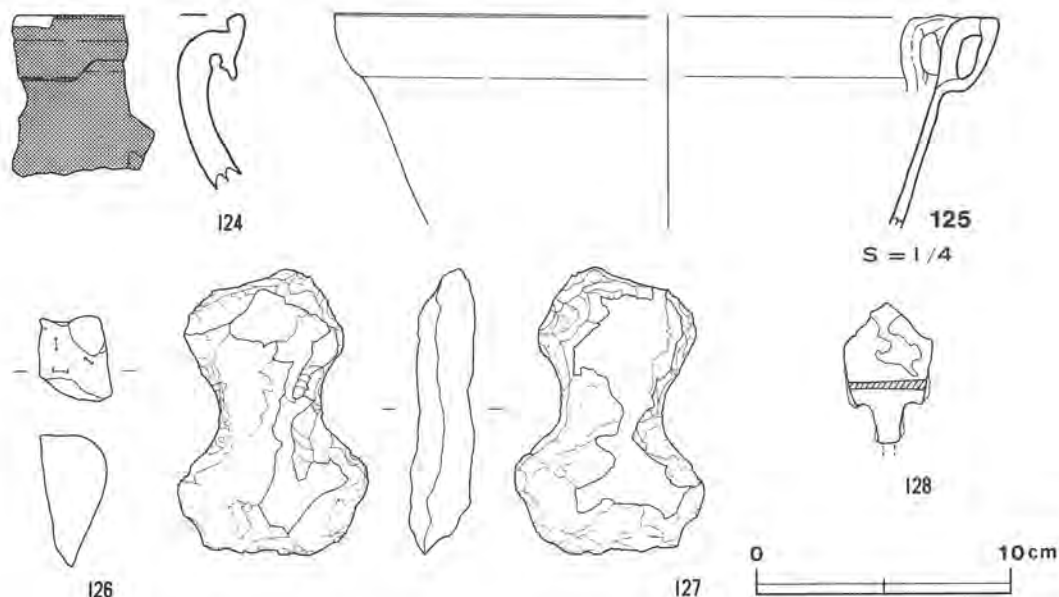
重複関係 第17号住居跡を掘り込んで構築され, 第4号井戸・第42号土坑によって掘り込まれている。

規模 本跡の北側は調査区外になるため, 道路の全長を捉えることはできなかった。調査した範囲では全長14.4m, 道路幅0.93~1.59mで, 地山を0.11~0.15m掘り込んでいる。

方向 第1号溝と平行してほぼ南北(N-15°-E)へ直線的に延びて, 道路の北端はさらに調査区



第 63 図 第 1・2 号道路実測図



第64図 第1号道路跡出土遺物実測図

外へ延びている。

形状 壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈している。底面は凹凸が激しく、非常に硬く踏み固められている。道路の東端に上幅0.29~0.42m、深さ0.12m前後の溝状の凹みが検出されている。

覆土 ローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 出土していない。

6 井戸

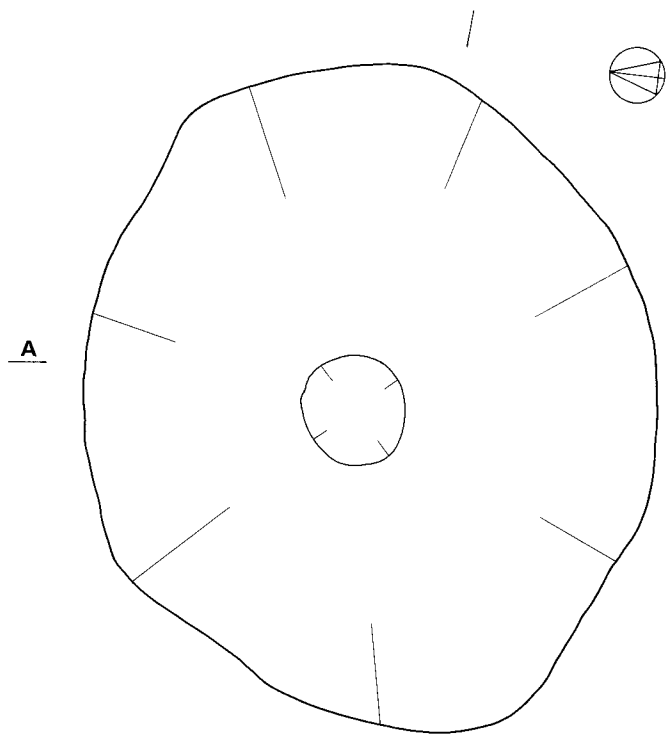
第1号井戸 (第65図)

位置 調査区の中央部付近 B3e₁区を中心に確認された井戸で、東側2m程に第2号溝が位置している。

重複関係 南東部で第71号土坑・北東部で第89号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模 確認面における平面形は長径5.31m、短径4.52mの円形を呈している。確認面から1.8~2.2mの深さまでは鍋底状に、それ以下は径0.8m前後の円筒状に掘り込まれている。確認面下2.8mの深さまで調査したが、湧水と壁面の崩落が著しくそれ以下の調査はできなかった。

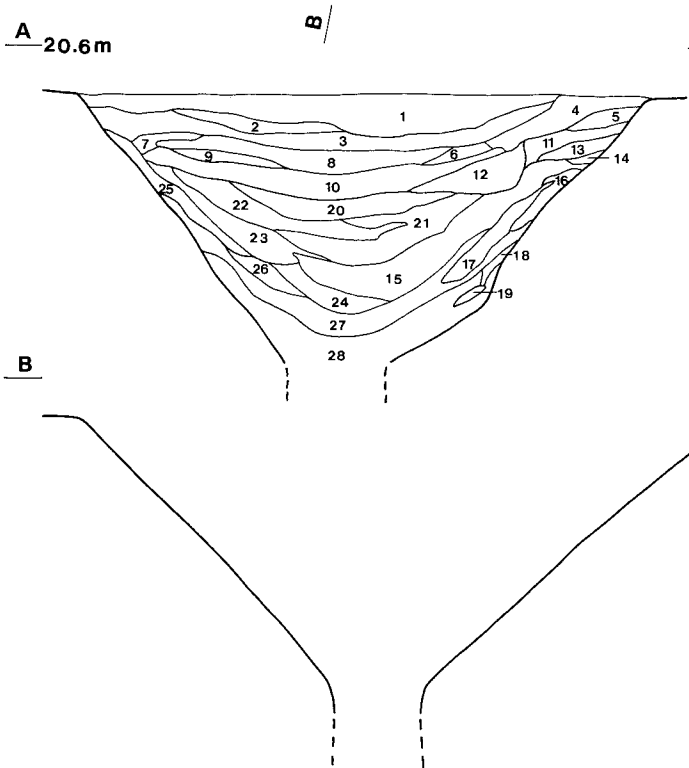
覆土 確認面下1.7mまではローム粒子を少量含む黒褐色土やローム小ブロックを含む黒褐色土が自然堆積している。確認面下1.7~1.9mは粘土やローム中ブロックを含む暗褐色土が堆積し、



SE-1《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量。
- 5 褐色 ローム小ブロック少量。
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 7 黒褐色 ローム粒子少量。
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量，硬く締まる。
- 9 褐色 ローム小ブロック少量。
- 10 黒褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量，硬く締まる。
- 11 黒褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量。
- 12 黒褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量，硬く締まる。
- 13 褐色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 14 黒褐色 ローム粒子少量。
- 15 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 16 褐色 ローム粒子中量，粘土少量。
- 17 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・粘土小ブロック少量。
- 18 黒褐色 粘土小ブロック少量。
- 19 褐色 粘土小ブロック少量。
- 20 黒褐色 ローム粒子少量。
- 21 黒褐色 ローム粒子極少量。
- 22 黒褐色 ローム中ブロック・粘土少量。
- 23 黒褐色 ローム粒子少量。
- 24 褐色 ローム小ブロック少量。
- 25 暗褐色 ローム粒子少量。
- 26 暗褐色 ローム中ブロック少量。
- 27 褐色 ローム粒子・粘土中量，硬く締まる。
- 28 灰白色 粘土多量，硬く締まる。

A 20.6m



第 65 図 第 1 号井戸実測図

それ以下は灰白色の粘土層となっている。

遺物 土師器179点（甕片・坏片），須恵器62点（甕片・壺片・坏片・高台付坏片・蓋片），土師質土器17点（皿1・皿片），陶器8点（平碗1・碗1・甕片・鉢片），内耳土器片2点，縄文式土器片22点。129の鉄釉が施された碗，130の平碗（瀬戸系），131の皿が覆土から出土している。その他，長さ6～15cmの雲母片岩が20個覆土から出土している。

第1号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 129	碗 陶器	A [12.1] B 5.8 D [3.8] E 0.5	平底で，削り出し高台。体部は内彎しながら立ち上がり，口唇部はやや尖る。釉は鉄釉で，体部外面下位以下露胎。	水挽き成形。体部下半回転ヘラ削り（右）。高台削り出し。	（胎土）灰白色 （釉）にぶい赤褐色 （焼成）良好	P116 20% 覆土
130	平碗 陶器	A [19.0] B 7.5 D [6.0] E 0.7	平底で，短く垂下する高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。内面の底部と体部の境は丸みを有し，窯道具痕が二か所残る。体部外面下半以下露胎。	水挽き成形。体部下半回転ヘラ削り（右）。底部回転糸切り（右）。高台貼り付け後横ナデ。	（胎土）淡黄色 （釉）淡黄色 （焼成）普通	P115 40% 覆土
131	皿 土師質土器	A 9.7 B 2.9 C 5.4	平底。体部は下位ににぶい稜を有し，外傾して立ち上がる。底部に板の圧痕が残り，内面周縁に浅い溝が周回する。	水挽き成形。底部回転糸切り（右）。	砂粒・スコリア 橙色 やや不良	P117 60% 覆土

第2号井戸（第66図）

位置 調査区の東部 B3i₉区を中心に確認された井戸で，北側0.5m程に第4号溝が位置している。

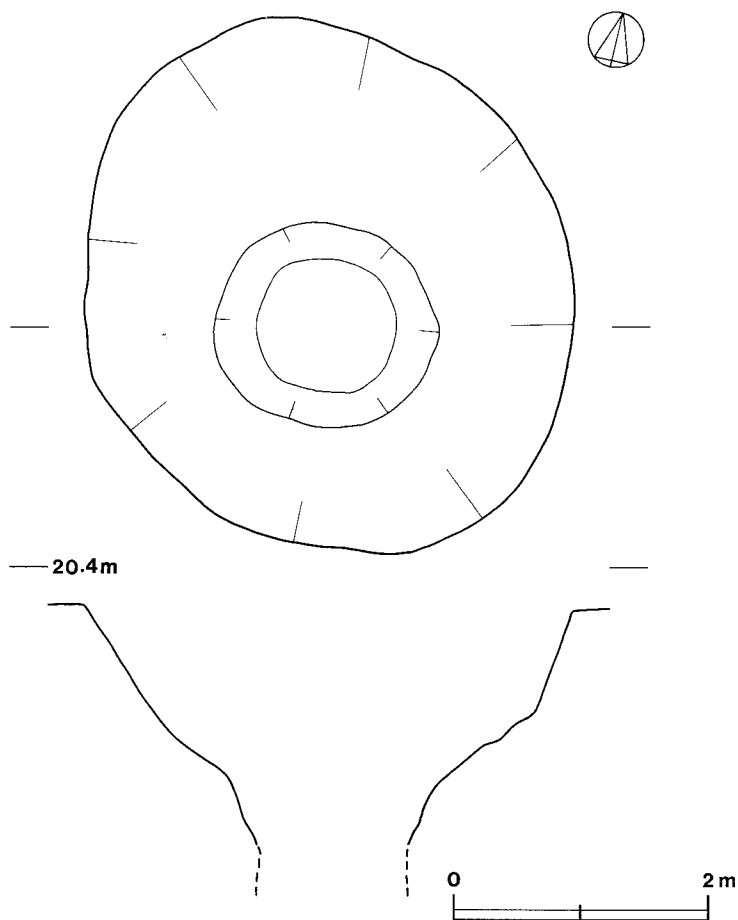
形状・規模 確認面における平面形は長径4.35m，短径3.83mの円形を呈している。確認面から1.4m前後の深さまでは鍋底状に，それ以下は径1.7m前後の円筒状に掘り込まれている。確認面下1.9mの深さまで調査したが，湧水と壁面の崩落が著しくそれ以下の調査はできなかった。

覆土 ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器112点（甕片・坏片），須恵器片43点（甕片・坏片・蓋片），陶器3点（甕片），内耳土器片9点（実測2点含む），縄文式土器片3点，土製品1点（管状土錘1）。132・133の内耳土器，134の坏，135の管状土錘が覆土から出土している。

第2号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 132	内耳土器	A [36.9] B (6.6)	体部は直線的に外傾して立ち上がり，頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に鍋墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P118 5% 覆土



第 66 図 第 2 号井戸実測図

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第68図 133	内耳土器	B (2.2) C [15.0]	平底で、板の圧痕が残る。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ。	砂粒・雲母 ヌコリア 明褐色 普通	P119 5% 覆土
134	坏 須恵器	A [12.2] B 3.8 C [7.0]	平底で、体部との境はやや丸みを有する。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部及び体部下端回転ヘラ削り(右)、その後体部下端は横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P120 10% 覆土
図版番号	器 種	法 量 (cm)		重 量 (g)	備 考	
135	管状土錘 土製品	長さ(4.7)	幅2.5 孔径0.65	(26.5)	欠損 覆土 DP19	

第3号井戸（第67図）

位置 調査区の東部 B3h₆区を中心に確認された井戸で、第1号溝・第3号道路跡と同時期に存在していた遺構と考えられる。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んで構築され、第2号溝との新旧関係は不明である。

規模・形状 確認面における平面形は長径3.41m、短径3.07mの円形を呈している。確認面から1.28～1.35mの深さまでは鍋底状に、それ以下は径1.1m前後の円筒状に掘り込まれている。確認面下2.0mの深さまで調査したが、湧水と壁面の崩落が著しくそれ以下の調査はできなかった。

覆土 確認面下1.05mまではローム粒子や粘土を少量含む黒褐色土が、1.05～1.35mまでは明褐色の粘土層が、それ以下は粘土を少量含む黒褐色土が堆積している。

遺物 土師器103点（甕片・坏片）、須恵器37点（甕片・坏片・蓋片）、陶器4点（鉢1・甕片）、内耳土器片13点（実測1点含む）、石製品1点（石鉢片）、土製品1点（球状土錘1）。136の鉢の口縁部片、137の内耳土器の底部片、138の球状土錘が覆土から出土している。

第3号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 136	鉢 陶器	A [36.4] B (5.6)	体部は直線的に外傾して立ち上がる。器厚は口唇部に向かって肥厚し、口唇部の中央はやや凹む。	体部内・外面ナデ。口唇部ナデで平らに調整した後へラで凹線を施す。	砂粒 灰赤色 普通	P121 5% 覆土
137	内耳土器	B (2.5) C [15.6]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P122 5% 覆土
図版番号	器種	法量(cm)		重量(g)	備考	
138	球状土錘 土製品	長さ(2.1)	幅2.3 孔径0.70	(8.7)	欠損 覆土 DP20	

第4号井戸（第67図）

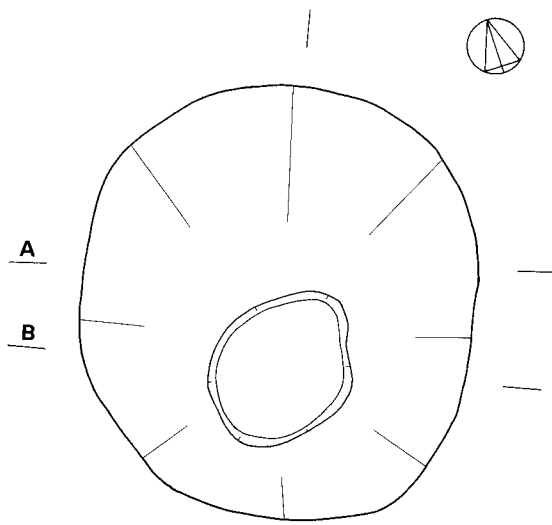
位置 調査区の東部 B3f₆区を中心に確認された井戸で、東側0.5mに第3号溝が位置している。

重複関係 第17号住居跡・第1号溝・第3号道路跡を掘り込んで構築されている。

規模・形状 確認面における平面形は長径2.10m、短径2.05mの円形を呈し、2段に掘り込まれている。1m程掘り下げたところ湧水がひどく、それ以下の調査はできなかった。

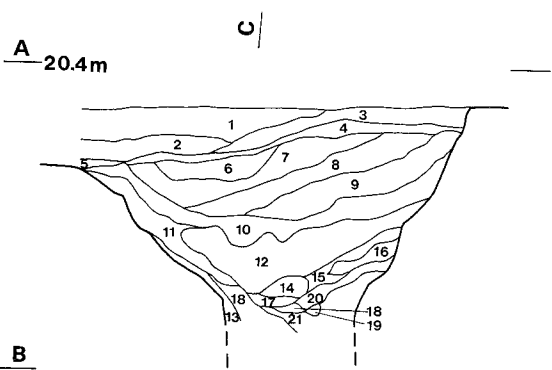
覆土 ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物 土師器1点（甕片）、須恵器3点（甕片・坏片）が出土している。

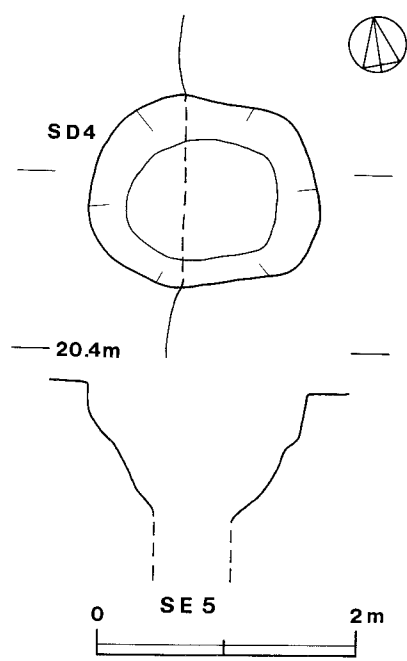
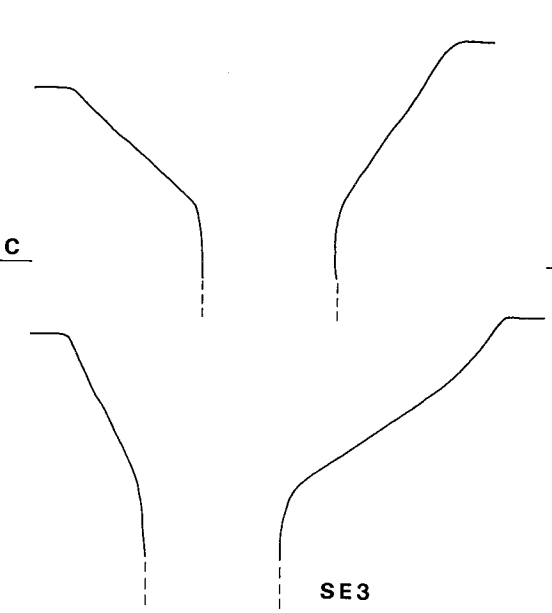


SE-3 《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量，硬く締まる。
- 5 黒褐色 ローム粒子少量。
- 6 黒褐色 粘土中量，硬く締まる。
- 7 黒褐色 ローム粒子少量。
- 8 黒褐色 粘土小ブロック少量，硬く締まる。
- 9 黒褐色 ローム粒子少量。
- 10 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 11 黒褐色 ローム粒子少量，硬く締まる。
- 12 明褐色 粘土多量，粘性強く，硬く締まる。
- 13 褐色 ローム粒子中量，粘土少量。
- 14 黄褐色 粘土多量，粘性強く，硬く締まる。
- 15 黒褐色 ローム粒子少量。
- 16 灰白色 粘土多量，硬く締まる。
- 17 におい黄褐色 粘土多量，粘性強く，硬く締まる。
- 18 黒褐色 粘土少量。
- 19 灰黄褐色 粘土少量。
- 20 褐色 粘土中量。
- 21 暗緑灰色 粘土少量。



SE 4



第 67 図 第 3・4・5号井戸実測図

第5号井戸（第67図）

位置 調査区の東部 B3h₀区に確認された井戸で、南側2m程に第2号井戸が位置している。

重複関係 西側2分の1程を第4号溝によって掘り込まれている。

規模・形状 確認面における平面形は長径1.77m、短径1.51mの円形を呈している。確認面から1m程掘り下げたところ湧水がひどく、それ以下の調査はできなかった。

覆土 上層から中層にかけて粘土を含む黒褐色土が、下層はローム小ブロックを少量含む黒褐色土が堆積している。

遺物 土師器6点（甕片・坏片）、縄文式土器4点、石製品1点（砥石1）、土製品1点（球状土錘1）が出土している。

第5号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
第68図 139	球状土錘 土製品	長さ1.8 幅2.2 孔径0.70	6.9	覆土 DP21
140	砥石 石製品	長さ9.2 幅3.9 厚さ3.3	115.6	流紋岩質凝灰岩 四面に使用痕が認められる。 覆土 Q9

7 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第69図）

位置 調査区の西部 A2j₅区を中心に確認された遺構である。

重複関係 南側を第9号土坑によって掘り込まれている。

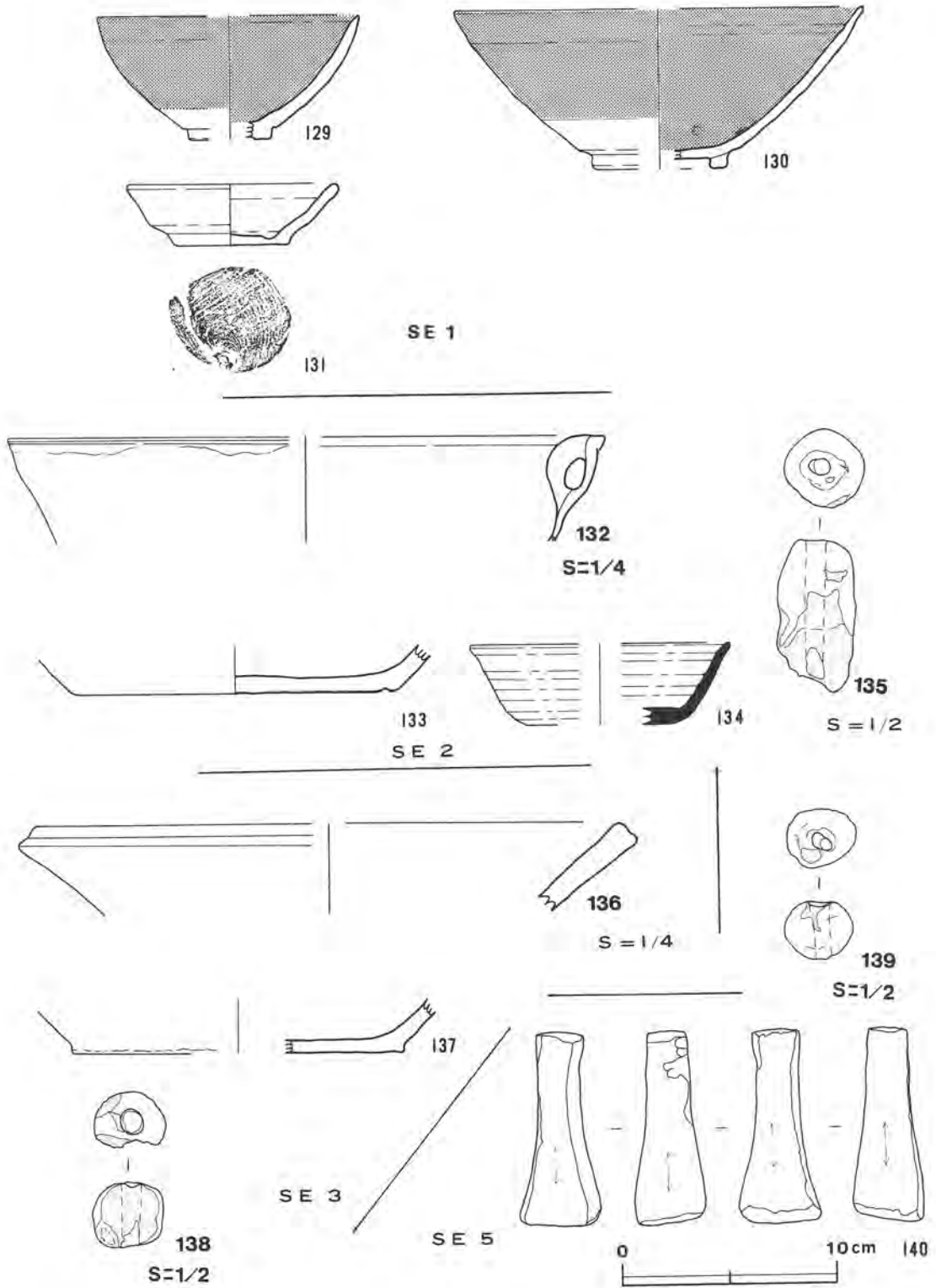
平面形 長径4.81m・短径4.68mの円形を呈し、深さ1.43～1.46mで常総粘土層を掘り込んで構築されている。

壁 緩やかに立ち上がり、断面形は碗状を呈している。

底面 皿状を呈し、粘土で硬く締まっている。

ピット 9か所検出され、P₁～P₈は底面から、P₉は西側の確認面から検出されている。それぞれ円形・楕円形を呈し、P₃・P₄・P₆は中央側にオーバーハングして掘り込まれている。P₁（45×26cm、-16cm）、P₂（15×10cm、-17cm）、P₃（15×14cm、-25cm）、P₄（26×19cm、-23cm）、P₅（20×19cm、-12cm）、P₆（15×13cm、-28cm）、P₇（13×13cm、-21cm）、P₈（19×18cm、-34cm）、P₉（88×61cm、-42cm）。

覆土 上層は焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗褐色土が、中層は焼土粒子・炭化物が多く含まれる黒褐色土が、下層はローム小ブロックを多く含み粘性が強い暗褐色土が、最下層にはより粘性が強い黒褐色土が自然堆積している。

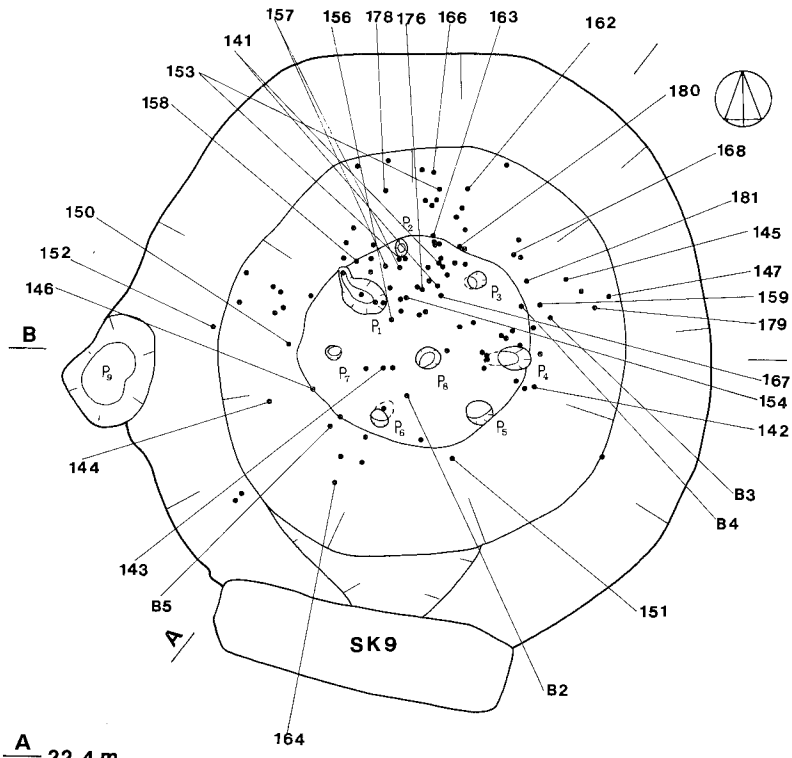


第68図 第1・2・3・5号井戸出土遺物実測図

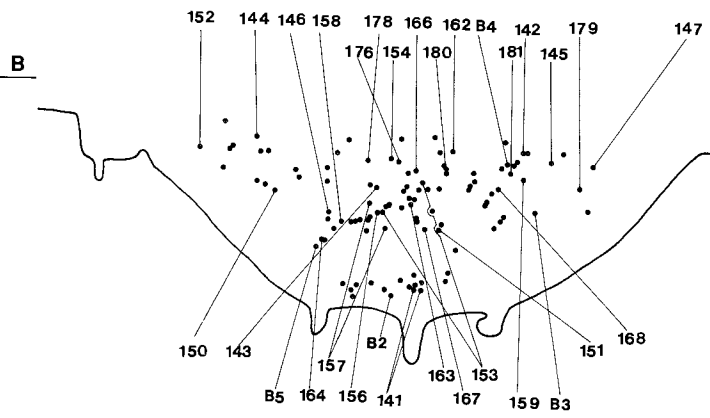
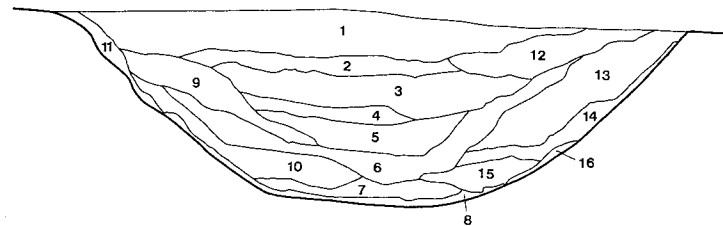
遺物 土師器1,954点（甕10・坏22・高台付坏1・甕片・坏片）1,954点のうち内黒土器3点含む、須恵器76点（甕2・坏2・蓋8・甕片・坏片・蓋片）、陶器2点（壺片・鉢片）、内耳土器片4点、縄文式土器片66点、土製品4点（球状土錘4）、馬の歯4点。ほとんどの遺物が、覆土上層から中層にかけて投棄された状態で出土している。141の甕・長さ15～20cmの礫が2点・長さ20cm程の炭化材が、中央部の底面から15cmの高さから出土している。礫には火熱を受けた痕跡が認められる。また、馬の歯が覆土上層・中層から1か所ずつ、覆土下層から2か所、計4か所から出土している。

第1号性格不明遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 141	甕 土師器	A 24.8 B (14.1)	球状を呈する胴部から、頸部を丸く外反させて、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P123 30% 中央部の覆土 下層
142	甕 土師器	A [25.6] B (10.0)	やや張りのある胴部から、頸部を丸く外反させて、口縁端部をほぼ垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P124 10% 東部の覆土上 層
143	甕 土師器	A [31.8] B (7.3)	頸部は緩く外反し、口縁部を強く外反させる。口縁端部の外面は面状を呈する。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒 淡赤褐色 普通	P125 5% 中央部の覆土 下層
144	甕 土師器	A [21.0] B (18.0)	やや張りのある胴部から、頸部を丸く外反させて、口縁端部をわずかにつまみ上げる。胴部最大径は中位(24.7cm)。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P126 10% 西部の覆土上 層
第71図 145	甕 土師器	A [19.2] B (14.5)	やや張りのある胴部から、頸部を丸く外反させて、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P127 10% 北東部の覆土 上層
146	甕 土師器	A [19.8] B (8.3)	やや張りのある胴部から、頸部を丸く外反させて、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P128 5% 中央部の覆土 上層
147	甕 土師器	A [23.2] B (7.4)	頸部は緩く外反し、口縁部を強く外反させる。口縁端部の外面は面状を呈する。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 淡赤橙色 普通	P129 5% 東部の覆土上 層
148	甕 土師器	A [23.0] B (8.4)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P130 5% 南東部の覆土 上層
149	甕 土師器	A [19.4] B (9.4)	張りの弱い胴部から、頸部を外反させて、口唇部を丸くおさめる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 淡橙色 普通	P131 5% 南部の覆土 上層
150	甕 土師器	A [10.6] B 11.8	平底気味。胴部は内彎しながら立ち上がり、球状を呈する。頸部は直立して、上半で軽く外反する。胴部最大頸は中位(12.2cm)。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P132 50% 西部の覆土上 層
151	甕 須恵器	B (15.6)	胴部は球状を呈し、強く内彎して頸部に至る。頸部は胴部から丸みをもって外反し直立する。内面に輪積み痕残る。	胴部外面平行叩き、内面ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P133 30% 中央部の覆土 中層

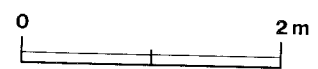


A 22.4 m



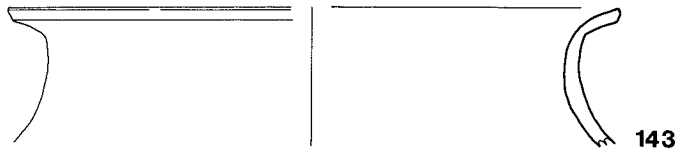
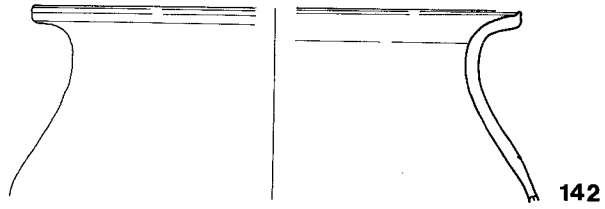
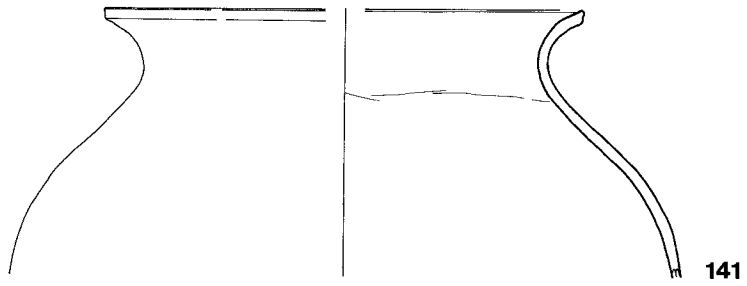
SX-1 《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量。
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量。
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量。
- 6 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 9 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 10 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量。
- 11 暗褐色 ローム粒子少量。
- 12 暗褐色 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量。
- 13 褐色 ローム粒子少量。
- 14 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 15 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 16 灰褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、硬く締まる。

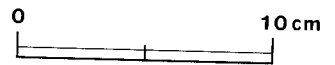
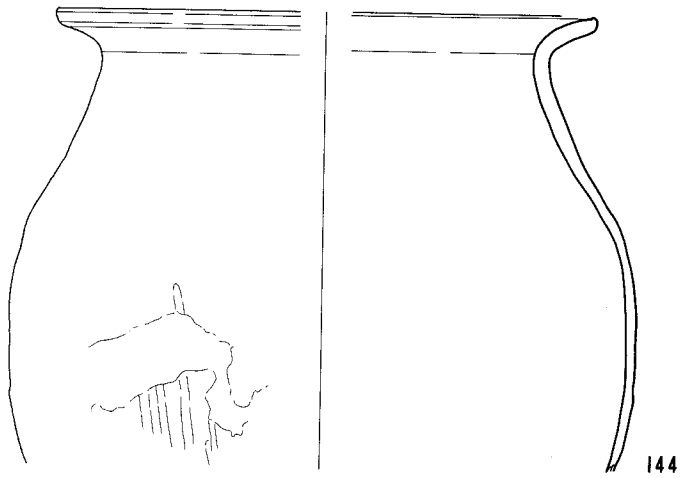


第 69 図 第 1 号性格不明遺構実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 152	甕 須恵器		頸部は外反して立ち上がり、口縁端部を下方に突出させる。口縁部から頸部にかけて、七本一条の波状文が施されている。内面に自然釉付着。	口縁部から頸部にかけて外面平行叩き後横ナデ、その後波状文を施す。内面横ナデ。	砂粒 灰色 普通	TP86 5% 西部の覆土上層
第72図 153	坏 土師器	A 11.9 B 4.5	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に明瞭な稜をなす。口縁部は器厚を減じながら、外反して立ち上がる。稜の下に巻き上げ痕残る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒 淡橙色 普通	P134 90% 中央部の覆土中層と北部の覆土上層
154	坏 土師器	A 13.0 B 4.1	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に不明瞭な稜をなす。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P135 50% 中央部の覆土上層
155	坏 土師器	A [12.4] B 4.9	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にやや不明瞭な稜をなす。口縁部はほぼ直立し、口唇部を丸くおさめる。稜の下に巻き上げ痕残る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P136 60% 北西部の覆土
156	坏 土師器	A [12.6] B 4.5	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にやや不明瞭な稜をなす。口縁部は直立して立ち上がる。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 橙色 良好	P137 60% 中央部の覆土中層
157	坏 土師器	A [13.6] B 3.7	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にやや不明瞭な稜をなす。口縁部は外反して立ち上がり、内面に一条の沈線が巡る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 良好	P138 40% 中央部の覆土中層
158	坏 土師器	A [10.9] B 3.1	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にやや不明瞭な稜をなす。口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	P139 40% 中央部の覆土中層
159	坏 土師器	A [15.2] B (3.5)	体部は内彎気味に外傾して立ち上がり口縁部で軽く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P142 30% 北東部の覆土
160	坏 土師器	A [13.8] B (3.7)	体部は下位ににぶい稜を有し、中位以上は外反して立ち上がる。体部と口縁部との境は不明瞭で、口縁部内面に一条の沈線が巡る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P141 30% 北部の覆土
161	坏 土師器	A [13.2] B 4.2	平底気味。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にやや不明瞭な稜をなす。口縁部は外反して立ち上がり、内面に一条の沈線が部分的に巡る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア 淡橙色 良好	P140 30% 東部の覆土上層
162	坏 土師器	A [14.0] B 3.5	丸底気味。体部は下位ににぶい稜を有し、緩く内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し、内面に一条の沈線が巡る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P143 20% 北部の覆土上層

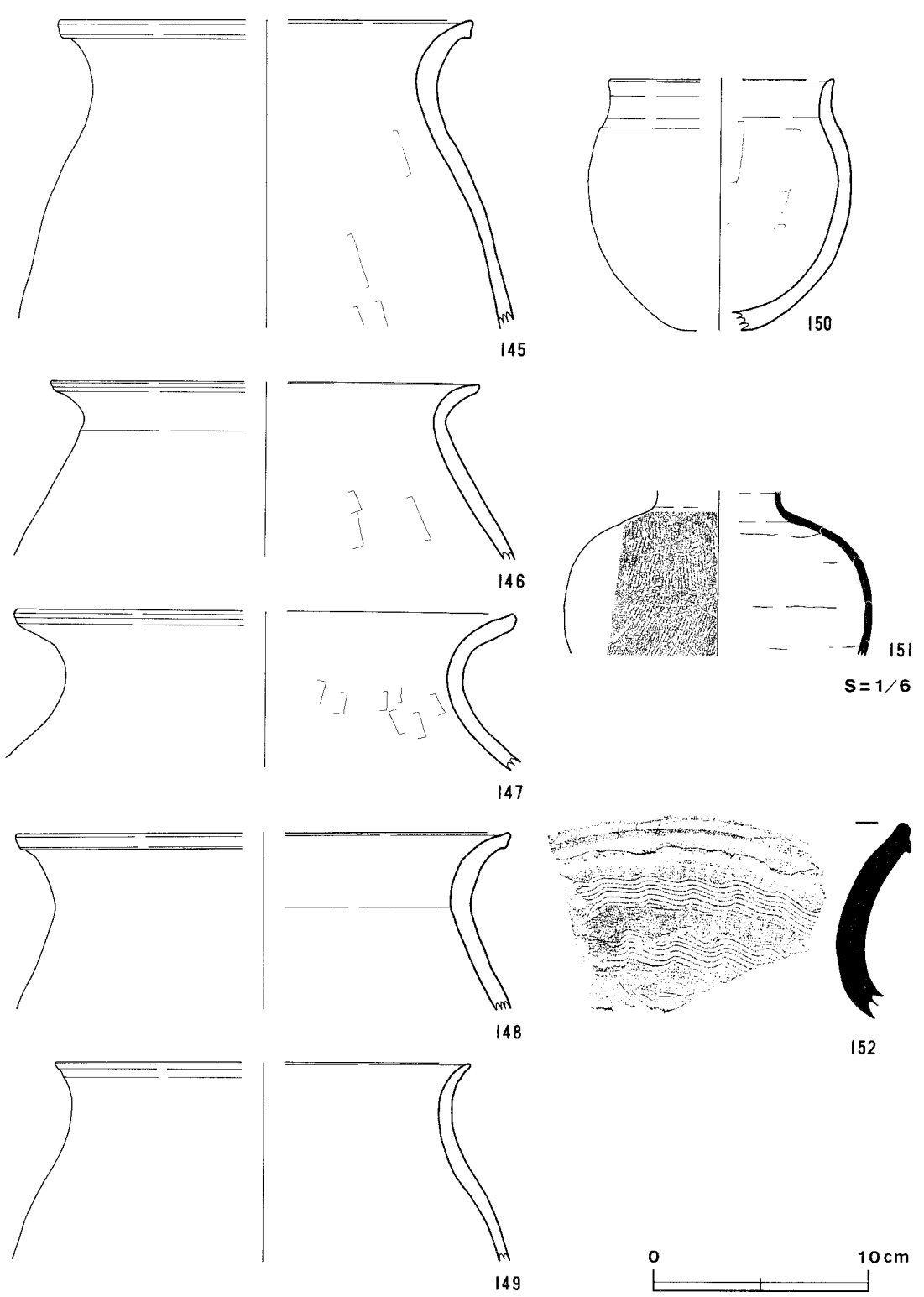


141 ~ 143 S = 1/4



第 70 図 第 1 号性格不明遺構出土遺物実測図(1)

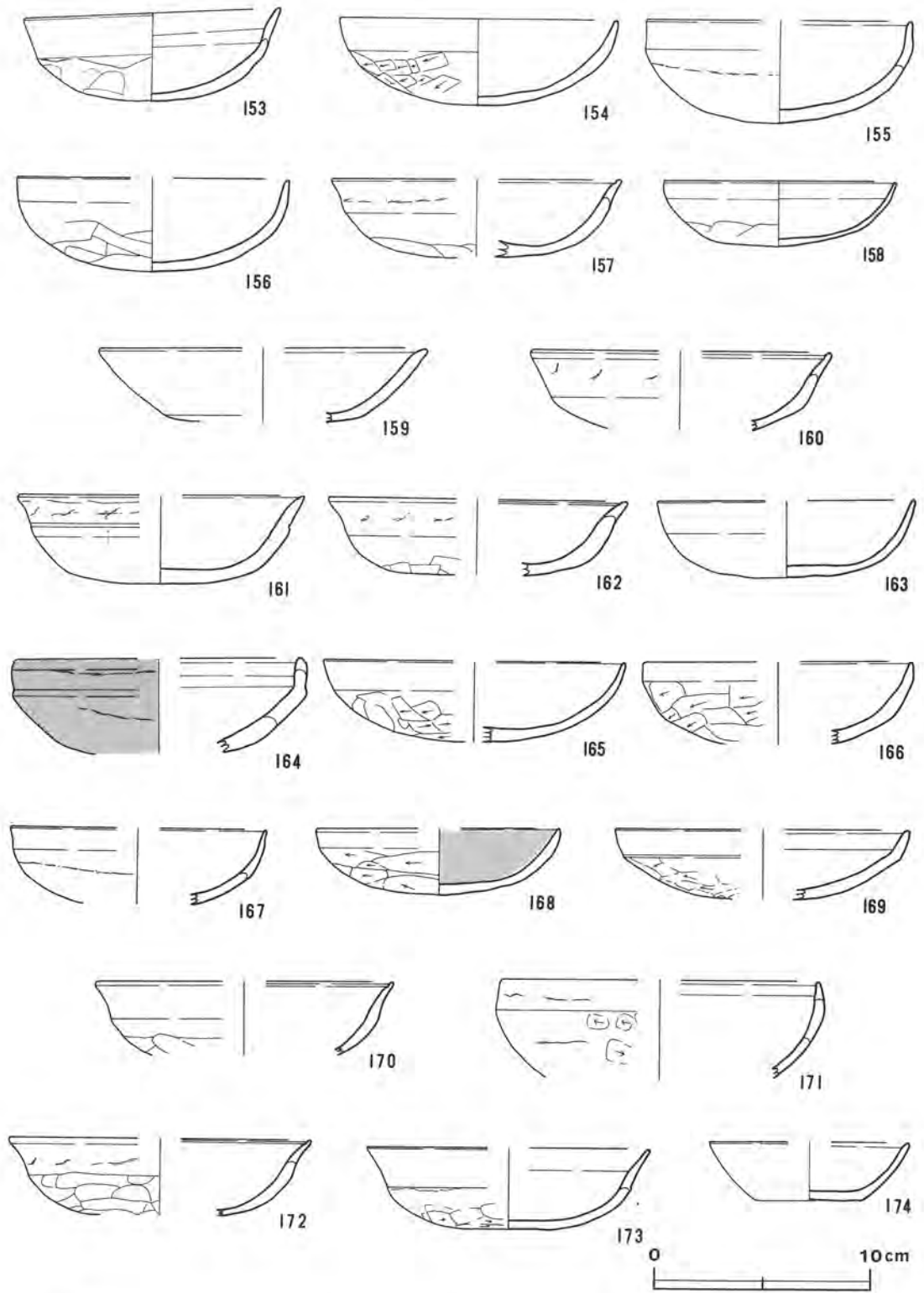
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 163	坏 土師器	A [11.8] B 3.7	平底気味。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口唇部を丸くおさめる。口縁部と体部の境は不明瞭。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P144 30% 中央部の覆土 中層
164	坏 土師器	A [13.4] B (4.4)	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に明瞭な稜をなす。口縁部は直立し、端部はやや内傾する。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。外面黒色処理。	砂粒 黒褐色 普通	P145 20% 南部の覆土 中層
165	坏 土師器	A [14.0] B (3.8)	丸底。体部は器厚を減じながら内彎して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。体部と口縁部との境は不明瞭。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P146 20% 北西部の覆土
166	坏 土師器	A [12.4] B (3.8)	丸底。体部は下位ににぶい稜を有し、緩く内彎しながら立ち上がる。口縁部は体部との境にやや不明瞭な稜をなし、短く直立する。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P147 30% 北部の覆土 下層
167	坏 土師器	A [12.0] B (3.6)	丸底。体部は器厚を減じながら緩く内彎して外上方へ開く。口縁部と体部の境は不明瞭。体部外面に巻き上げ痕残る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P148 20% 中央部の覆土 中層
168	坏 土師器	A [11.4] B 3.3	平底気味。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に不明瞭な稜をなす。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。内面黒色処理	砂粒・スコリア 暗赤褐色 普通	P149 50% 北東部の覆土 上層
169	坏 土師器	A [13.6] B (3.3)	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に明瞭な稜をなす。口縁部は外傾し、口唇部を丸くおさめる。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 褐灰色 普通	P150 20% 東部の覆土
170	坏 土師器	A [13.8] B (3.5)	体部は下位ににぶい稜を有し、緩く内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し、内面に一条の沈線が巡る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	P151 10% 北部の覆土
171	坏 土師器	A [14.8] B (4.6)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境ににぶい稜をなす。口縁部はやや内傾し、上位内面にへらによる凹線を有する。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P152 10% 南西部の覆土
172	坏 土師器	A [14.0] B (3.6)	平底気味。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に不明瞭な稜をなす。口縁部は外反して立ち上がり、内面に一条の沈線が巡る。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 橙色 普通	P153 10% 東部の覆土
173	坏 土師器	A [13.2] B 3.8	平底気味。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にやや不明瞭な稜をなす。口縁部は外反して立ち上がり、中位から器厚を減じる。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面雑なへラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P154 10% 東部の覆土
174	坏 土師器	A [9.2] B 2.8 C [4.8]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部はやや尖る。体部の器厚は薄い。	全面丁寧なへラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P155 30% 西部の覆土



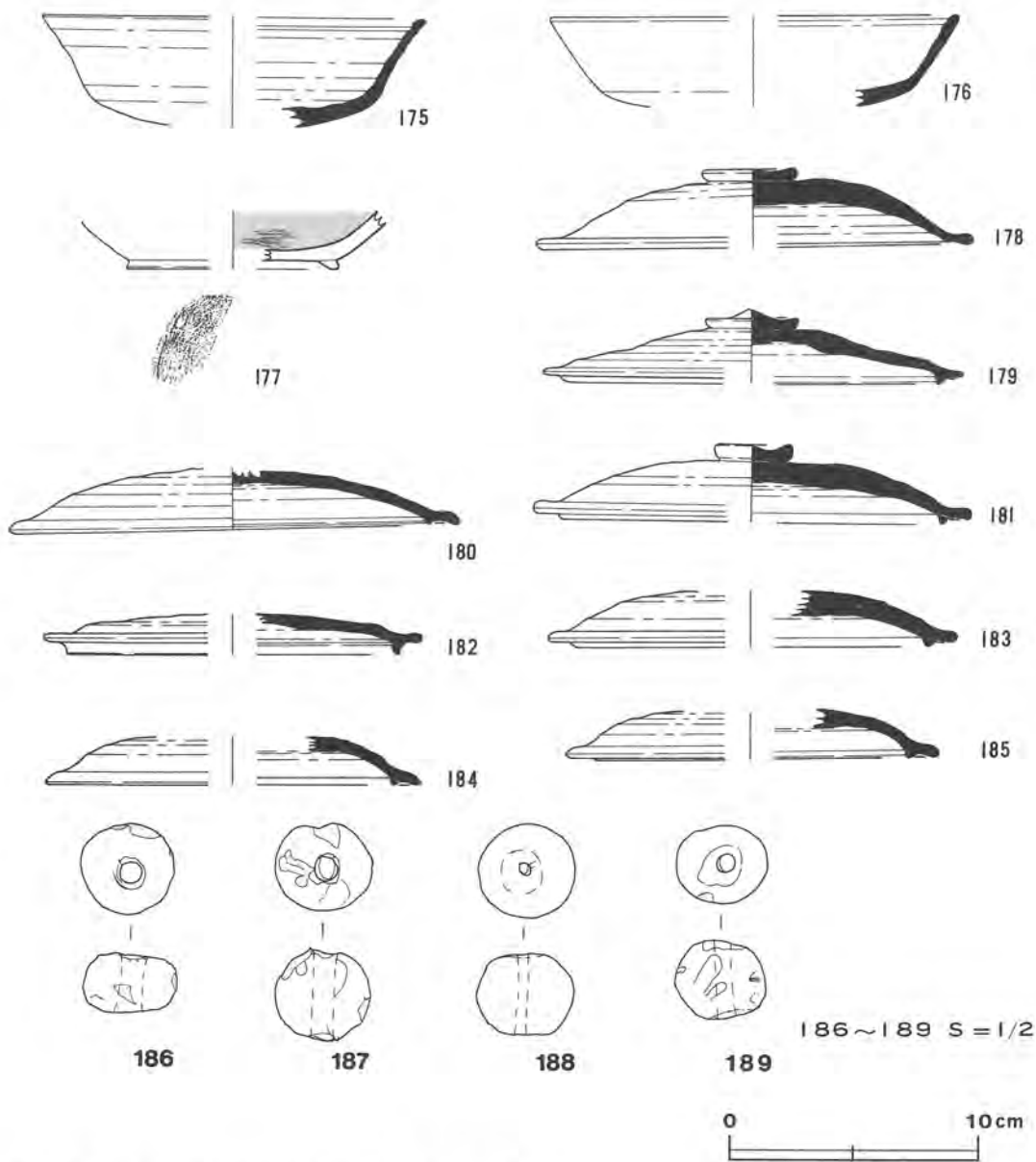
第 71 图 第 1 号性格不明遺構出土遺物実測・拓影图(2)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第73図 175	坏 須恵器	A [15.4] B (4.5)	平底気味で、中央部が肥厚する。体部は底部との境に丸みを有し、外反しながら立ち上がる。口縁部は軽く外反し、内面に一条の浅い沈線が巡る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り(右)。	砂粒 灰白色 普通	P156 30% 北西部の覆土
176	坏 須恵器	A [16.4] B (3.7)	平底気味。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で肥厚する。口縁部内面に一条の浅い沈線が巡る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り(右)。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P157 20% 中央部の覆土 上層
177	高台付坏 土師器	B (2.4) D [8.5] E 0.4	平底で「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き後黒色処理。底部回転ヘラ削り(左)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P158 20% 東部の覆土
178	蓋 須恵器	A [17.4] B (3.2) F 3.8 G 0.5	天井部は、やや深く丸い。口縁部は屈曲して水平に開き、内側にかえりを有する。つまみは扁平で、上部がわずかに窪む。	内・外面横ナデ。天井部は径10.2cmにわたり回転ヘラ削り(右)。	砂粒・礫 灰色 良好	P159 70% 北部の覆土上層
179	蓋 須恵器	A 16.8 B 3.1 F 3.8 G 0.9	天井部は、頂部が平坦で、外周部はなだらかに下降する。口縁部は屈曲して水平に開き、内側にかえりを有する。つまみは扁平で、中央部が突出する。	内・外面横ナデ。天井部は径9cmにわたり回転ヘラ削り(右)。	砂粒 灰白色 普通	P160 70% 東部の覆土上層
180	蓋 須恵器	A 18.2 B (2.6)	天井部は浅く、外周部へ向かってなだらかに下降する。口縁部は屈曲して水平に開き、端部は外下方に下がる。口縁部の内側に短いかえりを有する。	内・外面横ナデ。天井部は、径13cmにわたり回転ヘラ削り(右)。	砂粒・礫 灰白色 普通	P161 70% 中央部の覆土 上層
181	蓋 須恵器	A [17.5] B 3.2 F 3.2 G 0.8	天井部は、頂部が平坦で、外周部へ向かってなだらかに下降する。口縁部は屈曲して水平に開き、内側にかえりを有する。つまみは扁平で上部が窪む。	内・外面横ナデ。天井部は、径11cmにわたり回転ヘラ削り(右)。	砂粒 灰黄色 普通	P162 60% 北東部の覆土 上層
182	蓋 須恵器	A [15.2] B (1.7)	天井部は浅く扁平で、口縁部との境に段をなす。口縁部は水平に開き、内側にかえりを有する。	内・外面横ナデ。天井部は、径9cmにわたり回転ヘラ削り(右)。	砂粒・礫 灰色 普通	P163 40% 北東部の覆土
183	蓋 須恵器	A [16.4] B (2.3)	天井部は浅く、外周部へ向かってなだらかに下降する。口縁部は屈曲して水平に開き、内側にかえりを有する。	内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P164 20% 東部の覆土
184	蓋 須恵器	A [15.4] B (1.9)	天井部は浅く丸い。口縁部は屈曲して水平に開き、端部は外下方へ下降する。口縁部の内側にかえりを有する。	内・外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り(右)。	砂粒 灰白色 普通	P165 10% 北東部の覆土
185	蓋 須恵器	A [15.0] B (2.0)	天井部は浅く丸い。口縁部は屈曲して水平に開き、端部は外下方へ下降する。口縁部の内側にかえりを有する。	内・外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り(右)。	砂粒 灰白色 普通	P166 10% 東部の覆土

図版番号	器 種	法 量(cm)	重 量(g)	備 考
186	球状土錘 土製品	長さ1.7 幅2.6 孔径0.76	10.0	北部の覆土 DP22



第 72 图 第 1 号性格不明遺構出土遺物実測図(3)



第73図 第1号性格不明遺構出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	法 量(cm)	重 量(g)	備 考
第73図 187	球状土錘 土製品	長さ2.5 幅2.7 孔径0.67	(13.4)	一部欠損 南西部の覆土 DP23
188	球状土錘 土製品	長さ2.2 幅2.6 孔径0.35	14.2	北西部の覆土 DP24
189	球状土錘 土製品	長さ2.1 幅2.4 孔径0.46	10.2	東部の覆土 DP25

8 地下式墳

第1号地下式墳 [SK-2A] (第74図)

位置 調査区の中央部 B2e₈区を中心に確認された地下式墳で、北西側7m程に第4号・第5号地下式墳が位置している。

重複関係 第22号住居跡・第2号地下式墳を掘り込んで構築されている。

主軸方向 N-14°-Eを指し、確認面における全長は約4.7mである。

竪坑 確認面から1.5mの深さに掘り込まれており、竪坑の底面は主室よりも0.1m程低くなっている。底面における平面形は、長軸0.97m・短軸0.77mの長方形を呈している。

羨道 竪坑から主室に向かって0.6mの幅で、0.7m程延びている。

主室 底面における平面形は奥行2.32m・幅1.8mの長形状を呈している。底面は平坦で、竪坑・主室とも粘土層に形成されている。

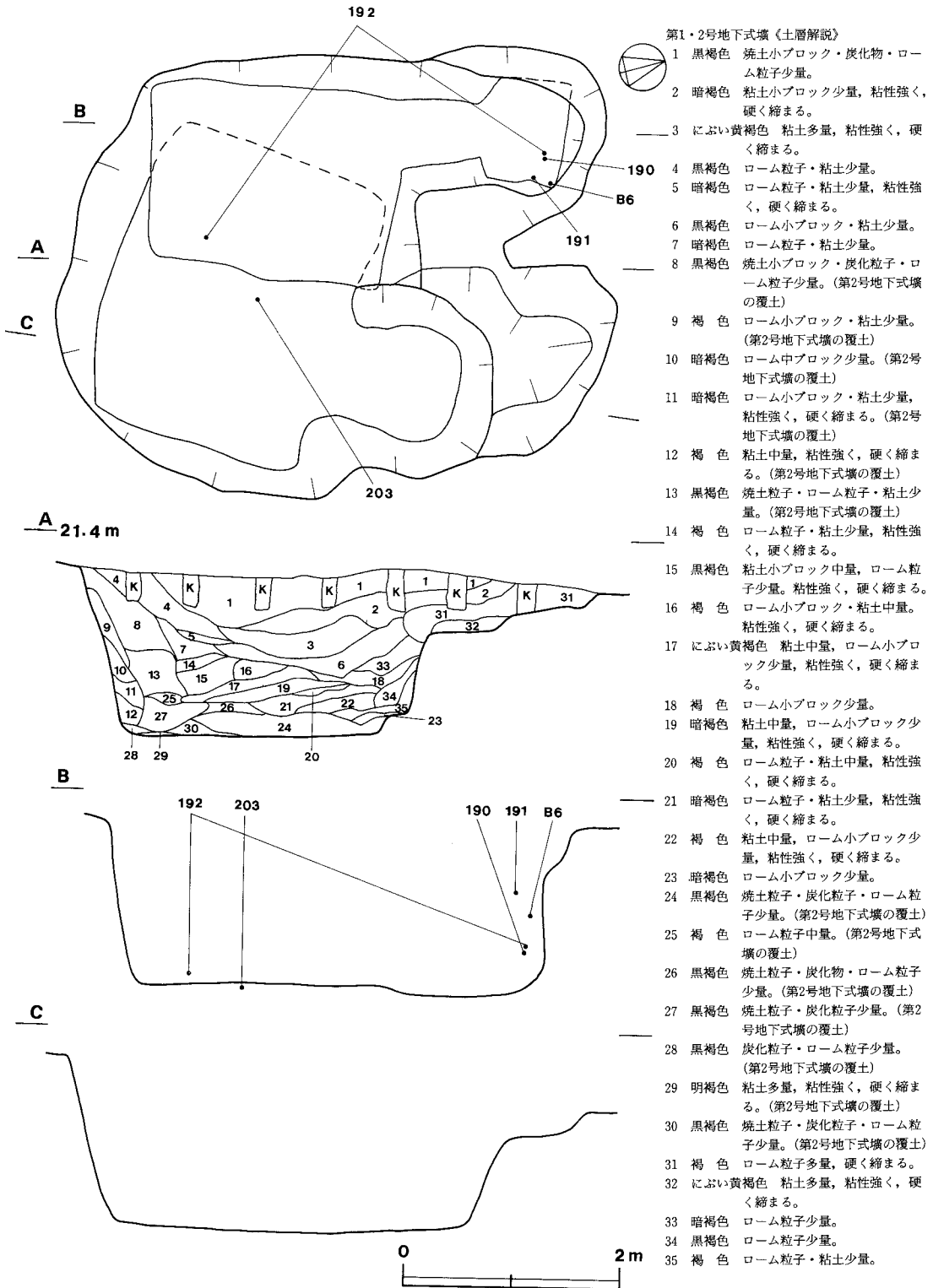
壁 竪坑はほぼ垂直に、主室は外傾して立ち上がっている。

覆土 上層に焼土小ブロック・炭化物を少量含む黒褐色土、中層に白色粘土層、下層に粘土やローム小ブロックを含む褐色土が堆積し、人為的に埋め戻された様相を呈している。

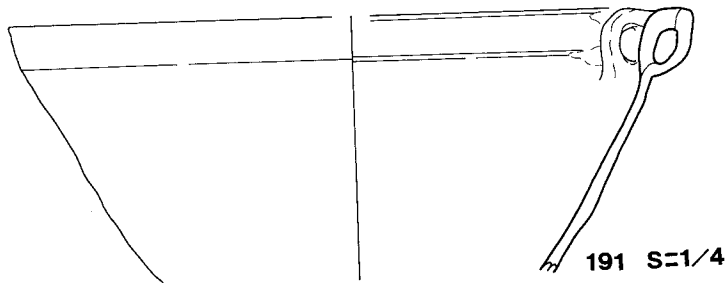
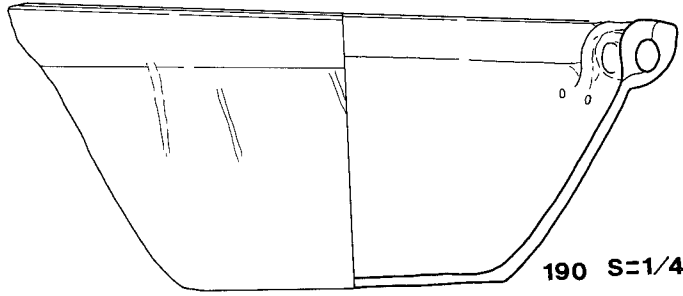
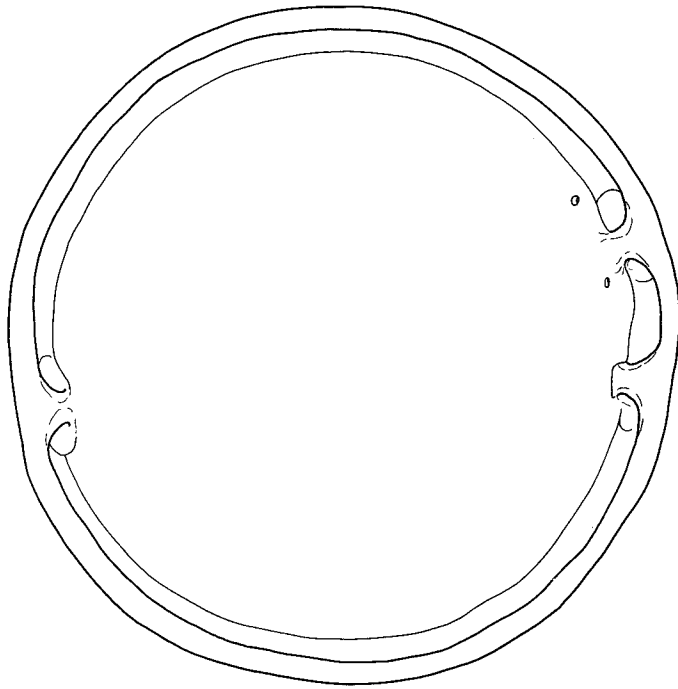
遺物 土師器77点(甕片・坏片)77点のうち内黒土器5点含む、須恵器20点(甕片・坏片・盤片)、土師質土器1点(皿片)、陶器9点(甕1・壺1・鉢1・皿1・甕片・鉢片)、内耳土器片47点(実測3点含む)、縄文式土器片4点、石器1点(磨製石斧1)、石製品(砥石1)、土製品2点(球状土錘2)、鉄滓1点、馬の歯1点。190の内耳土器が竪坑の覆土下層から、191の内耳土器と馬の歯が竪坑の覆土中層から、192の内耳土器が竪坑の覆土下層と主室南東部の覆土下層から、193の甕の口縁部片・194の壺の底部片・195の鉢・196の皿の口縁部片が主室の覆土から、197と198の球状土錘・199の砥石が竪坑の覆土から出土している。

第1号地下式墳出土遺物解説表

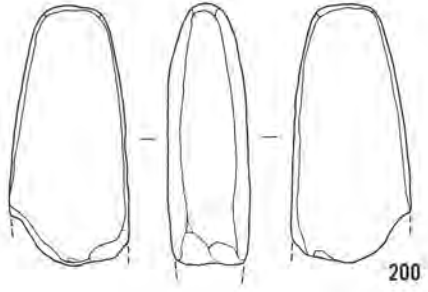
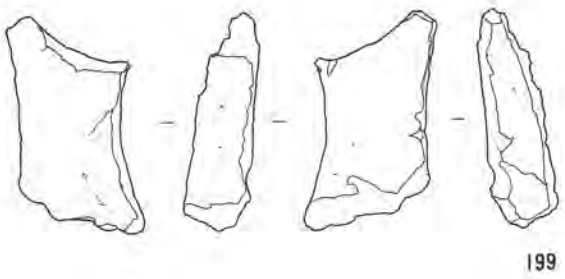
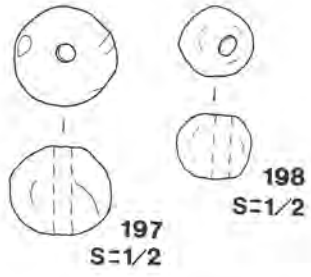
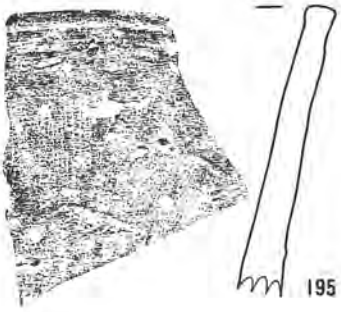
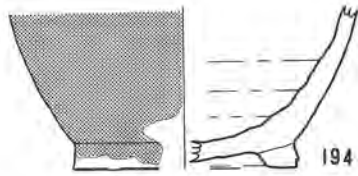
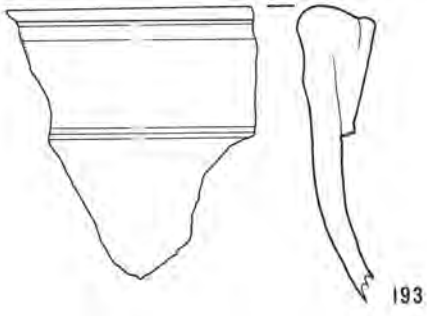
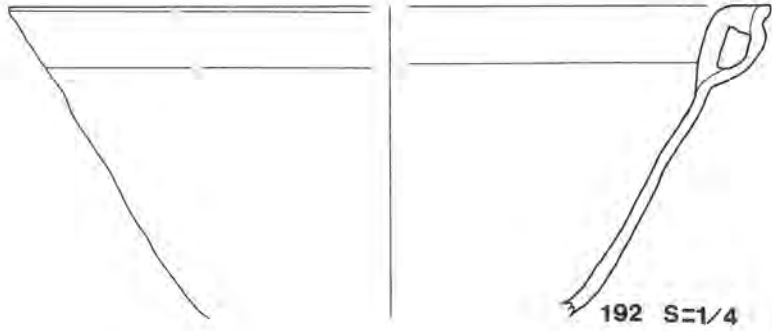
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 190	内耳土器	A 35.0 B 15.8 C 16.9	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。一つの耳の下方に左右対称の孔が穿たれる。外面に鍋墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位から中位にかけて縦位のヘラ削り後ナデ、他はナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P87 95% 竪坑の覆土下層
191	内耳土器	A 35.8 B (13.9)	体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に鍋墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P88 50% 竪坑の覆土中層
第76図 192	内耳土器	A [40.0] B (16.3)	体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に鍋墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P89 50% 竪坑と主室南東部の覆土下層
193	甕 陶器		口縁部の縁帯と肩が接している。		(胎土) 緑灰色 (焼成) 普通	TP48 5% 主室の覆土



第 74 図 第 1・2 号地下式墳実測図



第 75 図 第 1 号地下式壙出土遺物実測図(1)



第 76 図 第 1 号地下式墳出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 194	壺 陶器	B (6.4) D [8.8] E 0.9	底部と胴部の境に、「ハ」の字状に開く短い高台が付く。高台の壘付は平坦。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。高台貼り付け。	(胎土) 黄灰色 (釉) 青灰色 (焼成) 普通	P90 20% 主室の覆土
195	鉢 陶器		体部は外傾して立ち上がり、口唇部を平坦に仕上げている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目後ナデ、内面ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	TP49 5% 主室の覆土
196	皿 陶器	A [10.1] B 3.1 C 4.8	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、中位で外反する。釉は鉄釉で、体部中位以下露胎。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	(胎土) 灰白色 (釉) 極暗赤褐色 (焼成) 良好	P91 50% 主室の覆土

図版番号	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
197	球状土錘 土製品	長さ2.4 幅2.7 孔径0.50	15.4	堅坑の覆土 DP16
198	球状土錘 土製品	長さ1.7 幅2.0 孔径0.45	6.1	堅坑の覆土 DP17
199	砥石 石製品	長さ8.6 幅5.4 厚さ3.1	116.6	流紋岩質凝灰岩 全面に使用痕が認められる。 堅坑の覆土 Q3
200	磨製石斧 石器	長さ(10.3) 幅4.8 厚さ3.3	(255.2)	花崗岩 刃部欠損。定角式磨製石斧。 堅坑の覆土 Q4

第2号地下式墳 [SK-2B] (第74図)

位置 調査区の中央部 B2e₃区を中心に確認された地下式墳で、北西側7m程に第4号・第5号地下式墳が位置している。

重複関係 第22号住居跡を掘り込んで構築し、第1号地下式墳によって掘り込まれている。

主軸方向 N-31°-Eを指し、確認面における全長は約4.2mである。

堅坑 確認面から1.6mの深さに掘り込まれており、底面は堅坑も主室もほぼ同じ高さである。底面における平面形は、長軸1.24m・短軸1.07mの長方形を呈し、主軸方向に長くなっている。

主室 底面における平面形は、奥行2.17m・幅2.81mの長方形を呈している。底面は粘土で平坦であり、底面全体が火熱を受けた様相を呈している。

壁 堅坑・主室とも外傾して立ち上がっている。

覆土 大部分が第1号地下式墳に掘り込まれているため明瞭ではないが、ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積していると思われる。

遺物 土師器214点(高台付坏1・高台付皿1・甕片・坏片・高台付坏片) 214点のうち内黒土器3点含む、須恵器81点(坏1・甕片・坏片・蓋片)、陶器2点(甕片)、内耳土器片15点、縄文式土器7点。201の坏が堅坑の覆土から、202の高台付坏が主室の覆土から、203の高台付皿が主室中央部付近の床面直上から出土している。

第2号地下式墳出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 201	坏 須恵器	A 12.6	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内面の稜が強い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端横ナデ後手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P 92 60% 堅坑の覆土
		B 5.1				
		C 7.4				
202	高台付坏 土師器	B (4.2)	平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の畳付は丸みを帯びる。体部は器厚を減じながら、外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒・礫 暗灰褐色 不良	P 93 20% 主室の覆土
		D [7.8]				
		E 1.1				
203	高台付皿 土師器	A [13.8]	平底で、「ハ」の字状に開く高い高台が付く。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部で外反して水平に開く。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P 62 60% 主室中央付近 の床面直上
		B 3.2				
		D 7.6				
		E 1.3				

第3号地下式墳 [SK-3] (第77図)

位置 調査区の北西部 A2i₇区を中心に確認された地下式墳である。

重複関係 南西部を第125号土坑によって掘り込まれている。

主軸方向 N-34°-Wを指し、確認面における全長は約4.5mである。

堅坑 確認面から2.1mの深さに掘り込まれており、主室に向かって緩やかに傾斜している。底面における平面形は長軸1.14m・短軸1.04mの長方形を呈し、長軸方向は本墳の主軸方向と直交している。

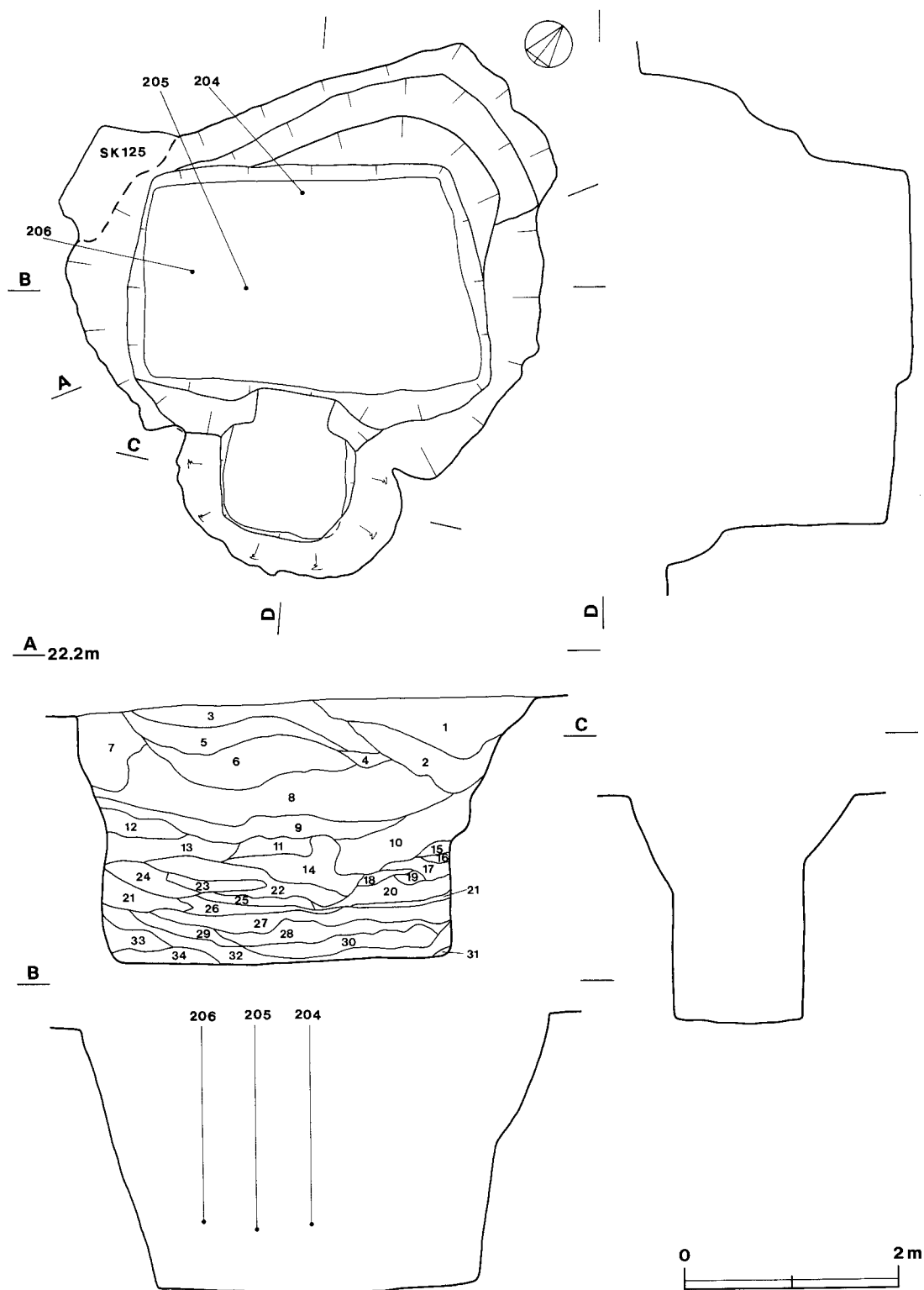
羨道 堅坑から主室に向かって緩やかに傾斜し、幅0.7mで長さ0.3mを測る。

主室 堅坑の底面からさらに0.15m程掘り込まれ、底面は平坦である。底面における平面形は、奥行1.95m・幅3.14mの不整長方形を呈している。堅坑・主室とも底面はザラザラした砂質粘土である。

壁 堅坑ではほぼ垂直に、主室では外傾して立ち上がっている。

覆土 上位には白色の粘土層やローム粒子を少量含む黒褐色土層が、中位にはローム小ブロックを含む褐色土層が人為的に埋め戻された様相を呈している。確認面下1.8mで、焼土・炭化物・灰を含む層(厚さ5~25cm)が確認され、この層から内耳土器が出土している。また、この層の下から底面までは粘土を含む褐色土が堆積している。

遺物 土師器54点(甕片・坏片)、須恵器14点(甕片・蓋片)、陶器4点(甕片・鉢片)、内耳土器片27点(実測3点含む)、縄文式土器片4点、石製品1点(石鉢1)、鉄製品1点(鏃1)、古銭1点。204・205・206の内耳土器が主室の奥壁中央部付近や南西部の底面から0.6m程の高さから、207の片口の石鉢の口縁部片が主室北西部の覆土上層から、209の古銭(洪武通寶)が主室南東部の覆土から出土している。



第 77 图 第 3 号地下式坑实测图

第3号地下式墳《土層解説》

- | | | | |
|----------|-------------------------------|---------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 18 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量。 | 19 褐色 | 粘土中量，粘性強く，硬く締まる。 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量。 | 20 褐色 | ローム粒子多量。 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 21 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・炭化物多量。 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量，粘土少量，硬く締まる。 | 22 褐色 | ローム粒子中量，粘土小ブロック少量。 |
| 6 におい黄褐色 | 粘土多量，粘性強く，硬く締まる。 | 23 暗褐色 | 炭化粒子・粘土少量。 |
| 7 褐色 | ローム粒子中量。 | 24 暗褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック少量。 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子少量。 | 25 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 9 褐色 | ローム粒子多量。 | 26 暗褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量。 |
| 10 褐色 | ローム粒子多量，粘土小ブロック少量。 | 27 褐色 | 粘土小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。 |
| 11 暗褐色 | ローム小ブロック少量。 | 28 褐色 | ローム粒子中量。 |
| 12 褐色 | ローム粒子多量。 | 29 褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック少量。 |
| 13 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量。 | 30 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土小ブロック少量。 |
| 14 褐色 | ローム粒子中量。 | 31 黄褐色 | 粘土多量，粘性強く，硬く締まる。 |
| 15 におい褐色 | 粘土中量，粘性強く，硬く締まる。 | 32 褐色 | ローム粒子中量，粘土・焼土小ブロック少量。 |
| 16 褐色 | ローム粒子中量。 | 33 褐色 | ローム粒子中量，粘土少量。 |
| 17 におい褐色 | 粘土多量，粘性強く，硬く締まる。 | 34 橙色 | 粘土多量，ローム粒子少量，粘性強く，硬く締まる。 |

第4号地下式墳 [SK-112] (第78図)

位置 調査区の中央部 B2c₆区を中心に確認された地下式墳で，西側0.5m程に第5号地下式墳が，南東側7m程に第1号・第2号地下式墳が位置している。

主軸方向 N-86°-Wを指し，確認面における全長は約3.7mである。

竪坑 確認面から2.3mまで掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。底面における平面形は，長軸1.24m・短軸1.10mの長方形を呈し，長軸方向は本墳の主軸方向と直交している。底面の四隅から径0.1m・深さ0.1mのピットが検出されている。

羨道 竪坑から西方向へ穿たれ，0.7m程で主室に至る。底面は皿状を呈し，竪坑・主室よりも0.2m程窪んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，天井部はアーチ状を呈している。

主室 竪坑の底面からさらに0.05m程掘り窪められ，底面は平坦である。底面における平面形は，奥行1.66m・幅2.17mの長形状を呈している。

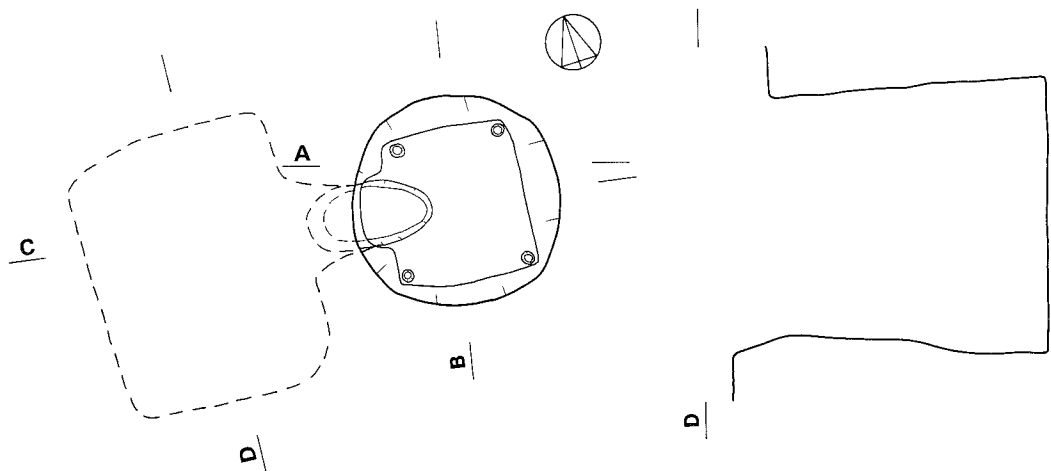
壁 竪坑ではほぼ垂直に立ち上がり，主室ではややオーバーハングして立ち上がり天井部はアーチ状を呈している。

覆土 上層に粘土・ローム粒子を少量含む褐色土，中層に粘土・ローム粒子を少量含む暗褐色土，下層に粘土を多く含む黄褐色土が自然堆積している。

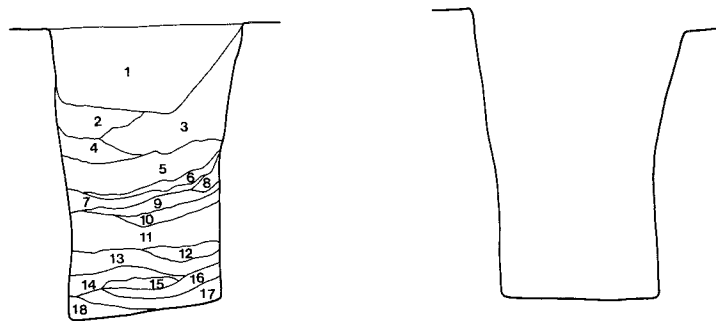
遺物 土師器14点（甕2・甕片），須恵器1点（甕片），内耳土器2点。遺物量は少なく，210・211の甕の口縁部片が覆土から出土している。

第5号地下式墳 [SK-114] (第79図)

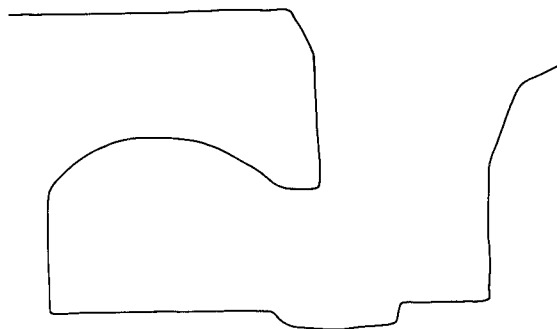
位置 調査区の中央部 B2c₆区を中心に確認された地下式墳で，東側0.5m程に第4号地下式墳が位置している。



A 21.6 m



C



第4号地下式墳(土層解説)

- 1 褐色 ローム粒子中量, 硬く締まる。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 硬く締まる。
- 3 褐色 ローム粒子中量, 粘土少量, 硬く締まる。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土少量。
- 6 暗褐色 炭化物中量, 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土少量, 硬く締まる。
- 8 にぶい黄褐色 粘土中量, 粘性強く, 硬く締まる。
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量。
- 10 暗褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 11 褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 12 暗褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 13 褐色 粘土中量, ローム粒子少量, 粘性強く, 硬く締まる。
- 14 にぶい黄褐色 粘土中量, ローム粒子少量, 粘性強く, 硬く締まる。
- 15 暗褐色 ローム粒子・粘土少量, 硬く締まる。
- 16 黄褐色 粘土中量, ローム粒子少量, 粘性強く, 硬く締まる。
- 17 にぶい黄色 粘土中量, ローム粒子少量。
- 18 黄褐色 粘土中量, ローム粒子少量。



第 78 図 第 4 号地下式墳実測図

主軸方向 N-85°-Wを指し、確認面における全長は約2.4mである。

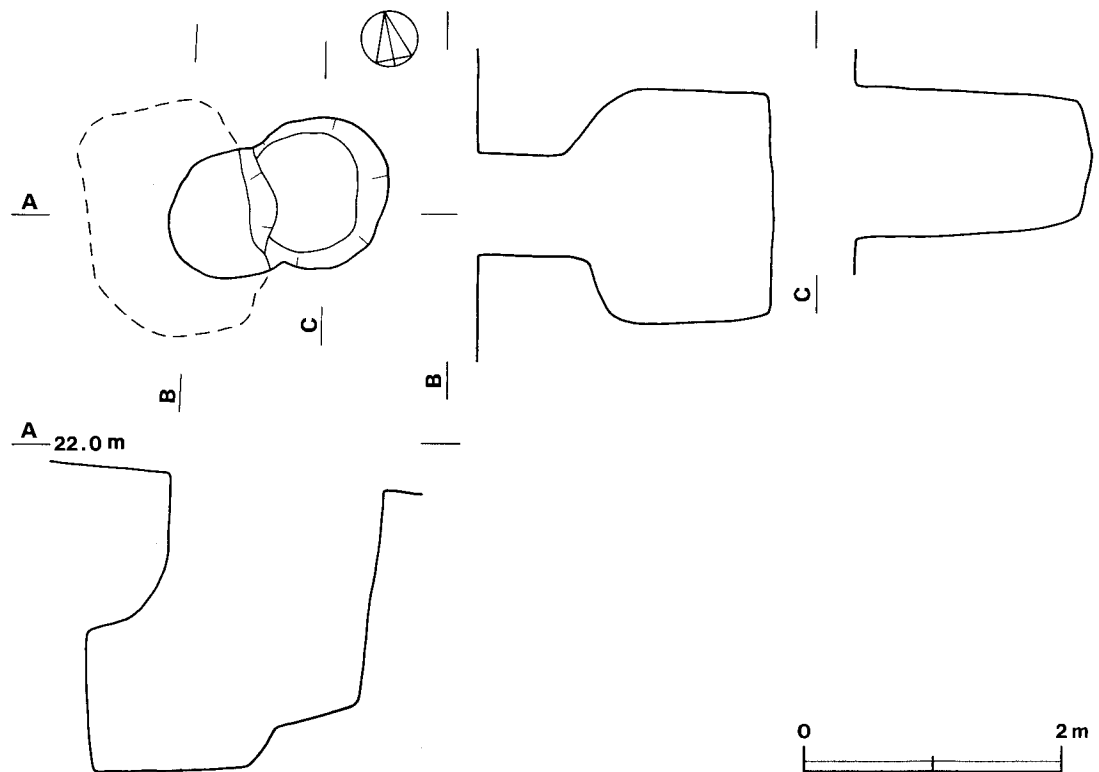
竪坑 確認面から1.85mまで掘り込まれ、底面は皿状を呈し、主室に向かって傾斜している。底面における平面形は、長径0.92m・短径0.75mの楕円形を呈し、長径方向は本墳の主軸方向と直交している。

主室 竪坑の底面よりさらに0.3m程掘り窪められ、底面は平坦である。底面における平面形は、奥行1.29m・幅1.82mの隅丸長方形を呈している。

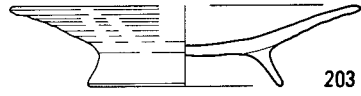
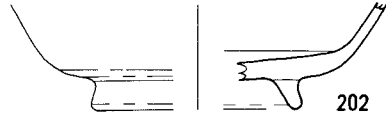
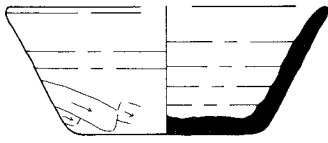
壁 竪坑はほぼ垂直に立ち上がり、主室はややオーバーハングして1.4mの高さで天井に移行する。主室の天井部はアーチ状を呈している。

覆土 自然堆積で、竪坑から主室に向かって黒褐色土の流れ込みが見られる。

遺物 土師器21点（甕片・坏片）、須恵器2点（蓋片）、陶器1点（皿1）、内耳土器片3点（実測1点含む）。212の内耳土器・213の皿が覆土から出土している。



第 79 図 第 5 号地下式墳実測図

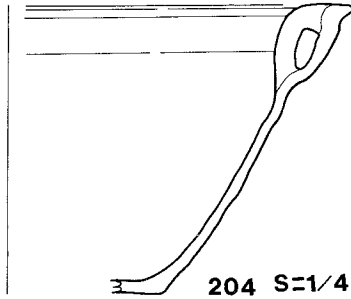
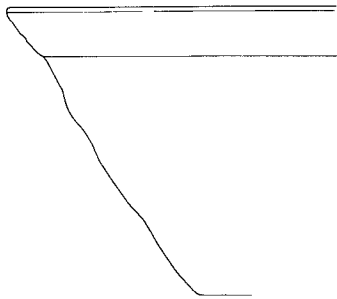


201

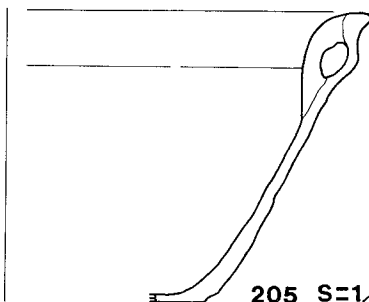
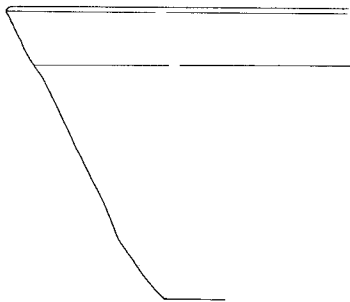
202

203

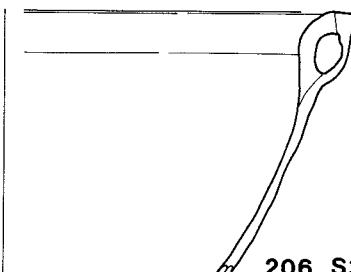
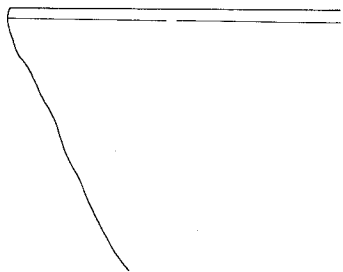
第2号地下式壙



204 S=1/4



205 S=1/4

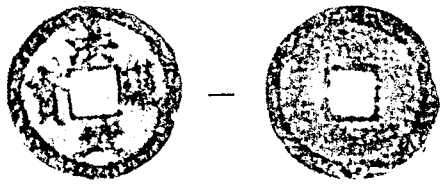
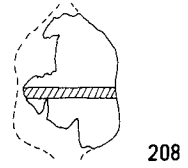
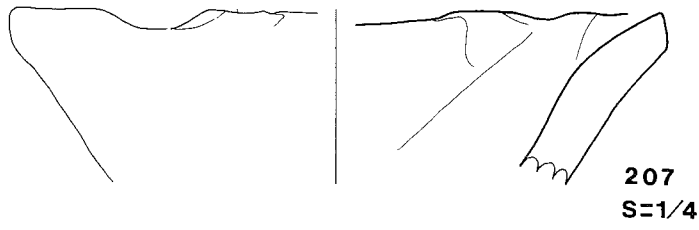


206 S=1/4

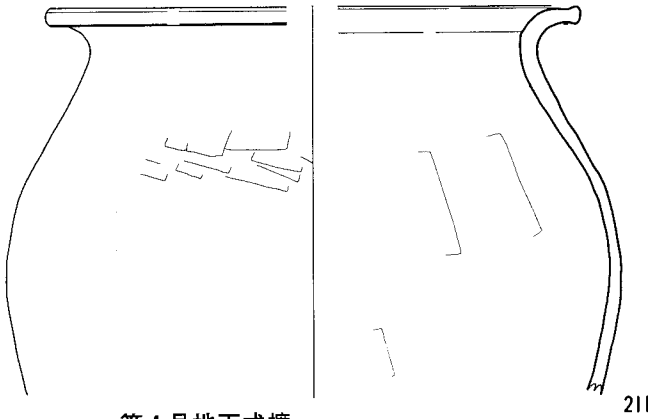
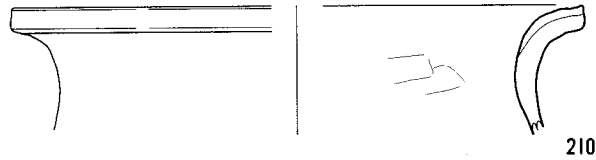
第3号地下式壙



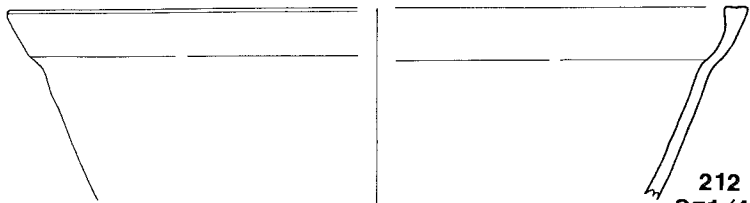
第80图 第2・3号地下式壙出土遺物実測図



第3号地下式壙



第4号地下式壙



第5号地下式壙

212
S=1/4
0

10 cm

第81图 第3・4・5号地下式壙出土遺物実測・拓影图

第3号地下式墳出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 204	内耳土器	A [36.0] B (15.2) C [16.2]	体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に銅墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P94 30% 主室の覆土下層
205	内耳土器	A [37.9] B 15.5 C [21.0]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に銅墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P95 20% 主室の覆土下層
206	内耳土器	A [36.6] B (13.9)	体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に銅墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	P96 10% 主室の覆土下層
第81図 207	鉢 石製品	A [34.4] B (9.1)	体部は直線的に外傾し、口縁部の片側に口が付く。	外面工具による削り。	砂岩	Q4 10% 主室の覆土上層
図版番号	器種	法量(cm)		備考		
208	鍬 鉄製品	鍬身長 (5.4)	鍬身幅 (3.8)	鍬身の一部。 主室の覆土 M4		
図版番号	名称	初鑄年(西暦)	備考			
209	洪武通寶	洪武元年(1368)	主室の覆土 M5			

第4号地下式墳出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
図81図 210	甕 土師器	A [22.2] B (5.1)	頸部は丸みをもって外反し、口縁端部はわずかにつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P97 5% 覆土
211	甕 土師器	A [20.6] B (15.5)	胴部は上位で丸く張る。頸部は丸みをもって強く外反し、口縁端部をわずかにつまみ上げる。胴部最大径は上位(24.2cm)。	口縁部から胴部上位にかけて内・外面横ナデ。胴部外面中位以下縦位のヘラナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 やや不良	P98 20% 覆土

第5号地下式墳出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 212	内耳土器	A [39.0] B (10.2)	体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅の広い浅い凹線が巡る。外面に銅墨付着。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母 赤黒色 普通	P99 5% 覆土
213	皿 陶器	B (1.8) D [4.0] E (0.6)	平底で、低い削り出し高台が付く。高台の畳付は平坦。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。体部下端以下露胎。	水挽き成形。高台削り出し。	(胎土) 淡黄色 (釉) 灰白色 (焼成) 良好	P100 10% 覆土

9 土坑

当遺跡から土坑が100基検出されている。人骨や古銭が出土し、明らかに墓塚と思われるものが1基で、他は円形・方形・ピット状を呈し、遺物の出土がほとんどみられないものである。墓塚については文章で記述し、他は一覧表で掲載した。

(1) 墓塚

第122号墓塚 (第82図)

位置 調査区の中央部 A2j₉区をを中心に確認された墓塚である。

平面形 長径0.88m・短径0.86mの不整円径を呈している。

壁 残存している壁高は18cmを測り、緩やかに立ち上がっている。

底面 平坦で硬く締まっており、西端に径25cm・深さ58cmの円形を呈するピットが検出されている。

覆土 人為的に埋め戻された様相を呈しており、ローム粒子や粘土を含む硬く締まった黒褐色土が堆積している。ピットの覆土から、柱痕跡が確認されている。

遺物 土師器1点(甕片1)、古銭10点、人骨。ピットの東側の覆土下層から人骨が出土している。また、

覆土から214の甕の底部片と215~224の古銭(開元通寶1・天聖元寶1・熙寧元寶1・元祐通寶1・政和通寶1・洪武通寶2・永樂通寶2・○○○寶1) 10枚が出土している。



SK-122《土層解説》

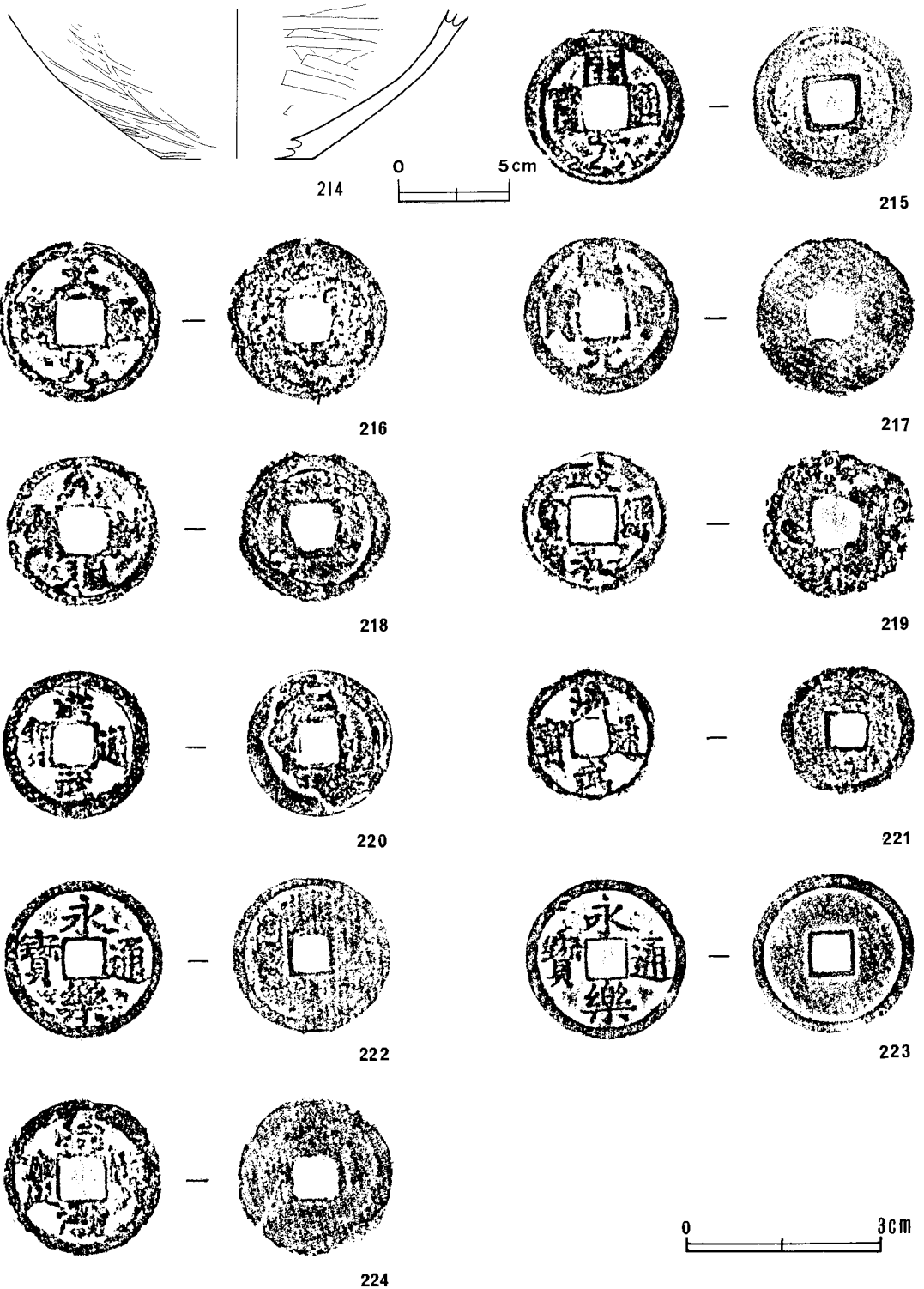
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土少量、硬く締まる。
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、硬く締まる。
- 5 黒褐色 ローム粒子・粘土少量、硬く締まる。

第82図 第122号墓塚実測図

第122号墓塚出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 214	甕 土師器	B (6.9) C [7.0]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面及び底部ヘラ磨き。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P101 10% 覆土

図版番号	名称	初鑄年(西暦)	備考
215	開元通寶	武德四年(621)	覆土 M10
216	天聖元寶	天聖元年(1023)	覆土 M12



第 83 图 第122号墓出土遺物実測・拓影图

図版番号	名称	初鑄年(西曆)	備考
第83図 217	熙寧元寶	熙寧元年(1068)	覆土 M11
218	元祐通寶	元祐元年(1086)	覆土 M14
219	政和通寶	政和元年(1111)	覆土 M13
220	洪武通寶	洪武元年(1368)	覆土 M8
221	洪武通寶	洪武元年(1368)	覆土 M9
222	永樂通寶	永樂六年(1408)	覆土 M6
223	永樂通寶	永樂六年(1408)	覆土 M7
224	○○○寶	—	覆土 M15

(2) 土坑

表2 土坑一覽表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
1	B2d ₄	N-44°-E	隅丸長方形	1.82 × 1.22	0.15	外傾	平坦	N	土師器片7点	SI9・10→本跡	第84図
4	B3e ₃		円形	1.28 × 1.12	0.14	緩斜	平坦	N		SB1(不明)	〃
6	B3c ₂	N-53°-E	不整形	1.00 × 0.79	0.68	外傾	平坦	N	土師器片1点, 内耳土器片1点		〃
7	B3c ₂	N-24°-E	〔隅丸長方形〕	(0.98) × 0.81	0.27	緩斜	平坦	N		SK8(不明)	〃
8	B3c ₂		円形	0.76 × 0.74	0.30	外傾	平坦	N	土師器片7点 球状土錘1点	SK7(不明)	〃
9	B2a ₅	N-73°-W	隅丸長方形	2.35 × 0.68	0.67	外傾	平坦	N	土師器片57点, 須惠器片3 点, 縄文式土器片4点	SX1→本跡	〃
11	C3a ₇	N-23°-E	不整楕円形	3.32 × 1.79	0.35	緩斜	凹凸	N	土師器片3点		〃
12	B3b ₁	N-7°-E	不整長方形	1.26 × 0.94	0.30	外傾	平坦	N	土師器片1点		第85図
13	B3a ₂	N-67°-E	不整形	0.91 × 0.77	0.56	緩斜	平坦	B			〃
14	B3b ₃	N-61°-W	〔不整形〕	1.51 × (0.72)	0.10	緩斜	平坦	N			〃
15	B3b ₁	N-25°-E	隅丸長方形	2.91 × 1.17	0.30	緩斜	平坦	N	土師器片10点 陶器片1点	SK21(不明)	〃
17	B3b ₁		〔円形〕	1.13 × (0.84)	0.44	外傾	平坦	B	土師器片4点, 須惠器片1点, 土師質 土器片2点(皿1), 縄文式土器片2点	本跡→SK18-P15	〃
18	B3b ₁		〔円形〕	0.87 × 0.79	0.86	外傾	平坦	B		SK17→本跡→P 15	〃
19	B3b ₂	N-34°-E	隅丸長方形	1.18 × 0.85	0.22	外傾	平坦	N			〃
20	B3c ₁	N-23°-E	〔楕円形〕	[1.25] × 0.80	0.10	緩斜	平坦	B		SK43→本跡, SK27(不明)	〃
21	B3c ₁	N-31°-E	〔不整形〕	1.68 × (1.10)	0.68	外傾	皿状	B	土師質土器片1点(皿1), 内耳土器片1点	本跡→SK41, SK15(不明)	第86図
22	B3c ₁	N-81°-W	隅丸長方形	1.00 × 0.86	0.13	緩斜	平坦	N		SK73, SK101(不 明)	〃
25	B3c ₂	N-65°-W	隅丸長方形	2.60 × 1.61	0.23	外傾	凹凸	B	土器片7点, 陶器片1点	SK36(不明)	〃
26	B3b ₂		円形	0.83 × 0.78	0.14	外傾	平坦	N	縄文式土器片1点		〃
27	B3c ₁	N-32°-E	隅丸長方形	1.14 × 0.84	0.37	外傾	皿状	N		SK20・38・41→本 跡	第87図
28	B3b ₂	N-74°-E	不整形	1.45 × 0.88	0.36	外傾	傾斜	B			第86図

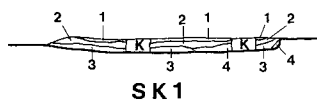
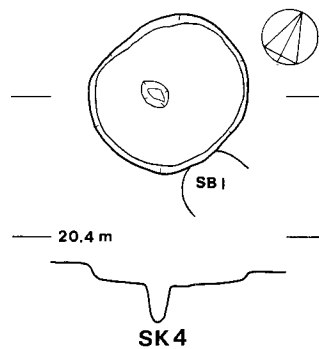
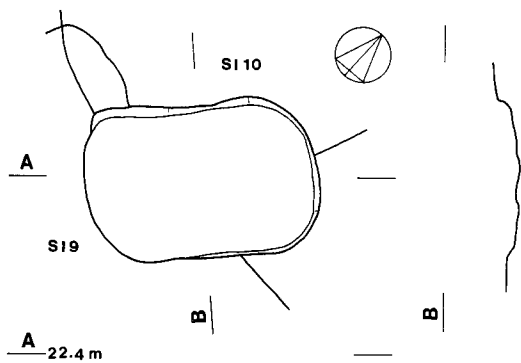
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
30	B3b ₂		円形	0.95 × 0.93	0.51	段状	凹凸	N	陶器片1点(播鉢1)		〃
31	B3b ₃	N-73°-W	不整形	1.54 × (1.13)	0.27	緩斜	平坦	N		本跡→P21	第87図
32	B3b ₄	N-54°-W	[楕円形]	2.41 × (0.55)	0.13	緩斜	凹凸	N		SK33(不明)	〃
33	B3b ₄		円形	1.03 × 1.01	0.13	緩斜	傾斜	N		SK32(不明)	〃
34	B3b ₃		円形	0.80 × 0.77	0.35	外傾	傾斜	B		本跡→P24	〃
35	B3c ₃		円形	1.01 × 0.99	0.06	緩斜	平坦	B			〃
36	B3c ₂	N-32°-E	方形	1.41 × 1.30	0.25	外傾	平坦	N	土師器片6点	SK25(不明)	第86図
37	B3c ₂	N-22°-E	隅丸長方形	1.54 × 0.90	0.29	垂直	皿状	B	土師器片2点,内耳土器片1点,縄文式土器片1点	SK38→本跡→SK40・44	第87図
38	B3c ₂	N-27°-E	[楕円形]	1.35 × (0.62)	0.16	緩斜	平坦	B		本跡→SK27・37・40・41	〃
40	B3c ₁	N-40°-E	楕円形	(1.05) × 0.44	0.29	外傾	平坦	B		SK37・38→本跡	〃
41	B3c ₁	N-11°-E	[隅丸長方形]	(1.37) × 0.86	0.27	緩斜	平坦	B	土師質土器片1点(皿1)	SK38→本跡→SK21・27	〃
42	B3e ₇		円形	0.88 × 0.86	0.31	外傾	皿状	N		SI17・SF3→本跡,SD3(不明)	第88図
43	B3c ₁	N-65°-W	[隅丸長方形]	1.04 × [0.85]	0.10	緩斜	平坦	B		本跡→SK20	第85図
44	B3c ₂	N-26°-E	隅丸長方形	1.51 × 1.13	0.30	外傾	平坦	N	土師器片12点,内耳土器片2点	S K37→本跡	第88図
45	B3c ₃	N-66°-W	楕円形	0.97 × 0.69	0.41	外傾	皿状	N	土師器片2点,須恵器片2点		〃
46	B3d ₃	N-62°-W	不整長方形	2.46 × 1.32	0.30	外傾	凹凸	B	土師器片2点,縄文式土器片1点	SK47→本跡	〃
47	B3d ₃	N-22°-E	[楕円形]	(0.97) × 0.88	0.09	緩斜	平坦	N	土師器片1点	本跡→SK46	〃
48	B3d ₂		円形	0.94 × 0.88	0.39	外傾	平坦	N	土師器片2点,縄文式土器片1点		〃
49	B3d ₂		円形	0.95 × 0.87	0.51	段状	皿状	B	縄文式土器片1点		〃
50	B3e ₃	N-17°-E	楕円形	1.10 × 0.72	0.13	緩斜	平坦	N			〃
51	B3c ₁		円形	0.62 × 0.61	0.24	緩斜	皿状	B			〃
52	B3d ₁	N-20°-E	隅丸長方形	1.01 × 0.91	0.28	緩斜	皿状	N	土師器片2点		〃
53	B3c ₄	N-28°-E	[不整楕円形]	(1.22) × 0.73	0.27	緩斜	平坦	N	土師器片7点,縄文式土器片1点	本跡→SK54	〃
54	B3c ₄	N-68°-E	隅丸長方形	0.83 × 0.60	0.39	垂直	平坦	N	土師器片7点,須恵器片1点,縄文式土器片1点	SK53→本跡	〃
56	B3d ₄		円形	0.96 × 0.83	0.09	緩斜	平坦	N		本跡→SK58	〃
57	A2j ₃		円形	0.60 × 0.60	0.55	段状	平坦	B	土師器片4点		第89図
58	B3b ₄	N-84°-E	[楕円形]	(1.71) × 1.33	0.12	緩斜	凹凸	B		SK56→本跡→SK59	〃
59	B3d ₄	N-11°-E	隅丸長方形	1.55 × 1.17	0.15	緩斜	凹凸	B	土師器片5点,須恵器片1点,陶器片1点	SK58→本跡	〃
60	B3d ₅	N-17°-E	楕円形	1.75 × 0.93	0.11	緩斜	平坦	N		本跡→P93	〃

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
61	B3c ₄	N-20°-E	楕円形	2.26 × 1.32	0.12	緩斜	傾斜	不明	土師器片24点,陶器片1点(皿1),内耳土器片1点,縄文式土器片2点,	本跡→SK62・P68	第89図
62	B3d ₄	N-32°-E	楕円形	1.36 × 1.01	0.47	外傾	平坦	不明		SK61→本跡	〃
63	B3f ₄		円形	0.96 × 0.92	0.52	段状	平坦	B		SB1・SK66(不明)	〃
64	B3c ₄	N-7°-E	不整楕円形	1.10 × 0.47	0.14	緩斜	皿状	N			〃
65	B3e ₄	N-64°-E	隅丸長方形	1.70 × 1.15	0.26	緩斜	平坦	N	土師器片8点,須恵器1点		〃
66	B3f ₄	N-71°-W	隅丸長方形	2.26 × 0.99	0.12	緩斜	平坦	N		SK63(不明)	〃
68	B3f ₈	N-16°-E	隅丸長方形	1.56 × 1.42	0.57	外傾	皿状	N	土師器片4点	SD3(不明)	第90図
69	B3f ₈	N-9°-E	不整楕円形	1.43 × 0.95	0.13	緩斜	皿状	N	須恵器片1点,縄文式土器片1点		〃
70	B3f ₈	N-47°-E	隅丸長方形	0.93 × 0.72	0.34	段状	皿状	N	須恵器片1点		〃
71	B3e ₁	N-22°-E	方形	2.31 × 2.26	0.14	緩斜	凹凸	N	土師器片6点,縄文式土器片3点	SE1・SD2(不明)	〃
72	B2b ₂	N-60°-W	楕円形	1.32 × 0.97	0.33	外傾	平坦	B	土師器片10点,縄文式土器片2点		〃
73	B3c ₁	N-7°-E	不整形	5.82 × 1.68	0.17	外傾	平坦	N	土師器片3点,内耳土器片1点,縄文式土器片1点	本跡→SK101,SK22(不明)	〃
75	B2a ₂	N-23°-E	楕円形	0.68 × 0.52	0.48	外傾	平坦	N	土師器片4点,縄文式土器片2点,石鏃1点		〃
76	B2d ₀		円形	0.79 × 0.74	0.15	緩斜	平坦	N	須恵器1点,内耳土器片1点		〃
77	B3d ₁	N-58°-W	[不整形]	(0.87) × 0.85	0.12	緩斜	凹凸	B	土師器片1点	本跡→SK90	〃
78	A2i ₃	N-77°-E	不整形	1.16 × 1.13	1.13	緩斜	平坦	B	土師器片4点,縄文式土器片1点		第91図
79	A2i ₃		不整円形	0.55 × 0.53	0.42	段状	皿状	N	土師器片2点,縄文式土器片1点		〃
80	B3d ₃	N-8°-E	隅丸長方形	1.46 × 1.23	0.20	緩斜	平坦	N	土師器片1点	本跡→SK102	〃
81	B3d ₃		円形	1.11 × 0.97	0.40	緩斜	皿状	N			〃
82	B3e ₃	N-12°-E	楕円形	1.26 × 0.69	0.35	外傾	平坦	N		SK83→本跡	〃
83	B3e ₂	N-71°-E	[隅丸長方形]	(1.52) × 1.07	0.17	外傾	平坦	B	土師器片3点,縄文式土器片1点	本跡→SK82, P56(不明)	〃
84	B3e ₂	N-9°-E	不整形	2.18 × 0.94	0.30	緩斜	傾斜	B	土師器片2点		〃
85	B3e ₂	N-34°-E	[不整形]	1.65 × (0.84)	0.59	段状	皿状	N	土師器片5点,縄文式土器片2点	SK87→本跡	〃
86	A2i ₄	N-51°-E	楕円形	0.80 × 0.64	0.45	垂直	皿状	N		SI28→本跡	〃
87	B3e ₂		円形	1.02 × 0.88	0.33	外傾	平坦	N	縄文式土器片2点	本跡→SK85	〃
89	B3e ₂	N-6°-W	[楕円形]	1.70 × [1.33]	0.32	緩斜	凹凸	N	土師器片1点,須恵器片1点,陶器片1点	SE1(不明)	〃
90	B3d ₁		円形	1.13 × 1.02	0.41	緩斜	皿状	B	土師器片2点,縄文式土器片1点	SK77→本跡	第90図
91	A2i ₄	N-16°-E	[方形]	(1.40) × 1.38	0.17	緩斜	平坦	N	土師器片2点,須恵器片1点	SI28→本跡	第92図
92	A2g ₄	N-18°-E	[隅丸長方形]	(1.40) × 1.15	0.35	緩斜	皿状	N	土器片2点,陶器片1点	SI27→本跡	〃
93	A2g ₄	N-60°-W	[楕円形]	(2.02) × (1.75)	0.35	緩斜	皿状	N	土師器片5点,縄文式土器片2点	SI27→本跡	〃

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
94	B2e _s	N-61°-W	楕円形	1.41 × 0.64	0.17	緩斜	皿状	N		SK96 (不明)	第92図
95	B2c _s	N-14°-W	楕円形	1.50 × 0.99	0.15	外傾	平坦	N			〃
96	B2d _s		不整円形	0.63 × 0.58	0.18	緩斜	皿状	N		SK94 (不明)	〃
97	B2d _o		円形	0.63 × 0.53	0.32	垂直	平坦	N	土師器片2点	SK98 (不明)	〃
98	B2d _o		円形	0.77 × 0.65	0.26	緩斜	皿状	N	土師器片1点, 須恵器片1点	SK97 (不明)	〃
99	B2a _o	N-20°-E	楕円形	1.25 × 0.75	0.38	外傾	平坦	B	土師器片2点,陶器片1点,縄文式土器片1点		〃
100	B2d _o	N-72°-W	不整楕円形	1.14 × 0.73	0.13	緩斜	平坦	B	土師器片7点,土師質土器1点,縄文式土器片1点		〃
101	B3c ₁	N-21°-E	楕円形	1.07 × 0.78	0.45	外傾	平坦	B		SK73→本跡, SK22 (不明)	第90図
102	B3d ₂		円形	0.67 × 0.62	0.25	緩斜	皿状	N		SK80→本跡	第91図
115	B3h _s		円形	0.57 × 0.53	0.28	緩斜	皿状	N			第92図
116	B3g _s		円形	0.67 × 0.63	0.34	外傾	平坦	B			第93図
117	B3h ₄	N-61°-E	[楕円形]	(0.86) × 0.62	0.43	段状	平坦	B		本跡→SK118	〃
118	B3h ₄		円形	0.60 × 0.60	0.41	段状	平坦	B		SK117→本跡	〃
119	B3h ₄	N-84°-W	楕円形	0.72 × 0.46	0.30	段状	皿状	N			〃
120	B3i ₄	N-36°-W	不整楕円形	0.66 × 0.44	0.28	段状	凹凸	B			〃
121	B3h ₅	N-58°-W	不整楕円形	0.74 × 0.58	0.66	段状	平坦	B			〃
123	A2j7	N-84°-W	[長方形]	(1.80) × 0.78	0.34	外傾	平坦	N		SI19→本跡	〃
125	A2i7	N-6°-E	[長方形]	1.27 × (0.50)	0.79	外傾	皿状	N		SK3→本跡	〃

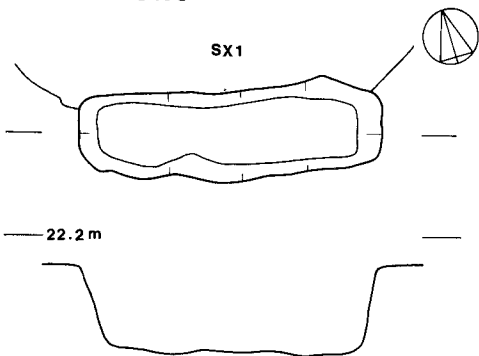
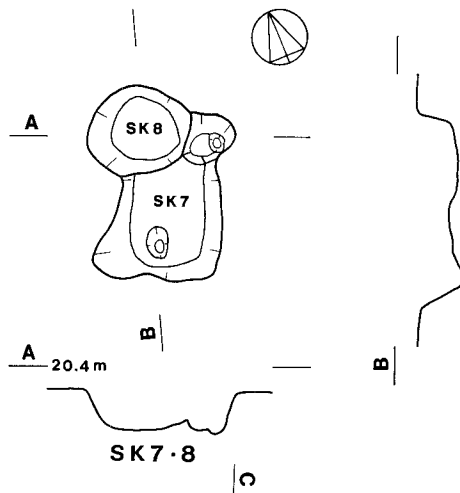
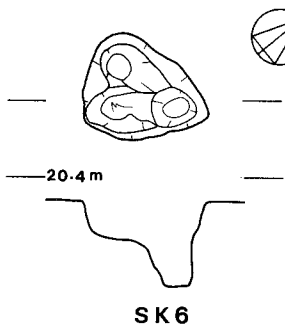
土坑出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 225	播鉢 陶器	B (7.8) C [11.4]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部外面下端は整形時の指頭痕が目立つ。底部内面周縁は使用による摩滅。	体部内・外面ナデ。	粗い砂粒 にぶい赤褐色 良好	P104 10% SK30の覆土
226	皿 陶器	B (2.1) C 6.8	おろし目皿。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。見込みには、ヘラによる格子状のおろし目が刻まれている。外面露胎。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	(胎土)浅黄橙色 (釉)オリブ灰色 (焼成)普通	P106 40% SK61の覆土
227	皿 土師質土器	A [9.8] B (2.5)	体部は肥厚し、外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒 にぶい橙色 やや不良	P102 20% SK17の覆土



SK-1《土層解説》

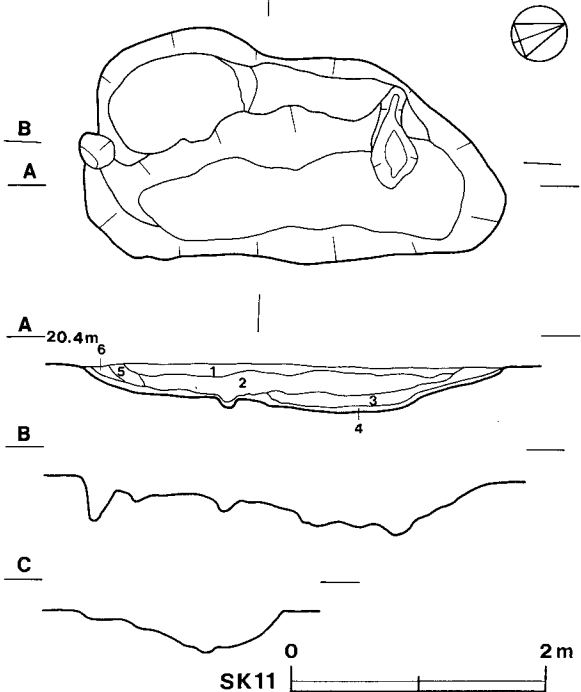
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。
- 4 褐色 ローム粒子少量。



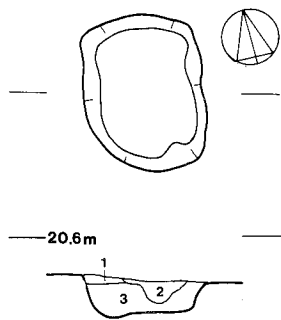
SK9

SK-11《土層解説》

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、硬く締まる。
- 4 褐色 ローム粒子少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量。



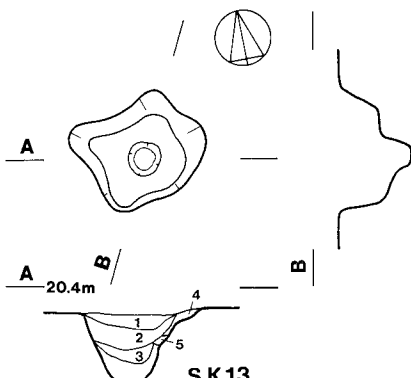
第 84 図 土坑実測図(1)



SK12

SK-12《土層解説》

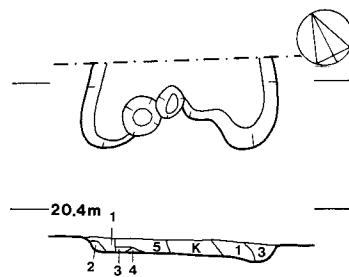
- 1 褐色 ローム粒子中量。
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量、硬く締まる。



SK13

SK-13《土層解説》

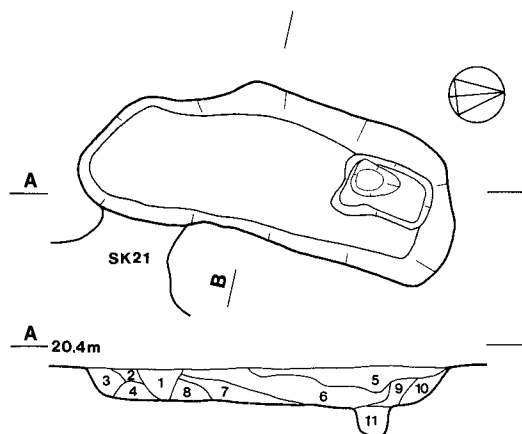
- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子中量。
- 5 褐色 ローム粒子中量。



SK14

SK-14《土層解説》

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量。



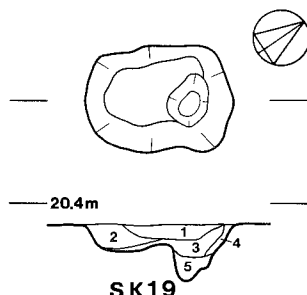
SK21



SK15

SK-15《土層解説》

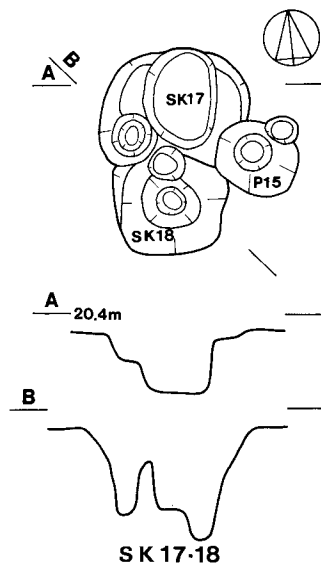
- 1 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 黒褐色 ローム粒子少量。
- 6 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 8 褐色 ローム粒子少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子少量。
- 10 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 11 褐色 ローム粒子中量。



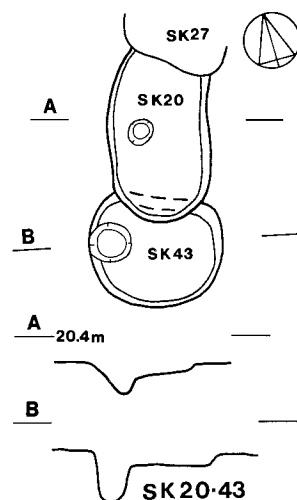
SK19

SK-19《土層解説》

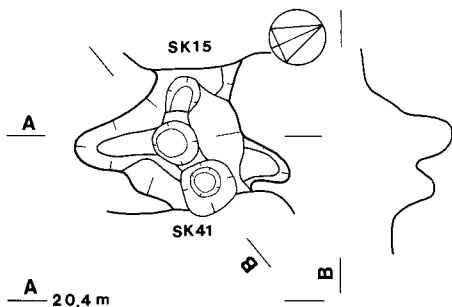
- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量。



SK17-18



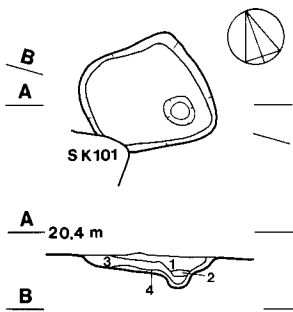
SK20-43



SK21

SK-21《土層解説》

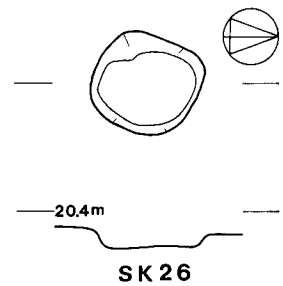
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量，硬く締まる。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。



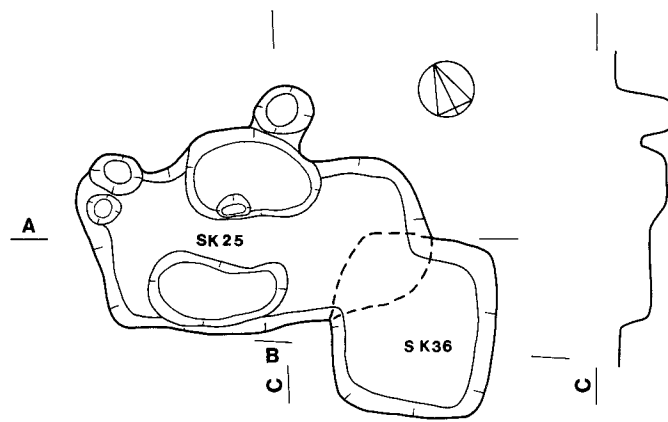
SK22

SK-22《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子少量。



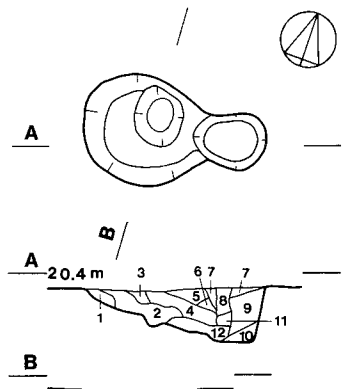
SK26



SK25-36

SK-25《土層解説》

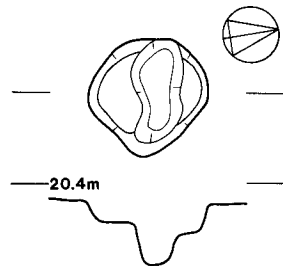
- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量，硬く締まる。
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム小ブロック中量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム小ブロック中量。
- 7 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量。
- 9 褐色 ローム粒子中量。
- 10 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。



SK28

SK-28《土層解説》

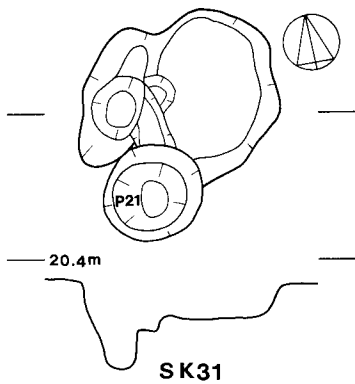
- 1 褐色 ローム粒子多量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子中量。
- 5 黒褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム小ブロック多量。
- 7 暗褐色 ローム粒子少量。
- 8 黒褐色 ローム粒子少量，硬く締まる。
- 9 暗褐色 ローム粒子中量。
- 10 褐色 ローム小ブロック中量。
- 11 黒褐色 ローム粒子中量。
- 12 褐色 ローム粒子中量。



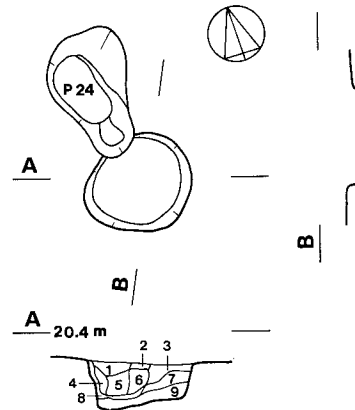
SK30



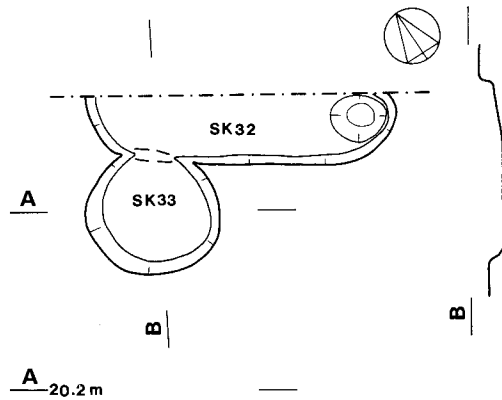
第 86 図 土坑実測図(3)



SK31



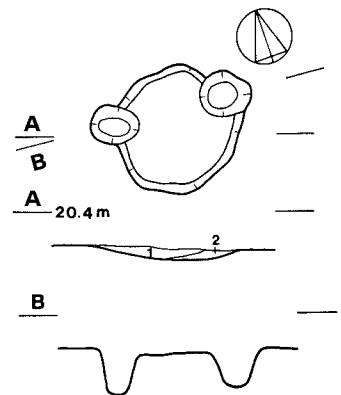
SK34



SK32・33

SK-34《土層解説》

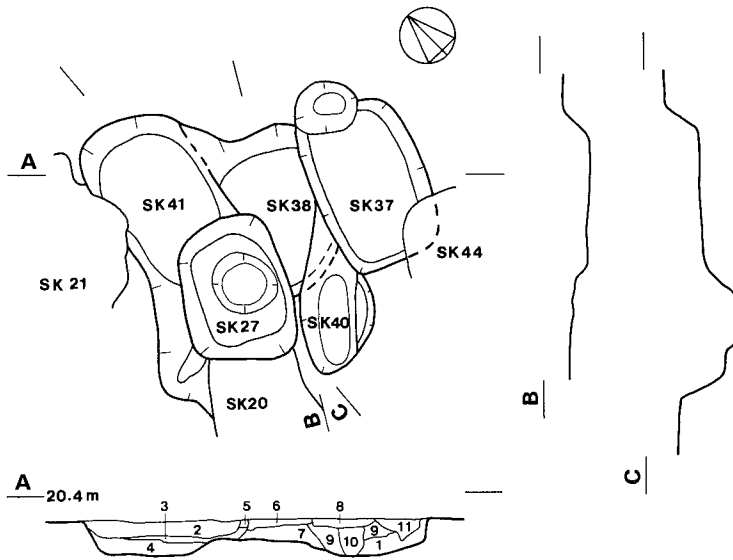
- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量。
- 5 黒褐色 ローム粒子極少量。
- 6 褐色 ローム小ブロック中量，硬く締まる。
- 7 褐色 ローム粒子中量。
- 8 褐色 ローム粒子多量，硬く締まる。
- 9 褐色 ローム粒子中量，硬く締まる。



SK35

SK-35《土層解説》

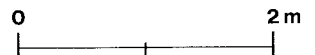
- 1 黒褐色 ローム粒子中量。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量。



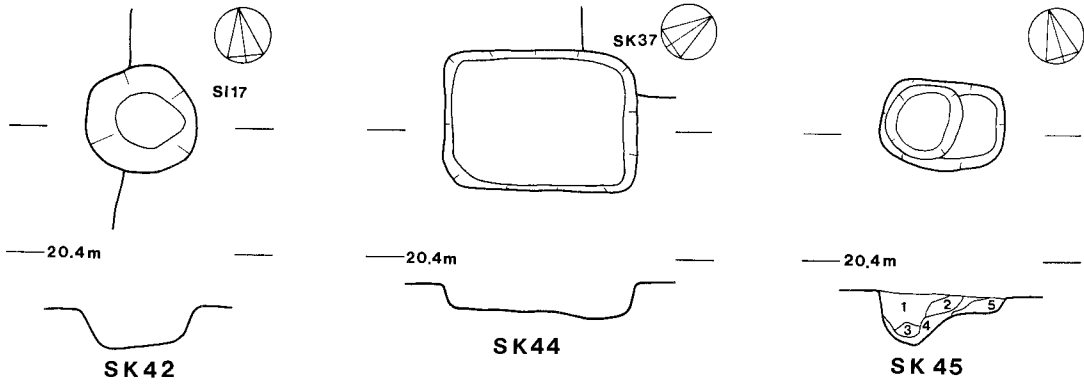
SK27・37・38・40・41

SK-37・38・41《土層解説》

- 1 褐色 ローム粒子中量。(SK-37の覆土)
- 2 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量。(SK-41の覆土)
- 3 褐色 ローム粒子中量。(SK-41の覆土)
- 4 褐色 ローム小ブロック中量。(SK-41の覆土)
- 5 褐色 ローム粒子少量。(SK-41の覆土)
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量。(SK-38の覆土)
- 7 褐色 ローム粒子多量，硬く締まる。(SK-38の覆土)
- 8 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。(SK-37の覆土)
- 9 褐色 ローム小ブロック中量，炭化粒子少量。(SK-37の覆土)
- 10 黒褐色 ローム小ブロック中量。(SK-37の覆土)
- 11 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。(SK-37の覆土)

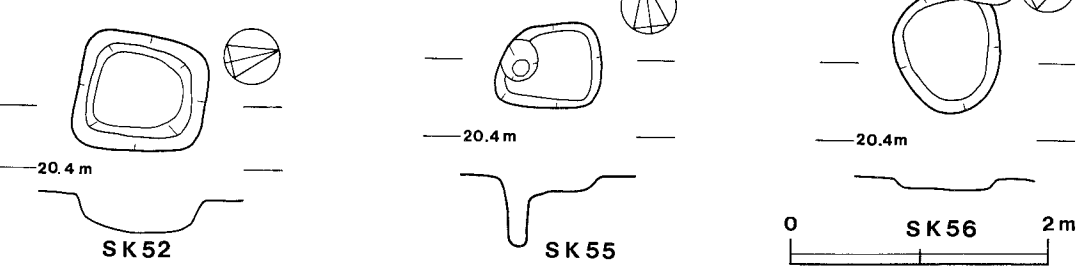
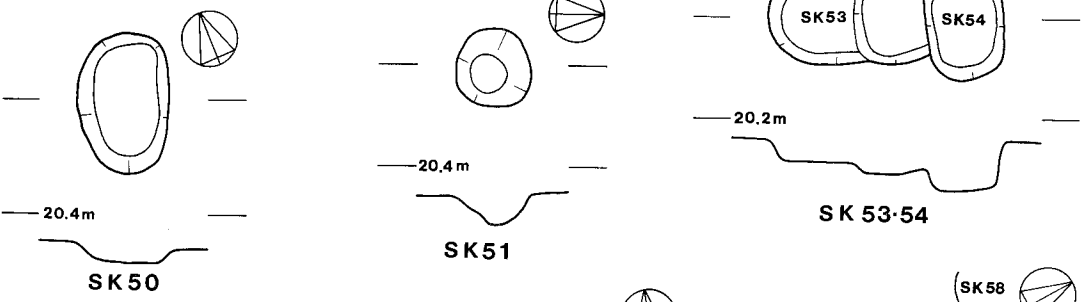
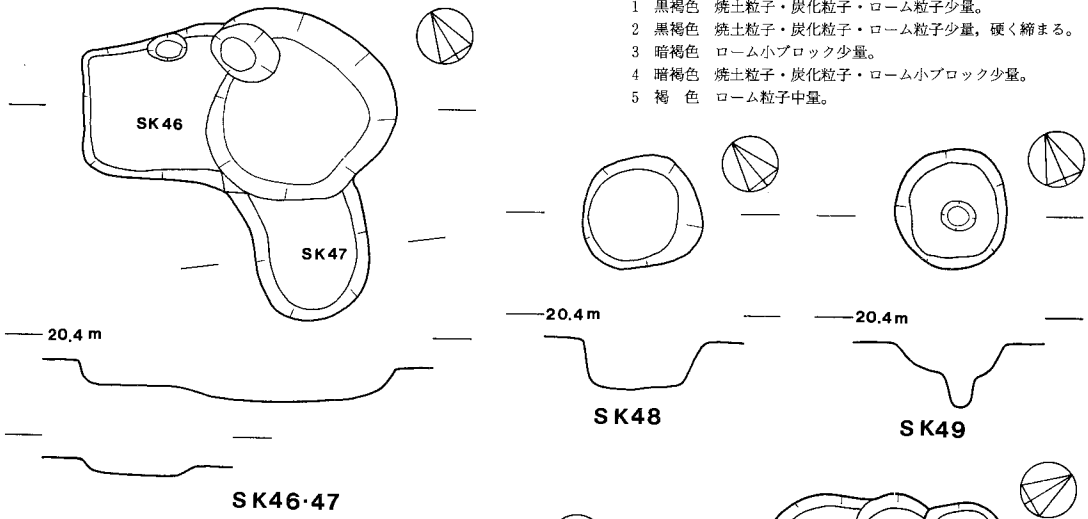


第 87 図 土坑実測図(4)

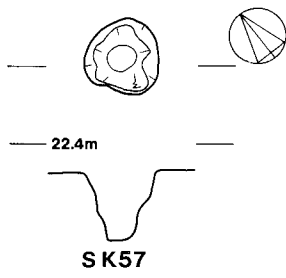


SK-45《土層解説》

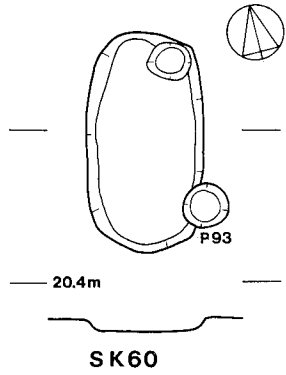
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、硬く締まる。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 5 褐色 ローム粒子中量。



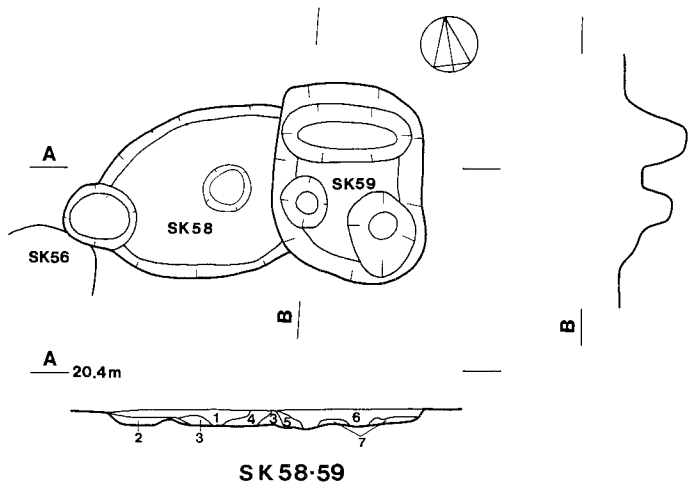
第 88 図 土坑実測図(5)



SK57



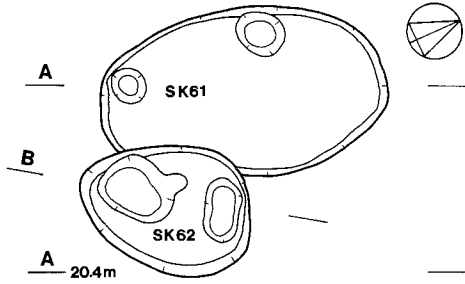
SK60



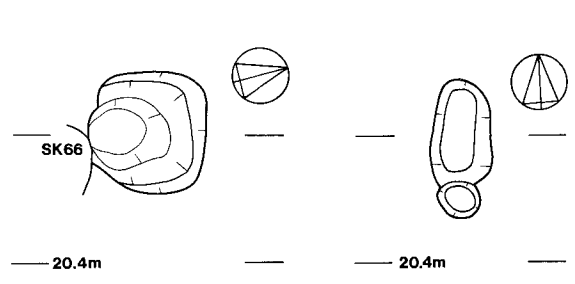
SK 58-59

SK-58・59 《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。(SK-58の覆土)
- 2 褐色 ローム粒子中量。(SK-58の覆土)
- 3 黒褐色 ローム粒子少量。(SK-58の覆土)
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。(SK-58の覆土)
- 5 褐色 ローム小ブロック少量。(SK-59の覆土)
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土少量。(SK-59の覆土)
- 7 褐色 ローム粒子多量。(SK-59の覆土)

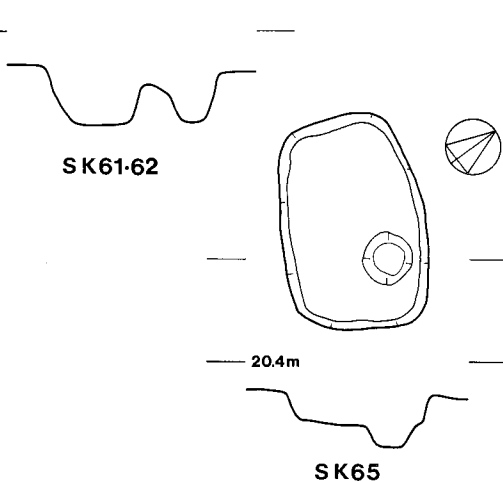


SK61-62



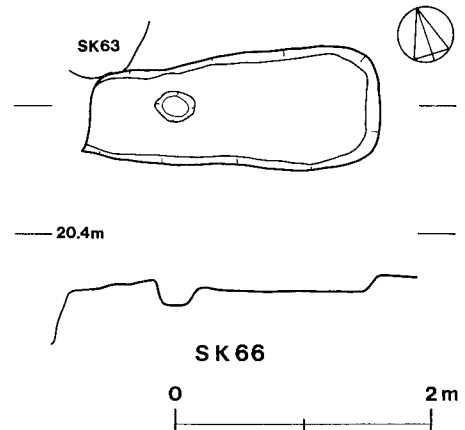
SK63

SK64



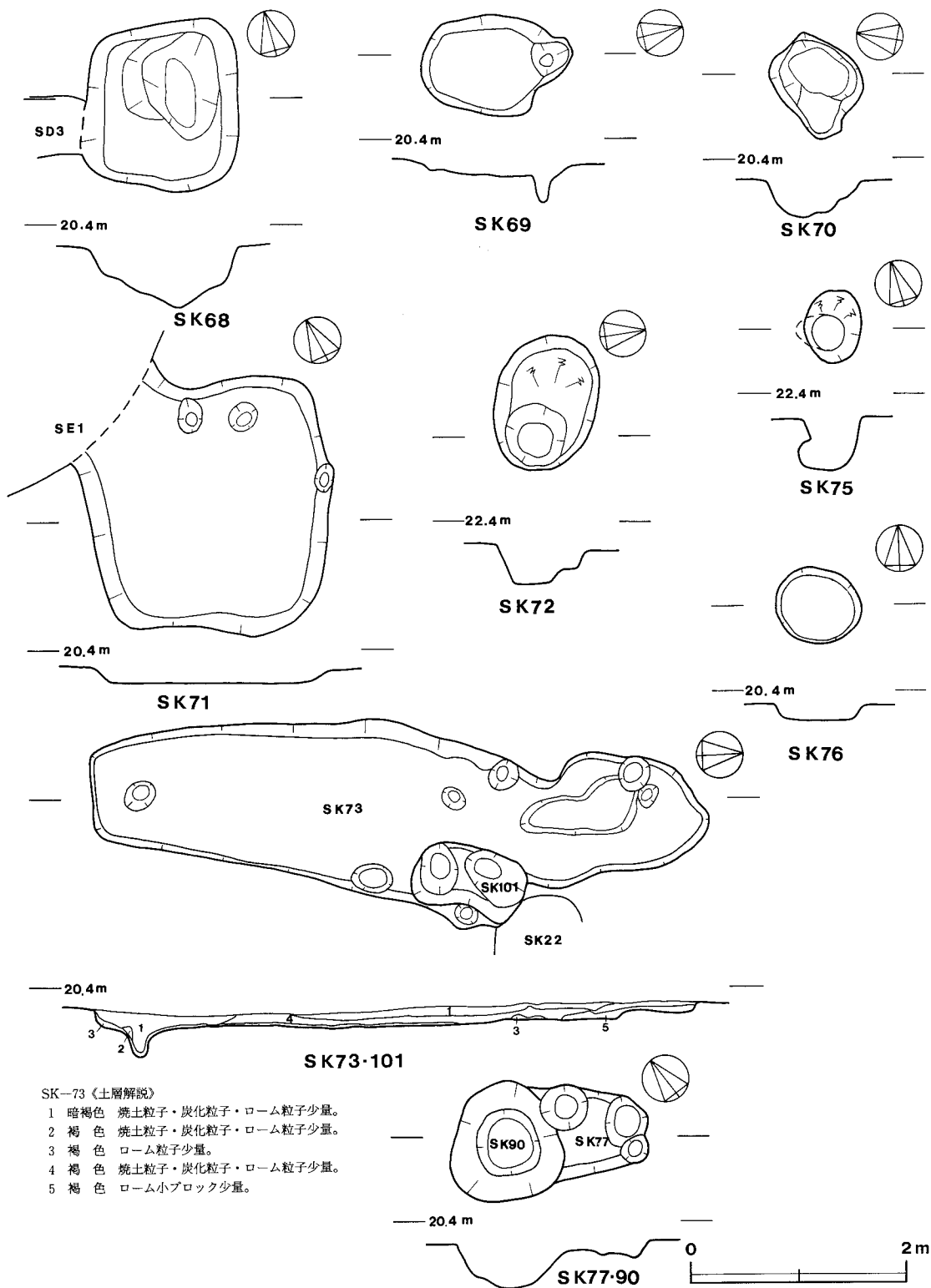
SK61-62

SK65

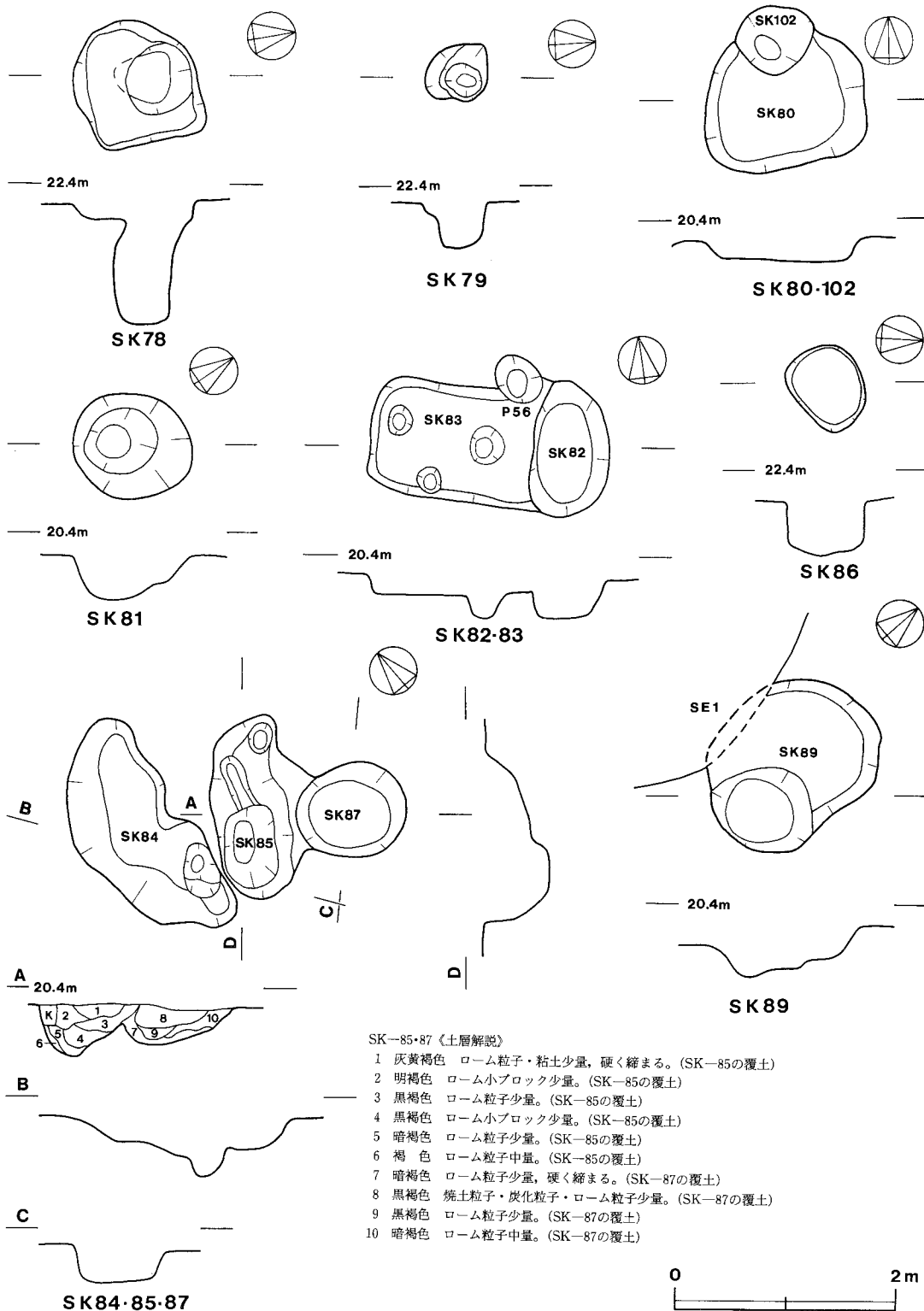


SK66

第 89 図 土坑実測図(6)



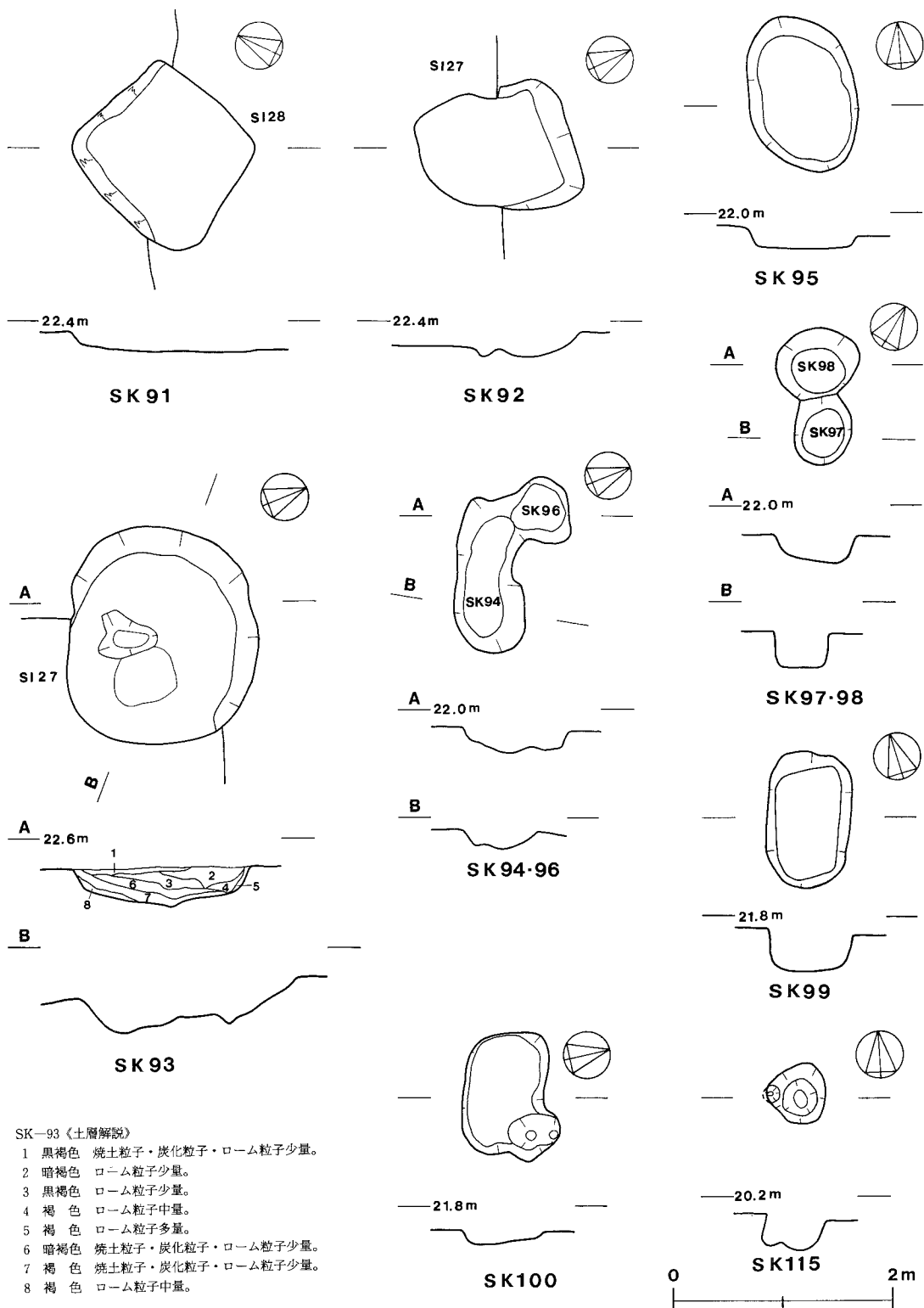
第90図 土坑実測図(7)



SK-85・87《土層解説》

- 1 灰黄褐色 ローム粒子・粘土少量、硬く締まる。(SK-85の覆土)
- 2 明褐色 ローム小ブロック少量。(SK-85の覆土)
- 3 黒褐色 ローム粒子少量。(SK-85の覆土)
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量。(SK-85の覆土)
- 5 暗褐色 ローム粒子少量。(SK-85の覆土)
- 6 褐色 ローム粒子中量。(SK-85の覆土)
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、硬く締まる。(SK-87の覆土)
- 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。(SK-87の覆土)
- 9 黒褐色 ローム粒子少量。(SK-87の覆土)
- 10 暗褐色 ローム粒子中量。(SK-87の覆土)

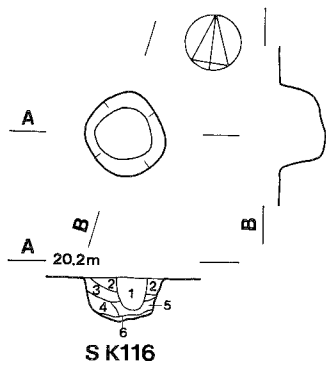
第91図 土坑実測図(8)



SK-93《土層解説》

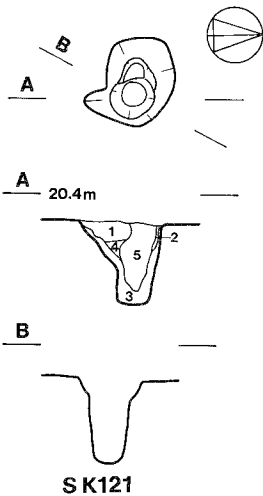
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子中量。
- 5 褐色 ローム粒子多量。
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 8 褐色 ローム粒子中量。

第 92 図 土坑実測図(9)



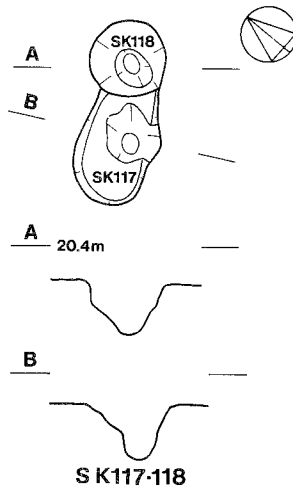
SK-116《土層解説》

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム小ブロック中量、硬く締まる。
- 4 褐色 ローム粒子中量、硬く締まる。
- 5 黒褐色 ローム粒子少量。
- 6 黒褐色 ローム粒子・粘土少量。

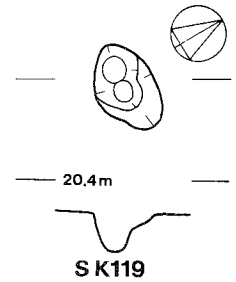


SK-121《土層解説》

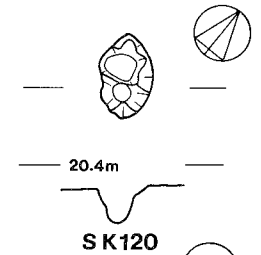
- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量。
- 3 灰褐色 粘土中量、粘性強く、硬く締まる。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、硬く締まる。
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量。



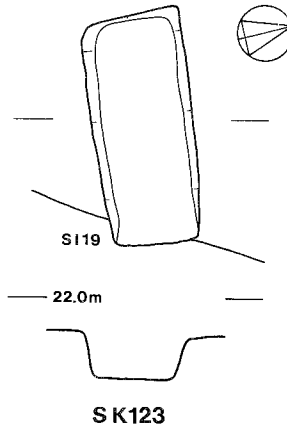
SK117-118



SK119



SK120



SK123



第3号地下式墳

22.0m

SK125

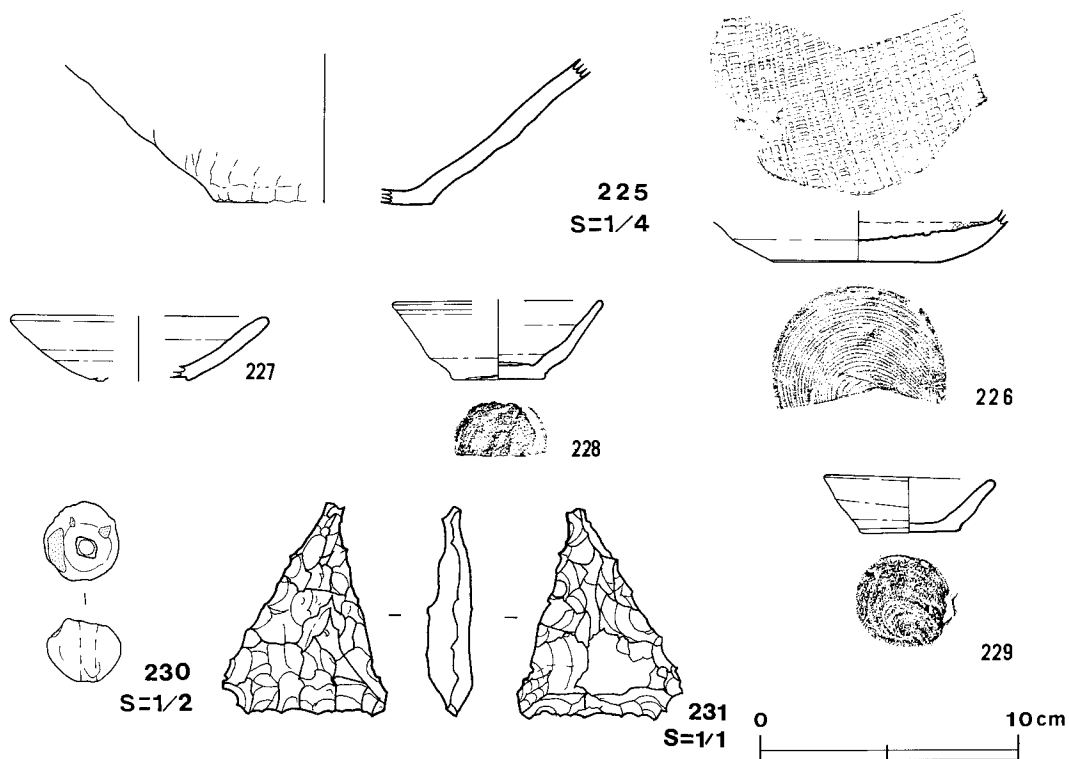
SK-125《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量。



第93図 土坑実測図(10)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 228	皿 土師質土器	A [7.9] B 3.1 C 3.5	平底。体部にはふい稜を有し、外傾して立ち上がる。底部に板の圧痕が残る、周縁に糸切りの際の溝が周回する。底部内面周縁に浅い溝が周回する。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂土・色調・焼成 砂粒 褐灰色 普通	P103 50% SK21の覆土
229	皿 土師質土器	A 6.4 B 2.4 C 3.9	平底。体部にはふい稜を有し、外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り(右)。	砂粒 浅黄橙色 やや不良	P105 100% SK41の覆土

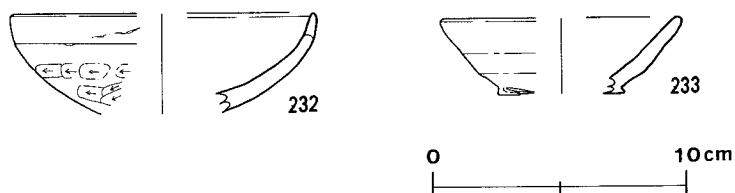


第94図 土坑出土遺物実測図

図版番号	器種	法 量(cm)	重 量(g)	備 考
第94図 230	球状土錘 土製品	長さ1.7 幅2.0 孔径0.45	6.9	SK8の覆土 DP18
231	石 鏃 石 器	長さ2.8 幅2.2 厚さ0.65	3.5	チャート SK75の覆土 Q5

10 ピット

平面形が円形ないし楕円形を呈し、上端径50cm前後の柱穴状の掘り込みをもつものをピットとして調査した。当遺跡では、調査区の東側から41か所検出されているが、特に規則的な配列は認められなかった。ここでは、遺物が出土しているピットについて記述する。



第95図 ピット出土遺物実測図

ピット出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 232	坏 土師器	A [11.8] B (3.9)	丸底。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境にふい稜をなす。口縁部はやや外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 黒褐色 普通	P167 10% ピット25
233	皿 土師質土器	A [9.4] B 3.0 C [5.0]	平底で、やや突出する。体部は下位にふい稜を有し、外傾して立ち上がる。口唇部は平坦。	木挽き成形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P168 30% ピット96

11 遺構外出土遺物

(1) 縄文時代 (第96～103図)

当遺跡からは縄文時代の遺構は検出されていないが、縄文時代以外の遺構の覆土及びグリッド等から縄文時代草創期から後期にかけての土器片が出土している。これらの遺構の覆土から出土している縄文式土器は直接その遺構に伴うものではないため、ここでは、これらの縄文式土器を一括し、時代ごとに記載することにする。

第1群の土器 縄文時代草創期に比定される土器を本群とする。

234は夏島式の胴部片で、無節Lの撚糸文が斜位回転で施されている。

第2群の土器 縄文時代早期に比定される土器群を本群とする。

第1類 早期中葉の沈線文系土器に比定される土器を本類とする。

(本類における分類は、沈線文の太さ、細さ及び刺突文や貝殻文の有無や施文方法の差異などを基準としておこないa～e種の5種に大別した。)

a種 細めの沈線文が施されているもの

235は口縁部片で、口唇部に棒状工具による斜位の押圧が施されている。口縁部は沈線文が横位に施されている。236と237は口縁部片で、沈線文が横位に施されている。238は口唇部がやや外削ぎ状を呈し、沈線文が斜位に施されている。口縁部は斜位に沈線文が施され、沈線断面が鋭く施文されている。239～247は胴部片で、沈線文が横位に施されている。沈線断面は鋭く、深く施文されている。248は胴部片で、格子目状の沈線文が施されている。249は胴部片で、横位の沈線文を施した後、縦位に沈線文が施されている。

b種 太めの沈線文が施されているもの

本種には、やや太いもの(250～256・261・262)と太いもの(257～260・263・264・267～269)

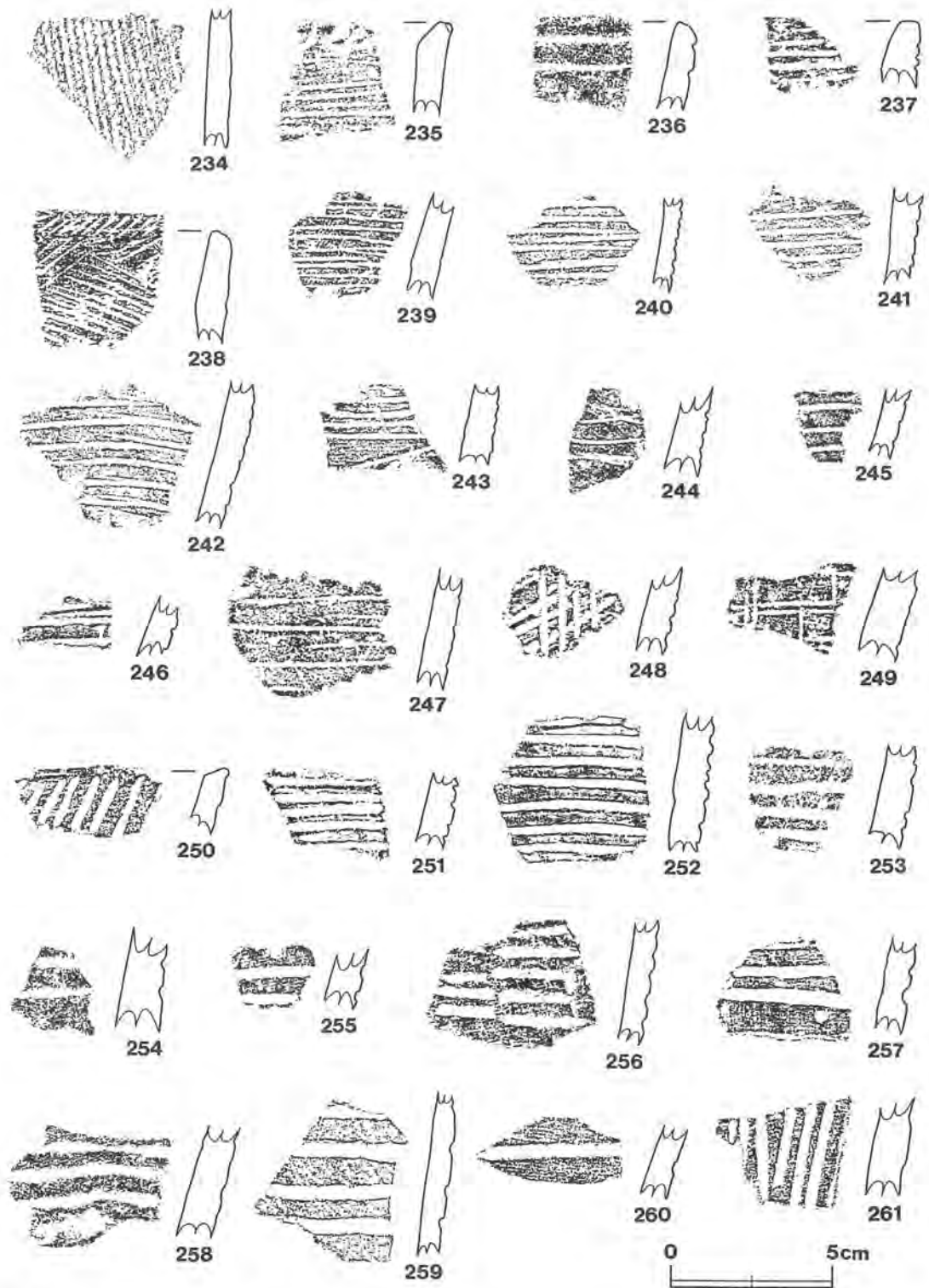
が含まれており、細分も可能であるが、ここでは一括して掲載した。250は口縁部片で、口唇部は内削ぎ状を呈している。口縁部にはやや太めの沈線文が斜位に施されている。251～256は胴部片で、やや太めの沈線文が横位に施されている。251と252は沈線断面が鋭く、深く施文されている。257～260は胴部片で、太めの沈線文が横位に施されている。261と262は胴部片で、やや太めの沈線文が縦位に施されている。263と264は胴部片で、太めの沈線文が縦位に施されている。265と266は胴部片で、横走するやや太めの沈線文の下位に、太めの沈線文が斜位に施されている。267～269は胴部片で、横走する太めの沈線文の下位に、太めの沈線文が斜位に施されている。270は胴部片で、2条の垂下する沈線文を施した後、太めの沈線文が横位に施されている。271は胴部片で、3条の垂下する沈線文を施した後、斜位の沈線文が施されている。

c種 細めの沈線文と太めの沈線文が施されているもの

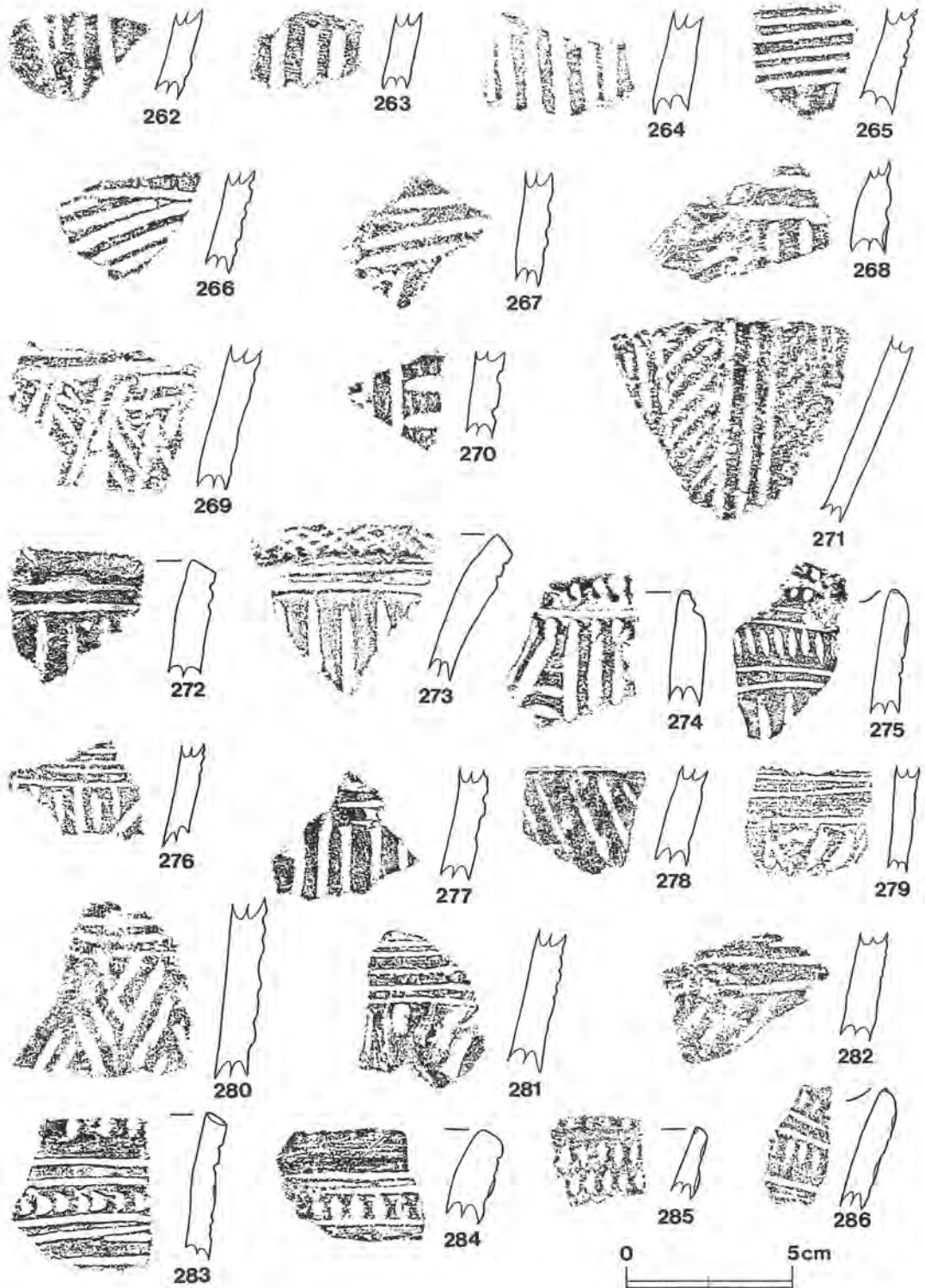
272は口縁部片で、口唇部は外削ぎ状を呈している。口縁部は2条の細めの沈線文が横走し、その下位に太めの沈線文が縦位に施されている。273は口唇部が外削ぎ状を呈し、沈線文が格子目状に施されている。口縁部は2条の細めの沈線文が横走し、その下位に太めの沈線文が縦位に施されている。274は口唇部が外削ぎ状を呈し、口唇部内面に棒状工具による押圧が施されている。口縁部は1条の細めの沈線文が横走し、その下位に太めの沈線文が縦位に施されている。275は口縁部片で波状を呈し、口唇部と口唇部直下に棒状工具による押圧が施されている。口縁部は横走する細めの沈線文に区画された中に、短沈線文が縦位に施され、その下位に太めの沈線文が縦位に施されている。276～282は胴部片で、細めの沈線文が横位に施され、その下位に太めの沈線文が縦位や斜位に施されている。

d種 沈線文と刺突文が施されているもの

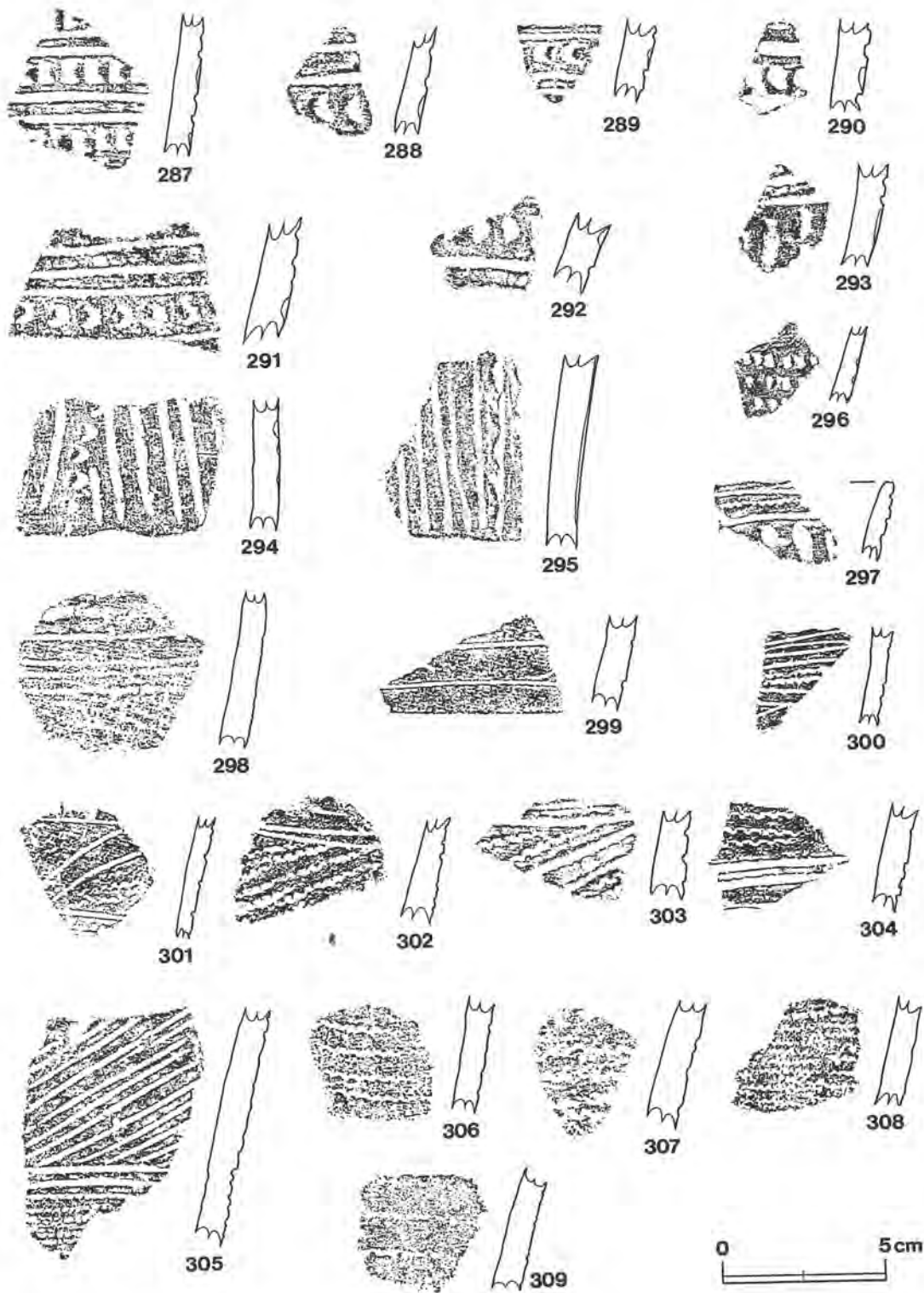
283は口唇部がやや外削ぎ状を呈し、棒状工具による押圧が施されている。口縁部は2条のやや太めの沈線文の下にD字状の刺突文を施し、さらにその下位に3条の太めの沈線文が横位に施されている。284は口縁部片で、口唇部はやや外削ぎ状を呈している。口縁部は横走する平行沈線文で区画された中に、半截竹管による刺突文が施されている。285は口唇部内面に押圧が施され、口縁部に刺突文が横位に施されている。286は横走する細めの平行沈線文で区画された中に、刺突文が施されている。287は2条のやや太めの平行沈線文下に半截竹管による刺突文が連続して施され、2段に構成されている。288は胴部片で、2条のやや太めの沈線文の下位に、C字状の刺突文が施されている。289は横走するやや太めの沈線文で区画された中に、半截竹管によるC字状の刺突文が施されている。290は横走する太めの沈線文で区画された中に、半截竹管によるC字状の刺突文が施されている。291は横走するやや太めの沈線文で区画された中に、半截竹管によるD字状の刺突文が施されている。292は半截竹管によるD字状の刺突文の下位に、やや太めの沈線文が横位に施されている。293は横走するやや太めの沈線文の下位に、斜位の太めの沈線文と刺突文が施されて



第 96 图 遺構外出土遺物拓影图(1)



第 97 图 遺構外出土遺物拓影图(2)



第 98 图 遺構外出土遺物拓影图(3)

いる。294はやや太めの沈線文と半截竹管によるD字状の刺突文が縦位に施されている。295はやや太めの沈線文と半截竹管による刺突文が縦位に施されている。296は胴部片で、刺突文が横位に施されている。

e種 貝殻腹縁文が施されているもの

297は口縁部片で、口唇部は丸みを帯びた角頭状を呈している。口縁部は2条の細めの沈線文で区画され、区画内に貝殻腹縁文を施している。区画の下位は、太めの浅い沈線文が縦位に施されている。298は胴部片で、4条の横走る細めの沈線文の下位に、貝殻腹縁文が斜位に施されている。299は胴部片で、2条の細めの平行沈線文の上位に、貝殻腹縁文が軽く押圧されている。300は胴部片で、4条の細めの平行沈線文下に2段の貝殻腹縁文を施し、その下位に鋸歯状の沈線文が施されている。301は横走る細めの沈線文に区画された中に、細めの沈線文と貝殻腹縁文が斜位に施されている。302は横走る細めの沈線文の下位に、貝殻腹縁文が斜位に施されている。303は2条の平行沈線文の下位に、貝殻腹縁文とやや太めの沈線文が2条ずつ交互に斜位に施されている。304は貝殻腹縁文の下位に、やや太めの沈線文が横位に施されている。305はやや太めの沈線文が斜位に施され、その下位に2条のやや太めの平行沈線文と貝殻腹縁文が横位に施されている。306～309は胴部片で、貝殻腹縁文が横位に施されている。

第2類 早期後葉に比定される土器を本類とする。

310は口縁部片で口唇部は波状を呈するものと思われる。口唇部直下と口縁部に隆帯を貼り付け、棒状工具による押圧が施されている。胎土に繊維が含まれている。311は口縁部片で、口唇部は波状を呈している。胎土に繊維が含まれている。312は口縁部片で、口縁部は外反している。内・外面ナデ調整が施されており、胎土に繊維が含まれている。313～326は胴部片で、内・外面に貝殻条痕文が施されている。胎土に繊維が含まれている。本類は広義の茅山式に比定される土器と思われる。

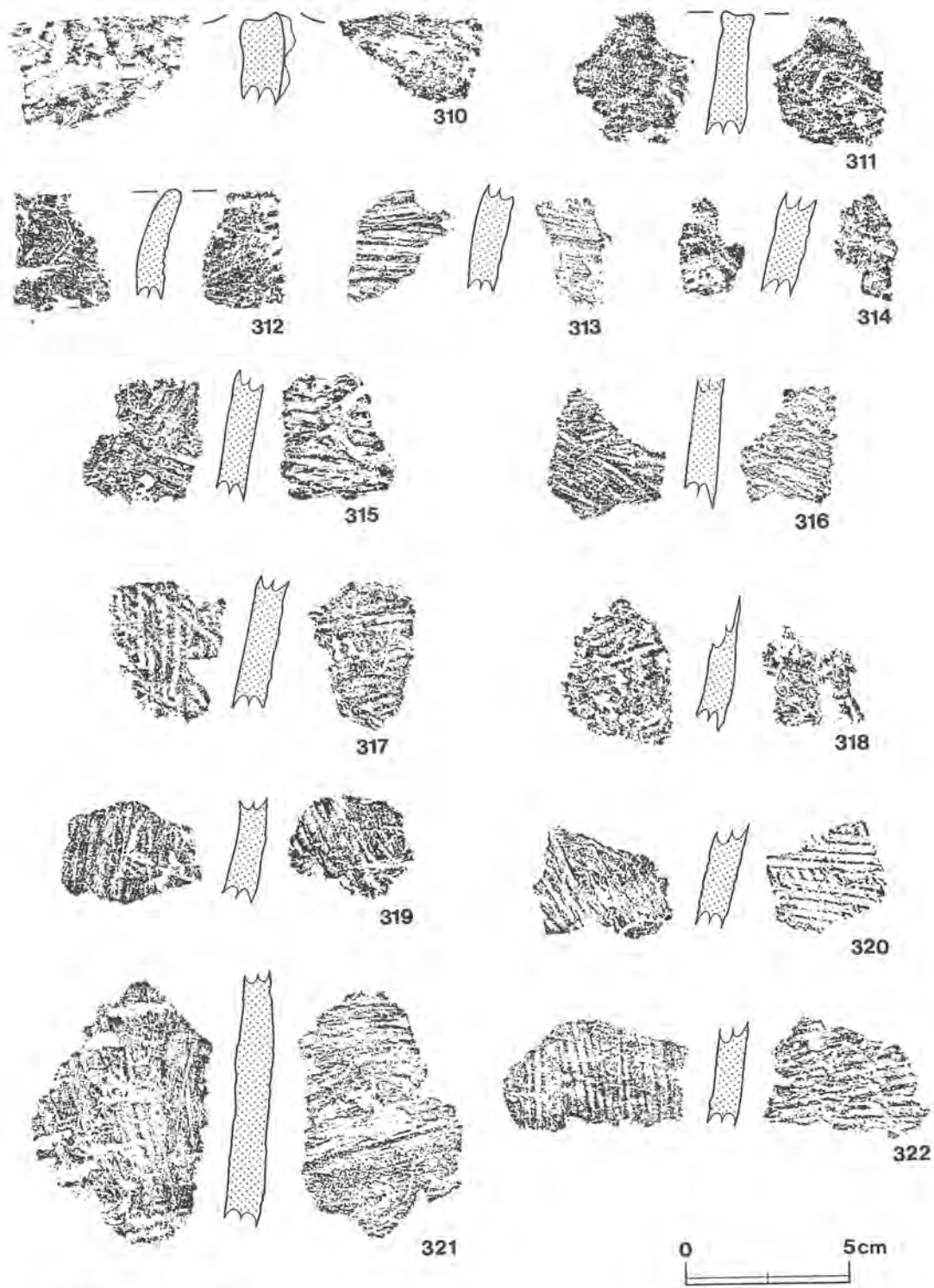
第3群の土器 縄文時代前期に比定される土器群を本群とする。

第1類 前期前葉に比定される土器を本類とする。

327は黒浜式の胴部片で、単節のLとRを合撚にした縄文が充填されている。Rの縄文を施した後、Lの縄文が施されて羽状構成のように見せている。胎土に繊維が含まれている。328は口縁部付近の破片で、口唇部直下に隆帯を貼り付け、その下に反撚・正撚の合撚の縄文が充填されている。胎土に繊維が含まれている。329と330は胴部片で、単節RLの縄文が施されている。胎土に繊維が含まれている。

第2類 前期後葉に比定される土器を本類とする。

331と332は口縁部片で、口唇部は棒状工具による押圧が施されている。口縁部は3本1条の沈線



第 99 图 遺構外出土遺物拓影图(4)

文が斜位に施されている。333は口縁部片で、半截竹管による刺突文が横位に施されている。334は、口唇部が外削ぎ状を呈し、キザミ目が施されている。口縁部は貝殻腹縁文が山形状に施されている。335は胴部片で、蛇行沈線文が横位に施されている。336と337は胴部片で、貝殻腹縁文が山形状に施されている。338は胴部片で、半截竹管による押し引き文が施されている。本類は前期後葉の浮島Ⅲ式から興津式に比定される土器と思われる。

第4群の土器 縄文時代中期に比定される土器群を本群とする。

第1類 中期前葉に比定される土器を本類とする。

339は胴部片で、やや隆起した部分に2段の鋸歯状の刺突文が施され、その下に単節 RL の縄文が横位回転で充填されている。340は胴部片で、単節 LR の結節縄文が縦位回転で施されている。341は胴部片で、横走する沈線文で区画された中に、斜位の沈線文が施されている。339～341は中期前葉の五領ケ台式に比定される土器と思われる。342は胴部片で、短沈線文が縦位に施され、胎土に雲母が目立っている。343は胴部片で、隆帯上に棒状工具による押圧が施され、胎土に雲母が目立っている。344は胴部片で、断面三角形の隆帯を貼り付けている。さらに、隆帯に沿って横位と斜位の押し引きによる刺突文が施されている。342～344は阿玉台式に比定される土器と思われる。

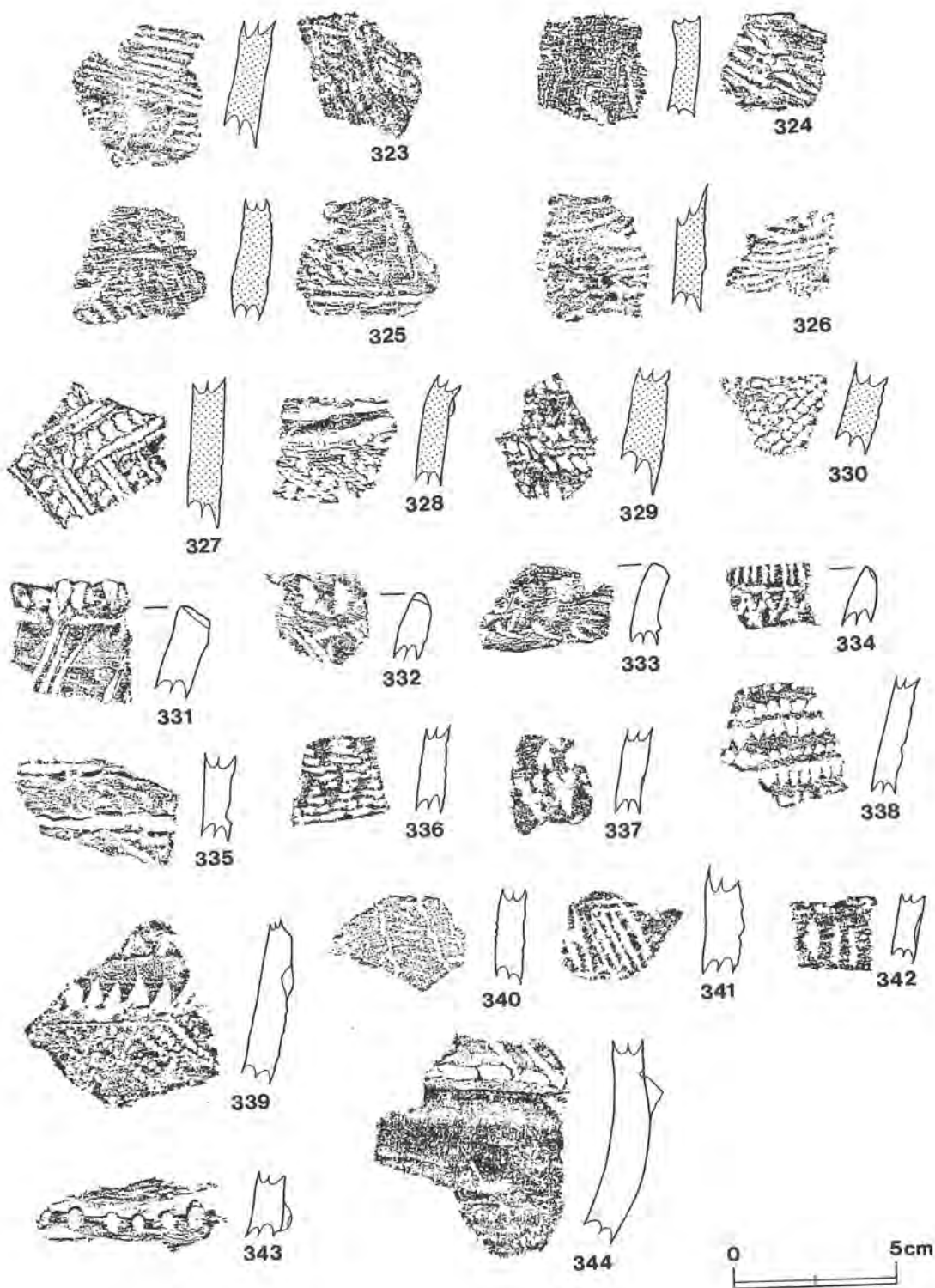
第2類 中期中葉から後葉に比定される土器を本類とする。

345は口縁部片で、口唇部が肥厚している。口唇部直下に単節 RL の縄文が横位回転で充填され、それ以下は縦位に施されて沈線文によって区画されている。346は胴部片で、沈線文によって曲線状に区画された中に縄文が施されている。内面はヘラ磨き調整が施されている。347は胴部片で、単節 RL の縄文が斜位回転で施されている。348～350は胴部片で、単節 RL の縄文が縦位回転で施されている。351は胴部片で、単節 LR の縄文が横位回転で施されている。352は胴部片で、縄文が施されている。353は胴部片で、単節 LR の縄文を地文とし、沈線文が「L」字状に施されている。354は胴部片で、単節 RL の縄文を地文とし、垂下する2条の沈線文間を擦り消している。347～354は加曾利 E 式に、345と346は加曾利 E 式に併行する土器と思われる。

第5群の土器 縄文時代後期に比定される土器群を本群とする。

第1類 後期中葉に比定される土器を本類とする。

355は精製土器で、356～370は粗製土器である。355は口縁部片で口唇部は外削ぎ状を呈している。5条の平行沈線文を施し、沈線間に単節 LR の縄文が充填されている。356は口縁部片で、口唇部は丸みを帯びた角頭状を呈している。口縁部に単節 LR の縄文を横位回転で充填し、その下位に沈線文が横位に施されている。内面は横位のヘラ磨き調整が施されている。357と358は胴部片で、単節 RL の縄文を地文とし、沈線文が斜位に施されている。359は隆帯貼り付け後、棒状工具によ



第100图 遺構外出土遺物拓影图(5)

る押圧が施され、その下位に、平行沈線文が横位に、短い沈線文が縦位に施されている。360は胴部片で、単節 RL の縄文を地文とし、沈線文が横位に施されている。361と362は胴部片で、単節 LR の縄文を地文とし、沈線文が横位に施されている。363は胴部片で、単節 LR の縄文を地文とし、半截竹管による沈線文が格子目状に施されている。364は胴部片で、単節 RL の粗い縄文を地文とし、沈線文が斜位に施されている。365は胴部片で、粗い縄文を地文とし、沈線文が斜位に施されている。366は口縁部片で、やや内傾している。口唇部直下に隆帯を貼り付け、指頭による押圧が施されている。口縁部は単節 RL の粗い縄文が施されている。367は口縁部片で、やや外傾している。口唇部直下に隆帯を貼り付け、指頭による押圧が施されている。口縁部に粗い縄文が施されている。368は口縁部片で、口唇部直下に2条の隆帯を貼り付け、指頭による押圧が施されている。内面は2条の横走る沈線文が施されている。369は隆帯貼り付け後、棒状工具による押圧が施されている。他は縄文を地文とし、半截竹管による沈線文が横位に施されている。370は隆帯貼り付け後、指頭による押圧が施されている。それ以下は縄文を地文とし半截竹管による沈線文が横位に施されている。本類は加曾利B式に比定される土器と思われる。

第2類 後期後葉に比定される土器を本類とする。

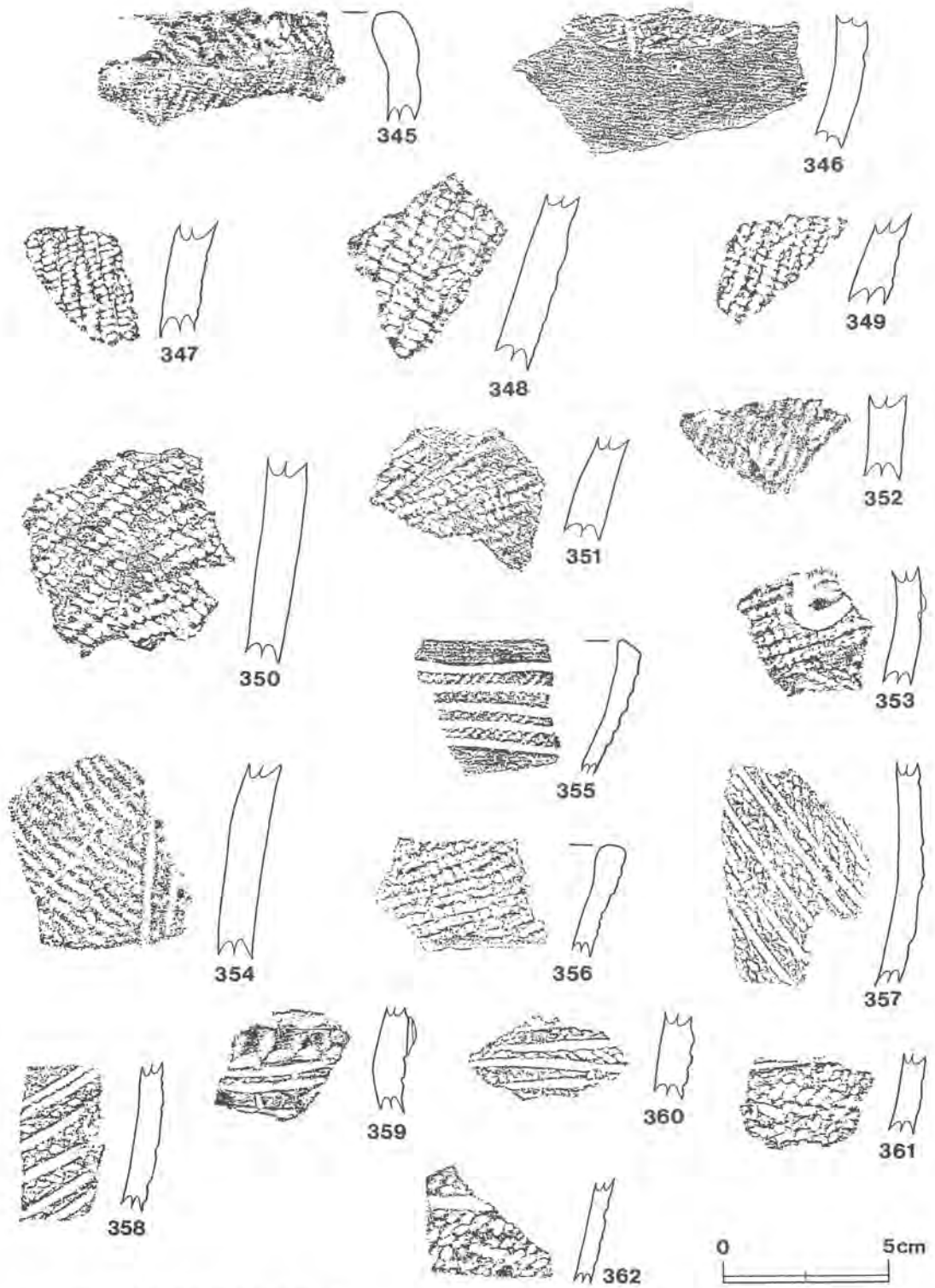
371は口縁部と胴部の境の破片で、結節沈線文が2段に横走している。それ以下は、沈線文で区画された中に単節 RL の縄文が施されている。本類は安行I式に比定される土器と思われる。

以上の他に、372の口縁部片、373と374の把手片、375と376の底部片がある。372～374は縄文時代中期中葉の加曾利E式に比定されるものと思われる。375はいわゆる天狗の鼻状の底部片で、やや不安定な小さな平底を呈している。縄文時代早期中葉の田戸下層式に比定されるものと思われる。376は平底の底部片で、縄文時代後期に比定されるものと思われる。

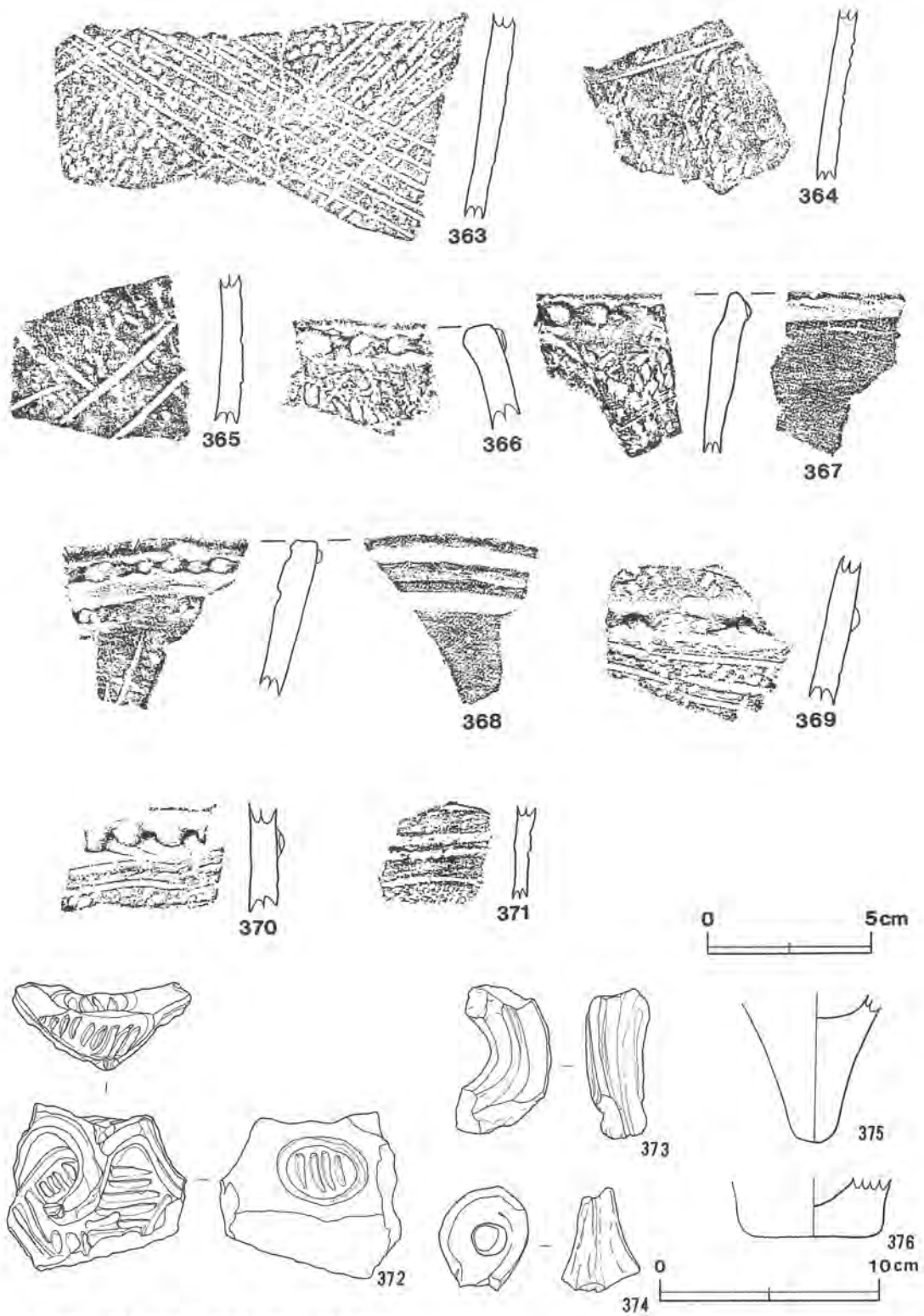
(2) 古墳時代、奈良・平安時代、中世 (第103図)

遺構外出土遺物解説表

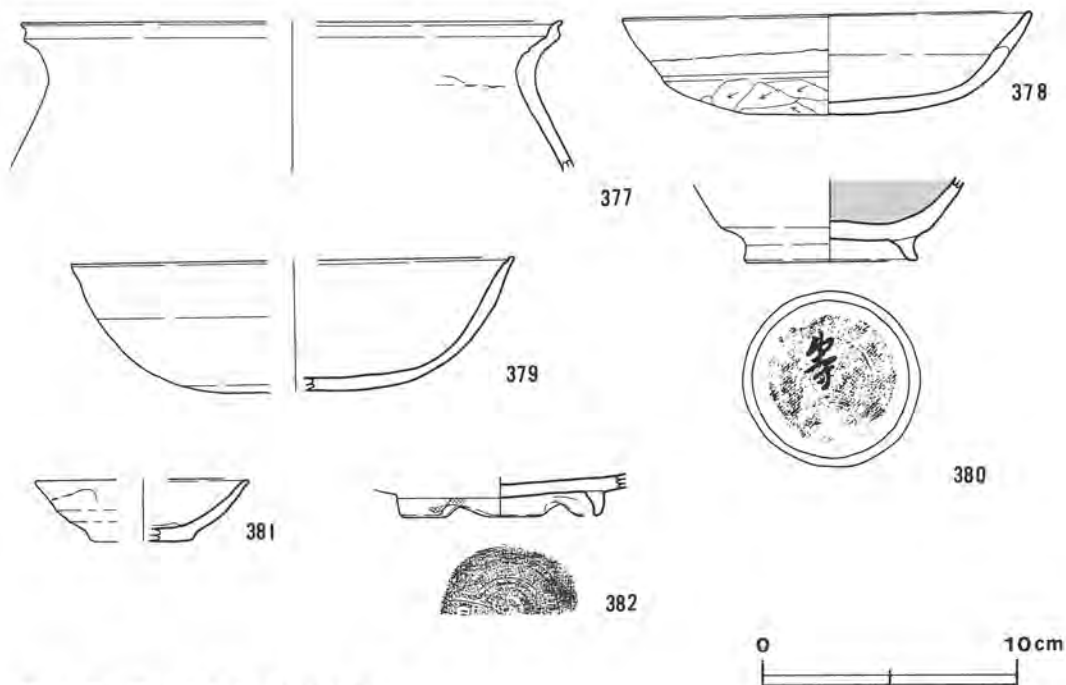
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 377	甕 土師器	A [21.2] B (6.0)	頸部は丸みをもって外反し、口縁端部を外上方へつまみ出す。口縁端部の外面は浅く凹み、内面の稜が強い。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内面横位のヘラナデ。	砂粒 にふい赤褐色 普通	P169 5% B3j ₄ 区の確認 面



第101图 遺構外出土遺物拓影图(6)



第102図 遺構外出土遺物実測・拓影図(7)



第103図 遺構外出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 378	坏 土師器	A 16.0 B 4.1	平底気味。体部は緩く内彎しながら外上方へ開き、口縁部との境に明瞭な稜をなす。口縁部は外傾して立ち上がり、上位でやや内傾する。	口縁部内・外面と体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒 にふい赤褐色 普通	P170 90% C3a区の確認面
379	坏 土師器	A [17.4] B 5.2	平底気味。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口縁部内面に一条の沈線が巡る。	内・外面ともへラ磨き。	砂粒・スコリア にふい橙色 普通	P171 30% 表土
380	高台付坏 土師器	B (3.3) D 6.9 E 0.8	やや上げ底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の畳付は平坦。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ、内面へラ磨き後黒色処理。底部回転糸切り(右)。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P174 40% 表採 底部に墨書「壽」
381	皿 土師質土器	A [8.4] B 2.5 C [4.0]	平底でやや突出する。体部は中位にふい稜を有し、内彎気味に外傾して立ち上がる。底部に板の圧痕が残る。	水挽き成形。底部回転糸切り後ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P172 40% 確認面
382	高台付皿 陶器	B (1.7) D 7.8 E 0.9	平底で、やや内傾する高台が付く。高台の畳付は丸みを帯び、指によるおさえが4か所に施されている。	水挽き成形。底部回転へラ削り(左)。高台貼り付け。	(胎土) 灰白色 (焼成) 普通	P173 20% 表土

第4節 考察

1 出土遺物について

今回の調査によって出土した遺物は、土器類、土製品、石製品、鉄製品など約9400点（土器片9123点）である。これらの遺物は縄文時代から中世にまで及ぶもので、西郷遺跡が長期間にわたって断続的に生活が営まれた遺跡であることがわかった。ここでは、当遺跡の中で遺構が多くみられる古墳時代から奈良・平安時代に属する土器類を中心に記述したい。

(1) 土器組成について

今回の調査で得られた土器類の総数は9308点である。この土器は土師器7595点(81.6%)、須恵器1142点(12.3%)から構成されている。これらの土器の器種別比率は、甕5546点(59.6%)、坏1691点(18.2%)、他に、蓋77点、高台付坏32点、甗30点、盤6点、鉢6点がみられる。さらに遺構毎に器種構成を表したものが表3である。遺構はすべて完掘できたものばかりではなく、調査区域外の未調査の部分が残っていたりするため器種構成の上で不十分な点がある。また、遺物についても全体的に覆土からの出土が多く、しかも個体数より破片数のほうが圧倒的に多い状態であり、床面から出土したもので完形品が少ないことから、本来的な器種構成を示すものではないが、ある程度の傾向は捉えることができるものと思われる。

(2) 出土土器の分類

出土土器の器種には甕・甗・壺・鉢・碗・坏・皿・盤・蓋などがあるが、これらは器種により出土量の差が大きく、また、遺存率も異なるため、ここでは、出土土器の中でも比較的多くを占め、形態変化が顕著に現れる土師器の甕、土師器の坏、須恵器の坏、須恵器の蓋を中心に分類を行うことにした。なお、分類に際しては、実測個体の中でも法量や器形、整形技法等の特徴が把握できる遺存率の高い個体を対象とした。本文中「SI3-95」と表記したものは、第3号竪穴遺構出土の遺物番号95の土器を表している。

ア 土師器甕

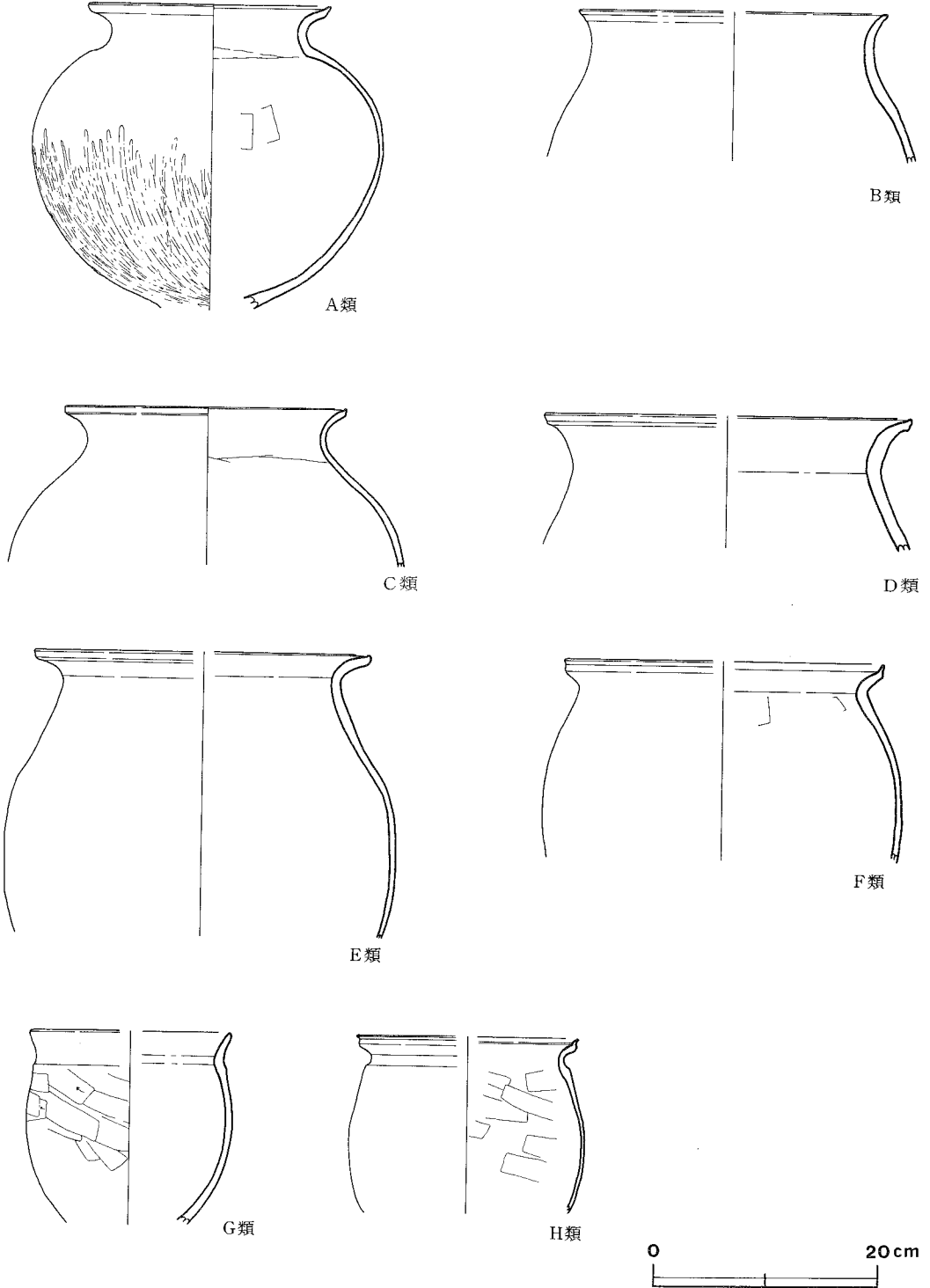
土師器甕は他の器種に比べて出土量が多いが、大部分が小さな破片としての出土で、器形全体を復元し得るものは少ない。このため、口縁部の形態の特徴や胴部等の調整技法などを中心にして8類に分類した。なお、分類にあたっては便宜上口径が15cm以下のものを小形甕とした。

[A類] 胴部が球形を呈し、頸部が強く屈曲して、口縁端部をつまみ上げるもの。調整法は、胴部外面上位に横位のヘラナデ、下位に縦位のヘラ磨き、胴部内面にヘラナデ調整が施されている。

(SI3-95)

[B類] 胴部の張りが弱く、口縁部外面に浅い凹線が周回するもの。調整法は、胴部内・外面ナデ調整が施されている。(SX1-149)

土師器甕



第104図 土師器甕分類図

〔C類〕胴部の張りが強く、頸部が丸みをもって屈曲して、口縁端部をわずかにつまみ上げるもの。調整法は、胴部外面上位にナデ、胴部内面に横位のヘラナデ調整が施されている。(SX1-141・147)

〔D類〕胴部の張りが弱く、頸部の屈曲が弱く、口縁端部をわずかにつまみ上げるもの。調整法は、胴部外面上位にナデ、内面に横位のヘラナデ調整が施されている。(SI27-70,SX1-145,SX1-148,第4号地下式壙-210)

〔E類〕胴部の張りが弱く、頸部の屈曲が強く、口縁端部を垂直にわずかにつまみ上げるもの。調整法は、胴部外面ナデ、内面は横位のヘラナデ調整が施されている。(SI30-93,SX1-142,SX1-143,SX1-144,SX1-146,第4号地下式壙-211)

〔F類〕胴部の張りが弱く、頸部が「く」の字状に屈曲して、口縁端部をよりはっきりとつまみ上げるもの。調整法は胴部外面上位に横位のヘラナデ、下位に縦位のヘラ磨き、胴部内面に横位のヘラナデ調整が施されている。(SI2-5,SI2-6,SI2-7,SI7-18,SI7-19,SI10-52,遺構外-377)

〔G類〕小形甕で、口縁端部をつまみ上げないもの。胴部の張りが弱く、頸部から口縁部にかけ外傾するものと、胴部にやや張りがあり、頸部が直立して上半で外反するものがある。調整法は前者が胴部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ調整、後者が胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ調整が施されている。(SI3-97,SX1-150)

〔H類〕小形甕で、口縁端部をつまみ上げるもの。胴部の張りが弱く、口縁部外面が凹帯状をなして口縁端部がはっきりとつまみ上げられているものと、胴部に張りがあり、つまみ上げが弱く、口縁端部が下方にもやや突出するものがある。調整法は胴部外面ナデ、内面横位のヘラナデ調整が施されている。(SI7-21,SI29-107)

イ 土師器坏・碗

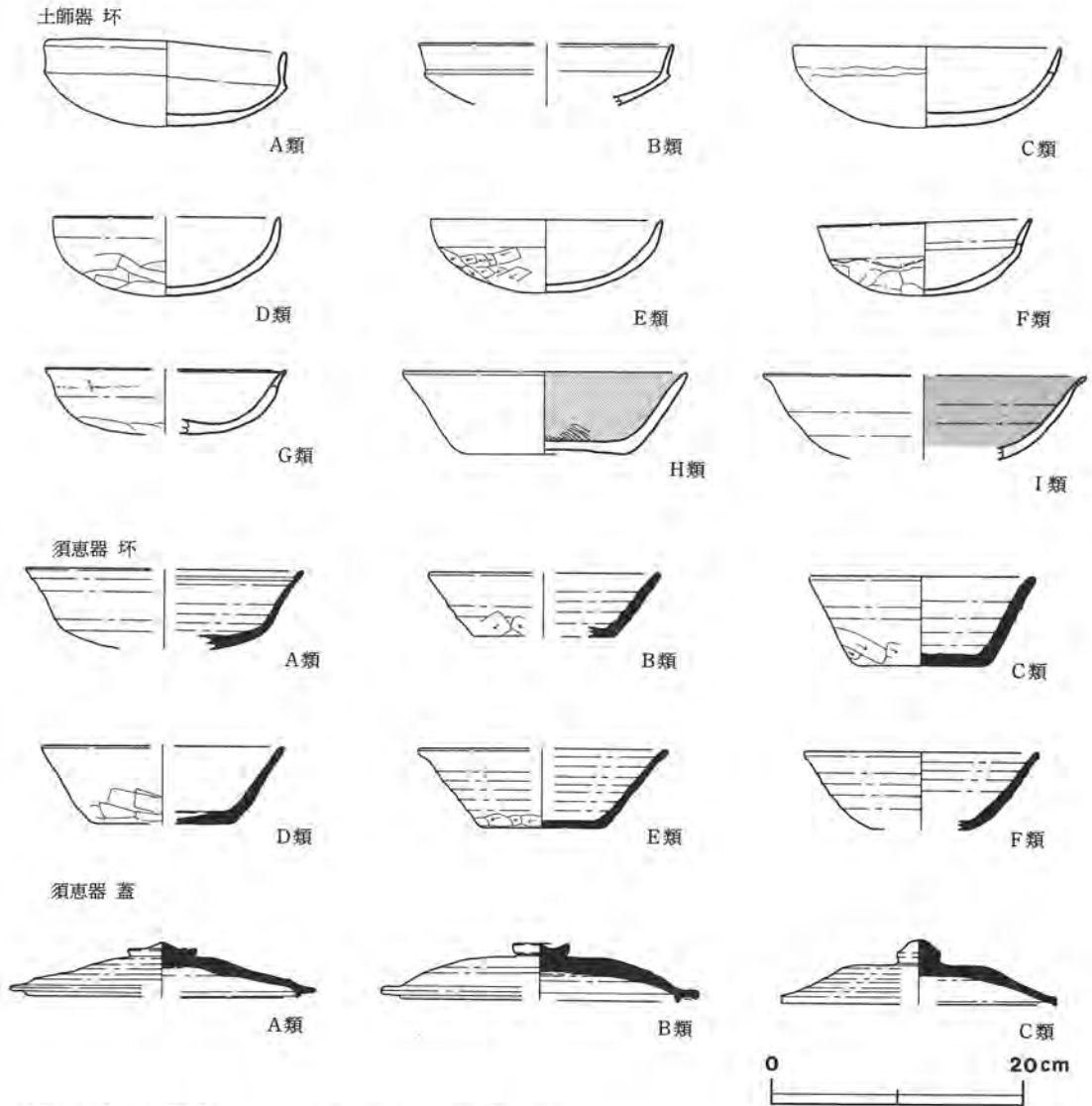
土師器坏は大別すると丸底のものと平底のものに分かれる。A～Gが丸底で、HとIが平底のもので、ここでは器形の特徴や調整技法等を中心に9類に分類した。

〔A類〕外稜を有し、口縁部が直立し、須恵器蓋坏の器形の影響を受けたもの。調整法は口縁部横ナデ、体・底部外面ヘラ削り後ナデ調整が施されている。(SI3-99,SI31-109,SX1-164)

〔B類〕外稜を有し、口縁部が外傾するもの。坏Aと同様須恵器蓋坏の器形の影響を受けたもの。調整法は口縁部横ナデ、体・底部外面ヘラ削り後ナデ調整が施されている。(SI6-16,SX1-169)

〔C類〕球体を半截したような球状を呈するもの。調整法は口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り後ナデ調整が施されている。(SI4-12,SI4-13,SI3-100)

〔D類〕外稜が弱くなり、消滅しかかっているもので、口縁部が直立するもの。調整法は口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り調整が施されているものが多い。(SX1-155,SX1-156,SX1-166,SX1-167,P-232)



第105図 土師器坏, 須恵器坏, 須恵器蓋分類図

[E類] 外稜が弱くなり, 消滅しかかっているもので, 口縁部が外傾するもの。調整法は口縁部横ナデ, 体・底部ヘラ削り調整が施されている。(SX1-154, SX1-158, SX1-163, SX1-165, SX1-168)

[F類] 外稜が弱くなり, 消滅しかかっているもので, 口縁部が外反するもの。調整法は口縁部横ナデ, 体・底部ヘラ削り調整が施されている。(SX1-153, SX1-173)

[G類] 平底気味で, 体部は外反し, 口縁部内面に一条の浅い沈線が巡るもの。調整法は口縁部横ナデ, 体・底部がヘラ削り調整が施されているもの。(SX1-157, SX1-159, SX1-160, SX1-162, SX1-170, SX1-172)

[H類] 平底で、体部が外傾して立ち上がるもの。底部は手持ちヘラ削りと回転糸切り放しのものが見られる。調整法は内面ヘラ磨き後黒色処理が施されている。(SI8-37, SI22-63)

[I類] 体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が外反する碗状もの。調整法は内・外面ヘラ磨き後、内面に黒色処理が施されるものとされないものが見られる。(SI28-80, SI28-81)

ウ 須恵器坏

器形を中心にして、底部の切り離し手法とその後の調整技法により6類に分類した。なお、器形・技法的には須恵器とほとんどかわることはないが、焼成が甘く、色調が明褐色ないし赤褐色を呈し、体部下端と底部に手持ちヘラ削り調整が施され、胎土に雲母を含む須恵器とも土師器とも判然としない土器が出土している。他県では、「須恵器」として扱ったり、「土師質須恵器」や「くすべ焼成土器」及び「須恵系土師質土器」⁽¹⁾などの名称で呼ばれたりしている。「常陸国新治郡上代遺跡の研究II」⁽²⁾や「真岡市周辺における奈良・平安時代の須恵器」⁽³⁾などで、茨城県南西部（筑波山南麓の小野・東城寺地域）の窯跡出土の須恵器が掲載されている。その特徴として、「胎土に雲母粒が含まれており、土質はやや砂混じりの粘土質で、切り離しはヘラで行われ、その後体部下端や底面に手持ちヘラ削りが加えられる」との報告がされている。これらのことから、当遺跡から出土している土器は、筑波山南麓の窯跡で生産された須恵器と類似する点が多く認められる。器形や整形技法等に須恵器と同様な点が見られ、しかも窯で焼かれた可能性も考え合わせると須恵器と考えてもさしつかえないものと思われる。以上のような点から当遺跡から出土している土器は、須恵器として分類していく。

器形の分類に際しては、底径指数（底径÷口径×100）、器高指数（器高÷口径×100）、外傾度を指標とした。

[A類] 丸底で、口縁部内面に一条の浅い沈線が巡るもの。底部は回転ヘラ削り調整が施されている。(SI27-72, SI27-73, SI27-74, SX1-175, SX1-176)

[B類] 平底で、体部は直線的に立ち上がり、口唇部が丸くおさまられているもの。口径12.8cm, 器高3.6cm, 底径7.9cmを測る。底部は一方向の手持ちヘラ削り、体部下端は手持ちヘラ削り調整が施されている。[底径指数62, 器高指数28, 外傾度35°] (SI7-30, 第2号地下式壙-201)

[C類] 坏Bに比べて器高が高く、底径が小さいもの。口径12.1～12.6cm, 器高4.5～5.1cm, 底径7.2～7.4cmを測る。底部は一方向の手持ちヘラ削り、体部下端は部分的に手持ちヘラ削り調整が施されている。[底径指数50～60, 器高指数37～40, 外傾度27°] (SI8-40)

[D類] 平底で、体部はやや丸みをもって立ち上がるもの。口径13.4cm, 底径7.6cmで、底部及び体部下端は一方向の手持ちヘラ削り調整が施されているが、小ぶりの口径12.2cm, 底径7.0cmで、底部に回転ヘラ削り調整が施されているものもある。[底径指数57, 器高指数29～32, 外傾度28～33°] (SI8-38, SI25-69, SE2-134)

[E類] 底径が口径の2分の1以下と小さくなり、口縁部で軽く外反するもの。口径12.4cm, 器高4.3~4.6cm, 底径6.1~7.0cmを測る。底部は一方向と多方向の手持ちヘラ削り、体部下端は手持ちヘラ削りが施されている。[底径指数48~50, 器高指数32~35, 外傾度34~39°] (SI7-27, SI7-29, SI8-39, SI9-47, SI9-48)

[F類] 平底で、体部は緩やかに内彎気味に立ち上がり、口縁部で軽く外反するもの。口径13.2cm, 器高4.4cm, 底径5.4cmを測る。[底径指数41, 器高指数33, 外傾度36°] (SI7-28)

エ 須恵器蓋

つまみの形や天井部の状態などを中心に3類に分類した。

[A類] つまみは上部が凹み、外周部が接合部より大きく、中央が外周より高いもの。天井部はなだらかに下降し、口縁部にかえりを有しているもの。天井部は回転ヘラ削り調整が施されている。(SX1-182)

[B類] つまみは上部が凹み、外周部が接合部より大きく、中央が高まるが外周よりも低いもの。天井部はやや丸みをもってなだらかに下降し、口縁部にかえりを有しているもの。天井部は回転ヘラ削り調整が施されている。(SX1-178, SX1-182)

[C類] つまみは全体に高く、径が小さく、外周部が接合部より大きく、宝珠形を呈しているもの。天井部は平坦な面をつくり、口縁端部が折り曲げられているもの。(SI1-176)

(3) 土器群の設定と時期区分

前項で4器種について分類をおこなったが、これらの分類をもとにいくつかの土器群にまとめることが可能であると思われる。

I 群 土師器坏A・B・C類, 土師器甕A・G類が存在する土器群

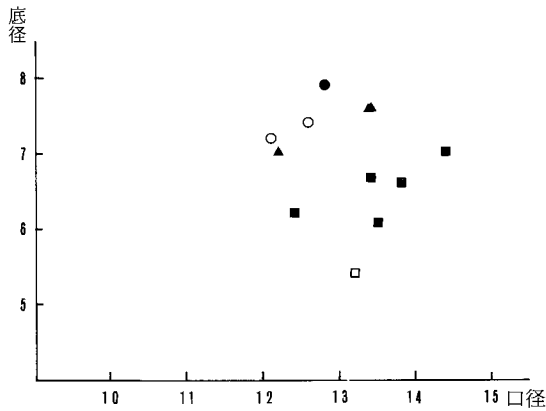
II 群 土師器坏D・E・F・G類, 土師器甕B・C・D・E・G類, 須恵器坏A類, 須恵器蓋A・B類が存在する土器群

III 群 土師器坏H類, 土師器甕F・H類, 須恵器坏B・C・D・E・F類, 須恵器蓋C類が存在する土器群

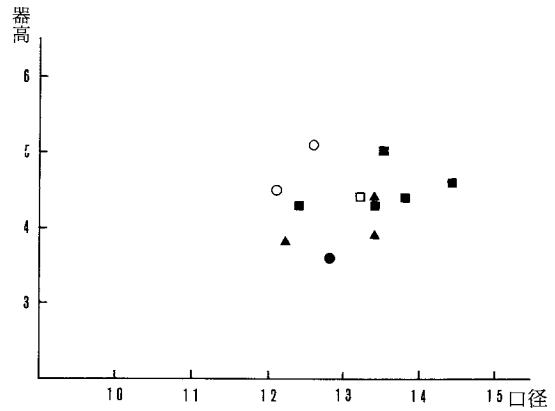
IV 群 土師器坏(碗) I類が存在する土器群

I~IV群の先後関係については、まず当遺跡における遺構の切り合い関係に求めることが第一義である。しかし、当遺跡において適当な切り合い関係が認められないため、土器を型式学的に処理していくことで先後関係を捉えていくことにしたい。

I群とII群の土師器坏は丸底のもので、III群とIV群の土師器坏は平底のものである。丸底のものから平底のものへと変遷していくことは一般的に指摘されていることで、I・II群→III・IV群への変遷が考えられる。I群とII群では、I群は須恵器が器種構成に伴わないが、II群では伴ってくるという差異が認められ、I群→II群への変遷が考えられる。II群とIII群では、須恵器坏が



第106図 須恵器坏の口径・底径比較

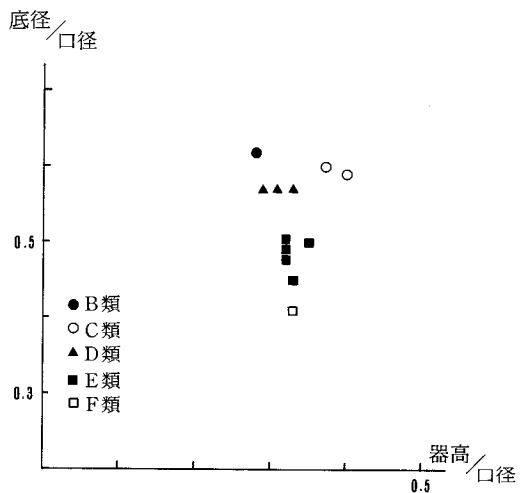


第107図 須恵器坏の口径・器高比較

II群では丸底を呈し、III群では平底を呈している。須恵器坏の場合、丸底から平底へと変遷することは、すでに水戸市木葉下窯跡⁽⁴⁾の調査などで報告されていることから、II群→III群への変遷が考えられる。III群とIV群では、III群の土師器坏は体部が直線的に立ち上がるのに対し、IV群では体部が内彎して立ち上がる碗状のものという差異が認められる。他に、III群の主体を占めるのは須恵器で、IV群は須恵器での復元個体はなく、かわりに土師質土器の小皿が伴っている。土師器坏が碗状を呈することや器種構成に土師質土器が伴ってくることからIII群→IV群への変遷が考えられる。

また、III群に分類した土器群は、須恵器坏等からさらに細分が可能であることが考えられる。須恵器坏の法量比のグラフ(第106~108図)から、明瞭に2つの群に分かれることがわかる。須恵器坏は時期が下がるとともに底径が減少する傾向にあることは従来から指摘されており、須恵器坏B・C・D類→須恵器坏E・F類への変遷が考えられる。これらのことから、III群はIII A群とIII B群へと分類され、III A群→III B群へと時間的な変遷が考えられる。

以上のような操作から、I群・II群・III A群・III B群・IV群の5つの土器群に区分され、それぞれI群はI期、II群はII期、III A群はIII期、III B群はIV期、IV群はV期へと時間的に把握され、その順序に変遷していくことが考えられる。



第108図 須恵器坏の法量比比較

(4) 土器の変遷と年代について

次に、前項で確立した編年軸に他の器種の土器を組み込んで各期の特徴を述べ、先学の研究成果等をふまえて年代について考えてみたい。

[I期]

第3号竪穴遺構から出土した土器群を当てることができる。土師器だけで構成されており、器種は、甕・鉢・坏からなる。甕はA類が存在する。底部が欠損しているが、口縁端部がつまみ上げられ、胴部外面下位に縦位のヘラ磨き調整が施され、胎土に長石が多く含まれていることから「常陸型甕⁽⁵⁾」と思われる。鉢は平底で、体部が球状を呈し、口縁部との境に稜を有するものである。坏はA類の須恵器蓋坏を模倣したものとC類の球体を半截したような球状を呈するものが存在する。

この他、第4号住居跡・第6号住居跡・第31号竪穴遺構から出土した土器群もおおむね第3号竪穴遺構と近接した時期のものと思われる。第4号住居跡には坏Cが存在し、その器形から第3号竪穴遺構に比べてやや古い様相がみられる。第6号住居跡には坏B類と土師器甕が存在する。土師器甕は口縁部外面が面状を呈し、胴部外面下位に縦位のヘラ磨き調整が施され、胎土に長石が含まれていることから「常陸型甕」と同じ形態のものと思われる。第31号竪穴遺構には坏A類が存在する。

土師器坏A類やC類などは千葉県の房総における鬼高期の研究等⁽⁶⁾では6世紀後葉ごろに位置づけられていることや「常陸型甕」が6世紀後半ごろから出現してくるとの論考(村山 1985)⁽⁷⁾もみられることから、本期の土器群もほぼ同様の時期に比定されるものと思われる。ただ本期から出土している甕Aは、上述した論考の「常陸型甕」とは器形が異なる点がみられる。上述した論考では古墳時代の「常陸型甕」は最大径を胴中央部に有し、楕円形ないし卵球形に近いものとしているのに対して、本期の甕は最大径は胴部上位に有し、球形に近いものである。現時点においては、資料も少なく明確にすることはできないが、一応地域差やバリエーションと考えておきたい。

[II期]

第27号住居跡から出土した土器群を当てることができる。土師器は甕で、須恵器は坏や蓋からなる。土師器甕はD類が存在し、全容は明らかではないが、口縁端部がわずかにつまみ上げられていることから「常陸型甕」の可能性が考えられる。須恵器坏は丸底のA類に属すると思われるものが3点認められるが、体部中位以上が欠損しているため、全体を捉えることができなかった。須恵器蓋はつまみが欠損しているが、B類に属するものと思われるものとB類に類似しているかえりを有さず、口縁端部を折り曲げているものが認められる。

他に第30号住居跡・第1号性格不明遺構もほぼ同時期の土器群と考えられる。第30号住居跡は土師器甕E類が存在し、甕D類に比べ頸部の屈曲が強くなっている。第1号性格不明遺構は底面付近

から出土した遺物がほとんどなく、大部分の遺物が覆土中層から上層にかけて投棄されたような状態で出土している。遺物量・遺物個体数では、当遺跡では最も多く、土器の分類においても中層から上層にかけて出土した遺物を中心におこなった。土師器は甕・坏・高台付坏、須恵器は甕・坏・蓋からなる。土師器甕はB類・C類・D類・E類が存在し、C類・D類・E類は同様に口縁端部がつまみ上げられており「常陸型甕」の可能性が考えられる。土師器坏はB類・D類・E類・F類・G類が存在し、D類・E類・F類はほぼ同様の器形を呈し、口縁部の傾きによって分類した。土師器坏で主体を占めるものは、D類・E類・F類・G類で、D類・E類・F類とG類は器形がまったく異なる。須恵器坏はA類が存在し、口縁部内面に浅い沈線が巡り、土師器坏G類と同様の特徴を有している。口縁部に沈線が巡る例としては、当教育財団が発掘調査を実施したつくば市柴崎遺跡⁽⁸⁾の第9号住居跡の須恵器坏に3例みられる。須恵器蓋はA類・B類が存在し、どちらも口縁部にかえりを有している。

本期は、外稜が弱くなり消滅しかかっている土師器坏D類・E類・F類や平底気味の土師器坏G類、丸底の須恵器坏A類、かえりを有する須恵器蓋A類・B類やかえりをもたない須恵器蓋などの存在から8世紀前半ごろに比定されるものと思われる。

[III期]

第1・8・25号住居跡から出土した土器群を当てることができる。第1号住居跡は土師器が甕、須恵器が坏・高台付坏・蓋からなる。土師器甕は底部片で、全容は明らかではないが、「常陸型甕」の可能性が考えられる。須恵器坏は底・体部片で、底径が須恵器坏A～F類に分類したものより約1.0cmほど大きいものである。体部下位及び底部は手持ちヘラ削り調整が施されている。須恵器蓋はC類が存在している。第8号住居跡は土師器が甕・坏、須恵器が甕・坏・高台付坏・高坏からなる。土師器坏はH類が存在し、底部は回転糸切り放し、内面に黒色処理が施されている。須恵器坏はB類・D類・E類が存在し、D類が床面から出土している。第25号住居跡は土師器が甕、須恵器が坏、陶器が壺が存在している。土師器の甕は底部片ではあるが、外面に縦位のヘラ磨き調整が施されていることから、「常陸型甕」の可能性が考えられる。須恵器坏はD類が存在している。

この他に、第2号住居跡・第14号住居跡は復元個体が少なく、はっきり特定はできないものの、ほぼ同時期のものと思われる。

本期は底径が口径の2分の1以上を示す平底の須恵器坏、ヘラ磨き後黒色処理が施される平底の土師器坏、つまみ上げがよりはっきりしている土師器甕等から、8世紀末から9世紀前半ごろに比定されるものと思われる。

[IV期]

第7・9・10・16・22号住居跡、第29号竪穴遺構から出土した土器群を当てることができる。第7号住居跡は土師器が甕・高台付坏、須恵器が甕・甗・坏・盤からなり、器種の豊富さが感じられ

る。土師器甕F類・H類が存在し、大形のF類は「常陸型甕」である。小型のH類は口縁端部がつまみ上げられてはいるものの、胴部外面の下位は横位のヘラナデ調整が施されており、「常陸型甕」の特徴の一つである縦位のヘラ磨き調整とは異なっている。土師器高台付坏は3個体出土しており、すべて内面ヘラ磨き後黒色処理が施されている。調整法は底部が回転ヘラ削り調整のもの、体部下位及び底部が手持ちヘラ削り調整のもの、回転糸切り放しのものとそれぞれ差異がみられる。また、この高台付坏のなかに、墨書されているものがみられ、底部が半分しか残存していないことから書かれている文字についてははっきりしないが、「卍」の可能性がたかいたと考えられる。墨書土器はこの他に、表採資料の高台付坏の底部に「壽」の文字がみられる。須恵器甕は胴部片や口縁部片で、胴部外面に平行叩きが施されているものと格子目叩きが施されているものがみられる。須恵器甕は五孔式のもので、胴部外面は平行叩きで、下位に横位の手持ちヘラ削り調整が施されている。内・外面とも黒色を呈していることが特徴である。須恵器坏はC類・E類・F類が存在し、E類が竈内から出土している。須恵器坏E類の中に、明赤褐色を呈し、胎土に雲母が目立ち、体部の稜が強く、体部下端と底部に手持ちヘラ削り調整が施されているものが1点認められる。須恵器盤は口径16.8cmを測り、皿状を呈し、口縁部が短く外反して立ち上がるものである。

第9号住居跡は土師器が甕・鉢・須恵器が甕・坏・高台付坏からなる。土師器甕は「常陸型甕」の底部片で、内面に鉄が付着していることから二次的な使用が考えられる。須恵器甕は2点とも胴部中位以上が欠損している。一方は灰黄色を呈し、胴部外面に平行叩き、下位に手持ちヘラ削り調整が施されており、他方は外面が黒褐色を呈し、胴部外面が横位のナデ、下端に弱い手持ちヘラ削り調整が施されている。須恵器坏はE類が存在し、その中に第8号住居跡でみられたと同様のものが1点認められる。ただ、器形に差異が認められ、本跡から出土したもののほうは体部が内彎気味で、口縁部が外反している。

第10号住居跡は出土した遺物量が少なく、復元個体は土師器甕が1点だけである。土師器甕はF類に属し、器厚が薄く、口縁端部が垂直にはっきりとつまみ上げられている。本跡は同時期の第9号住居跡と切り合っており、本跡のほうが新しいが遺物において差異が認められないため第9号住居跡とほぼ同時期のものと考えられる。

第16号住居跡は須恵器甕が出土しており、灰褐色を呈し、胴部外面格子目叩き、下端に手持ちヘラ削り調整が施されている。

第22号住居跡は土師器の甕・坏・高台付坏からなる。甕は「常陸型甕」の底部片と思われる。坏はH類で、底部は一方向の手持ちヘラ削り調整が施されている。高台付坏は高台がやや低く、体部が内彎気味に立ち上がるものである。

第29号竅穴遺構は復元個体が土師器甕1点だけで、土師器甕H類に属している。本期は須恵器坏E類・F類が主体を占め、底径が口径の2分の1以下を示すことから9世紀の後半ごろに比定される

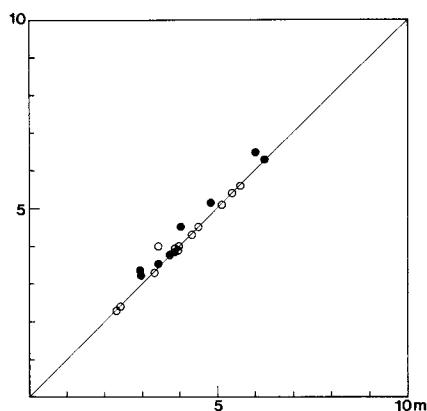
ものと思われる。

[V期]

第28号住居跡から出土した土器群を当てることができる。土師器は碗で、土師質土器は皿からなる。土師器碗は体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反するもので、内・外面ヘラ磨きが施され、内面黒色処理されたものとされないものが認められる。これらの土器はその器形から、灰釉陶器や緑釉陶器を模倣したものと考えられる。土師質土器の皿は7個体出土しており、器形の大小や切り離しにおいて次のような差異が認められる。(A)口径12.5cm, 器高3.2cmで回転糸切り放しのもの、(B)口径8.7~9.2cm, 器高1.3~1.8cmで回転糸切り放しのもの、(C)口径10.0cm, 器高2.0cmで回転ヘラ切り放しのもの、(D)口径9.4cm, 器高1.8cmで底部の切り離しは不明で、ナデ調整が施されているものが認められる。これらの中で、器形や調整技法が類似している(A)と(B)は法量の分化と捉えることができる。ヘラ切りされた(C)は、体部と底部の境に刺突状の痕跡が2か所、それぞれ対の位置に残っているという特徴がみられる。この痕跡はヘラで切り離した後、ロクロ（回転台）から移動する際、土器を支えた道具の痕ではないかと考えられる。しかし、他に類例が少なく、資料の増加をまって今後さらに検討していきたいと考える。

本期は須恵器がほとんど消滅し、土師器ならびに土師質土器が主体を占めている時期で、平安時代の10世紀末から11世紀前半ごろに比定されるものと思われる。

2 遺構について



第109図 住居跡・竪穴遺構規模ドット図
(○…推定値による)

先述したように、西郷遺跡の古墳時代後期から奈良・平安時代は、出土土器の分類により5期に区分されることがわかった。本項では、各期ごとに遺構の形態・配置関係等を検討して、調査区域の概観と集落の変遷をたどってみたい。さらに、当遺跡の中世以降の遺構についても簡単に触れてみたい。しかし、今回の調査は道路建設予定地内に限定されたものであり、調査区の南北に広がる西郷遺跡の全容を解明することは不可能である。なお、全掘していない遺構も多くあり、それらについては各遺構の検出状況から推定したデータをもちいた。

(1)古墳時代，奈良・平安時代

先述した時期区分に，各遺構をあてはめると次のようになる。なお，遺構からの出土遺物が少なく，時期の不明確な遺構については（ ）で示した。

I期 古墳時代後期 第4号住居跡・第6号住居跡，第3号竪穴遺構・第31号竪穴遺構
(6世紀後半)

II期 奈良時代 第27号住居跡・第30号住居跡，(第12号竪穴遺構)，第1号性格不明遺構
(8世紀前半)

III期 平安時代① 第1号住居跡・第2号住居跡・第8号住居跡・(第14号住居跡)・(第17号住居跡)
(8世紀末～9世紀前半) 第25号住居跡

IV期 平安時代② 第7号住居跡・第9号住居跡・第10号住居跡・第16号住居跡・(第22号住居跡)
(9世紀後半) 第29号竪穴遺構

V期 平安時代③ 第28号住居跡
(10世紀末～11世紀前半)

[I期]

竪穴住居跡2軒と竪穴遺構2基が該当する。竪穴遺構1基を除いて，調査区の東側の近接した位置から検出されており，一定のまとまりがみられる。2軒の竪穴住居跡は5mを超す，当遺跡においては比較的大形の住居跡である。

主軸方向はN-51°-WとN-60°-Wを示す。

支柱穴は2軒とも4か所で，第6号住居跡はさらに補助柱穴や出入口に伴う梯子ピットが検出されている。

竈は第6号住居跡では北西壁に検出されたが，第4号住居跡は第2号溝に切られ検出されなかった。

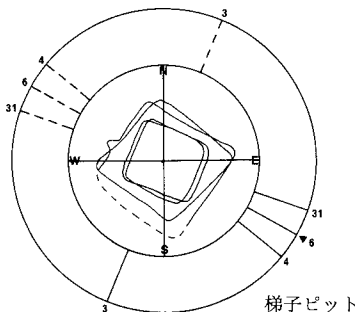
貯蔵穴は2軒とも北コーナー付近に1か所ずつ検出されている。

[II期]

竪穴住居跡2軒・竪穴遺構1基・性格不明遺構1基が該当するものと思われる。すべて調査区の西側から検出されている。第27号住居跡は一辺が5m前後の方形を呈している。

主軸方向はN-67°-Wと，I期の竪穴住居跡に比べてやや西に傾く傾向がみられる。

支柱穴は4か所検出され，出入口に伴う梯子ピットが東壁中央部付近から検出されている。



第110図 西郷I期住居跡・竪穴遺構の規模・方向と出入口施設

竈はI期の竪穴住居跡と同様西壁に付設されているが、I期の竈の右隅にみられた貯蔵穴は、本跡には認められなかった。

第1号性格不明遺構は上端径が約4.8mの円径を呈し、すり鉢状に約1.4m掘り込んで構築されている。底面には径13~15cmの円形・楕円形を呈し、深さ12~34cmを測るピットが8か所検出されている。遺物は底面から出土してはいないが、覆土下層から土師器甕C類が1点、火熱を受けた礫2点、馬の歯2点と炭化材が出土している。覆土中層から上層にかけて土師器甕・坏・高台付坏、須恵器甕・坏・蓋・壺など総数約2000点の土器や馬の歯が出土している。甕C類は覆土上層からも出土しており、遺物からみるかぎりでは、本遺構が機能した時期と廃絶した時期に大きな隔たりが感じられない。本遺構の性格については土器の廃棄物・祭祀的な場などと考えることはできるものの現時点では特定することはできなかった。

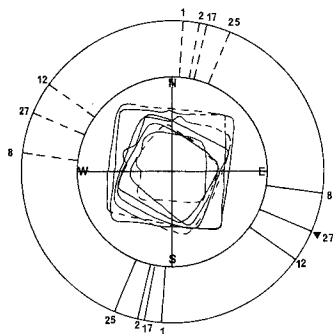
第12号竪穴遺構は第27号住居跡や第1号性格不明遺構と同様、調査区の西側に検出されている。遺物が少なく、復元可能な個体は認められず、時期を特定することはできなかった。ただ覆土から出土した甕の口縁部片は、土師器甕E類に属することから、本跡は当該期に属する遺構である可能性が考えられる。

[III期]

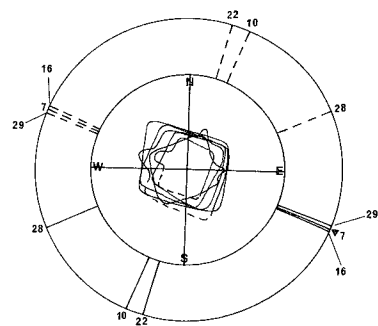
竪穴住居跡6軒が該当するものと思われる。竪穴住居跡は調査区の東側と西側から検出されており、東側には一辺が5.5m以上の大形の住居跡が、西側には一辺が4.0~4.5mの中形の住居跡が検出されている。東側の住居跡の主軸方向は東へ傾き、 $N-4^{\circ}\sim 13^{\circ}-E$ の範囲内にとどまりをみせる。一方西側の住居跡は西へ傾くものの、ばらつきがみられる。

支柱穴は基本的に4か所というII期までと同じ傾向を示している。

竈については主軸方向と同様に、東側の住居跡と西側の住居跡では違いが認められ、東側は北壁に、西側は西壁に付設されている。



第111図 西郷II・III期住居跡・竪穴遺構の規模・方向と出入り口施設



第112図 西郷IV・V期住居跡・竪穴遺構の規模・方向と出入り口施設

第17号住居跡は出土した遺物が少なく、時期を特定することは困難であるが、近接する第1号住居跡の規模や形態から同タイプの住居跡と考えられ、当該期の住居跡として捉えた。

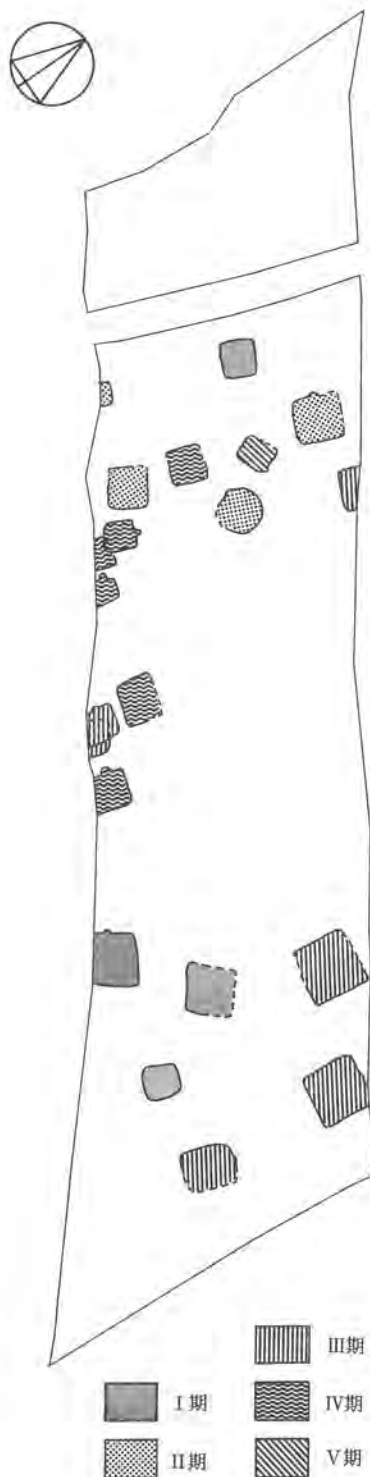
[IV期]

竪穴住居跡5軒と竪穴遺構1基が該当するものと思われる。本期に属する遺構はすべて調査区の中央部から西側に検出されている。一辺が最大で約4.5m、最小で約2.4mを測り、一辺が3.2~3.9mに集中している。一般的に住居跡の規模は時代が下がるにつれて小形化していく傾向が認められており、当遺跡においても同様の傾向が窺える。

主軸方向は第10号住居跡と第22号住居跡を除いて、他は西側へ傾き、その範囲がN-67°~75°-Wとまとまりをみせる。第10号住居跡と第22号住居跡は、東側へ傾き、N-15°-EとN-22°-Eを示している。第10号住居跡と第9号住居跡は切り合い関係で第10号住居跡のほうが新しいが、遺物に大きな隔たりを見いだせなかったため同時期のものとして捉えた。しかし、より新しいとされる第10号住居跡には、主軸方向や竈の付設される位置等、遺構面では変化が見られる。

主柱穴が検出されたのは第7号住居跡と第10号住居跡の2軒だけで、主柱穴が認められない住居跡が増えてくる傾向が認められる。第7号住居跡は出入口に伴う梯子ピットが1か所検出され、梯子ピットより外側の壁付近に主柱穴が検出され、他の住居跡との違いが認められる。

竈は主軸方向の違いに呼応して、西壁に付設されるものと北壁に付設されるものがみられる。どちらの竈もI~III期に比べ煙道が住居跡の壁外に大きく張り出すという傾向が認められる。



第113図 時期別遺構配置図

[V期]

第28号住居跡が該当する。調査区の西側から検出されており、長軸3.37m、短軸2.91mを測り、IV期にみられた小形化の傾向がより進んでいる。

主軸方向は東側へ大きく傾いている。

主柱穴は2か所検出され、その他不規則な位置からピットが2か所検出されている。

竈はI～IV期とは異なり、東壁の中央部からコーナーに寄った位置に付設されている。また、IV期にみられた煙道が壁外へ張り出す傾向は本期には認められず、竈自体の規模が縮小していく様相がみられる。

貯蔵穴は竈と反対側の西壁のコーナー付近に検出されている。

(2) 中世

当遺跡の中世以降の遺構としては、遺構の切り合い関係や遺物などから判断して、掘立柱建物跡・溝・道路跡・井戸・地下式墳・墓墳などが考えられる。掘立柱建物跡・溝・道路跡・井戸は調査区の東側から、地下式墳・墓墳は調査区の中央部よりやや西側から検出されている。

ここではそれらの遺構の中から、地下式墳ををとり上げて述べてみたい。

地下式墳について

当遺跡から検出された地下式墳は5基で、いずれも調査区の西側からある程度まとまって検出されている。第4・5号地下式墳以外は天井部が崩落しており、遺存状態が良くない。

竪坑の平面形は、ほとんどが長方形を呈し、第5号地下式墳だけが楕円形を呈している。他の遺跡においても大部分が方形・長方形を呈し、円形・楕円形を呈するものは少ないと報告されている⁽⁹⁾。

遺構確認面から竪坑の底面までの深さは、第1・2号地下式墳が1.5～1.6m、第3・4・5号地下式墳が1.85～2.30mを測る。

主室の平面形は長方形・隅丸長方形を呈し、第1号地下式墳以外は主軸方向に対して横長になっている。

主室の床面積は、最も大きいものは第3号地下式墳で約6.12㎡、最も小さいものは第5号地下式墳で2.35㎡である。入り口部は第1・2号地下式墳が北側、第3号が南東側、第4・5号が東側と不統一で、主軸方向も同様な傾向を示している。しかし、仮に各地下式墳の存在した時期を無視して、B2b₉区付近を中心において、そこから各地下式墳の配置をみると、各地下式墳が弧を描くように配置され、入り口部がB2b₉付近に向かって開口されている様子が窺える。

地下式墳の内部はほとんど施設をもたないが、第4号地下式墳では、竪坑の底面からピットが検出されている。ピットは底面の四隅から検出され、径10cmの円形で深さ10cm前後を測る。さらに、竪坑と主室を結ぶ羨道には楕円形状の深さ20cm程の窪みが認められる。

また、第2号地下式壙の底面は常総粘土層に達しているが、その粘土が火熱を受け、やや焼けたような状態を示している。第3号地下式壙では、底面から50～60cmの高さから、焼土・炭化物・灰が厚いところでは25cm、薄いところで5cm程堆積している。それ以下は、ロームブロックやローム粒子、及び粘土が人為的に埋め戻されたように堆積し、底面のザラザラした粘土層へ達している。遺物は、第1号地下式壙から内耳土器が3個体出土し、そのうち竪坑の覆土下層から出土したものはほぼ完形に復元することができた。その他、馬の歯が竪坑の覆土中層から出土している。第2号地下式壙は土師器の高台の付いた皿が、主室の床面直上から出土している。第3号地下式壙は内耳土器が3個体、焼土・炭化物・灰の層から出土している。

以上、当遺跡での地下式壙の概略を述べたが、地下式壙に関しては中田英氏(中田 1977)⁽¹⁰⁾や半田堅三氏(半田 1979)⁽¹¹⁾などによって時期や機能についてすでに言及されている。当遺跡の地下式壙を半田氏の分類にあてはめると、第1・2・4号地下式壙は無段A₁に、第3号地下式壙は有段I類A₁に、第5号地下式壙は有段I類C₂に分けられる。さらに、半田氏は地下式壙の時期について13世紀末から16世紀初頭を考え、その機能については貯蔵庫よりも墳墓としての機能を考えている。

当遺跡から検出された地下式壙は、時期や用途について限定しうるだけの資料は得られなかったが、地下式壙の位置や切り合い関係(地下式壙がある程度まとまった位置から検出されていること。地下式壙が一度構築された後に、再び同じ場所に構築されていること。)、出土している遺物(出土量は少なく、内耳土器などの実用品が主な出土遺物であること。)、地下式壙の内部(底面の焼けている状況が認められる地下式壙があること。)、地下式壙が検出された付近に中世の墓壙が存在していることなどから、貯蔵庫としての機能よりも墳墓としての性格が強いものと考えられる。時期については出土している内耳土器が考えられ、浅野氏の分類(浅野 1988)⁽¹²⁾では、「内耳土器の内耳鍋の出現を15世紀の前葉ないしは中葉とし、内耳鍋が次第に姿を消して行き、浅めのほうろくが出土してくるのが16世紀の前葉から16世紀の後葉」としている。当遺跡から出土している内耳土器はすべて内耳鍋であることから、15世紀を中心とした時期に比定されるものと考えられる。

3 西郷遺跡の概観

西郷遺跡は縄文時代から中世までの長期間にわたり、継続的あるいは断続的に人々の生活が営まれたことがわかった。本項では、各時代ごとの遺構・遺物の特徴や周辺遺跡との関連性について触れてみたい。

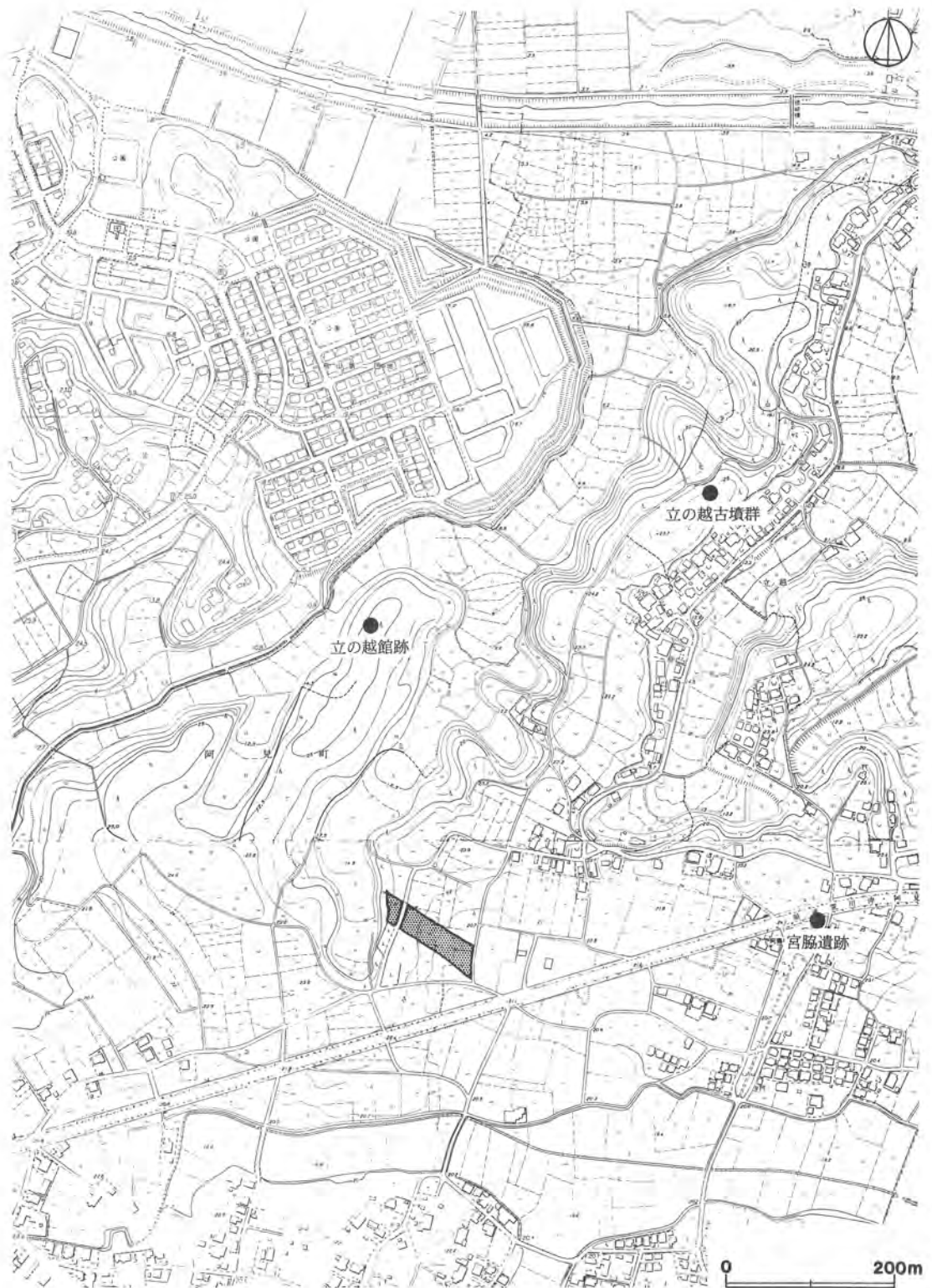
縄文時代では、竪穴住居跡等の遺構は検出されなかったが、調査区域全域から402点に及ぶ縄文式土器片が出土している。縄文式土器片は草創期の夏島式から後期の安行式に比定されるもので、

特に早期中葉の田戸下層式、後期中葉の加曾利B式が主体を占めている。「阿見町史研究」によれば、西郷遺跡内に阿見貝塚が所在することが確認されているが、今回の調査では貝塚は検出されなかった。いずれにしても、当遺跡の周辺には縄文時代の集落が所在しているものと考えられる。

古墳時代は、前期・中期の遺構は検出されず、後期になって竪穴住居跡がみられるようになる。当遺跡の東側約400mに宮脇遺跡が所在し、すでに調査された第Ⅰ期と第Ⅱ期を併せて、竪穴住居跡52軒・掘立柱建物跡5棟・竪穴遺構7基・粘土版築基壇1基が検出されている。このうち第Ⅰ期に調査した竪穴住居跡（28軒）から出土している遺物と当遺跡の竪穴住居跡から出土している遺物がほぼ同時期のものと考えられ、両遺跡の関連性が窺える。また、西郷遺跡の北東側約600mに所在するとされる立の越古墳群との関連も想定される。

奈良・平安時代は、古墳時代後期に現れた竪穴住居跡の数が増加し、住居跡の分布状況をみると古墳時代に比べ調査区域の西側に多くなる傾向がみられる。先述した宮脇遺跡の調査では、奈良時代以降と思われる粘土版築基壇が検出されている。その粘土版築基壇の規模や形状は、長軸11.0mの長方形を呈するもので、16～20層にも及ぶ強固な版築が施されているものである。性格等について特定していないが、穀倉や塔等を想定している。西郷遺跡から検出されている竪穴住居跡が、奈良・平安時代に増える傾向がみられることや付近の遺跡から粘土版築基壇が検出されていることから、奈良・平安時代になると、この地域一帯は繁栄期を迎えていたことが推測される。

中世のものと考えられる遺構は、掘立柱建物跡・溝・道路跡・井戸・地下式壙等で、遺構の分布状況をみると調査区域の東側に多くみられる。出土している遺物は、内耳土器をはじめ土師質土器や瀬戸系の陶磁器類である。溝（第1号・第2号）や道路跡（第1号）の中には、現在の地割りと一致するものがみられ、当時の遺構が現在の地割りにまで影響を及ぼしていることが窺える。溝については、付近に井戸が存在し、第1号溝は井戸とさらに道路跡と同時に機能していたことがわかった。溝と井戸が一体となっている例は阿見町竹来遺跡においても検出されており、作業場的な機能が考えられるが今後さらに検討を加えていきたいと思う。地下式壙はある程度まとまった範囲に検出されており、墳墓的な性格が考えられる。これらの中世の遺構は、当遺跡の北側約350mに所在するとされている立の越館跡との関連が推測される。



第114図 西郷遺跡地形図

表 3 西鄉遺跡出土土器一覽表

	土 師 器				須 惠 器				土質質土器				陶 器			插鉢	合 計	
	甕	甌	鉢	碗	高台付環	高台付皿	細片	甕	盤	蓋	細片	皿	灰	甕	鉢			碗
SI 1	1 (93)				(5)		(47)	(7)	1		(3)						(3)	4 (164)
SI 2	4 (407)				(19)		(15)	(18)		(7)								4 (494)
SI 4	(80)	1(1)		2 (22)			(6)	(3)		(1)		(2)	(1)					3 (124)
SI 6	(131)	1		2 (40)			(9)	(2)										3 (182)
SI 7	4 (150)			(44)	3	(25)	4 (12)	1(1)	(2)									17 (319)
SI 8	1 (173)			1 (9)		(4)	1 (34)	(1)	3 (46)	1	1			(3)				8 (270)
SI 9	1 (81)	1		(16)			2 (9)		1									7 (106)
SI10	2 (55)			(15)		(3)	(1)	(1)										2 (76)
SI14	(27)			(3)			(5)	(5)	1 (3)									1 (50)
SI16	(20)			(5)			(5)	1 (7)	(2)					(1)			(2)	1 (43)
SI17	1 (30)			(5)			(7)		(3)									1 (45)
SI22	1 (217)			1 (39)	2		(24)	(2)	(16)		(12)		(5)					4 (313)
SI25	1 (72)			(6)	(1)		(2)	(2)	1 (5)		(1)		1					3 (87)
SI27	2 (161)			(52)		(14)			3 (8)				(5)					7 (240)
SI28	(57)	(1)	2	(29)	(3)		(2)	(2)	(2)	(1)		7 (4)						9 (99)
SI30	2 (40)			(1)														2 (41)
SI 3	3 (55)	1(2)		3 (10)		(14)			(2)									7 (83)
SI12	(63)			(6)					(1)		(5)						(1)	(76)
SI19	1 (69)			(13)			1 (4)	(3)	(11)	(2)					1		(23)	4 (122)
SI29	2 (70)			(9)			(3)											2 (82)
SI31	(41)			1 (18)														1 (59)
SB 2	(18)			(2)			(2)		(1)		(1)							(24)
SB 3	(13)			(1)														(14)
SD 1	(106)			(6)			(30)	(9)	(3)	(1)		2 (9)	(16)			1	(20)	3 (200)
SD 2	(26)			(5)			(3)			(1)		1	(2)				(26)	2 (63)

註

- (1) 松村恵司「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』山田調査会・日本道路公団 1977
福田健司「須恵系土師質土器について」『日野市落川遺跡調査概報V』日野市落川遺跡調査会 1987
- (2) 高井梯三郎・五十川伸夫「常陸国新治郡上代遺跡の研究II」甲陽史学会 1988
- (3) 田熊清彦「真岡市周辺における奈良・平安時代の須恵器」『真岡市史案内 第5号』真岡市教育委員会 1986
- (4) 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6(木葉下遺跡I)」『茨城県教育財団文化財調査報告第21集』 1983
茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書8(木葉下遺跡II)」『茨城県教育財団文化財調査報告第28集』 1984
川井正一「水戸市木葉下窯跡群出土の須恵器」『菟玖波 創刊号』菟玖波の会 1984
- (5) 村田健二「鬼高期後半から国分期初頭の土師器について」『千天』大洗地区遺跡発掘調査会 1980
- (6) 鬼高期研究グループ「房総における鬼高期の研究」『日本考古学研究所集報IV』日本考古学研究所 1982
- (7) 村山好文「印旛・手賀沼周辺における古墳時代後期の特異な甕形土器について」『日本考古学研究所集報VII』日本考古学研究所 1985
- (8) 茨城県教育財団「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(1)(柴崎 I・II-1区)」『茨城県教育財団文化財調査報告書第54集』 1989
- (9) 桜井二郎「茨城の地下式壙について」『年報 2』茨城県教育財団 1982
- (10) 中田 英「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古 第2号』神奈川考古同人会 1977
- (11) 半田堅三「本邦地下式壙の類似学的研究」『伊知波良 2』 1979
- (12) 浅野晴樹「関東における中世在地産土器について」『研究紀要 第4号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988

第5章 南丘遺跡

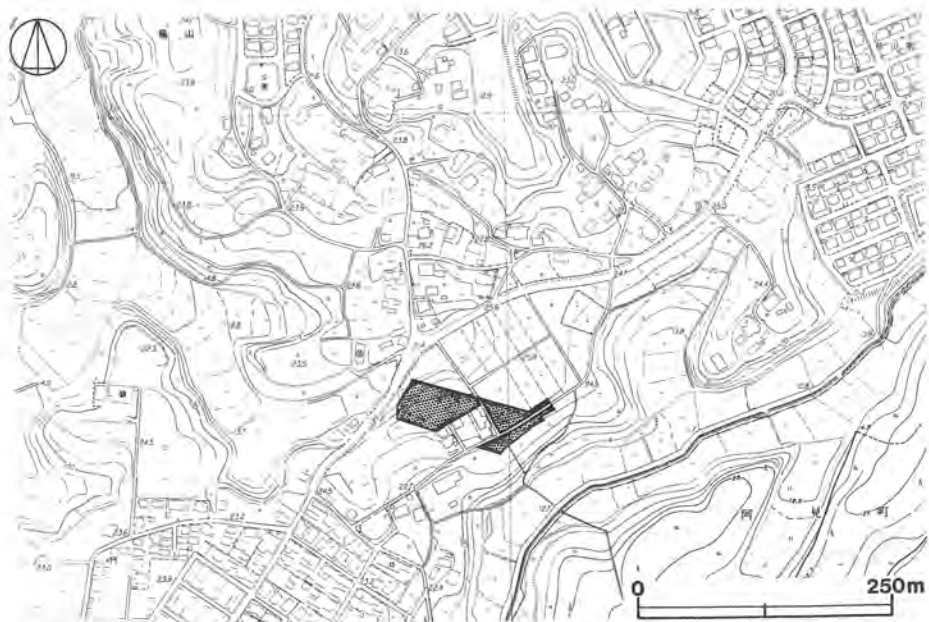
第1節 遺跡の概要

1 地形概観

南丘遺跡は、土浦市烏山字南ヶ丘に所在する。調査の対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス予定地内の同所1907番地外13筆、3100㎡である。

当遺跡は、土浦市南東部の舌状台地上に位置し、土浦市と阿見町を画する谷に面している。台地面と低地面の比高は13m前後を測る。台地面は、やや幅の広い馬の背状を呈しており、台地中央付近の標高は約26mである。

調査区内の土地利用状況は、約70%が果樹園、約20%が畑地で残りは竹林であった。



第115図 南丘遺跡周辺地形図

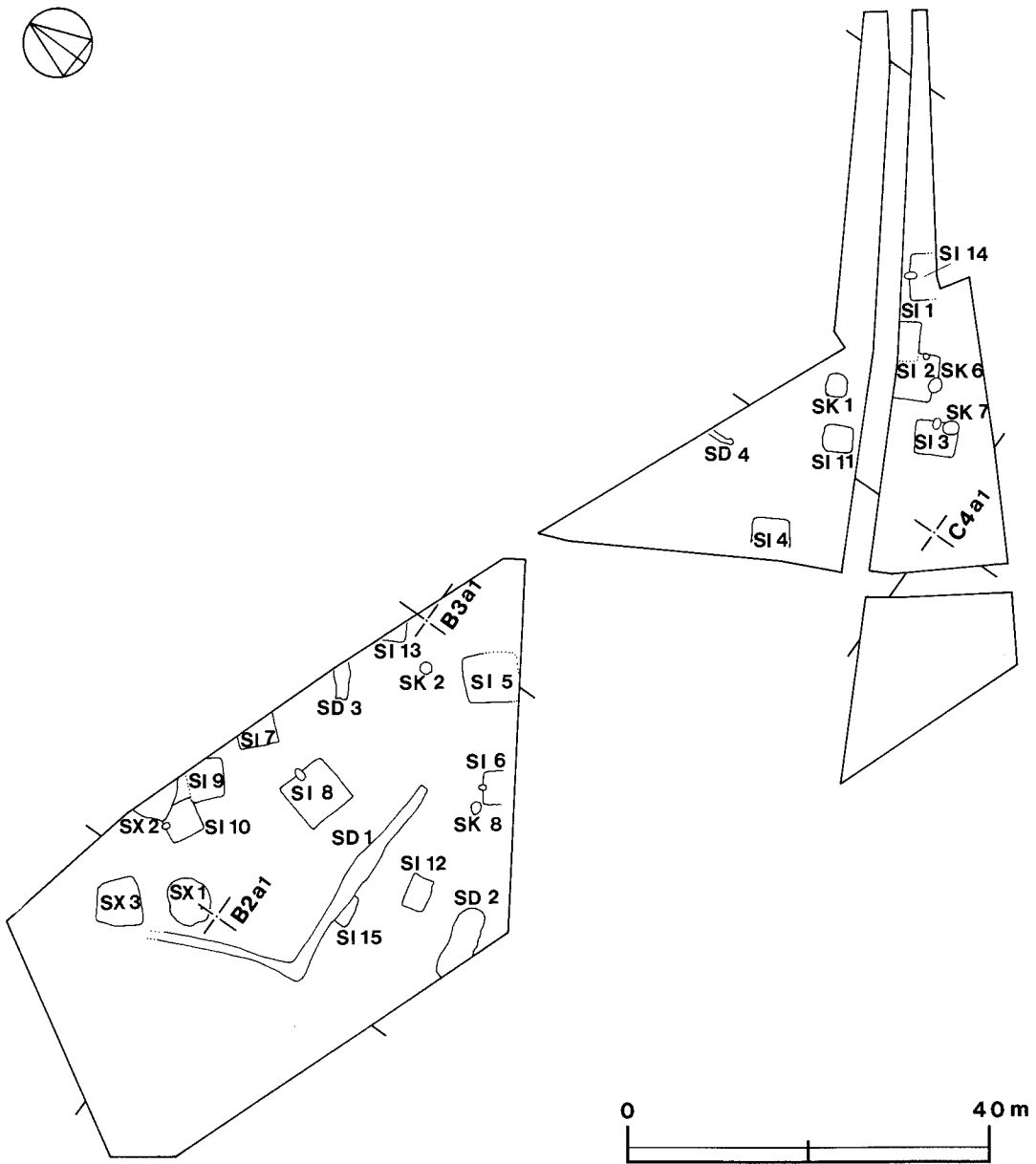
2 検出遺構

当遺跡において検出された遺構は、住居跡15軒、土坑8基、溝4条である。これらの遺構は、その種類毎にまとめて解説することとし、時期毎の分類は第4節で実施した。8基の土坑のうち、第3～5号土坑については、その形態等から他の土坑と同様に扱うことには疑問があり、性格不明遺構として別項にまとめた。

各遺構の分布は、台地中央から東斜面に偏っているように見受けられる。住居跡は、確認面か

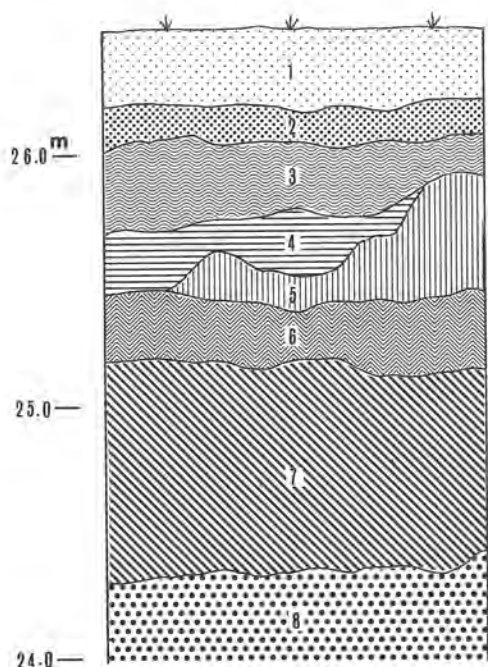
らの深さが浅い例が多い。これは、地形的な要因により表土が流失していること、または旧軍関係の施設建設に際して表土が削平されたこと等によるものであろう。

各遺構からの出土遺物は、遺構毎にまとめて掲載した。しかし、縄文時代の遺物については、表土や覆土中から出土しており、遺構と結び付く例が皆無であることから、一括して扱った。



第116図 南丘遺跡全体図

第2節 基本層序



第117図 南丘遺跡土層柱状図

当遺跡においては、遺構確認面を2層上面とした。遺構該期の生活面はより上位に位置したと見られるが、耕作により失われてしまったと考えられるため確認された遺構の掘り方は全て2層上面を上端としている。

第3節 遺構と遺物

本節は、住居跡・土坑・溝・性格不明遺構の順に遺構と出土遺物を掲載し、最後に遺構外出土遺物を掲載した。なお、出土遺物の中で土師質土器皿に大小等があり、大きくて深い皿をA、小さくて浅い皿をB、さらにかわらけとも呼ばれる皿を「かわらけ」と付記した。

1 住居跡

第1節の2に述べたように、当遺跡で検出された住居跡は15軒である。その中で、調査区外にかかるため全体を調査できなかった住居跡は9軒を数え、他の遺構に切られているにせよ全体を調査し得た住居跡は6軒に過ぎない。これらは、調査区の西側(A1・B1区)には見られず、A2区及びB2～B4区に見られる。地形的には、台地中央から東斜面上部にかけての場所に多い。

第117図は、南丘遺跡のテストピットの土層図である。テストピットは、当遺跡が所在する台地のほぼ中央に相当するB2f₁区に設けた。

1層は耕作土で、褐色を呈する。2層は、ローム粒子のほか極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土である。3層は、ローム粒子や少量のローム小ブロックを含み、明褐色を呈する。4層は、ローム粒子を含む褐色土である。3・4層はいずれも締りを有しており、ソフトロームに相当するものである。5～7層はハードローム層、8層は砂質ローム層で、色調はいずれも褐色を呈する。

第1号住居跡（第118図）

位置 B4_{gs}区を中心に所在し、調査区の南東端付近に位置する。

重複関係 攪乱のため不明瞭であるが、南西側で第2号住居跡と重なった可能性がある。

規模と平面形 3.7×(1.5)mの方形状または長方形状を呈したと思われる。

長軸方向 (N-63°-E)

壁 セクションで5cm前後、東コーナーと南東壁中央付近で2～3cmの立ち上がりを確認した。

床 ロームで比較的硬く、平坦である。

ピット 検出されなかった。

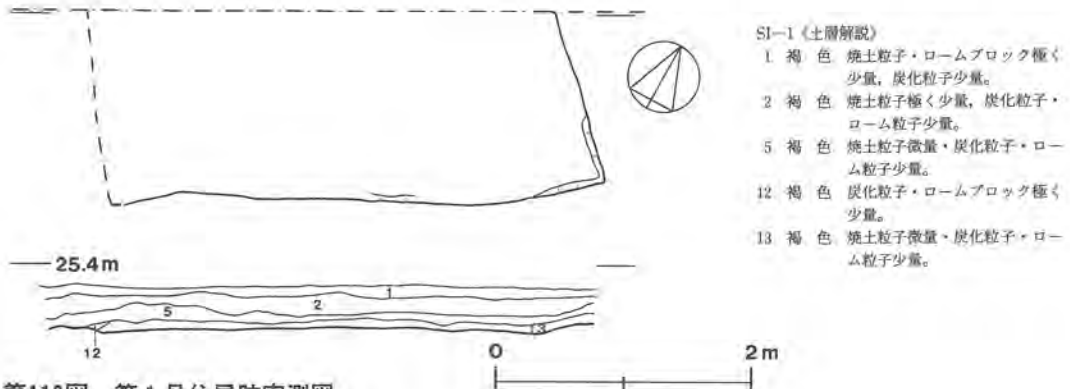
竈 検出されなかった。

覆土 1層で、褐色土が堆積している。自然堆積と考えられる。

遺物 土師器片（坏・甕）、須恵器片（甕）、土師質土器片、内耳土器片等が少量出土している。

覆土からの出土が多いが、本跡の掘り込みが浅いだけに床面からあまり浮いた状態ではなく、特に1は南寄りの床面直上から検出された。

所見 本跡は、調査できた部分の遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されると思われる。



第118図 第1号住居跡実測図



第119図 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (12.5) B (3.6)	体部はなめらかなカーブで内彎し、口縁は強く外反する。口縁外面下位に明瞭な稜を有する。	横ナデ、内面へラ磨き及び黒色処理	砂粒 にふい 橙色 普通	P2 10% 床面直上

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	皿B 土師質土器	A 10.4 B 2.2 C 6.0	体部は内彎してから直線的に開く。口縁はやや外反気味。全体に薄手。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り	砂粒 橙色 普通	P1 60% 覆土

第2号住居跡(第120図)

位置 B4_{h4}区を中心に所在し、調査区の南東端付近に位置する。

重複関係 攪乱のため不明瞭であるが、北コーナー付近で第1号住居跡と重なった可能性がある。

また、南側を第6号土坑によって切られている。

規模と平面形 5.1×4.0mの長方形を呈する。

主軸方向 N-63°-E

壁 北東側で30cm前後の高さを測り、他は10cm前後の高さを測るが、旧状は推定できない。

床 ロームで、南東壁際と北コーナー付近がやや軟弱であるが、他は硬く踏み固められている。

ピット 検出されなかった。

竈 北東壁に付設されていた。長さ130cm前後、幅110cm前後を測るが、遺存状態は悪い。住居跡の壁を幅55cmで三角形に50cmほど掘り込み、奥壁を煙道としている。袖は砂質粘土を用いて構築されていたが、崩れて旧状は不明である。火床は、長径約60cm、短径約40cmの楕円形状に焼土化している。焚口には、長径85cm、短径50cm、深さ30cm程の掘り込みが確認された。この掘り込みの内部には、灰を含む層がほぼ水平に堆積している。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積と考えられる。

遺物 土師器(坏・甕・甑及びその破片)、須恵器(坏・甕及びその破片)、土師質土器(皿やその破片)及び縄文式土器片等が出土している。4は竈前方の床面直上から出土し、14は南西壁寄りの覆土中から出土している。他は、竈付近の覆土から出土している。

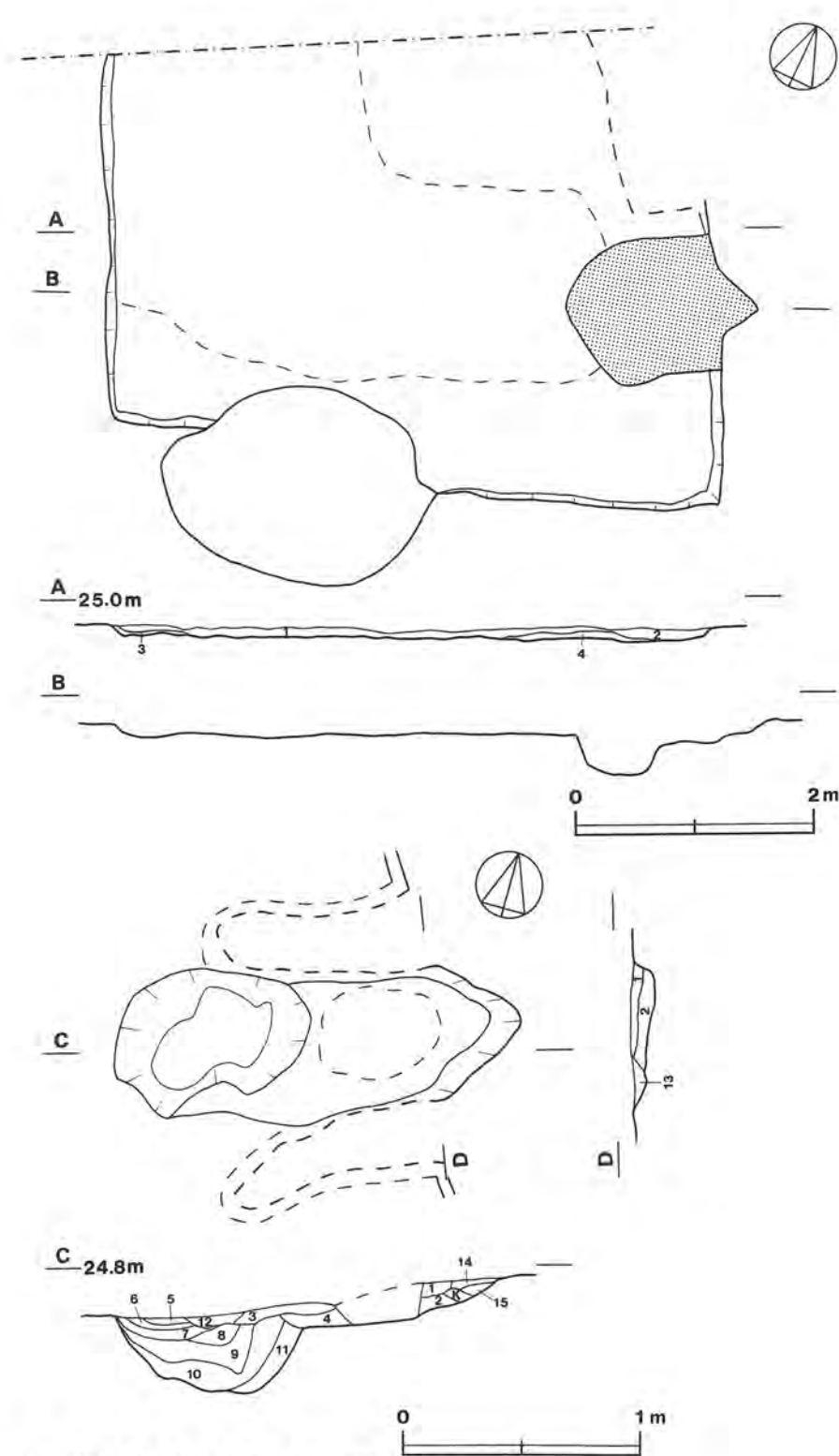
所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。

SI-2 <土層解説>

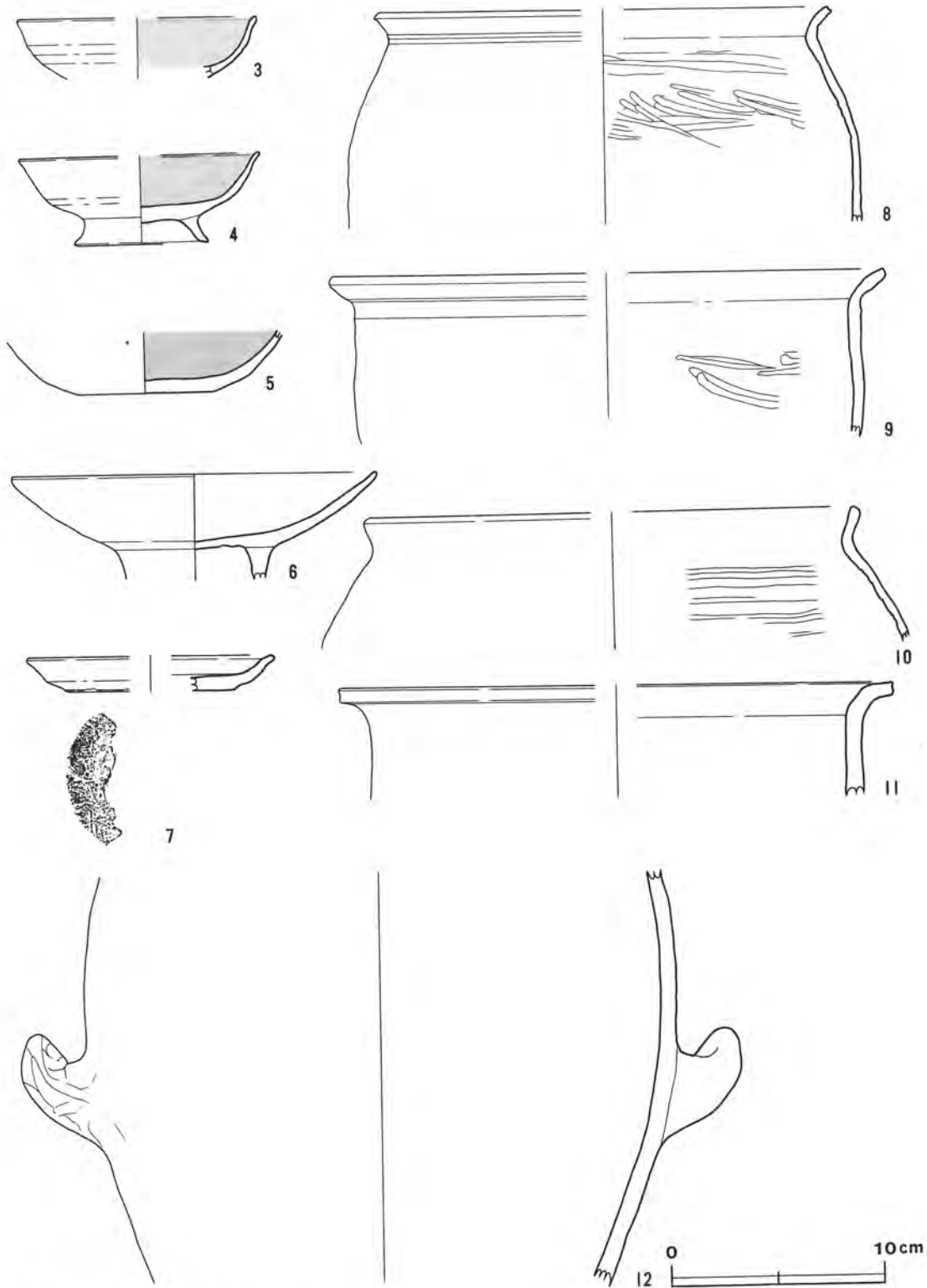
- 1 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子極少量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 褐色 炭化粒子極少量、ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子極少量、炭化粒子・ローム粒子少量

SI-2 <竈土層解説>

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 8 黒色 焼土粒子少量、炭化粒子中量、ローム粒子少量 |
| 2 によい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 9 暗褐色 焼土粒子極少量、炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子極少量 | 10 暗褐色 焼土粒子微量、炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子極少量 | 11 暗褐色 焼土粒子微量、炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 12 褐色 焼土粒子・ロームブロック少量、炭化粒子極少量 |
| 6 褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック中量 | 14 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 7 暗褐色 焼土粒子極少量、炭化粒子・ローム粒子少量 | 15 褐色 焼土粒子・炭化粒子極少量、ローム粒子中量 |



第120図 第2号住居跡・竈実測図



第121图 第2号住居跡出土遺物実測図

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
3	坏 土 師 器	A (11.2) B (2.9)	体部は丸味を以って内彎する。口縁はやや外反し、口唇は丸くおさめる。	横ナデ、体部下半回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理	砂粒 橙色 普通	P 8 20% 覆土
4	高台付坏 土 師 器	A (11.2) B 4.2 D 6.2 E 1.3	体部は強く内彎して腰を持つ。口縁は外反し、口唇は丸い。高台は開き、壘付は外側が下がる。	横ナデ、体部下半回転ヘラ削り、高台接合部はていねいな横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理	砂粒 にぶい橙色 普通	P 9 60% 甕前床面直上
5	坏 土 師 器	B (2.9) C 6.2	底部は平坦。体部は内彎しながら立ち上がり、外上方へ開く。	横ナデ、体部下端手持ヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理	砂粒 にぶい橙色 やや不良	P 7 40% 床面直上
6	皿 土 師 器	A 17.3 B (5.1) D 7.5	全体にゆるやかに内彎し、口唇は丸くおさめる。高台は小さく、垂下してから開いたと思われる。	横ナデ、高台接合	砂粒 黄橙色 普通	P10 70% 甕覆土
7	皿B 土師質土器	A (11.6) B 1.7 C (8.0)	体部は強く外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反し、内面に稜を持つ。口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り	砂粒 浅黄橙色 普通	P11 25% 覆土
8	甕 土 師 器	A (21.2) B (10.1)	肩は極くゆるやかにすぼまり、頸部は強く外反する。口唇はヘラ調整され、外に強い稜を持つ。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ、内面ヘラ横位ナデ、頸部内外面ヘラ横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 不良	P 3 5% 覆土
9	甕 土 師 器	A (26.2) B (7.9)	胴部はほぼ直立し、頸部は強く外反する。屈曲部はヘラ横ナデにより凹線状を呈する。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ、内面ヘラ横位ナデ、頸部内外面ヘラ横ナデ	長石・雲母・砂粒 橙色 普通	P 4 5% 覆土
10	甕 土 師 器	A (22.8) B (6.5)	肩はゆるやかに内彎しながらすぼまり、頸部は丸味を以て外反する。口唇部は丸味を有する。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ、内面ヘラ横位ナデ、頸部内外面ヘラ横ナデ	長石・砂粒 橙色 普通	P 5 5% 床面直上
11	甕 土 師 器	A (26.0) B (5.4)	胴部はほぼ直立し、頸部は強く外反して水平に開く。口唇部のつまみ上げは小さく、外傾気味。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、頸部内外面横ナデ	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 6 5% 覆土下層
12	甕 土 師 器	B (19.7)	胴部はゆるやかに内彎し、把手上位に最大径を有する。把手は中央から先を上へ折り曲げる。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、把手接合部指ナデ	砂粒 にぶい黄橙色 良	P12 10% 覆土

第3号住居跡（第122図）

位置 B4₁₃区を中心に所在し、第2号住居跡の南西約2mに位置する。

重複関係 東コーナーを第7号土坑によって切られている。

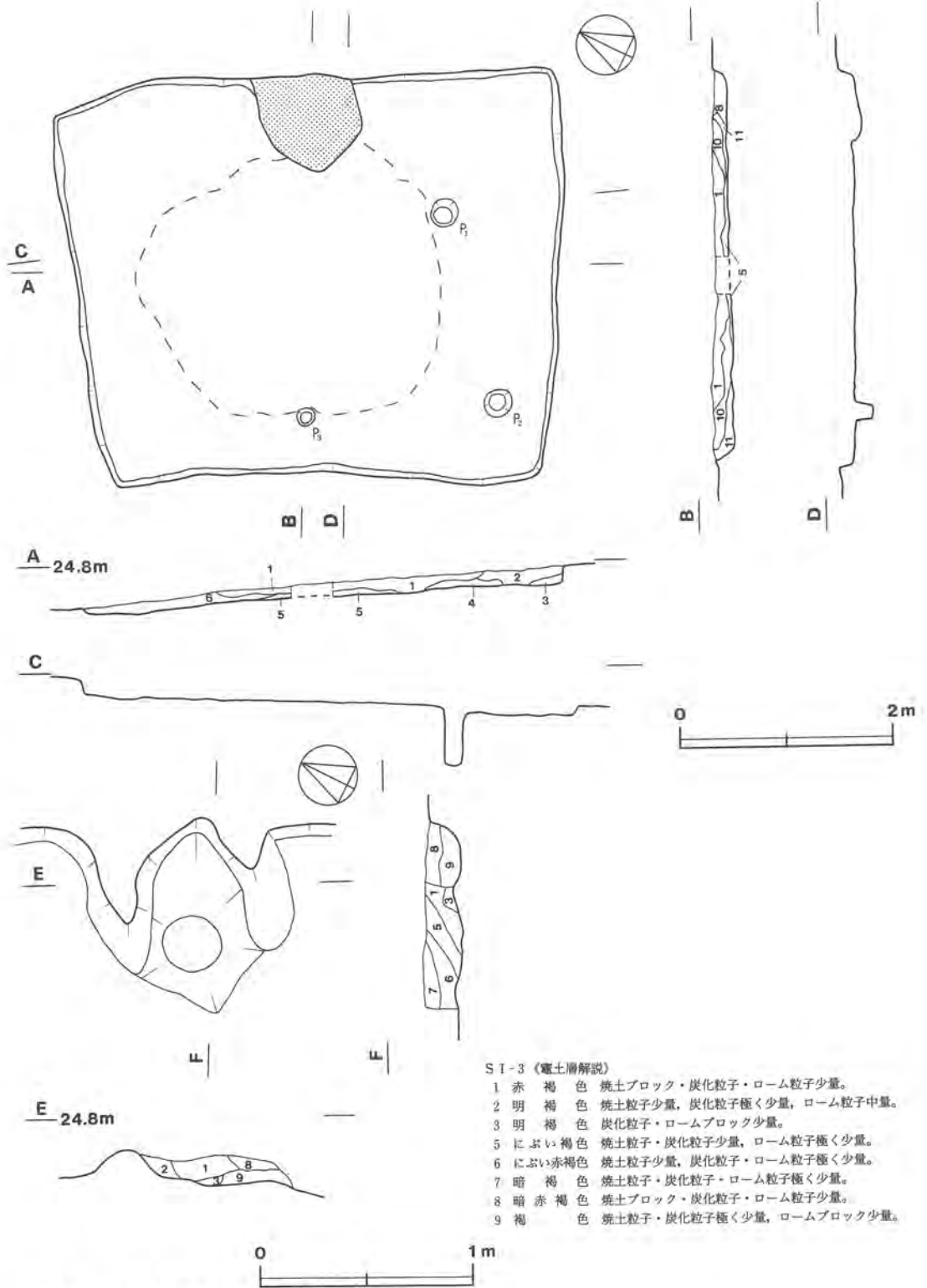
規模と平面形 4.4×3.7mの不整長方形を呈する。

主軸方向 N-63°-E

壁 10~15cmの高さを測り、北西壁はほぼ垂直に、他はやや外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、全体に平坦である。中央付近は硬く踏み固められている。

ピット 3か所を検出した。P₁・P₂は径30cm弱の円形状を呈し、深さはP₁が65cm、P₂が52cmを測る。いずれも主柱穴と思われる。P₃は径18cmの円形状を呈し、深さは31cmを測る。出入口の施設に伴うものと思われる。



第122図 第3号住居跡・竈実測図

SI-3〈土層解説〉

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子極く微量，ロームブロック少量。 | 6 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。 |
| 2 暗褐色 焼土粒子極く少量，炭化粒子・ロームブロック少量。 | 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 3 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 | 10 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 | 11 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。 | |

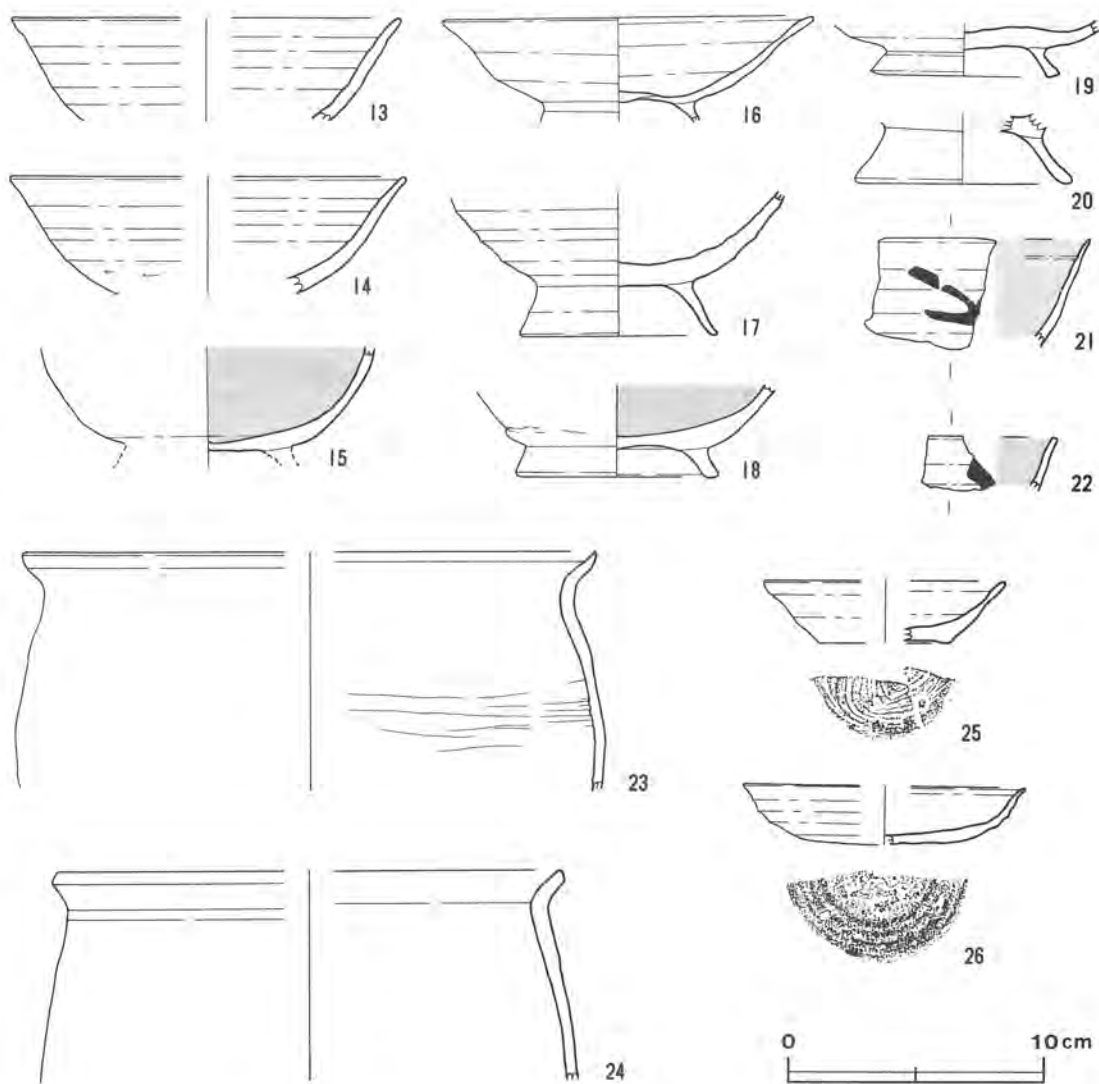
竈 北東壁中央に付設されていた。長さ90cm，幅100cmを測り，遺存状態はあまり良い方ではない。ロームを壁から床面中央に向かって半島状に掘り残して袖部とし，天井部は砂質粘土を用いて構築したものと考えられる。左袖は，幅40cm前後，長さ約40cmを測り，内側は焼土化している。右袖はかなり崩れているが，左袖と同様の規模であったと思われる。火床は，直径約30cmの円形状の範囲が焼土化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器（坏・甕等及びその破片），須恵器（坏・甕及びその破片），土師質土器（皿及びその破片），縄文式土器片等が出土している。実測図掲載遺物中，13・14・16～18は竈前方の床面直上から出土し，本跡で使用された土器であると思われる。他は覆土から出土している。

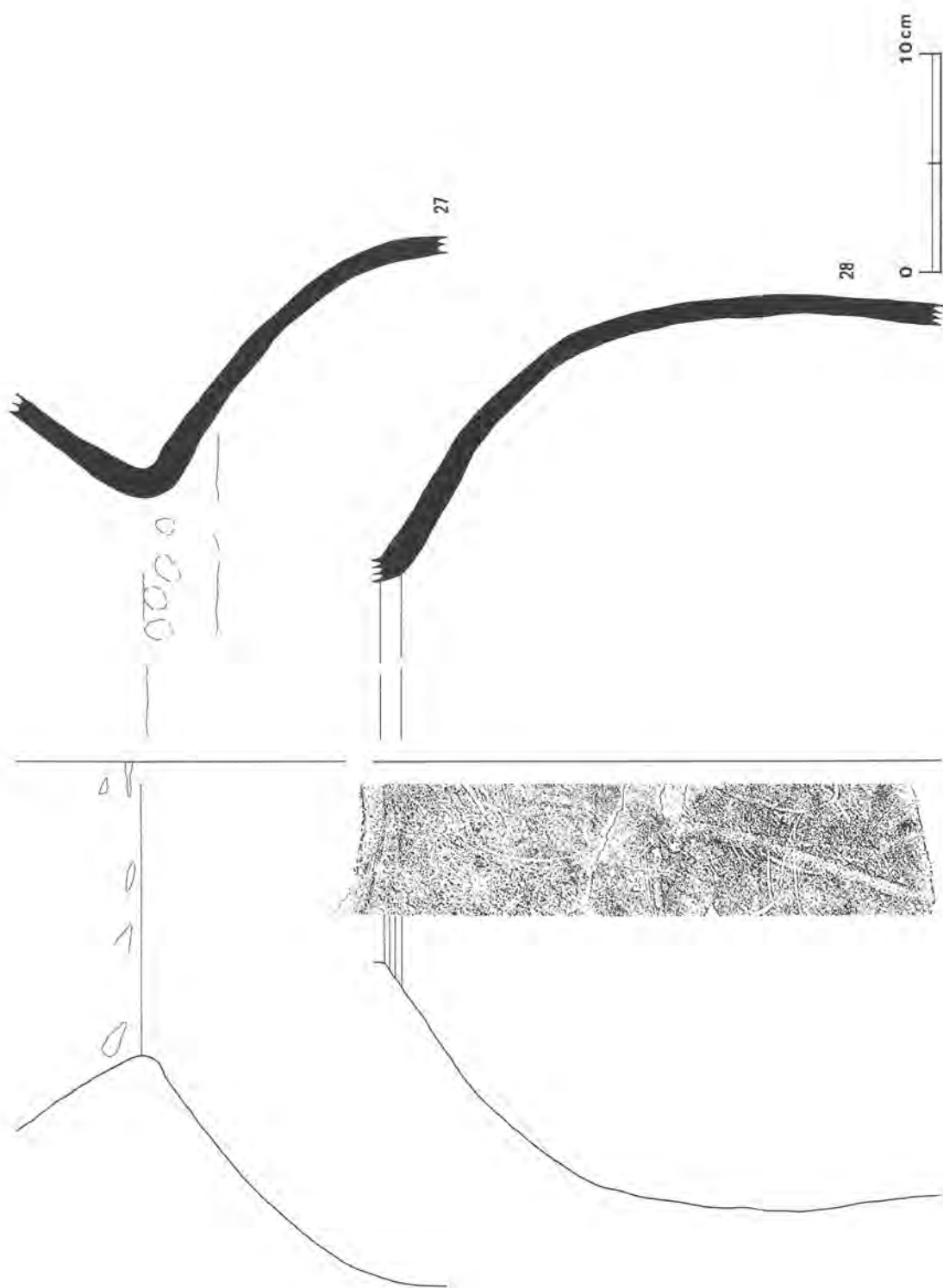
所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代に比定されると思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13	碗 土師器	A (15.2) B (4.1)	体部はゆるやかに内反し，口縁は外反する。口唇は丸くおさめる。	水挽き，横ナデ	砂粒 橙色 普通	P24A 30% 竈前床面直上 14と同一個体
14	碗 土師器	A (15.4) B (4.6)	体部はゆるやかに内反し，口縁はやや外反する。口唇は丸くおさめる。	水挽き，横ナデ	砂粒 橙色 普通	P24B 20% 竈前床面直上 13と同一個体
15	高台付坏 土師器	B (4.7)	底部は皿状を呈し，体部は強く内彎して立ち上がる。見込みは凹凸している。	外面横ナデ，内面入念なヘラ磨き及び黒色処理，高台は接合され，焼成後剥離	砂粒・雲母・長石 浅黄橙色 普通	P17 60% 覆土
16	高台付碗 土師器	A (14.3) B (4.2)	体部は外傾し内彎して立ち上がる。口縁は外反する。高台は開く。見込みの穴を粘土で塞ぐ。	水挽き，横ナデ，体部下端回転ヘラ削り，高台接合	砂粒(少) 橙色 普通	P25 70% 竈前床面直上
17	高台付碗 土師器	B (5.7) D 7.8 E 2.4	体部は内彎し，なめらかに曲線を描く。見込みは凸。高台は高く，開いている。	外面横ナデ，内面ヘラ磨き及び黒色処理，高台接合	砂粒 赤色 普通	P22 15% 竈前床面直上
18	高台付坏 土師器	B (3.7) D 7.8 E 1.3	底部は皿状で，体部は強く内彎して立ち上がり，外上方へ開く。高台は高目で「ハ」の字状。	外面横ナデ，内面ヘラ磨き及び黒色処理，高台接合	砂粒，雲母 浅黄橙色 普通	P18 20% 竈前床面直上
19	高台付坏 土師器	B (2.3) D 7.4 E 1.2	体部は強く内彎して立ち上がり，外上方へ開く。高台は「ハ」の字状で，壘付は内側が下がる。	底部回転ヘラ削り後，高台接合内面ヘラ磨き及び黒色処理	砂粒・雲母 橙色 普通	P19 15% 覆土



第123図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)

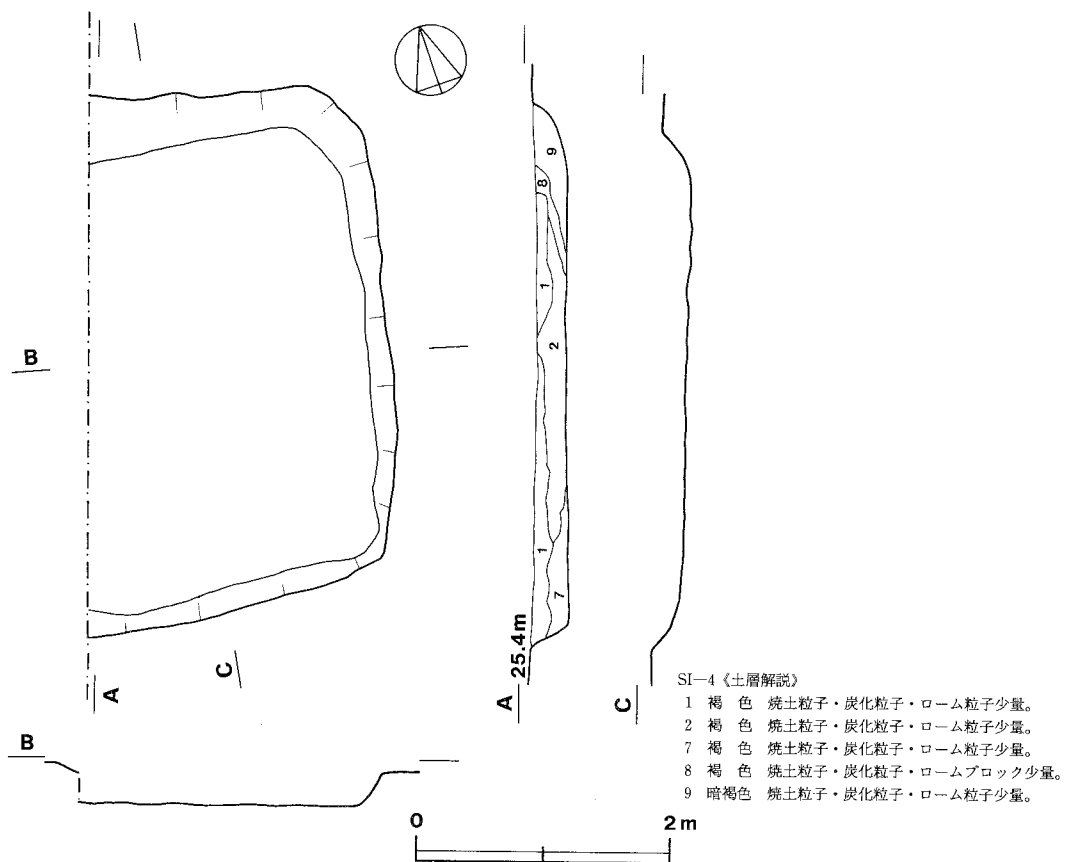
図版 番号	器 種	法量(cm)	器形の特 徴	手法の特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
20	高台付碗、 土師器	B (2.8) D 8.6 E 2.2	外反しながら「ハ」の字状に開く高台で、畳付はやや丸味を有する。	横ナデ	砂粒 明褐色 普通	P23 5% 覆土
21	坏 土師器		外面に墨書を有する口縁部片。下半は内彎し、口縁は外反する。口縁内面に細い凹線。	横ナデ、内面へラ磨き及び黒色処理。	砂粒・雲母 明褐色 普通	P20 覆土
22	坏 土師器		外面に墨書を有する口縁部片。外傾し、口縁付近はやや外反する。	横ナデ、内面へラ磨き及び黒色処理	砂粒・雲母 明褐色 普通	P21 覆土
23	壺 土師器	A 22.4 B (9.5)	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は丸味を以って外反する。口唇のつまみ上げはやや外傾する。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ、内面へラ横位ナデ、頸部内外面横ナデ	砂粒・長石 橙色 普通	P13 5% 覆土



第124図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
24	甕 土師器	A (19.8) B (8.3)	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は強く外反する。口唇部は断面三角形で、外に強い稜を持つ。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ、内面ヘラ横位ナデ、頸部内外面横ナデ	砂粒にぶい橙色普通	P14 5% 覆土
25	皿 (かわらけ) 土師質土器	A (9.6) B 2.5 C (5.5)	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は肥厚し、やや外反する。口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り。	砂粒橙色普通	P26 30% 覆土
26	皿B 土師質土器	A (11.2) B 2.3 C (7.2)	体部は強く内彎し、口縁は外反する。底部はやや丸底風。体部外面は強い稜。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り。	砂粒橙色普通	P27 25% 覆土
27	甕 須恵器	B (20.0)	肩はなだらかにすぼまり、頸部は「く」の字状に外反して外上方へ立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、頸部横ナデ。	砂粒・小礫暗褐色良	P15 5% 覆土
28	甕 須恵器	B (28.7)	肩は強く内傾し、頸部は直立または外反。肩の一部に叩き目があり、胴にヘラによる筋がある。	粘土紐巻き上げ、叩き、頸部内外面横ナデ。	砂粒暗赤灰色普通	P16 10% 覆土

第4号住居跡 (第125図)



第125図 第4号住居跡実測図

位置 B3_{8s}区を中心に所在し、第1号住居跡の西約22mに位置する。

規模と平面形 4.1×(2.4)mで、隅丸形状または隅丸長方形を呈したと思われる。

長軸方向 (N-31°-W)

壁 北東壁が40cm前後、他は20~25cmの高さを有し、外傾してなだらかに立ち上がっている。

床 ロームで、全体に硬く踏み固められている。

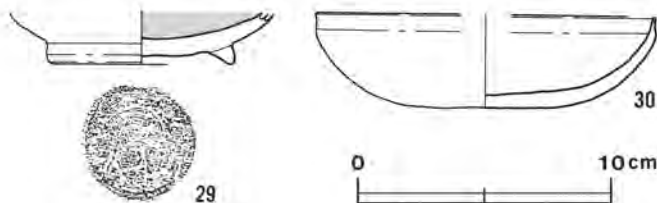
ピット 検出されなかった。

竈 検出されなかった。

覆土 9層から成り、褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器・須恵器等の破片が少量、覆土中から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態から竅穴遺構と呼ばれるグループに属するものと思われる。時期は、遺物が乏しいことから、不明とせざるを得ない。



第126図 第4号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
29	高台付坏 土師器	B (2.1) D 7.4 E 0.9	高台は開き、断面三角形を呈する。内側は横ナデにより凹帯状をなす。	横ナデ、高台接合、内面へラ磨き及び黒色処理	砂粒・雲母・長石 浅黄褐色 普通	P28 20% 覆土
30	坏 土師器	A (13.4) B 3.7 C (13.5)	底部は中央に平坦部を有するが、全体に丸底。口縁部は直立してからやや外反し、厚味を減ずる。	粘土紐巻き上げ、横ナデ、底部手持ちへラ削り。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P82 20% 覆土

第5号住居跡 (第127図)

位置 B2₀₀区を中心に所在し、第4号住居跡の北々西約29mに位置する。

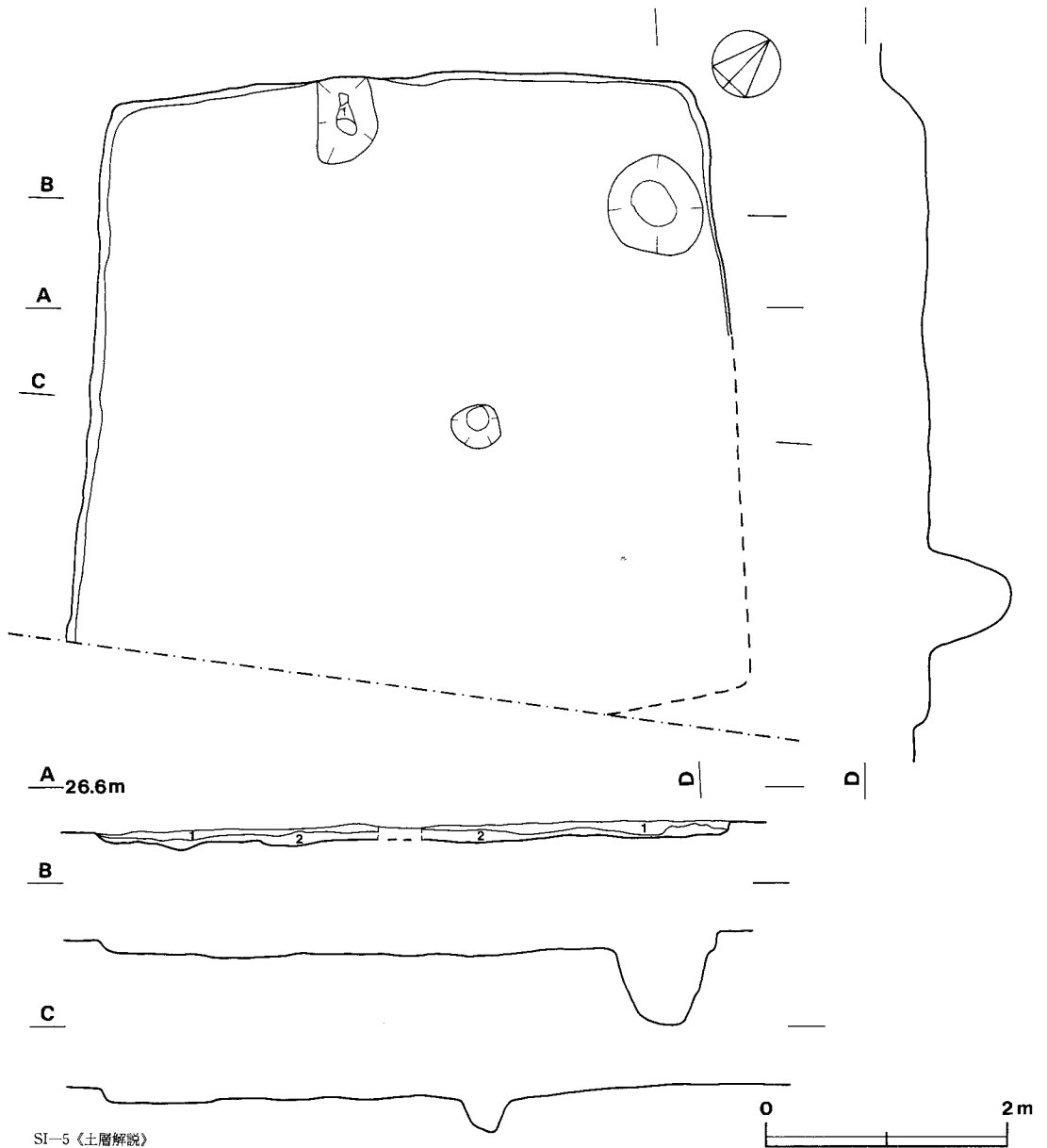
規模と平面形 5.4×5.1mの不整隅丸形状を呈する。

長軸方向 N-43°-W

壁 北東壁の北コーナー寄りの部分で20cm前後、他は10cm前後の高さを測り、外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、全体に平坦であり、軟弱である。

ピット 中央のやや東寄りに1か所検出された。長径44cm、短径36cmの不整楕円形状を呈し、深さは29cmを測る。



SI-5《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子中量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量。

第127図 第5号住居跡実測図

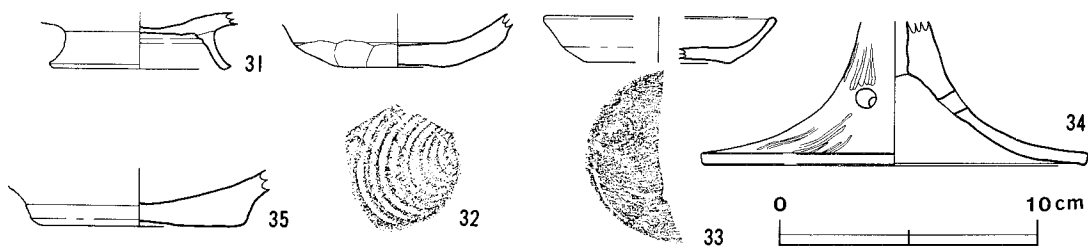
貯蔵穴 北東壁際の北コーナー寄りに検出された。長径86cm，短径78cmの楕円形状を呈し，深さは58cmを測る。底面は皿状を呈し，壁は外傾している。

竈 検出されなかった。

覆土 暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

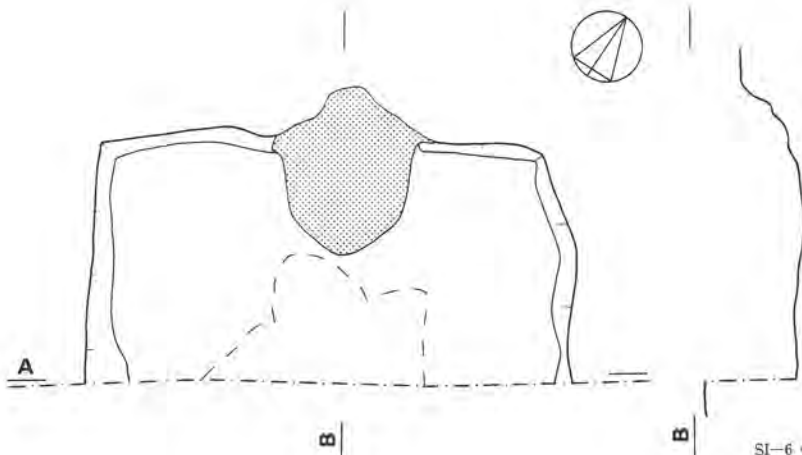
遺物 土師器・須恵器・縄文式土器・土師質土器・内耳土器等の破片が出土している。34・35は南寄りの床面直上から出土しているが，他は確認面または覆土中から出土している。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物から，古墳時代前期に比定されるものと思われる。

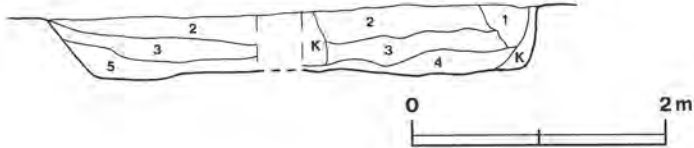


第128図 第5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
31	高台付坏 土師器	B (2.4) D (7.3) E 1.5	高台は外反しながら「ハ」の字状に開き，先端は外へ突き出す。見込みはやや凹み，剥離する。	横ナデ，高台接合	砂粒・石英 黄橙色 普通	P31 10% 覆土
32	坏 土師器	B (2.3) C 4.8	底部は把厚し，平坦。体部は器厚を減じて外上方へ開く。底面は多角形状。	水挽き，横ナデ，底部回転糸切り後体部下端に粗い手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	P30 20% 覆土
33	皿 B 土師質土器	A (8.9) B 1.9 C (5.6)	体部は外傾し，内彎して立ち上がる。口縁は外反し，口唇は丸い。底部はやや上げ底。	水挽き，横ナデ，底部回転糸切り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P29 20% 覆土
34	器台 土師器	B (5.7) C 15.0	裾は大きく開いて先端は水平に近くなる。先端下部は突き出す。孔は3か所。台部中央に縦の孔。	粘土紐巻き上げ，内面ハケ目調整後ナデ，外面縦位のヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P123 60% 床面直上
35	甕底部 土師器	B (2.3) C 8.0	胴部は強く外傾し，やや内彎しながら外上方へ開く。底部は下方へ突き出す。	粘土紐巻き上げ，ヘラナデ	砂粒 橙色 普通	P23 5% 床面直上

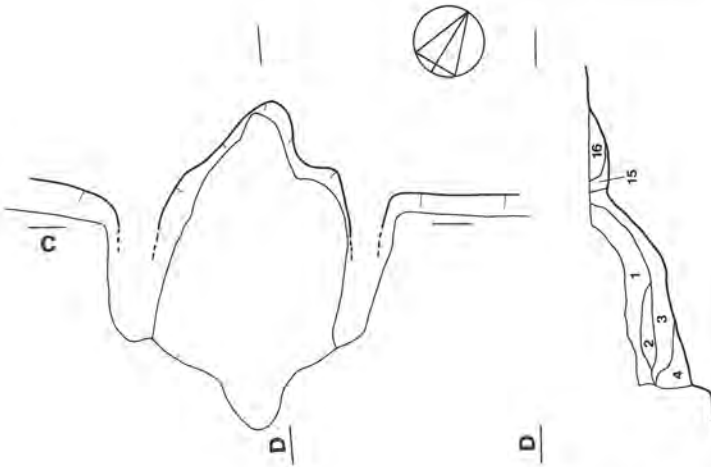


A 26.6m

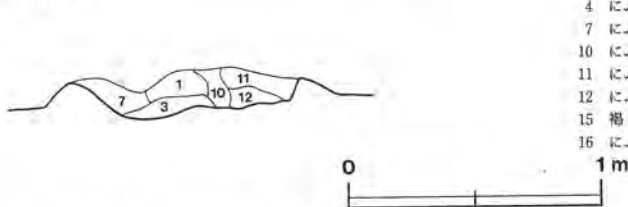


SI-6〈土層解説〉

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ロームブロック少量。



C 26.4m



SI-6〈竈土層解説〉

- 1 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 7 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 10 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。
- 11 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 12 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 15 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 16 におい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。

第129図 第6号住居跡・竈実測図

第6号住居跡（第129図）

位置 B2_{es}区を中心に所在し、第5号住居跡の南西約4mに位置する。

規模と平面形 3.5×(1.9)mの方形または長方形を呈したと思われる。

主軸方向 N-31°-W

壁 45cm前後の高さを測り、やや外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、中央がやや高まる。中央の高い部分は硬く踏み固められており、他は軟弱である。

ピット 検出されなかった。

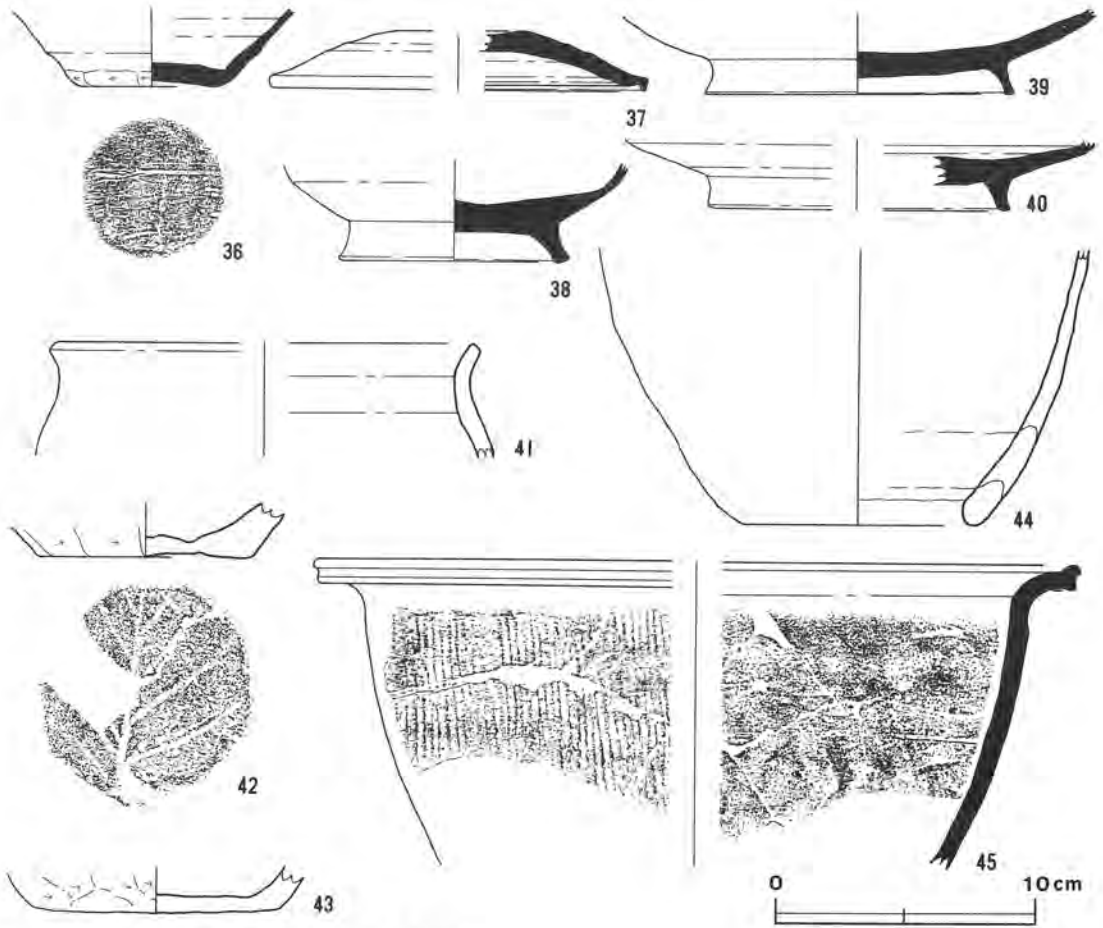
竈 北西壁に付設されていた。長さ90cm、幅113cmを測り、遺存状態は悪い。袖部はロームを壁から床面中央部に向かって低い半島状に掘り残し、その上にローム混じりの砂質粘土を積んで構築されていたが、崩れて原形を留めていなかった。住居跡の壁を幅40cm、奥行25cmにわたって三角形に掘り込み、煙道としていた。

覆土 8層から成り、褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器・須恵器・縄文式土器等の破片が出土した。全て覆土中から出土しているが、39・46は竈前方の覆土最下層から出土し、本跡の時期に近いものと判断される。

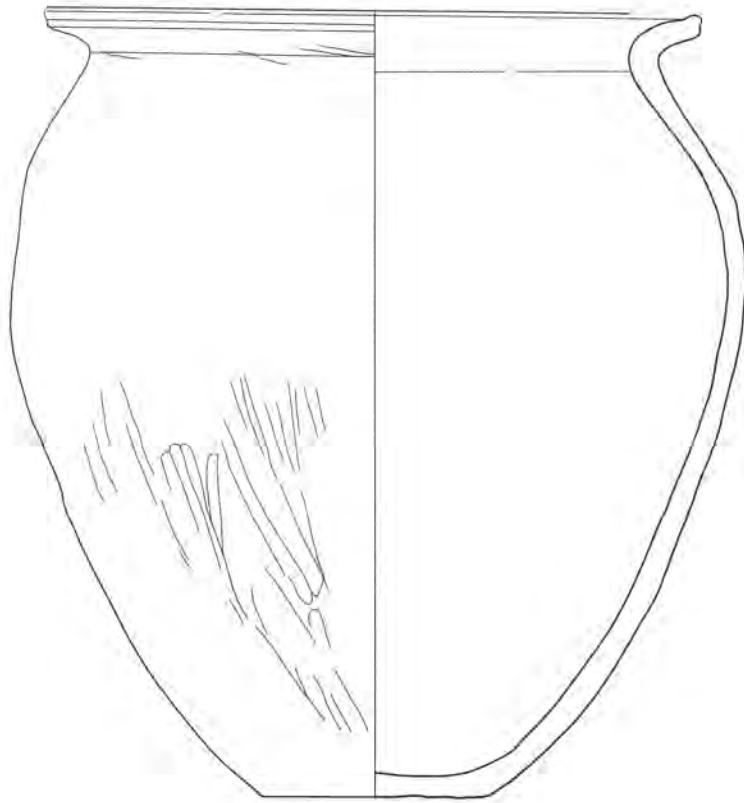
所見 本跡は、調査できた部分の遺構の形態や出土遺物から、奈良・平安時代に比定されると思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
36	環 須恵器	B (3.1) C 5.6	体部は外傾し、直線的に開く。外面下位に明瞭な稜を有し、内面底部周縁は凹線状をなす。	横ナデ、体部下端及び底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 やや不良	P37 30% 覆土
37	蓋 須恵器	B (2.3) C (14.6)	天井はつまみ接合部が凹み、口縁までながらに下がる。端折は断面三角形で小さい。	横ナデ、天井部回転ヘラ削り	砂粒 灰色 普通	P43 5% 覆土
38	高台付環 須恵器	B (4.0) D 9.0 E 1.5	底部は肥厚し、体部は器厚を減じながら内彎して立ち上がる。高台は開き、下端はやや外反。	横ナデ、高台接合。	砂粒・長石 灰オリーブ色 普通	P41 50% 覆土
39	盤 須恵器	B (3.4) D 12.0 E 1.4	底部は丸味を有し、高台内がやや下がる。高台は薄く、外方へ開く。受部を欠損する。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合	雲母・長石・石英 黄灰色 不良	P40 70% 覆土最下層
40	盤 須恵器	B (2.6) D (11.2) E 1.3	底部は浅い皿状を呈し、内面中央はやや高まる。高台はやや開き、先端はやや外方へ突き出す。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合。	雲母・長石 灰黄褐色 普通	P42 50% 覆土
41	甕 土師器	A (16.4) B (4.5)	胴部はゆるやかにすぼまって頸部に至り、頸部は2か所で折れるように外反する。	粘土紐巻き上げ、頸部内外面ヘラによる横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P33 10% 覆土
42	甕底部 土師器	B (2.2) C 8.4	胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。底面は多角形状。底部木葉痕。	内面ナデ、胴部下端手持ちヘラ削り	砂粒・長石 橙色 普通	P35 5% 覆土

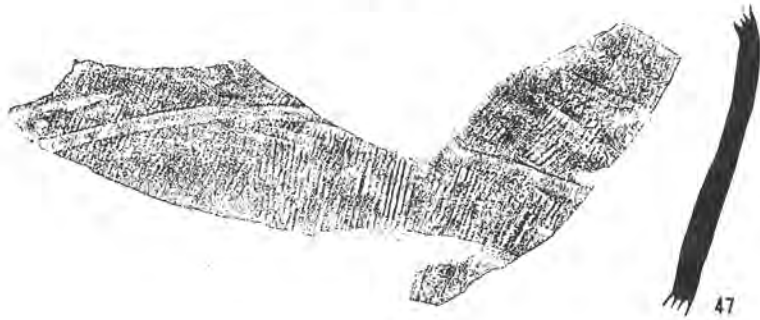


第130図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)

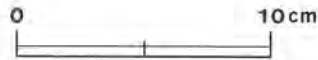
図版番号	器種	法重(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
43	甕 土師器	B (1.8) C (9.6)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、内面ナデ、外面胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 におい 橙色 不良	P36 5% 覆土
44	甕 土師器	B (10.9) C 9.0	胴部は外傾し、ゆるやかに内彎して立ち上がる。孔は単孔。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ。	長石・石英 橙色 やや不良	P34 20% 覆土
45	甕 須恵器	A (29.6) B (10.1)	胴部はやや外傾し、ゆるやかに内彎する。頸部は強く外反し、水平に開く。口唇外面に凹線。	粘土紐巻き上げ、胴部叩き、頸部内外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P38 5% 覆土
46	甕 土師器	A 25.4 B 31.1 C 9.0	胴部は上位が張る。頸部は強く外反し、口唇はつまみ上げられる。底部に木葉痕。	粘土紐巻き上げ、内面及び胴部上位ナデ、頸部内外面横ナデ、胴部下半縦位ヘラ磨き。	砂粒・雲母 淡橙色 普通	P124 80% 覆土最下層
47	甕 須恵器	B (12.5)	内彎する甕胴部片。外面に平行線叩き目とヘラによる横位の凹線。	粘土紐巻き上げ、叩き後内面縦位ヘラナデ。	砂粒 灰色 良	P39 5% 覆土



46

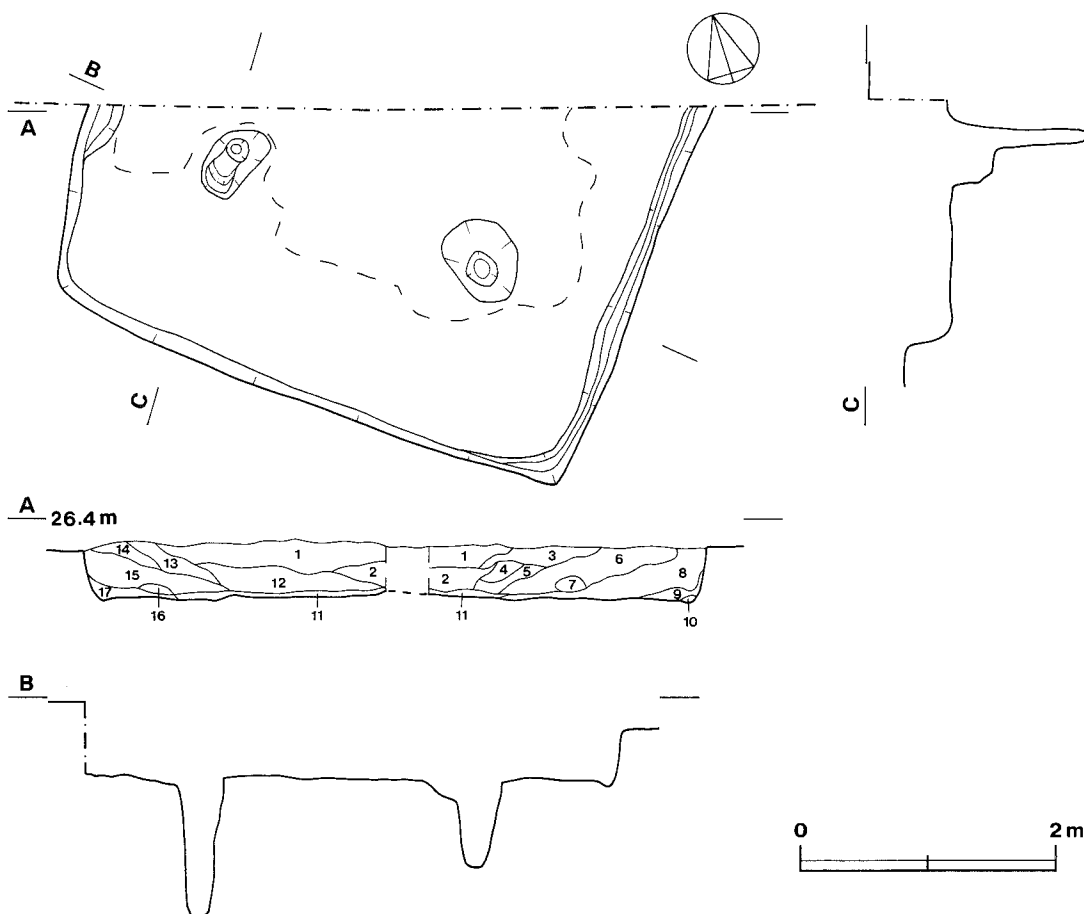


47



第131图 第6号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)

第7号住居跡（第132図）



SI-7《土層解説》

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。 | 9 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子中量。 |
| 2 暗褐色 焼土粒子微量・炭化粒子・ロームブロック極く少量。 | 10 暗褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 |
| 3 暗褐色 炭化粒子・ロームブロック少量。 | 11 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 |
| 4 褐色 炭化粒子少量，ローム粒子中量。 | 12 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子中量。 |
| 5 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量。 | 13 暗褐色 焼土粒子微量，炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 6 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子・ローム粒子少量。 | 14 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 |
| 7 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子極く少量，ローム粒子中量。 | 15 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 |
| 8 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子多量。 | 16 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 |
| | 17 褐色 炭化粒子極く少量，ローム粒子中量。 |

第132図 第7号住居跡実測図

位置 A2_{n5}区を中心に所在し，第5号住居跡の北西約21mに位置する。

規模と平面形 4.5×(3.2)mの方形状または長形状を呈したと思われる。

長軸方向 (N-42°-E)

壁 35~45cmの高さで，やや外傾して立ち上がっている。

壁溝 北西壁下，南東壁下及び南コーナー付近に於いて検出された。幅10~25cm，深さ5cm前後

を測る。

床 ロームで、全体に平坦である。壁際を除き、硬く踏み固められている。

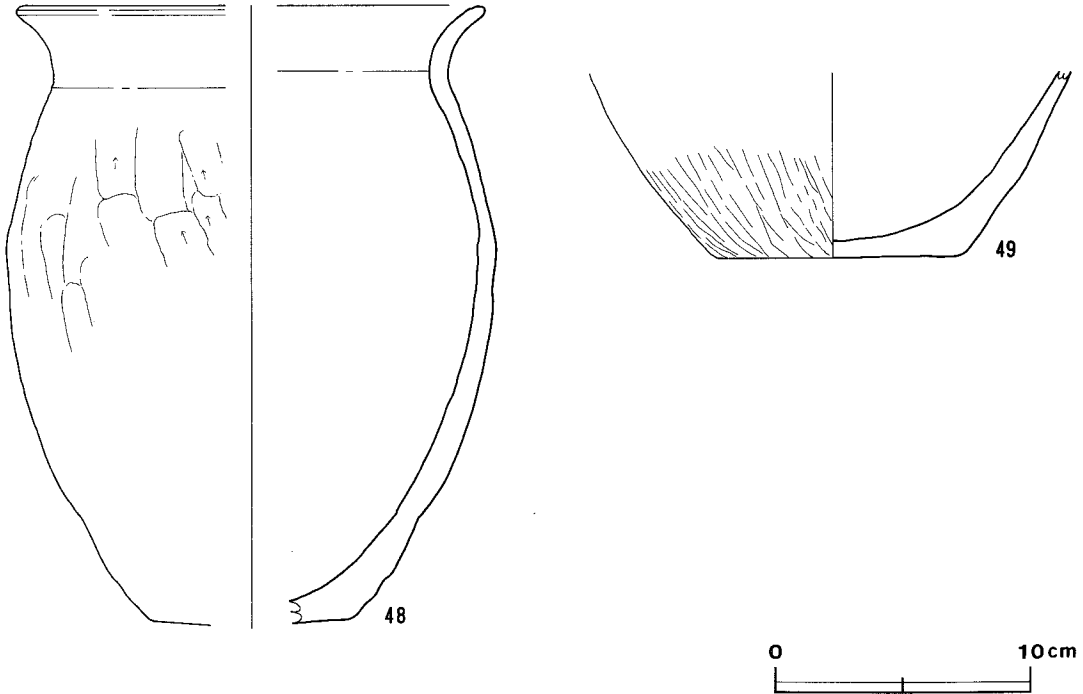
ピット 2か所を検出した。P₁は長径60cm、短径35cmの楕円形状を呈し、深さ108cmを測る。P₂は長径70cm、短径50cmの楕円形状を呈し、深さ72cmを測る。いずれも35cmの深さの所に段を有する。

竈 検出されなかった。

覆土 極暗褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器・須恵器・縄文式土器の破片が出土した。実測できたのは土師器甕2点(48・49)である。48は23個の破片に分れ、東壁際の覆土下層から出土した。また、49は西壁際の覆土最下層から出土した。

所見 本跡は、調査できた部分の遺構の形態や出土遺物から、古墳時代後期頃に比定されると思われる。



第133図 第7号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
48	甕 土師器	A (18.2) B 24.3 C 7.8	胴部は中ほどのやや上位が張り、頸部は丸味を以って外反する。底部は中央がやや下がる。	粘土紐巻き上げ、内面ナデ、外面上位縦位へラ削り、同下位横位へラ削り、頸部内外面横ナデ	砂粒 浅黄橙色 やや不良	P44 40% 覆土下層
49	甕 土師器	B (7.3) C 9.5	底部は平底。胴部はわずかに内彎しながら外上方へ立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、内面及び底部ナデ、胴部外面縦位へラ磨き。	長石・雲母 橙色 普通	P45 15% 覆土最下層

第 8 号住居跡 (第134図)

位置 B2a5区を中心に所在し、第 7 号住居跡の南約 4 m に位置する。

規模と平面形 5.9×5.7m の方形状を呈する。

主軸方向 N-15°-E

壁 高さ40cm前後を測り、北・西・南壁はややオーバーハングまた垂直に、東壁はやや外傾して立ち上がっている。

壁溝 幅20~30cm、深さ10cm前後で、全体に周回している。

床 ロームで、平坦である。中央は硬く踏み固められている。

ピット 4か所を検出した。全て主柱穴と思われる。大きさは、長径80~100cm、短径約70cmの楕円形状を呈し、深さは60~70cmである。各柱穴とも、深さ40cmほどの所に段を有している。

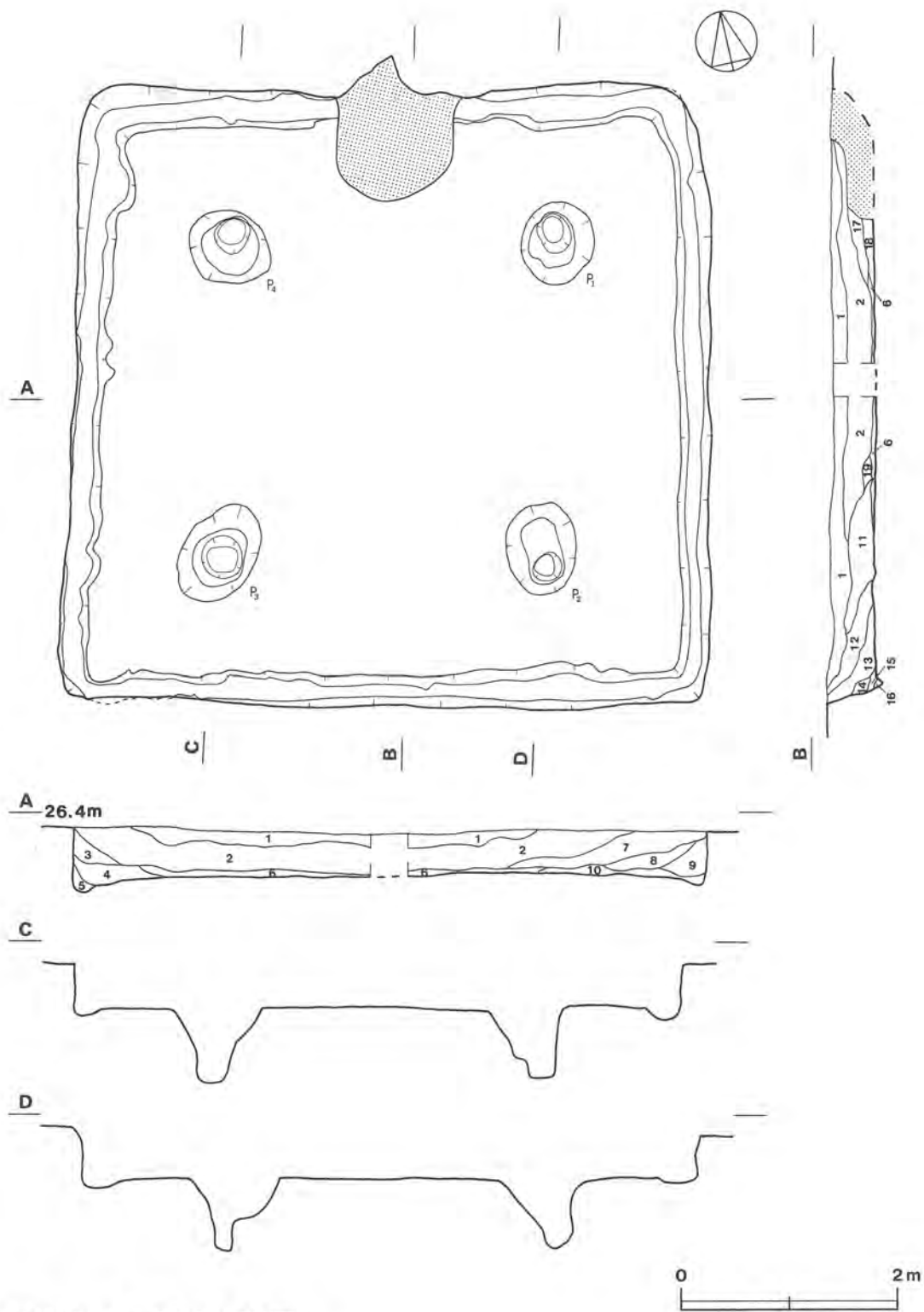
竈 北壁中央に付設されていた。長さ123cm、幅103cmを測る。天井部は崩れていたが、袖部の遺存状態は良い。袖部はローム混じりの砂質粘土で構築され、10cm程垂直に立ち上がってから強く内傾する。両袖とも、長さ約80cm、幅20~30cmを測る。火床はロームを皿状に4cmほど掘り込み、長径約70cm、短径約50cmの範囲が焼土化していた。奥壁は、住居跡の壁を35cmほど掘り込んで煙道としている。

覆土 暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器 (坏・甕等及びその破片)、縄文式土器片等が出土した。57の土師器甕は、17個の破片に分れて竈前方の床面直上から出土した。また56の土師器坏は、南壁から1mほど離れた床面直上に伏せられた状態にあった。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から、古墳時代後期に比定されると思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
50	坏 土師器	A 11.7	底部は丸底。口縁部はやや外傾し、底部との境界は段をなす。	内面及び口縁外面横ナデ。底部手持へら削り。	砂粒 橙色 普通	P51 50% 覆土
		B 3.7				
		C 11.1				
51	坏 土師器	A 11.1	底部は丸底。口縁部と底部の境界は段状を呈し、口縁部は器厚を減じながら外反する。	口縁部内外面及び底部内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P50 70% 覆土
		B 4.1				
		C 11.2				
52	坏 土師器	A 10.6	底部は中央が平坦で周縁は強く内灣する。口縁部と底部の境界は段をなし、口縁部は直立する。	内面及び口縁外面横ナデ、底部手持へら削り。	砂粒 橙色 普通	P49 90% 覆土
		B 3.5				
		C 11.0				
53	坏 土師器	A (17.2)	底部は強く内灣し、周縁は内傾する。口縁部との境界は稜をなし、口縁は内傾する。	内面及び口縁外面横ナデ、底部手持へら削り。	砂粒 橙色 普通	P52A 10% 覆土 54と同一個体か
		B (6.8)				
		C (18.8)				
54	坏 土師器	A (17.4)	底部は丸底で、口縁との境界は段をなす。口縁部は直立し、内側に1条の凹線が周回する。	内面及び口縁外面横ナデ底部手持へら削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P52B 10% 覆土 53と同一個体か
		B (5.5)				
		C (18.3)				



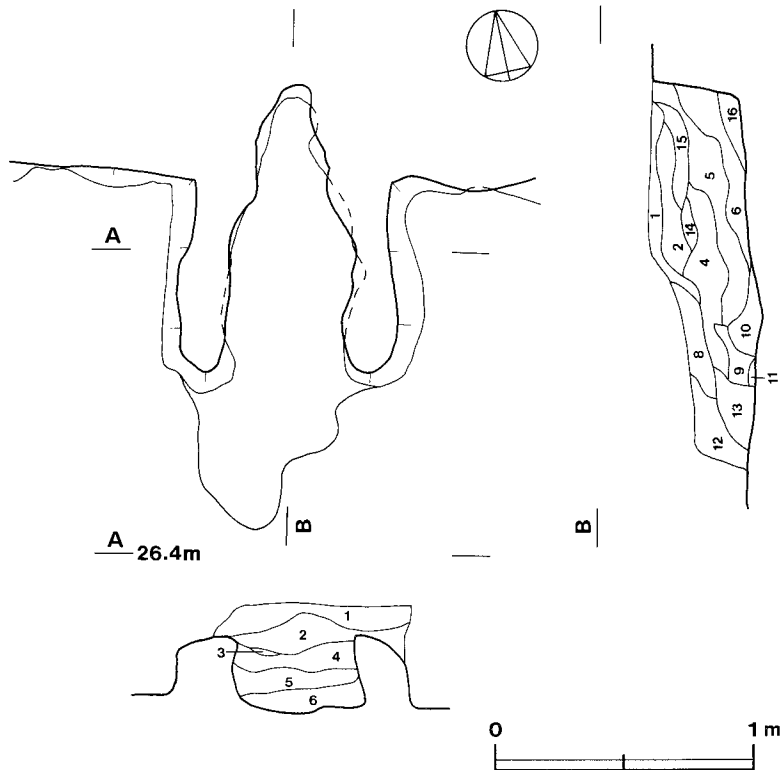
第134图 第8号住居跡実測図

SI-8《土層解説》

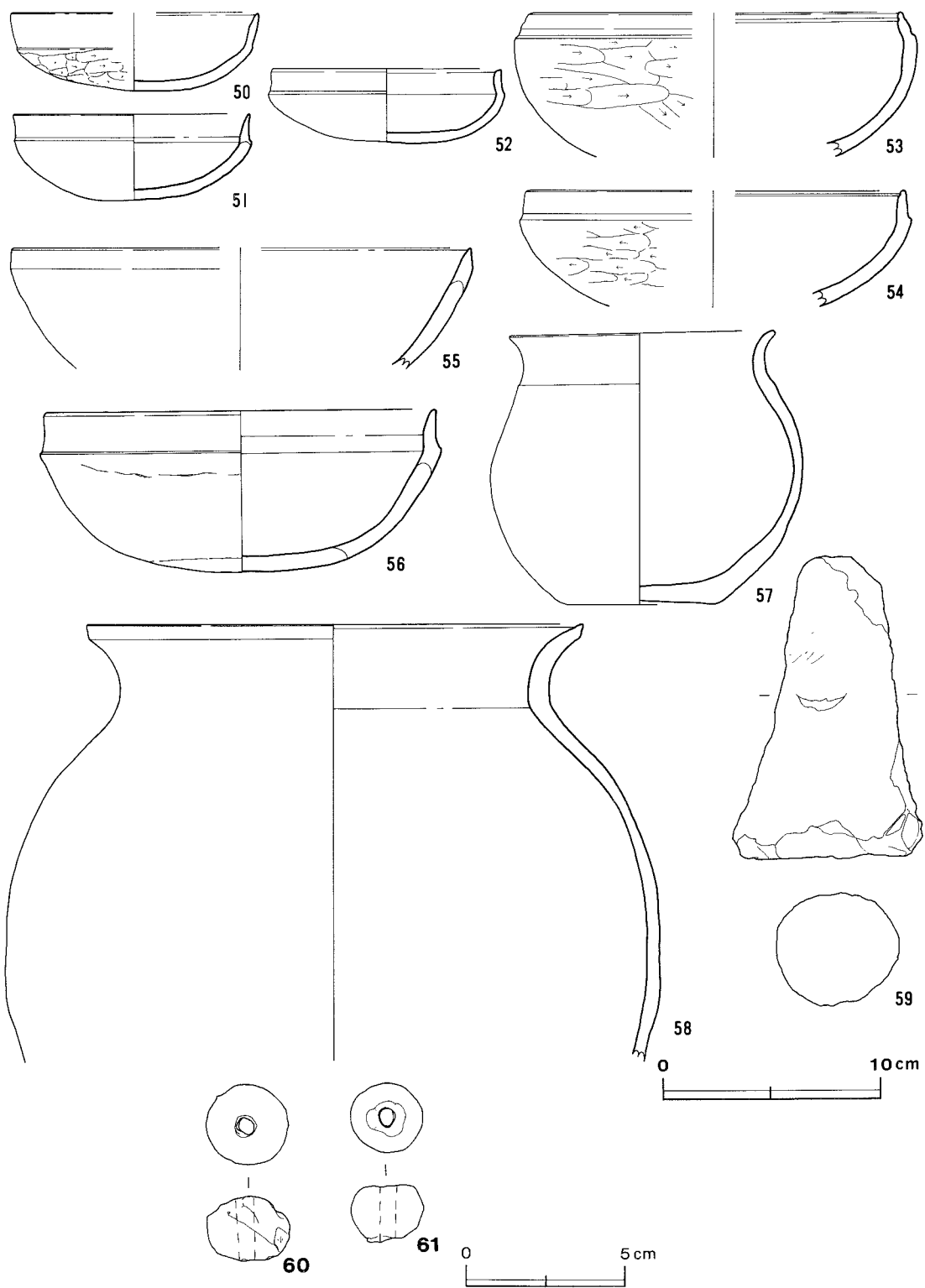
- 1 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子極く少量, 炭化粒子・ロームブロック少量。
- 4 暗褐色 炭化粒子極く少量, ロームブロック少量。
- 5 暗褐色 炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 6 暗褐色 焼土粒子極く少量, 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 7 暗褐色 焼土粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 8 褐色 焼土粒子極く少量, 炭化粒子・ロームブロック少量。
- 9 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 10 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子・ロームブロック少量。
- 11 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 12 暗褐色 焼土粒子極く少量, 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 13 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子・ロームブロック極く少量。
- 14 暗褐色 炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 15 褐色 炭化粒子極く少量, ローム粒子中量。
- 16 暗褐色 炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 17 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 18 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 19 暗褐色 焼土粒子極く少量, 炭化粒子・ローム粒子少量。

SI-8《竈土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子極く少量。
- 6 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ロームブロック少量。
- 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 9 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 11 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。
- 13 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 14 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 15 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 16 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。



第135図 第8号住居跡竈実測図



第136图 第8号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
55	土師器 坏	A (21.4) B (5.7) C (21.6)	鉢形を呈し、ゆるやかに内彎する。口縁部は直立し、底部との境界にぶい稜を持つ。	口縁部内外面及び底部内面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 53 5% 覆土
56	土師器 坏	A 18.2 B 7.6 C 18.8	底部は強く内彎し、丸底を呈する。口縁部は底部との境界に強い稜を持ち、やや外反する。	口縁部内外面及び底部内面横ナデ、底部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P 48 100% 床面直上
57	土師器 甕	A 12.4 B 12.9 C 7.8	胴部は中ほどが張り、球状を呈する。頸部と胴部の境界は強い稜をなす。頸部は強く外反する。	頸部内外面横ナデ、底部手持ちヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 不良	P 47 70% 甕前床面直上
58	土師器 甕	A 23.2 B (20.6)	胴部は強く内彎し、頸部は丸味を以って強く外反する。口唇部つまみ上げは外傾する。	胴部内外面横ナデ、頸部内外面横ナデ。	砂粒 ぶい橙色 不良(二次焼成)	P 46 40% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)			備考
59	支脚	高さ 14.3	基部径 8.7	重さ 548.3g	DP 1 先端部欠損 甕左側床面直上
60	球状土錘	高さ 2.1	直径 2.1	重さ 14.0g	DP 3 100% 覆土
61	球状土錘	高さ 1.8	直径 2.3	重さ 10.0g	DP 2 100% 覆土

第9号住居跡 (第137図)

位置 A2_{h3}区を中心に所在し、第7号住居跡の西約2.5mに位置する。

重複関係 西コーナー付近を第10号住居跡に切られている。

規模と平面形 4.4×(4.4)mの方形状または長形状を呈したと思われる。

長軸方向 N-42°-W

壁 5~10cmの高さを有し、緩やかに立ち上がっている。

床 ロームで、平坦である。中央付近は硬く踏み固められている。

ピット 1か所を検出した。床面の西端にあり、長径30cm、短径26cmの楕円形状を呈し、深さは36cmを測る。

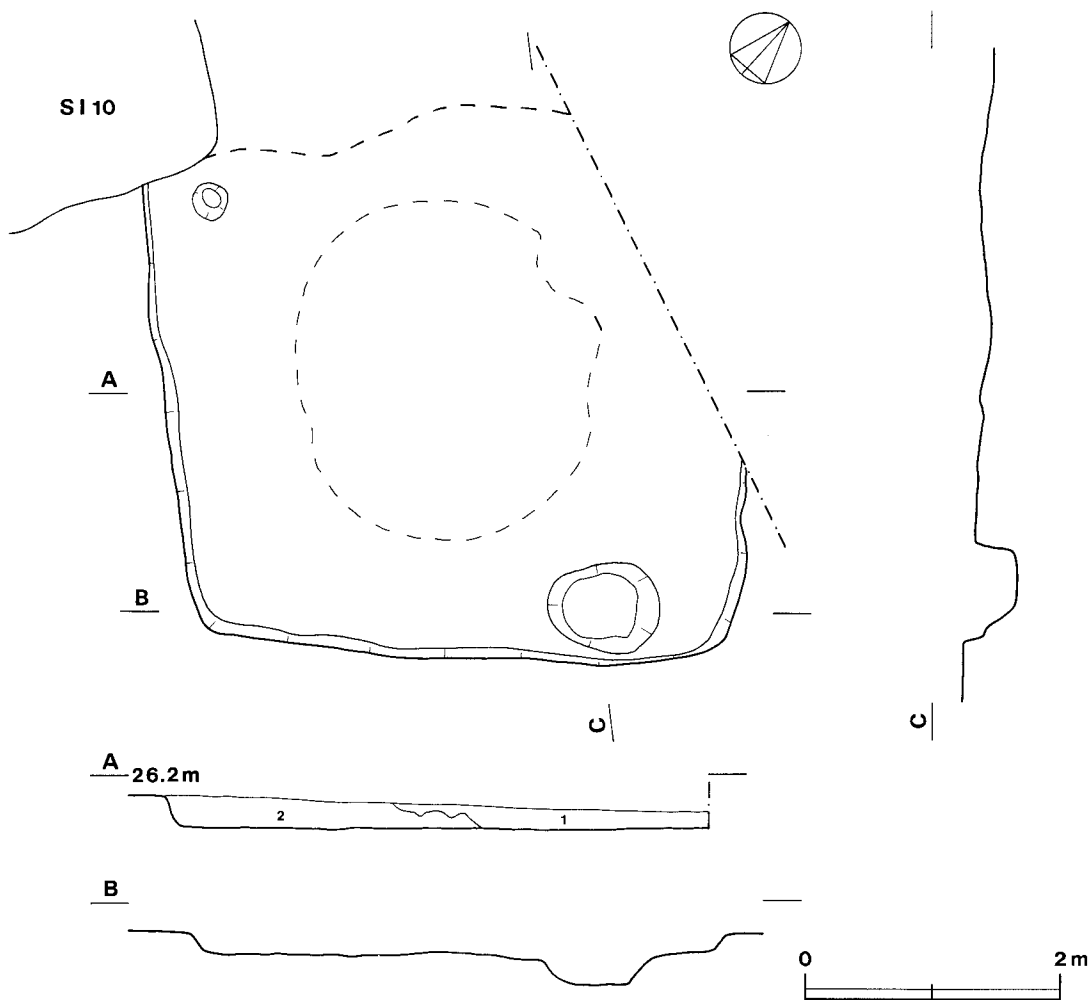
貯蔵穴 南東壁際の東コーナーへ寄った位置に付設されていた。長径87cm、短径74cmで北東側がやや広がる卵形を呈し、深さは34cmを測る。底面は平坦で、壁は丸味を以って立ち上がる。

炉 床面の中央からやや北西寄りの位置に、炉の痕跡と思われる焼土が見られたが、掘り込み等を確認することはできなかった。

覆土 暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 貯蔵穴内から土師器(63~68)が、貯蔵穴のそばの床面直上から土師器坏(62)、球状土錘(69)が出土している。

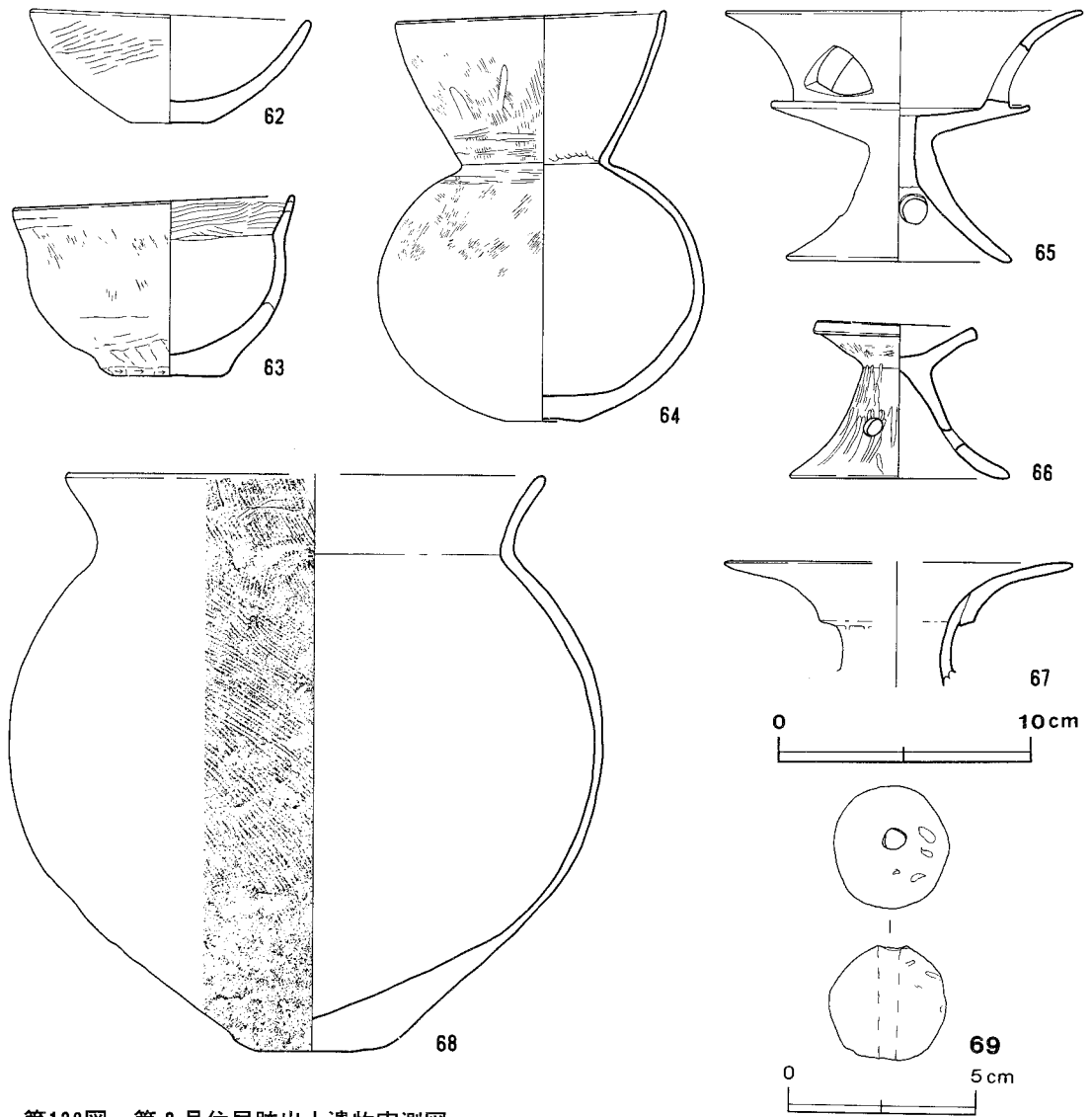
所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代前期に比定される。



SI-9《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量。

第137図 第9号住居跡実測図



第138図 第9号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
62	坏 土師器	A 11.0	体部は外傾し、やや内彎して立ち上がる。体部上半にハケ目の痕跡が認められる。	外面ハケ調整後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き。	砂粒 浅黄橙色 普通	P59 98% 床面直上
		B 4.1				
		C 3.2				
63	小形鉢 土師器	A 11.1	底部はやや突き出す。体部は丸味を有し、口縁部はやや外反して内面に強い稜を持つ。	内外面ハケ調整後、外面横位のヘラ磨き、体部内面ヘラナデ。底部周囲手持ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P57 100% 貯蔵穴内
		B 7.8				
		C 4.2				
64	埴 土師器	A 10.6	胴部は球状を呈する。口縁はやや外傾し、わずかに内彎して開く。底部は上げ底。	内外面ハケ調整後、口縁内外面縦位のヘラ磨き、口縁下端及び胴部上端横位のヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 良	P55 100% 貯蔵穴内
		B 16.5				
		C 3.2				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
65	装飾器台 土師器	A 14.2 B 10.2 C 9.0	脚部はラッパ状で3孔を有する。台部は周縁が突き出す。受部はラッパ状で透し窓3か所を穿つ。	台内面暗文状へら磨き、他は全体が縦位・横位のへら磨き。	砂粒 黄橙色 普通	P56 95% 貯蔵穴内
66	器台 土師器	A 6.2 B 6.3 C 8.7	脚部はラッパ状で3孔を有する。台部は皿状を呈し、外縁はやや外反する。	全体にへら磨き。	砂粒 橙色 普通	P58 100% 貯蔵穴内
67	壺(口縁部) 土師器	A (13.8) B 4.7	頸部はやや外反し、口縁は頸部外面の接合部から強く外反して水平に開く。	内面ハケ調整、口縁外面横ナデ。	長石 橙色 普通	P60 5% 貯蔵穴内
68	甕 土師器	A 19.3 B 23.2 C 5.2	胴部は強く外傾して立ち上がり、中ほどが張って球状を呈する。頸部は強く外反し、口唇は丸い。	胴部下端を除き、全体にハケ調整。	砂粒 浅黄橙色 普通	P54 95% 貯蔵穴内

図版番号	器種	法	量 (cm)	備	考
69	球状土錘	高さ 3.1	直径 3.1 重さ 32.3g	DP 4	100% 床面直上

第10号住居跡 (第139図)

位置 A2_{h2}区を中心に所在し、第9号住居跡の西側に位置する。

重複関係 本跡の東コーナーが、第9号住居跡の西コーナーを切っている。

規模と平面形 3.9×3.85mのややいびつな方形状を呈する。

主軸方向 N-60°-W

壁 高さ40cm前後を測り、垂直またはやや外傾して立ち上がっている。

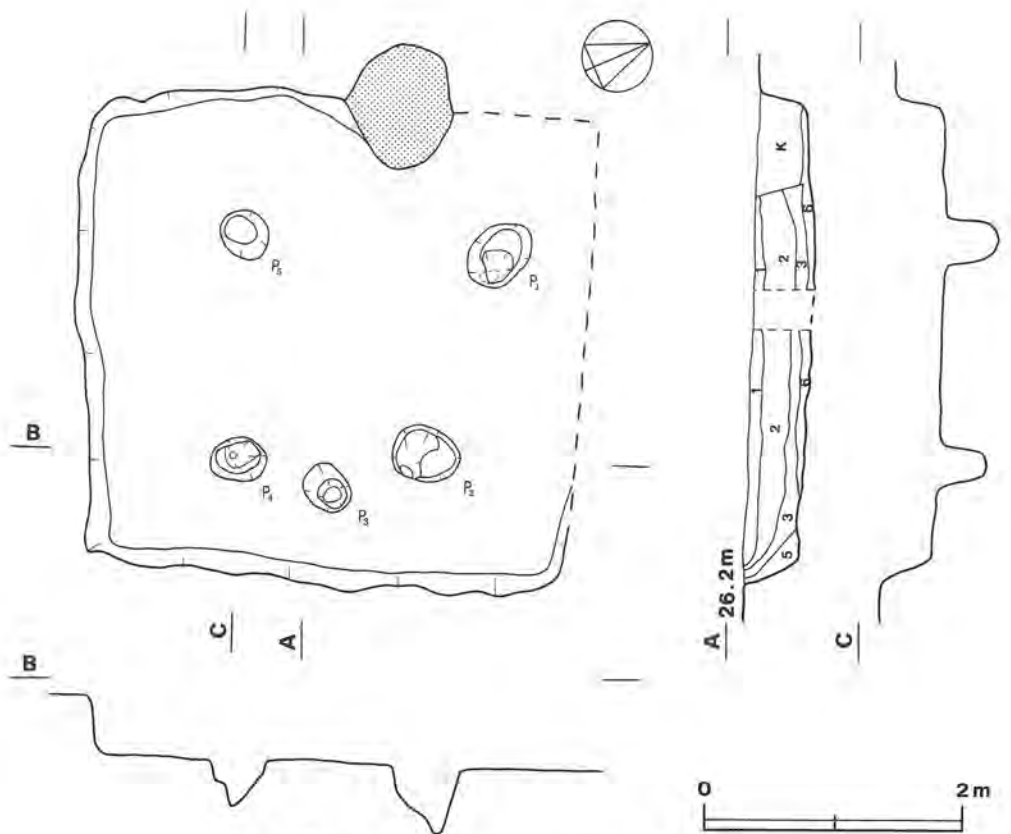
床 ロームで平坦である。中央は硬く踏み固められている。

ピット 5か所を検出した。P₁・P₂・P₄・P₅は支柱穴と思われる。P₁・P₂は長径約60cm、短径約40cmの楕円形状を呈し、深さは50～55cmを測る。P₄・P₅は長径約40cm、短径約30cmの楕円形状を呈し、深さは40cm前後を測る。P₃は出入口の施設に伴うものと思われ、長径約40cm、短径約30cmの楕円形状を呈し、深さは34cmを測る。

竈 北西壁に付設されていた。長さ100cm前後、幅80cm前後を測り、遺存状態は悪い。袖部はローム混じりの砂質粘土で構築されているが、崩れているため規模は明らかではない。火床はロームを10cmほど掘り凹め、奥壁との間に段を有する。奥壁は、住居跡の壁を幅60cm、奥行50cm程に掘り込んで煙道としているが、内面が崩れているため、判然としない。

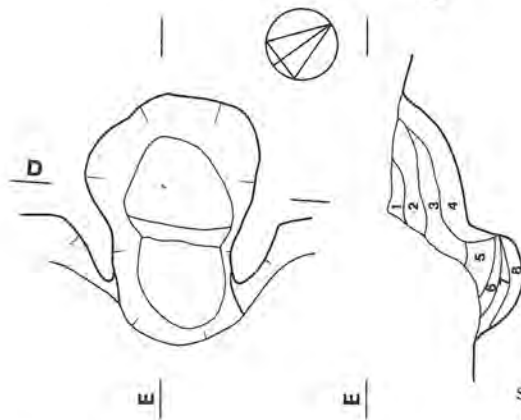
覆土 褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器・縄文式土器等の破片が出土した。支脚(71)は本跡の竈で使用されたものと思われる。また、球状土錘(72)は床面直上から出土している。他は全て覆土から出土している。



SI-10 (土層解説)

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。

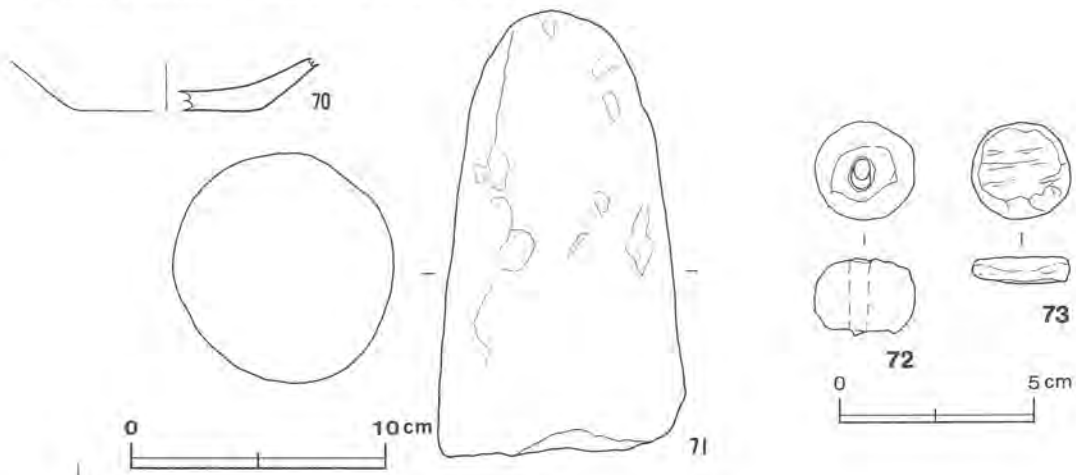


SI-10 (電土層解説)

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量, ロームブロック少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 8 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。

第139図 第10号住居跡・竈実測図

所見 本跡は、時期を判定し得る遺物を欠くが、遺構の形態や第9号住居跡を切っていることから、古墳時代後期頃に比定されると思われる。



第140図 第10号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
70	甕 土師器	B (2.1) C (7.2)	底部は平坦で、胴部は強く外傾して外上方へ開く。	内外面ナデ	長石 にふい赤褐色 普通	P61 5% 覆土

図版番号	器種	法	量 (cm)	備	考
71	支脚	高さ 17.7	基部径 9.7 重さ 1192.4g	DP 5	基部一部欠損 竈内正位直立
72	球状土錘	高さ 2.1	直径 2.1 重さ 15.0g	DP 6	100% 床面直上
73	土製円板	直径 2.5	厚さ 0.7 重さ 5.3g	DP 7	甕胴部片を二次利用 覆土

第11号住居跡 (第141図)

位置 B4_{g1}区を中心に所在し、第1号住居跡の西約10mに位置する。

規模と平面形 3.3×3.1mの隅丸方形状を呈する。

長軸方向 N-30°-E

壁 北西壁で30cm前後、南東壁で10cm前後の高さを測り、外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、細かい凹凸が目立つ。全体に硬い。

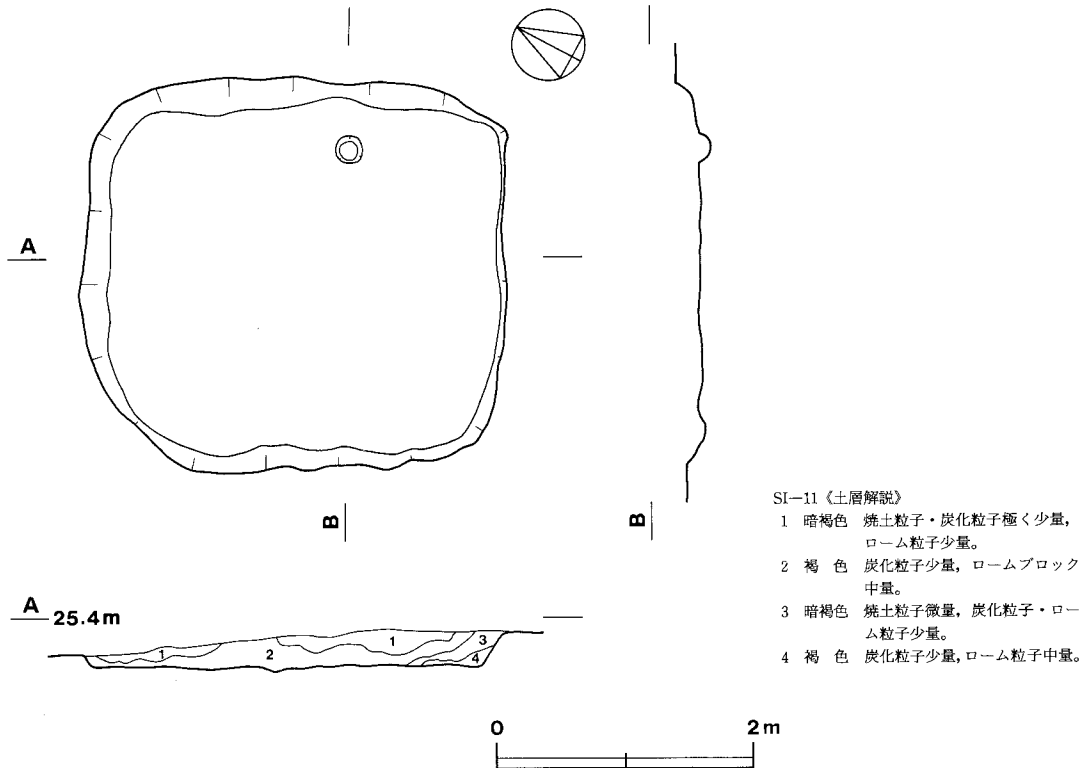
ピット 1か所を検出した。直径22cmの円形状を呈し、深さは10cmを測る。

竈 検出されなかった。

覆土 4層から成り、暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 縄文式土器片1点が覆土上層から出土した。

所見 本跡は、遺構の形態から竪穴遺構と呼ばれるグループに属すると思われる。時期は不明である。



第141図 第11号住居跡実測図

第12号住居跡 (第142図)

位置 B2_{da}区を中心に所在し、第6号住居跡の西約10mに位置する。

規模と平面形 南東コーナー付近を中心に攪乱があるため不明瞭であるが、(3.8)×3.65mの不整形形状を呈するものと思われる。

長軸方向 N-78°-E

壁 15cm前後の高さを有し、外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、凹凸が目立つ。中央付近は硬く踏み固められている。

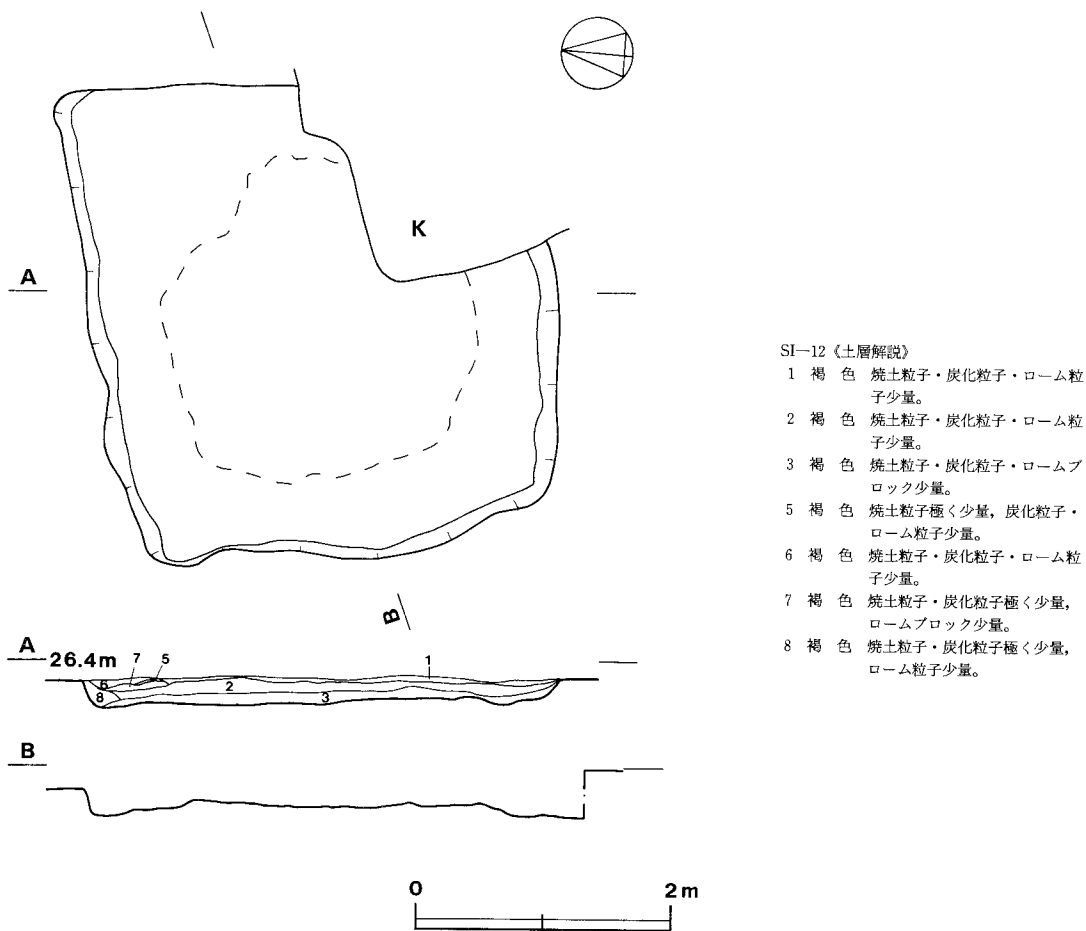
ピット 検出されなかった。

竈 検出されなかった。

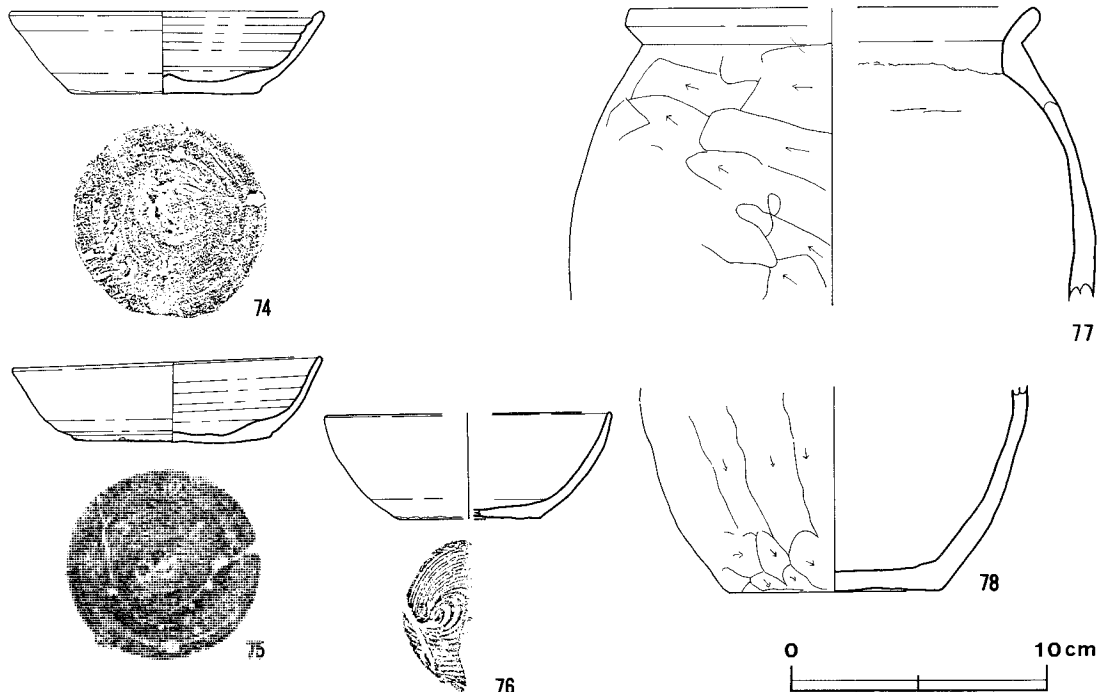
覆土 8層から成るが、攪乱を考慮すると1～3層が本跡の覆土であると思われる。褐色土で、自然堆積である。

遺物 土師器片を中心に、土師質土器皿等の破片が出土している。土師質土器皿（74・75）は床面直上から出土し、他は覆土から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態から竪穴遺構と呼ばれるグループに属すると思われ、時期は出土遺物から平安時代に比定されるものと思われる。



第142図 第12号住居跡実測図



第143図 第12号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
74	皿A 土師質土器	A 11.6 B 3.3 C 7.6	底部は平坦。体部は外傾し、内彎して立ち上がる。見込みは中央部が高い。内面稜が顕著。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り。	砂粒 橙色 普通	P67 60% 覆土下層
75	皿A 土師質土器	A 12.1 B 3.5 C 7.7	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。内面はシャープな稜を持つ。ゆがみがある。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り。	砂粒 橙色 普通	P66 90% 覆土下層
76	杯 土師器	A (11.0) B 4.2 C (5.8)	体部は外傾し、ゆるやかに内彎して立ち上がる。口唇は押しつぶされた状態で内側に稜を持つ。	水挽き、ヨコナデ、底部回転糸切り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P68 10% 覆土
77	甕 土師器	A (16.0) B (11.7)	胴部はゆるやかに内彎してすぼまり、頸部は肥厚して「く」の字状に外反する。	粘土紐巻き上げ、胴部内外面横ナデ、胴部外面手持ちヘラ削り、胴部内面ヘラ横位ナデ。	長石・雲母 褐灰色 不良	P64 10% 覆土
78	甕 土師器	B (8.1) C 8.5	底部は平底。胴部はやや外傾し、内彎しながら立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、胴部外面縦位手持ちヘラ削り、胴部内面中位ヘラ横位ナデ、底部内面指ナデ。	砂礫 橙色 普通	P65 5% 覆土

第13号住居跡 (第145図)

位置 B1₀区を中心に所在し、第5号住居跡の北約7mに位置する。

規模と平面形 北東側の大半が調査区外にかかる。調査した範囲では、(2.3)×(1.7)mで、方形状または長方形状を呈したと思われる。

長軸方向 (N-34°-W)

壁 高さ30cm前後を測り、外傾して立ち上がっている。

床 ロームで平坦である。

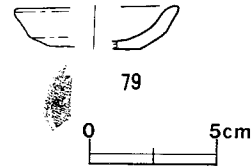
ピット 検出されなかった。

竈 検出されなかった。

覆土 暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

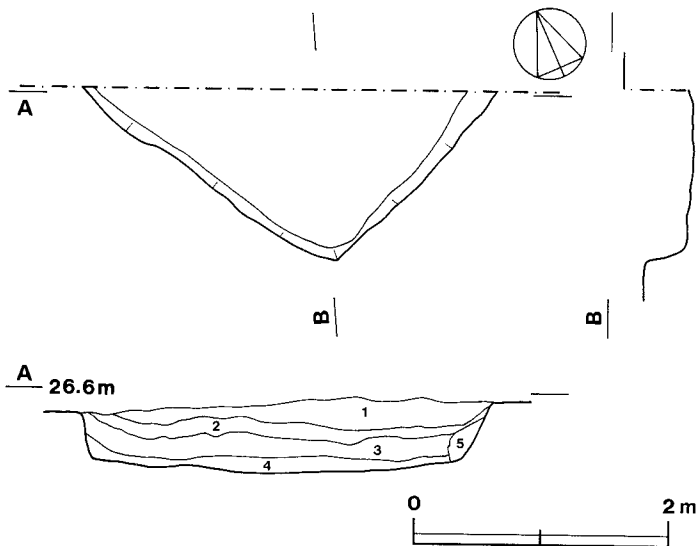
遺物 土師器片(甕), 土師質土器片, 縄文式土器片等が少量出土した。全て覆土中から出土している。

所見 本跡は、調査できた部分の遺構の形態から竪穴遺構と呼ばれるグループに属すると思われる。時期は不明である。



第144図 第13号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
79	皿 (かわらけ) 土師質土器	A (6.3) B 1.8 C (3.6)	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁はやや外反する。ゆがみが大きい。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P69 25% 覆土

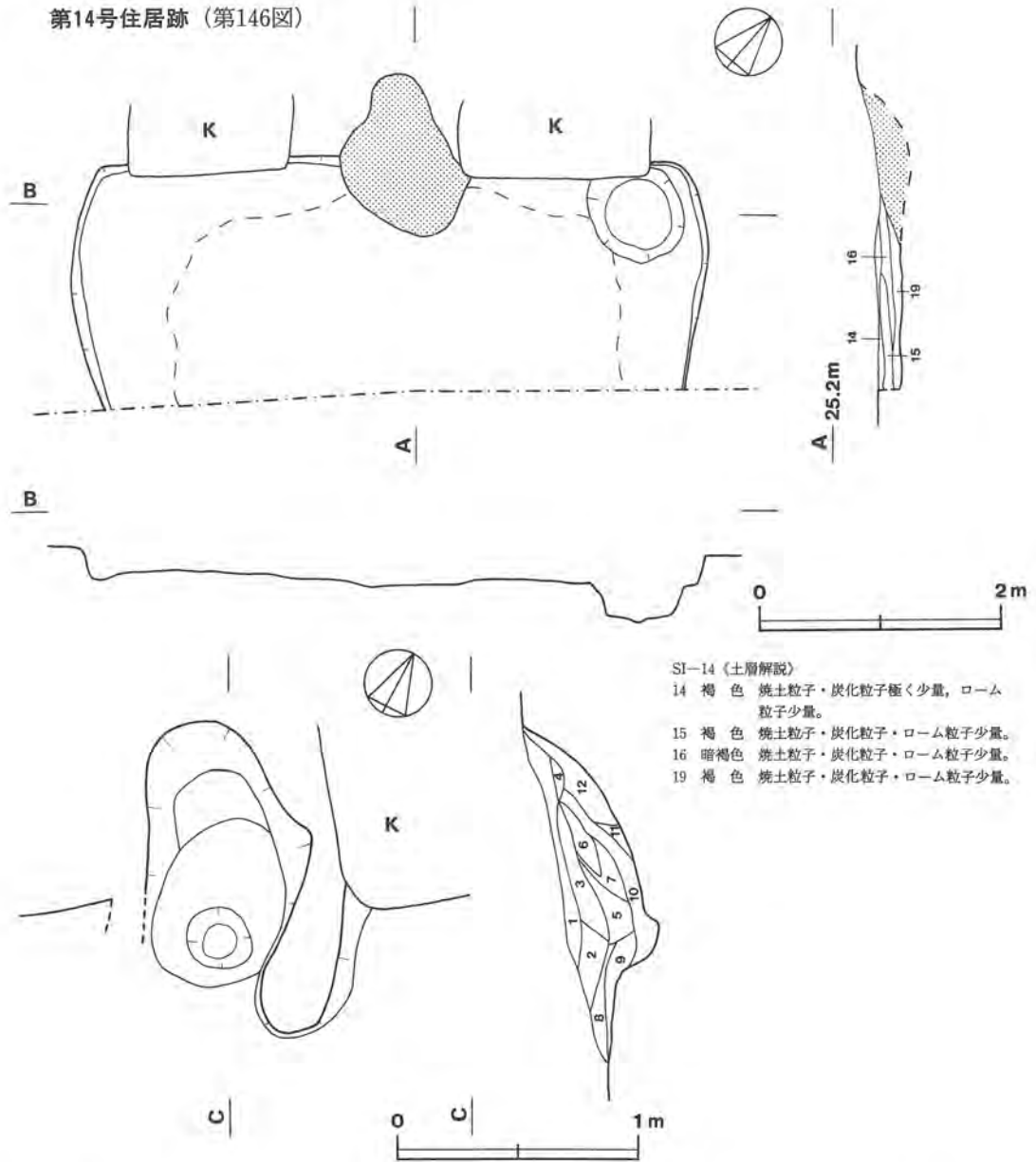


SI-13《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 炭化粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子中量。
- 4 暗褐色 ローム粒子中量。
- 5 褐色 ローム粒子中量。

第145図 第13号住居跡実測図

第14号住居跡 (第146図)



SI-14《土層解説》

- 14 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。
- 15 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 16 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 19 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。

SI-14竈《土層解説》

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子・ローム粒子少量。 | 7 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子極く少量。 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 8 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子極く少量。 | 9 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 4 極暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 10 赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子極く少量。 |
| 5 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子極く少量, ローム粒子少量。 | 11 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子極く少量。 |
| 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 12 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |

第146図 第14号住居跡・竈実測図

位置 B4₆区を中心に所在し、第1号住居跡の東約2mに位置する。

規模と平面形 5.3×(2)mの方形状または長方形状を呈したと思われる。

主軸方向 N-40°-W

壁 高さ20cm前後を測り、やや外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、平坦である。中央付近は硬く踏み固められている。

ピット 検出されなかった。

貯蔵穴 北コーナーに付設されていた。直径約70cmの円形状を呈し、深さは約30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がっている。

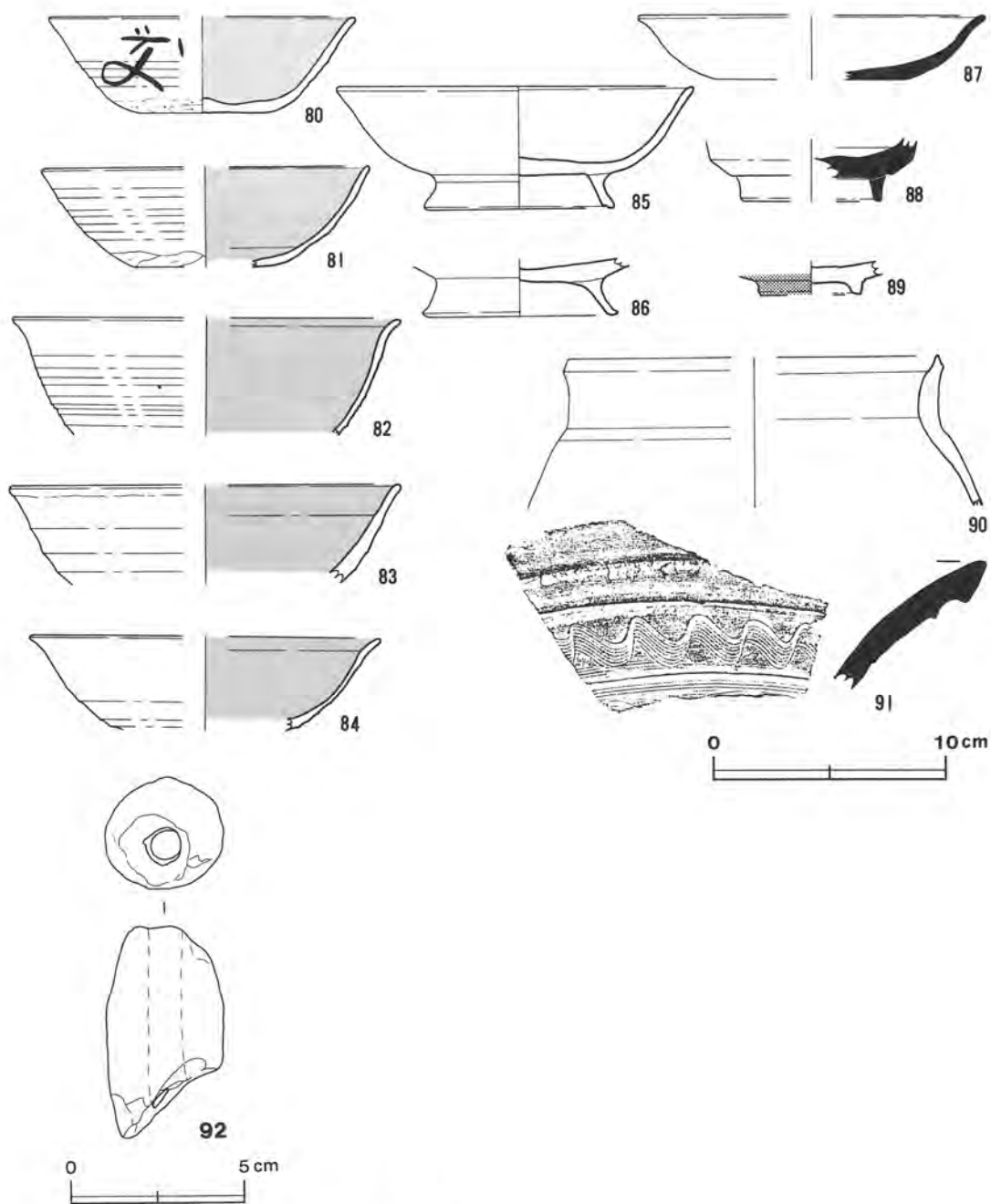
竈 北西壁の中央に付設されていた。長さ135cm、幅107cmを測り、遺存状態は悪い。天井部と袖部は砂質粘土で構築されたと思われるが、原形を留めているのは右袖だけである。右袖は、火床を包み込むように73cmの長さに構築されており、その状態から竈全体が左に曲がっていたと推定される。火床は、ロームを10cm程掘り凹め、中心部はさらに10cm程円形に掘り込まれている。奥壁は、住居跡の壁を80cm程掘り込んで煙道としている。

覆土 4層から成り、褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器・須恵器・土師質土器・陶器等及びその破片が出土している。実測図掲載遺物の中で、土師器坏(80)は竈右側の床面直上から出土し、同高台付坏(85)及び須恵器甕(91)は竈の覆土から出土している。

所見 本跡は、調査した部分の遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
80	坏 土師器	A (13.2) B 4.2 C 6.0	体部は外傾し、内彎して立ち上がって直線的に開く。口縁はやや外反する。体部外面曇書。	横ナデ、体部下端及び底部手持ヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P71 50% 竈右側床面直上
81	坏 土師器	A (14.3) B 4.3 C (6.1)	体部は外傾し、ゆるやかに内彎して立ち上がる。外面に細かい稜が目立つ。全体に薄手。	横ナデ、体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母末 明褐灰色 普通	P72 30% 覆土
82	碗カ 土師器	A (16.9) B (5.1)	体部は外傾し、ゆるやかに内彎する。口縁は外反し、口唇は丸い。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母末 にぶい黄橙色 普通	P73 10% 覆土
83	碗カ 土師器	A (16.8) B (4.3)	体部は外傾し、内彎する。口縁は外反し、口唇は丸い。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P75 5% 覆土
84	碗カ 土師器	A (15.3) B (4.1)	体部はやや強く外傾し、内彎する。口縁は外反して水手に近くなる。口唇は丸い。全体に薄手。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P74 5% 覆土
85	高台付坏 土師器	A 15.3 B 5.3 D 8.2 E 1.5	体部は強く内彎して立ち上がり、直線的に開く。高台は開き、畳付は平坦で内側に段を有する。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理、底部回転ヘラ削り後高台接合	雲母末 浅黄橙色 普通	P77 80% 竈覆土



第147図 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
86	高台付坏 土師器	B (2.5) D 1.5 E 8.5	底部内面は中央が皿状に凹む。高台は外反して開き、先端は外方へ突き出す。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理、底部回転ヘラ削り後高台接合	砂粒 橙色 普通	P78 10% 覆土

図版 番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
87	坏 須 恵 器	A (14.8) B 2.8 C (8.2)	体部は強く外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反する。内面口縁下に凹線。内面付着物。	横ナデ、底部回転ヘラ切り	砂粒 黄灰色 不良	P76 25% 覆土
88	高台付坏 須 恵 器	B (2.7) D (6.4) E 1.2	体部は強く内彎して垂直に近い角度で立ち上がる。高台はわずかに外反する。	横ナデ、高台接合	砂粒 灰白色 普通	P79 25% 覆土
89	埴 陶 器	B (1.4) D (4.4) E 0.5	高台は削り出し高台で外面に稜。内面は同心円状に施釉し、一部に窯道具痕が残る。	木挽き、横ナデ、回転ヘラ削り	(胎)灰白色 (釉)オリーブ灰色 良	P81 5% 表土
90	甕 土 師 器	A (16.0) B (6.5)	肩はなだらかにすばまり、頸部との境界は段状。頸部は外反し、口唇のつまみ上げは直立する。	粘土紐巻き上げ、胴部内外面ナデ、頸部内外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P70 5% 覆土
91	甕 須 恵 器	B (5.5)	口縁は外面に折り返し風の隆帯。以下、凹線、櫛描波状文、横位櫛目と波状文。櫛は8本1条。	粘土紐巻き上げ、横ナデ。	砂粒 灰色 良	P80 電覆土

図版 番号	器 種	法 量 (cm)	備 考
92	管状土錘	長さ 6.2 直径 3.5 重さ 46.5g	DP 8 約1/2欠損 覆土

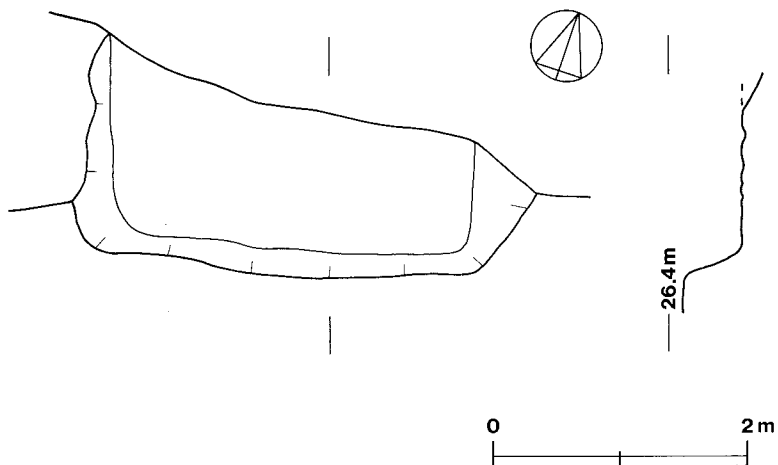
第15号住居跡 (第148図)

位置 B2c3区を中心に所在し、第12号住居跡の北西約5mに位置する。

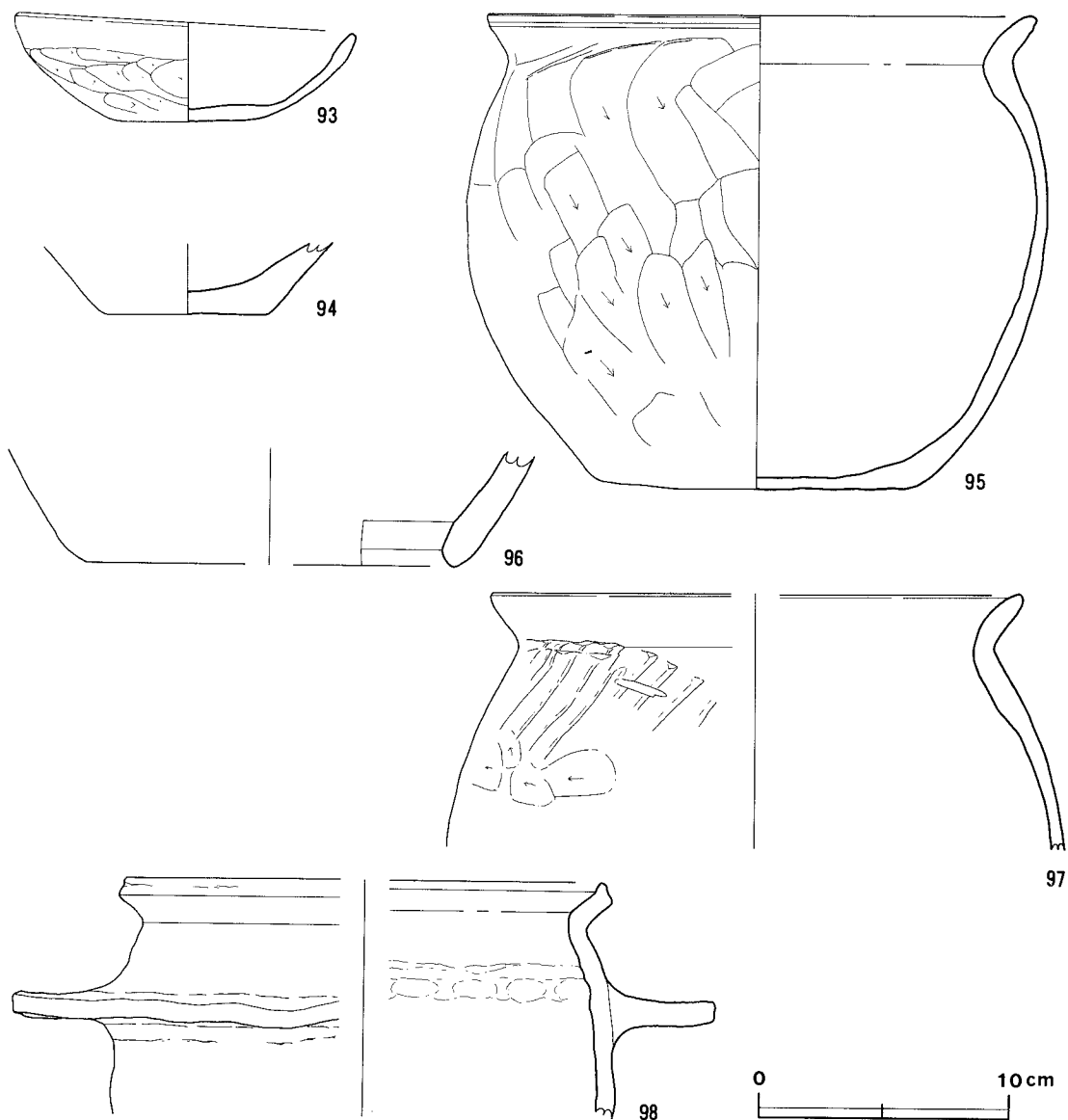
重複関係 第1号溝によって、北側の半分以上を切られている。

規模と平面形 3.3×(1.8)mの方形状または長方形状を呈したと思われる。

壁 高さ45～50cmを測り、外傾して立ち上がっている。



第148図 第15号住居跡実測図



第149図 第15号住居跡出土遺物実測図

床 ロームで、細かい凹凸が目立つ。

ピット 検出されなかった。

竈 検出されなかった。

覆土 褐色土が堆積していたが、土層観察用ベルトを設けることができなかったため、詳細については不明である。

遺物 土師器・須恵器・土師質土器やその破片、及び羽釜が出土した。羽釜（98）は床面直上から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態から竪穴遺構と呼ばれるグループに属すると思われ、時期は出土遺物から平安時代後半に比定されるものと思われる。

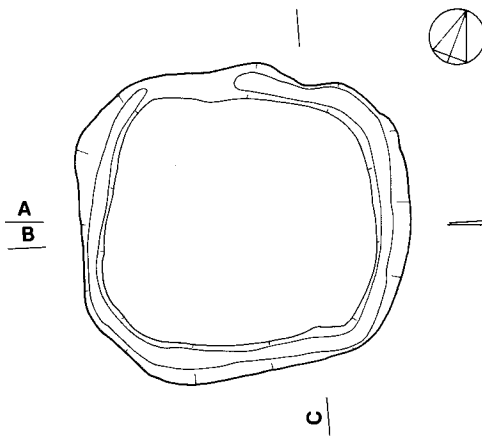
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
93	坏 土師器	A 13.7 B 4.5 C 6.4	体部はゆるやかに内彎する。口縁は肥厚し、下位に比較的明瞭な稜を持つ。全体にゆがむ。	内面及び口縁部横ナデ、体部外面及び底部手持ちヘラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P99 90% 覆土下層
94	甕 土師器	B (3.7) C (6.8)	胴部は強く外傾し、外上方へ直線的に開く。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P98 5% 覆土
95	甕 土師器	A 22.2 B 19.5 C 13.0	胴部はやや外傾し、ゆるやかに内彎する。頸部は肥厚し、「く」の字状に外反する。	粘土紐巻き上げ、胴部内面ナデ、頸部横ナデ、胴部外面手持ちヘラ削り。	砂粒・小礫 明赤褐色 やや不良	P96 70% 覆土下層
96	甕 土師器	B (4.8) C (15.0)	胴部はやや外傾し、ゆるく内彎して立ち上がる。底部の孔はヘラで穿たれ、2孔または4孔。	粘土紐巻き上げ、内面ヘラナデ、外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒 橙色 普通	P100 5% 覆土
97	甕 土師器	A (21.4) B (10.5)	肩はゆるやかにすぼまり、頸部は「く」の字状に外反する。外面にヘラ痕が沈線状に入る。	粘土紐巻き上げ、内面ナデ、頸部内外面横ナデ、胴部外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P97 5%
98	羽 釜	A (19.4) B (9.8)	頸部は「く」の字状に外反し、口唇はつまみ上げ。鏝は接合後横ナデ調整し、先端は波打つ。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、頸部横ナデ、鏝接合部横ナデ、酸化焰焼成	砂粒 明赤褐色 普通	P101 20% 床面直上

2 土 坑

当遺跡で検出された土坑は、8基である。しかし、その中の3基は他の土坑と比べて大規模であり、しかも相互に似た規模・形状を有していることから、性格不明遺構として別項にまとめた。ここでは、残った5基について次の表にまとめて掲載した。

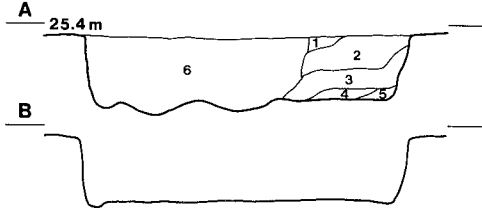
表4 南丘遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
1	B4 ₁₂	N-75°-E	隅丸方形	2.6×2.46	0.5	垂直	平坦	N	土師器12、須恵器11、土師質土器1、陶器1		150
2	B2 ₉₉		円形	1.26×1.18	0.5	外傾	皿状	N	土師器5、内耳1、縄文4		150
6	B4 ₁₄	N-77°-E	楕円形	2.32×1.68	0.43	緩斜	平坦	N	土師器4、須恵器2	S1-1→本跡	150
7	B4 ₁₃	N-24°-W	楕円形	1.8×1.59	0.67	垂直	凹凸	N	土師器20、須恵器10、土師質土器1	S1-3→本跡	151
8	B2 ₉₉	N-56°-E	円形	1.27×1.18	0.5	外傾	皿状	N	土師器2、須恵器1、土師質土器1		151

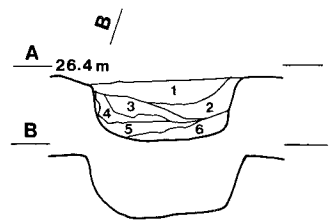
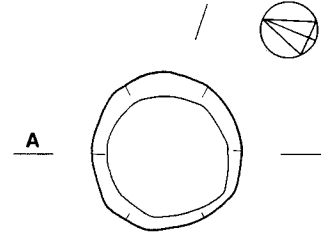


SK-1《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子極く少量，炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。
- 4 褐色 炭化粒子極く少量，ロームブロック中量。
- 5 明褐色 炭化粒子少量，ロームブロック多量。
- 6 褐色 焼土粒子極く少量，炭化粒子・ロームブロック少量。



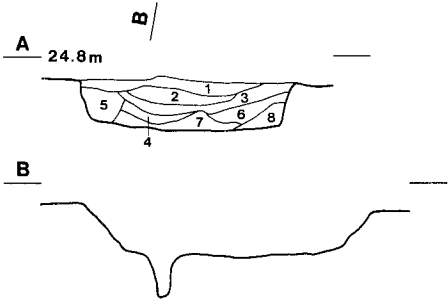
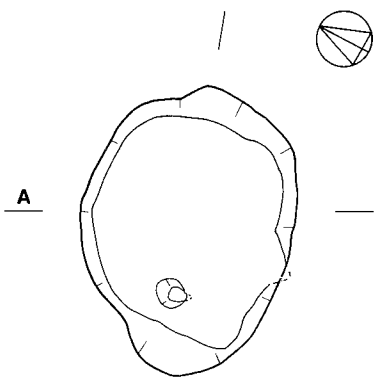
SK 1



SK 2

SK-2《土層解説》

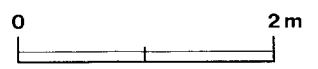
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。



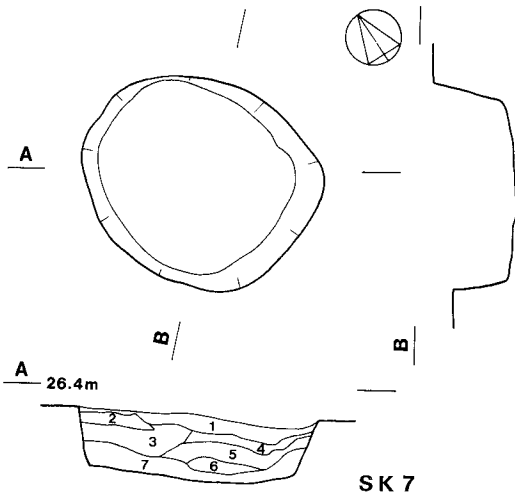
SK 6

SK-6《土層解説》

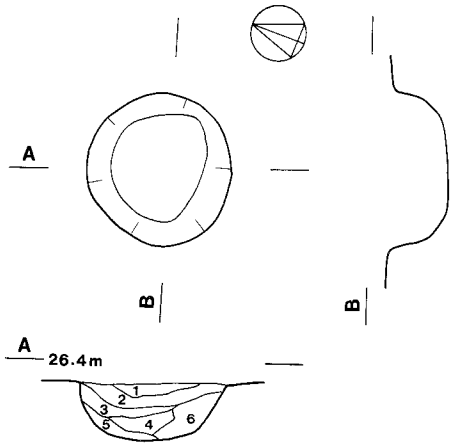
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック中量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。
- 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。



第150図 土坑実測図(1)



SK 7



SK 8

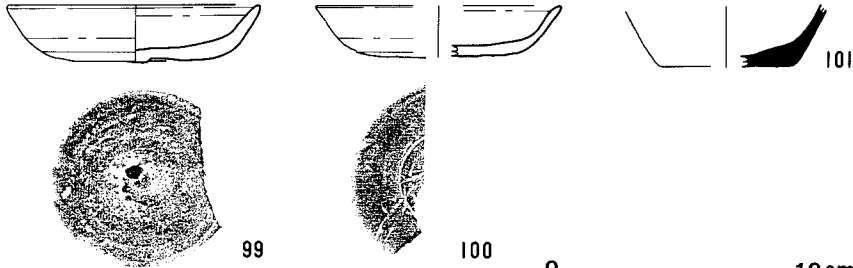
SK-8《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。

SK-7《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック少量。
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。

第151図 土坑実測図(2)



第152図 第1号土坑出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
99	皿B 土師質土器	A 9.8	底部は丸底気味で、体部は強く内彎して立ち上がる。口縁は外反気味で口唇は丸い。厚手。	水挽き，横ナデ，底部回転ヘラ切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P83 70% 覆土下層
		B 2.4				
		C 7.4				
100	皿B 土師質土器	A (9.6)	底部は丸底気味で、体部は強く内彎して立ち上がる。口縁は直線的に開き、内側に稜を有する。	水挽き，横ナデ，底部回転ヘラ切り。	砂粒 橙色 普通	P84 20% 覆土下層
		B 2.0				
		C (6.4)				
101	坏 須恵器	B (2.4)	底部は平坦でやや肥厚する。体部は器厚を減じて外上方へ立ち上がる。見込みに凹みがある。	横ナデ，底部回転ヘラ切り。	長石 灰オリーブ色 普通	P85 10% 覆土
		C (5.4)				

3 溝

当遺跡から検出された溝は、4条である。全掘できたのは第1号溝だけで、他は全て調査区外にかかっている。出土遺物は覆土からの物が圧倒的に多く、遺構の時期等を判断する手懸かりとなる資料は少ない。

第1号溝 (第153図)

位置 B2区を中心に所在し、第8号住居跡の南東約8mの地点から西へ延び、B1区とB2区の境界付近で北々西に屈曲し、さらに第1号性格不明遺構の西約2mの地点まで延びる。

重複関係 B2c3区で第15号住居跡を切っている。また、本跡がさらに北北西に向かって延びていけば、A1_{h9}・19区で第3号性格不明遺構と重複した可能性がある。

方向 A1・B1区はN-21°-W、B2区ではN-90°-Eを示し、それぞれ直線的に延びる。

規模 長さはB2区の部分で約25m、A1・B1区にかけての部分で約16mを測る。上幅は、1.1~4mを測るが、攪乱等のため不明瞭な部分が多い。下幅は、0.3~0.55mである。確認面からの深さは、A1区で0.4m前後、B1区で0.3m前後、屈曲部で0.68m、B2区の屈曲部から6m程の位置で0.7m前後、同じB2区で本跡の先端付近では0.25m前後を測る。

形状 壁は緩やかな傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状またはやや深い皿状を呈する。壁上位は、傾斜が特に緩やかになる部分が多い。

覆土 褐色土が堆積している。全体に締まりは弱い。自然堆積である。

遺物 覆土中から、土師器・須恵器・土師質土器・陶器・縄文式土器等の破片が出土している。

第2号溝 (第155図)

位置 B2区に所在し、第12号住居跡の南約4mに位置する。

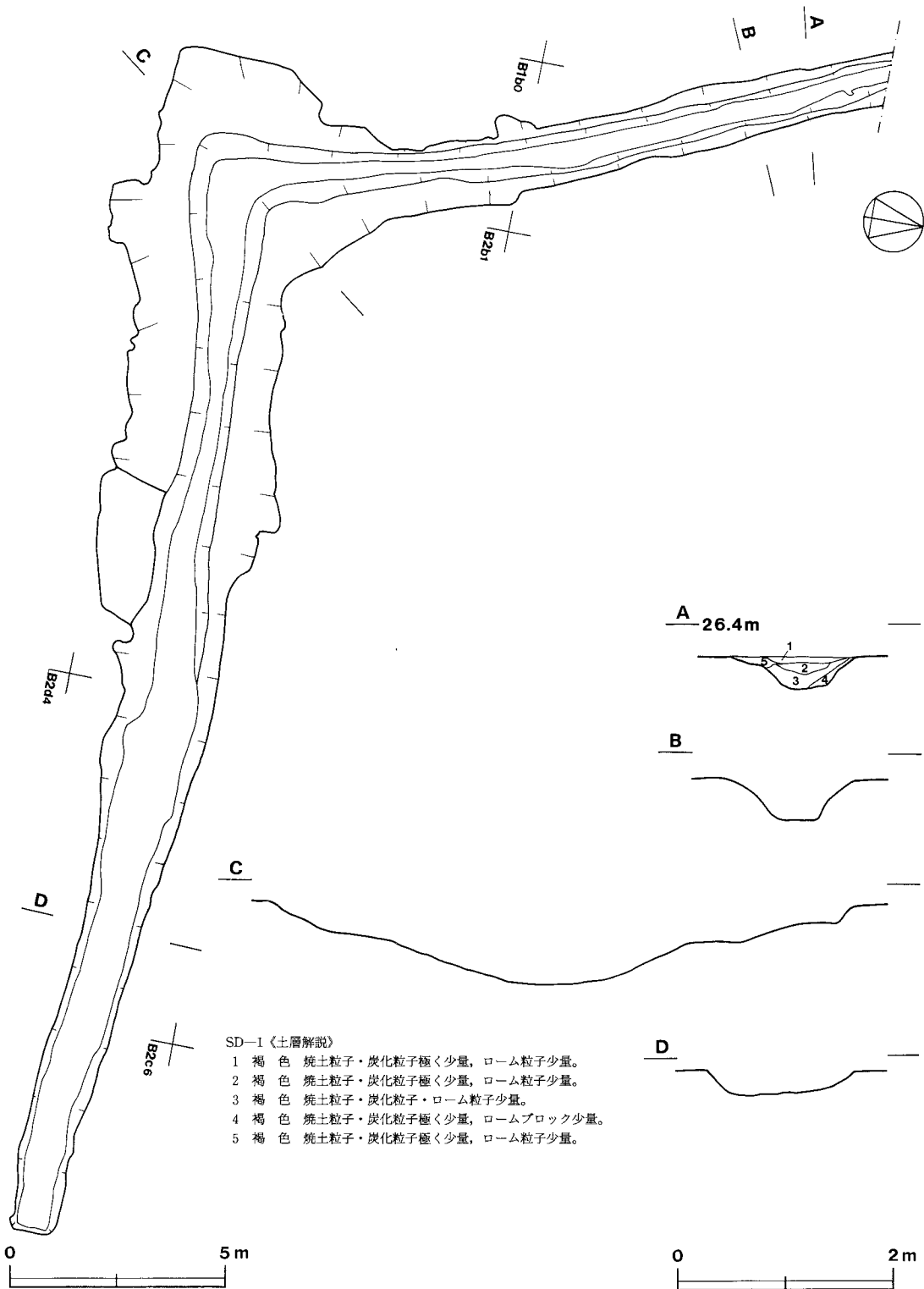
方向 N-73°-Eで、直線的に延び、西南西方向はさらに調査区外に延びる。

規模 南西側が調査区外にかかり、全容は明らかでない。調査した範囲では、長さ約8m、上幅2.8~3.2m、下幅0.8m前後を測る。

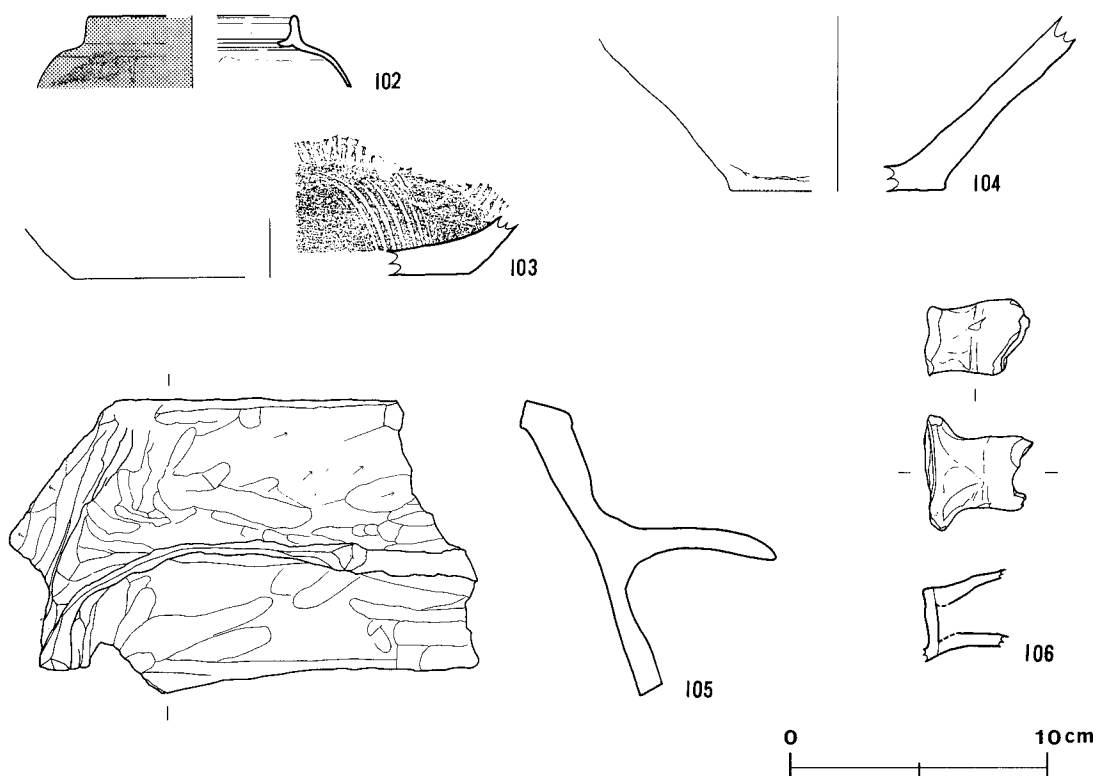
形状 断面形は、扁平な逆台形状を呈する。壁は、緩やかな傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、部分的に中央が浅い皿状を呈する。

覆土 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子等を含む褐色土が堆積している。一部に粘土や砂粒を含む土層が認められる。自然堆積である。

遺物 量的には少ないが、種類は多い。土師器片(坏・皿・甕)、須恵器片(壺・甕)、土師質土器片、内耳土器片、陶器片(甕・皿・播鉢・瓶子・蓋)、縄文式土器片等が出土している。全て覆土中から出土している。

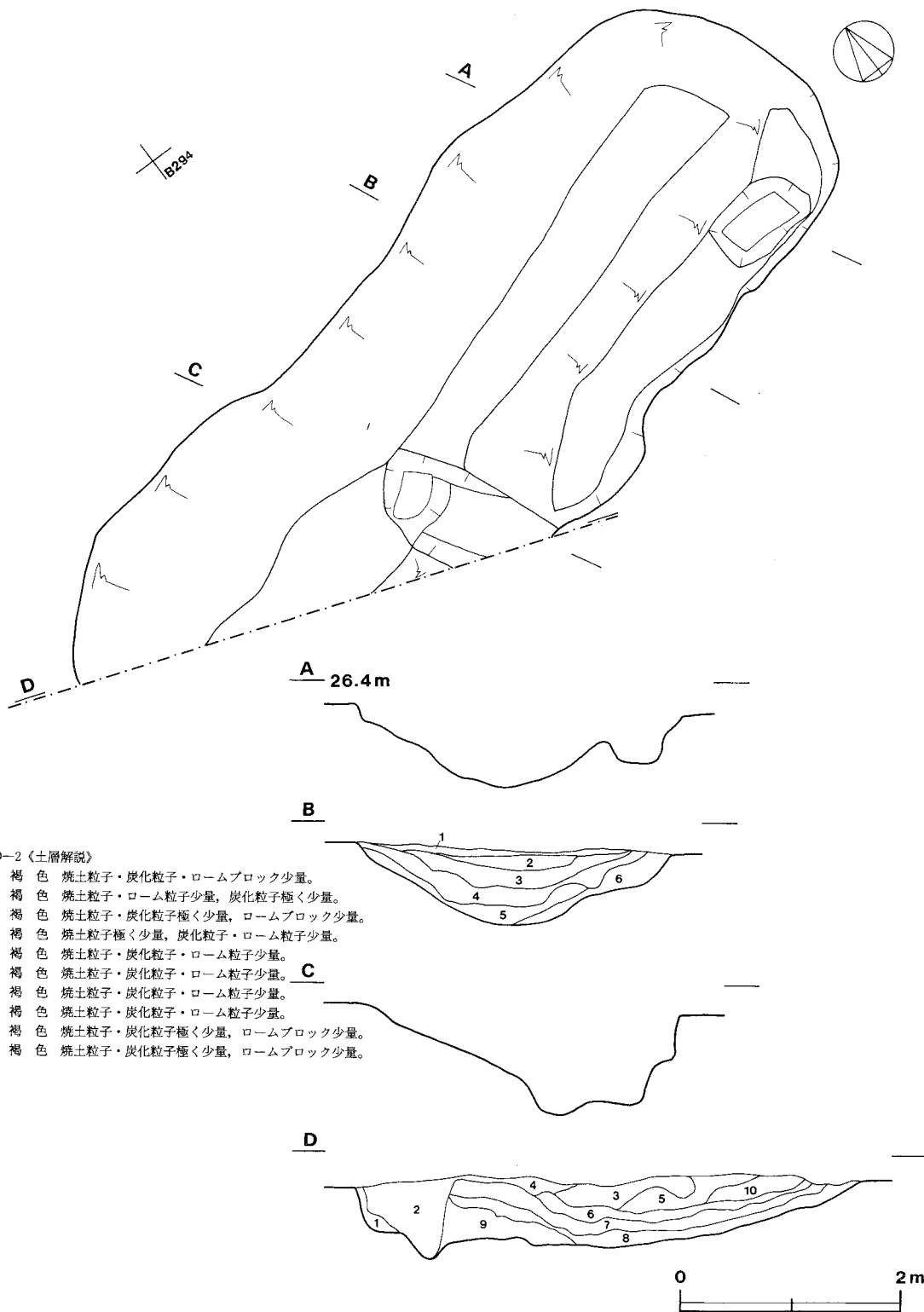


第153図 第1号溝実測図

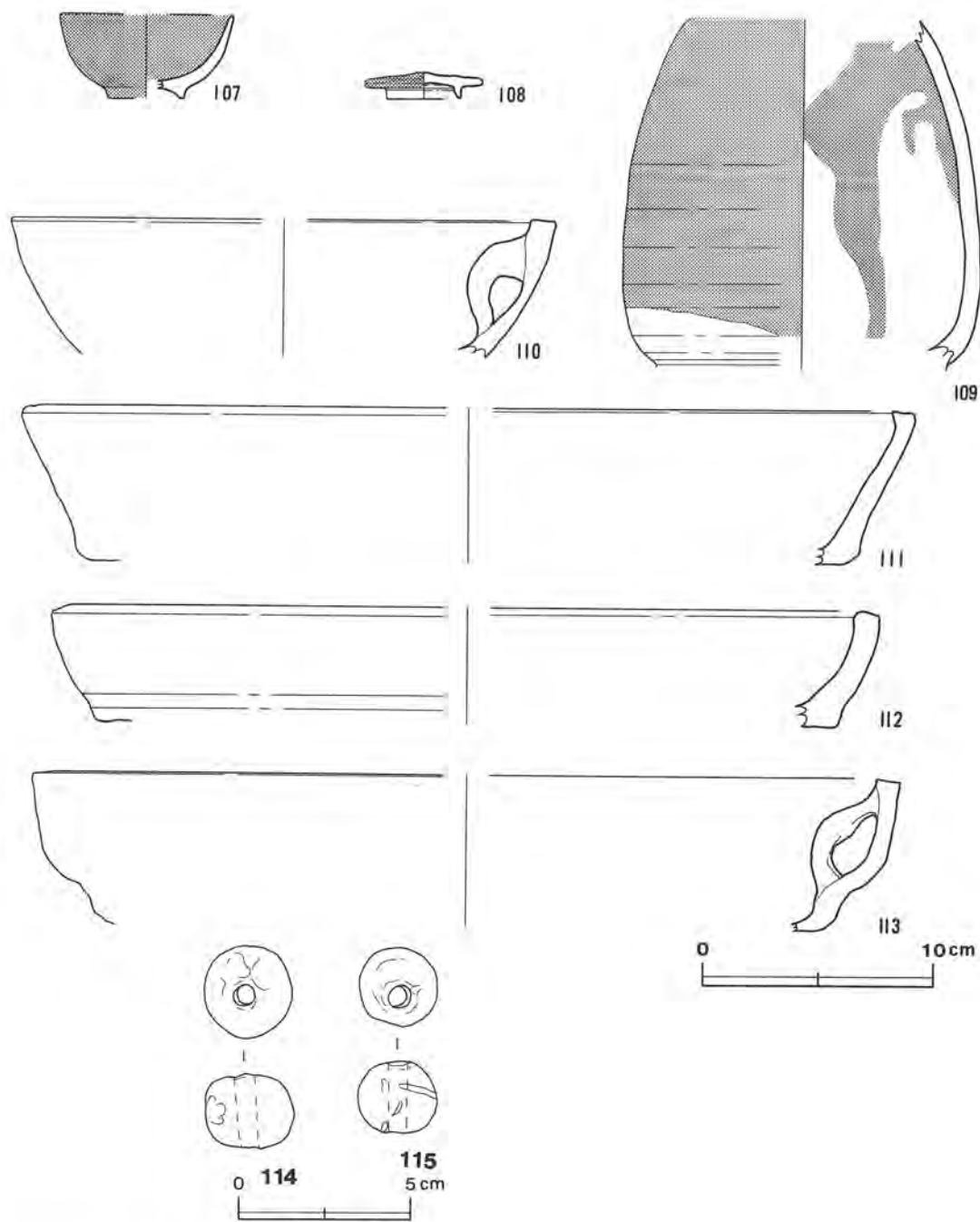


第154図 第1号溝出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
102	壺 陶器	A 8.0 B (2.9)	肩はなだらかで、口縁は直立する。内側に蓋を受ける凸帯が周回する。内面露胎。	水挽き、横ナデ、突帯は折り返し。	(胎) 淡黄色 (釉) 灰白色・青	P102 5% 覆土
103	播鉢 陶器	B (2.3) C (15.6)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。体部内面は密、底部は粗な筋。	内外面ナデ。	砂粒・小礫 にぶい橙色 良	P104 5% 覆土
104	播鉢 陶器	B (6.9) C (8.4)	体部は強く外傾し、やや外反して外上方へ開く。内面磨減。	内面横ナデ、外面ナデ、外面体部下端横ナデ。	長石 にぶい橙色 良	P103 5% 覆土
105	置き竈	B (11.7)	本体は上がすばまり、焚口はヘラで穿つ。廂は粘土板を貼り、その左右に粘土紐を貼って補強。	ナデ、廂上部ヘラ削り、上端及び焚口ヘラ切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P117 5% 覆土
106	焙烙(柄) 土師質土器	B (3.7)	円筒形を呈する柄で、土器本体は盆形を呈したと思われる。下面に煤付着。	ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P105 5% 覆土



第155図 第2号溝実測図



第156図 第2号溝出土遺物実測図

図版 番号	器 種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
107	碗 磁 器	A (7.4) B 3.7 D (3.4) E 0.5	体部は強く内彎して立ち上がり、口縁は直立する。外面はヘラで縦位の刻みを繰り返す。	水挽き、横ナデ、底面回転ヘラ削り(高台を削り出す)、高台内及び畳付露胎。	(胎) 灰白色 (釉) 明緑灰色	P112 40% 覆土
108	蓋 陶 器	A 5.2 B 1.2	天井は2段に削られ、中央が高い。口縁は水平に開き、内面にはかえりが下垂する。	水挽き、横ナデ、天井部回転ヘラ削り。	(胎) 灰白色 (釉) 灰白色	P111 100% 覆土
109	瓶子 陶 器	B (15.3)	胴部は下端が張り、上に向かってすぼまる。内面の一部に釉が流れる。	水挽き、外面回転ヘラ削り後施釉。	(胎) 黄褐色 (釉) オリーブ褐色	P110 30% 覆土
110	内耳土器	A (23.6) B (6.0)	耳接合部はやや内彎する。下部内面は特に強く内彎し、ここから底部に移行すると見られる。	横ナデ、耳接合、口縁部ヘラ横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P109 5% 覆土
111	内耳土器	A (39.0) B 6.7 C (32.6)	体部は外傾し、やや外反する。口縁は内彎し、内側は突き出てシャープな稜をなす。	横ナデ、口縁部ヘラ横ナデ。	砂粒 黒色 普通	P106 5% 覆土 小片、径は不 正確
112	内耳土器	A (36.1) B 5.1 C (32.2)	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は平坦で、内側は少し突き出す。	横ナデ、口縁部ヘラ横ナデ。	雲母・砂粒 明褐色 普通	P107 5% 覆土 小片、径は不 正確
113	内耳土器	A (39.8) B 6.8 C (30.8)	体部は外傾し、内彎する。耳は丁寧に接合され、体部は外方へふくらむ。外面鍋墨付着。	横ナデ、指ナデ、口縁部ヘラ横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P108 5% 覆土 小片、径は不 正確

図版 番号	器 種	法 量 (cm)	備 考
114	球状土錘	高さ 2.2 直径 2.6 重さ 13.9g	DP20 100% 覆土
115	球状土錘	高さ 2.2 直径 2.3 重さ 8.6g	DP21 100% 覆土

第3号溝 (第157図)

位置 A2区の南東隅寄りに所在し、第3号住居跡の西約5mに位置する。

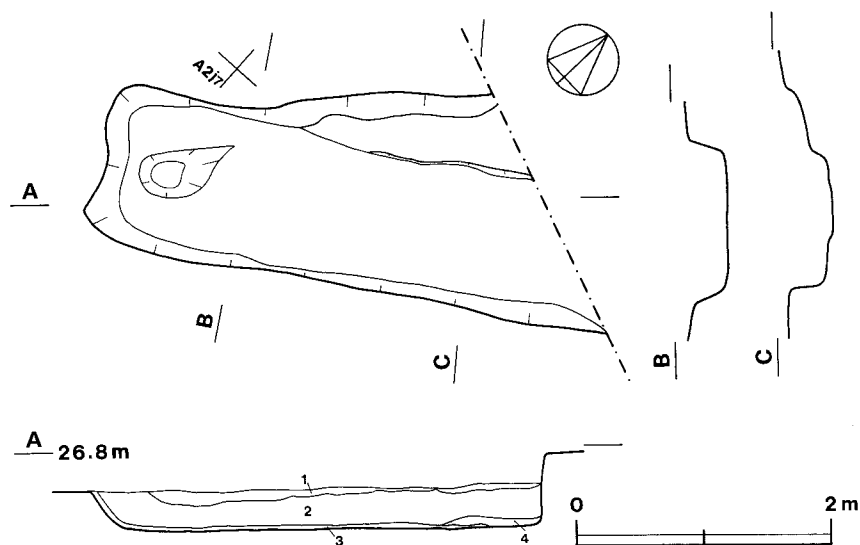
方向 N-55°-Eに直線的に掘られ、北東側はさらに調査区外へ延びる。

規模 北東側が調査区外にかかり、全容を明らかにすることはできなかった。調査した範囲では、長さ4m、上幅1.3~1.75m、下幅1~1.5m、深さ0.3~0.4mである。

形状 壁は外傾して立ち上がり、底面は部分的に凹凸があるものの比較的平坦である。北側は広がり、段状を呈する。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積している。2層には少量のロームブロックが含まれ、耕作機械による攪乱の様相を呈する。各層とも水平に近い堆積であるが、自然堆積とは認め難い。

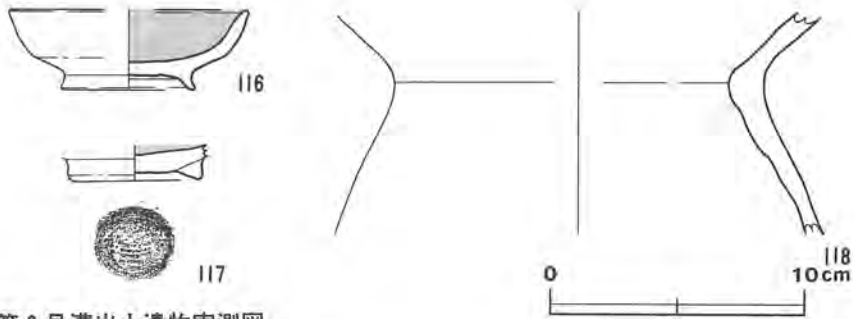
遺物 遺物は少なく、土師器・縄文式土器の破片が少量出土している。



SD-3〈土層解説〉

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量、ロームブロック少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量、ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量、ローム粒子少量。

第157図 第3号溝実測図



第158図 第3号溝出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
116	高台付坏 土師器	A (9.3) B 3.2 D 5.3 E 0.6	底部は皿状で、体部は強く内彎してから直線的に開く。高台は開き、壺付は丸い。	横ナデ、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P114 20% 覆土
117	高台付坏 土師器	B (1.4) D 5.5 E 0.7	高台は断面三角形状で、内側は横ナデにより浅い凹帯をなす。	横ナデ、底部回転糸切り後高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理	砂粒 浅黄橙色 普通	P115 5% 覆土
118	甕 土師器	B (8.8)	なだらかにすぼまる頸部から、頸部が「く」の字状に外反する。	頸部内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 不良	P113 10% 覆土

第4号溝 (第159図)

位置 B3_{e0}区を中心に所在し、第11号住居跡の北西約10mに位置する。

方向 N-5°-Wに、一直線に掘られており、北側はさらに調査区外へ延びる。

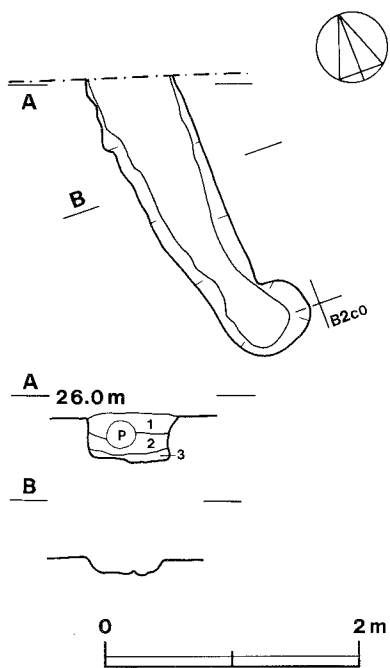
規模 北側が調査区外にかかるため、全容は明らかではない。調査した範囲では、長さ2.25m、上幅0.4~0.7m、下幅0.2~0.6m、深さ0.2m前後を測る。

形状 南端付近は、東側の壁が大きく張り出している。ここに向かって、溝の幅は徐々に狭まる。壁は60°~70°の傾斜で立ち上がり、底面には凹凸が目立つ。

覆土 褐色土が堆積している。堆積はほぼ水平であり、自然堆積と思われる。

遺物 土師器片(甕)、須恵器平瓶1点が出土した。平瓶は完存率90%と高く、本跡の覆土と表土の境界から正位の状態が出土した。本跡の埋没途中で、出土位置に置かれたものと思われる。

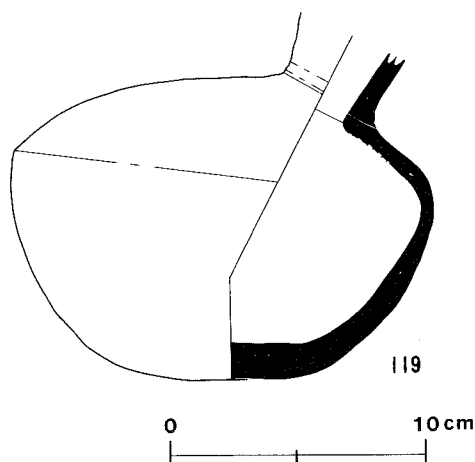
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
119	平瓶 須恵器	B (14.6) C 7.9	体部は強く内彎し、上面はふくらんで肩に弱い稜を持つ。口頸部は外傾し、下端に稜を持つ。	粘土紐巻き上げ、体部下端回転ヘラ削り、底部手持ちヘラ削り、他は横ナデ、口頸部接合。	砂粒 灰色 普通	P116 90% 覆土上面



SD-4《土層解説》

- 1 褐色 表土。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ロームブロック少量。

第159図 第4号溝実測図



第160図 第4号溝出土遺物実測図

4 性格不明遺構

土坑の項の冒頭で述べたように，ここでは第3～5号土坑を性格不明遺構として，できるだけ詳しく解説することとする。性格不明遺構としての番号の後に，本来の土坑番号を付記した。

第1号性格不明遺構 [第3号土坑] (第161図)

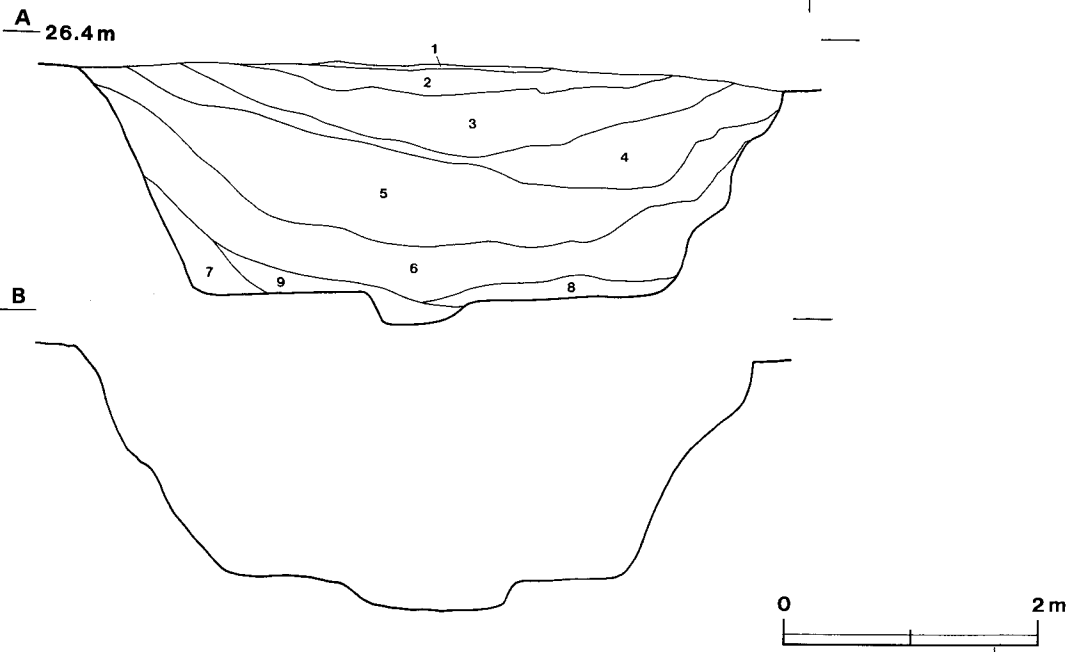
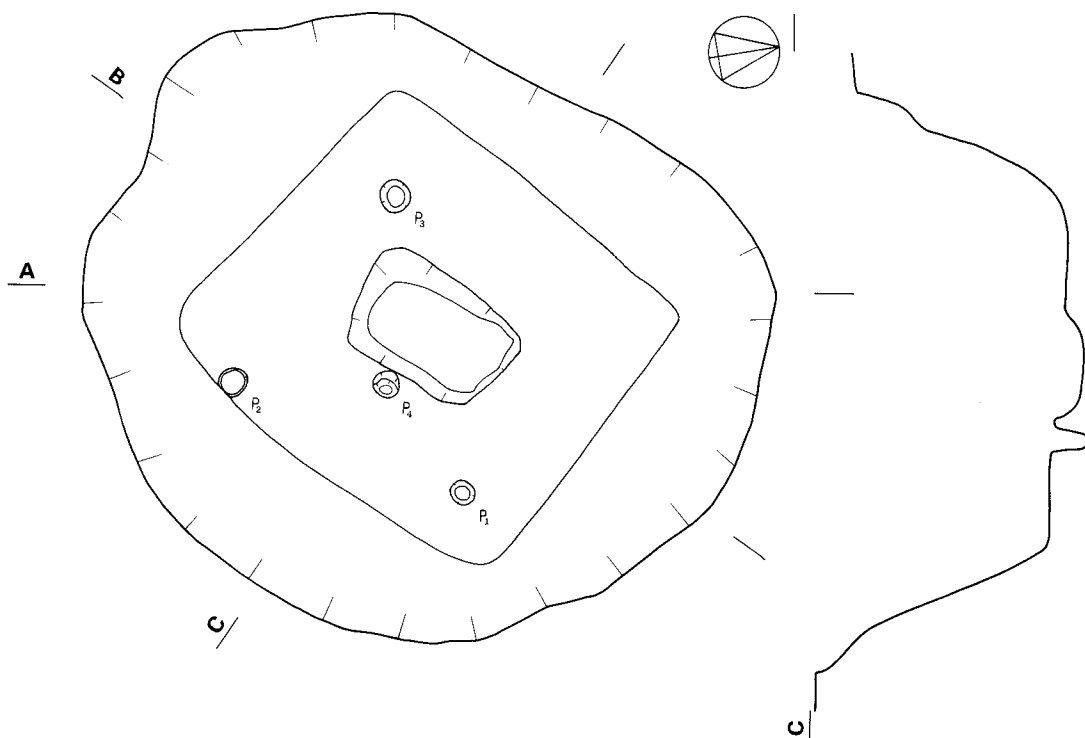
位置 A1₁₀区を中心に所在し，第10号住居跡の南西約4mに位置する。

規模と平面形 長径5.45m，短径4.57mの楕円形状を呈するが，底面の形状から本来は長方形に掘り込まれたものと思われる。最深部までの深さは2.05mで，常総粘土層に達する。

長径方向 N-52°-E（底面の長軸方向は，N-50°-E）

壁 ロームで，緩やかな傾斜である。断面形は，逆台形状を呈する。

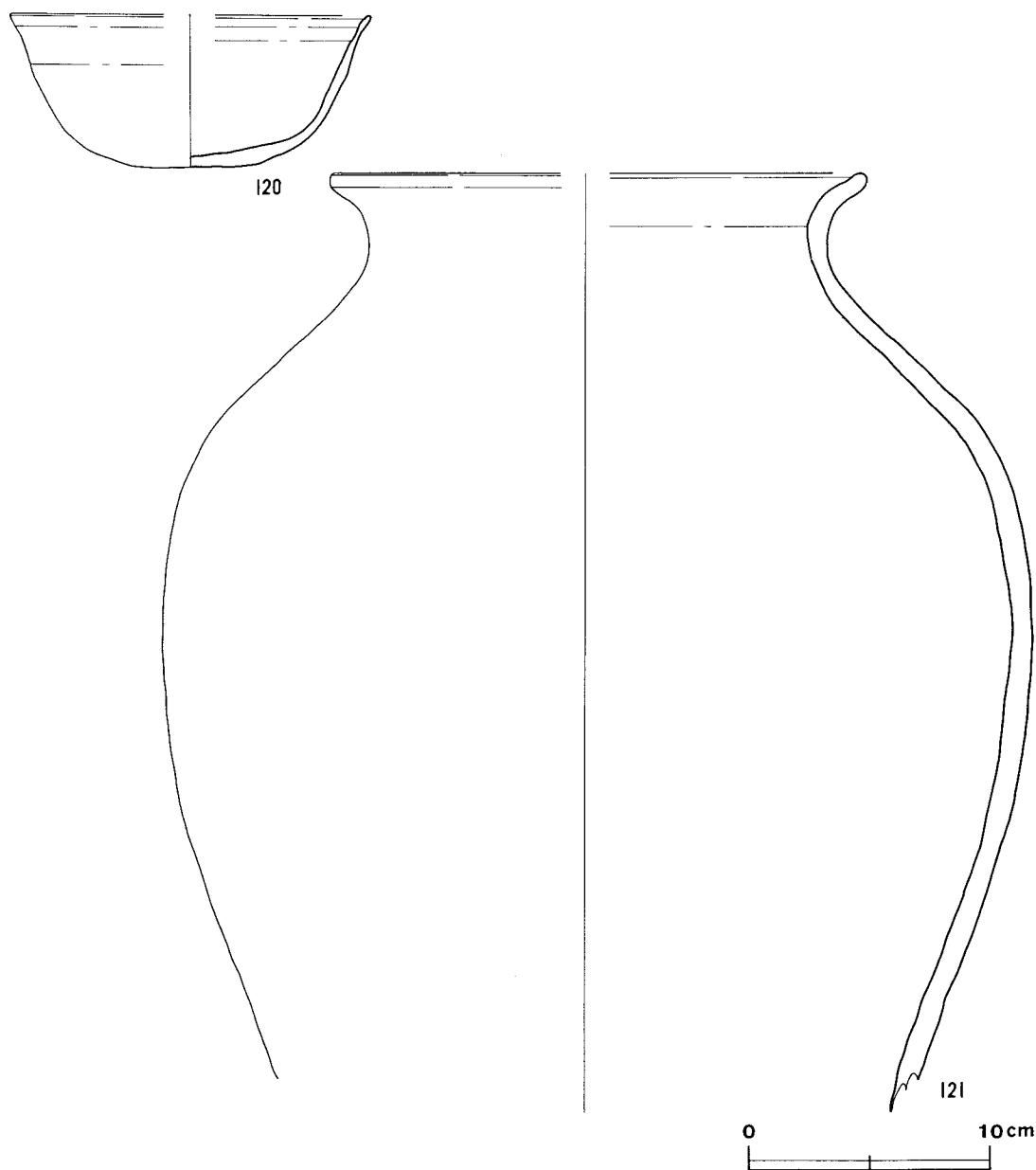
底面 ロームで，硬く締まっている。長軸3.1m，短軸2.65mの長方形を呈し，中央にも長方形の掘り込みがある。この掘り込みは，長軸1.3m，短軸0.85mで，方向は底面の方向と一致する。深さは20cm程で，常総粘土層を10cm程掘り込んでいる。



SX-1 《土層解説》

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量。 |
| 2 黒褐色 焼土粒子極く少量，炭化粒子・ローム粒子少量。 | 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子多量。 | 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子極く少量，ローム粒子少量。 |
| 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | |

第161図 第1号性格不明遺構実測図



第162図 第1号性格不明遺構出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
120	坏 土師器	A (14.8) B 6.4 C (5.4)	底部は丸底状。体部は強く内彎して立ち上がり、直線的に開く。口縁はやや外反する。	内外面横ナデ、底部回転ヘラ切り。	砂粒 におい・橙色 普通	P87 50% 覆土
121	甕 土師器	A (23.0) B (39.2)	胴部は最大径から急激にすぼまり、頸部は丸味を以って外反する。全体に壺形を呈する。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、頸部内外面横ナデ、胴部外面下半に縦位ヘラ磨きの痕跡。	砂粒 橙色 普通	P86 60% 覆土最下層・ SX2覆土

ピット 4か所を検出した。いずれも径20cm前後の円形状を呈し、深さは20～30cmを測る。P₁～P₃の位置から、本跡が上屋を有した可能性も考えられる。

覆土 8層から成る。上位には黒褐色土・暗褐色土が、下位には褐色土が堆積している。各層には、ローム粒子・同小ブロック・炭化粒子・焼土粒子等が含まれている。堆積の状況から、自然堆積と考えられる。

遺物 土師器・須恵器・縄文式土器の各破片、支脚の破片及び馬の歯等が出土した。大半は覆土中からの出土であるが、土師器甕(121)は底面中央の掘り込みの覆土最下層から出土したもので、第2号性格不明遺構の覆土から出土した破片2点が接合されている。

第2号性格不明遺構 [第4号土坑] (第163図)

位置 A2_{h1}区を中心に所在し、第10号住居跡の北コーナーと重複する。

重複関係 本跡の南コーナーは、第10号住居跡の北コーナーを切っている。

規模と平面形 北側が調査区外にかかるため、全容は明らかではない。調査した範囲では、南壁4.7m、西壁3.5mを検出している。各々ほぼ直線的であり、明瞭なコーナーを形成していることから、本跡の平面形は方形状または長形状を呈したと考えられる。深さは2.45mを測り、常総粘土層に達する。

長軸方向 N-67°-EまたはN-23°-W

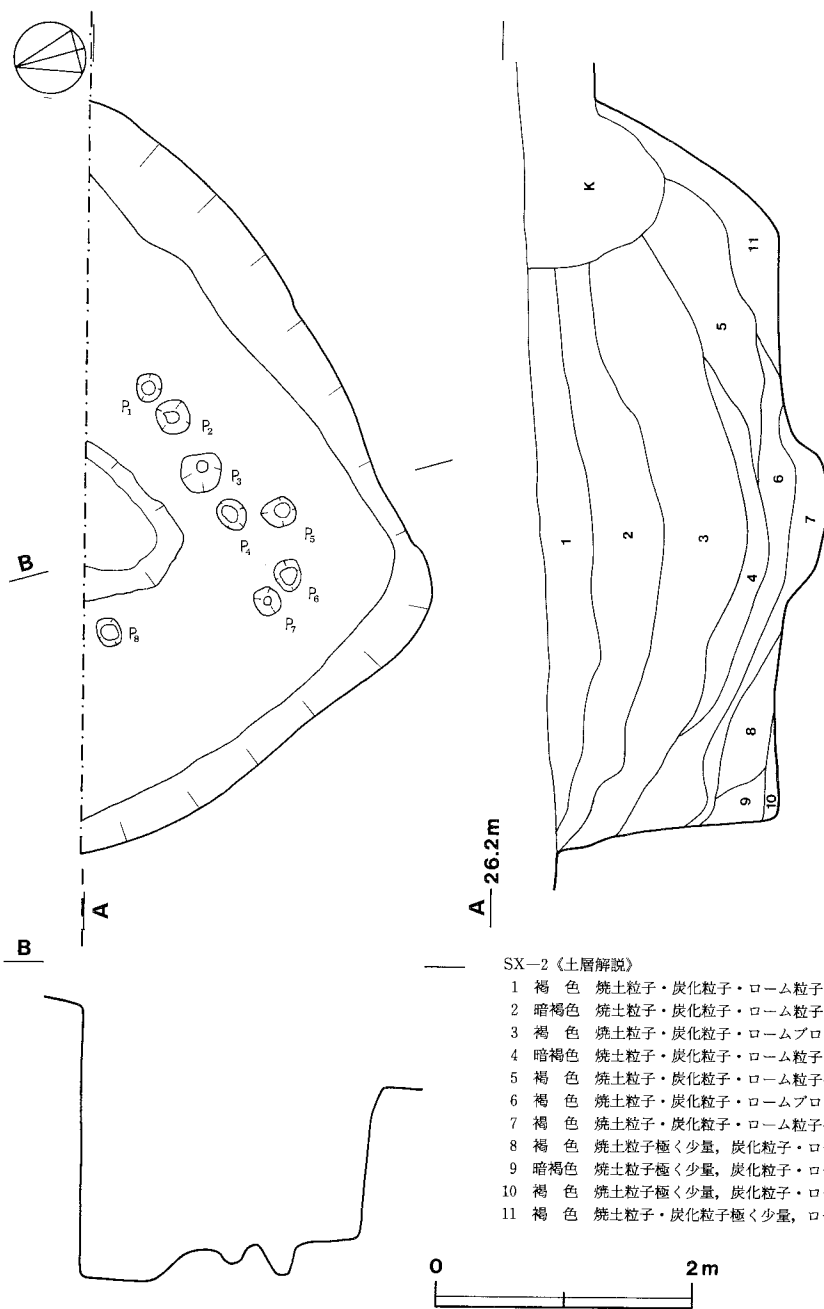
壁 ロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。東側は攪乱のため、上端が失われている。

底面 常総粘土層上面を底面としている。中央と思われる位置に、不整楕円形状の掘り込みがある。規模は不明であるが、長径方向はN-39°-Eを示している。

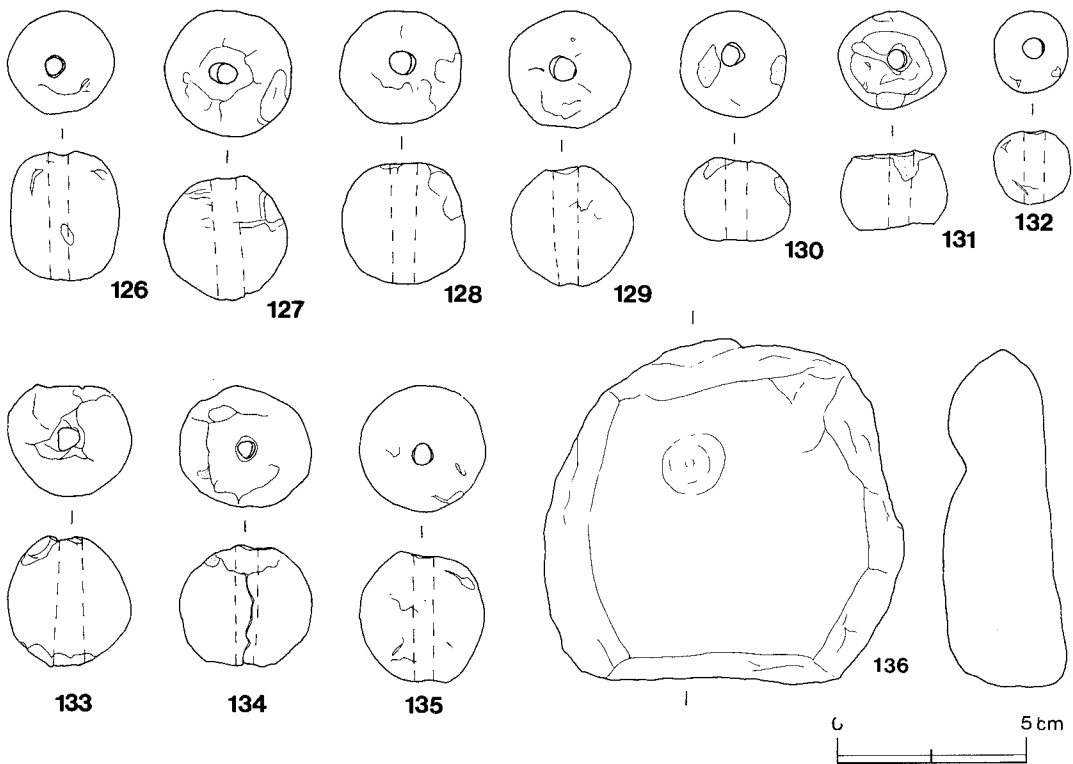
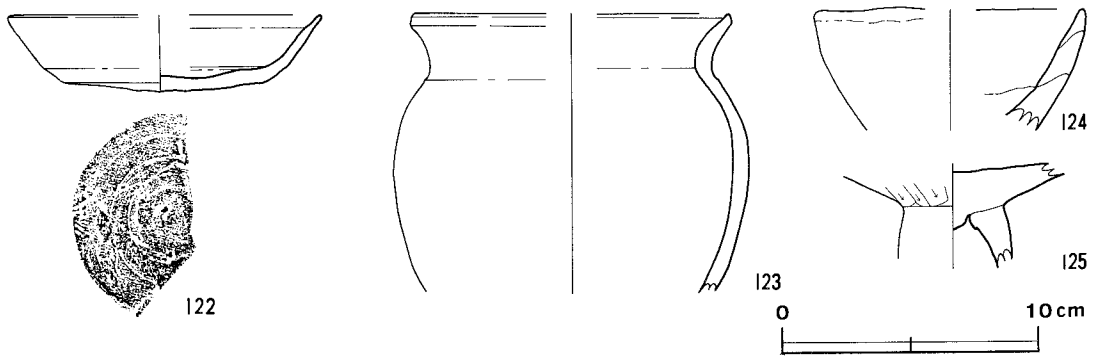
ピット 8か所を検出した。P₁～P₄は南東壁と底面中央の掘り込みの間に1列に並び、P₅～P₇はコーナー付近に位置している。

覆土 11層から成る。褐色土・暗褐色土が堆積しており、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子等のほか、下位の層には粘土ブロックも含まれる。堆積の状況から、自然堆積と考えられる。

遺物 土師器・須恵器・土師質土器・縄文式土器等の各破片が出土した。土師器甕(123)は、底面内の掘り込みの覆土最下層から出土し、本跡の廃絶後あまり時間を経ない段階で投棄されたと考えられる。他は全て覆土中から出土しており、123の投棄後時間を経てから投棄または流入したものである。



第163図 第2号性格不明遺構実測図



第164図 第2号性格不明遺構出土遺物実測図

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
122	坏 土 師 器	A (12.3) B 3.0 C 7.8	体部は外傾し、内彎して立ち上がり、直線的に開く。口縁は器厚を減ずる。底部中央は下がる。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り。	砂粒にふい橙色普通	P90 60% 覆土
123	甕 土 師 器	A (12.4) B (11.1)	胴部は上半が最も張る。頸部は強く外反する。口唇部のつまみ上げは小さい。	粘土紐巻き上げ、胴部内外面ナデ、頸部内外面横ナデ。	長石・雲母 浅黄橙色 やや不良	P88 10% 覆土最下層
124	手捏土器 土 師 器	A (10.4) B (4.8)	体部はゆるやかに内彎し、急激に器厚を減じて口縁に至る。口唇部は凹凸がある。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ、口縁外面及び内面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P91 20% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
125	高坏 土師器	B (4.2)	脚部は基部に向かってすぼまるように細くなり、坏部は大きく外方へ開く。	坏部内面へラ磨き、同外面縦位へラナデ、脚部外面ナデ、坏部及び脚部は別個に製作後接合。	砂粒 橙色 普通	P89 5% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)			備考	
126	球状土錘	高さ 3.5	直径 3.4	重さ 30.5g	DP13 100%	覆土
127	球状土錘	高さ 3.3	直径 3.3	重さ 33.9g	DP 9 100%	覆土
128	球状土錘	高さ 3.3	直径 3.2	重さ 32.9g	DP10 100%	覆土
129	球状土錘	高さ 3.2	直径 3.3	重さ 34.1g	DP11 100%	覆土
130	球状土錘	高さ 2.2	直径 3.3	重さ 17.1g	DP16 一部欠損	覆土
131	球状土錘	高さ 2.2	直径 2.3	重さ 16.6g	DP17 一部欠損	覆土
132	球状土錘	高さ 2.0	直径 2.1	重さ 8.5g	DP18 100%	覆土
133	球状土錘	高さ 3.4	直径 3.3	重さ 29.0g	DP15 一部欠損	覆土
134	球状土錘	高さ 3.2	直径 3.4	重さ 34.6g	DP12 100%	覆土
135	球状土錘	高さ 3.5	直径 3.4	重さ 41.0g	DP14 100%	覆土
136	不明石製品	高さ 9.1	幅 9.5	重さ 429.1g	Q 2 雲母片岩	覆土

第3号性格不明遺構 [第5号土坑] (第165図)

位置 A1_{h9}区を中心しに所在し、第10号住居跡の西約6mに位置する。

規模と平面形 上底3.55m、下底5.25m、高さ4.9mの隅丸台形状を呈する。最深部までの深さは、最も確認面が高い南東側で測った場合、2.73mで、常総粘土層を70cm程掘り込んでいる。長軸は底面との関係を考慮し、上底と平行するものとした。

長軸方向 N-55°-E

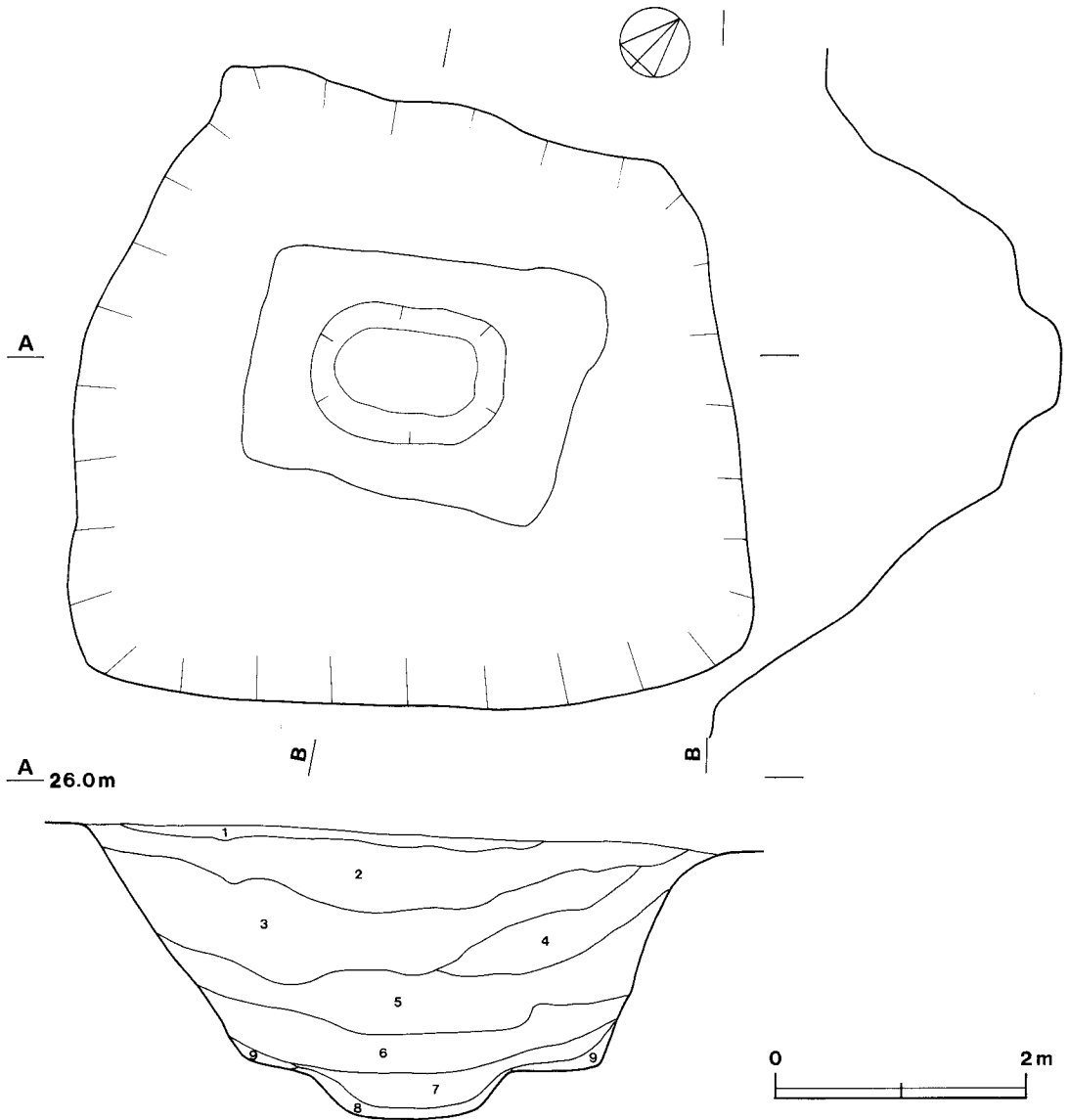
壁 下位の40cm程は粘土で、その上はロームである。傾斜は、粘土の部分が外傾で、ロームの部分は緩斜であり、上位へ行くに従って緩やかになる。

底面 粘土で、硬く締っている。上底1.65m、下底2.0m、高さ2.4mの台形状で、長軸方向はN-59°-Eを指す。中央には、長径1.54m、短径0.6m、深さ34cmの楕円形を呈する掘り込みがある。底面は、この掘り込みに向かってわずかに傾斜している。

ピット 検出されなかった。

覆土 9層から成る。褐色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積している。最下層は暗赤褐色土で、多量の焼土・炭化材を含んでいる。堆積の状況から、自然堆積と考えられる。

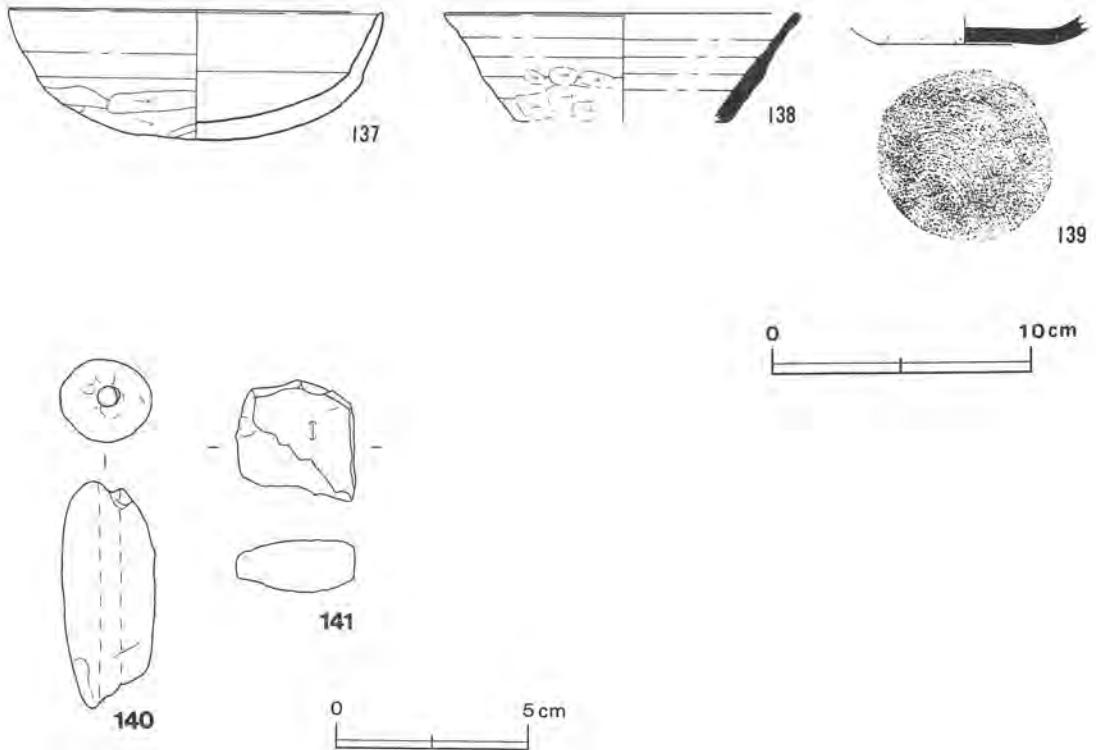
遺物 土師器坏及びその破片，須恵器片・縄文式土器等が出土した。土師器坏(137)は，底面直上から出土し，本跡の廃絶後あまり時間を経ない段階で投棄されたものと考えられる。他は全て覆土中からの出土であり，長時間をかけて投棄または流入したと思われる。



SX-3《土層解説》

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子多量。 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 9 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化材多量。 |
| 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | |

第165図 第3号性格不明遺構実測図



第166図 第3号性格不明遺構出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
137	坏 土師器	A 14.8 B 5.1 C 12.9	底部は丸底で口縁部との境界にに ぶい稜を持つ。口縁部は外傾し、 口唇部はやや内彎する。	底部内面及び口縁部内外面横 ナデ、底部外面手持ちへら削 り。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P92 80% 底面直上
138	坏 須恵器	A 13.8 B 4.3 C 8.4	体部は外傾して直線的に立ち上 がる。口縁はわずかに外反し、口唇 は丸くおさめる。	横ナデ、体部下端及び底部手 持ちへら削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P93 60% 覆土
139	坏 須恵器	B (1.1) C (6.8)	底部はわずかに反って上げ底状を 呈する。体部は強く外傾し、内彎 しながら外上方へ開く。	内面横ナデ、体部下端手持ち へら削り、底部回転系切り後 手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P94 30% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)	備考
140	管状土錘	長さ 6.0 直径 2.5 重さ 27.7g	DP19 一部欠損 覆土
141	砥石	長さ 3.2 幅 3.2 重さ 18.6g	Q1 一部のみ遺存 凝灰岩 覆土

5 遺構外出土遺物

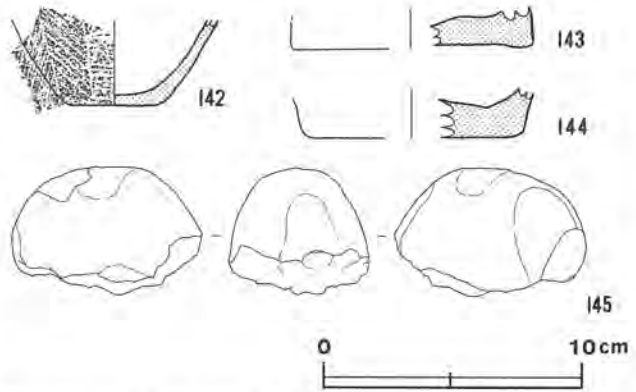
(1) 縄文時代の遺物 (第167～169図)

縄文時代の遺物は、表土や遺構の覆土から少量出土した。しかし、先述したように、遺構に伴う遺物は皆無であることから、遺構外出土遺物としてここに一括した。

4点(土器3, 磨石1)について実測し、土器片82点について拓本と断面実測を行った。実測図を掲載した遺物については個別に解説し、拓影図を掲載した遺物については分類してグループ毎に解説した。

・ 実測図掲載遺物 (第167図)

142は、小型深鉢である。文様はヘラによる細い沈線で構成されている。縦位に区画を行い、各区画には斜位の沈線、横位の沈線、斜格子、綾杉文が充填される。一部の区画は、上位と下位で文様が異なっている。法量は、底径3.4cm、現存高3.4cmで、胎土には繊維・砂粒が含まれる。縄文時代前期の黒浜式に属すると思われる。



第167図 遺構外出土遺物実測図(1)

143・144は、深鉢の底部である。胴部はやや開いて立ち上がったと思われる。143は底径9.6cm、現存高1.6cm、144は同じく8.2cm、2cmを測り、胎土には多量の繊維が含まれる。142と同時期のものと思われる。145は、磨石である。現存長5.1cm、同幅7.5cm、同厚さ5.6cmを測る。重さは280gで、石質は安山岩である。

・ 拓影図掲載遺物 (第168・169図)

第I群 撚糸文が付されるもの (146～178)

原体が判別できる例は、全てR無節の撚糸が用いられている。文様は垂下するものが大部分であるが、155・168では斜行している。157は、原体を回転させずに引きずっており、細い沈線状を呈する。また、口縁部直下から施文する例(146～155)と無文帯を有する例(156～166)がある。このグループは、縄文時代草創期の稻荷台式に属する。

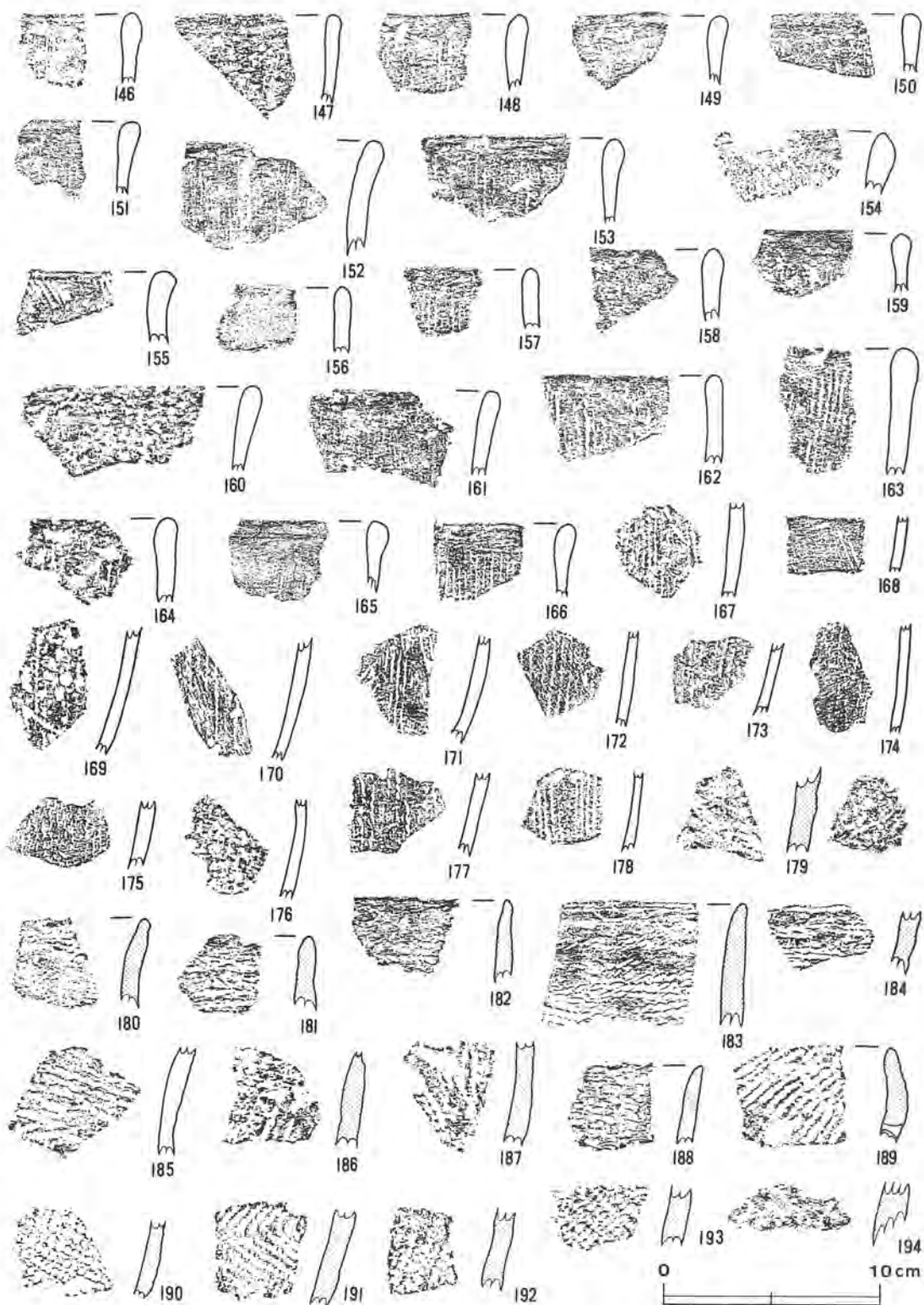
第II群 胎土に繊維を含むもの (179～212)

a類 貝殻条痕が見られるもの (179)

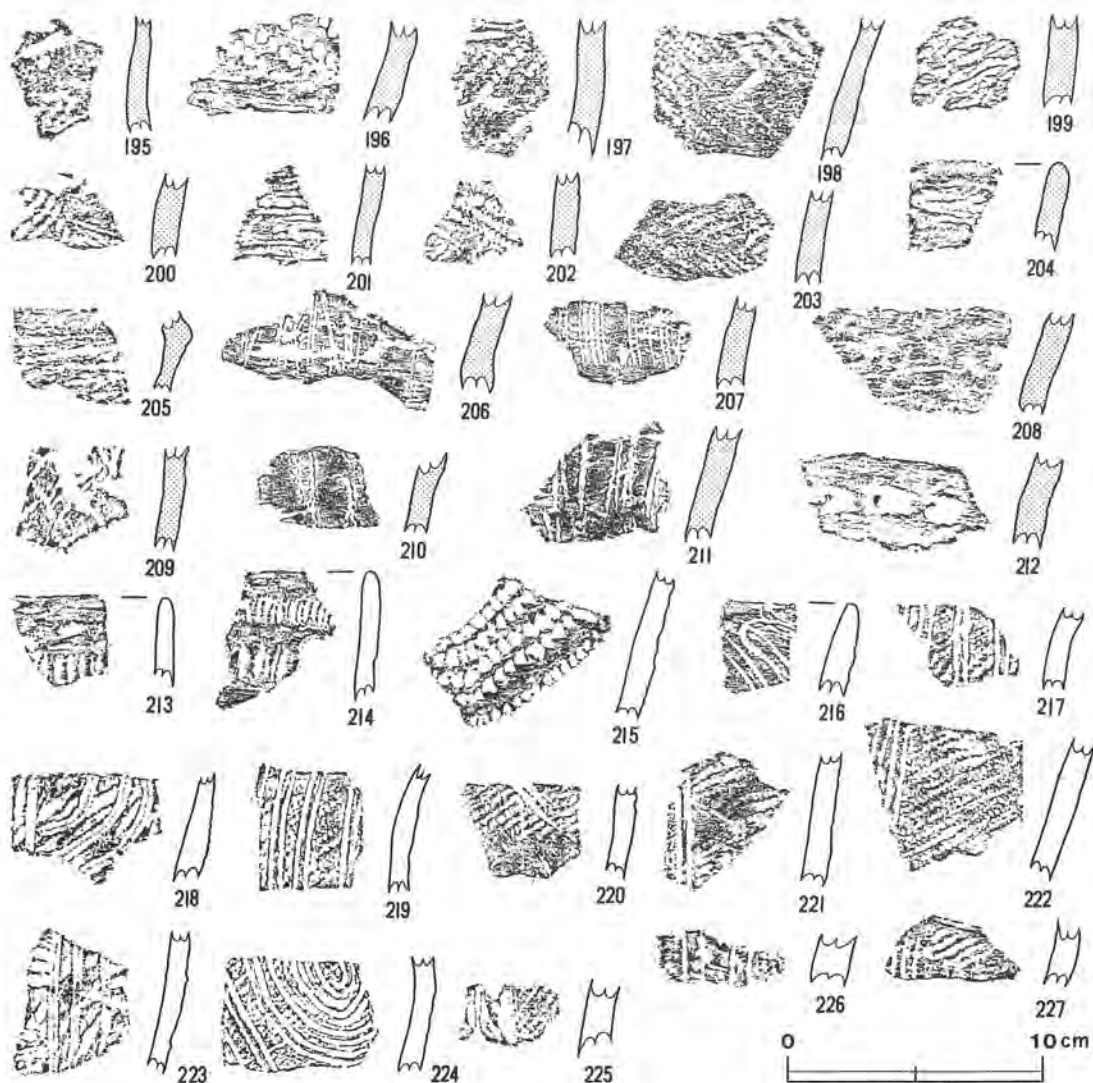
表面が剝離して不鮮明であるが、内外面に貝殻条痕が残る。縄文時代早期末葉と思われる。

b類 縄文が施されるもの (180～203)

180～187は原体押圧、188～203は原体を回転押圧している。191は異種の縄による羽状縄文で



第168图 遺構外出土遺物拓影图(1)



第169図 遺構外出土遺物拓影図(2)

あるが、結束等の有無は不明である。縄文時代前期の黒浜式に属する。

c類 沈線が施されるもの (204~208)

棒状工具による浅い沈線が施されている。縄文時代前期の黒浜式に属する。

d類 貝殻腹縁文が施されるもの (209~211)

アナガラ属の貝殻腹縁が鋸歯状に押圧されている。縄文時代前期の黒浜式に属する。

e類 刺突が施されるもの (212)

太い棒状工具による刺突が、列点状に施されている。縄文時代前期の黒浜式に属する。

第III群 貝殻腹縁文が施されるもの (213・214)

斧足網で肋を有さない貝殻の腹縁文が、横位に連続して施されている。縄文時代前期の浮島

式に属すると思われる。

第IV群 刺突文が施されるもの (215)

所謂三角刺突で、浮島式期特有の文様であり、同期に属する。

第V群 竹管による沈線が施されるもの (216~226)

216は沈線だけ、他は縄文を地文とするもので、225はさらに刻みを有する隆帯が加わる。竹管文は、半載竹管による例が多く、217・218・223のように棒状工具による例もある。縄文時代後期の堀之内式に属する。

第VI群 縄文だけのもの (227)

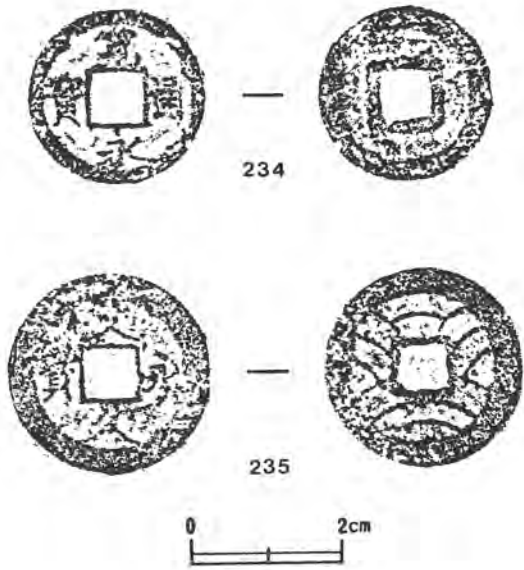
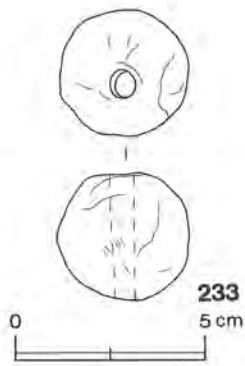
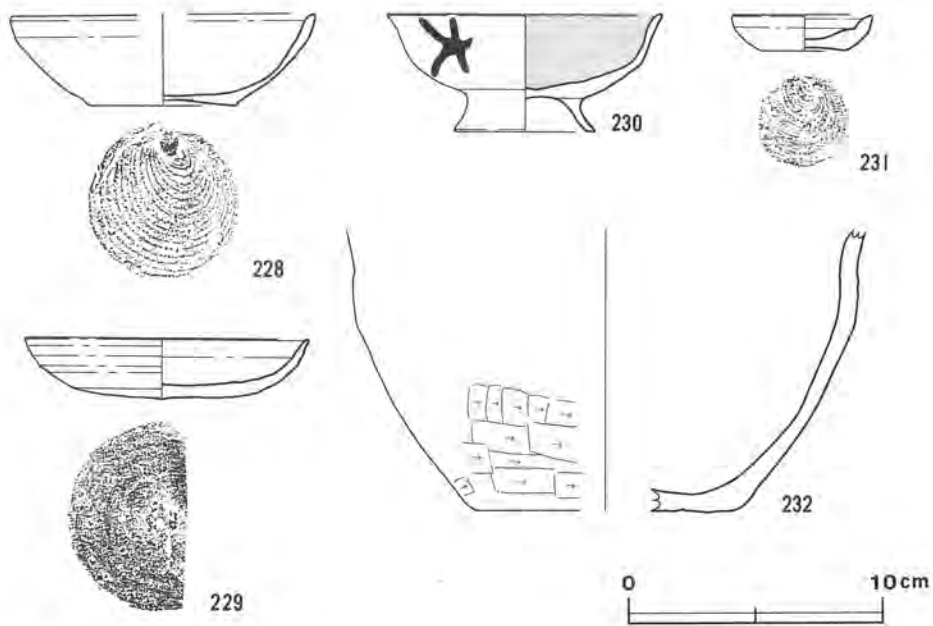
図の左側に沈線状に見える文様は、R無節の原体を押圧したものである。中央付近に見られる縄文は、LR単節を横位に回転させたものである。縄文時代後期と思われる。

(2) その他の遺物 (第170図)

縄文時代を除く時期の遺物を一括した。トレンチやグリッドの試掘、表土除去作業に際して出土した遺物である。ここでは、解説表にまとめた。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
228	坏 土師器	A (11.8)	体部は外傾し、内彎する。口縁は肥厚し、口唇は丸い。外面に黒色付着物。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P118 40% 表土
		B 3.6				
		C 5.8				
229	皿A 土師質土器	A 11.3	底部は丸底状。体部は強く内彎して立ち上がる。外面の稜は極めて強い。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り。	砂粒 橙色 普通	P122 60% 表土
		B 2.4				
		C 7.7				
230	高台付坏 土師器	A 10.9	底部は皿状。体部は強く内彎して腰を持つ。口縁はやや外反する。高台は開き、畳付は平坦。	横ナデ、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P121 80% 確認面 体部外面墨書
		B 4.7				
		D 5.6				
		E 1.7				
231	皿 (かわらけ) 土師質土器	A 5.6	小ぶりで厚手。体部は外傾して立ち上がるが小さい。内面体部下端に凹線が周回。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P120 90% 表土
		B 1.5				
		C 3.5				
232	甕 土師器	B (11.2)	胴部は外傾し、内彎しながら立ち上がる。中ほどがゆがんで凹部をなす。底部木葉痕。	粘土紐巻き上げ、内面上位横ナデ、内面下半及び外面上半ナデ、外面下半手持ちヘラ削り。	長石・雲母 橙色 不良	P119 20% B3 ₆ 表土
		C (10.0)				

図版番号	器種	法量 (cm)			備考
233	球状土錘	高さ 3.4	直径 3.5	重さ 39.0g	DP22 100% 表採
234	寛永通寶	直径 2.33	厚さ 0.1	重さ 2.4g	M1 表土
235	文久永寶	直径 2.67	厚さ 0.15	重さ 3.6g	M2 表採



第170図 遺構外出土遺物実測図(2)

第4節 考 察

1 縄文時代

この時期に該当する遺構は無く、土器269点、石器1点が出土しただけである。出土位置は、A1・A2・B2区に偏っており、特にA2区が多い。

土器は5期に分けることができる。各時期の遺物を量的に比較し、多い方から列挙すると、稲荷台式期→黒浜式期→堀之内式期→浮島式期→広義の芽山式期の順になる。これは、当遺跡の立地する台地上における当時の人々の活動の規模を、ある程度反映したものであろう。調査区内では遺構を検出することができなかったが、付近に集落跡が存在する可能性は否定できない。集落の位置は、遺物の出土量が最も多いA2区の北側を想定するのが妥当であると思われる。

2 古墳時代

この時期に該当する遺構は、住居跡5軒、溝1条、性格不明遺構3基である。これらの遺構は、前期及び後期に分けることができる。

(1) 古墳時代前期（五領式期）

第5号住居跡と第9号住居跡が、この時期に該当する。しかし、出土遺物の特徴から両者には若干の時間的差が認められる。第5号住居跡は前期前半に、第9号住居跡は同後半に位置付けられるものと思われ、少なくとも両者が同時に住居として機能したことは無かったと思われる。

(2) 古墳時代後期（鬼高式期）

第7～10号住居跡、第4号溝、第1～3号性格不明遺構がこの時期に該当する。良好な資料を欠く第10号住居跡を除き、時期差を考えることが可能である。

住居跡は、第8号住居跡が第7号住居跡よりも先行していると思われる。第8号住居跡に伴うものと見られるやや大形の坏（56）と小形甕（57）は鬼高II式の範疇に含められると思われ、第7号住居跡の廃絶後間もなく投棄されたと思われる甕（48）は口縁部の屈曲が少し強くなり、鬼高III式に含まれると考えられるからである。

第4号溝は、平瓶（119）の時期を溝としての機能が保持されていた段階と見ることができるところから、田辺編年によるIII期後半頃に位置付けるのが妥当であると思われる。

3基の性格不明遺構は、明らかに遺構に伴う遺物が無いことから、覆土下層または床面直上から出土し、最も遺構の時期に近いと思われる遺物（1号-121、2号-123、3号-137）を手懸かりに考えることとする。121は第2号性格不明遺構の覆土から出土した破片が接合されていること

から、第1号性格不明遺構が廃絶された直後の段階では第2号性格不明遺構はまだ埋没途中であったことがわかる。つまり、第1号性格不明遺構は第2号性格不明遺構の直後に位置付けられる。一方、137は鬼高Ⅲ式に位置付けられると思われ、時期的には123と大差が無いと考えられる。このことから、第3号性格不明遺構は第2号性格不明遺構と時期的に大きく隔たっていないと判断される。しかし、121はその器形から鬼高式の範疇には含められず、第3号性格不明遺構とは時期的な隔たりが感じられる。従って、これらの遺構が順次造られたとすれば、第3号性格不明遺構が最も古く、第1号性格不明遺構が最も新しいことになる。

以上の結果は、異なる器種によって比較したもので、断定することはできない。この時期の遺構の中では、第8号住居跡が最も古く、第1号性格不明遺構が最も新しいことは確実であるが、第7号住居跡と第3号性格不明遺構が平行して存在したか、それとも若干の時間的なズレがあったかということについては、結論付けることは困難である。

3 奈良・平安時代

第1～3・6・12・14・15号住居跡及び第1号土坑がこの時期に該当する。これらの遺構は平行して存在したものではなかったと思われ、出土遺物を見ても遺構間に時期差が存在することが感じられる。しかし、相互の比較検討を行うには手懸かりとなる資料が乏しく、ここでは部分的なものに留めざるを得ない。

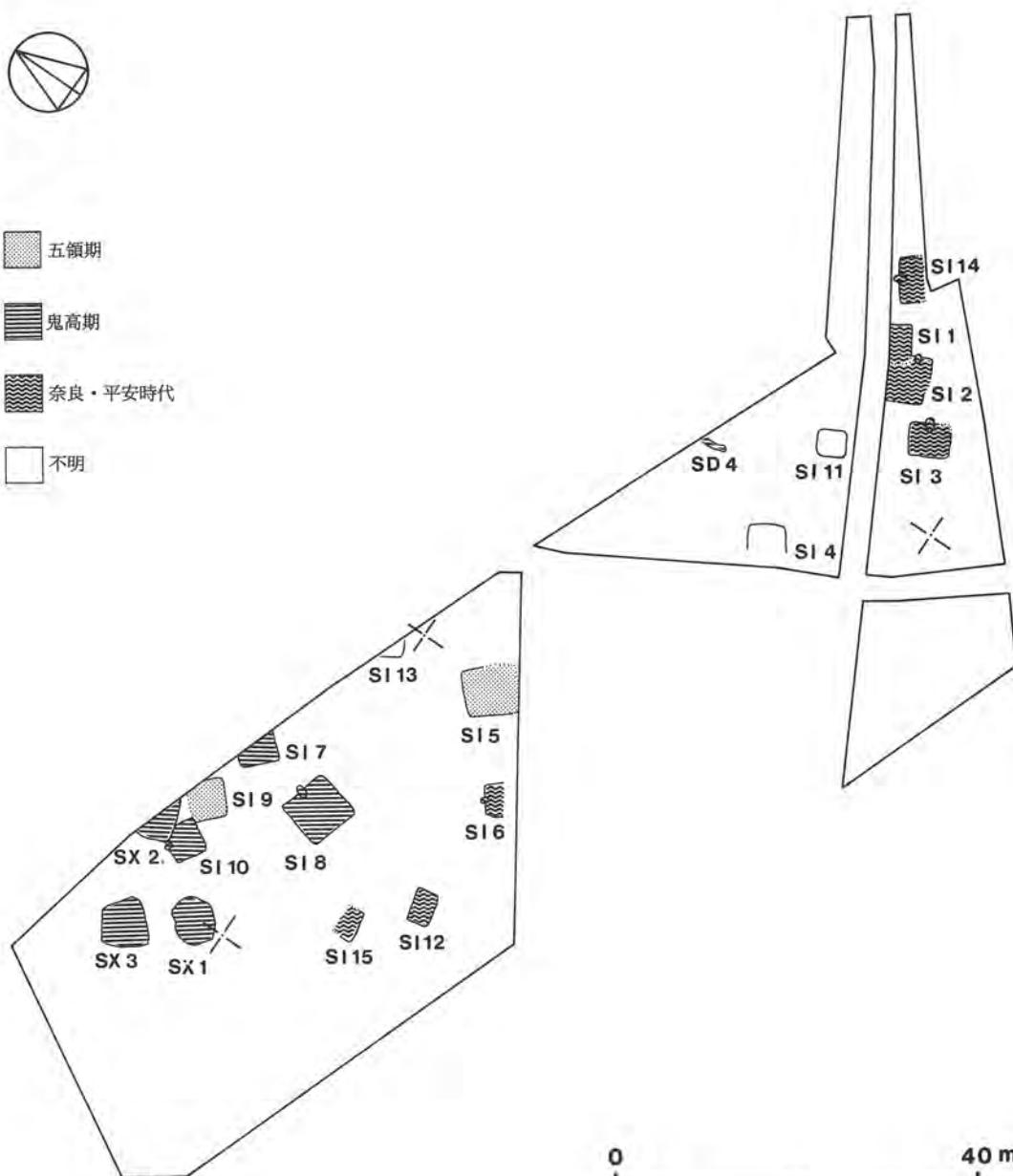
(1) 該期の上限と下限

上限は、律令制に基づく生産システムが有効に機能した時期であり、須恵器を手懸かりとするのが妥当である。遺構本文中に記載した時期決定に結び付き得る資料の中で、該当するのは第6号住居跡から出土した盤(39)だけである。この盤は、器形的特徴から8世紀後半から9世紀初頭にかけてのものと考えられ、一緒に出土した土師器甕(46)も同時期の特徴を有していることから、上限については特に問題は無いと思われる。

下限は、第15号住居跡出土の羽釜(98)をもとに考えたい。茨城県域において羽釜が生産された時期については、出土例が少ないこともあってまだ解明されていない。しかし、当時の関東の各地域が似たような状況下にあったと思われることから、10世紀中頃には生産が開始されていたと考えられる。98は酸化焰焼成で水平に長く張り出した鏝を有する等の特徴から、11世紀の中頃を想定するのが妥当であると思われる。



-  五領期
-  鬼高期
-  奈良・平安時代
-  不明



第171図 時期別遺構配置図

4 性格不明遺構について

二段掘り込みの大規模な土坑は、西郷遺跡（本書第4章）のほか、近県においても類例が見られ、当遺跡のように平面形が長方形を呈する例と、他の多くの類例のように円形を呈する例がある。出土遺物による検討は、すでに本章第4節第2項「古墳時代」で実施しているので、ここでは遺構の形態から推定できることを列挙した。

- ・ 二段掘り込み

三基とも二段に掘り込まれていることから、明らかに意図的なものと判断される。また、底面は全て常総粘土層中に達していることから、常総粘土層そのものまたはそこで何らかのものを得るために掘られたことがわかる。そこで、底面に設けられた段は、そこで人間が何らかの作業を行うために設けられたスペースと考えることができる。

- ・ ピット

第3号性格不明遺構を除いて、底面（段の部分）にピットが検出された。第1号性格不明遺構では底面のコーナー付近に位置しており、上屋を有していたことが推定できる。第3号性格不明遺構ではピットは検出されなかったものの、覆土最下層に焼土・炭化材を多量に含む層が認められることから、本来は上屋を有し、その火災に伴なって焼土・炭化材を生じたと考えられる。また、ピットの一部は内部への出入りに使用された梯子の固定用であると思われる。

第6章 長峰遺跡

第1節 遺跡の概要

1 地形概観

長峰遺跡は、土浦市右舳字長峰に所在する。調査の対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス予定地内の同所1134番地の1外8筆、3218㎡である。

土浦六中が建つ舌状台地は、花室川右岸の河口から2.5km程上流に位置する。この台地の基部は右舳神社の東約150mに位置し、250m程東北東へ延びた地点からほぼ真北に向きを変え、さらに700m程延びて花室川に臨んでいる。台地面は平坦で、平地林・畑地及び住宅地に利用されている。

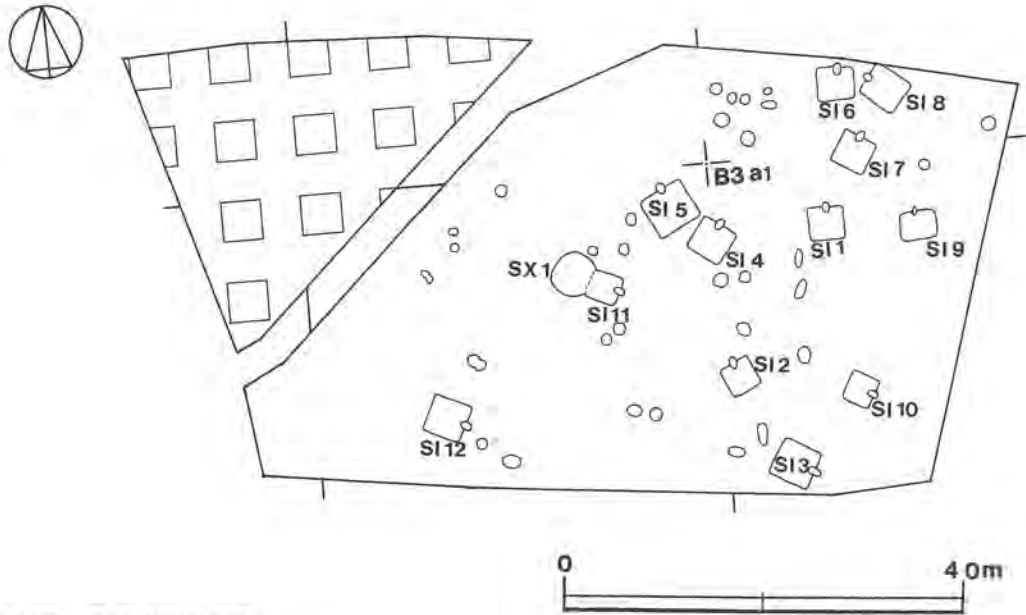
当遺跡は、この屈曲部に位置している。調査区は、西半分が台地上の平坦面、東半分が緩斜面になっている。また、北西端は高さ4m内外の急崖になっている。当遺跡付近の台地面の標高は25m前後を測り、東側の低地面との比高は13m前後である。調査区の土地利用状況は、全体の60%程が山林で、残りは畑地であった。



第172図 長峰遺跡周辺地形図

2 検出遺構

当遺跡から検出された遺構は、住居跡12軒、土坑36基、性格不明遺構1基である。これらの遺構は、台地の中央部から東側の斜面にかけて分布している。



第173図 長峰遺跡全体図

住居跡の時期は、古墳時代後期頃が1軒、平安時代が11軒で、形態や遺物からさらに細分することが

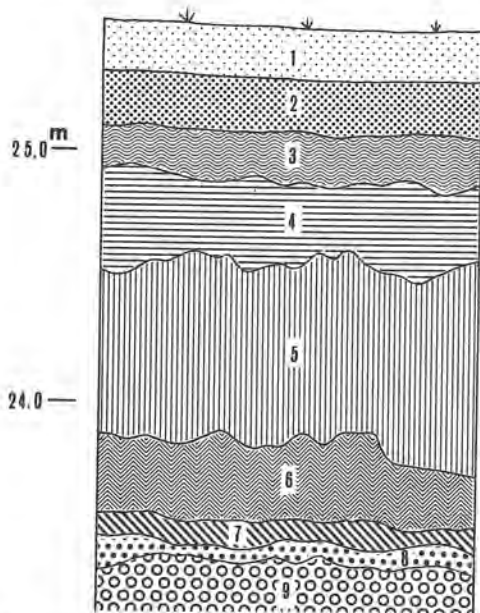
とができる。

なお、各遺構からの出土遺物は、遺構毎に掲載した。

第2節 基本層序

第174図は、長峰遺跡の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、調査区で最も標高が高い地点とし、北寄りのA2 i。区を選定した。

1層は表土（腐植土）で、2層はかつての耕作土と思われる。第3層は漸移層、第4層はソフトローム層である。5・6層は、ハードローム層で、色調によっ



第174図 長峰遺跡土層柱状図

て、分けることができた。7・8層は、ハードロームから粘土への漸移層である。7層よりも8層の方が粘土を多く含んでいる。9層は常総粘土層である。

当遺跡では3層上面を遺構確認面としてとらえた。

第3節 遺構と遺物

1 住居跡

先述したように、当遺跡から検出された住居跡は12軒である。これらは、台地中央部から東側斜面にかけて分布している。ここでは、各住居跡毎に遺構・遺物を解説することとする。

第1号住居跡（第176図）

位置 B3b₃区を中心に所在し、調査区の中央から東寄りに位置する。

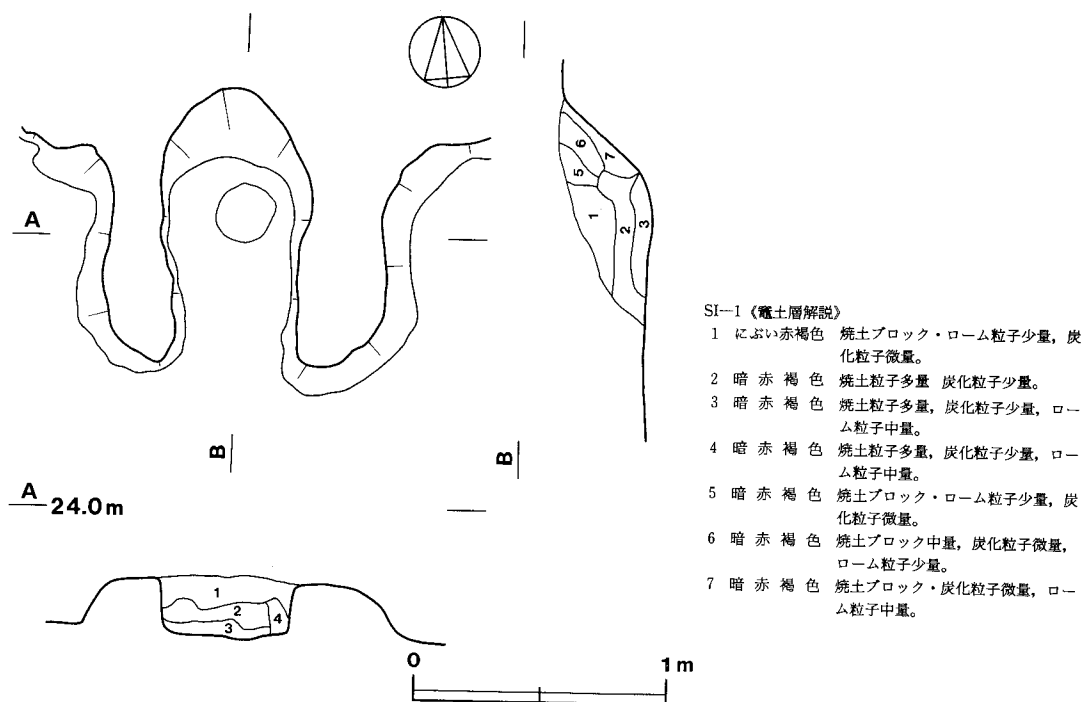
規模と平面形 4.45×4.03mの比較的整った方形状を呈する。

主軸方向 N-9°-E

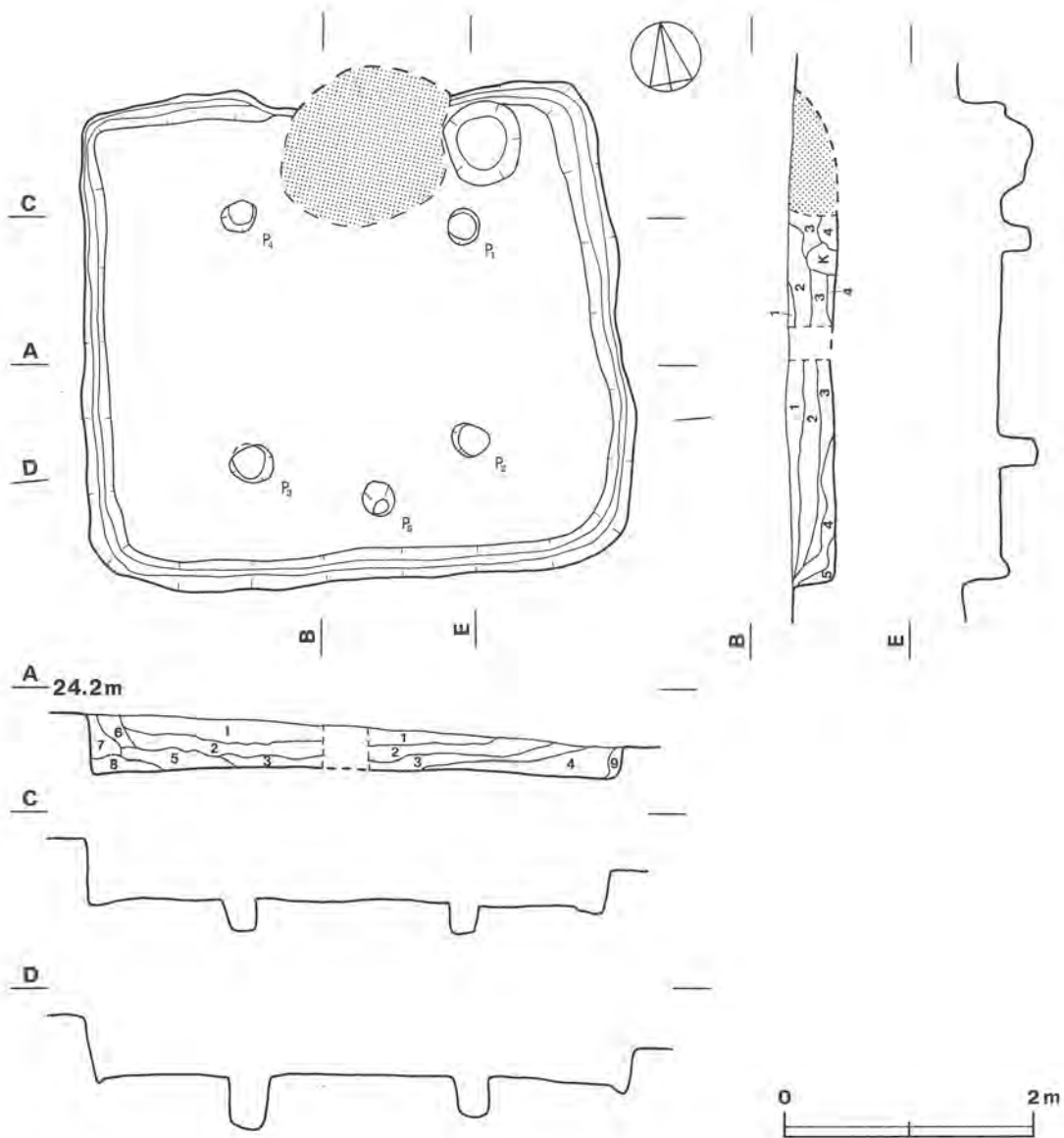
壁 高さ50cm前後を測り、垂直またはやや外傾して立ち上がっている。

壁溝 幅20～30cm、深さ5cm前後で、全体に周回する。

床 ロームで、平坦である。硬く踏み固められている。



第175図 第1号住居跡竈実測図



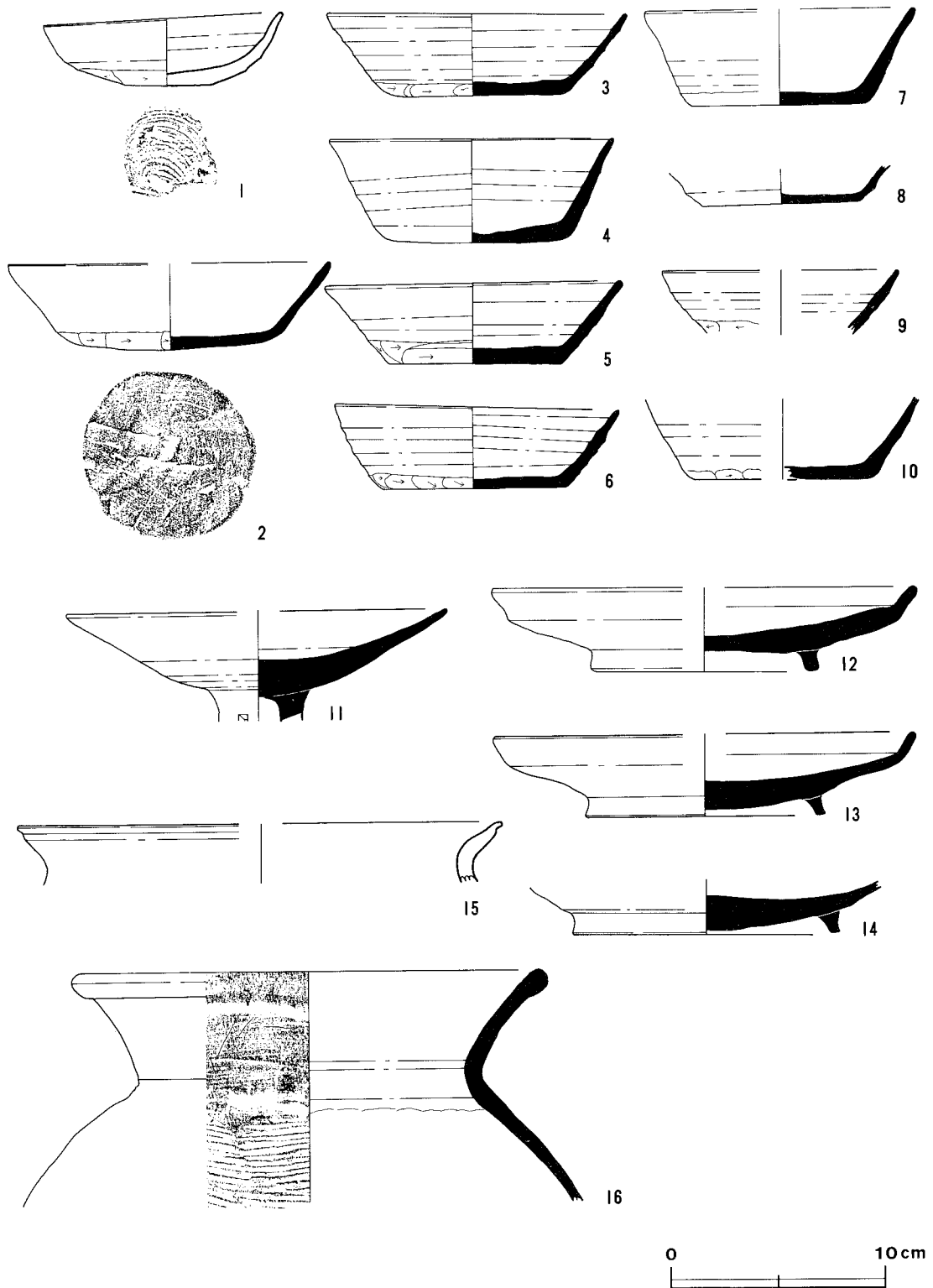
SI-1《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 4 褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量，ローム粒子多量。

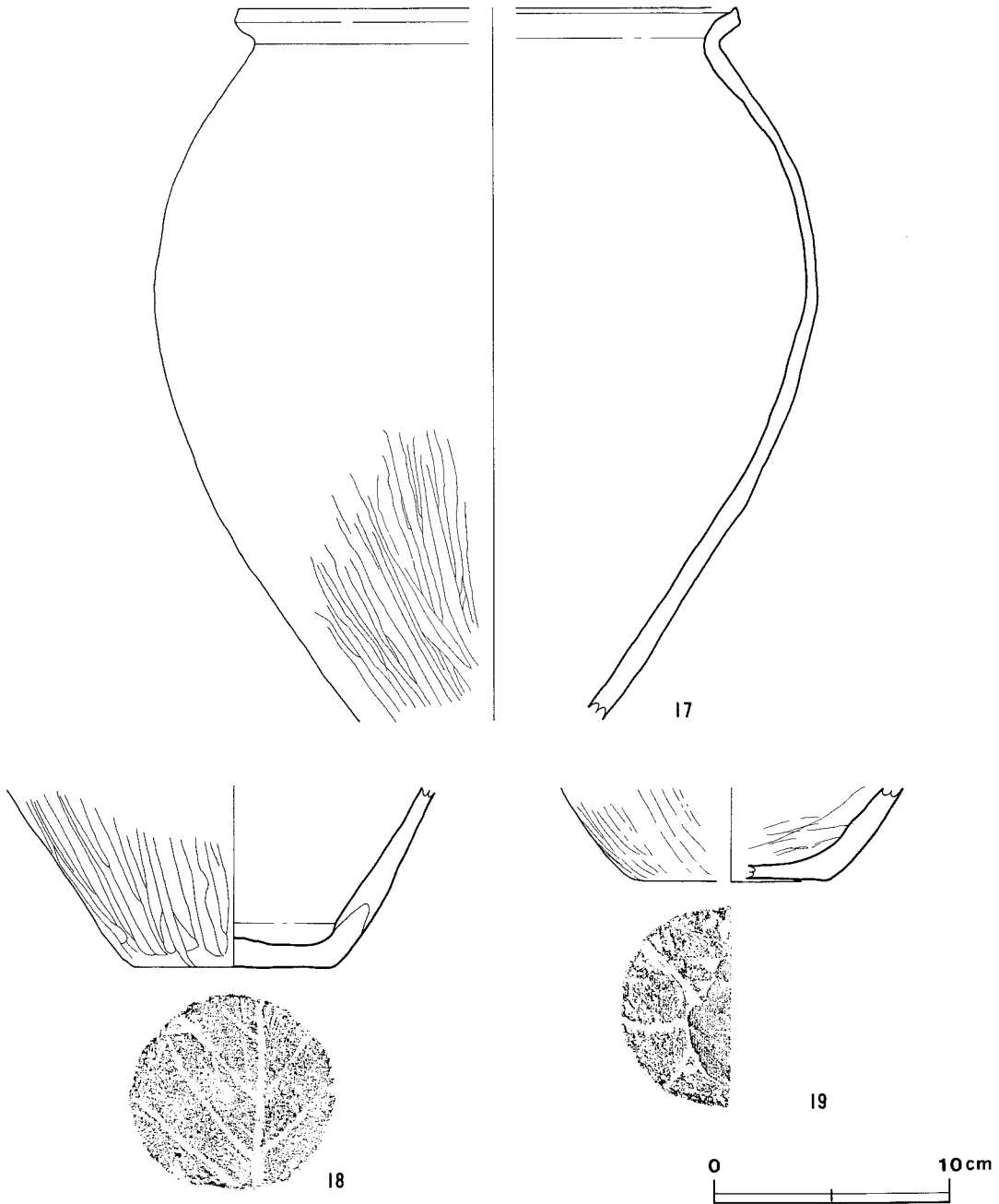
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

第176図 第1号住居跡実測図

ピット 5か所を検出した。P₁～P₄は主柱穴と思われる。平面形は直径30cm前後の円形状を呈し、深さは24～44cmを測る。P₅は出入口に伴う梯子ピットと思われ、直径27cmの円形状を呈し、深さ53cmを測る。



第177图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第178図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

貯蔵穴 竈東側の壁際に設置されている。69×63cmの円形状を呈し、深さは26cmを測る。底面は壁側が深い。

竈 北壁中央に付設されていた。長さ115cm、幅134cmを測り、住居跡の壁を15cmほど掘り込んでいる。袖部は砂質粘土で構築され、左右とも100cm前後の長さを有する。火床は床面とほぼ同じ高

さであるが、やや奥には深さ3cm程の皿状の凹みがあった。

覆土 褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 須恵器が多く、土師器が少ない。2・6・11・13・16・17は、竈とその前方をとり巻くような状態で出土している。他は、主に住居跡南側の覆土から出土している。特に4・5は南壁近くの覆土上層から重なって出土し、本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
1	坏 土師器	A 11.0	体部は外傾し、強く内彎する。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後、体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P19 100% 覆土上層	
		B 3.3	体部下位に水挽き時の凹線があり、上位はシャープな稜をなす。				
		C 4.0					
2	坏 須恵器	A (15.0)	底部は中央がやや下がり丸底状を呈する。体部は外傾し、外反しながら立ち上がる。	横ナデ、底部及び体部下端粗い手持ちヘラ削り。	長石・石英・砂粒 灰白色 やや不良	P5 60% 床面直上	
		B 4.1					
		C 7.8					
3	坏 須恵器	A 13.9	底部は平底。体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口唇は丸くおさめる。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後、底部全面と体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 良	P4 80% 覆土最下層	
		B 4.0					
		C 7.5					
4	坏 須恵器	A 13.1	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁はやや外反する。底部周縁と体部下端は肥厚する。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後ヘラナデ。	礫・長石・バミス 灰白色 不良	P3 90% 覆土上層	
		B 4.8					
		C 8.2					
5	坏 須恵器	A 13.7	体部は強く外傾し、直線的に開く。器肉はやや肥厚し、口唇は丸い。内外面とも稜が顕著。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後、底部全面と体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 紫灰色 良	P2 95% 覆土上層	
		B 3.9					
		C 8.0					
6	坏 須恵器	A 13.1	体部は外傾し、内彎気味に立ち上がる。内外面とも稜が顕著。口唇内側は磨滅。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後、底部全面と体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 暗青灰色 良	P1 95% 竈左側床面直上	
		B 4.1					
		C 8.1					
7	坏 須恵器	A (12.5)	体部は外傾し、内彎気味に立ち上がる。中ほどで外反し、口唇は丸い。体部下端磨滅。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後、全面に手持ちヘラ削り。	長石・石英 黄灰色 普通	P6 50% 覆土	
		B 4.5					
		C 8.3					
8	坏 須恵器	B [1.6]	底部は平底。体部は外傾し、やや内彎して立ち上がってから外反する。	横ナデ、底部全面に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 普通	P9 10% 覆土	
		C (7.4)					
9	坏 須恵器	A (11.2)	体部は外傾し、やや内彎する。口縁は器厚を減じ、口唇は丸くおさめる。	横ナデ、体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 褐灰色 良	P8 10% 覆土	
		B [3.0]					
10	坏 須恵器	B [3.9]	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。中ほどは内彎し、器厚も減少する。体部下端は磨滅。	横ナデ、底部全面と体部下端に手持ちヘラ削り。	石英・雲母 灰白色 不良	P7 30% 覆土	
		C (8.4)					
11	高坏 須恵器	A (18.0)	坏部は強く外傾して直線的に開き、口唇は丸い。脚部にはヘラで透し窓が穿たれる。	横ナデ、脚部接合。	長石・石英 紫灰色 良	P13 25% 床面直上	
		B [5.2]					

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
12	盤 須恵器	A (19.7) B 4.1 D (10.0) E 1.1	底部は外縁が緩やかに高くなる。体部は外傾し、外反する。高台はやや開く。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合。	長石・石英 灰色 普通	P10 60% 覆土
13	盤 須恵器	A (19.6) B 3.9 D 11.2 E 1.0	底部は高台内が肥厚して下がる。体部は外傾し、直線的に開く。高台は開く。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合。	石英 黄灰色 普通	P11 50% 床面直上
14	盤 須恵器	B [2.3] D 12.6 E 1.0	底部は高台内が肥厚し、外縁は薄い。高台は開き、畳付は平坦。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P12 45% 覆土
15	甕 土師器	A (22.6) B [2.9]	強く外反する頸部から、口唇部がつまみ上げられてさらに強く外反する。	粘土紐巻き上げ、横ナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P16 5% 覆土上層
16	甕 須恵器	A 21.6 B [10.9]	頸部は「く」の字状に外反し、口縁は折り返して丸味を持たせる。胴部外面に平行線叩き目	粘土紐巻き上げ、胴部叩き、頸部内外面横ナデ。	雲母・砂粒 灰白色 良	P14 40% 床面直上
17	甕 土師器	A (21.4) B [30.6]	胴部は上位が張る。頸部は「く」の字状に外反し、口唇部のつまみ上げは小さい。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、頸部内外面横ナデ、胴部下半縦位ヘラ磨き。	長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P15 70% 甕右床面直上
18	甕 土師器	B [7.7] C 8.4	胴部は外傾し、直線的に外上方へ開く。内面底部周縁は凹線状を呈する。底部は木葉痕。	粘土紐巻き上げ、内面ヘラナデ、外面縦位ヘラ磨き。	雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P17 20% 覆土
19	甕 土師器	B [4.0] C 8.1	胴部は強く外傾し、やや内彎しながら外上方へ開く。底部は木葉痕。	粘土紐巻き上げ、内面ヘラナデ、外面縦位ヘラ磨き。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P18 5% 覆土下層

第2号住居跡（第179図）

位置 B3f₁を中心に所在し、第1号住居跡の南々西約13mに位置する。

規模と平面形 3.25×3.05mの不整形を呈する。

主軸方向 N-18°-W

壁 高さ50cm前後を測り、やや外傾して立ち上がっている。

床 南壁中央付近で段状を呈するが、他は平坦である。中央付近は硬く踏み固められている。

ピット 検出されなかった。

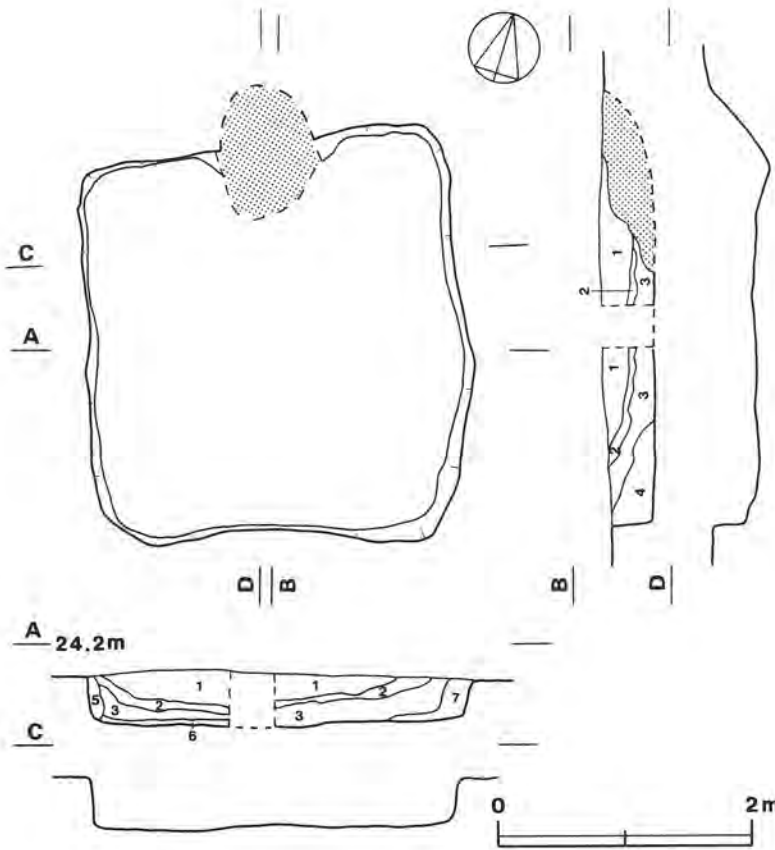
竈 北壁中央に付設されている。長さ110cm前後、幅100cm前後を測り、住居跡の壁を45cm程掘り込んでいる。遺存状態は悪い。袖部は砂質粘土で構築されていたが、崩れて規模等は不明である。

火床は、ロームを15cm程皿状に掘り凹めており、火熱によって焼土化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

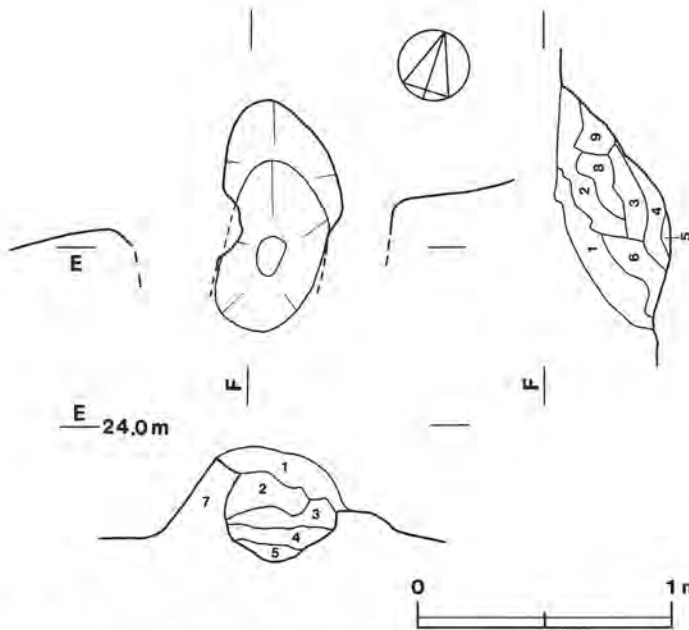
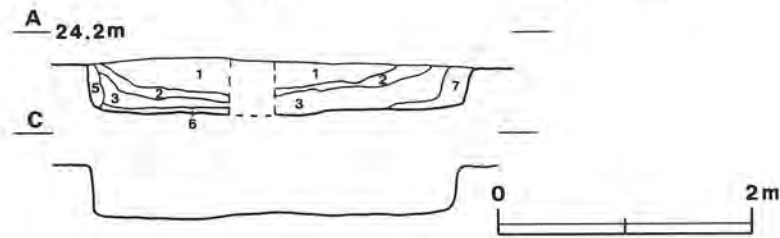
遺物 遺物は極めて少なく、住居跡中央からやや東へ寄った床面直上から、須恵器坏1点(20)が出土しただけである。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。



SI-2《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子極く少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子少量。
- 5 褐色 ローム粒子極く少量。
- 6 褐色 ロームブロック多量。
- 7 褐色 ローム粒子少量。



SI-2《竪土層解説》

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子多量, 砂質粘土微量。
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子・砂質粘土微量, ローム粒子中量。
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量。
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量。
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子中量。
- 6 赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子中量。
- 7 褐色 ローム粒子多量, 砂質粘土中量。
- 8 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・砂質粘土微量。
- 9 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子中量, 砂質粘土微量。

第179図 第2号住居跡・竪実測図



第180図 第2号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
20	須恵器	A 13.1	底部は平底。体部は外傾し、やや内彎気味に立ち上がり、口縁	横ナデ、底部回転ヘラ切り後、	長石・石英(多)	P20 95% 床面直上
		B 4.2	まで直線的に開く。口唇は丸い。	底部全面と体部下端に手持ちヘラ	紫灰色	
		C 7.8		ラ削り。	良	

第3号住居跡 (第181図)

位置 B3h₂区を中心に所在し、第2号住居跡の南東約6mに位置する。

規模と平面形 4.7×3.95mの長方形状を呈する。

主軸方向 N—117°—E

壁 高さ20～30cmを測り、外傾して立ち上がっている。

壁溝 幅20～30cm、深さ5～10cmで、南東壁下を除いて周回する。溝と壁の間には、幅10cm前後の平坦な部分がある。北東壁下の溝内に2か所、西コーナーの溝内に1か所のピットがある。

床 ロームで、全体に軟弱である。東に向かってなだらかに傾斜している。

ピット 5か所を検出した。P₁は38×33cmの楕円形状を呈し、深さは26cmを測る。P₂は28×22cmの楕円形状を呈し、深さは40cmを測る。P₃～P₅は壁柱穴で、長径20～30cm、短径15～20cmの楕円形状を呈し、深さは20～25cmを測る。

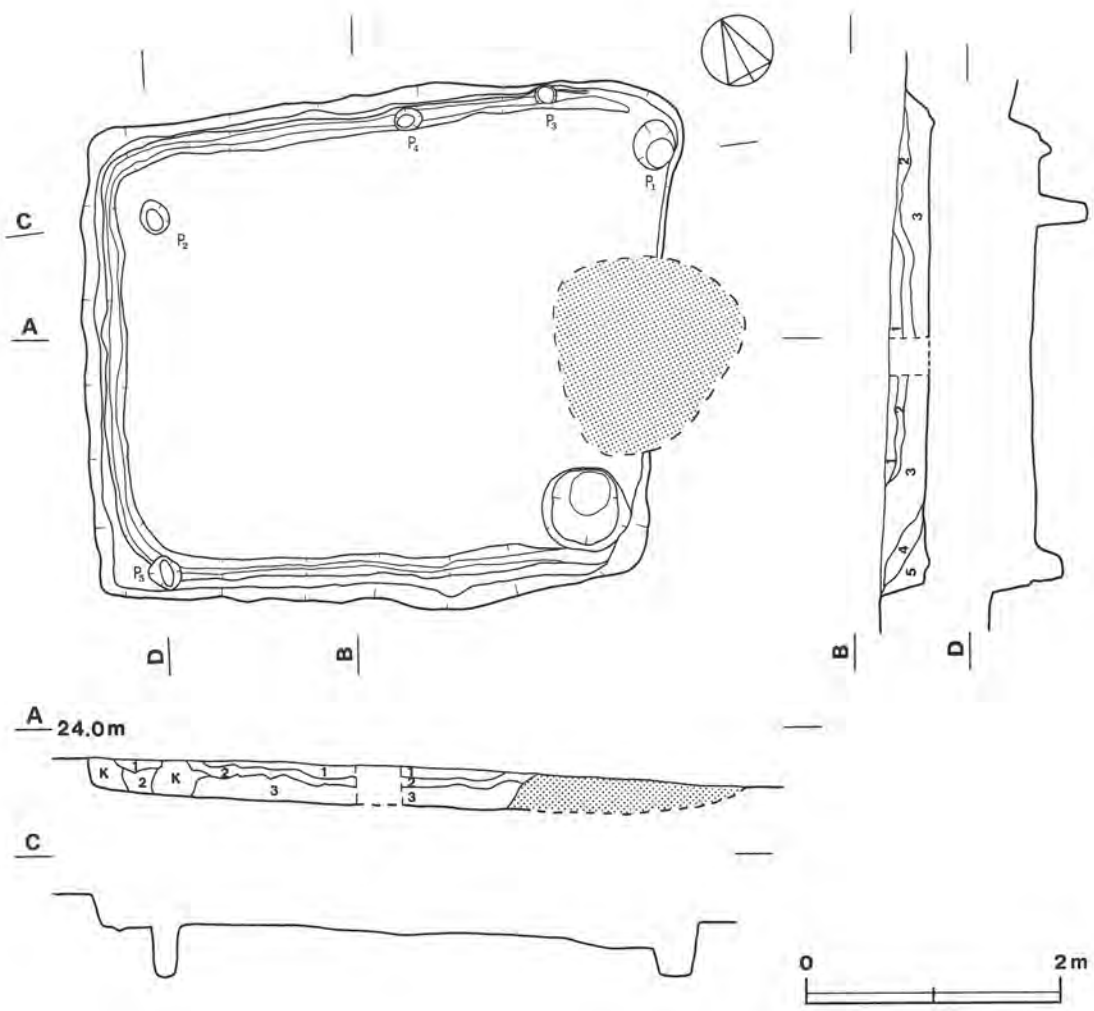
貯蔵穴 竈右側の南コーナーに設置されている。70×68cmの円形状を呈し、深さは32cmを測る。底面は段状で、竈側が深い。

竈 南東壁中央に付設されていた。長さ150cm、幅180cmを測り、住居跡の壁を65cm程掘り込んでいる。天井部と袖上半が崩れており、遺存状態はあまり良くない。袖部は砂質粘土で構築され、左袖は約90cm、右袖は約70cmの長さを有する。火床は、ロームを5cm程皿状に掘り凹めている。

覆土 褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器が主である。21～23・25・26・30・32は床面直上から出土し、21・22・25は北東壁際、23・30・32は南西壁際、26は住居跡中央から出土している。一方、24・27・29は竈内から出土している。

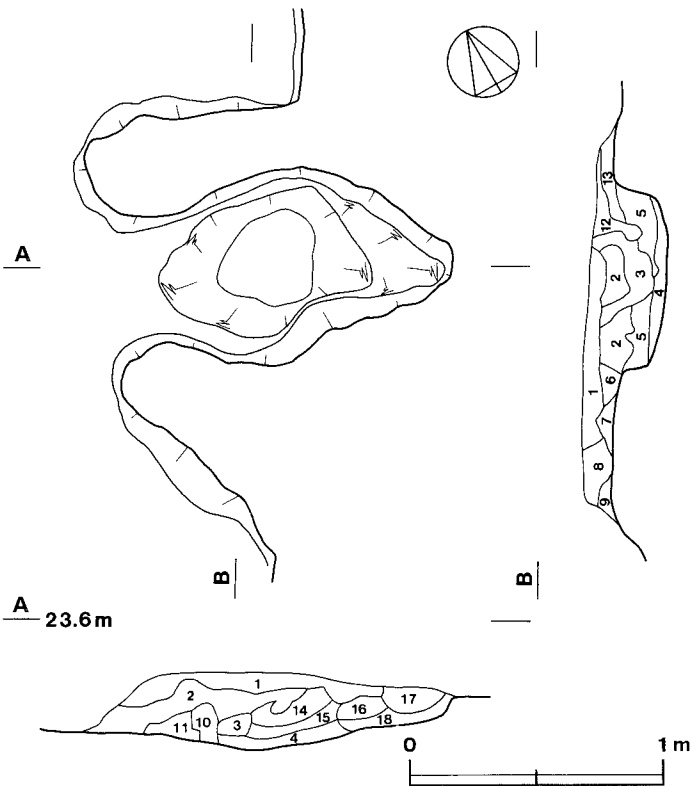
所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。



SI-3 土層解説

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。 | 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。 | 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| | 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。 |

第181図 第3号住居跡実測図

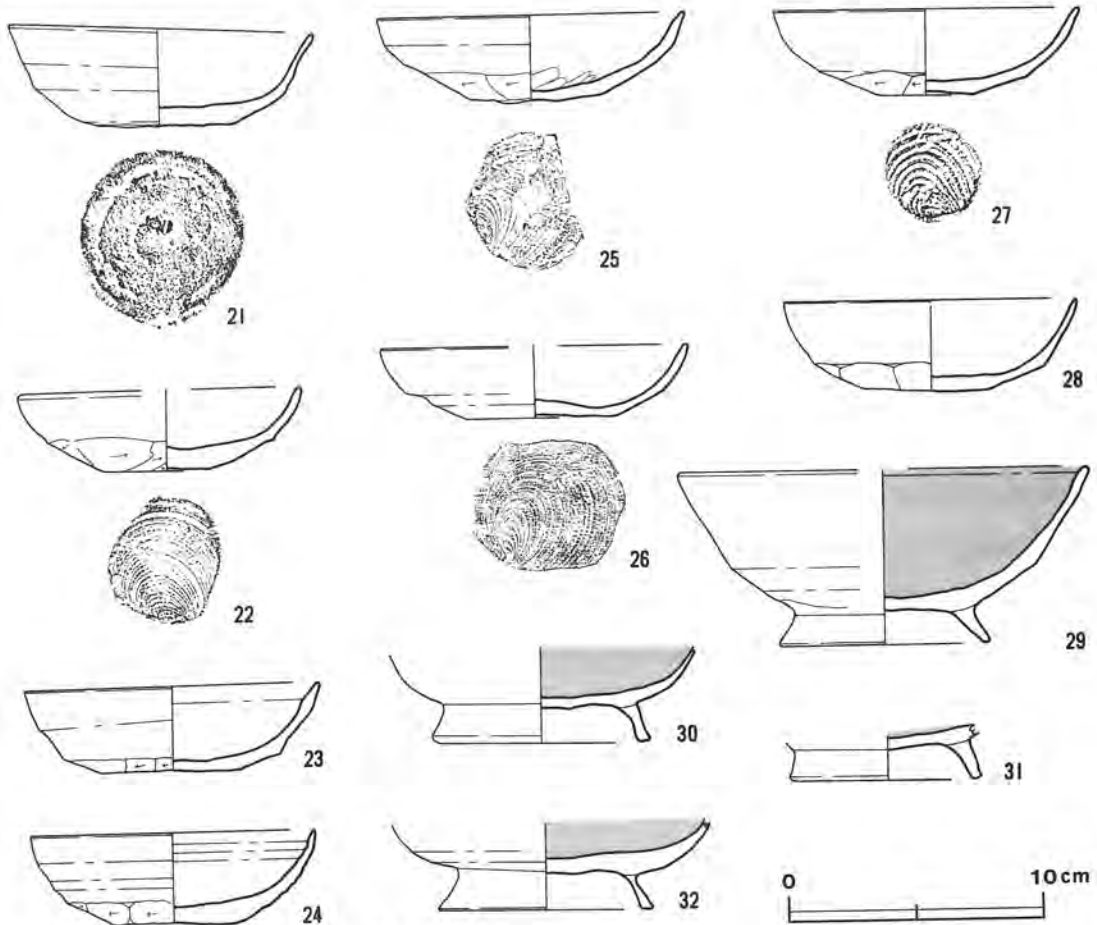


SI-3《竈土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量。
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量。
- 3 褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量。
- 4 暗褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量。
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 10 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 11 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 12 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 13 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 14 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量。
- 15 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量。
- 16 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。
- 17 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子中量。
- 18 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

第182図 第3号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	土師器	A 12.0	体部は外傾して開く。中ほどで強く内彎して腰を持つ。口縁は軽く外反する。	水挽き，横ナデ，底部回転ヘラ切り。	雲母・パミス	P25 65% 覆土
		B 4.1			橙色	
		C 5.7			普通	
22	土師器	A (11.1)	体部は強く外傾して立ち上がり，中ほどから強く内彎する。底部は器肉が肥厚する。	水挽き，横ナデ，底部回転系切り後体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り。	長石・雲母	P28 45% 覆土下層
		B 3.3			黄橙色	
		C 4.1			普通	
23	土師器	A 11.6	体部は強く外傾し，中ほどから強く内彎する。体部下半は水挽き時の凹帯が残る。	水挽き，横ナデ，底部回転系切り後体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り。	砂粒	P23 80% 床面直上
		B 3.4			橙色	
		C 5.5			普通	
24	土師器	A 11.2	体部は外傾し，なめらかなカーブを描いて内彎する。体部外面下位に明瞭な稜。	水挽き，横ナデ，底部回転系切り後体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り。	雲母・石英	P21 80% 竈下層
		B 3.7			浅黄橙色	
		C 4.9			やや不良	
25	土師器	A 12.0	体部は外傾し，内彎する。口縁下位に稜。底部は下位に少し突き出す。	水挽き，横ナデ，底部回転系切り後体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り，見込み指ナデ。	砂粒	P27 50% 床面直上
		B 3.5			橙色	
		C 5.1			普通	
26	土師器	A (12.0)	体部は外傾し，内彎して立ち上がる。体部下位には水挽き時の凹帯を残す。	水挽き，横ナデ，底部回転系切り後体部下端に粗い手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒	P26 60% 床面直上
		B 2.9			橙色	
		C 5.4			普通	
27	土師器	A 12.1	体部は外傾し，内彎して立ち上がる。体部外面下位に水挽き時の凹帯が残る。	水挽き，横ナデ，底部回転系切り後体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り。	長石・雲母	P22 80% 竈下層
		B 3.4			橙色	
		C 3.1			普通	



第183図 第3号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
28	坏 土師器	A 11.5	体部は外傾し、なめらかなカーブを描いて内彎する。器内は全体に薄い。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り。	砂粒 浅黄色 不良	P24 70% 覆下層
		B 3.7				
		C 4.9				
29	高台付坏 土師器	A 16.1	体部は外傾し、ゆるやかに内彎する。体部の中ほどに稜を持つ。高台はやや高目で開く。	横ナデ、底部回転糸切り、高台脇回転ヘラ削り、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 浅黄褐色 普通	P29 35% 覆土
		B 7.0				
		D 8.3				
		E 1.6				
30	高台付坏 土師器	B [3.8]	体部は強く内彎して立ち上がる。高台はやや高目で畳付は丸味を有する。	横ナデ、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母・長石 明黄褐色 普通	P31 20% 床面直上
		D 8.2				
		E 1.5				
31	高台付坏 土師器	B [2.2]	底部は見込みがやや下がる。高台は高目でやや開き、畳付は丸味を有する。	横ナデ、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	長石・雲母 橙色 普通	P32 20% 覆土
		D (7.0)				
		E 1.5				
32	高台付坏 土師器	B 3.4	体部は外傾し、強く内彎する。高台は高目で開き、畳付は平坦。	横ナデ、高台接合、高台脇回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母・長石 にぶい橙色 普通	P30 25% 床面直上
		D 8.5				
		E 1.3				

第4号住居跡（第184図）

位置 B2b₀区を中心に所在し、第1号住居跡の西約6mに位置する。

規模と平面形 3.65×3.4mの方形状を呈する。

主軸方向 N-32°-E

壁 高さ10cm前後を測り、外傾して立ち上がっている。

壁溝 幅は15～20cm、深さ5～10cmで、周回している。

床 ロームで、やや起伏がある。中央は硬く踏み固められている。

ピット 6か所を検出した。いずれも長径30cm前後、短径20cm前後の楕円形状を呈する。深さはP。が15cmと浅いが、他は40cm前後を測り、深い。

貯蔵穴 南コーナーに設置されている。長径約70cm、短径約60cmの楕円形状を呈し、深さは15cmを測る。底面は皿状で、壁もなだらかに傾斜して立ち上がっている。

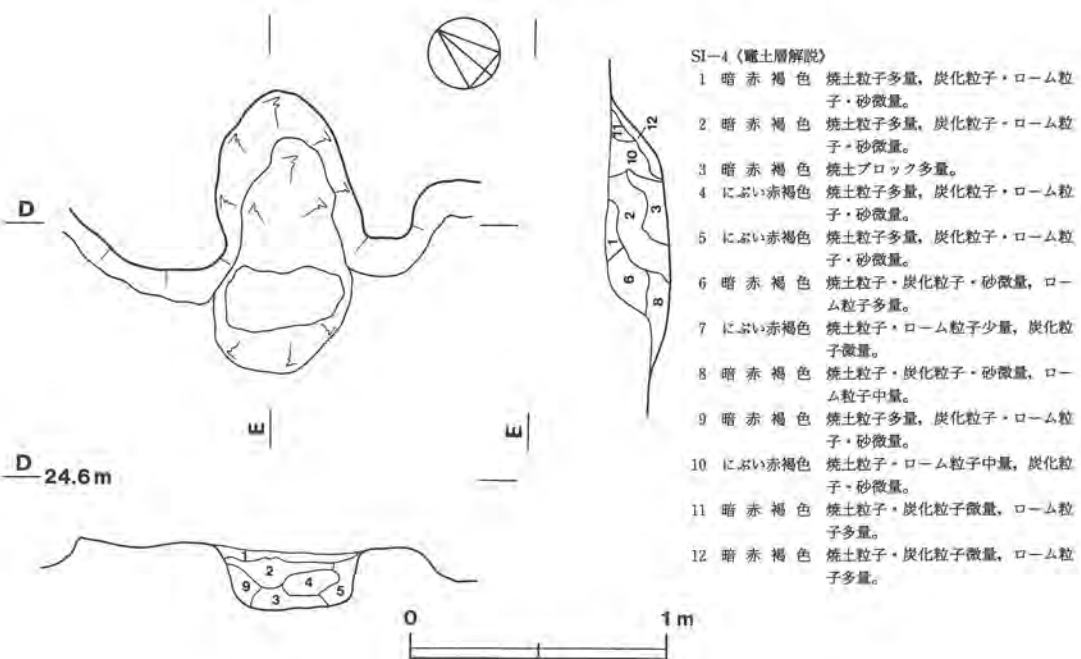
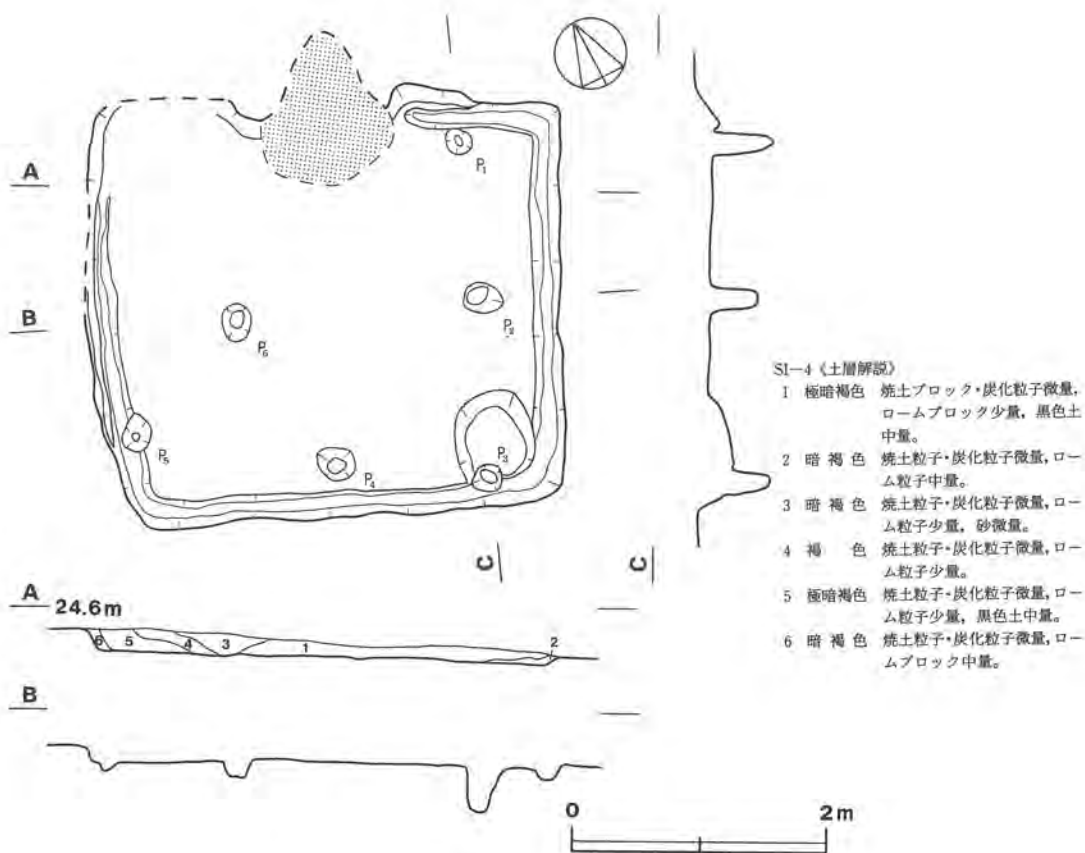
竈 北東壁中央に付設されている。長さ約110cm、幅約100cmを測り、住居跡の壁を50cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く、袖部は砂質粘土で構築されたと思われるが、崩れており、規模は不明である。火床は、ロームを10cm程皿状に掘り凹めている。

覆土 褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

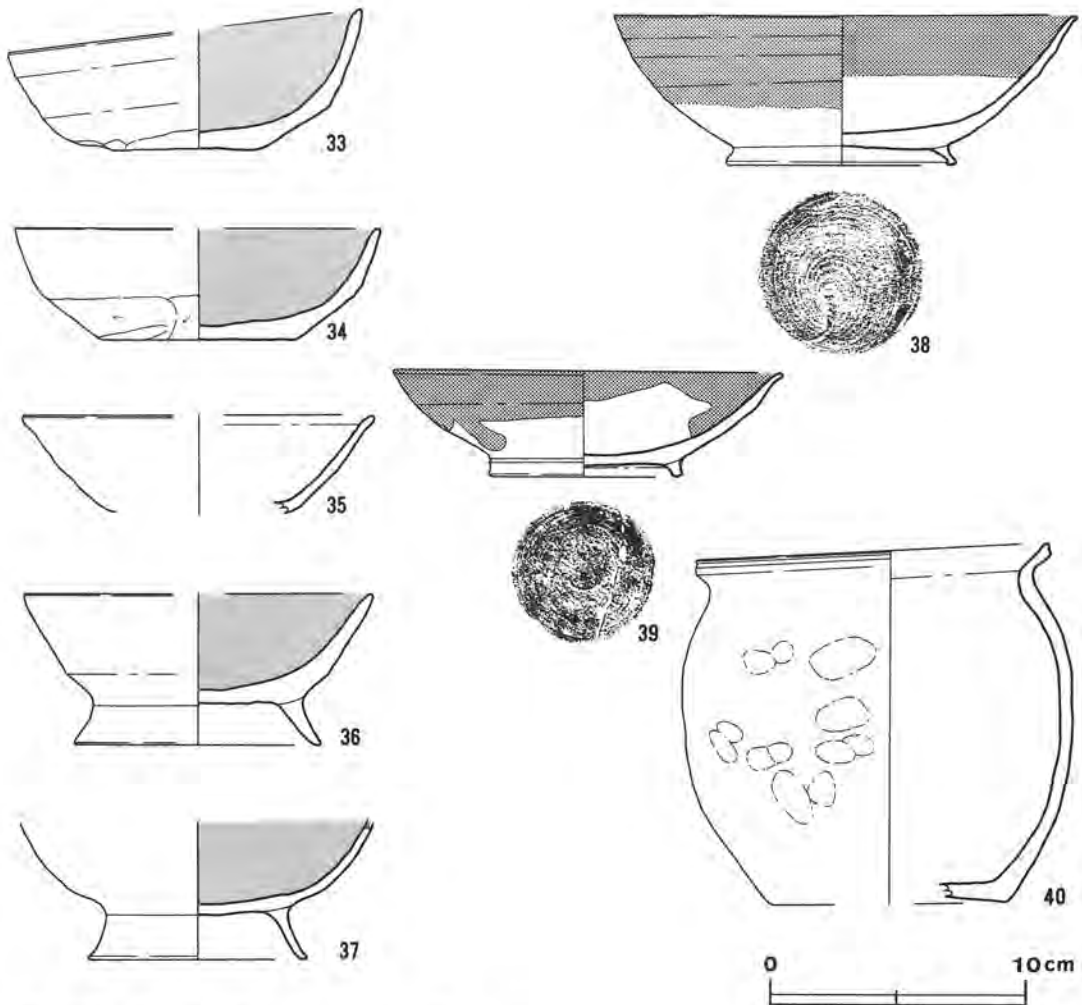
遺物 40は竈内から、38は中央からやや南へ寄った床面直上から出土している。他の遺物も、床面直上または覆土下層から出土しているが、35・37は覆土上層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
33	土師器 坏	A (13.9)	体部は外傾し、内彎して立ち上がってから直線的に開く。底部は切り離し面が大きく傾く。	水挽き、横ナデ、底部全面と体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母・長石 浅黄橙色 普通	P35 60% 覆土
		B 5.0				
		C 5.8				
34	土師器 坏	A 13.2	体部は外傾し、内彎する。体部の中ほどは、削りの上端が稜をなす。底部は平坦。	水挽き 横ナデ、底部全面と体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 橙色 普通（二次焼成）	P36 30% 竈
		B 4.4				
		C 7.6				
35	土師器 坏	A (13.8)	体部は強く外傾し、やや内彎して立ち上がる。口縁は外反し、口唇は丸い。	内外面横ナデ。	長石・石英・砂粒 浅黄橙色 普通	P37 20% 覆土
		B [3.9]				
36	土師器 高台付坏	A (13.6)	体部は外傾し、内彎して立ち上がってから直線的に開く。高台は高目で開く。	横ナデ、高台接合後高台内にヘラ横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・雲母・長石 ぶい橙色 普通（二次焼成）	P38 50% 竈
		B 6.0				
		D 9.6				
		E 1.9				
37	土師器 高台付坏	B [5.4]	体部は強く内彎して立ち上がり、丸味を有する。高台は高目で開く。全体に薄手。	外面横ナデ、高台接合後接合部横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P39 35% 覆土
		D (8.5)				
		E 2.1				
38	陶器 埴	A 18.1	体部は外傾し、やや強く内彎する。高台は三日月状。見込みに凹線が周回し、口縁は輪花状。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後高台接合、施釉はつけかけ。	(釉) 灰白色 (胎) 浅黄橙色	P33 80% 覆土最下層
		B 5.9				
		D 9.0				
		E 0.8				



第184図 第4号住居跡・竈実測図



第185図 第4号住居跡出土遺物実測図

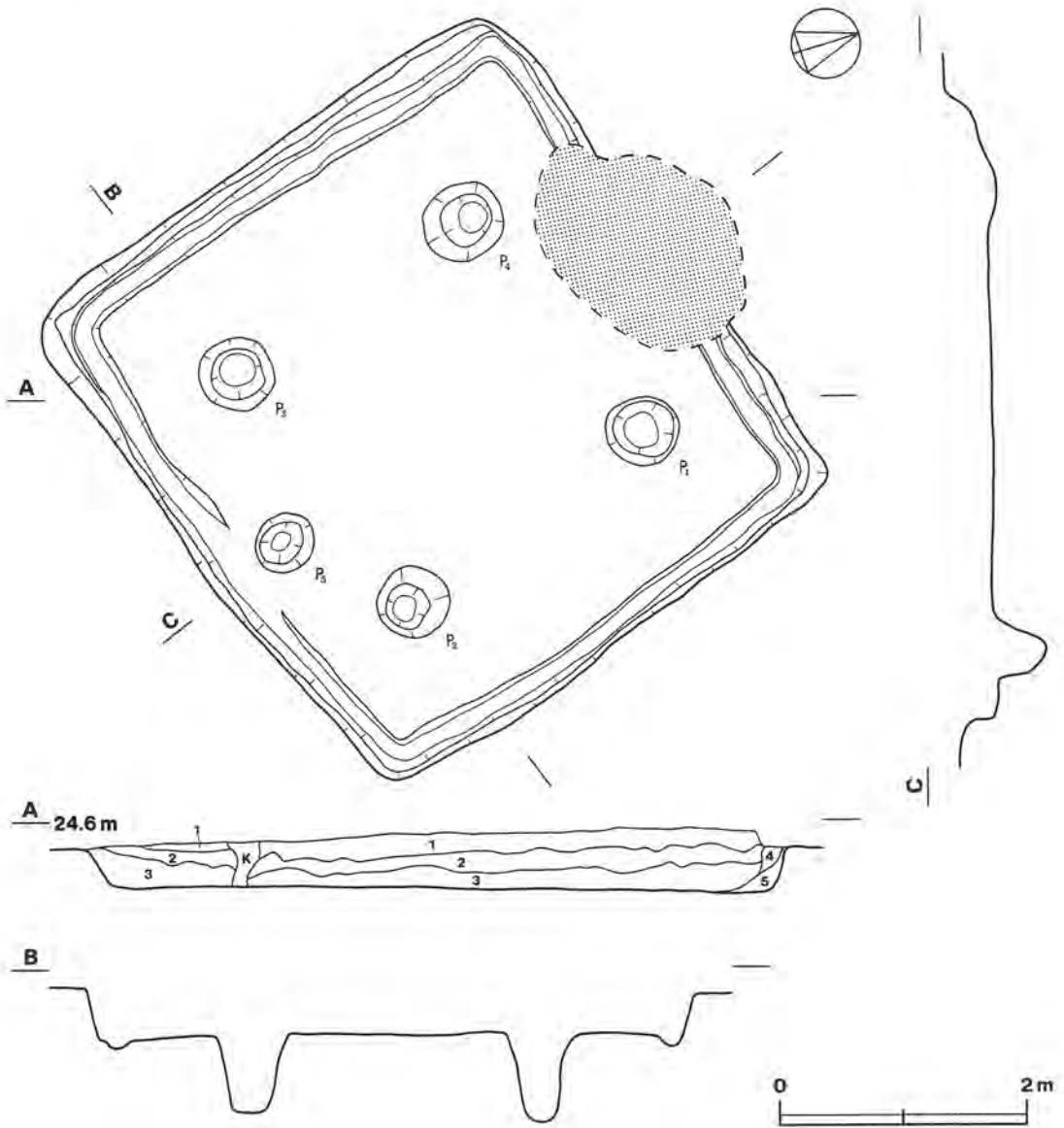
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
39	皿 陶器	A 15.2	体部は強く外傾し、ゆるやかに内彎する。口縁は外反し、器厚を減ずる。高台はやや開く。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台を接合し、さらに横ナデ、施釉はつげがけ。	(釉) オリーブ灰色 (胎) 灰色	P34 75% 覆土
		B 4.3				
		D 7.5				
		E 0.7				
40	甕 土師器	A 13.8	胴部はやや外傾し、ゆるやかに内彎する。頸部は強く外反する。口縁外面にヘラによる沈線。	粘土紐巻き上げ、胴部下端削り、中～上位ナデ、頸部内外面横ナデ、胴部内面ヘラ横位ナデ。	砂粒・礫 浅黄橙色 不良	P40 80% 甕
		B 14.1				
		C 9.2				

第5号住居跡 (第186図)

位置 B2b₀区を中心に所在し、第4号住居跡の北西に隣接する。

規模と平面形 4.9×4.6mの方形状を呈する。

主軸方向 N-21°-W

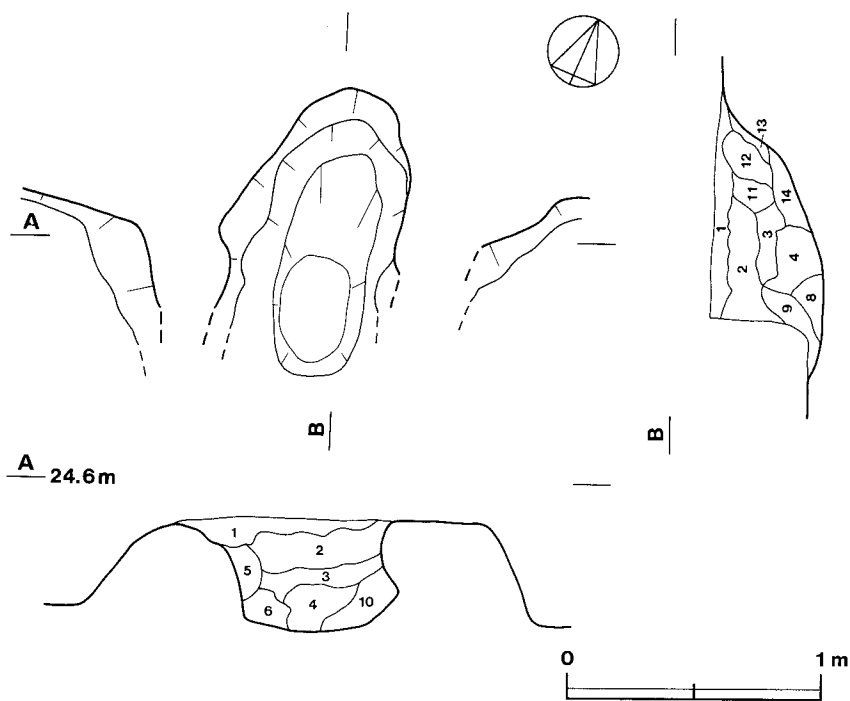


SI-5 (土層解説)

1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子多量。
2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子中量。

3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子多量。
4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子多量。
5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子多量。

第186図 第5号住居跡実測図



SI-5 《竈土層解説》

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 におい赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量。 | 8 におい赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量。 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量。 | 9 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子微量。 |
| 3 におい赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量。 | 10 におい赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量。 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子微量。 | 11 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量。 |
| 5 におい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量。 | 12 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子・ローム粒子微量。 |
| 6 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量。 | 13 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量。 |

第187図 第5号住居跡竈実測図

壁 高さ35cm前後を測り, 垂直またはやや外傾して立ち上がっている。

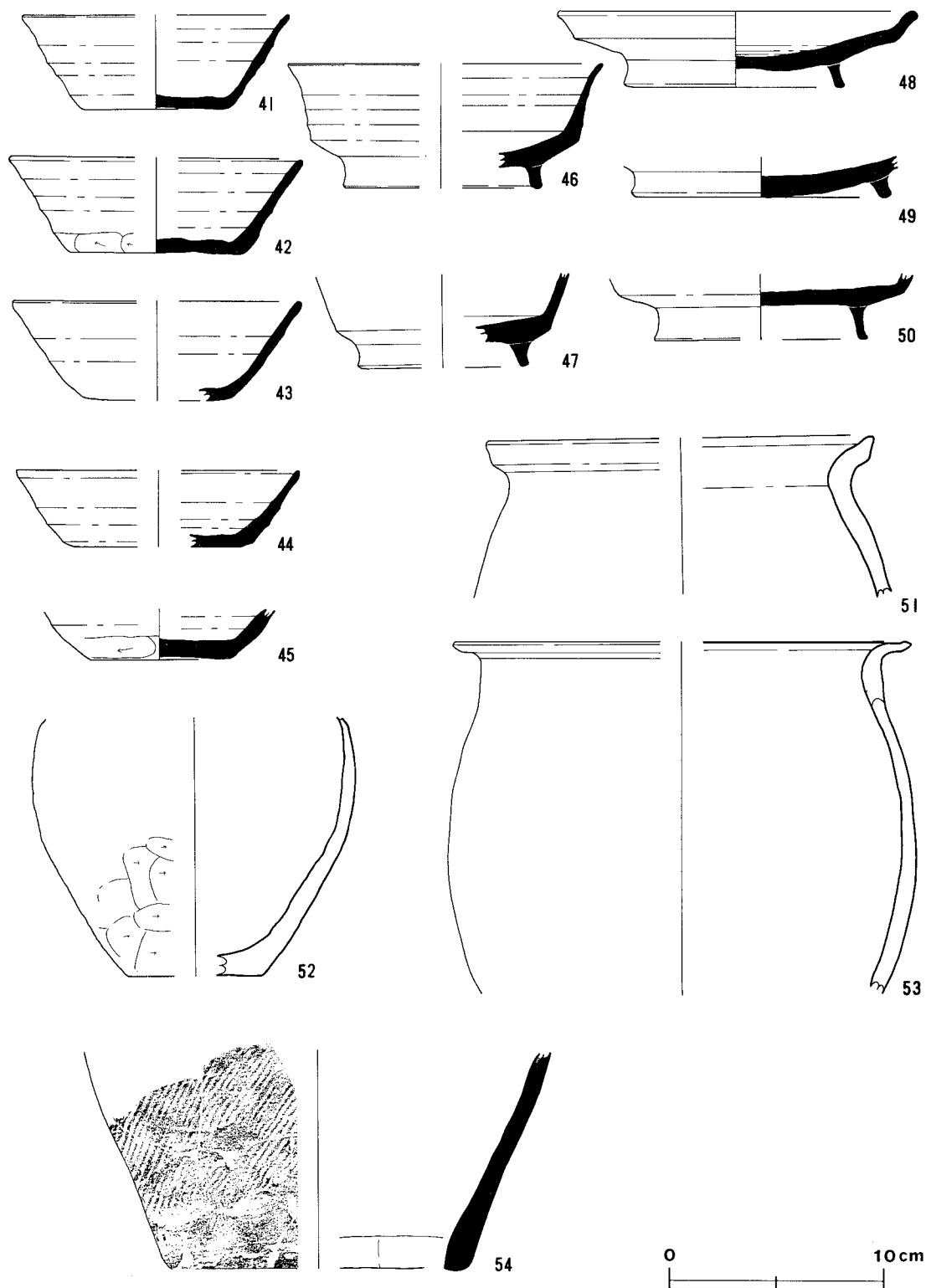
壁溝 幅20~30cm, 深さ5~10cmを測り, 南壁中央付近を除いて周回する。

床 ロームで, 平坦である。中央は, 硬く踏み固められている。

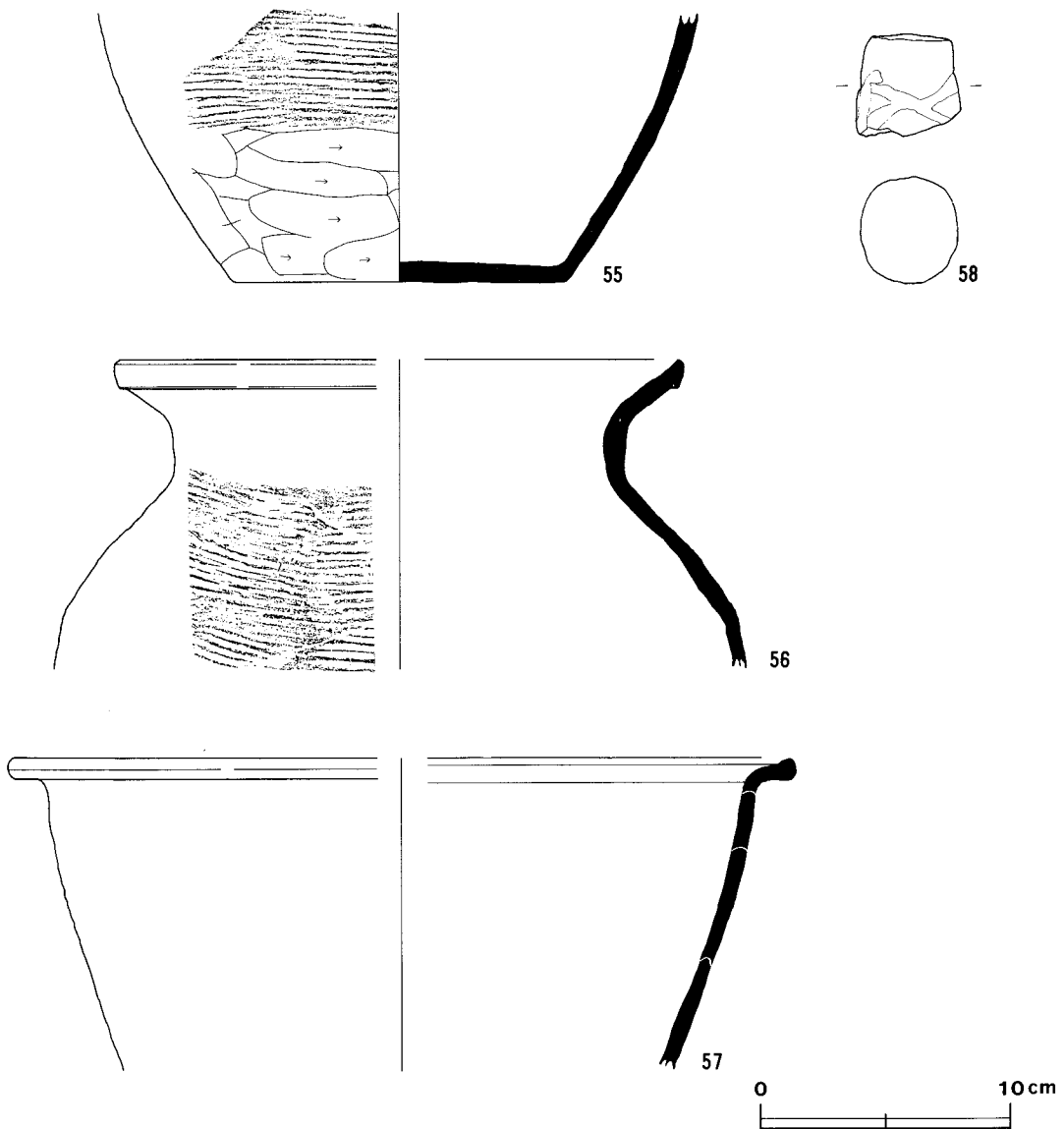
ピット 5か所を検出した。P₁~P₄は, 支柱穴と思われる。直径60cm前後の円形状を呈し, 深さは, 50~70cmを測る。P₅は出入口の施設に伴うものと見られ, 直径45cm程の円形状を呈し, 深さは46cmを測る。

竈 北壁中央に付設されている。長さ120cm前後, 幅150cm前後を測り, 住居跡の壁を60cm程掘り込んである。遺存状態は悪い。袖部・天井部とも砂質粘土で構築されたと思われるが, 崩れており, 袖の取付部分を残すだけである。火床は, ロームを10cm程皿状に掘り凹めている。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積である。



第188图 第5号住居迹出土遺物実測図(1)



第189図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 須恵器が多く、土師器は少ない。41・50・55は床面直上から出土しており、それぞれ竈前方から東壁際にかけて出土している。52・53は竈覆土から出土したもので、補強材として使用されたものと考えられ、58は竈で使用されたものと思われる。他は、全て覆土から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
41	環 須恵器	A (12.5) B 4.5 C (6.7)	底部は平底。体部は外傾し、やや内彎して立ち上がる。口縁は軽く外反し、口唇は丸い。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後、底部の一部と体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P 43 20% 床面直上
42	環 須恵器	A (13.8) B 4.5 C (7.8)	底部は平底。体部は外傾し、口縁まで直線的に開く。口唇は丸い。内面底部周縁は凹線状。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・雲母 灰色 普通	P 41 50% 覆土
43	環 須恵器	A (13.6) B 4.7 C 6.7	体部は外傾し、内彎して立ち上がってから直線的に開く。口縁はわずかに外反し、口唇は丸い。	内外面丁寧な横ナデ。	長石・礫 灰黄色 普通	P 44 25% 覆土
44	環 須恵器	A (13.2) B 3.6 C (7.8)	体部は外傾し、やや内彎して立ち上がる。口唇はやや尖る。体部下半と底部は肥厚する。	内外面横ナデ、底部及び体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P 42 30% 覆土
45	環 須恵器	B [2.4] C 6.5	体部は外傾し、やや内彎して立ち上がる。底部は平底。全体に厚手。	内外面横ナデ、底部全面及び体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 灰オリープ色 普通	P 45 20% 覆土
46	高台付環 須恵器	A (14.7) B 5.9 D (9.1) E 1.2	底部は皿状。体部はやや外傾し、口縁は外反する。腰の稜は明稜。高台はやや開き、外側が下がる。	内外面横ナデ、高台接合。	砂粒・長石・礫 灰色 普通	P 46 40% 覆土
47	高台付環 須恵器	B [4.4] C (7.4) E 1.2	底部は皿状。体部はやや外傾し、直線的に立ち上がる。高台はやや開く。	内外面横ナデ、高台接合。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P 47 30% 覆土
48	盤 須恵器	A 16.5 B 3.6 D 10.4 E 1.2	底部は中央が下がって皿状を呈し、体部は外反して口唇は丸い。高台はやや開く。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り、高台接合。	長石 灰黄色 良	P 49 85% 覆土下層
49	盤 須恵器	B [1.9] D 12.0 E 1.1	底部は高台が大きく下がる。高台は厚手で開く。	横ナデ、底部回転ヘラ切り、高台接合。	長石・雲母 灰黄色 普通	P 50 30% 覆土
50	高台付環 須恵器	B [2.9] D (9.9) E 1.6	底部は平底で体部は外傾して立ち上がる。高台は高目でやや開く。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、高台接合。	長石 灰色 普通	P 48 20% 床面直上
51	甕 土師器	A (18.0) B [7.4]	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は肥厚して強く外反する。口唇部はつまみ上げられる。	粘土紐巻き上げ、胴部外面ナデ 頸部内外面横ナデ、胴部内面レ ラ横位ナデ。	雲母・長石・石英 橙色 普通	P 55 5% 覆土
52	甕 土師器	B [12.1] C (6.4)	底部は平底。胴部は外傾し、直線的に立ち上がってから内彎する。	粘土紐巻き上げ、胴部外面下半横位手持ちヘラ削り、胴部外面上半及び内面ナデ。	長石・雲母 にぶい橙色 やや不良	P 56 5% 甕
53	甕 土師器	A (21.0) B [16.6]	胴部はゆるやかに内彎する。頸部は肥厚し、強く外反して水平に開く。口唇はやや起き上がる。	粘土紐巻き上げ、胴部外面ナデ 頸部内外面横ナデ、胴部内外面ヘラ横位ナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P 54 10% 甕及び床面直上
54	甕 須恵器	B [10.2] C (13.8)	胴部は外傾し、やや外反して立ち上がってからゆるやかに内彎する。	粘土紐巻き上げ、叩き、外面下端一部手持ちヘラ削り、内面ヘラ横位ナデ、孔はヘラで穿つ。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P 53B 5% 覆土
55	甕 須恵器	B [10.8] C (13.2)	底部は平坦。胴部は外傾し、やや内彎して立ち上がる。胴部外面平行線叩き目。	粘土紐巻き上げ、叩き、胴部外面下端横位手持ちヘラ削り、内面ヘラナデ。	雲母・長石 灰白色 普通	P 52 10% 床面直上

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
56	甕 須恵器	A (22.2) B [12.5]	肩はゆるやかにすぼまり、頸部は若干直立してから外反する。口縁は烏帽子状。平行線叩き目。	粘土紐巻き上げ、叩き、頸部内外面横ナデ、胴部内面へラ横位ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P51 10% 覆土
57	甕 須恵器	A (30.8) B [12.6]	胴部はゆるやかに内彎する。頸部は強く外反して水平に開く。口唇は三角形。平行線叩き目。	粘土紐巻き上げ、叩き、頸部内外面横ナデ、胴部内面横位ナデ。	雲母・石英 にぶい黄橙色 普通	P53A 5% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	備考
58	支脚	高さ4.2 幅4.3 重さ76.2g	DP1 覆土 下半欠損

第6号住居跡（第190図）

位置 A3i₄区を中心に所在し、第1号住居跡の北約10mに位置する。

規模と平面形 3.6×3.45mの不整形を呈する。

主軸方向 N-0°

壁 高さ30～40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅20～40cm、深さ5～10cmで周回する。溝内にピットが5か所検出されている。

床 ロームで、平坦である。全体に硬く踏み固められている。

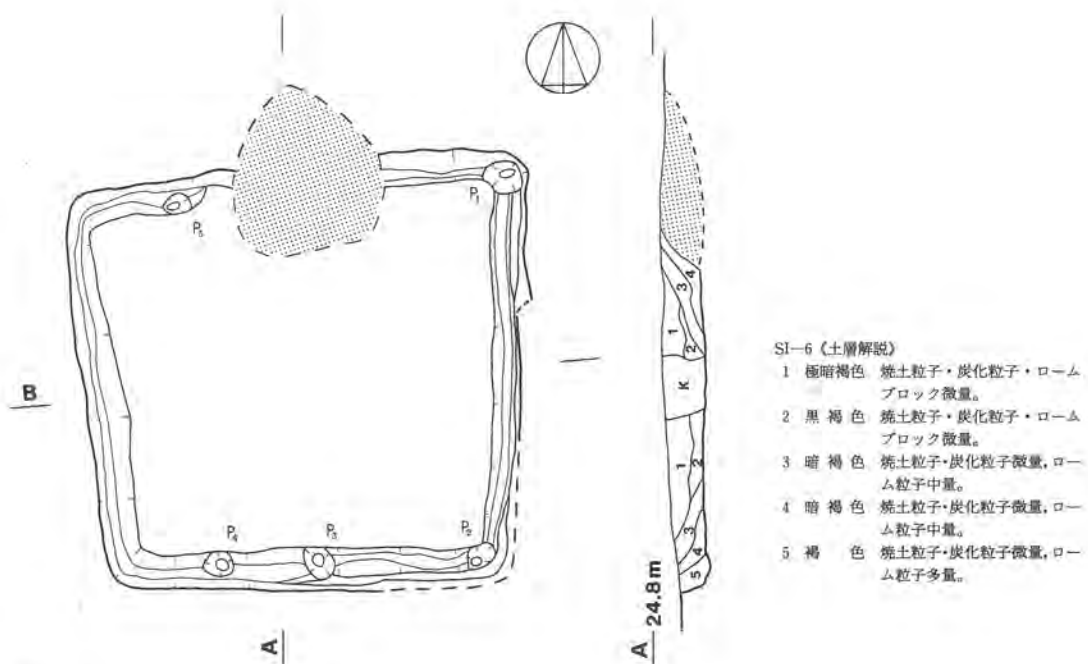
ピット 溝内の5か所だけである。長径30～40cm、短径20～30cmの楕円形状を呈し、深さ20～60cmを測る。

竈 北壁中央に付設されていた。長さ130cm、幅112cmを測り、住居跡の壁を60cm程掘り込んでいた。遺存状態はあまり良くない。袖部は砂質粘土で構築され、長さ60cmを測る。左右の袖は逆「ハ」の字状に構築され、燃焼室を包み込むような形態を呈している。

覆土 暗褐色土・黒褐色土・極暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

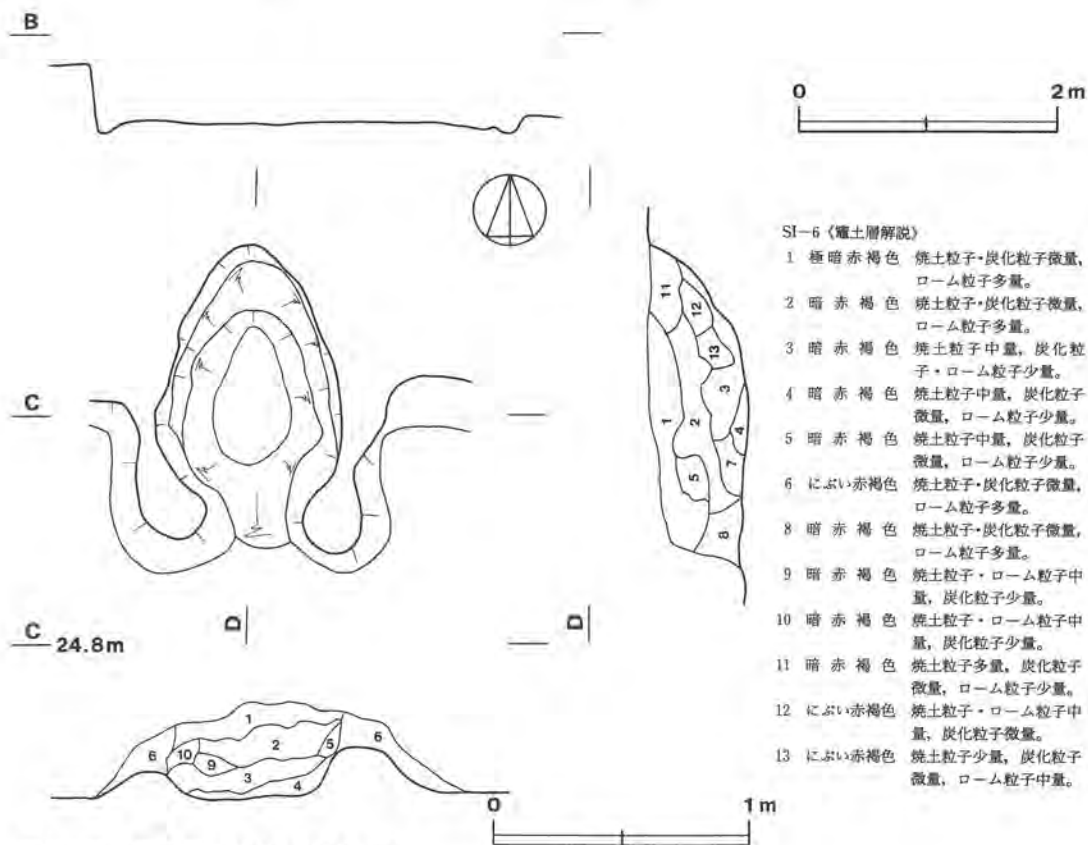
遺物 遺物は少ない。59は、竈前方の床面直上と南壁際の覆土中から出土した破片が接合されたもので、本跡の廃絶後、あまり時間を経ない段階で投棄されたものと考えられる。60・62は竈の補強材として使用されたものと思われる。他は覆土中から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。



SI-6《土層解説》

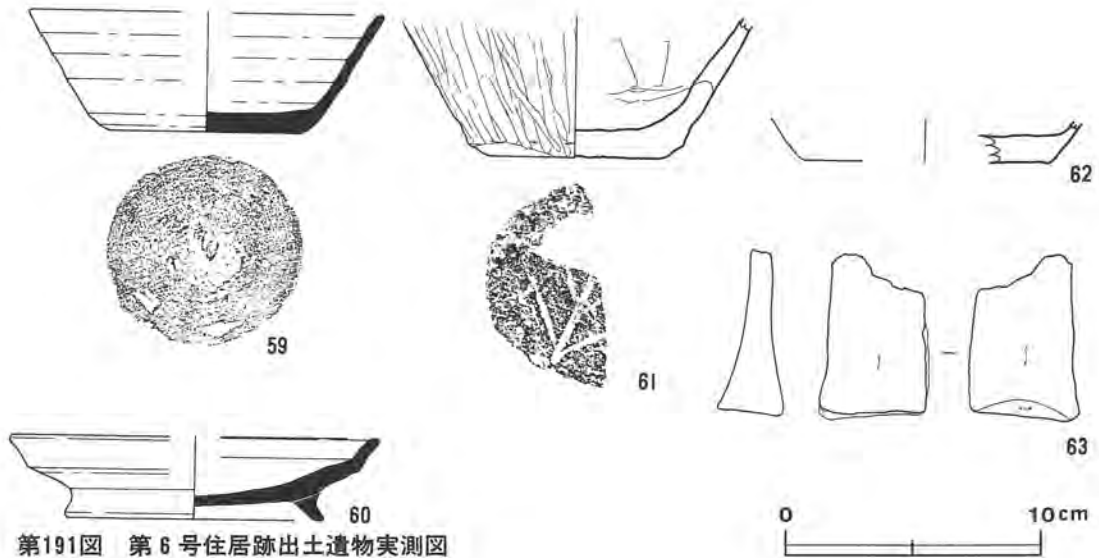
- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック微量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック微量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



SI-6《掘土層解説》

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 8 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 9 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量。
- 10 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量。
- 11 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 12 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子微量。
- 13 にぶい赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量，ローム粒子中量。

第190図 第6号住居跡・竈実測図



第191図 第6号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
59	坏 須恵器	A (13.3)	体部は外傾し、やや内彎して立ち上がる。口縁は軽く外反し、口唇は丸い。底部は肥厚する。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後底部及び体部下端回転ヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P57 50% 覆土最下層
		B 4.7				
		C 7.6				
60	盤 須恵器	A (14.5)	底部は皿状、体部は外反し、口唇は丸い。高台は外反して開き、豊付は丸い。やや雑な作り。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、高台接合。	長石・石英 オリーブ灰色 良	P58 75% 電
		B 3.3				
		D 10.1				
		E 1.2				
61	甕 土師器	B [5.7]	底部は平底で木葉痕。胴部は外傾し、直線的に外上方へ開く。内面胴部下端は凹帯状。	粘土紐巻き上げ、外面縦位ヘラ磨き、内面横位ヘラナデ。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	P59 10% 覆土
		C (8.4)				
62	甕 土師器	B [1.7]	底部は平底で肥厚する。胴部は器厚を減じ、外上方へ立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ。	砂粒・長石 褐色 やや不良	P60 5% 電
		C (9.7)				

図版番号	器種	法量(cm)	備考
63	砥石	長さ7.5 幅4.2 厚さ2.6 重さ71.1g	Q1 覆土 凝灰岩 1/2欠損

第7号住居跡 (第192図)

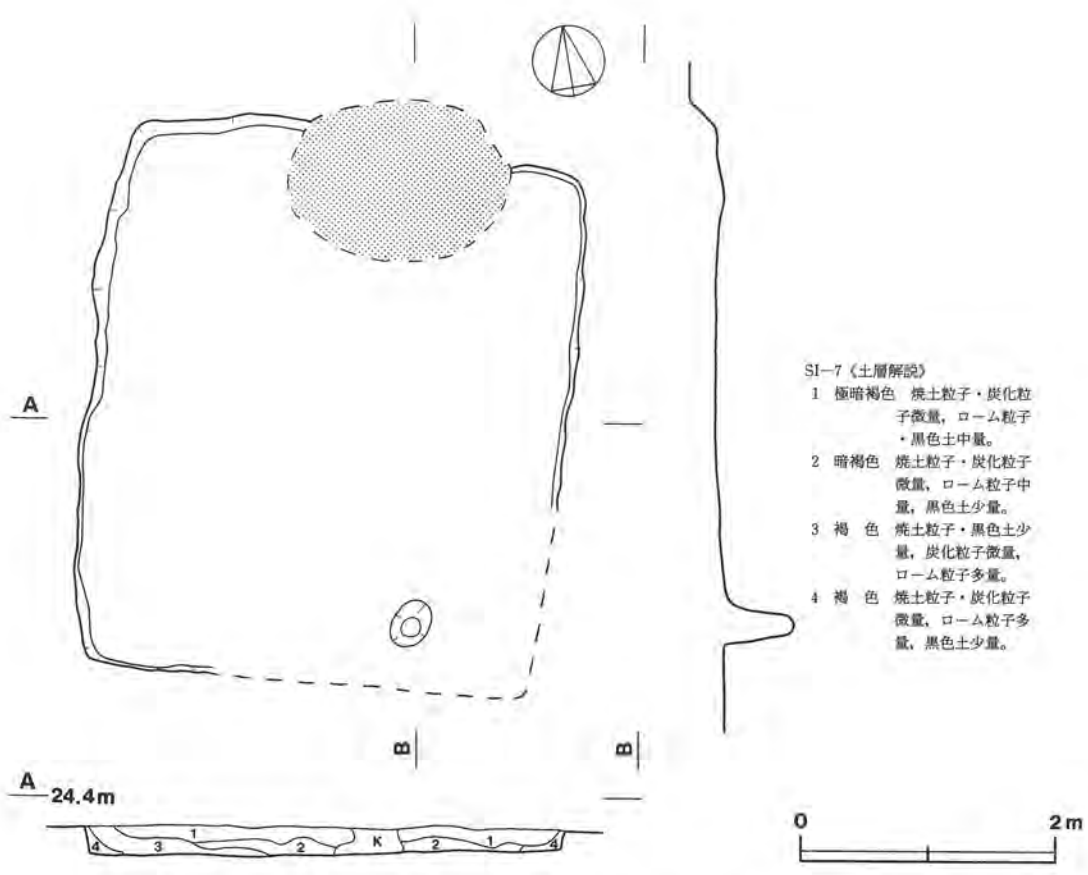
位置 B3a₄区を中心に所在し、第6号住居跡の南約3mに位置する。

規模と平面形 4.45×3.75mの長方形状を呈する。

主軸方向 N-13°-E

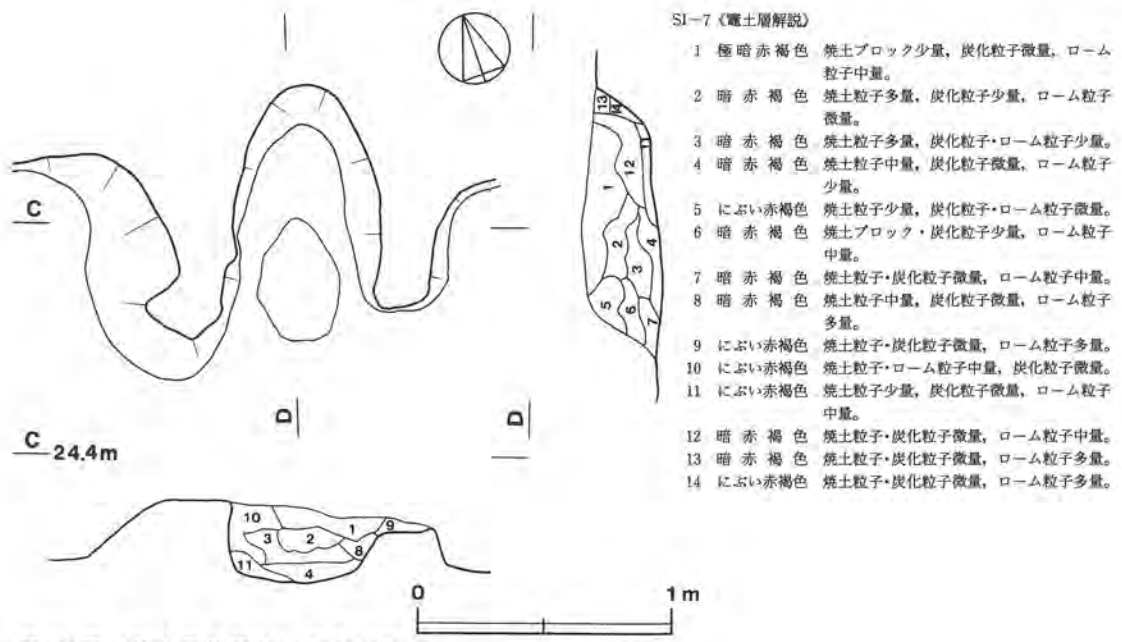
壁 高さ20~30cmを測り、やや外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、平坦である。全体に硬く踏み固められている。



SI-7《土層解説》

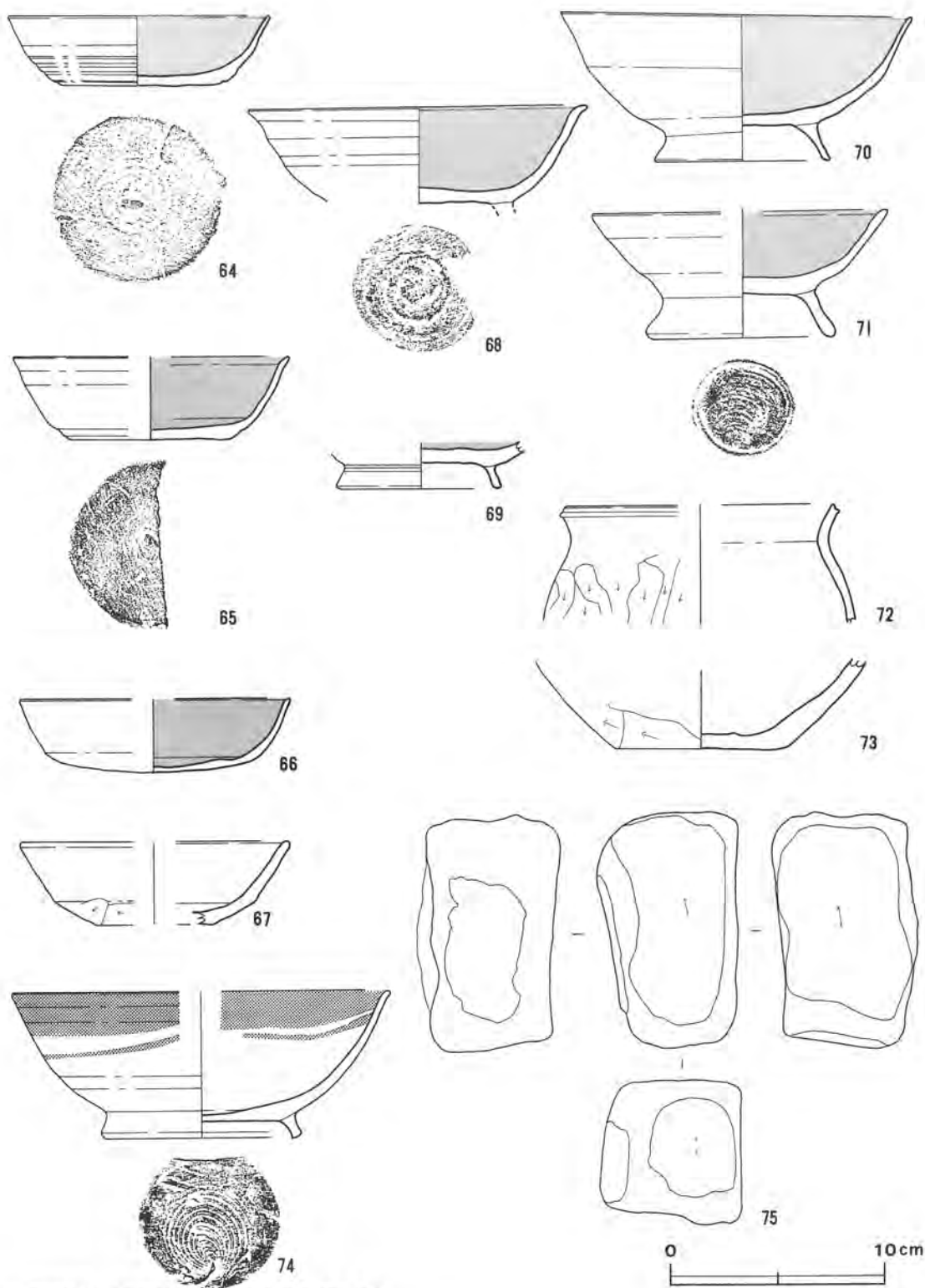
- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子・黒色土中量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土少量。
- 3 褐色 焼土粒子・黒色土少量，炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土少量。



SI-7《竪土層解説》

- 1 極暗赤褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 5 におい赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量。
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子中量。
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 8 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 9 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 10 におい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子微量。
- 11 におい赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 12 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 13 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 14 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

第192図 第7号住居跡・竪実測図



第193图 第7号住居跡出土遺物実測図

ピット 南東コーナー寄りに1か所検出された。40×29cmの楕円形状で、深さ57cmを測る。

竈 北壁の中央からやや北東コーナー寄りに付設されている。長さ118cm、幅141cmを測り、住居跡の壁を35cm程掘り込んでいる。遺存状態はあまり良くない。袖部は砂質粘土で構築され、左袖は長さ約90cmを測る。右袖は崩れており、47cmが遺存している。火床は、ロームを5cm程皿状に掘り凹めている。

覆土 褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 土師器が多い。65・70は北東コーナー付近の床面直上から、68は竈前方の床面直上から、69は竈焚口の床面直上からそれぞれ出土している。66・73は竈の補強材として使用されていたものと思われる。64は、住居跡中央の床面直上から出土した破片と東壁際の覆土中から出土した破片が接合されたもので、本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。他はいずれも東壁際の覆土上位～中位から、投棄された状態で出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
64	坏 土師器	A 12.2	底部は平坦。体部は外傾し、内彎する。口縁は軽く外反する。体部下端に沈線が周回する。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り後周縁部ヘラナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P62 80% 覆土下層
		B 3.3				
		C 7.9				
65	坏 土師器	A (12.8)	底部は平坦。体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反し、内側に稜を持つ。	水挽き、横ナデ、底部回転ヘラ切り後周縁部ヘラナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P64 40% 床面直上
		B 5.0				
		C 7.4				
66	坏 土師器	A (12.6)	底部は丸底状。体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁はやや外反する。	横ナデ、底部手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母・石英 にぶい黄橙色 普通	P63 60% 竈覆土
		B 3.5				
		C (10.4)				
67	坏 土師器	A (12.5)	体部は外傾し、内彎して立ち上がってから直線的に開く。口唇は丸い。全体に厚手。	水挽き、横ナデ、底部及び体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 二次焼成	P65 20% 竈覆土
		B 4.0				
		C (5.6)				
68	高台付坏 土師器	A 15.8	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は強く外反し、口唇は丸い。高台は接合部から剥離。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、高台脇回転ヘラ削り、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P67 70% 床面直上
		B [4.8]				
69	高台付坏 土師器	B [2.3]	底部は平坦で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。高台は開く。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	長石・雲母 橙色 普通	P69 30% 竈覆土下層
		D 7.7				
		E 1.1				
70	高台付坏 土師器	A 16.3	体部は強く内彎して中ほどに腰を持つ。口縁は外反し、口唇は丸い。高台は高目で開く。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	雲母・長石 淡橙色 普通	P66 90% 床面直上
		B 7.2				
		D 8.2				
		E 1.8				
71	高台付坏 土師器	A (13.5)	体部は外傾し、ゆるやかに内彎する。口唇は丸い。高台は高く、下半が肥厚して畳付は丸い。	横ナデ、底部回転糸削り、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P68 50% 覆土
		B 6.9				
		D 8.3				
		E 2.2				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
72	甕 土師器	A (12.4) B [5.7]	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は丸みを以って外反する。口唇部は小さくつまみ上げられる。	粘土紐巻き上げ、胴部は外面縦位ヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面横位ヘラナデ。	長石・雲母 橙黄色 普通	P70 5% 覆土最下層
73	甕 土師器	B [4.2] C (8.2)	底部は平坦。胴部は強く外傾し、やや内彎して外上方へ開く。	粘土紐巻き上げ、胴部外面下端手持ちヘラ削り、内面横位ヘラナデ及び指おさえ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P71 5% 竈(補強材)
74	碗 陶器	A (17.6) B 6.9 D 8.8 E 1.3	体部は強く内彎し、口縁は外反する。高台は三日月状。見込みに凹線が周回し、口縁は輪花状。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、高台接合、施釉はつけがけ。	(釉) 浅黄 (胎) にぶい橙黄色	P61 60% 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	備考
75	砥石	長さ11.2 幅6.9 厚さ6.6 重さ 816g	Q2 床面直上 砂岩

第8号住居跡(第194図)

位置 A3i₅区を中心に所在し、第6号住居跡の東約1mに位置する。

規模と平面形 4.65×4.6mの方形状を呈する。

主軸方向 N-45°-W

壁 高さ50~60cmを測り、外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、平坦である。全体に硬く踏み固められている。

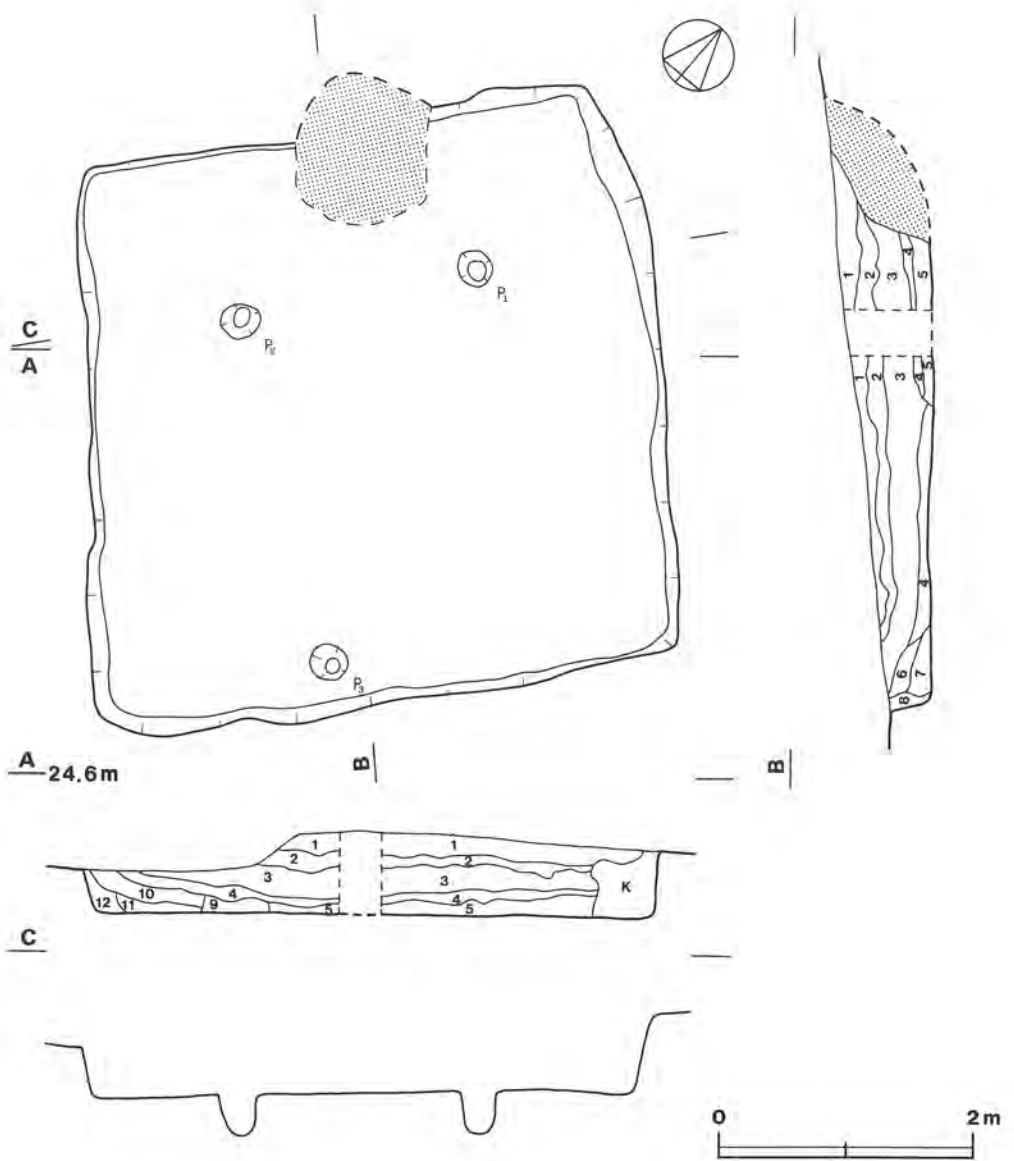
ピット 3か所を検出した。P₁・P₂は支柱穴と思われ、直径30cm前後の円形状を呈し、深さはP₁が36cm、P₂が37cmで、ほぼ同規模である。P₃は出入口に伴う梯子ピットと思われ、直径30cm前後の円形状を呈し、深さは33cmを測る。

竈 北西壁中央に付設されている。長さ89cm、幅88cmを測り、住居跡の壁を35cm程掘り込んでいる。天井の一部が崩れずに残るなど、遺存状態は良い。

覆土 褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積していた。自然堆積である。

遺物 遺物は少ない。79は、北コーナーの覆土下層から出土しており、本跡の時期に近接しているものと考えられる。また、80は南コーナー寄りの覆土最下層から出土している。他は全て覆土中から出土しており、特に76・77は中央付近の覆土最上層から出土しており、本跡廃絶後長時間を経てから投棄されたものと思われる。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代後期頃に比定されるものと思われる。

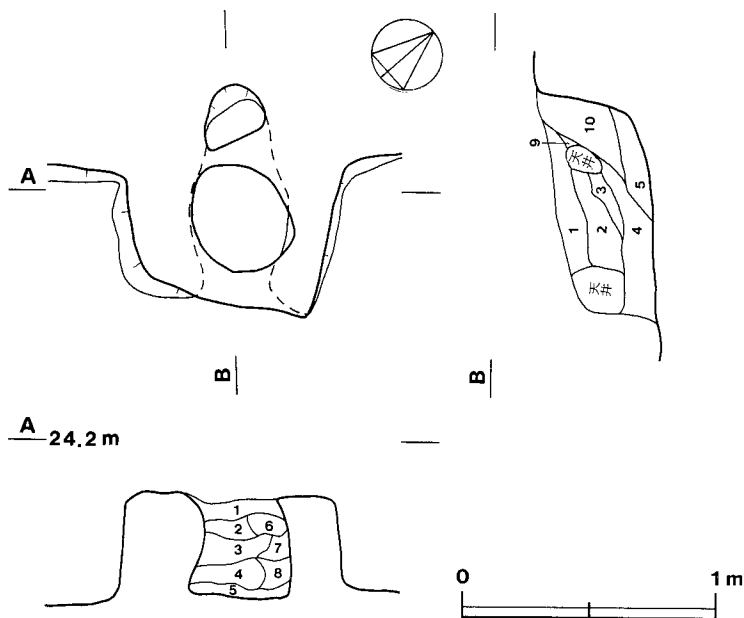


SI-8 (土層解説)

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 3 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子中量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子中量。
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。

- 7 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量。
- 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子中量。
- 10 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 11 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック中量。
- 12 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック中量。

第194図 第8号住居跡実測図



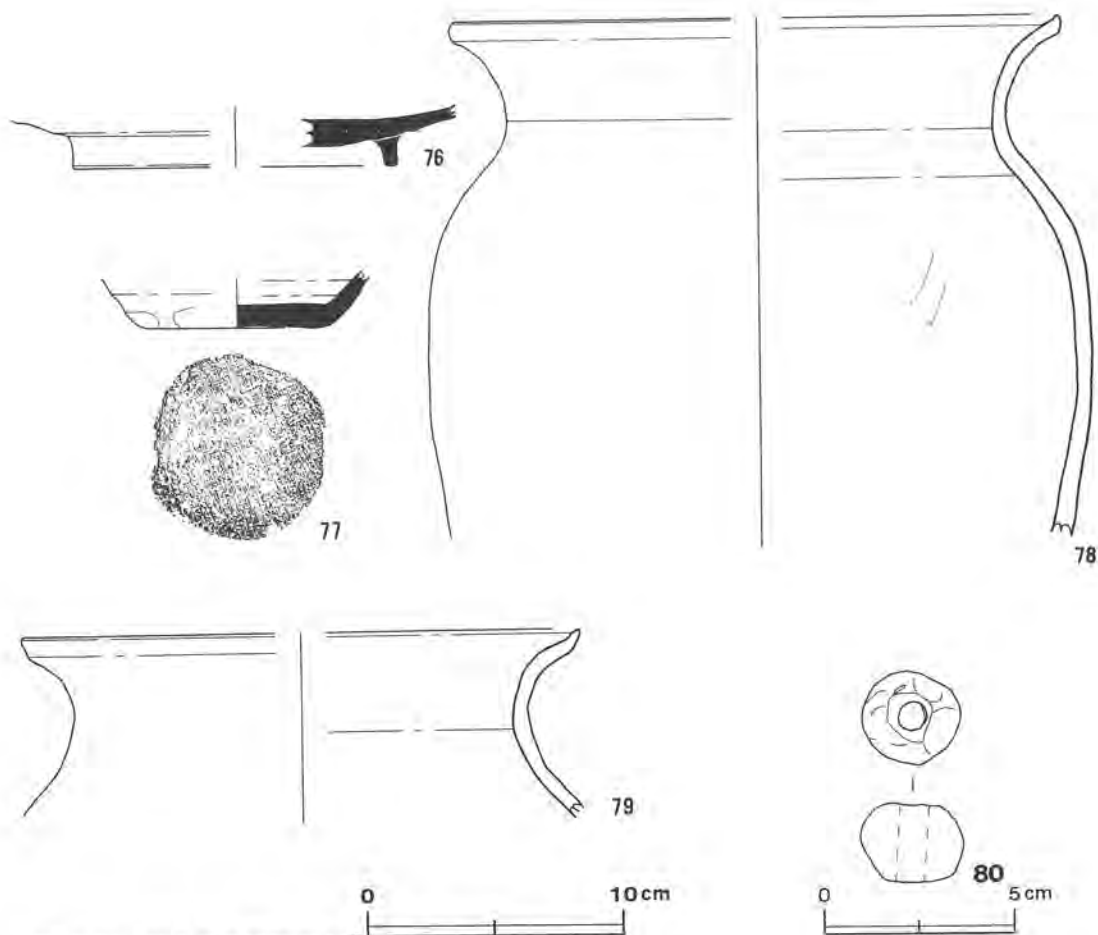
SI-8《竈土層解説》

- 1 におい褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量。
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量。
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量。
- 8 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 9 におい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 10 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

第195図 第8号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
76	盤 須恵器	B [2.4] D 12.6 E 1.3	底部は肥厚し，中央がやや高まる。高台はわずかに開き，畳付は平坦。	横ナデ，底部回転ヘラ削り，高台接合。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	P73 20% 覆土上層
77	坏 須恵器	B [2.0] C 7.2	底部は平坦。体部は外傾し，直線的に外上方へ開く。内面底部周縁は凹帯状となす。	横ナデ，底部全面及び体部下端手持ちヘラ削り。	長石・雲母 灰白色 普通	P72 30% 覆土最上層
78	甕 土師器	A (24.0) B [20.6]	胴部は上位が張り，肩はゆるやかにすぼまる。頸部は強く外反し，口唇はつまみ上げられる。	粘土紐巻き上げ，胴部外面ナデ 頸部内外面横ナデ，胴部内面横位ヘラナデ。	長石・雲母 におい黄橙色 普通	P74 20% 覆土下層
79	甕 土師器	A (21.8) B [7.0]	頸部は丸味を以って強く外反し，口唇部は外上方へつまみ上げられる。	粘土紐巻き上げ，胴部内外面ナデ，頸部内外面横ナデ。	雲母・長石 におい橙色 普通	P75 10% 覆土最下層

図版番号	器種	法量(cm)	備考
80	球状土垂	高さ2.1 直径2.7 重さ12.2g	DP2覆土最下層



第196図 第8号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡 (第197図)

位置 B3c区を中心に所在し、第1号住居跡の東約6mに位置する。

規模と平面形 3.65×3.2mの長方形状を呈する。

主軸方向 N-1°-E

壁 高さ30~40cmを測り、外傾して立ち上がっている。

床 西側はロームで、東側は黒色土である。東に向かって傾斜しており、全体に軟弱である。

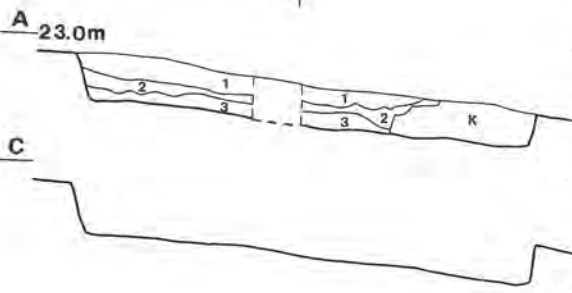
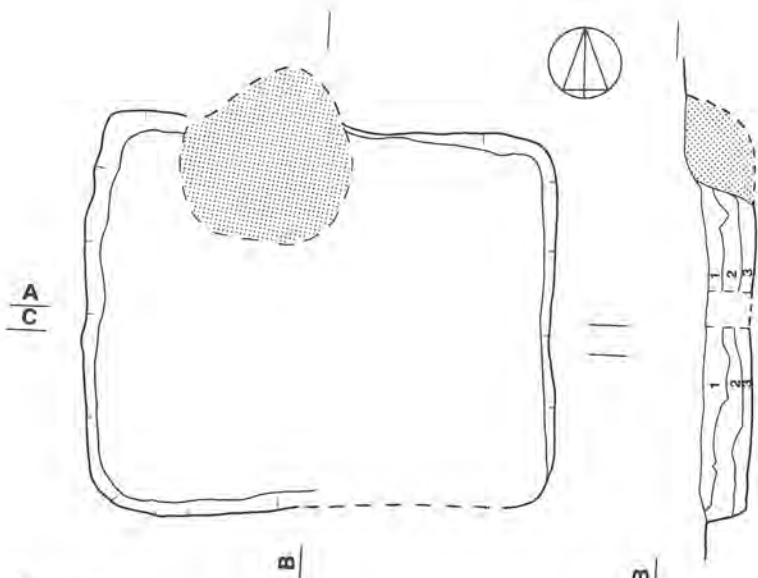
ピット 検出されなかった。

竈 北壁中央に付設されている。長さ106cm、幅117cmを測り、住居跡の壁を40cm程掘り込んでい
る。遺存状態はあまり良い方ではない。袖部は砂質粘土で構築され、60cm前後の長さを有する。

火床は、黒色土を5cmほど浅い皿状に掘り凹めている。

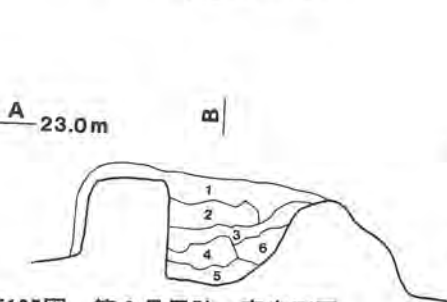
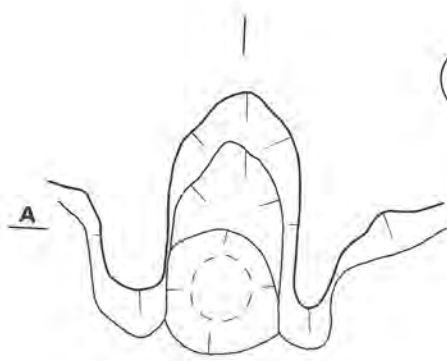
覆土 暗褐色土・黒褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 須恵器が多く、土師器は少ない。83は竈右側、91は竈左側、84・85・88・92は竈前方、87



SI-9 (土層解説)

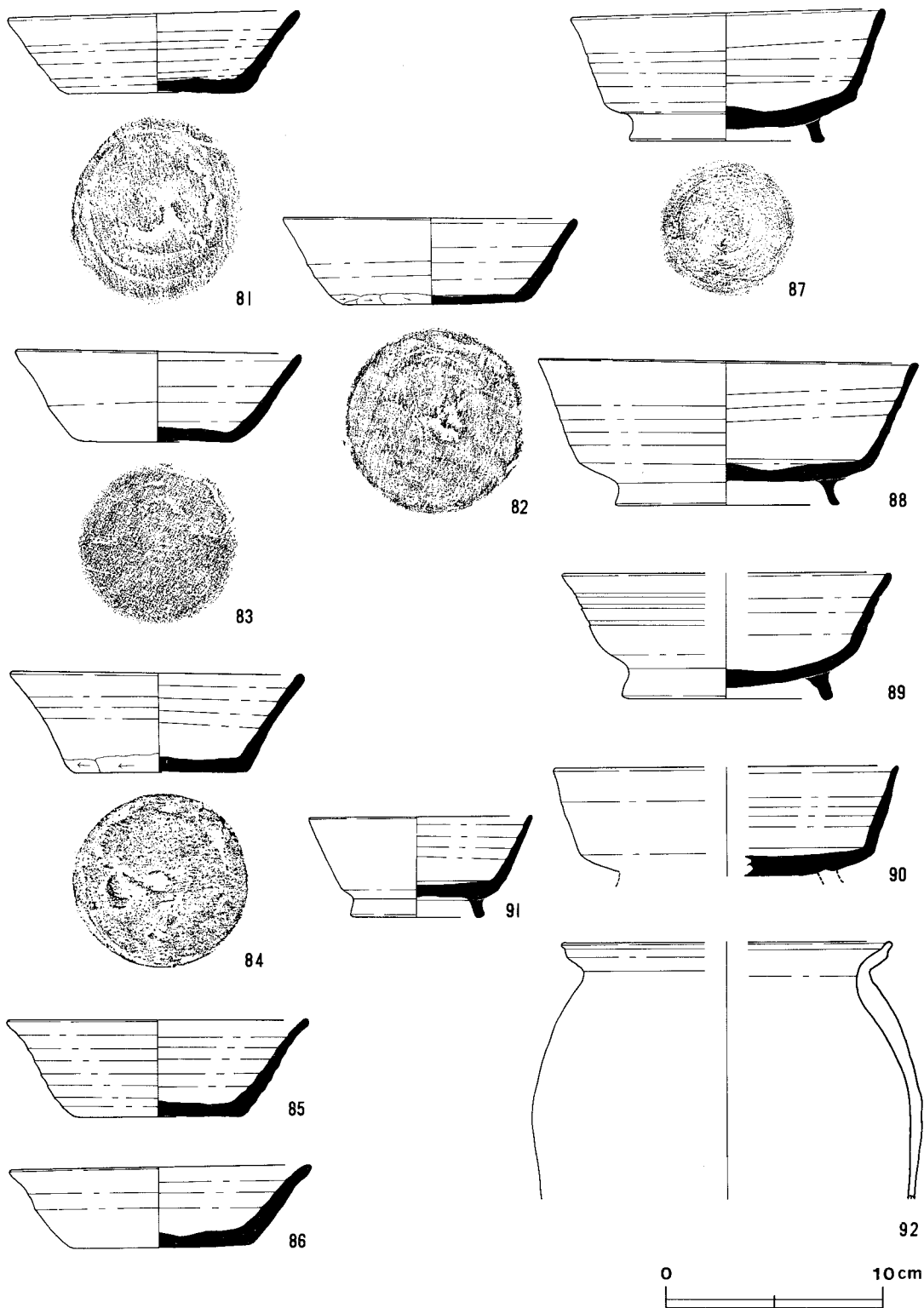
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土多量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量，黒色土多量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土多量。



SI-9 (土層解説)

- 1 暗褐色 粘土少量。
- 2 暗褐色 粘土多量。
- 3 褐色 焼土ブロック少量，粘土多量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量，粘土多量。
- 5 褐色 焼土粒子極く少量，粘土少量。
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化材微量，ローム粒子少量。
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 8 におい赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量，ローム粒子中量。

第197図 第9号居跡・竈実測図



第198图 第9号住居跡出土遺物実測図

は南壁際のそれぞれ床面直上から出土しており、いずれも本跡で使用されたものと思われる。86は、竈覆土から出土している。また、82・89・90は覆土中から出土しており、本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、遺構の形態が不明瞭であるが、出土遺物から平安時代に比定されるものと思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
81	坏 須恵器	A 13.2 B 3.8 C 8.0	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁は軽く外反し、口唇は尖り気味。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り。	長石・雲母 灰白色 不良	P80 70% 覆土下層
82	坏 須恵器	A 13.5 B 4.1 C 8.1	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁はやや外反し、口唇は丸い。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後、底部全面と体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P79 85% 覆土上層
83	坏 須恵器	A 13.1 B 4.3 C 6.9	体部は外傾し、内彎気味に立ち上がる。中ほどで外反し、口縁は内彎気味。口唇はやや尖る。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後全面に手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 普通	P77 90% 床面直上
84	坏 須恵器	A 13.5 B 4.6 C 8.0	体部は外傾し、口縁までゆるやかに外反する。口唇は丸くおさめる。内面の稜はやや強い。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後、底部の一部と体部下端に手持ちヘラ削り。	石英・長石 灰色 良	P78 85% 床面直上
85	坏 須恵器	A 13.7 B 4.5 C 7.7	体部は外傾し、内彎気味に立ち上がる。口縁は外反し、口唇は丸くおさめる。内外面稜が顕著。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後周縁部ナデ、体部下端回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P76 90% 床面直上
86	坏 須恵器	A 13.8 B 3.8 C 8.0	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁は外反し、口唇は丸い。内面は稜が顕著。厚手。	横ナデ、底部全面に手持ちヘラ削り、体部下半回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 普通	P81 70% 竈覆土上層
87	高台付坏 須恵器	A 14.3 B 6.1 D 8.8 E 1.2	底部は皿状で中央が高まる。体部はやや外傾し、直線的に立ち上がり、口縁はやや外反する。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、高台接合。	長石・砂粒 オリブ灰色 普通	P83 75% 覆土 底部ヘラ記号
88	高台付坏 須恵器	A 17.5 B 6.7 D 10.3 E 1.1	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁はやや外反する。高台はやや外反して開く。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、高台接合。	長石・石英 褐灰色 不良	P82 80% 床面直上
89	高台付坏 須恵器	A (15.4) B 5.9 D 9.6 E 1.3	底部は皿状でいびつ。体部は外傾し、外反する。口縁はわずかに内彎し、口唇は丸い。	横ナデ、高台接合。	長石・雲母 灰白色 不良	P85 50% 覆土
90	高台付坏 須恵器	A (15.9) B [5.5]	底部は平坦。体部の立ち上がり口縁はわずかに外反する。高台は接合後剥離。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、高台接合。	長石・雲母 灰オリブ色 普通	P86 25% 覆土
91	高台付坏 須恵器	A 10.3 B 4.3 D 6.3 E 0.8	小形。体部は外傾し、直線的に立ち上がる。高台はやや開き、畳付は丸味を持つ。	横ナデ、底部回転ヘラ切り、高台接合。	長石・石英 灰黄色 普通	P84 95% 竈
92	甕 土師器	A (15.3) B [11.9]	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は「く」の字状に外反する。口唇部つまみ上げは外反する。	粘土紐巻き上げ、胴部外面ナデ 頸部内外面横ナデ、胴部内面横位ヘラナデ。	長石・雲母 にぶい赤褐色 二次焼成	P87 30% 床面直上

第10号住居跡 (第199図)

位置 B3f₄区を中心に所在し、第3号住居跡の北東約5mに位置する。

規模と平面形 2.95×2.85mの方形状を呈する。

主軸方向 N-111°-E

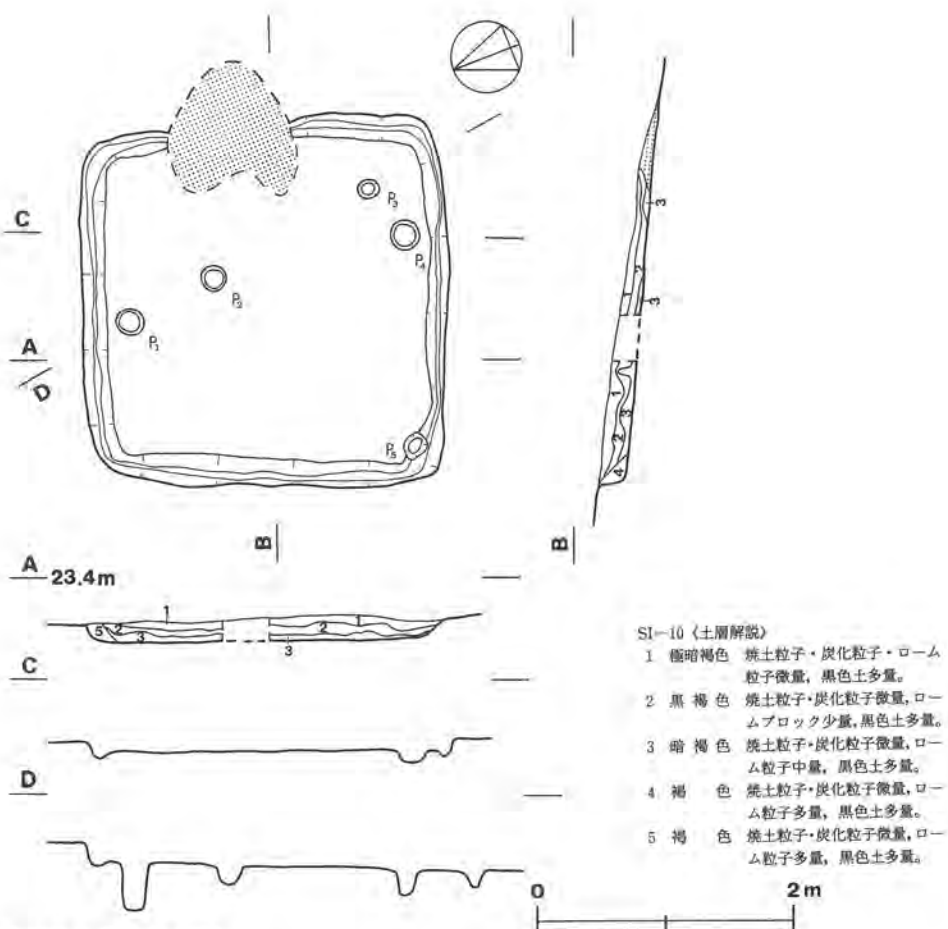
壁 10cm前後の高さで、外傾して立ち上がっている。

壁溝 幅10~20cm、深さ5~10cmで周回している。溝内にピットが1か所ある。

床 ロームで、北東に向かってやや傾斜している。全体に軟弱である。

ピット 5か所を検出した。P₁~P₄は、直径15~25cmの円形を呈し、深さは11cmから40cmまでと一定していない。P₅は30×21cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。

竈 東壁中央のやや北寄りに付設されている。しかし、ほとんどが削平されており、竈の痕跡を確認しただけである。

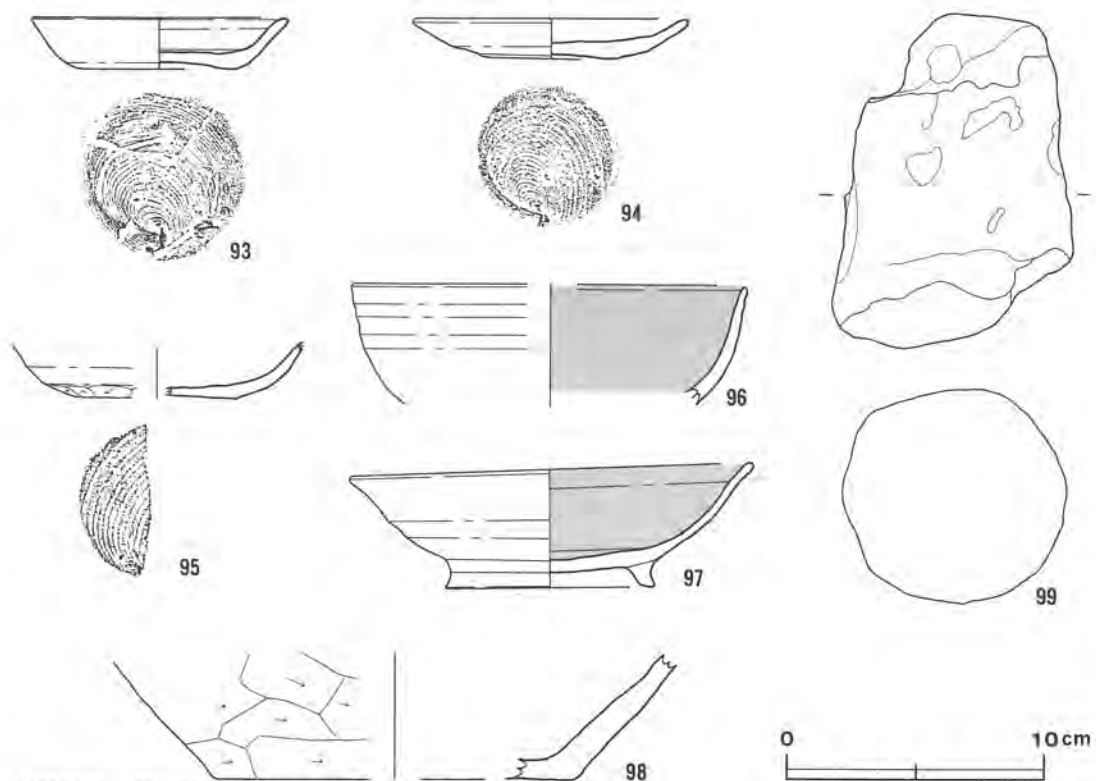


第199図 第10号住居跡実測図

覆土 暗褐色土・黒褐色土・極暗褐色土が堆積していた。自然堆積である。

遺物 主に壁寄りの位置から出土している。94・96・99は北壁寄り、93・98は西壁寄り、95・97は南壁寄りの位置に検出され、98・99は床面直上から、他は覆土下層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。



第200図 第10号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
93	皿 土師質土器	A 10.0	底部は上げ底。体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反し、口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P91 90% 覆土下層
		B 2.5				
		C 6.3				
94	皿 土師質土器	A 10.5	底部は上げ底。体部は強く外傾して開き、中ほどで外反する。口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P90 100% 覆土下層
		B 1.7				
		C 5.4				
95	坏 土師器	B [2.0]	体部は強く外傾して立ち上がり、強く内彎する。上位に至ってやや外反する。底部は上げ底。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P92 50% 覆土下層
		C (6.3)				
96	高台付坏 土師器	A (15.4)	体部は強く内彎し、口縁は外反する。口唇はやや尖る。	横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・礫 橙色 普通	P88 20% 覆土下層
		B [4.8]				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
97	高台付坏 土師器	A 15.6	体部は強く外傾し、内彎して中ほどに稜を持つ。口縁は外反し口唇は丸い。高台はやや開く。	横ナデ、底部回転糸切り、高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・雲母にぶい黄褐色 普通	P 89 60% 覆土最下層
		B 4.9				
		D 8.3				
		E 1.2				
98	甕 土師器	B [4.3]	底部は平坦。胴部は強く外傾し、直線的に外上方へ立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、外面横位手持ちヘラ削り、内面ナデ。	雲母・礫にぶい黄褐色 普通	P 93 5% 床面直上
		C 14.0				

図版番号	器種	法量(cm)	備考
99	支脚	長さ13.2 直径9.4 重さ845.4g	DP3 覆土 両端部欠損

第11号住居跡 (第201図)

位置 B2c₈区を中心に所在し、第5号住居跡の南西約5mに位置する。

重複関係 西側が第1号性格不明遺構と重複する。

規模と平面形 3.4×3.3mの方形状を呈する。

主軸方向 N-107°-E

壁 高さ5cm前後で、やや外傾して立ち上がっている。

床 ロームで、やや起伏がある。全体に軟弱である。

ピット 3か所を検出した。P₁は40×37cmの円形状を呈し、深さは45cmを測る。P₂・P₃は直径25cm前後の円形状を呈し、深さはP₂が23cm、P₃が44cmである。これらは、支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナーに設置されていた。66×50cmの隅丸長方形形状を呈し、深さは17cmを測る。

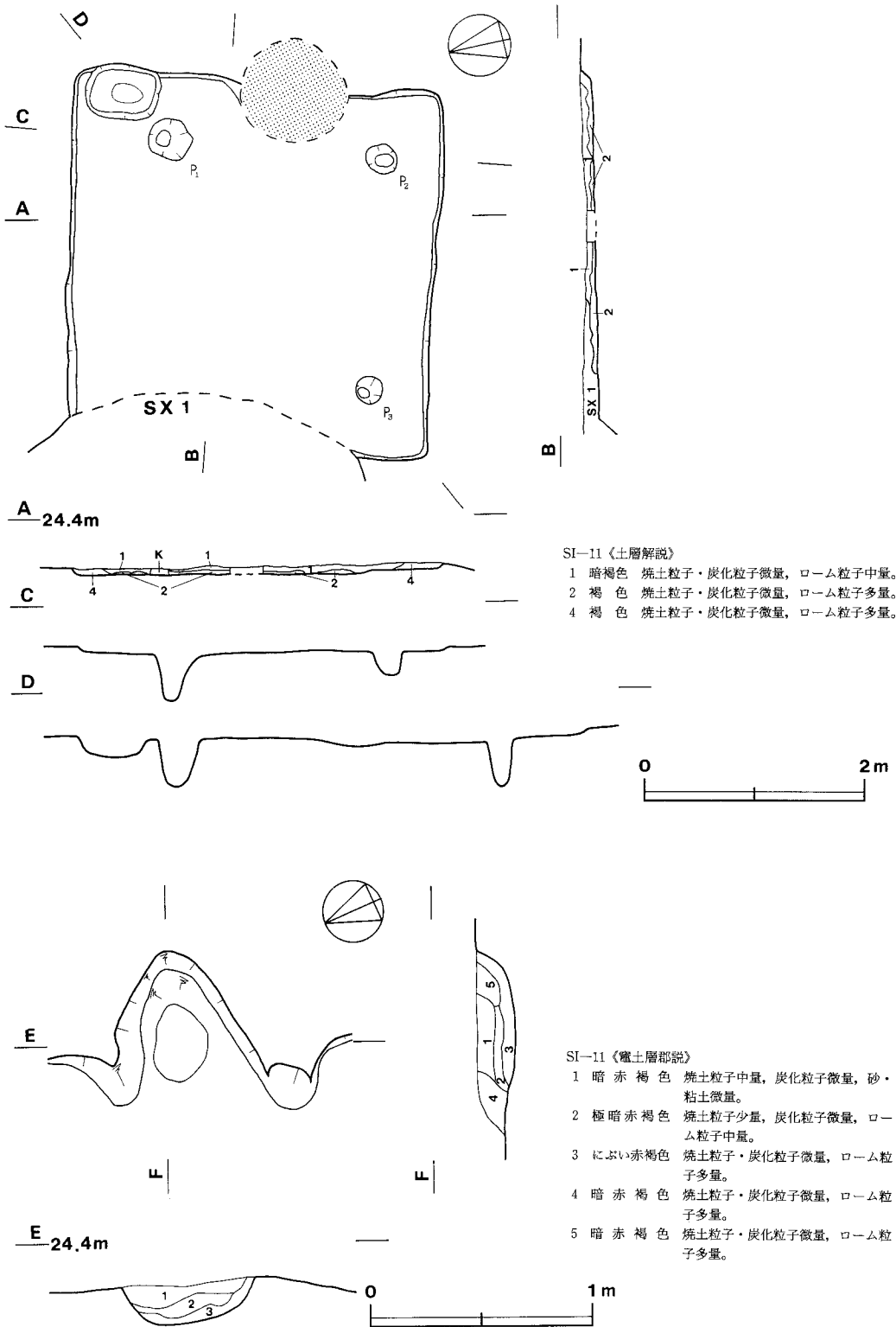
底面は皿状で、壁は外傾しており、断面は逆台形状を呈する。

竈 南東壁中央からやや南寄りに付設されていた。長さ約80cm、幅約110cmを測り、住居跡の壁を45cm程掘り込んでいる。遺存状態は悪い。袖部は砂質粘土で構築されていたが、大半が崩れてしまっていた。右袖先端には人頭大の石が据えられ、粘土とともに袖部を構築する材料として使用された様子を示している。火床は、ロームを5cm程掘り込んでいる。

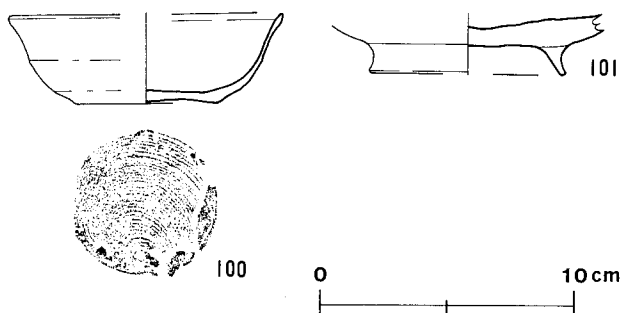
覆土 暗褐色土・極暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 遺物は少ない。100・101は、いずれも竈覆土中から出土している。101は二次焼成を受けており、竈を構築する際の補強材として使用されたものと思われる。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代に比定されるものと思われる。



第201図 第11号住居跡・竈実測図



第202図 第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
100	坏	A (10.8)	底部は上げ底。体部は外傾し、強く内彎して立ち上がる。口縁は外反し、やや肥厚する。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	長石・砂粒 橙色 普通	P94 50% 竈
	土師器	B 3.6				
		C 5.7				
101	高台付坏	B [2.4]	底部は肥厚し、比較的平坦で周縁はやや内彎する。高台は下半が器厚を減じ、開く。	横ナデ、高台接合、内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 二次焼成	P95 30% 竈
	土師器	D (7.6)				
		E 1.2				

第12号住居跡 (第203図)

位置 B2f₄区を中心に所在し、第11号住居跡の南西約15mに位置する。

規模と平面形 4.15×3.9mの隅丸形状を呈する。

主軸方向 N-104°-E

壁 高さ25~30cmを測り、垂直または外傾して立ち上がっている。

壁溝 幅20~40cm、深さ5~10cmで、東壁下を除き周回している。

床 ロームで、平坦である。中央付近は、硬く踏み固められている。

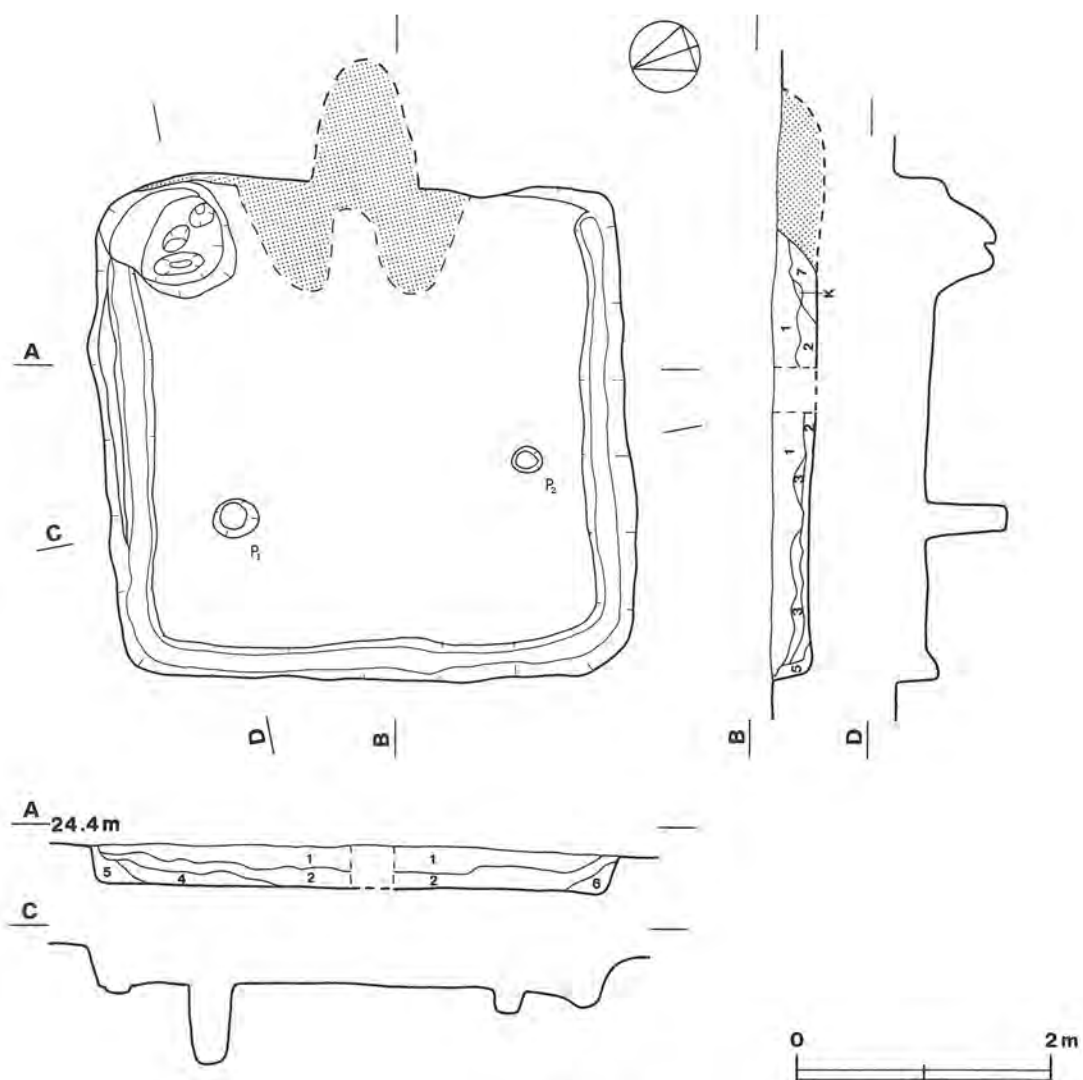
ピット 2か所を検出した。P₁は、37×31cmの楕円形状を呈し、深さは64cmを測る。主柱穴の可能性が高い。P₂は、25×21cmの楕円形状を呈し、深さは21cmを測る。

貯蔵穴 北東コーナーに設置されていた。80×75cmの卵形状を呈し、深さは約40cmを測る。底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。

竈 東壁中央に付設されていた。長さ160cm前後、幅140cm前後を測り、住居跡の壁を100cm程掘り込んでいた。遺存状態はあまり良くない。袖部は砂質粘土で構築されていたが、崩れているため、先端は失われている。火床は、ロームを15cm程掘り凹めている。全体に、壁外に大きく張り出して構築されたことが窺える。

覆土 暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

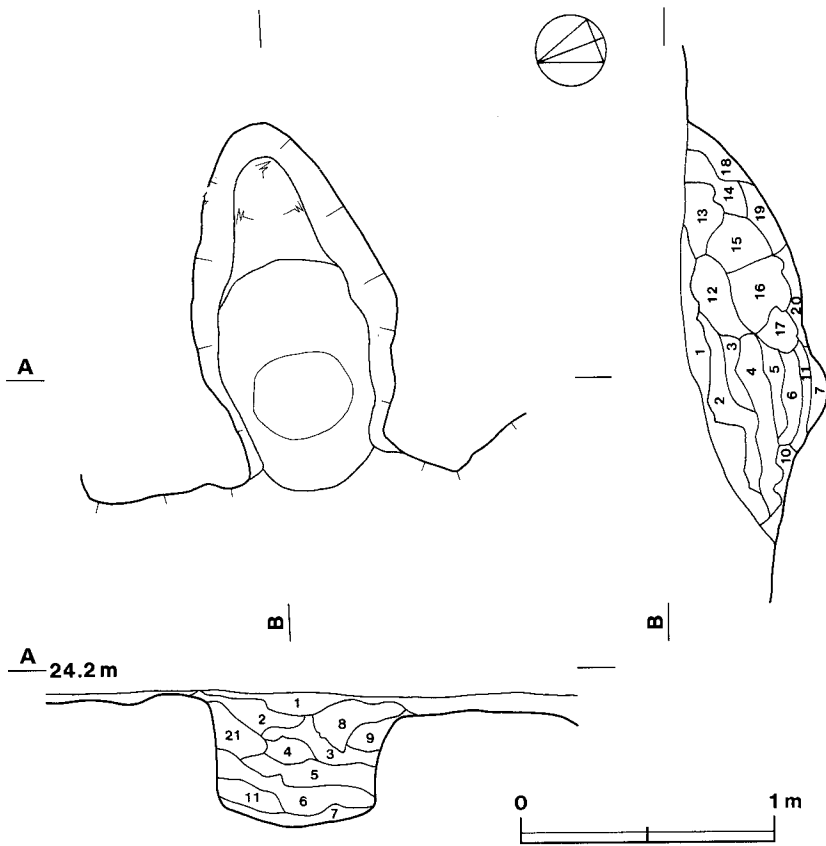
遺物 量は比較的多いが、完存率が高い遺物は極めて少ない。床面直上からの出土遺物は、大半が壁寄りの位置から検出されている。103は北東コーナー、104~106・107・110は南壁寄りの床面



SI-12《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子微量，炭化粒子・ロームブロック少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 5 褐色 焼土粒子微量，炭化粒子少量，ローム粒子多量。
- 6 暗褐色 焼土粒子微量，炭化粒子少量，ローム粒子中量。
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子中量。

第203図 第12号住居跡実測図



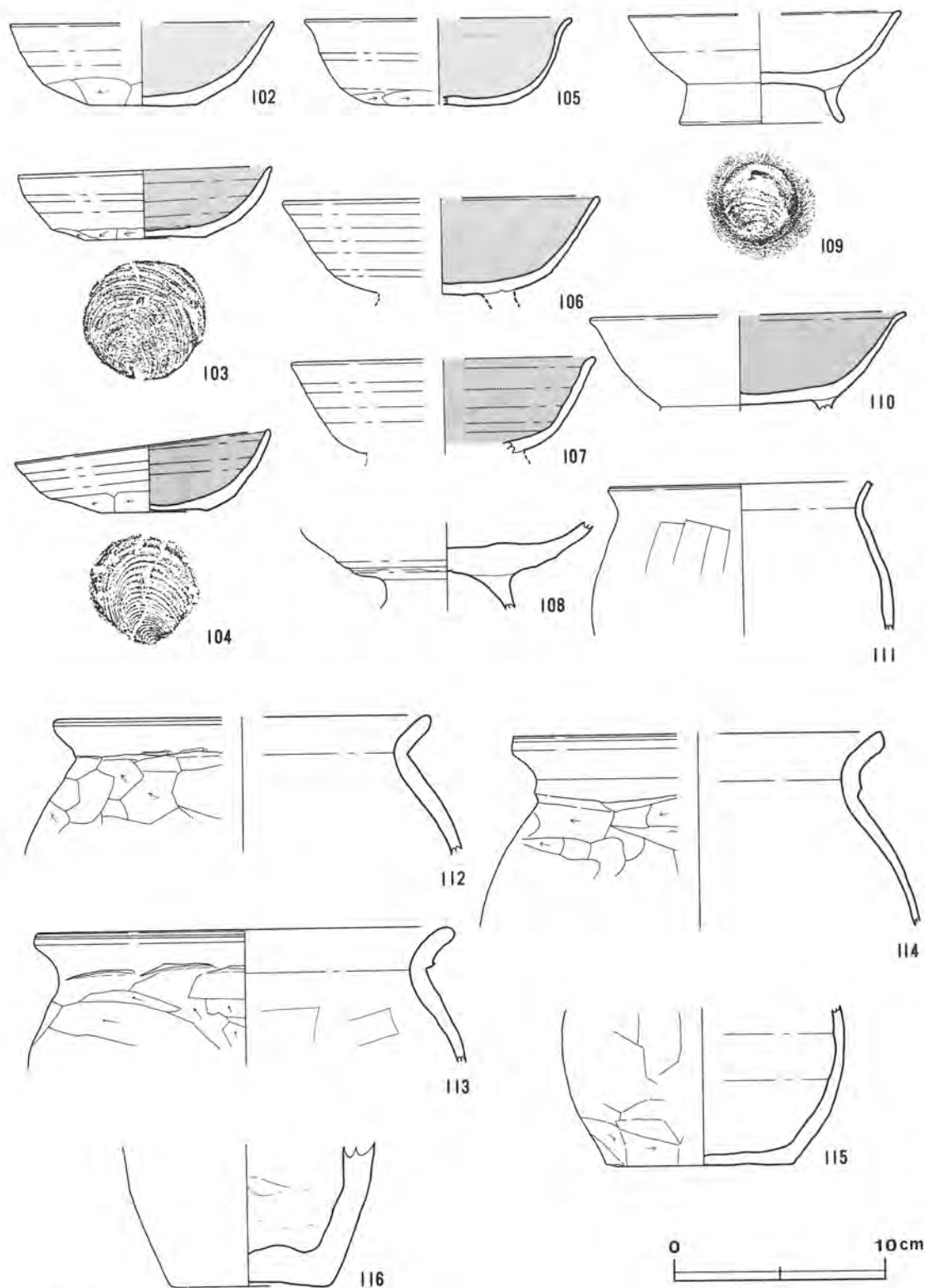
SI-12 《竈土層解説》

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。 | 11 赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量。 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 | 12 灰赤褐色 焼土ブロック中量。 |
| 3 灰赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。 | 13 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量。 |
| 4 にぶい赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。 | 14 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量。 |
| 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量，炭化粒子・ローム粒子微量。 | 15 赤褐色 焼土ブロック多量，炭化粒子微量。 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量，炭化粒子微量。 | 16 にぶい褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量。 |
| 7 極暗赤褐色 焼土粒子多量，ローム粒子少量，炭化粒子微量。 | 17 暗赤褐色 焼土粒子多量。 |
| 8 灰赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。 | 18 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量。 |
| 9 にぶい赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量。 | 19 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム化粒子中量，炭化粒子少量。 |
| 10 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。 | 20 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量。 |
| | 21 灰褐色 粘土多量。 |

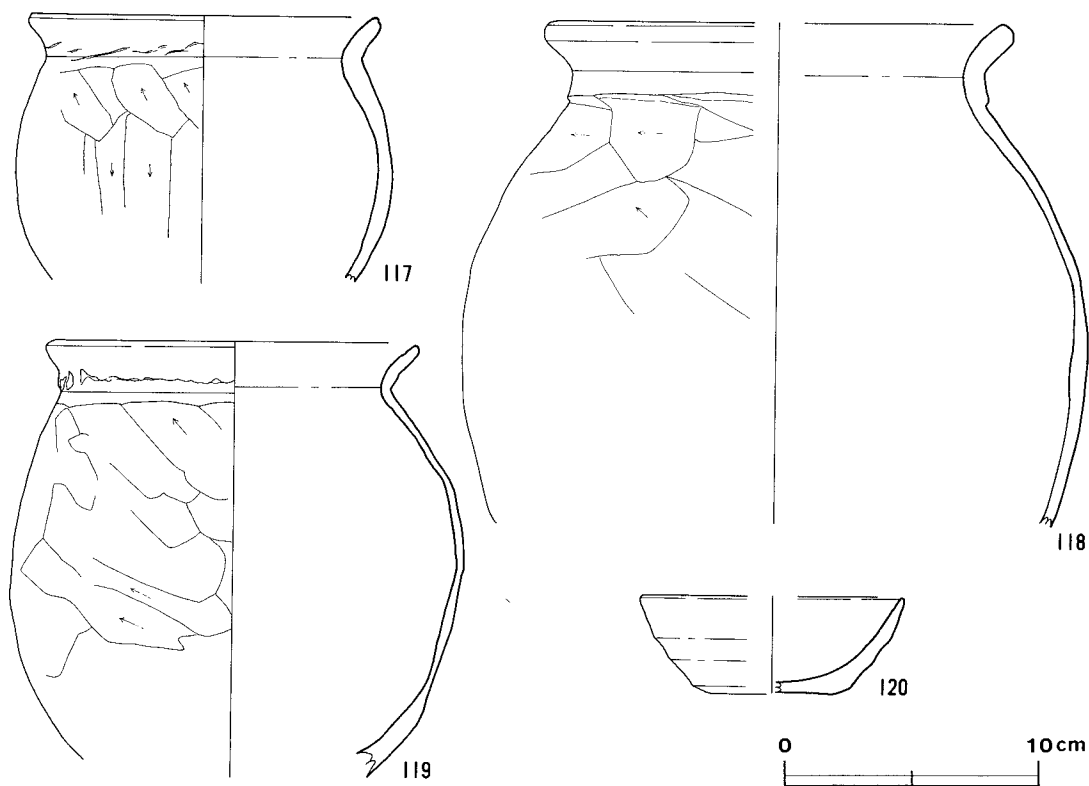
第204図 第12号住居跡竈実測図

直上から出土している。111・115は同一個体と見られ，南壁下の南西コーナーから南東コーナーにかけて16個の破片となって散乱していた。102・112・116～118は，竈覆土から出土しており，補強材として使用されたものと思われる。119は南西コーナー，114は北西コーナーの覆土下層から出土し，109は南寄りの覆土最上層から出土している。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代に比定されるものと思われる。



第205图 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第206図 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

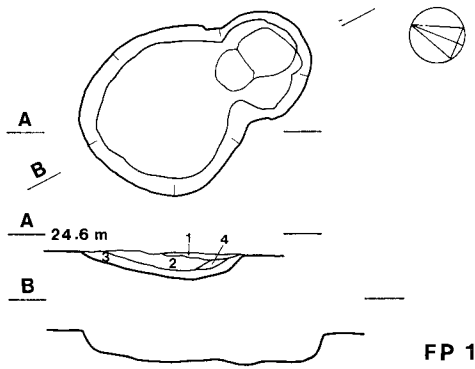
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
102	坏 土師器	A (12.6)	底部は平坦。体部は外傾し、内彎する。口縁は直線的に開き、口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、体部下端粗い手持ちへら削り、内面へら磨き及び黑色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	P98 25% 電覆土
		B 3.9				
		C 5.1				
103	坏 土師器	A 13.0	底部は平坦。体部は丸味を以って内彎し、口縁はわずかに外反する。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、体部下端粗い手持ちへら削り、内面へら磨き及び黑色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P96 100% 床面直上
		B 3.4				
		C 5.3				
104	坏 土師器	A 12.4	底部は平坦。体部は外傾し、内彎する。口唇は丸い。ゆがみが大きい。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、体部下端粗い手持ちへら削り、内面へら磨き及び黑色処理。	雲母・長石 浅黄橙色 普通	P97 90% 床面直上
		B 3.5				
		C 5.2				
105	坏 土師器	A (12.5)	底部は平坦。体部は強く外傾し、強く内彎して腰を持つ。口縁は強く外反し、口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部全面及び体部下端手持ちへら削り、内面へら磨き及び黑色処理。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P99 40% 床面直上
		B 4.2				
		C (6.4)				
106	高台付坏 土師器	A (14.8)	底部は皿状。体部は内彎して立ち上がり、直線的に開く。口唇はやや尖る。高台は剝離。	横ナデ、高台接合、内面へら磨き及び黑色処理。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P100 30% 床面直上
		B [4.7]				
107	高台付坏 土師器	A (14.3)	体部は強く内彎して立ち上がってから直線的に開き、口縁は外反する。高台は剝離。	横ナデ、高台接合、内面へら磨き及び黑色処理。	雲母・長石 にぶい橙色 普通	P102 20% 床面直上
		B [4.5]				
108	高台付坏 土師器	B [4.2]	底部周縁はやや内彎し、体部は外上方へ開く。高台は高く、開きながら外下方へ下がる。	横ナデ、高台接合。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P104 30% 覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
109	高台付坏 土師器	A (12.2) B 5.2 D 7.4 E 1.9	体部は外傾し、中ほどで内彎して稜を持つ。口縁は外反する。高台は高く、ゆがみがある。	内外面横ナデ、底部回転糸切り、高台接合。	砂粒 浅黄橙色 普通	P103 30% 覆土最上層
110	高台付坏 土師器	A (14.6) B [4.6]	底部は浅い皿状。体部は外傾し、ゆるやかに内彎する。口縁は外反し、口唇は外方へ突き出す。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P101 40% 床面直上
111	甕 土師器	A 12.5 B [7.1]	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は丸味を以って外反する。口唇外側にヘラによる凹線が周回。	胴部外面縦位ヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面横位ヘラナデ。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P111 20% 覆土最下層 115と同一個体か
112	甕 土師器	A (17.7) B [6.9]	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は「く」の字状に外反する。口縁は単純。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面ヘラナデ。	長石・雲母 黄褐色 普通	P109 10% 甕
113	甕 土師器	A 19.6 B [6.5]	胴部はゆるやかにすぼまり、頸部は強く外反する。口唇は丸い。頸部外面にヘラきず。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面横位ヘラナデ。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P108 10% 床面直上
114	甕 土師器	A 17.4 B [9.0]	胴部はゆるやかにすぼまる。頸部は肥厚し、やや直立してから外反する。口縁外面に細い凹線。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面ナデ。	長石・雲母 橙色 二次焼成	P107 10% 覆土下層
115	甕 土師器	B [7.5] C 8.7	底部は平坦。胴部は外傾し、強く内彎して立ち上がる。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、胴部内面横位ヘラナデ、底部内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P112 20% 覆土最下層 111と同一個体か
116	甕 土師器	B [6.8] C 7.6	器肉は肥厚する。胴部はやや外傾し、直線的に立ち上がってから内彎する。	粘土紐巻き上げ、外面ナデ及び一部手持ちヘラ削り、内面横位ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P113 20% 甕底面 支脚の代用?
117	甕 土師器	A 13.6 B [10.5]	胴部の張りは強い。頸部は肥厚して強く外反する。口縁外面にはヘラによる凹線が周回する。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P110 15% 甕
118	甕 土師器	A (17.5) B [19.8]	胴部は中ほどが張る。頸部は肥厚し、やや直立してから外反する。口唇は丸い。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面ナデ。	砂粒・礫 橙色 二次焼成	P106 15% 甕(補強材)
119	甕 土師器	A 14.7 B [17.1]	胴部は中ほどが張る。頸部はやや肥厚して「く」の字状に外反し、直線的に開く。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り、頸部内外面横ナデ、胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P105 60% 覆土最下層
120	坏 土師器	A (10.2) B 3.9 C (4.8)	体部は外傾し、内彎する。外面体部下半は強い稜が2段に認められる。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 不良	P132 20% 覆土

2 土坑

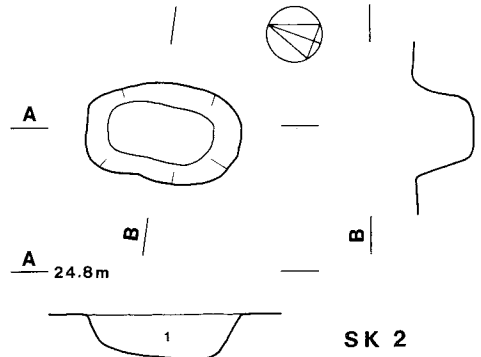
当遺跡から検出された土坑は、36基である。この中には、縄文時代の陥し穴も含まれているが、表として一括掲載し、備考欄にその旨を記入した。なお、土坑出土遺物については、縄文式土器及びその破片は分類して文章で解説し、他は観察表にまとめた。

なお、第1号土坑は炉穴であると判断されたので、別項で解説した。



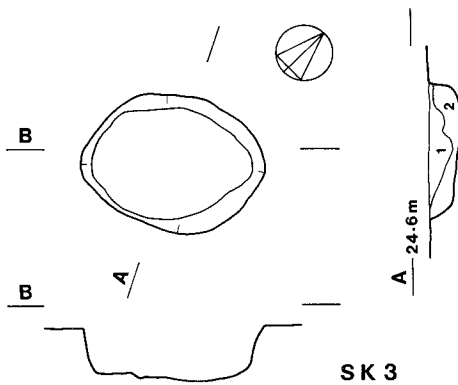
FP-1《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 明褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 明褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



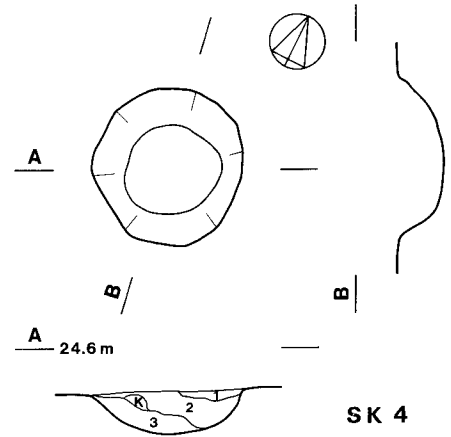
SK-2《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



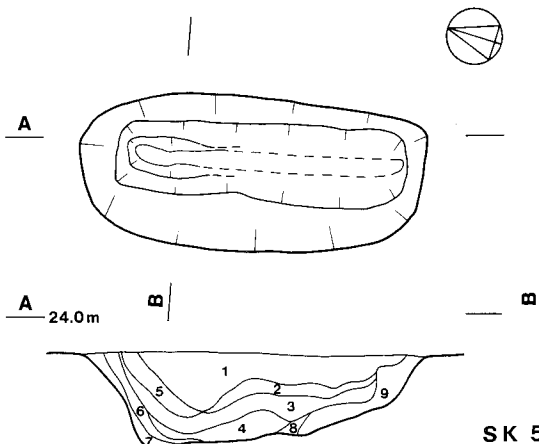
SK-3《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



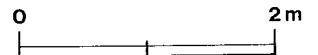
SK-4《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 明褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



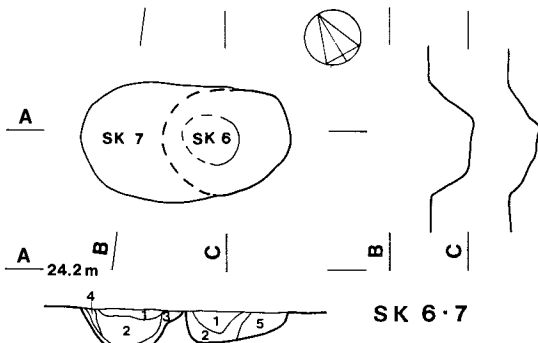
SK-5《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック中量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック多量。
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 9 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



第207図 炉穴・土坑実測図(1)

SK 5

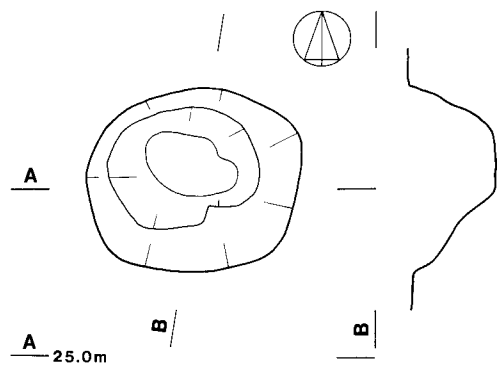


SK-6《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土多量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土多量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土多量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土多量。

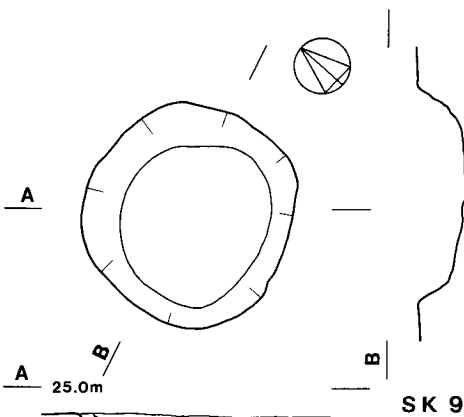
SK-7《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土多量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土多量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土多量。



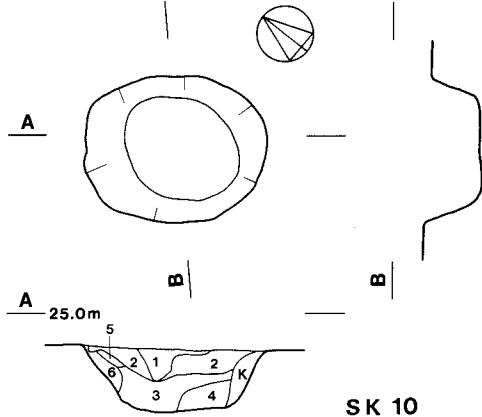
SK-8《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土中量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック中量。



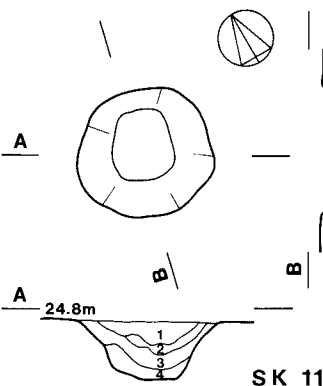
SK-9《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 明褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 明褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



SK-10《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子微量，炭化粒子中量，ローム粒子少量，黒色土多量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土中量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

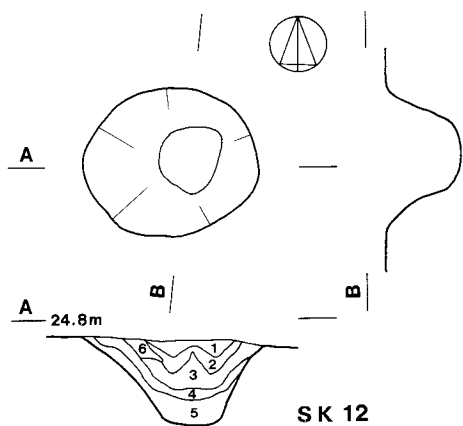


SK-11《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。

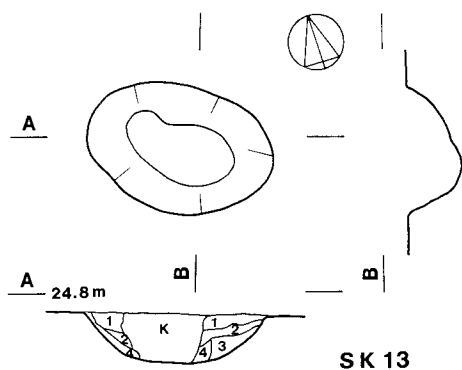


第208図 土坑実測図(2)



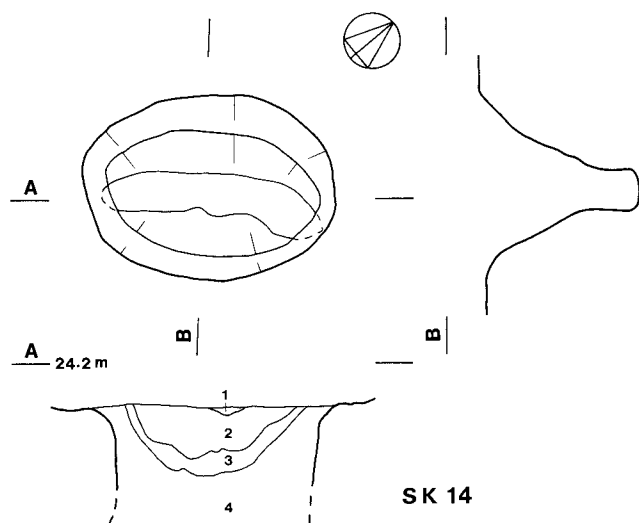
SK-12《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



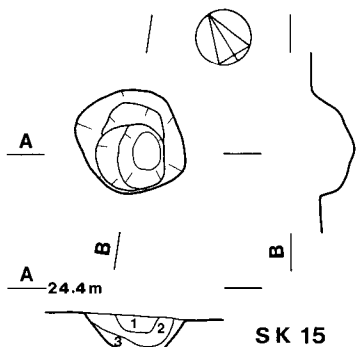
SK-13《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。



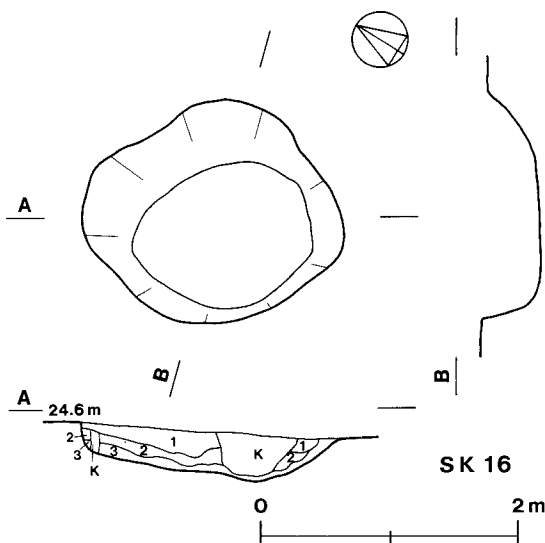
SK-14《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。



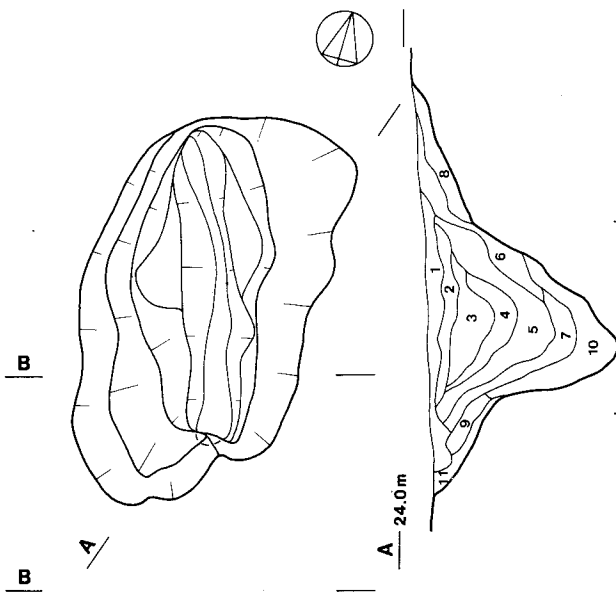
SK-15《土層解説》

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。



SK-16《土層解説》

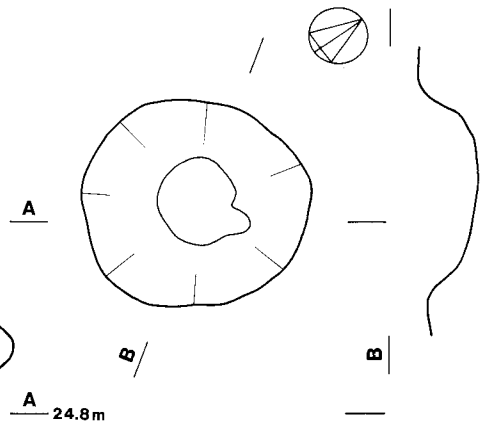
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



SK 17

SK-17《土層解説》

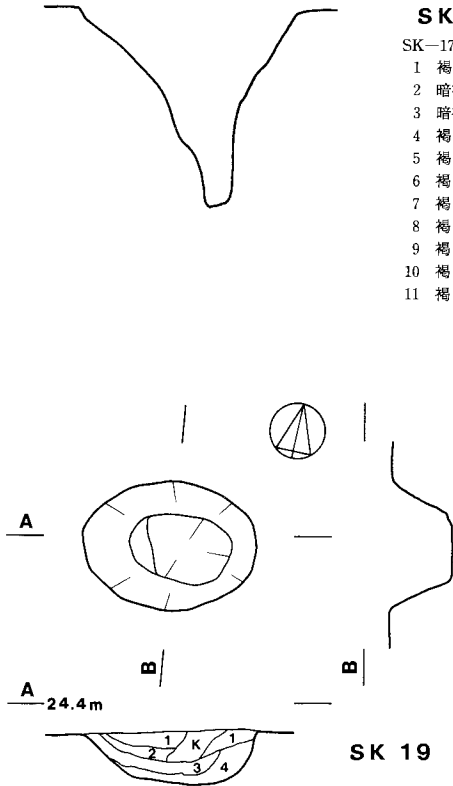
- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子極く少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子極く少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子極く少量。
- 4 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子極く少量。
- 5 褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ロームブロック少量。
- 7 褐色 ローム粒子多量。
- 8 褐色 ローム粒子多量。
- 9 褐色 ローム粒子多量。
- 10 褐色 ローム粒子多量。
- 11 褐色 ローム粒子多量。



SK 18

SK-18《土層解説》

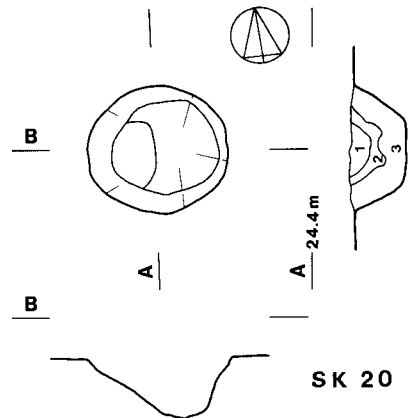
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



SK 19

SK-19《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



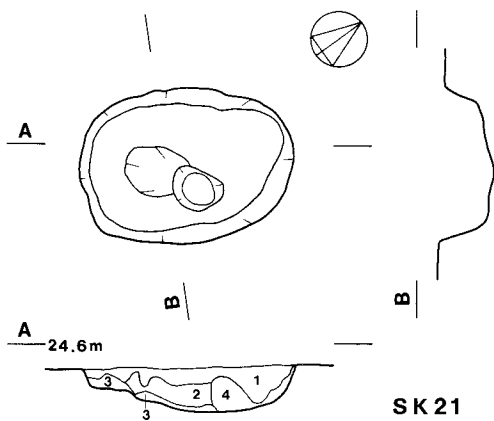
SK 20

SK-20《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土微量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



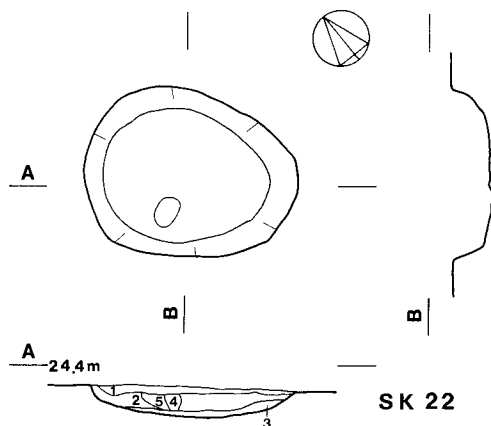
第210図 土坑実測図(4)



SK 21

SK-21《土層解説》

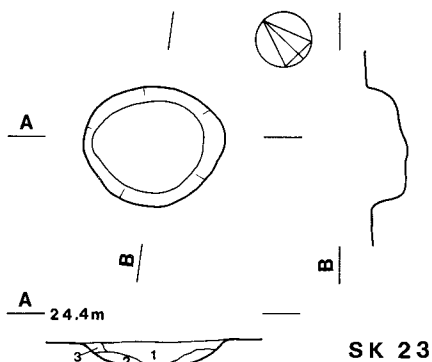
- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 明褐色 ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



SK 22

SK-22《土層解説》

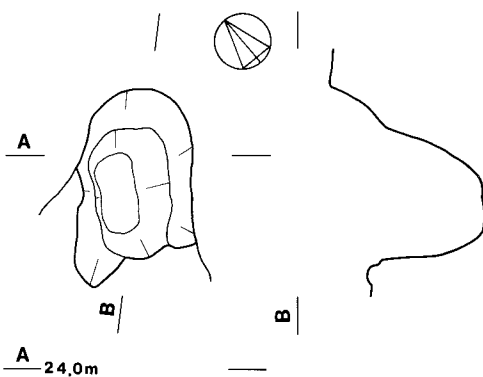
- 1 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 明褐色 焼土粒子微量，ローム粒子多量。
- 5 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子多量。



SK 23

SK-23《土層解説》

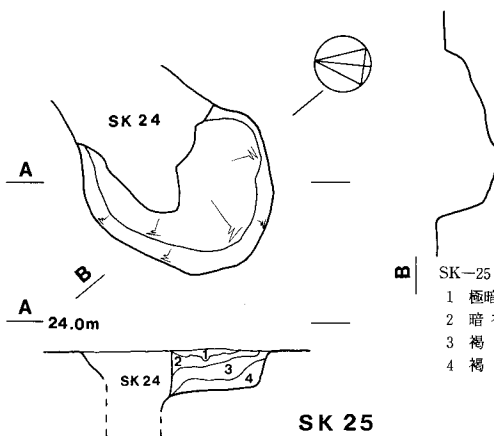
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 ロームブロック多量。



SK 24

SK-24《土層解説》

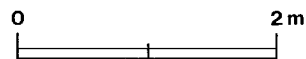
- 1 褐色 焼土粒子・ローム粒子極く少量。
- 2 褐色 ローム粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 褐色 ローム粒子多量。
- 6 褐色 ローム粒子多量。
- 7 褐色 ローム粒子多量。
- 8 褐色 ローム粒子多量。

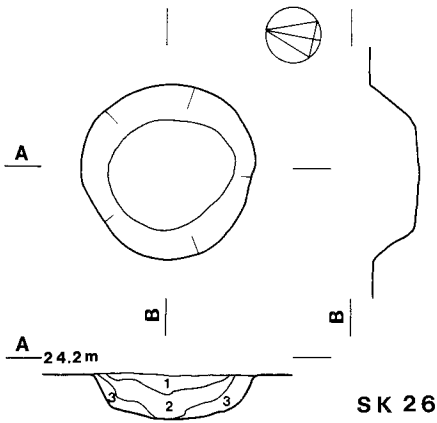


SK 25

SK-25《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

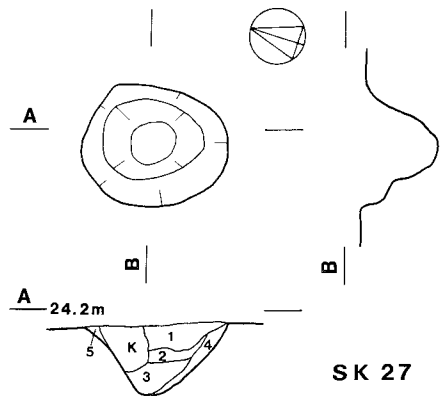




SK 26

SK-26《土層解説》

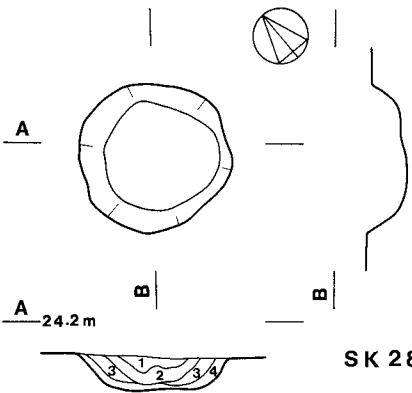
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。



SK 27

SK-27《土層解説》

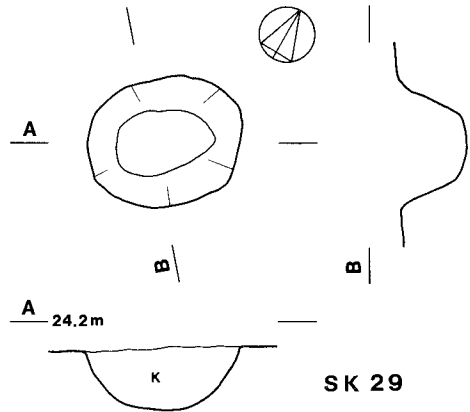
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量，黒色土多量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子少量，黒色土多量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土多量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土多量。



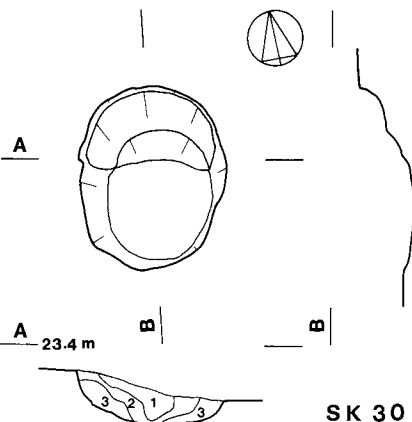
SK 28

SK-28《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック中量，黒色土微量。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土微量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量，黒色土微量。



SK 29



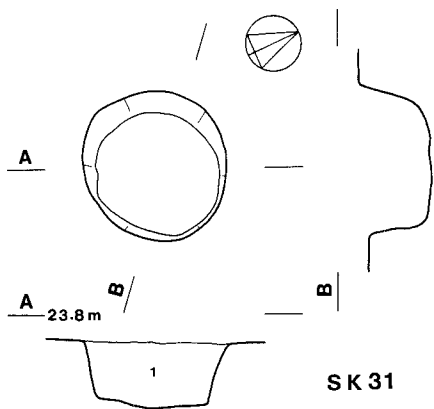
SK 30

SK-30《土層解説》

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量，黒色土多量。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子中量，黒色土中量。
- 3 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ローム粒子多量。

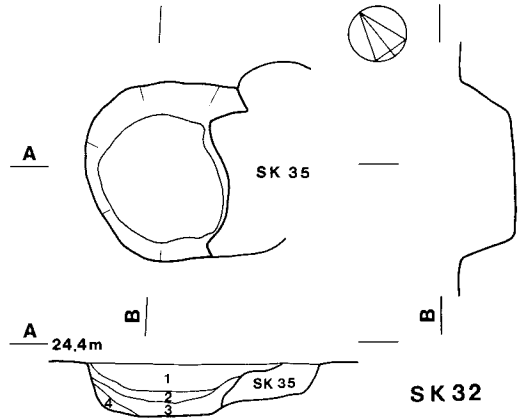
第212図 土坑実測図(6)





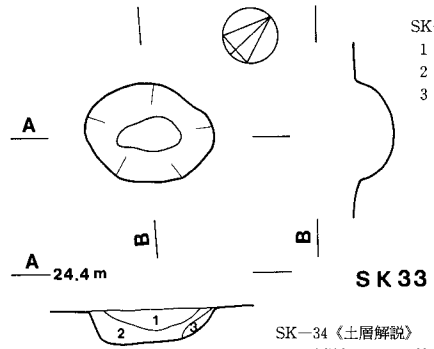
SK-31《土層解説》

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量，ロームブロック多量。



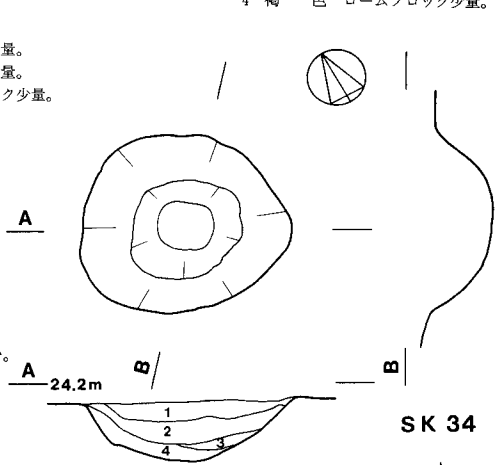
SK-32《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
2 赤褐色 焼土粒子多量。
3 暗赤褐色 焼土粒子少量。
4 褐色 ロームブロック少量。



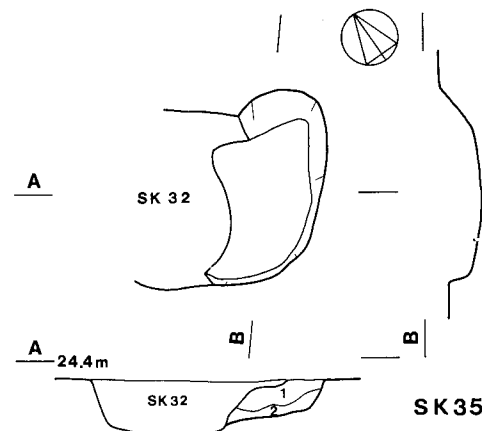
SK-33《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
2 暗褐色 ローム粒子少量。
3 褐色 ロームブロック少量。



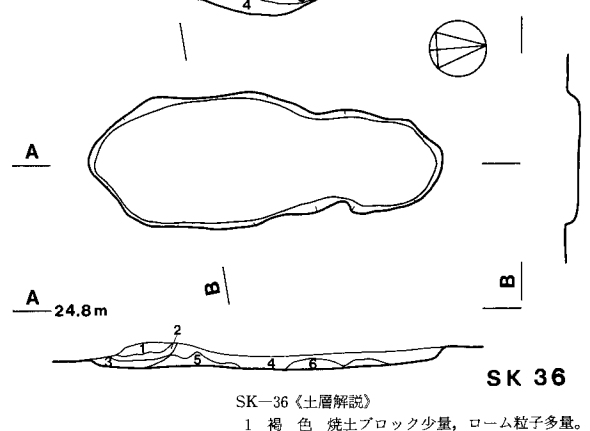
SK-34《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子極く少量，粘土を含む。
2 黒褐色 焼土粒子少量，粘土を含む。
3 暗褐色 ローム粒子少量。
4 暗褐色 ローム粒子少量。



SK-35《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子極く少量，粘土を含む。
2 暗褐色 ローム粒子少量。



SK-36《土層解説》

- 1 褐色 焼土ブロック少量，ローム粒子多量。
2 褐色 焼土粒子少量，ローム粒子多量。
3 明褐色 ローム粒子多量。
4 褐色 ローム粒子多量。
5 褐色 ローム粒子多量。
6 暗褐色 ロームブロック少量。

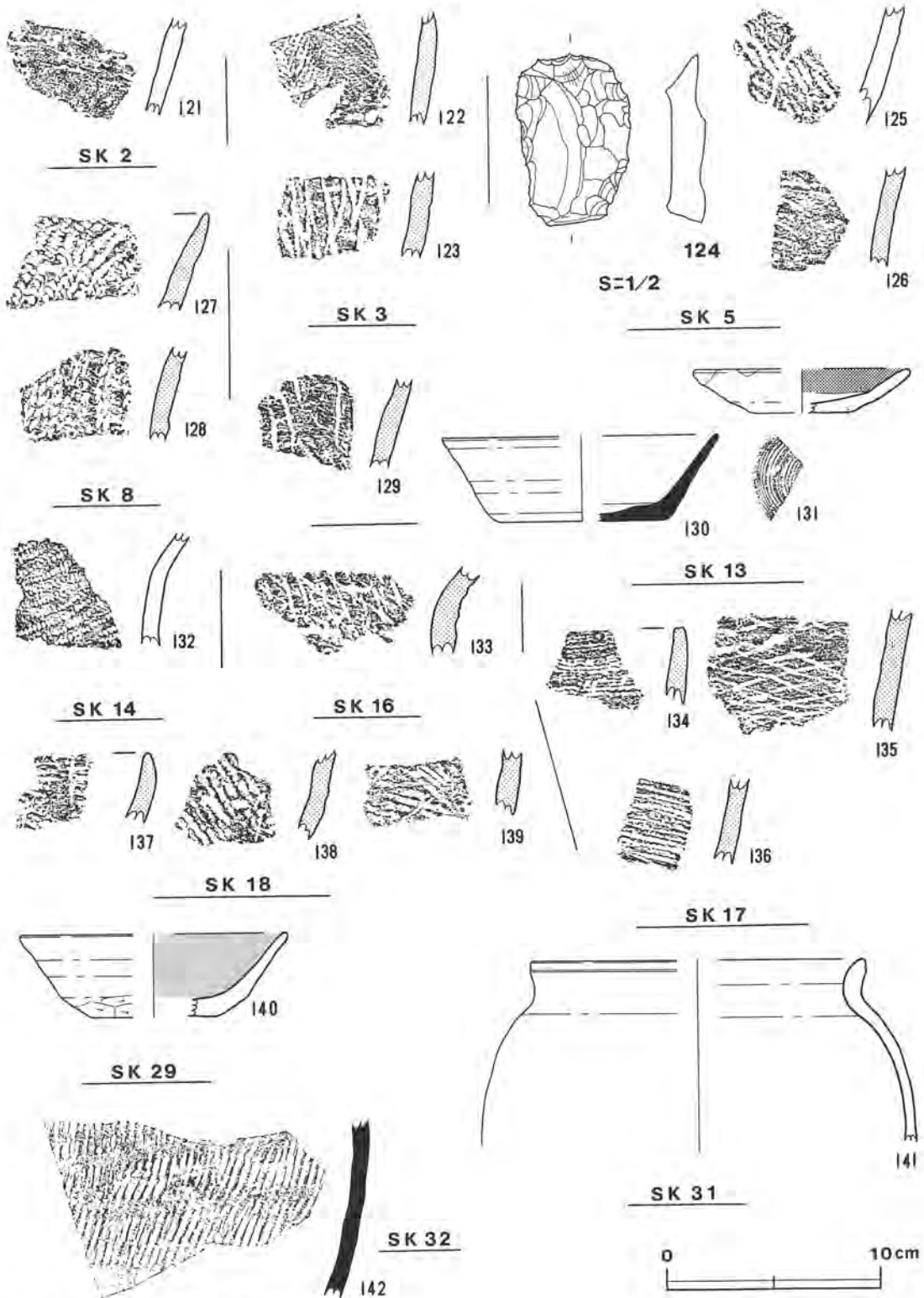


第213図 土坑実測図(7)

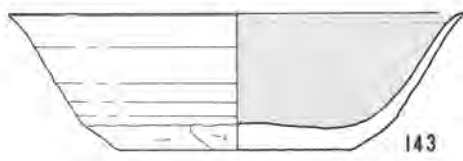
表5 長峰遺跡土坑一覽表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
2	B2b ₄	N-20°-W	楕円形	1.2 × 0.76	0.46	外傾	皿状	B	縄文片2	縄文時代	207
3	B2b ₄	N-51°-E	楕円形	1.45 × 1.1	0.42	外傾	凹凸	N	縄文片3	縄文時代	〃
4	B2a ₅	N-29°-W	円形	1.25 × 1.17	0.35	緩斜	皿状	N			〃
5	B3g ₁	N-8°-W	長楕円形	2.71 × 0.74	1.37	垂直	皿状	N	縄文片3, 土師器片15, 須恵器片10, 掻器1	陥し穴 縄文時代	〃
6	B3h ₁	(N-39°-E)	(円形)	0.87 × (0.85)	0.35	緩斜	傾斜	N			208
7	B3h ₁	(N-48°-W)	楕円形	(1.0) × 0.83	0.25	緩斜	凹凸	N			〃
8	A3i ₁	N-62°-E	楕円形	1.75 × 1.5	0.94	緩斜	平坦	N	縄文片4	縄文時代	〃
9	A3i ₁	N-40°-E	円形	1.8 × 1.73	0.38	緩斜	皿状	N			〃
10	A3i ₁	N-50°-W	楕円形	1.43 × 1.15	0.44	緩斜	皿状	N			〃
11	A3i ₂	N-73°-W	円形	1.09 × 1.02	0.56	外傾	傾斜	N			〃
12	A3i ₂	N-89°-E	楕円形	1.39 × 1.16	0.58	緩斜	皿状	N			209
13	A3i ₂	N-51°-W	楕円形	1.45 × 0.51	0.42	緩斜	傾斜	N	縄文片1, 土師器片21, 須恵器片24, 陶器片1	平安時代	〃
14	B2g ₉	N-36°-E	楕円形	1.98 × 1.47	1.26	垂直	平坦	N	縄文片1	陥し穴縄文時代	〃
15	B3a ₃	N-23°-W	楕円形	0.88 × 0.8	0.31	緩斜	段状	N			〃
16	A3j ₃	N-12°-W	不整楕円形	2.05 × 1.79	0.46	緩斜	皿状	N	縄文片1		〃
17	B3c ₃	N-28°-W	不整形	3.32 × 1.88	1.58	垂直	傾斜	N	縄文片5, 土師器片3, 須恵器片4	陥し穴 縄文時代	210
18	A3j ₂	N-25°-E	円形	1.79 × 1.64	0.48	緩斜	皿状	N	縄文片3		〃
19	B3c ₁	N-84°-E	楕円形	1.38 × 1.02	0.5	外傾	平坦	N			〃
20	B3c ₁	N-88°-W	楕円形	1.12 × 1.0	0.49	緩斜	皿状	N			〃
21	B2b ₅	N-27°-E	楕円形	1.7 × 1.24	0.42	外傾	皿状	N			211

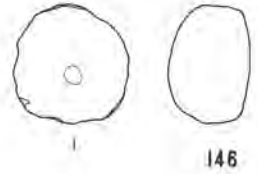
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
22	B2c _s	N-35°-W	楕円形	1.66 × 1.31	0.33	外傾	皿状	N			211
23	B2c _s	N-39°-W	楕円形	1.11 × 0.94	0.31	緩斜	段状	N			〃
24	B2e _s	N-33°-E	隅丸長方形	(1.35) × 0.9	1.25	垂直	凹凸	N		陥し穴 SK-25→本跡	〃
25	B2e _z	N-23°-E	楕円形	(1.55) × 1.35	0.52	緩斜	凹凸	N		本跡→SK-24	〃
26	B2d _s	N-80°-E	円形	1.4 × 1.35	0.4	緩斜	皿状	N			212
27	B2e _s	N-17°-W	楕円形	1.15 × 1.0	0.6	外傾	皿状	N			〃
28	B3e ₁	N-30°-E	不整円形	1.25 × 1.2	0.32	緩斜	皿状	N			〃
29	B2f _s	N-51°-E	楕円形	1.25 × 1.0	0.57	緩斜	皿状	B	土師器片2	平安時代	〃
30	B3a _s	N-15°-E	楕円形	1.45 × 1.15	0.4	緩斜	皿状	N			〃
31	B3e ₃	N-90°	円形	1.2 × 1.1	0.5	垂直	平坦	B	土師器片2	平安時代	213
32	B2f ₄	N-27°-E	楕円形	1.45 × (1.2)	0.44	緩斜	平坦	N	縄文片2, 土師器片12, 須恵器片3	平安時代 SK-35→本跡	〃
33	B2g ₁	N-41°-E	楕円形	1.0 × 0.8	0.28	緩斜	皿状	N			〃
34	B2g ₅	N-54°-W	不整楕円形	1.65 × 1.4	0.51	緩斜	皿状	N	縄文片1, 土師器片11, 陶器片1	平安時代	〃
35	B2f ₅	N-66°-E	楕円形	1.7 × (0.9)	0.31	緩斜	皿状	N	縄文片4, 敲石1	縄文時代 本跡→SK-32	〃
36	B2j ₀	N-4°-E	不整楕円形	2.75 × 1.05	0.15	緩斜	平坦	N	縄文片236, 土師器片5, 須恵器片8		〃



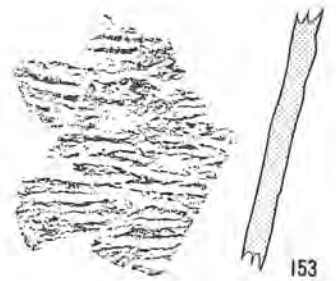
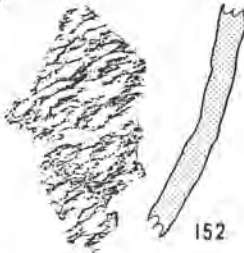
第214図 土坑出土遺物実測・拓影図(1)



SK 34

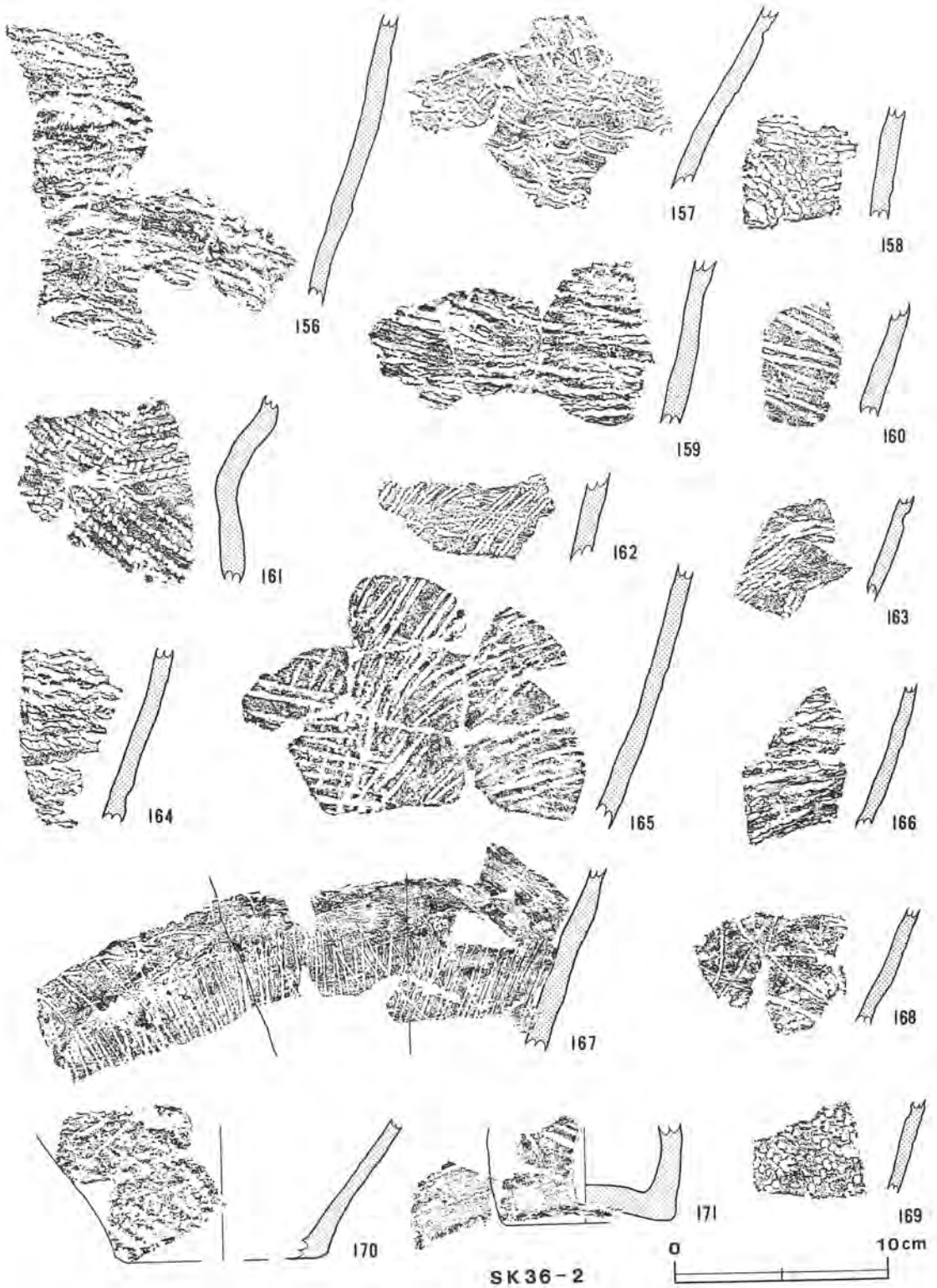


SK 35



SK 36-1

第215図 土坑出土遺物実測・拓影図(2)



第216図 土坑出土遺物実測・拓影図(3)

<縄文式土器及びその破片>

- ・胎土に繊維を含むもの (122・123・126～129・133～139・147～171)

半截竹管による条線・平行沈線・蛇行沈線、押圧・回転押圧縄文、単軸絡条体第5類（網目状捺糸文）、貝殻腹縁文等が見られる。縄文時代前期の黒浜式期に比定されるものである。

- ・胎土に繊維を含まないもの (121・125・132・144・145)

144は、縄文時代前期の浮島式に属するものである。また、121・132・145も同前期後半頃のものと思われる。しかし、125は同中期頃のものと考えられる。

<その他の土器及び石器>

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
130	坏 須恵器	A (13.0)	底部は平坦。体部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁はわずかに外反し、口唇は丸い。	横ナデ、底部全面手持ちヘラ削り。	雲母・長石 黄灰色 普通	P114 60% SK-13覆土
		B 4.0				
		C 7.8				
131	皿 陶器	A (10.3)	体部は強く外傾し、中ほどでやや内彎する。体部内面上半部に施釉。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	(釉) オリーブ褐色 (胎) 灰白色	P115 20% SK-13覆土
		B 2.1				
		C (4.8)				
140	坏 土師器	A (12.5)	底部は平坦。体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反し、口唇は丸い。全体に厚手。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り、内面セラ磨き及び黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P116 20% SK-29覆土
		B 3.9				
		C (6.0)				
141	甕 土師器	A (15.6)	胴部は丸みを以ってすぼまり、頸部は肥厚して外反する。口縁外面はヘラで凹線状を呈する。	粘土紐巻き上げ、胴部外面ナデ 頸部内外面横ナデ、胴部内面横位ヘラナデ。	雲母・長石 橙色 普通	P117 20% SK-31覆土
		B [8.6]				
142	甕 須恵器	B [8.2]	内彎する胴部片で、外面には平行線叩き目と筋状のナデ痕が見られる。	粘土紐巻き上げ、叩き、内面ナデ。	長石・雲母 橙色 普通	TP19 SK-32覆土 酸化焙焼成
143	坏 土師器	A 17.8	底部は平坦。体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反し、口唇は外方へ突き出す。	横ナデ、底部回転糸切り後底部の一部と体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・長石 橙色 普通	P118 50% SK-34覆土
		B 5.4				
		C 8.3				

図版番号	器種	法量(cm)	備考
124	搔器	長さ2.67 幅1.83 厚さ0.83 重さ3.9g	Q3 SK-5覆土 メノウ
146	敲石	長径4.8 短径4.7 厚さ3.2 重さ92.9g	Q4 SK-35覆土 周縁全体に使用痕

3 炉穴

第1号炉穴 [第1号土坑] (第207図)

位置 調査区西寄りの B2c₃区に所在し、第12号住居跡の北約11mに位置する。

主軸方向 N-142°-E

規模と形状 長径1.89m, 短径1.28m, 深さ0.26mで, 平面形はひょうたん形を呈する。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 舟底状を呈する。

炉床部 南東側に位置し, 直径30cm程の範囲が焼土化している。

覆土 褐色土・明褐色土が堆積している。自然堆積である。

所見 出土遺物が無いが, 縄文時代に構築されたものと考えられる。

4 性格不明遺構

先述したように, 当遺跡から検出された性格不明遺構は1基である。これは, 当初井戸跡として調査したが, 形態等から井戸跡と断定するには疑問があることから, 性格不明遺構として扱うこととしたものである。

第1号性格不明遺構 [SE-1] (第217図)

位置 B2c7区を中心に所在し, 第11号住居跡の西側に位置する。

重複関係 第11号住居跡の西側で重複する。

規模と平面形 4.55×4.3mの不整円形を呈する。深さは, 底面まで1.95m, 底面の掘り込み底部まで2.45mを測る。

壁 ロームで, 緩やかな傾斜である。断面形は逆台形状を呈する。

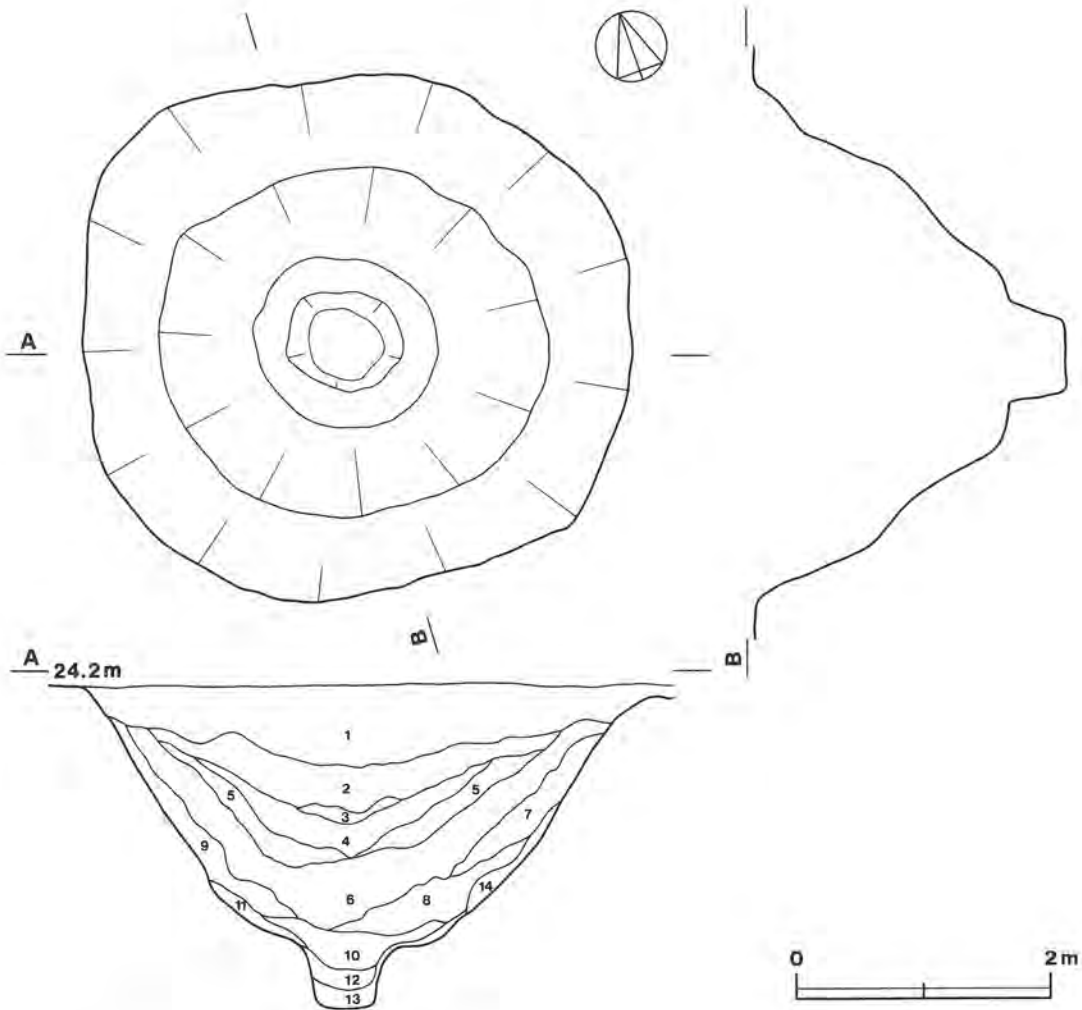
底面 常総粘土層上面を底面としており, 硬く締っている。中央には, 0.9×0.8mの楕円形状で, 深さ約0.5mの掘り込みがある。底面は, 中央の掘り込みに向かって若干傾斜している。

ピット 検出されなかった。

覆土 14層から成り, 暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 第4層から, 172・176・177が出土しており, 本跡の埋没途中で投棄されたものと見られる。

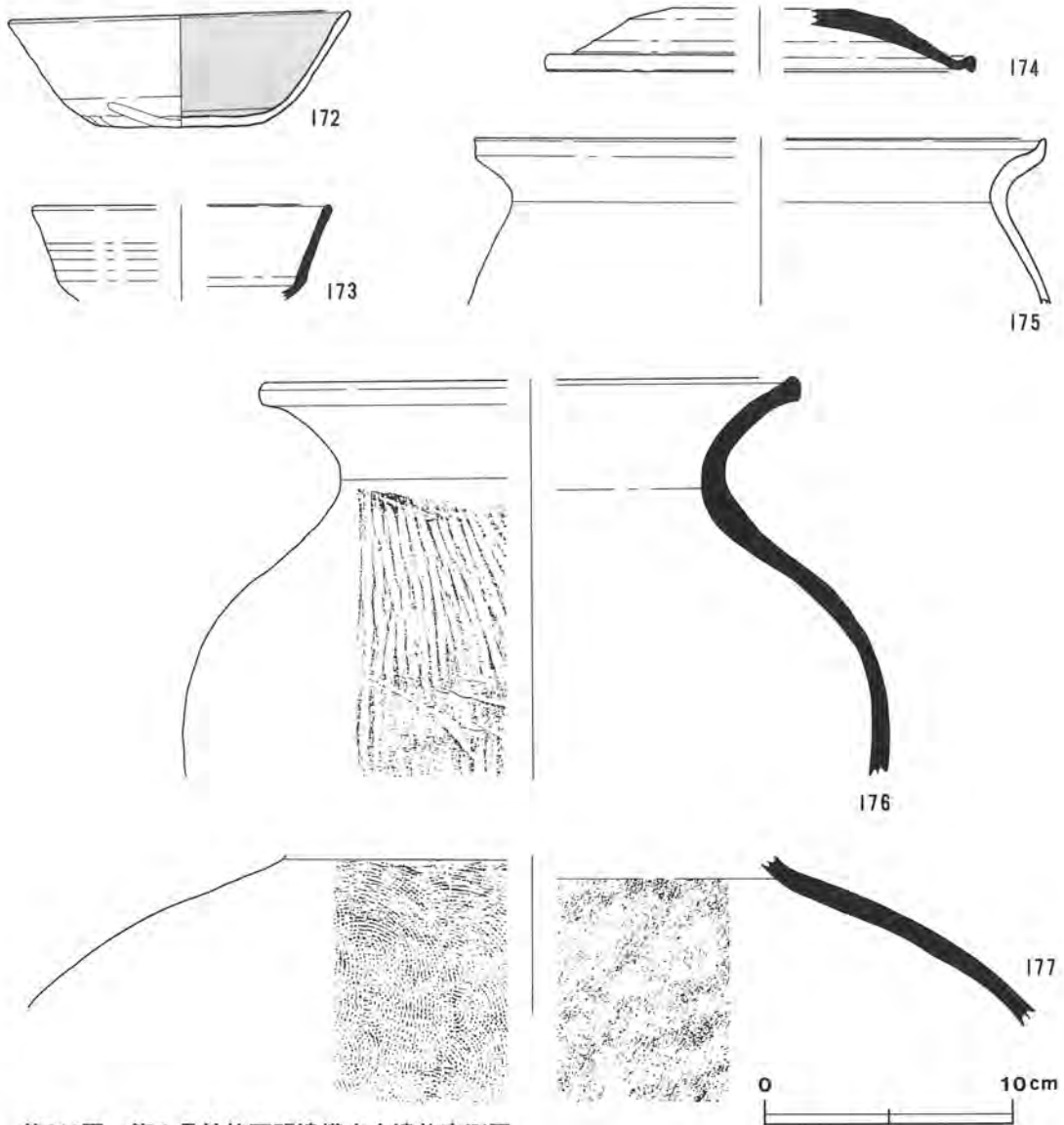
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
172	坏 土師器	A 13.6	体部は外傾し, 内彎してから直線的に開く。口縁はやや肥厚し, わずかに外反する。口唇は丸い。	横ナデ, 底部全面及び体部下端 手持ちヘラ削り, 内面ヘラ磨き 及び黒色処理。	砂粒 に ぶ い 黄 橙 色 普 通	P130 85% 覆土
		B 4.8				
		C 6.7				
173	高台付坏 須恵器	A (11.9)	体部は稜を経て底部と分れ, やや外反して立ち上がってから直線的に開く。口縁は外反する。	横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 良	P126 20% 覆土
		B [3.9]				
174	蓋 須恵器	A (17.4)	天井は高い。端部は折れて下垂し, 内側は沈線状を呈する。	横ナデ, 回転ヘラ削り。	長石・石英 黄灰色 普通	P127 20% 覆土
		B [2.5]				



SX-1 (土層解説)

- | | | |
|--------------------|---------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子極く少量。 | 5 暗褐色 ローム粒子極く少量。 | 10 暗褐色 ローム粒子極く少量。 |
| 2 暗褐色 ローム粒子極く少量。 | 6 暗褐色 ローム粒子極く少量。 | 11 暗褐色 ローム粒子極く少量。 |
| 3 極暗褐色 焼土ブロック極く少量。 | 7 暗褐色 ローム粒子極く少量。 | 12 黒褐色 ローム粒子極く少量。 |
| 4 赤褐色 焼土粒子少量。 | 8 暗褐色 ローム粒子少量。 | 13 暗褐色 ロームブロック少量。 |
| | 9 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。 | 14 褐色 ローム粒子少量。 |

第217図 第1号性格不明遺構実測図



第218図 第1号性格不明遺構出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
175	甕 土師器	A (23.2) B [6.7]	胴部はゆるやかにすぼまる。頸部はやや肥厚して強く外反する。口唇部は高くつまみ上げられる。	粘土紐巻き上げ，胴部外面ナデ 頸部内外面横ナデ，胴部内面横位ヘラナデ。	砂粒・雲母に ぶい黄橙色 普通	P131 10% 覆土
176	甕 須恵器	A (21.9) B [16.1]	胴部は上位が張る。頸部は丸味を以って外反し，口縁は烏帽子状。胴部外面に平行線叩き目。	粘土紐巻き上げ，叩き，頸部内外面横ナデ。	長石・雲母 褐灰色 不良	P128 25% 覆土
177	甕 須恵器	B [6.3]	なだらかにすぼまる肩の破片である。外面に同心円文叩き目が見られる。	粘土紐巻き上げ，叩き，頸部内外面横ナデ。	長石 灰色 良	P129 10% 覆土

第4節 考察

1 出土土器について

今回の発掘調査で得られた土器の総数は2,773点で、その内訳は次のとおりである。

縄文式土器…………… 906点

古墳時代以降の土器……1,867点

ここに示した数字は丹念な接合作業終了後のもので、完形近くまで接合された土器も小さな破片も全て含めている。ここでは特に古墳時代以降の土器について検討を加えることとする。

(1) 古墳時代以降の土器について

① 土器組成

古墳時代以降の土器は、先述したように1,867点が出土している。その構成を土器の種類別に列挙すると、土師器1,297点 (69.5%)、須恵器536点 (28.7%)、土師質土器 (内耳土器を含む) 23点 (1.2%)、陶器11点 (0.6%) となっており、土師器と須恵器が全体の98.2%を占め、しかも土師器は須恵器の2倍以上の割合になっている。

表6 長峰遺跡出土土器片数 (古墳時代以降)

	坏 (底部)	甕 (底部)	高台付 坏	盤	蓋	甌	高坏	壺	高台付 埴	皿	土鍋	計
土 師 器	331 (76)	887 (31)	72			7						1,297
須 恵 器	240 (71)	224 (10)	19	25	16	6	5	1				536
土 師 質 土 器 (含内耳土器)										6	17	23
陶 器		5							5	1		11
計	571	1,116	91	25	16	13	5	1	5	7	17	1,867

器種別割合は、坏30.6%、甕59.5%、高台付坏4.9%、盤1.3%で、残りの3.7%に蓋・甌・高坏・壺・陶器埴・土師質土器皿等が見られる。坏・甕・高台付坏が高い割合を示しているのは、日常雑器として需要が多かったことを表しているものと考えられる。甕が最も多くを占めているのは、他の器種と比較して大形であるため、破片数も多くなっていることによるものと思われ、実個体数を反映したものではないことは明らかである。坏と甕を総破片数で比較すると、坏1に対して甕1.95という比率を示しているが、底部片に限定して比較すると坏1に対して甕0.28となり、この方が実個体数の比率に近いものと判断される。そこで、この比率を参考にして器種別割合を補正す

ると、坏62.4%、甕17.5%、高台付坏10%、盤2.6%、その他7.5%となる。それでもなお、上記3器種は依然として高い割合を示している。しかし、高台付坏や盤の場合には、底部に接合された高台が器体を補強する効果を有すると思われることから、底部片による比較は坏と甕の場合に限って有効であると考えられ、この補正值も参考に留めたい。

主な器種に占める土師器と須恵器の割合は、坏が土師器58%、須恵器42%、甕が土師器79.8%、須恵器20.2%、高台付坏が土師器79.1%、須恵器20.9%である。坏の場合には土師器と須恵器の比率はほぼ3：2であるのに対し、甕・高台付坏の場合には4：1になっており、大きく比率が異なっている。

② 土器分類

当遺跡から出土した土器群の中で、多数を占めるのは坏・甕・高台付坏である。これらは土師器と須恵器によって構成されており、量的には土師器の方が多い。また、これらの土器は、住居跡を中心とした各遺構から出土している。しかし、土師器が殆んど出土していない住居跡や逆に須恵器を欠く住居跡が認められるなど、その内容は多様である。

以上の理由から、当遺跡における古墳時代以降の土器の様相を明らかにするには、複数の器種について分類することが必要であると判断される。そこで、比較的形態に変化が現れる土師器坏・同高台付坏・同甕・須恵器坏について、胎土・形態・技法等を手懸かりとして分類するものとする。

<土師器坏の分類>

土師器坏は、口径11～14cmの小形のものが主体である。そこで、小形のものを対象として分類を行うこととし、覆土下層や竈から出土した坏も加え、14個体について分類を実施した。

I類 底部が回転ヘラ切りされているものである。内面は入念なヘラ磨き後黒色処理が施されている。切り離した後、底部全面と体部下端に手持ちヘラ削りが施されるもの(34)と、底部は切り離した後周縁にヘラナデ調整が施され、体部下位にヘラ先による沈線が数条周回するもの(64・65)がある。

II類 底部が回転糸切りされているものである。切り離し後の調整技法により、さらに分類できる。

a 切り離した後無調整のもの。(100)

b 切り離した後、体部下端に面取り状の粗い手持ちヘラ削り調整を施し、内面はヘラ磨き後黒色処理されているもの。(102～105)

c bの内面調整・黒色処理がいずれも省略されるもの。(23～28)

<土師器高台付坏の分類>

土師器高台付坏は比較的出土量が少なく、床面直上出土遺物のほか、覆土下層出土遺物と竈出土遺物を加えて、9個体を分類の対象とした。ここで扱う高台付坏の切り離し技法は、全て回転ヘラ切りである。

I類 高目の高台を有し、口径が16cm前後を測るもので、当遺跡出土の高台付坏では大形のものである。体部はゆるく内彎して外面に弱い腰を持つ。腰の下位が横ナデ調整されているもの(70)と回転ヘラ削り調整されているもの(29・68)がある。

II類 高台はあまり高くなり、口径が14～15cmを測るものである。体部は強く内彎して外面に丸味のある腰を持つ。腰の下位の調整には、I類と同様に横ナデ(30・110)と回転ヘラ削り(32・106・107)がある。

III類 器高は低く、体部の開き方が強いものである。体部はゆるく内彎し、中ほどに腰を持つ。口縁は外反する。(97)

<土師器甕の分類>

土師器甕は、完存率の高いものが少なかったことから、床面直上や竈で使用された状態で出土したもののほか覆土下層から出土したものを含めて12個体について分類を実施した。なお、便宜上、口径が15cm未満のものを小形甕とした。

・大形甕

I類 口唇部をつまみ上げ、胴部外面下半に縦位のヘラ磨き調整が施されるものである。胴部は上位が張って卵形を呈する。つまみ上げの形態によって、さらに分類できる。

a つまみ上げが大きく、外傾するもの。(78・79)

b つまみ上げが直立するもの。(17)

c つまみ上げが強く外反するもの。(92)

II類 頸部は肥厚し、口唇部を単純におさめるものである。頸部以下は手持ちヘラ削り調整が施され、頸部には明瞭なヘラ痕が残る。頸部の形態からさらに細分できる。

a 頸部が1～1.5cm程直立してから外反するもの。(114・118)

b 頸部に直立する部分が無いもの。(113)

・小形甕

I類 口縁外面にヘラによる横ナデを施して、口唇部をつまみ上げているものである。胴部外面の調整技法により、さらに分類できる。

a 胴部の上位から下位にかけてナデ調整が施され、指頭痕が残る。胴部下端には横位の手持

ちヘラ削り調整が施される。(40)

b 胴部の上位から下位にかけて、縦位の手持ちヘラ削りが施される。(72)

b' 口縁がbよりも単純で、浅い沈線が見られるだけのもの。(111)

II類 頸部は肥厚し、口唇部を単純におさめているものである。頸部の屈曲部以下は手持ちヘラ削り調整が施され、頸部にはヘラ痕が明瞭に残る。(117・119)

<須恵器坏の分類>

須恵器坏は、比較的完存率の高いものが見られる遺構と、逆に完存率の低いものしか見られない遺構があり、一様ではない。そこで、床面出土のものに限定して、完存率の低いものについても分類の対象とした。個体数は、合計8個体である。

I類 口径15cmを測り、やや大きい法量を持つ。底部は切り離された後、やや雑な多方向の手持ちヘラ削り調整が施され、体部と底部との境界には、面取り状に手持ちヘラ削り調整が施される。体部は50°程の角度で立ち上がり、内外面ともに丁寧な横ナデ調整によって水挽き痕が消されている。焼成は甘い。底径指数52，器高指数27 (2)

II類 口径13.5cm前後を測り、I類に次いで大きい法量を有する。底部を回転ヘラ切りで切り離してから、底部の一部と体部下端の一部に回転ヘラ削りまたは手持ちヘラ削り調整が施される。体部は55～60°の角度で立ち上がり、口縁は外反する。底部はやや肥厚している。胎土は長石や石英の粒を含むが、比較的精製されており、焼成は良い。体部の開き方や形態でさらに分類することができる。

a 体部は内彎して立ち上がり、60°程の角度で直線的に開いてから、口縁で軽く外反する。底径指数56，器高指数36 (59)

b 体部は55°程の角度で直線的に立ち上がり、口縁部の外反は強い。底径指数57～59，器高指数33～34 (84・85)

III類 口径13.1～13.2cmを測り、やや小さい法量を持つ。底部は回転ヘラ切り後、全面に手持ちヘラ削り調整が施され、体部下端には幅0.5～1cmの幅で手持ちヘラ削り調整が施される。器肉は全体に肥厚する。胎土は粗く、長石・石英粒を顕著に含む。体部の開き方や形態から、さらに分類することができる。

a 体部は55°程の角度で立ち上がり、内彎気味に開くもの。底径指数62，器高指数30 (6)

b 体部が55°程の角度で直線的に開くもの。底径指数60，器高指数33 (20)

c 体部は50°程の角度で立ち上がり、中程で外反するもの。底径指数53，器高指数32 (83)

IV類 口径12.5cmと、当遺跡出土の坏では最も小さい。底部は回転ヘラ切り後、底部の一部と体部下端に手持ちヘラ削りが施される。体部は、55°程の角度で直線的に立ち上がり、口縁は軽

く外反し、口唇は丸くおさめられる。胎土はII類に近以し、焼成は良い。底径指数54，器高指数36（41）

※ 底径指数=底径÷口径×100

器高指数=器高÷口径×100

③ 編年

以上の分類結果と土器組成から、当遺跡の住居跡について、次の3概期にわたる変遷を認めることができる。

1期 土師器甕I-a類を以って1期とする。他に遺物が無いことから、根拠としては極めて弱いものの、当遺跡における須恵器出現以前の可能性がある。



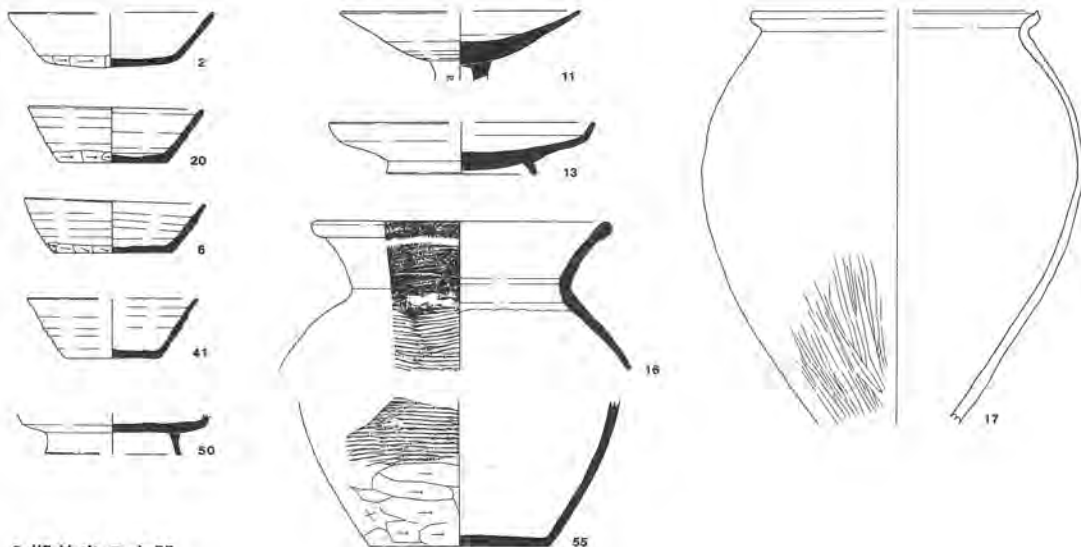
2期 土師器甕I-b・c類，須恵器杯（全）を以って2期とする。

1期の土器

当遺跡において、須恵器が使用された時期である。土器組成は、須恵器（坏・高台付坏・盤・高坏・甕）及び土師器甕であるが、住居跡の規模によって違いが認められ、規模が大きい場合には種類が多く、小さい場合には少ない傾向にある。土器組成や須恵器の形態から、前・後半に分けられる可能性がある。資料が少ないが、敢て示すと次のようになる。

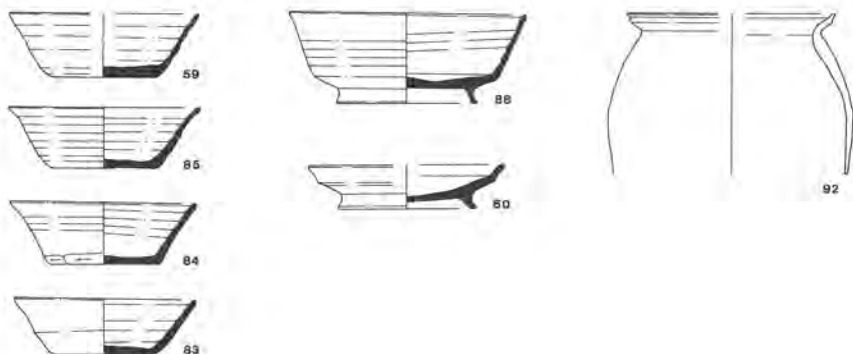
前半 土師器甕I-b類，須恵器坏I類，同III-a・b類，同IV類を以って2期前半とする。

土器組成は、2期の全ての種類が含まれ、さらに土師器甕I-c類も存在したと思われる。



2期前半の土器

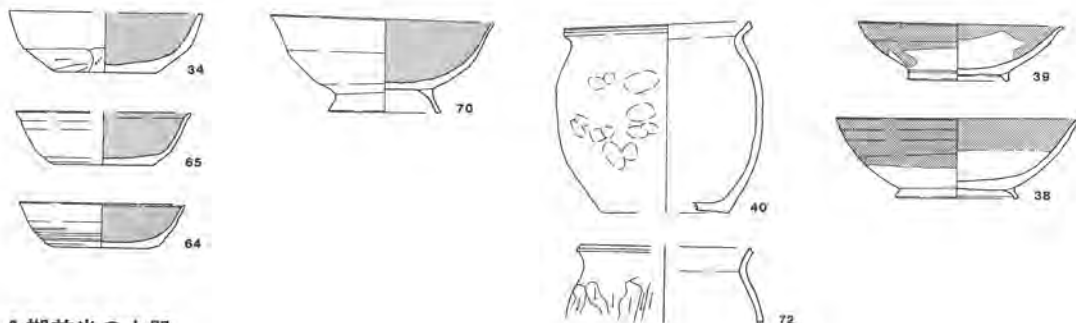
須恵器坏は、底部回転ヘラ切り後、底部の全面と体部下端に手持ちヘラ削りが施され、高台付坏は体部と底部の境界が明瞭な稜をなしている。また、盤の底部は高台内が下がっている。後半 土師器甕Ⅰ-c類、須恵器坏Ⅱ-a・b類、同Ⅲ-c類を以って2期後半とする。土器組成から、須恵器高坏と同甕が見られなくなる。高台付坏の体部と底部の境界は丸味を有し、盤の場合はシャープな稜をなしている。



2期後半の土器

3期 土師器坏(全)、同高台付坏(全)、同甕Ⅱ類、同小形甕(全)を以って3期とする。当遺跡における須恵器消滅以後である。土器組成等から、前・後半に分けることができる。

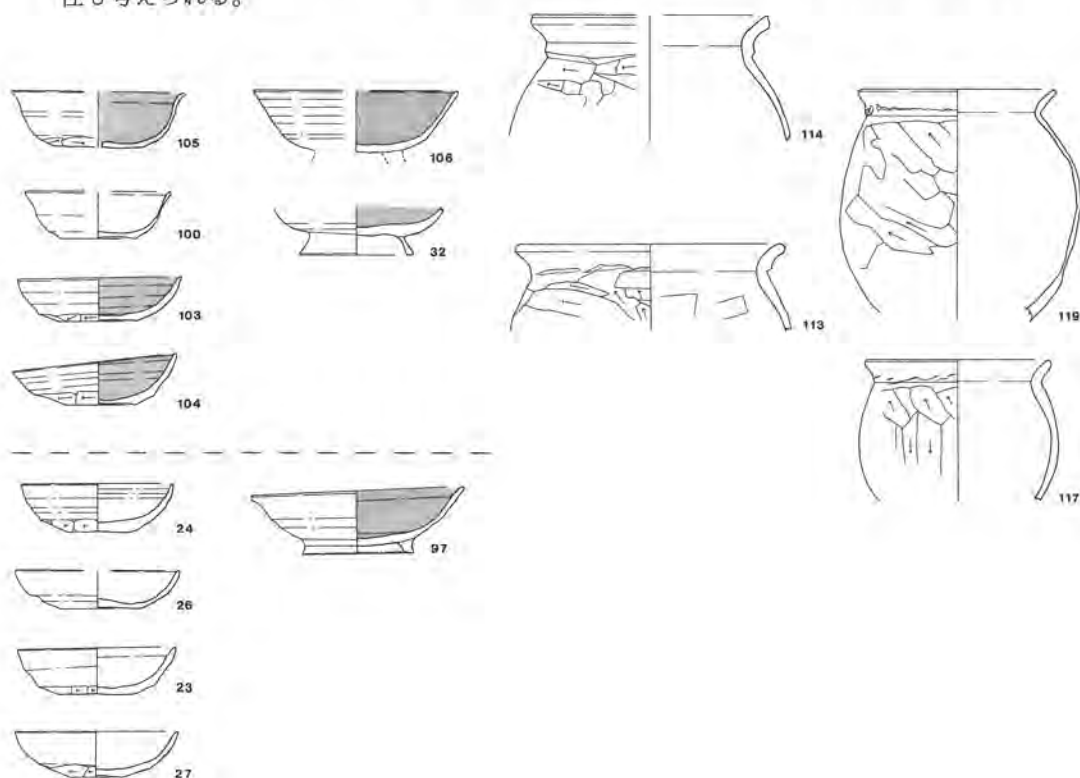
前半 土師器坏Ⅰ類、同高台付坏Ⅰ類、同小形甕Ⅰ-a・b類を以って3期前半とする。坏の切り離し技法は回転ヘラ切りで、内面はヘラ磨き調整及び黒色処理が施される。高台付坏は大形で、高目の高台が付けられる。小形甕の口縁外面にヘラがあてられ、小さくつまみ上げられるか、沈線が施される。土器組成は、坏・高台付坏・小形甕・陶器塊である。



3期前半の土器

後半 土師器坏Ⅱ-a・b・c類、同高台付坏Ⅱ・Ⅲ類、同甕Ⅱ-b類、同小形甕Ⅱ類を以って3期後半とする。土器組成は、坏・高台付坏・甕・小形甕である。坏の切り離し技法に回転糸切りがとり入れられる。高台付坏はやや小形化し、高台も低い。甕の頸部は肥厚し、胴部外

面には雑な手持ちヘラ削り調整が施される。坏II-b類は、坏II-c類・高台付坏III類と共伴せず、両者の間に若干の時期差が考えられるが、単に土器組成の違いを示すだけである可能性も考えられる。



3 期後半の土器

④ 各期の年代について

次に、各期の年代について考えたい。

1期は遺物に乏しく、土師器甕口縁部の形態以外には手懸かりがない。「常総型」のやや古いタイプと考えることができるものの、根拠としては極めて弱いことは否定できない。従って、ここでは古墳時代後期頃とするに留めたい。

2期は、須恵器を手懸かりとしたい。第1号住居跡出土の盤(13)は高台内がやや下がり、古い形態を留めていると考えられる。しかし、木葉下窯跡群⁽¹⁾TC-5の盤と比較すると明らかに下がり方が小さく、TC-5よりも新しい時期のものと判断される。TC-5が8世紀末～9世紀初頭とされていることから、この盤は9世紀に位置付けられると思われる。第5号住居跡出土の小形盤(48)の底部も同様である。この盤は覆土下層から出土しており、住居跡廃絶後あまり時間を経ない段階で投棄されたものと考えられることから、住居跡の時期は9世紀に求められると思われる。第6

号住居跡竈出土の小形盤は、雑な作りであるが体部と底部との境界がシャープな稜をなし、前2例よりも若干時期が下る可能性が高い。第1号住居跡から高坏が出土している。鹿の子C遺跡⁽²⁾では高坏・高盤は1期だけに見られることから、当遺跡にあってもそれに近い時期を考えることができる。坏は、III-a・b類に鹿の子C遺跡の須恵器坏II群B・C類との類似点が認められ、同時に千葉市中原窯跡⁽³⁾の坏I群との類似点も多い。(III-a類とIII-b類との間に見られる器形や法量の違いを、個体差と見るか時期差と見るかについては、断定することはできないが、時期差の可能性はある。)第5号住居跡出土の高台付坏(50)は、体部と底部の境界が明瞭な稜をなし、高台も開き気味であることから、鹿の子C遺跡第1期に対応するものと考えられる。坏III-C類は底径がさらに小さくなり、III-a・b類と区別される。器形と法量は、鹿の子C遺跡の坏IV群B類に類似し、また、中原窯跡の坏III群との類似点も見られる。第9号住居跡出土の高台付坏(88)は、体部と底部との境界が丸味を有するなど、鹿の子C遺跡の第2期の特徴を備えている。第6号住居跡出土遺物では、坏は鹿の子C遺跡の坏V群B類に、盤は第2期の盤に対応するものと考えられる。以上の点から、2期は9世紀前半に位置付けられ、前半は9世紀初頭、後半は同第2四半期に比定されると思われる。

3期は、土師器と陶器を手懸かりとしたい。土師器高台付坏I類は、陶器碗を模放したものと考えられ、高台が高目で開いていることと考え併せて、時期を10世紀⁽⁴⁾に求めるのが妥当であると思われる。第4号住居跡出土の陶器碗(38)は、高台畳付が内彎して三日月高台状を呈するものの、体部が強く内彎して深いこと、見込みに沈線が周回していること、つけがけによって施釉されていること等の特徴から、猿投における折戸53号窯期に比定されるものと推定される。この陶器碗は、第4号住居跡の覆土最下層から出土しており、住居跡の時期と近接しているものと判断される。土師器坏b・b'類は、技法の特徴は千葉県袖ヶ浦町永吉台遺跡群遠寺原地区⁽⁵⁾の土師器坏IVB類と一致しており、時期が近接していると思われる。永吉原遺跡群では、10世紀第4四半期とされているが、当遺跡の坏とは細部に違いが認められることから、10世紀後半を前後するものと考えられる。土師器甕は、竈補強材に再利用されたものと住居跡で使用されたものとの間に頸部の形態に違いが認められる。前者は「コ」の字状、後者は「く」の字状を呈しており、時期差による形態の変化と考えられる。これは、群馬県下・埼玉県南部等で10世紀後半頃の変化としてとらえられており⁽⁷⁾、当遺跡にあっても同様であると思われる。以上の結果、III期は10世紀に比定され、前半を10世紀前半～中頃、後半を10世紀後半に位置付けるのが妥当であると思われる。

※ 第1号性格不明遺構出土の土師器坏は、その形態や整形技法から、9世紀後半に位置付けられるものと判断される。覆土中位から出土したものであるが、投棄されたものと考えられることから、第1号性格不明遺構が9世紀後半には半ば埋没した状態で存在したことは確実であると思われる。

註

- (1) 「茨城県教育財団文化財調査報告第21集 木葉下遺跡Ⅰ」 茨城県教育財団 1983
- (2) 「茨城県教育財団文化財調査報告第20集 鹿の子C遺跡」 茨城県教育財団 1983
- (3) 関口達彦 「千葉市中原窯跡確認調査報告書」 千葉県文化財センター 1990
- (4) 寺内博之他 「(5) 下総・上総国における古代末期の土器様相」 『神奈川考古 第21号—シンポジウム 古代末期～中世における在来系土器の諸問題—』 神奈川考古同人会 1986
- (5) 笹生衛他 「君津都市文化財センター発掘調査報告書第12集 永吉台遺跡群」 東急不動産株式会社・(財)君津都市文化財センター 1985
佐久間豊 「房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」 『研究紀要10』 (財)千葉県文化財センター 1986
- (6) 綿貫綾子 「(1) 上野国における古代末期の土器様相」 (4)と同書
福田健司 「(3) 南武蔵における平安時代後期の土器群」 (4)と同書

(2) 集落の変遷について

当遺跡の住居跡は、出土遺物の分類・編年により、次の各期に分けることができる。

1期 第8号住居跡

2期 前半 第1・2・5号住居跡 (1号住居跡と2・5号住居跡間に時期差?)

後半 第6・9号住居跡

3期 前半 第4・7号住居跡

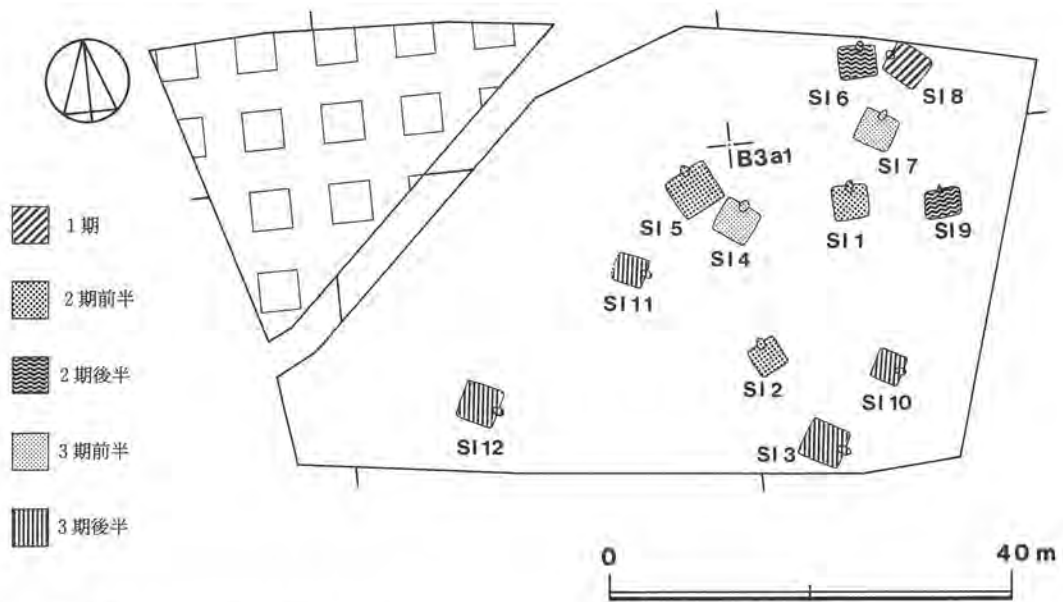
後半 第3・10～12号住居跡 (3・10号住居跡と11・12号住居跡間に時期差?)

各期毎の住居跡は、互に類似した方向性を有している。調査区が道路幅という制約があり、断定することはできないが、9～10世紀の集落は数軒の住居跡を単位として構成され、1単位内の住居跡は方向性等の構造も良く似ている。ここで述べた方向性とは、具体的には竈の位置である。そこで、竈の位置の変化を示すと、次のようになっている。

北西→北→北東→東南東

北西から北への変化は必ずしもスムーズではなかったと思われるが、判然としない。しかし、概して北西から東へ移行していることは明らかである。

次に、各単位毎に見ると、住居跡の規模と遺物量に差が認められる場合がある。この場合、規模が大きければ遺物も多く、規模が小さければ遺物も少ないことから、各単位内での地位の差に由来するものと思われる。



第219図 長峰遺跡時期別遺構配置図

2 性格不明遺構について

第4章・第5章でも触れたが、ここでも二段掘り込みを有する性格不明遺構について触れてみたい。当遺跡から検出された性格不明遺構は、1基だけである。

近県でも同様の遺構が検出されている。

千葉県

八千代市井戸向遺跡，同権現堂遺跡，成田市野毛平高台遺跡，千葉市高崎新山遺跡ほか

栃木県

宇都宮市向山根遺跡，同上之川高校地内遺跡ほか

本書に掲載した性格不明遺構は、第5章で触れたように常総粘土層をわずかに掘り込んでおり、そこで何かを得ることを目的として掘り込まれたものと判断される。千葉県では、「宙水井戸」としての位置付けを行っている。しかし、南丘遺跡や当遺跡のように、狭い馬の背状を呈する台地面の中央を選地する理由に、若干不合理な点が認められる。つまり、台地から谷に向かう斜面の下位を選地すれば、より容易に豊富な水量が得られるからである。従って、南丘遺跡と当遺跡にあっては、「宙水井戸」としての位置付けには疑問が残ると判断した。

第7章 数光遺跡

第1節 遺跡の概要

1 地形概観

数光遺跡は、土浦市右靱字数光に所在する。調査の対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス予定地内の同所2544番地外8筆、2578㎡である。

当遺跡は、長峰遺跡と同じ台地上に所在し、長峰遺跡の西約30mに位置する。長峰遺跡との間には北に向かう傾斜地があり、南東側で高さ0.5m前後、北東側で高さ2m前後の崖になっている。また、遺跡の北は長峰遺跡の北西側に入り込む小支谷に面しており、高さ5m内外の急崖になっている。当遺跡の台地面は、南から北へ傾斜しており、調査区の南側と北側の比高は3m前後を測る。調査区の西側の約30%は、旧軍による工事によって削平されて平坦になっており、本来の台地面との間は高さ2～3mの崖になっている。台地面の最も高い地点で、標高24.4mを測る。

土地利用状況は、台地面が畑地、西側の平坦地が雑地である。北側の小支谷底は、かつては水田であったが休耕のため荒地化している。

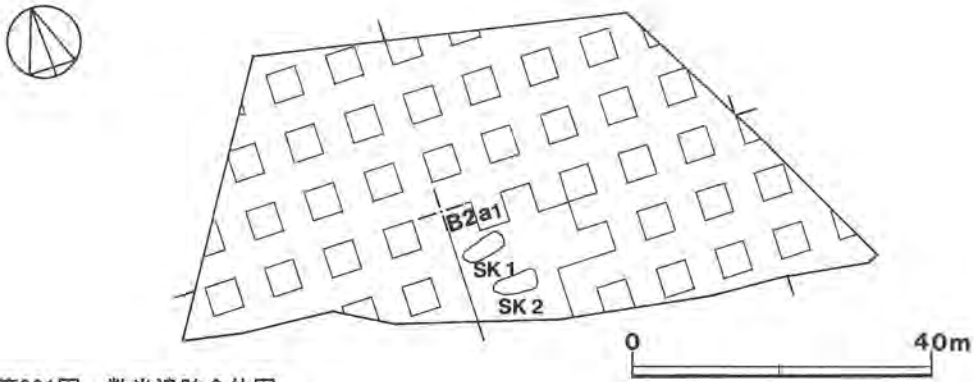


第220図 数光遺跡周辺地形図

2 検出遺構

当遺跡で調査された遺構は、土坑2基である。いずれも調査区中央の南寄りに位置している。遺物は、土坑東側の耕作による攪乱層中から土師器・陶器等が出土したほか、畑地全域から土器の

細片が少量出土している。



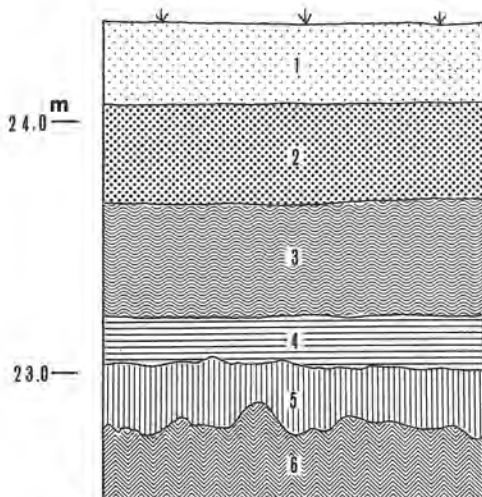
第221図 数光遺跡全体図

第2節 基本層序

第222図は、数光遺跡の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、調査区の中で最も標高の高い B2c_s区（調査区中央の南寄り、土坑の東約10m）を選定した。

1層は耕作土である。部分的に60~70cmを測り、機械による深耕が行われたことがわかる。褐色土とロームブロックが混在している。2~5層はハードローム層である。2・3層はやや黄色味がかかった褐色で、2層の一部はソフトローム化し、3層は径7mm程の小ブロック状構造である。4・5層は、褐色を呈する。4層は径3mm程の粒状構造で、微量の黒色粒子を含む。5層は粘性が極めて強く、少量の黒色粒子、微量の黄褐色粒子を含む。6層は、所謂常総粘土層である。

当遺跡の2基の土坑は、いずれも常総粘土層を15cm程掘り込んでいる。



第222図 数光遺跡土層柱状図

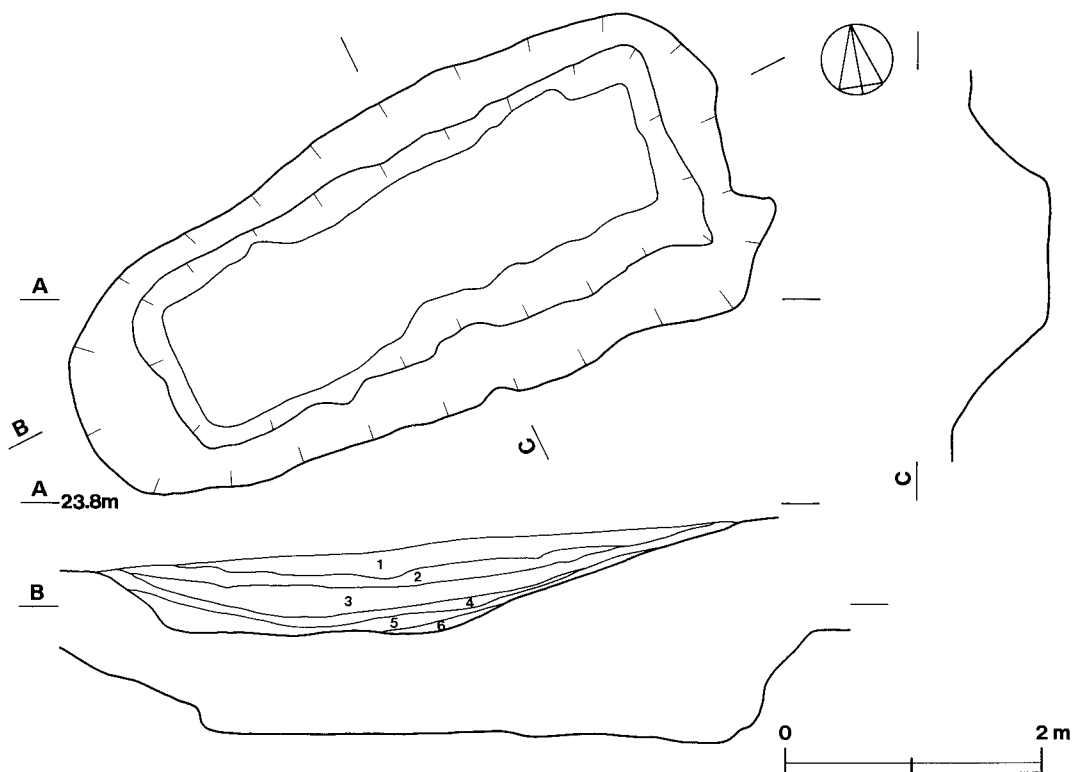
第3節 遺構と遺物

1 遺構

当遺跡から検出された遺構は、土坑2基だけである。これらは、次の土坑一覧表にまとめて掲載した。

表6 数光遺跡土坑一覧表

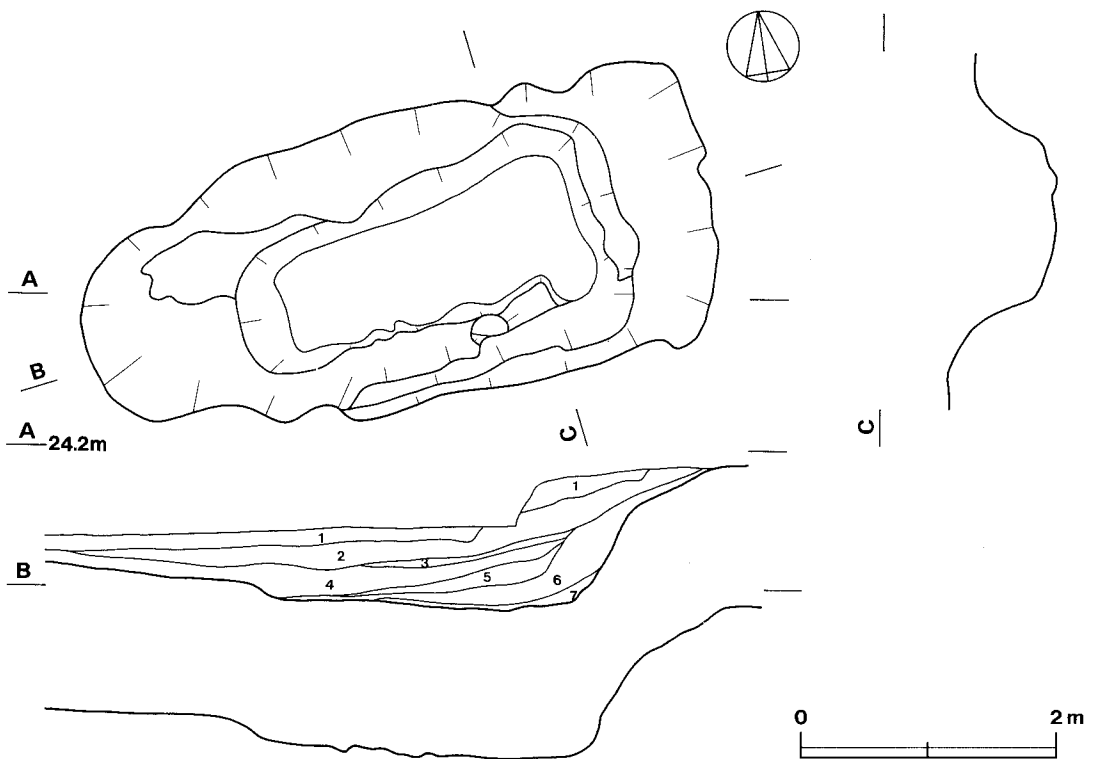
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
1	B2b ₁	N-70°-E	長方形	5.65 × 2.63	0.91	緩斜	平坦	B			223
2	B2c ₂	N-78°-E	長方形	5.05 × 2.33	1.22	外傾	凹凸	N			224



SK-1《土層解説》

- 1 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・ロームブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子極めて多量，ロームブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子極めて多量，ロームブロック少量。
- 5 褐色 ローム粒子極めて多量，ロームブロック少量。
- 6 褐色 ローム粒子・ロームブロック極めて多量，粘土ブロック極く少量。

第223図 第1号土坑実測図



SK-2《土層解説》

- 1 褐色 耕作土。
- 2 褐色 ローム粒子多量，ロームブロック・暗褐色土ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量，ロームブロック極く少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量，ロームブロック・粘土粒子少量。
- 5 褐色 ローム粒子・暗褐色土粒子少量，粘土粒子極く少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量，暗褐色土ブロック少量。
- 7 褐色 ローム粒子・粘土ブロック多量。

第224図 第2号土坑実測図

2 遺構外出土遺物

当遺跡では、遺構に伴って出土した遺物は無く、表採遺物及びグリッド試掘に際して出土した遺物だけである。これらの遺物は、時期別に掲載した。

〈縄文時代〉

土器片錘2点，土器片148点が出土した。土器片錘については実測図を，土器片については拓影図を掲載した。なお，拓影図の掲載に際しては，時期や文様の種類が偏らないように配慮した。

・土器片錘（第225図）

いずれも称名寺式期の土器片を利用したものと思われる。下半を欠損する。重量は，1が4.9g，2が5.2gを測る。

拓影図 (第226図)

a 胎土に繊維を含むもの (3・4)

3はアナダラ属の貝殻腹縁文が、4はL及びRの無節の縄を押圧している。黒浜期と思われる。

b 貝殻による文様を主とするもの (5・6)

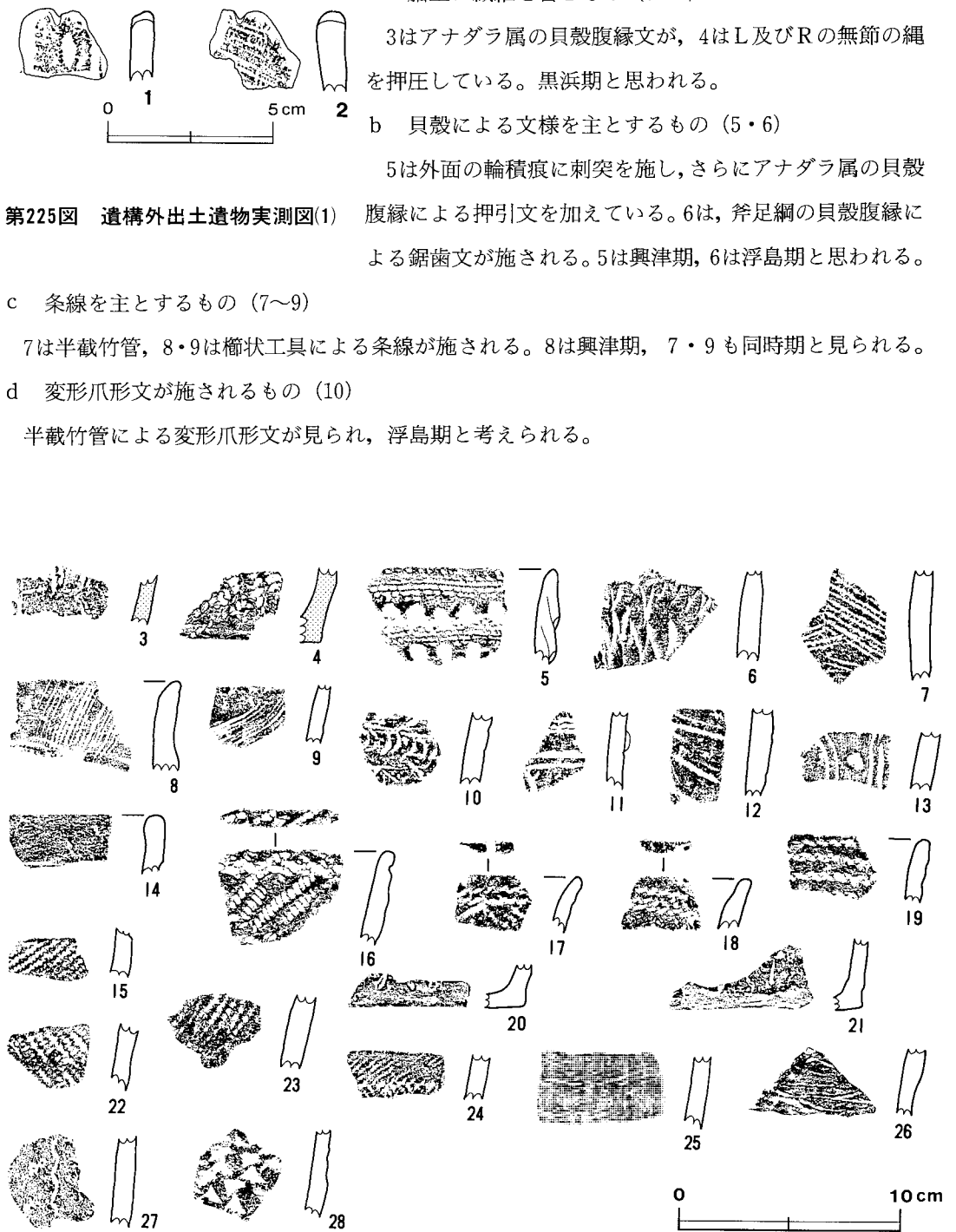
5は外面の輪積痕に刺突を施し、さらにアナダラ属の貝殻腹縁による押引文を加えている。6は、斧足綱の貝殻腹縁による鋸歯文が施される。5は興津期、6は浮島期と思われる。

c 条線を主とするもの (7~9)

7は半截竹管、8・9は櫛状工具による条線が施される。8は興津期、7・9も同時期と見られる。

d 変形爪形文が施されるもの (10)

半截竹管による変形爪形文が見られ、浮島期と考えられる。



第226図 遺構外出土遺物拓影図

e 沈線を主とするもの (11~13)

11は横位の隆帯に沿って沈線・押し文が施される。12・13は半截竹管による平行沈線が見られるが、12は横位、13は縦位を基本とする。11・12は前期末葉、13は後期と思われる。

f 横位の沈線が施されるもの (14・15)

14は頸部の無文帯下に沈線が施され、15は沈線下にLR単節の縄を横位に回転している。いずれも前期末葉のものと考えられる。

g 縄文原体を押圧したもの (16~21)

口縁部片には横位、底部片には縦位の押圧が見られる。16~18は、口唇部にも押圧している。いずれも前期末葉のものと思われる。

h 縄文だけのもの (22~27)

22はRL単節、23はLR単節の縄文が施され、24は羽状縄文、25・26は無節と見られる縄文が施されている。27は結節縄文が縦位に施されている。いずれも前期末葉のものと思われる。

i 三角文が施されるもの (28)

三角形に器面を削り取ったもので、浮島期と見られる。

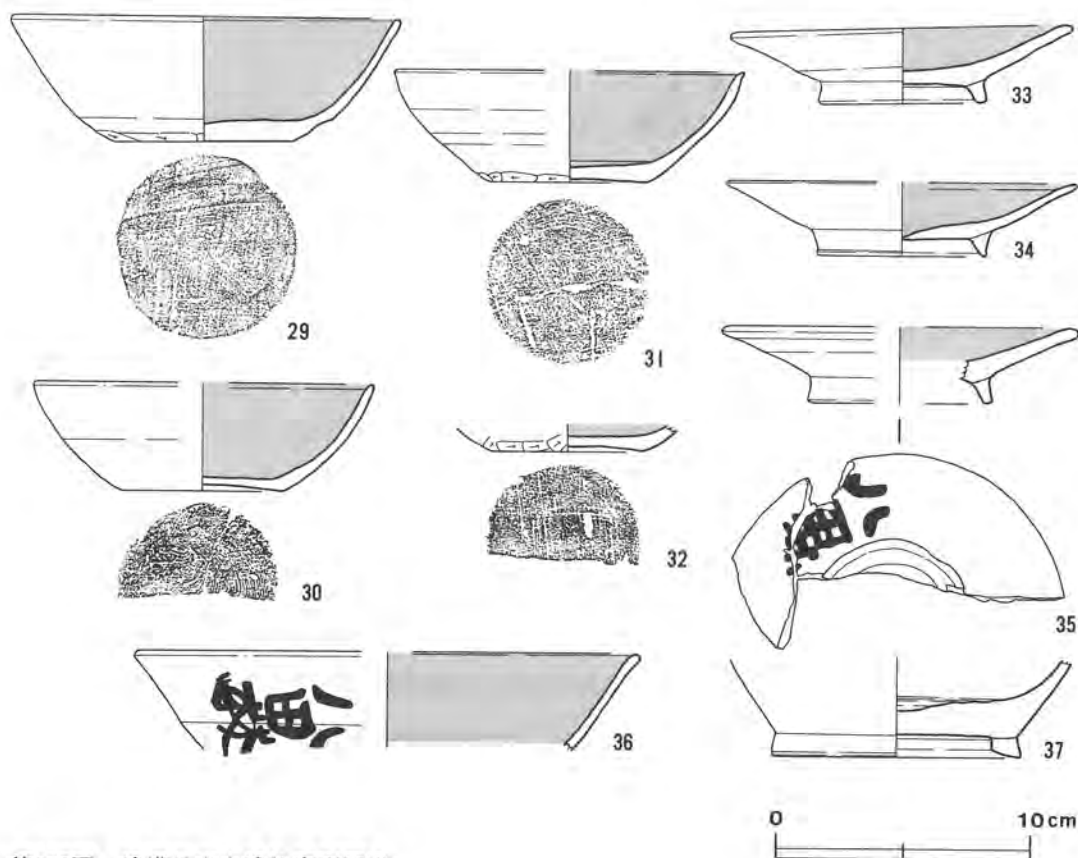
<平安時代>

小片のため、土師器は内面が黒色処理されたものだけをこの時期として扱った。坏33点（内実測できたもの4点）、皿3点（すべて実測）、陶器1点（実測）が出土した。

<その他>

小片で、時期等が判断できないものを一括した。土師器は甕片34点、坏片2点、須恵器は甕片20点、坏片1点である。このほか、中世の土器片15点が出土している。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 図 29	坏 土師器	A 15.2	体部は外傾し、内彎してから直線的に開く。体部下端は横ナデ時に凹帯状をなす。	外面横ナデ、回転糸切り後底部及び体部下端手持ちへら削り、内面へら磨き及び黒色処理。	砂礫(少) にぶい橙色 普通	P1 80%
		B 5.0				
		C 7.1				
30	坏 土師器	A (13.2)	体部は外傾し、口縁部までゆるやかに内彎する。底部はやや上げ底。	外面は磨減、底部回転糸切り後無調整、内面へら磨き及び黒色処理。	砂粒(少)・スコリア 橙色 やや不良	P2 30%
		B 4.3				
		C 6.4				
31	坏 土師器	A (13.7)	体部は外傾し直線的に立ち上がり、中ほどから内彎する。口縁部は外反し、口唇は丸い。	外面横ナデ、回転糸切り後底部及び体部下端手持ちへら削り、内面へら磨き及び黒色処理。	砂粒・礫(少) にぶい赤褐色 普通	P3 40%
		B 4.4				
		C 6.2				
32	坏 土師器	B 6.0	体部は強く外傾し、やや内彎して外上方へ立ち上がる。底部は削りにより多角形状をなす。	体部外面ナデ、底部及び体部下端に手持ちへら削り、内面へ磨き及び黒色処理。	砂礫(少)スコリア にぶい赤褐色 普通	P4 10%
		C 6.0				



第227図 遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
33	皿 土師器	A 12.9 B 3.1 D 6.6 E 1.0	体部は強く外傾して開き、口縁部はやや外反。高台はやや開き、壘付は平坦。	外面横ナデ、底部高台接合後横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 黄橙色 良	P5 60%
34	皿 土師器	A 13.7 B 3.0 D 6.8 E 1.0	体部は強く外傾し、やや内彎して開く。口縁部はやや外反。高台は断面三角形で先端は外反。	外面横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 良	P6 50%
35	皿 土師器	A (13.4) B 3.1 D (7.3) E 1.1	体部は厚手で、強く外傾して開き、口縁部はやや外反する。高台は開き、壘付は平坦。	外面横ナデ、高台接合。	砂粒 浅黄橙色 良	P7 30% 体部外面墨書 「八田林」カ
36	坏 土師器	A (19.6) B (3.9)	体部はやや外傾。残存部下半は内彎し、口縁部は外反。口唇部は丸い。	外面横ナデ、内面ヘラ磨き及び黒色処理。	砂礫 橙色 良	P8 5% 体部外面墨書 「八田林」カ
37	壺(底部) 陶器	B (4.0) D 9.9 E 1.0	底部は肥厚し、胴部は急激に厚味を減じて外上方へ立ち上がる。高台壘付は外側が下がる。	内面水挽き痕、底部及び胴部外面回転ヘラ削り、高台接合。	灰白色	P9 10% 在地産?

第4節 考察

1 遺構

当遺跡で調査された2基の土坑は、覆土の状態からいずれも新しい時期のものと判断される。双方の場所が近く、形態や方向も大きな違いが認められないことから、同じ目的で同時に掘られたものである可能性は極めて高い。2基の土坑の壁は、東側では垂直に近い立ち上がりを示すが、西側ではなだらかである。このことから、坑内への出入りは西側からの方が容易であったことがわかる。また、覆土の下半は自然堆積であり、用途を失ってからある期間放置されていたと思われる。畑地で検出される埋め戻された長方形の土坑は、新しい時期のものの場合多くは農作物貯蔵のために掘られる所謂芋穴である。しかし、芋穴の場合一方の壁をなだらかにする例は無く、半分以上が埋没するまで放置することも無い。さらに、坑底が粘土であり非常に水はけが悪く、しかもこの地域の芋穴と比較して大き過ぎる。これらのことから、2基の土坑が農作物貯蔵用であるとは考え難く、別の目的を考えるのが妥当である。

調査区の西側約30%が削平されていることは先述したが、ここには旧軍によって航空機の掩体が造られたとのことである。土坑のなだらかな壁はこの掩体側に向いており、この方向からの出入りを意識して掘られたことは十分考え得る。工事中の空襲時、または完成後であっても空襲時の航空機格納後に一時的に身を隠す壕が掘られたことは確実である。2基の土坑の形態は、掩体の方向から跳び込むには非常に適していると言える。これらの土坑が工事中の退避用であれば掩体完成時に、航空機格納時の退避用であれば終戦時に、その必要性が失われて自然に埋没し、凹地化してからさらに耕作のために周囲の土を寄せてならしたと考えれば、覆土上位が人為的に埋め戻されていることも十分説明することができる。以上のことから、2基の土坑の性格については、戦時中に掘られた退避壕と見るのが妥当であると思われる。

次に、かつて存在した遺構の痕跡について考えたい。2基の土坑の東側(B2b₄)から粘土と焼土が検出され、さらにその周辺からはグリッド試掘に際して29～37の遺物が各々まとまった状態で出土した。粘土は崩れて軟かくなっており、長さ約80cm、幅約30cmの三日月形を呈する。粘土の量は多い部分と少ない部分があり、一様ではない。焼土は小ブロックで、暗褐色土中に少量混入しており、特に集中している部分は認められない。焼土を含む暗褐色土は粘土の下位にも認められ、粘土小ブロックや黒色土ブロックも含まれている。この暗褐色土の下位には、ロームが崩れて生じたと見られる褐色土がある。この褐色土下から、耕作機械による深耕の痕跡が現れ、粘土・焼土とも機械による攪拌を受けていることが明らかになった。しかし、地表面と異なり、地中の場合には攪拌を受けた土の移動はローターの回転範囲内に限られ、大幅な移動はしない。つまり、ここで検出された粘土と焼土は、本来この付近に粘土を用いた構築物と火熱を受けた場所が隣接

または重層して存在していたことを意味している。一方、グリッド試掘に際して出土した遺物は、細片まで接合可能だった物がある等、粘土・焼土と同様に機械による攪拌を受けた様子が見られる。出土位置は比較的近く、時期的にも近接していることから、ここにはかつて遺構が存在し、機械による耕作の際に壁・床が破壊されたものと考えることができる。破壊された遺構は、粘土と焼土の組合せが竈以外には考え難いことから、住居跡であったことは間違い無いものと見られる。さらに、住居跡が存在したと仮定すると、遺物の出土位置が竈の推定位置から見て西北西側と南西側であり、ここに住居跡の本体が存在したものと判断される。竈と住居跡本体の位置から、軸は北から東に振れていたと思われる。平面形は同時期の住居跡同様に方形または長方形を呈し、規模は1辺が4～5mを測ると推定される。また、攪拌された土を全て取り除いてもピットが検出されなかったことから、この住居跡にはピットは無かったと思われる。

2 遺物

遺物の中で遺構と結び付けることができるのは、前項でも触れた29～37だけである。これらを含めて、量的にも少なく、しかも調査範囲が台地端部に片寄っており、資料的に不十分であることは否定できない。この事実を踏まえて、以下に略述したい。

〈縄文時代〉

土器片は、調査区の南寄りの畑からまばらに出土した。土器片錘も同様である。これらの遺物が当時の人々の手による物であることは無論であるが、ここに集落が存在したと考えることは困難である。当遺跡の所在する台地は、当遺跡付近では上幅40m内外と狭く、東西に入り込む小規模な谷によって小舌状台地状を呈するものの、台地面には平坦な部分が殆んど認められず、大部分が傾斜地である。少なくとも、集落が立地するには地理的条件が不備であり、遺物の量が僅少であることと相俟って、当遺跡に当時の集落が立地した可能性は極めて低いと言わざるを得ない。

〈平安時代〉

29～37が住居跡に伴う遺物である可能性については、先述したとおりである。この中で、34は竈の痕跡と見られる粘土層中から出土しており、本来その付近に位置していたと思われる。他の遺物も、34と時期的に大きな差が認められないことから、34と同様に住居跡で使用されたものである可能性は極めて大きい。これらの遺物の時期は、土師器は9世紀後半と考えられる。陶器は移入品である可能性が高い。胎土には径1～2mmの長石粒や石英粒が含まれ、あまり精製されていない。時期は、土師器と同様に9世紀後半頃と考えられる。

第8章 宮塚遺跡

第1節 遺跡の概要

1 地形概観

宮塚遺跡は、土浦市右碓字宮塚に所在する。調査の対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス予定地内の同所2552番地外5筆、1488㎡である。

長峰・数光両遺跡が所在する台地基部の東100m程の所から、全長300m程の小規模な舌状台地が北に向かって分岐する。この舌状台地の幅は、中央部で150m前後、先端部で50m前後を測り、台地面は全体に馬の背状を呈している。台地面の標高は中央部で21m前後を測るが、基部は同17m前後と低い。これは、この舌状台地の基部に対して旧軍の工事が行われたためであり、現在の地形は大きな改変を受けている。支谷底との比高は、7m程である。

当遺跡は、この小舌状台地の中央部から基部へ向かう緩斜面に位置している。調査区内の標高は、台地中央部寄りの部分で21m前後、西側の支谷寄りの部分で19m前後を測る。土地利用状況は、全体が畑地であった。

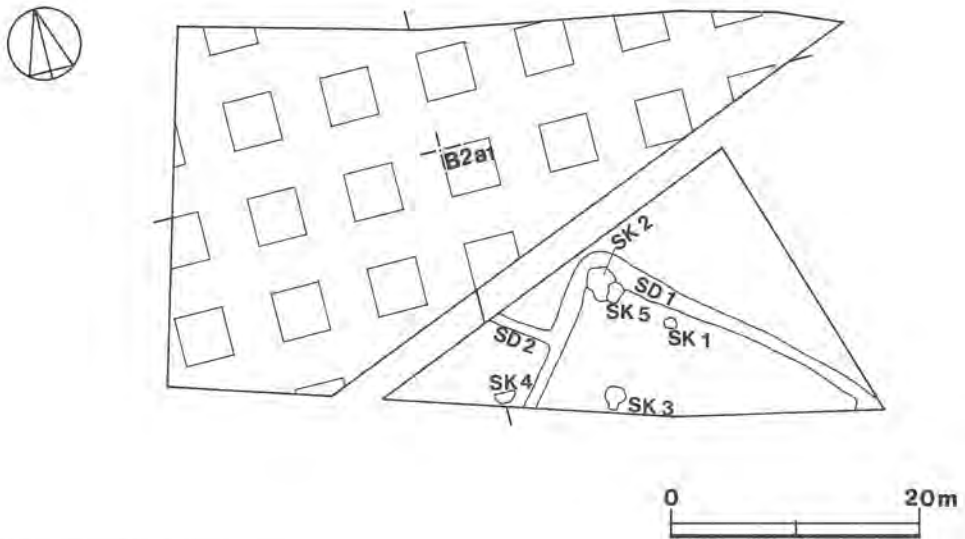


第228図 宮塚遺跡周辺地形図

2 検出遺構

当遺跡で調査された遺構は、土坑2基、地下式墳3基、溝2条である。これらの遺構は、全て調査

区の南側から検出され、特に地下式墳は第1号溝と同じ方向性を有する等、何らかの関係があったと見られる。遺物は、各遺構から土師質土器・内耳土器・陶磁器の各破片が少量出土している。また、表土から縄文式土器・土師器・須恵器の破片が磨滅した状態で出土している。遺物全体の量が少ないことから、一括して掲載した。

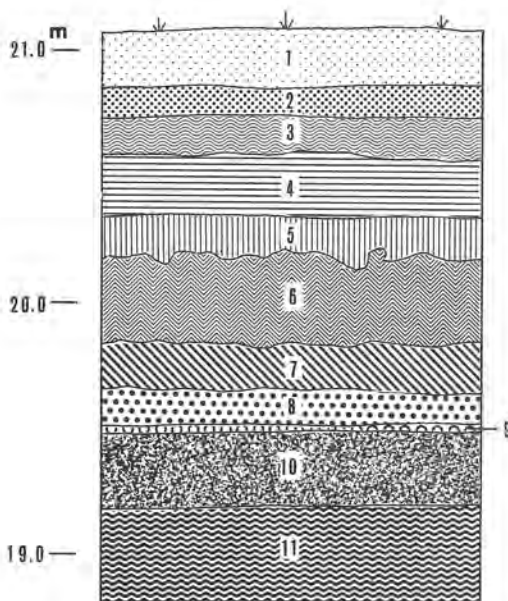


第229図 宮塚遺跡全体図

第2節 基本層序

第230図は、宮塚遺跡の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、調査区を南北に分ける道路沿いのB2c₁区を選定した。

1層は耕作土である。2～5層はローム層で、ロームの状態や含有物により分類した。6層は所謂常総粘土層である。7層は、粘土と砂の混層で、黄褐色の斑点が認められる。砂層から粘土層への漸移層と思われる。8・10層は橙色を呈する砂層で、間に粘土を含む9層が挟まれている。11層は、にぶい橙色を呈する粘土層で、細かい砂粒を多量に含んでいる。



第230図 宮塚遺跡土層柱状図

第3節 遺構と遺物

本節は、土坑・地下式墳・溝の順で遺構を掲載し、次に出土遺物を一括して掲載した。遺物の出土位置は、観察表の備考に記し、実測図では示していない。また、縄文時代の遺物は全て遺構外出土遺物として一括した。なお、遺構の項で示した遺物の点数は、全て接合を終えてから数えた結果であり、実測可能な遺物も破片も全て含めている。

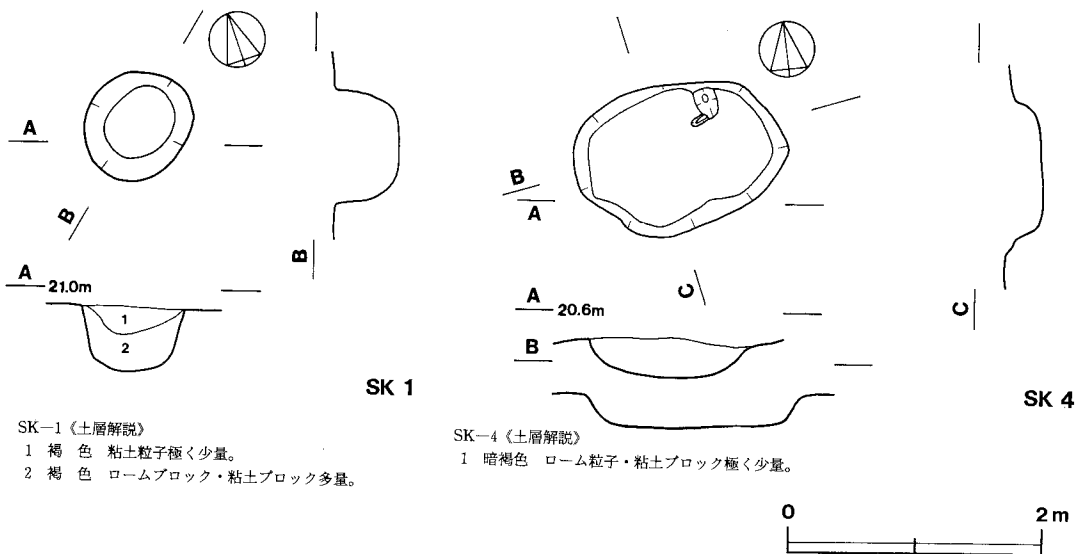
1 遺構

(1) 土坑

当遺跡において検出された土坑は2基で、調査区の南側に位置する。これらの土坑からは、縄文式土器片や土師器片が少量出土している。しかし、いずれも覆土からの出土であり、流れ込みとも考えられる。その他、特筆すべき事柄は有していないことから、以下に表としてまとめた。

表7 宮塚遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	新旧関係	図版番号
1	B2e.	N-6°-W	楕円形	0.92 × 0.8	0.47	垂直	皿状	N	縄文式土器片2, 土師質土器片1		231
4	B1f.	N-90°-W	不整楕丸長方形	1.71 × 1.18	0.27	外傾	平担	B	縄文式土器片1, 土師質土器片10		//



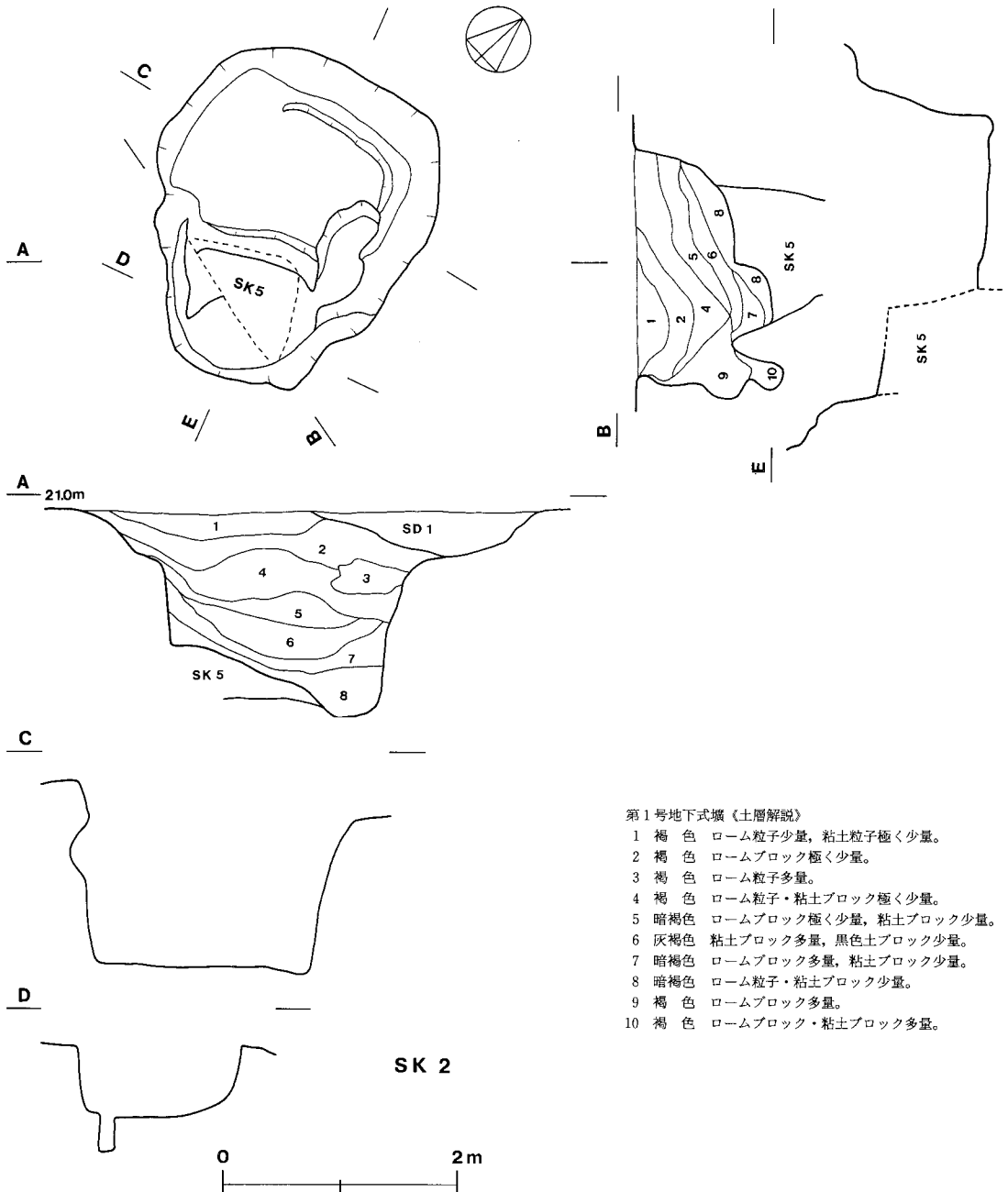
第231図 第1・4号土坑実測図

(2) 地下式墳

第1号地下式墳 [第2号土坑] (第232図)

位置 B2d₃区に所在し、調査区の中央部からやや南東寄りに位置する。

重複関係 南東側で第3号地下式墳 [第5号土坑] を切り、北側を第1号溝のコーナー部によって



第1号地下式墳《土層解説》

- 1 褐色 ローム粒子少量、粘土粒子極く少量。
- 2 褐色 ロームブロック極く少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 褐色 ローム粒子・粘土ブロック極く少量。
- 5 暗褐色 ロームブロック極く少量、粘土ブロック少量。
- 6 灰褐色 粘土ブロック多量、黒色土ブロック少量。
- 7 暗褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子・粘土ブロック少量。
- 9 褐色 ロームブロック多量。
- 10 褐色 ロームブロック・粘土ブロック多量。

第232図 第1号地下式墳実測図

切られている。

主軸方向 N-11°-Wを指し、全長3.22mを測る。

竪坑 確認面から0.93mの深さに掘り込まれており、底面は主室の底面よりも0.9m程高い。平面形は、長軸0.95m、短軸0.9mの隅丸形状を呈し、長軸方向はN-37°-Wを指す。底面は、第3号地下式墳の埋土を掘り込んで形成されている。

主室 底面の平面形は、右側壁下で約1m、左側壁下で1.2m、幅1.82mの隅丸台形状を呈する。南西コーナーは、底面から壁にかけて隅欠状に掘り残されている。底面は平坦で、第230図11層をわずかに掘り込んでいる。

壁 竪坑・主室とも、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 11層に分類した。竪坑から主室に向かって流れ込んでおり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 内耳土器20点、播鉢3点、陶磁器5点、土師器1点、須恵器1点縄文式土器31点及び砥石1点が出土した。これは、破片及びそれを接合した結果であり、完成品は無い。全て覆土中から出土し、本跡に伴う遺物は認められない。実測可能であった遺物は、内耳土器2、陶磁器3、須恵器及び砥石である。また、縄文式土器は11点について拓本・断面実測を行った。

第2号地下式墳 [第3号土坑] (第233図)

位置 B2f₃区に所在し、第1号地下式墳の南約7mに位置する。

主軸方向 N-39°-Eを指し、全長2.7mを測る。

竪坑 確認面から0.52mの深さに掘り込まれ、常総粘土層に達する。底面は主室に向かって緩やかに傾斜し、主室の底面よりも0.3mほど高い。平面形は、長軸0.7m、短軸0.45mの長方形を呈するが、主室側は扇形に削り込まれている。長軸方向はN-51°-Wを指す。

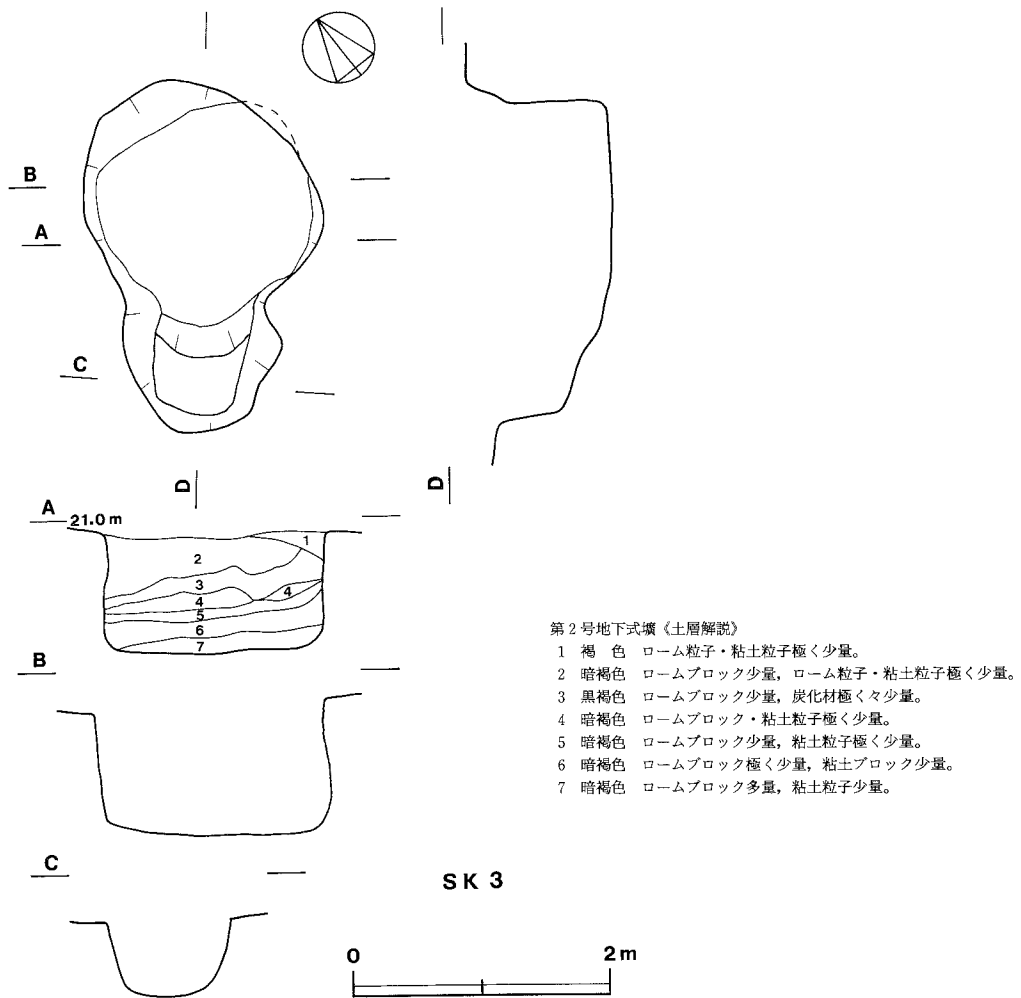
主室 底面の平面形は、長軸1.6m、短軸1.5mの隅丸形状を呈し、長軸方向はN-82°-Wを指す。この長軸方向は、本墳の主軸方向と大きくずれており、竪坑底面の主室側が扇形に削り込まれている部分は、主室底面の南西コーナーに相当する。確認面から主室底面までの深さは、1.12mを測り、粘土・砂の混層まで掘り込まれている。ほぼ平坦である。

壁 竪坑・主室とも、ほぼ垂直に立ち上がる。下半は粘土、上半はロームである。主室右奥の壁は、オーバーハングしており、状況から、1.1mほど立ち上がってから天井に移行したと判断される。従って、天井のロームは、極めて薄かったと考えられる。

覆土 7層に分類した。暗褐色土・黒褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 覆土中から、土師質土器(香炉)2点、陶器1点、土師器2点、須恵器1点、縄文式土器19点、不明土製品1点が出土した。これらは全て破片で、実測可能であったのは香炉2点と不明土製品だけである。香炉は竪坑と主室の覆土中から出土し、同一個体と思われる。また、縄文式土器8点に

ついて、拓本・断面実測を行った。



第233図 第2号地下式墳実測図

第3号地下式墳〔第5号土坑〕(第234図)

位置 B2d₃区に所在し，第1号地下式墳の南東側で重複する。

重複関係 本跡の竪坑の埋土を切って，第1号地下式墳の竪坑が掘り込まれている。

主軸方向 N-75°-Eを指し，全長2.1mを測る。

竪坑 砂層下の砂質粘土層を1mほど掘り込んでおり，確認面から底面までの深さは約2.7mを測る。底面は平坦で，主室の底面と同レベルに掘られている。平面形は，長軸0.4m，短軸0.35mの長方形を呈し，長軸方向はN-14°-Wを指す。

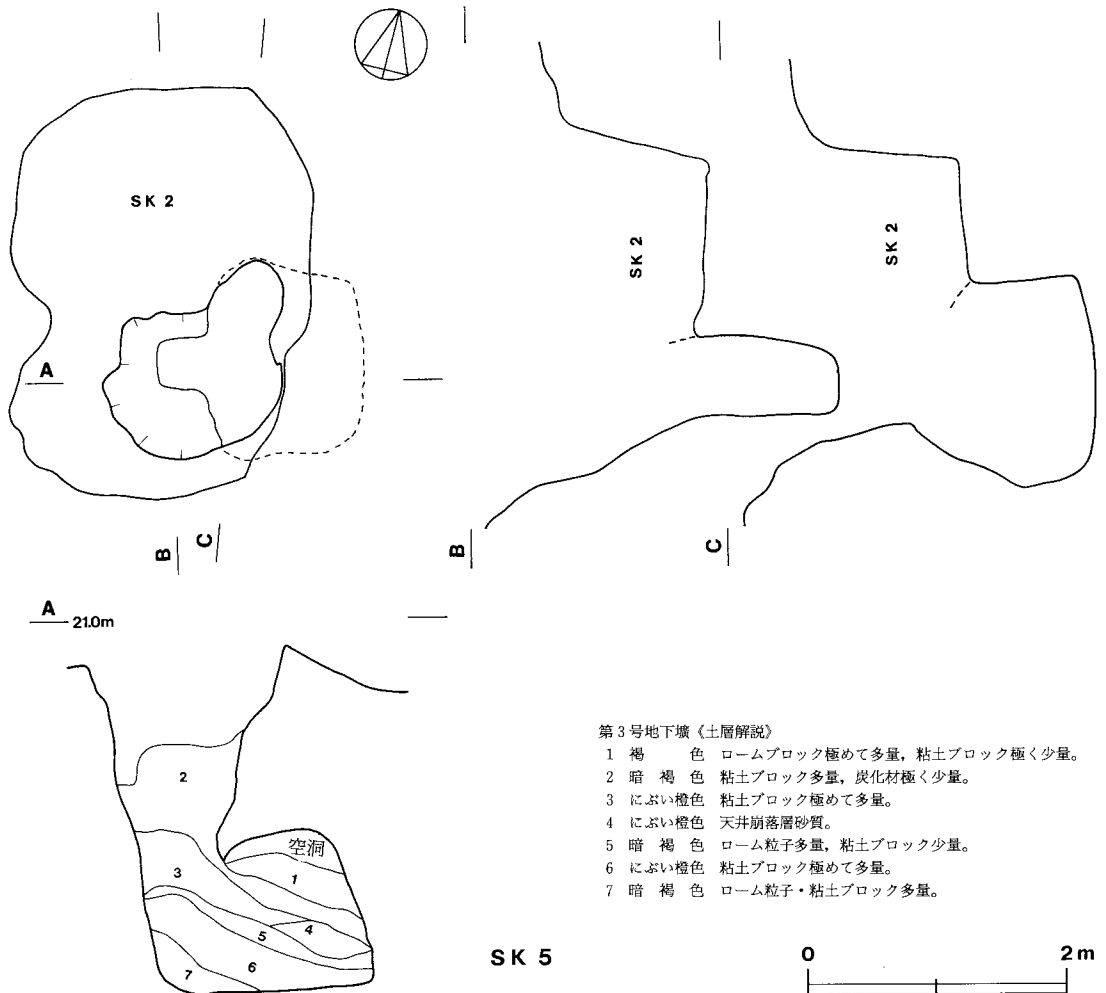
主室 竪坑から横に掘り込んで造られている。底面の平面形は，長軸1.4m，短軸1.2mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-15°-Wを指す。天井は，本来砂質粘土層中に設けられたと見られ

るが、下部の30~40cmが剝落しており、詳細は不明である。

壁 竪坑の壁は、西壁が80°の傾斜を有するが、他はほぼ垂直である。主室では、天井に向かってオーバーハングしており、主室最奥部で0.8mの高さを有する。

覆土 7層に分類した。竪坑から主室に向かって流れ込んだ層と天井の剝落による層が認められる。最も早く堆積した7層は自然堆積と考えられるが、他の竪坑から流れ込んだ層は全て人為的に埋め戻されたものである。

遺物 内耳土器6点、播鉢4点、土師質土器（皿）1点及び縄文式土器2点が出土した。全て破片であり、実測可能だったのは播鉢2点、土師質土器（皿）1点だけである。また、縄文式土器はいずれも胴部の細片であり、拓本は採取しなかった。これらの遺物は覆土中から出土し、本跡に伴う遺物は認められない。



第234図 第3号地下式墳実測図

(3) 溝

第1号溝 (第235図)

位置 B2区に所在し、調査区の中央から南東寄りに位置する。

重複関係 B2b₃区で第1号地下式墳を切っている。また、B2e₂区で第2号溝とつながっている。

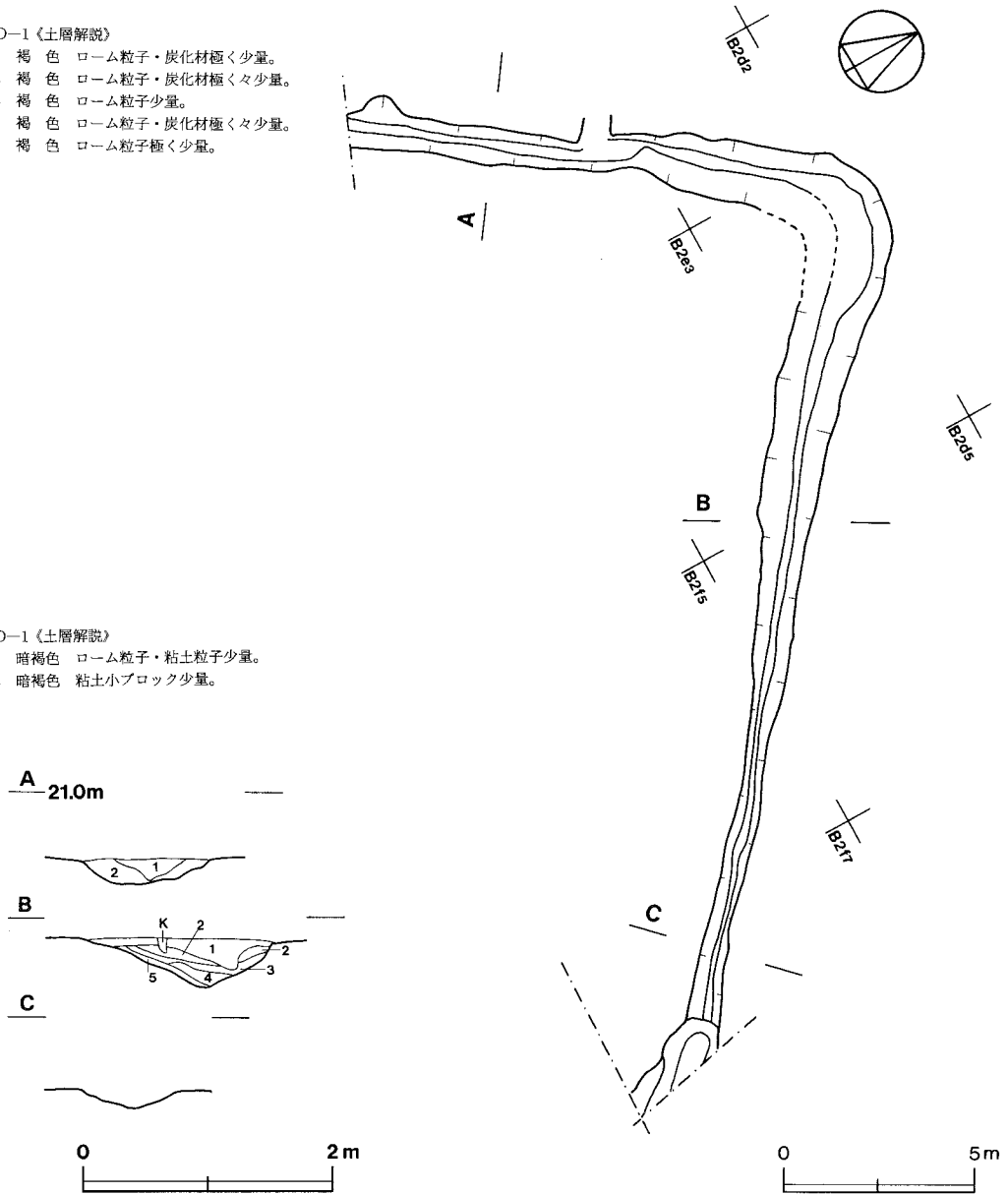
規模 B2d₃区でほぼ垂直に折れ、東側と西側に分かれる。東側は、B2b₃区で上幅1.8m、下幅0.55

SD-1《土層解説》

- 1 褐色 ローム粒子・炭化材極く少量。
- 2 褐色 ローム粒子・炭化材極く少量。
- 3 褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子・炭化材極く少量。
- 5 褐色 ローム粒子極く少量。

SD-1《土層解説》

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量。
- 2 暗褐色 粘土小ブロック少量。



第235図 第1号溝実測図

m, 深さ0.38m, B2g₇区で上幅0.7m, 下幅0.1m, 深さ0.13mを測る。確認された長さは, 約25mである。西側は, B2d₂区では東側の B2d₃区と同様の規模を有し, B2f₁区で上幅0.85m, 下幅0.2m, 深さ0.21mを測る。確認された長さは約13mである。東側・西側ともに調査区外へ延びている。

方向 東側 N-52°-W

西側 N-37°-E

形状 東側; B2d₃区付近の断面形は逆台形状を呈し, 北東の壁は50°~60°, 反対側は40°前後の傾斜で立ち上がっている。溝底は, 南側に若干深い部分がある。B2e₃区付近から東側は, 幅・深さともに小さくなり, 断面形も皿状を呈する。壁の立ち上がりも緩やかである。調査区の境界付近に至って幅・深さとも急に増すが, 調査区外にかかるため, 詳細は不明である。

西側; B2d₂区にあっては, 東側の B2d₃区と同様の形状を有する。B2f₁区では, 断面形は偏平な逆台形状を呈し, 北西の壁は20°~30°, 反対側は30°~40°の傾斜で立ち上がっている。

覆土 ローム粒子・炭化材・粘土を含む褐色土が堆積し, 全体に締っている。状況から, 自然堆積と判断される。

遺物 内耳土器29点, 播鉢3点, 土師質土器(皿)2点, 同(甕)6点, 青磁1点及び縄文式土器24点が出土した。全て破片で青磁が B2e₃区の底面付近で出土した以外は, 覆土中から出土したもので, コーナー付近が特に多い。実測可能であったのは青磁だけである。また, 縄文式土器8点について, 拓本・断面実測を行った。

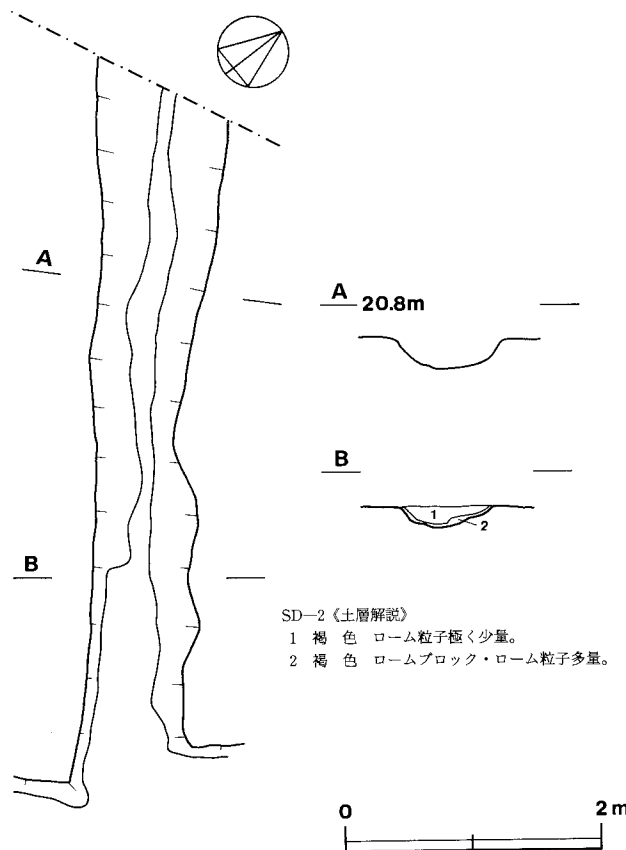
第2号溝 (第236図)

位置 B2区西端に所在し, 第1号溝西側部分の北西に位置する。

重複関係 B2e₂区で第1号溝とつながる。

規模 確認した長さは5.6mで, 上幅0.8~1.1m, 下幅0.1~0.5m, 深さ0.15~0.2mを測る。

方向 N-53°-Wを指し, 北西側はさ



第236図 第2号溝実測図

らに延びるが、道路の反対側には達していない。

形状 断面形は逆カマボコ形を呈し、壁上部の傾斜は70°前後を測る。

覆土 ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積し、全体に締っている。状況から自然堆積と判断される。

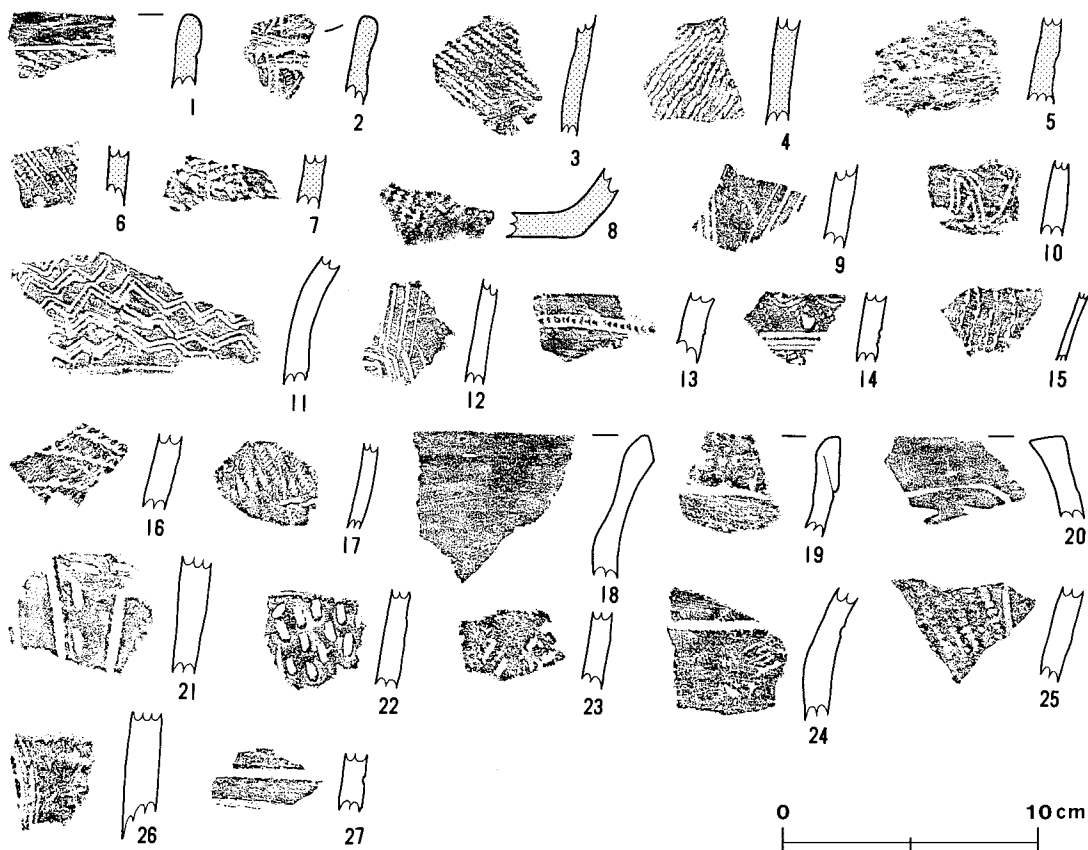
遺物 内耳土器9点、土師器(甕)2点、陶器3点が出土した。全て破片である。いずれも覆土中からの出土で、本跡に伴う遺物は無い。実測可能であったのは、陶器1点だけである。

2 遺物

(1) 縄文時代

当遺跡の遺構覆土から出土した縄文時代の遺物は、土器片79点である。この中から27点について採拓し、掲載した。

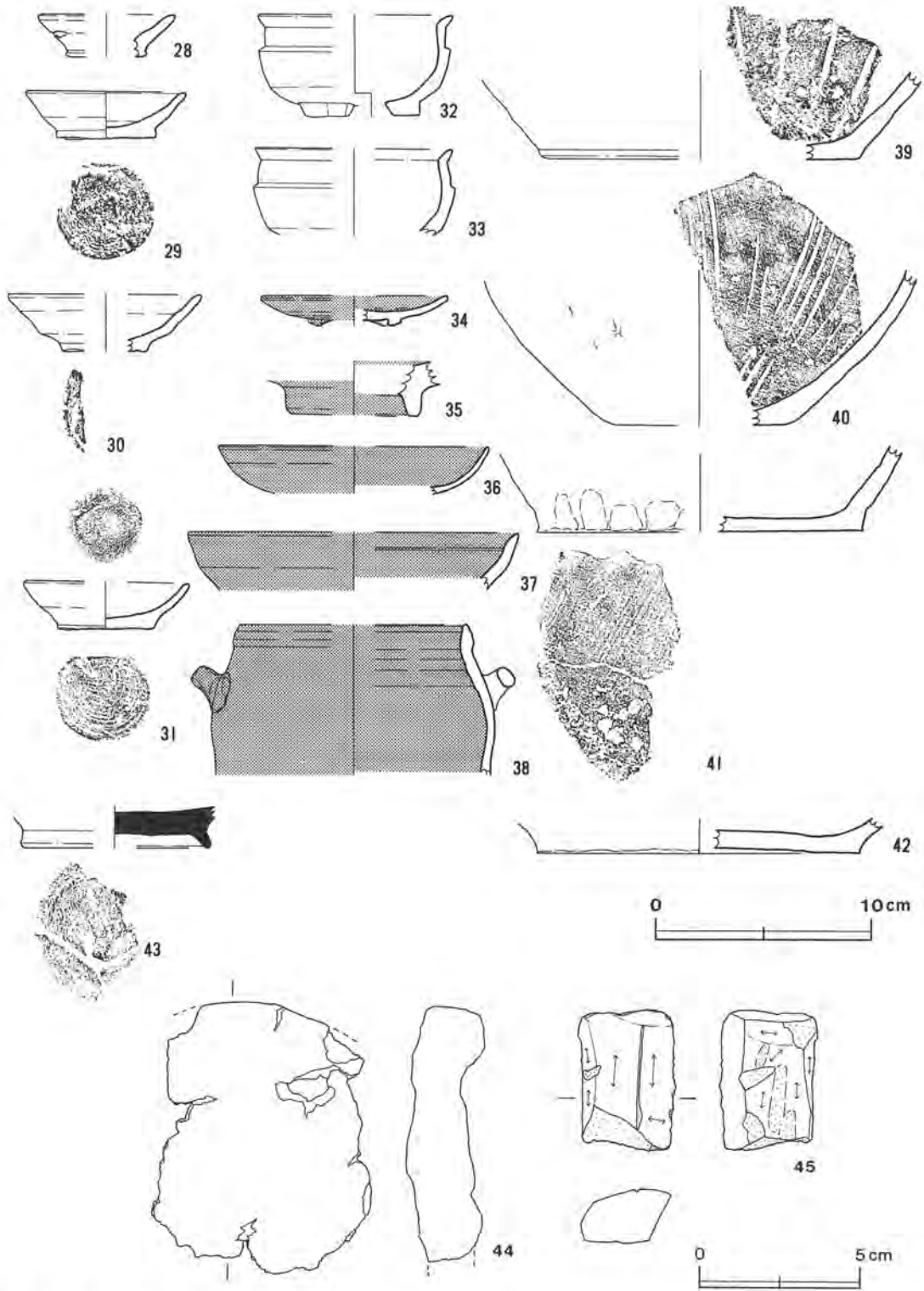
1～8は胎土に繊維を含むもので、黒浜期に属すると思われる。2は、中央が大きく削られている。



第237図 宮塚遺跡出土遺物拓影図

9～17は胎土に少量の砂粒を含むもので、13はスコリア、17は長石・石英がやや目立つ。浮島期に属すると思われる。18～27は胎土に含まれる砂粒がやや多く、後期に位置付けられるものである。20～23は称名寺Ⅱ式に属しており、他も同時期に属するものと考えられる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
28	皿 土師質土器	A (6.2)	体部は強く外傾して開く。中ほどで内彎し、口縁はやや外反。体部下端に整形時の凹線。	水挽き、横ナデ。	細砂粒 にぶい橙色 不良	P1 10% SK-1覆土
		B 2.0				
		C 3.8				
29	皿 土師質土器	A 7.2	体部は強く外傾し、やや内彎する。口縁部は外反し、口唇は丸い。底部は一部段状を呈する。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り。	細砂粒・スコリア にぶい橙色 不良	P10 60% SK-4覆土
		B 2.2				
		C 4.6				
30	皿 土師質土器	A (8.8)	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。中ほどで外反し、内面ににぶい稜を持つ。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り。	砂粒。スコリア 灰褐色 不良	P11 20% SK-4覆土
		B 2.7				
		C (3.9)				
31	皿 土師質土器	A (7.1)	体部は強く外傾して立ち上がる。中ほどから内彎し、口縁に至る。口唇は丸い。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り、底部内面に仕上げナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 不良	P14 50% SK-5覆土
		B 2.1				
		C 4.3				
32	香炉 土師質土器	A (8.9)	頸部はヘラで幅広い凹帯状に削り取られ、口縁は強く外反。底部は3か所に箱形の脚を持つ。	水挽き、横ナデ、ヘラ削り。	雲母末、細砂 橙色 不良	P8 20% SK-3覆土 33と同一個体
		B 4.7				
		C (9.0)				
33	香炉 土師質土器	A (9.0)	体部は内彎して立ち上がり、底部との境界に稜。頸部はヘラ削りによる凹帯。口縁内面に稜。	水挽き、横ナデ、ヘラ削り。	雲母末、細砂 橙色 不良	P9 15% SK-3覆土 32と同一個体
		B (4.1)				
		C (9.4)				
34	皿 磁器	A (8.6)	体部は強く外傾し、緩やかに内彎する。高台畳付は、ヘラで4か所を弧状に切り取る。	水挽き、体部下半回転ヘラ削り、削り出し高台、畳付露胎。	(胎土) 白色 (釉) 白色 良	P5 10% SK-2覆土上層 内面窯道具痕
		B 1.5				
		D (4.4)				
		E 0.4				
35	碗 青磁	B (2.6)	高台はわずかに開き、畳付は平坦。底部は緩やかに高まり、体部へ移行すると思われる。	削り出し高台、全面施釉。	(胎土) 灰白色 (釉) オリーブ灰色 良	P15 5% SD-1 底面 輸入品
		D (6.4)				
		E 1.3				
36	皿 磁器	A (12.3)	体部は水平に近い角度で開き、強く内彎する。口縁外面に浅い凹帯。釉には極く粗い貫乳。	水挽き。口唇部をヘラで面取り後施釉。	(胎土) 白色 (釉) 透明 良	P6 5% SK-2覆土上層 混入か
		B (2.3)				
37	鉢 陶器	A (15.2)	体部は下半が外反し、中ほどが内彎。口縁内面に稜を有し、下位は凹線状。釉には細かい貫乳	水挽き、横ナデ。	(胎土) オリーブ黄色 (釉) 浅黄橙色 良	P4 5% SK-2覆土上層
		B (2.3)				
38	小形耳付甕 陶器	A (10.4)	肩はなだらかにすぼまり、頸部は肥厚する。口唇はやや内傾。耳は横位のブリッジ状で2か所	水挽き、横ナデ、耳接合、内面露胎。	(胎土) 灰白色 (釉) 灰オリーブ色 良	P16 30% SD-2覆土
		B 7.0				
39	播鉢 土師質土器	B (4.2)	体部は外傾し、直線的に外上方へ立ち上がる。内面の筋は間隔が広い。	粘土紐巻き上げ、指ナデ。	長石礫、砂粒 橙色 不良	P13 5% SK-5覆土
		C (14.3)				
40	播鉢 土師質土器	B (7.2)	体部は外傾し、緩やかに内彎して立ち上がる。内面は4本1単位の筋の間に細かい筋を加える。	粘土紐巻き上げ、指ナデ。	長石礫、砂粒 灰褐色 普通	P12 5% SK-5覆土
		C (8.0)				



第238図 宮塚遺跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
41	内耳土器	B (3.7)	底部は平坦。体部は1cmほど直立してから外傾し、やや内彎気味に外上方へ開く。底部に板圧痕。	粘土紐巻き上げ, 内外面指ナデ。	雲母末・長石 暗赤灰色 普通	P3 10% SK-2覆土上層
		C (15.2)				
42	内耳土器	B (1.7)	体部は強く外傾して外上方へ立ち上がる。底部は中央がやや高まる。	粘土紐巻き上げ, 内外面指ナデ。	雲母末(多)・長石 褐灰色 普通	P2 20% 覆土上層
		C 15.2				
43	盤 須恵器	B (2.0)	底部は中央がやや下がり、皿状を呈する。高台は開き、畳付は丸い。	横ナデ, 底部中央手持ちヘラ削り, 高台接合。	雲母末(多)・砂粒 褐灰色 不良	P7 10% 覆土上層
		D (8.9)				
		E 0.8				

図版番号	器種	法量(cm)	備考
44	不明土製品	長さ 8.4 幅 6.8 重さ 103.1g	DP 1/3欠損 胎土に草本の茎・葉 時期不明 SK-3覆土
45	砥石	長さ 4.4 幅 2.3 重さ 31.2g	Q1 凝灰岩 SK-2覆土上層

第4節 考察

第1節で述べたように、当遺跡が所在する台地は第二次世界大戦時に旧軍による削平工事が行われ、台地基部では5~6mの深さに達したと推定される。当遺跡もその影響を受け、表土はかなり失われている。地表面が台地基部の削平か所に向かって傾斜していることから、台地基部寄り、つまり南側に位置する遺構は他の遺構よりも上部が失われていることは明らかである。例を挙げれば、第1号溝の場合、東側は南東に行くに従って幅と深さが減少するが、それは溝の壁上部が失われたことに起因するのであって、掘り込まれた当時の姿を残しているのではないということである。以上のことを踏まえ、本節では遺構を中心に述べることにする。

当遺跡の遺構は、2期に分けることができる。1期は第1・3号地下式墳、2期はその他の遺構である。

第1号地下式墳と第1号溝は、土層セクションから明らかに第1号溝が新しく、しかも第1号地下式墳天井の落盤・埋没後に第1号溝が掘り込まれたことが分かる。一方、第1号地下式墳と第3号地下式墳の主軸方向から、両者が同一の方向性を有することは明らかであり、竪坑の状況からは両者が近接した時期に掘り込まれたものであることが看取される。第1号溝は、これら2基の地下式墳とは時期的にかなり隔たっていると判断される。

第1号溝は、東側と西側がほぼ直角に折れることから、土地を区画するために掘られたものと考えられる。第2号溝との新旧関係は不明であるが、第1号溝と同一の方向性を有することから、同じ目的で掘られ、しかも両者が同時に機能していた可能性は極めて高い。この2条の溝による区画

内に位置する遺構を見ると、第2号地下式墳が溝と同じ方向性を有することから、第1号溝が機能していた時期に掘られたことが分かる。第1・4号土坑の場合、方向は不明瞭であり、区画に従ったと考えられるものの、断定することはできない。地下式墳・土坑とも墓壇の可能性が高く、溝は墓域を区画する目的で掘られたものと考えられる。

※ 第2号地下式墳は、形態から表土の削平を受けた小規模な地下式墳として扱ったが、削平の影響が小さかったとすれば、出入口状の施設を有する墓壇と見ることができる。

特徴的な遺物として、土師質土器（香炉・皿）が挙げられる。埋葬時に供献されたものである可能性が高く、完形品が無いことから意図的に破壊されたと考えられる。陶磁器の中で、遺構に伴うと考えられるのは、青磁（35）だけである。小片であるため明確ではないが、碗とした。

第9章 右籾館跡

第1節 遺跡の概要

1 地形概観

右籾館跡は、土浦市右籾字小山に所在する。調査対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス予定地内の同所1194番地外5筆、4631㎡である。

陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地の北西部から、幅400m内外の台地が北西方向に延びている。この台地は、基部から800m程延びて北東に向きを変え、先端は花室川沿いの谷から入り込む支谷に刻まれて三つの舌状台地に分岐する。最も東寄りに位置する舌状台地は、全長約300mを測り、中程がくびれて先端付近がやや広がる。上から見ると、ナスを縦に切って伏せた状態に似ている。

右籾館跡は、この舌状台地上に築かれている。台地がくびれた部分は狭い馬の背状を呈し、平坦面は極めて狭い。台地先端の広がった部分は、館造成に際して削平・盛土が行われており、現状では幅80m内外の平坦面を有している。

調査区内の塚・土塁を除いた台地面の標高は、22m前後を測る。低地との比高は11m内外を測り、崖は階段状を呈する。段は、西側で1段、東側で2段になっており、東側では下段が道路に利用されている。土地利用状況は、全域が山林である。植物の繁茂が著しく、上空からは無論、地上からでも詳細な地形を把握することは困難な状態であった。



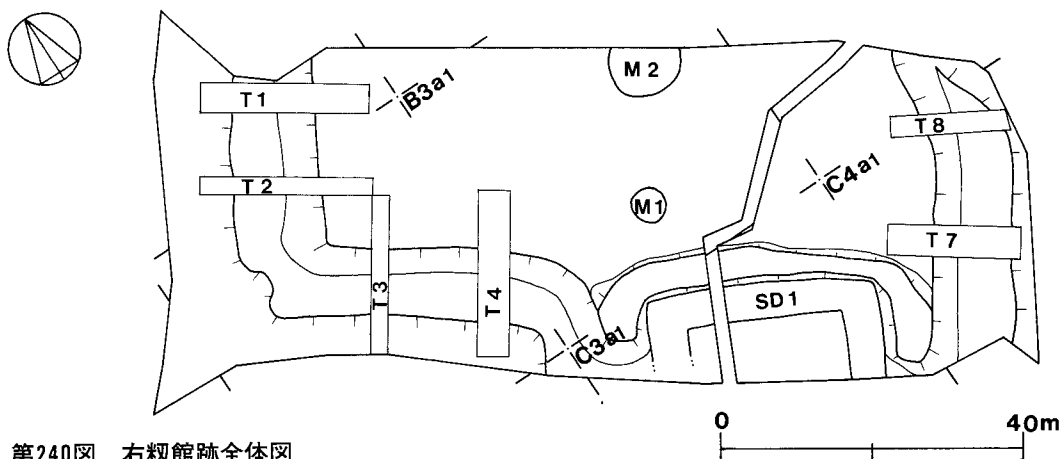
第239図 右籾館跡周辺地形図

2 検出遺構

当遺跡から検出された遺構は、土塁・堀跡及び塚である。土塁及び堀跡は右靫館跡に伴うものであり、塚は館の廃絶後に築かれたものである。

表面観察によって明らかに土塁と判断できるのは1基であるが、本来は館跡の周囲に巡らされていた可能性が高い。また、堀跡は台地を切る形態で掘られていたと考えられる。

塚は近世になってから築かれたと思われるが、大きさが違うことから、性格も違っていた可能性がある。



第240図 右靫館跡全体図

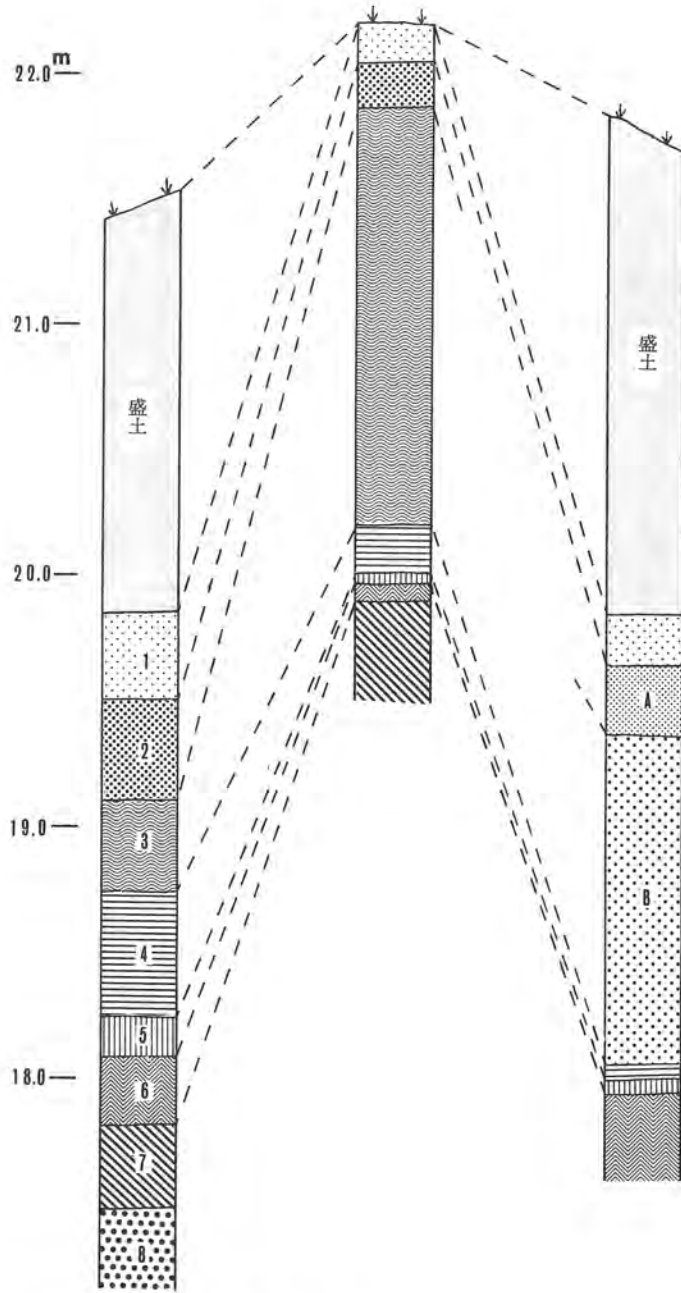
第2節 基本層序

第241図は、右靫館跡が所在する台地の土層図である。台地の南東側・中央及び北西側において土層を観察した。盛土部分を除き、以下に略述する。

1層は表土（盛土部分では旧表土）、2層は漸移層である。

3地点とも常総粘土層（4・6層）が見られ、間層として砂質の多いローム層（5層）を挟んでいる。これらの層は、北西側から南東側に向かって厚さを増している。常総粘土層の上にはローム層（3層）が堆積しているが、北西側では見られず、代わってローム・赤褐色砂の混層（A層）と砂鉄・ローム・赤褐色パミスを含む砂層（B層）が堆積している。常総粘土層の下には砂層（7・7'層）が堆積している。台地中央の砂層（7層）は比較的粒子が細かく、南東側の砂層（7層）は粒子が粗い。この砂層の下には、クロスラミナの見られる粒子の細かい砂層（8層）が堆積している。

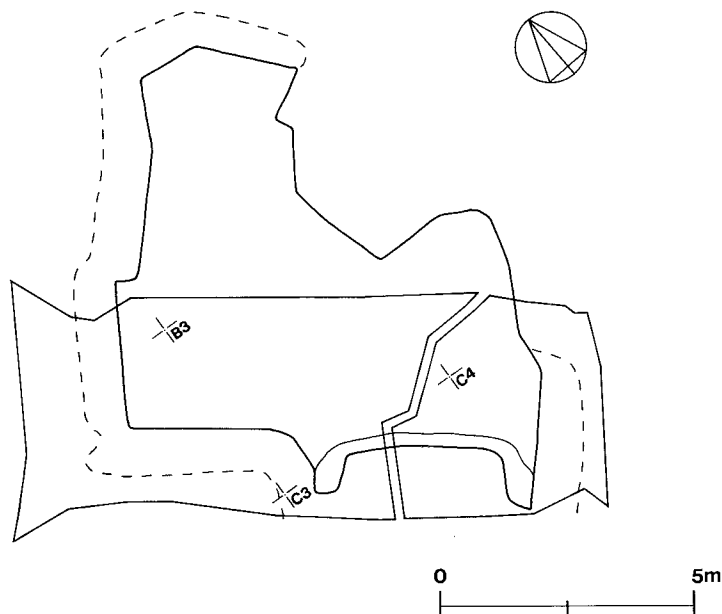
遺構の掘り込みは、北西側は4層の途中まで、中央は7層まで、南東側は8層までである。



第241图 右侧館跡土層柱状图

第3節 遺構と遺物

1 館跡 (第242図)



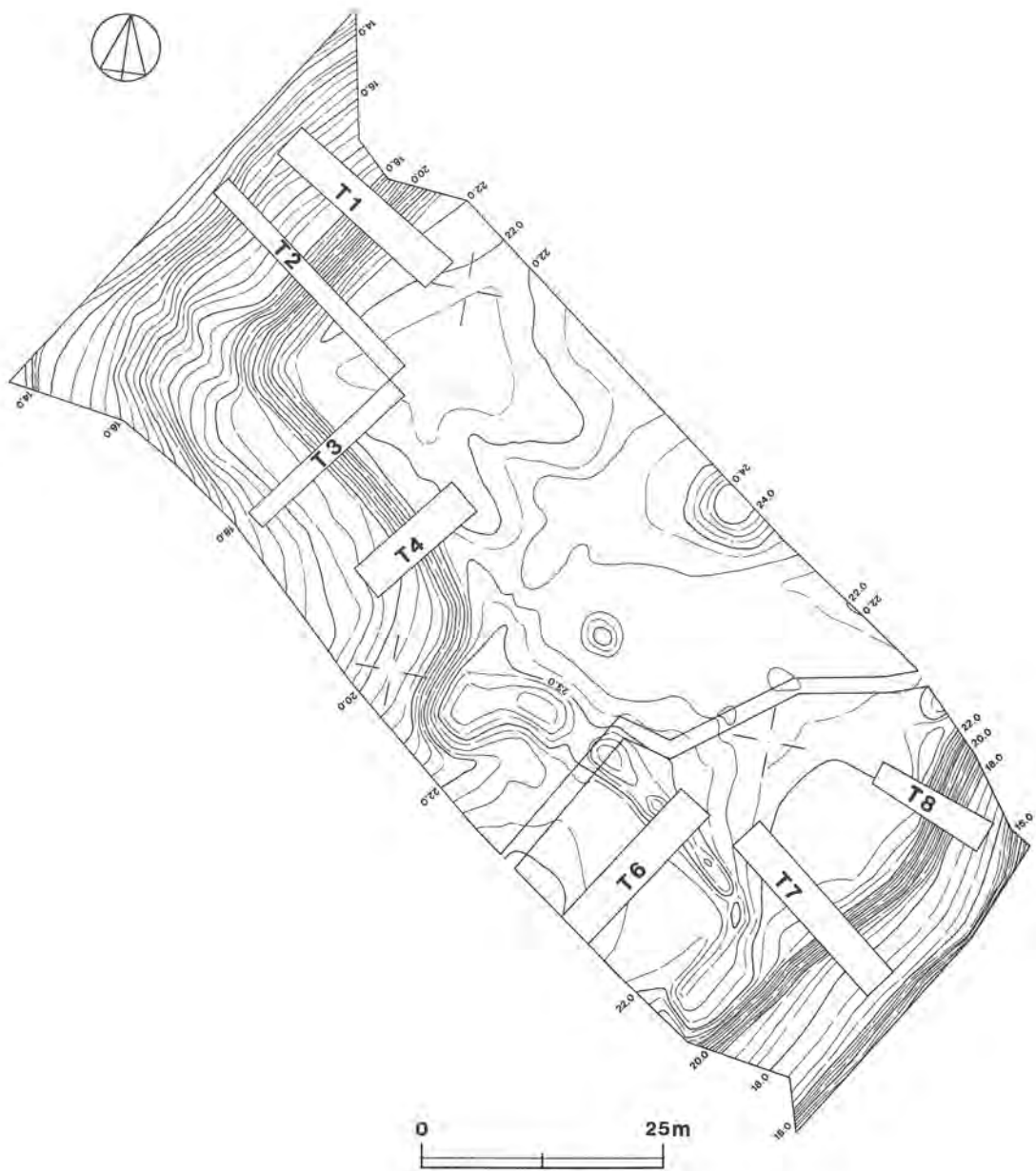
第242図 右図館跡内郭全体図

右図館跡が所在する台地の先端から80m程の所に、北西から南東に向かって小支谷が入り込み、台地面は極めて狭くなっている。その先端側は再び台地面が広がっており、狭い部分と広い部分の境界付近を切断して先端側に館を築造している。

斜面や台地面に削平や盛土を行って平坦部を造成し、内郭としている。内郭の南側は、台地の狭い部分を堀によって切断し、その内側には土塁を築き防禦施設としている。東

側と西側には土塁を築き、その外側は、4~5m程低い部分に段を設け、段部分には深さ0.5~1.2mほどの堀を設けている。北側は、調査区外となり、詳細については不明であるが、平坦部の平面形は、全体に一辺が約100m前後のほぼ「凸」状を呈している。

調査区は、館跡全体の二分の一弱が含まれており、「凸」状の下半分の大部分に相当する。調査区内の内郭は、塚の部分を除き、標高21.6~22.5mを測り、若干の起伏が認められる。また、調査区内の平坦部からは館跡に伴う遺構が検出されず、造成も不十分なことから、第4節に述べるように未完成の状態であると考えられる。従って、次に挙げる館跡の各部について築造方法を中心に解説した後、堀や土塁について解説することとする。



第243図 右翼館跡コンタ図

(1) 館跡各部の状況

① 内郭（平坦な部分）

中央付近の標高は22.5m前後を測り、北西側と南東側に向かって緩やかに傾斜して21.6m前後まで低くなり、盛土の部分で再び高くなって22.2m前後を測る。トレンチ調査によって、旧表土が残っているのは盛土部分だけであり、他は削平されていることが判明していることから、平坦部の造成には、本来馬の背状を呈していた台地面に盛土と削平が行われたことがわかる。現状での平坦部の外縁で谷に面する部分は、斜面上への盛土がなされた部分であり、中央は削平された部分である。しかし、中央から外縁に向かって緩やかに傾斜していること、第2号塚（第248図）の断面に旧表土と思われる土層が確認され、2号塚の基盤が館の築造に際して削り残された部分であると考えられることの2点から、平坦部の造成は不完全なものであったと判断される。また、館に伴う遺構は確認されていない。

② 内郭南側（台地面を切断している部分）

1号堀跡によって台地面を切断し、内側に1号土塁を築いている。また、堀跡・土塁を「コ」の字状に配して防禦効果を高めている。調査区の関係で断定することはできないが、入桁形の虎口である可能性が高い。土塁の馬踏と堀底との比高は、現状で約4mを測る。

③ 内郭南西側（北西から南東に向かって入り込む支谷に面する部分）

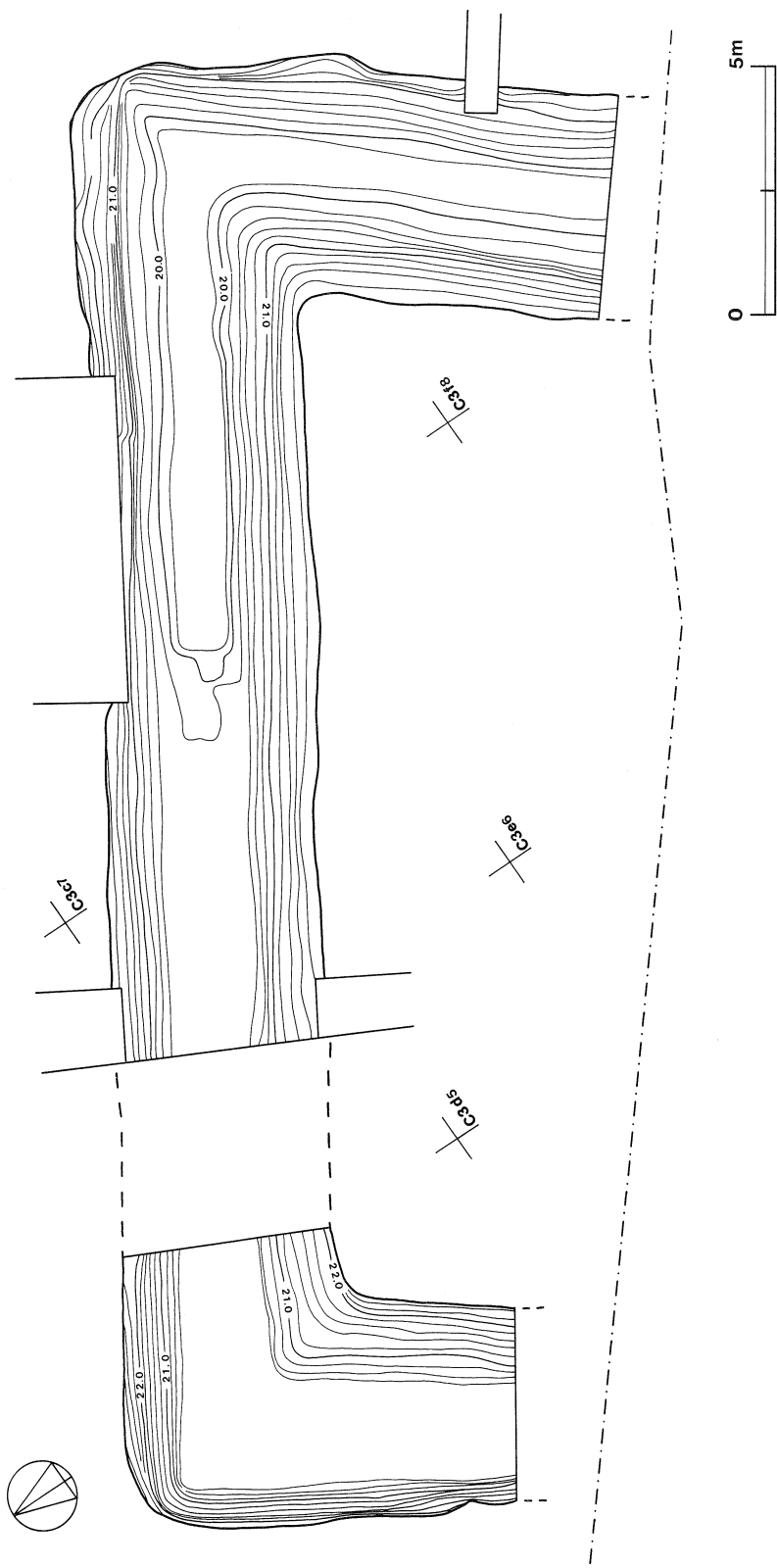
2号堀跡によって斜面を上下に分け、上位斜面に盛土を行って急斜面を造り出している。堀を掘削した土砂は、外側に盛り上げられ、下位斜面の勾配を本来よりも急なものにしている。また、上位斜面の盛土は、粘土やロームを外側が高くなるように積んで基盤とし、その上にロームを主とする土を積み上げている。盛土上面と堀底との比高は、現状で約3mを測る。

④ 内郭西側（北西側の谷に面する部分）

斜面上位に盛土、中位に削ぎ落しを加えて2段の急斜面を造り出している。上位斜面に対して行われた盛土は、②の上位斜面の盛土と同じ工法で行われている。削ぎ落された土砂は、下位斜面上に盛り上げられている。盛土上面と削ぎ落し底面との比高は、現状で約4mを測る。また、削ぎ落し底面と水田面との比高は、現状で約6mを測る。

⑤ 内郭東側（南東側の段を有する部分）

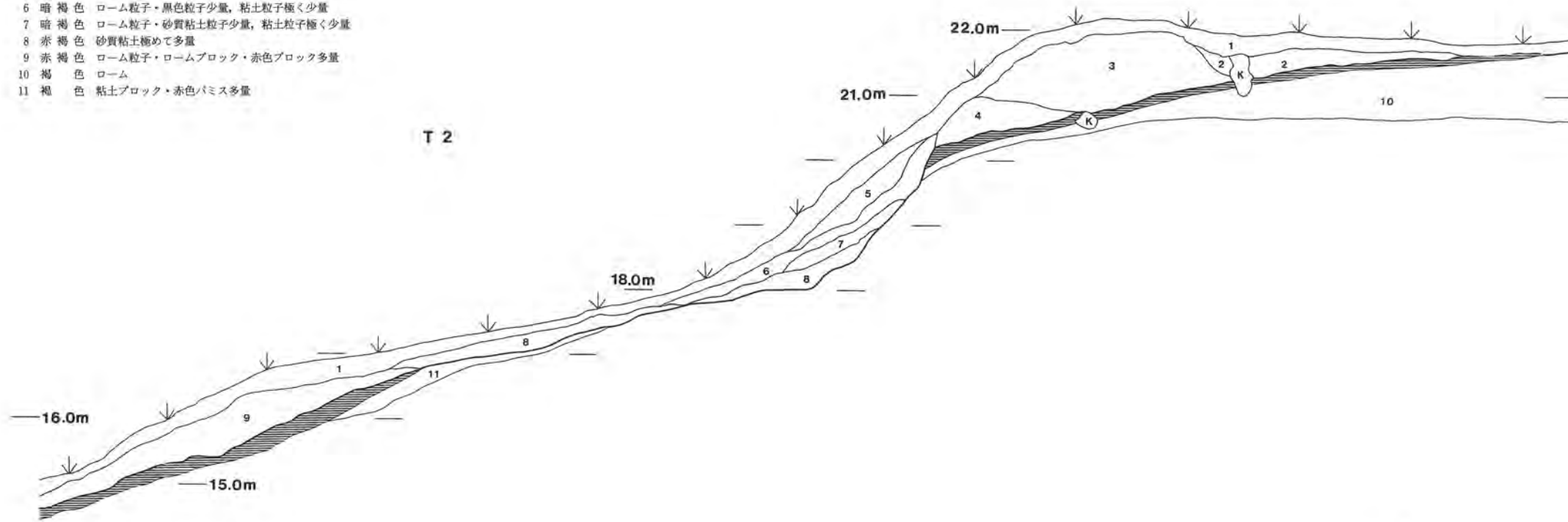
3号堀跡によって斜面を上下に分け、上位斜面に盛土を行って急斜面を造り出している。また、堀を掘削した土砂は外側に盛り上げられており、②と同一の工法が採用されている。盛土上面と堀底との比高は、現状で約4.5mを測る。また、堀の外側に盛り上げられた土砂の上面と水田面との比高は、現状で約6mを測る。



第244图 第1号掘跡实测图

T-2 (土層解説)

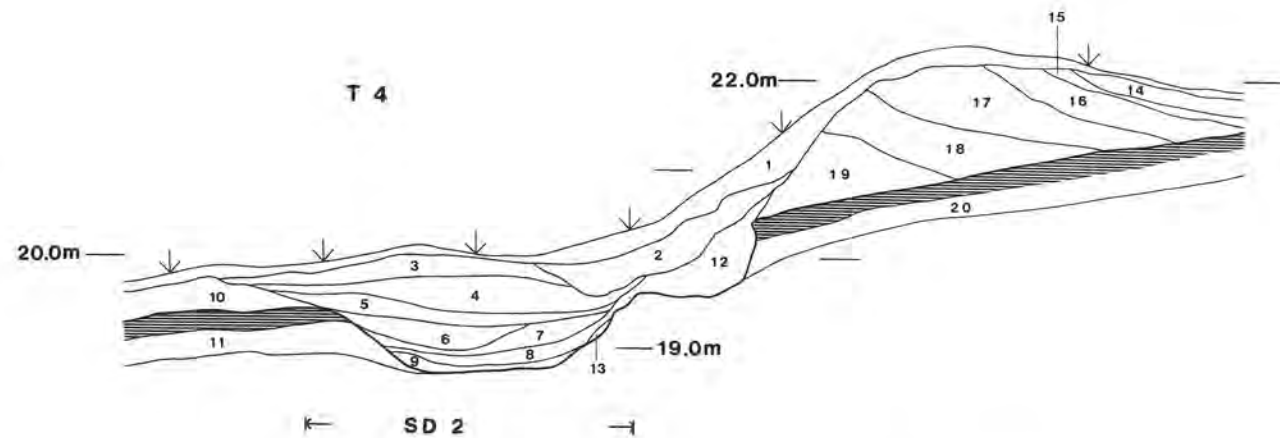
- 1 褐色 ローム粒子少量, 黒色粒子極く少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム塊・ロームブロック・ローム粒子・黒色土ブロック多量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック多量
- 5 褐色 ローム粒子・黒色粒子少量, 粘土粒子極く少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・黒色粒子少量, 粘土粒子極く少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 粘土粒子極く少量
- 8 赤褐色 砂質粘土極めて多量
- 9 赤褐色 ローム粒子・ロームブロック・赤色ブロック多量
- 10 褐色 ローム
- 11 褐色 粘土ブロック・赤色パミス多量



T 2

T-4 (土層解説)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量 (表土)
- 2 褐色 ローム粒子極く少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化材極く少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック・炭化材極く少量
- 5 褐色 ローム粒子・ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・ロームブロック少量, 粘土粒子極く少量
- 8 黒褐色 ローム粒子・ロームブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子多量, 粘土粒子極く少量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子極く少量
- 11 暗褐色 赤褐色粘土粒子少量
- 12 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量
- 13 暗褐色 ローム粒子少量 (表土)
- 14 褐色 ローム粒子少量
- 15 褐色 ローム粒子極く少量
- 16 褐色 ローム粒子極く少量
- 17 褐色 ローム粒子極く少量, 暗褐色土ブロック少量
- 18 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量
- 19 褐色 ローム粒子極く少量
- 20 褐色 ローム粒子・ロームブロック少量



T 4

SD 2

■■■■ 旧表土



第245図 2・4 トレンチ土層断面図

⑥ 内郭東側（南東側の段を有さない部分）

斜面上位に盛土をし、下位を削ぎ落して落差の大きい急斜面を造り出しているものと思われる。しかし、斜面下位は調査区外にかかるため、詳細は不明である。盛土上面と水田面との比高は、現状で約11mを測る。

(2) 堀跡・土塁

第1号堀跡（第244図）

位置 C2区に所在し、調査区の南東側に位置する。

方向 2か所で屈曲し、北西側はN-36°-Eで長さ約4m、中央部はN-58°-Wで長さ約30m、南東側はN-42°-Eで長さ約6mを測り、それぞれ直線的に延びる。全体に「コ」の字形を呈している。

規模 北西側は、上幅約4m、下幅1.5m、深さ1.7mで、屈曲部から4mの所から調査区外にかかる。中央部は、上幅約5m、下幅0.8~1.5m、深さ1.8~2.8mを測る。南西側は上幅約5m、下幅0.6~1m、深さ2.8mで、屈曲部から6mの所から調査区外にかかる。

形状 壁は急な傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦であるが、堀中央部の南東側屈曲部から12mの所に段があり、この段の北西側では下幅1.5m、深さ1.8mを測り、南東側では下幅0.8m、深さ2.8mを測る。

覆土 褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 C3d₆・d₇・e₇区の底面付近から、須恵器片1点、中世の土器・陶器片3点が出土している。

第2号堀跡（第245図）

位置 B2区・B3区にかけて所在し、調査区の南西側に位置する。

方向 N-51°-W

規模 上幅2.5m前後、下幅1.5m前後、深さ0.5~1.2mを測る。長さは50m前後を測るものと推定される。南西側は南へ屈曲して1号堀跡とつながり、北西側は北へ屈曲して斜面下方へ開口していると考えられる。

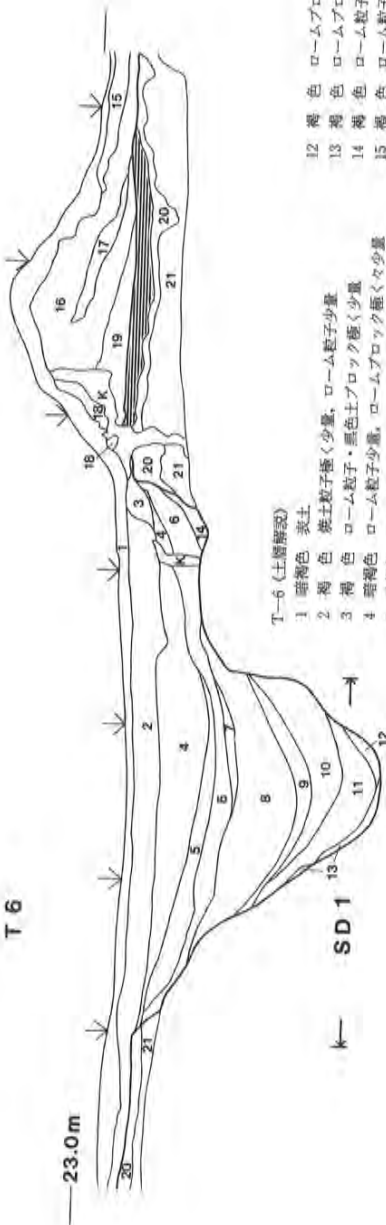
形状 壁は急な傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。

覆土 褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 出土していない。

T 6

—23.0m



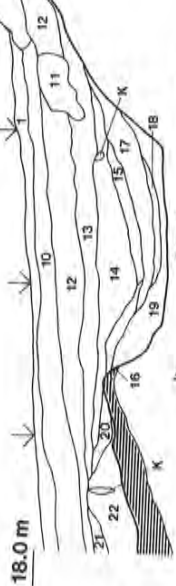
T-6 (土層解説)

- 1 暗褐色 表土
- 2 褐色 粘土粒子極く少量、ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・黒色土ブロック極く少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック極く少量
- 5 暗褐色 粘土ブロック多量
- 6 褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック極く少量
- 7 暗褐色 ローム粒子極く少量
- 8 暗褐色 ローム粒子極く少量、粘土粒子極く少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、黒色土ブロック極く少量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック極く少量
- 11 褐色 ローム粒子・粘土粒子多量
- 12 褐色 ロームブロック少量、粘土粒子極く少量
- 13 褐色 ロームブロック少量、粘土粒子極く少量
- 14 褐色 ローム粒子少量
- 15 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック極く少量
- 16 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック多量
- 17 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量
- 18 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量
- 19 褐色 ローム粒子極く少量、黒色土ブロック極く少量
- 20 褐色 リフトローム
- 21 褐色 ローム層

T-7 (土層解説)

- 1 暗褐色 ローム粒子・黄色粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック・黒色土粒子極く少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック極く少量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック極く少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子・ロームブロック少量、黒色土ブロック極く少量
- 7 暗褐色 粘土ブロック多量
- 8 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量
- 9 暗褐色 ローム粒子極く少量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック極く少量
- 11 灰褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック少量
- 12 褐色 ローム粒子極く少量、粘土粒子少量
- 13 褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック少量
- 14 褐色 ローム粒子極く少量、ロームブロック・粘土粒子極く少量

18.0m



第246図 6・7トレンチ土層断面図



- 15 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック・黒色土ブロック極く少量
- 16 褐色 粘土粒子多量
- 17 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック・黒色土ブロック極く少量
- 18 暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック極く少量
- 19 暗褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック少量
- 20 暗褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック少量
- 21 暗褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック少量
- 22 暗褐色 粘土ブロック少量、褐色土ブロック極く少量
- 23 灰褐色 砂質粘土層
- 24 暗褐色 ローム粒子少量
- 25 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量

…旧表土



第3号堀跡（第246図）

位置 C4区に所在し、調査区の南東端付近に位置する。

方向 N-40°-E

規模 上幅3.5~4m、下幅2m前後、深さ0.7m前後を測る。長さは15m前後を測るものと推定される。北東に行くに従って幅が狭くなり、段の端まで掘られていたと考えられる。南西側は屈曲して1号堀跡とつながるものと思われる。

形状 壁は、外側は緩やかな傾斜で、内側は急な傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。

覆土 褐色土・暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

遺物 出土していない。

第1号土塁

位置 C3区に所在し、1号堀跡の内側に位置する。

方向 2か所で屈曲し、北西側はN-40°-E、中央部はN-55°-W、南東側はN-30°-Eを示す。全体に「コ」の字形を呈する。

規模 基底部幅約4m、高さ約1mを測るが、本来はもっと高かったものと推定される。北西側は長さ約9m、中央部は長さ約33m、南東側は長さ約12mを測る。

構築状況 基底部は、表土上面に2.4m幅でロームを敷いている。このロームは、外側を厚くして内側に向かうスロープになるように積まれている。ロームの上には、多量のロームブロックを含む褐色土が積み上げられてる。いずれも外側が高くなるように積まれている。しかし、締りはあるものの版築した様子は見られない。

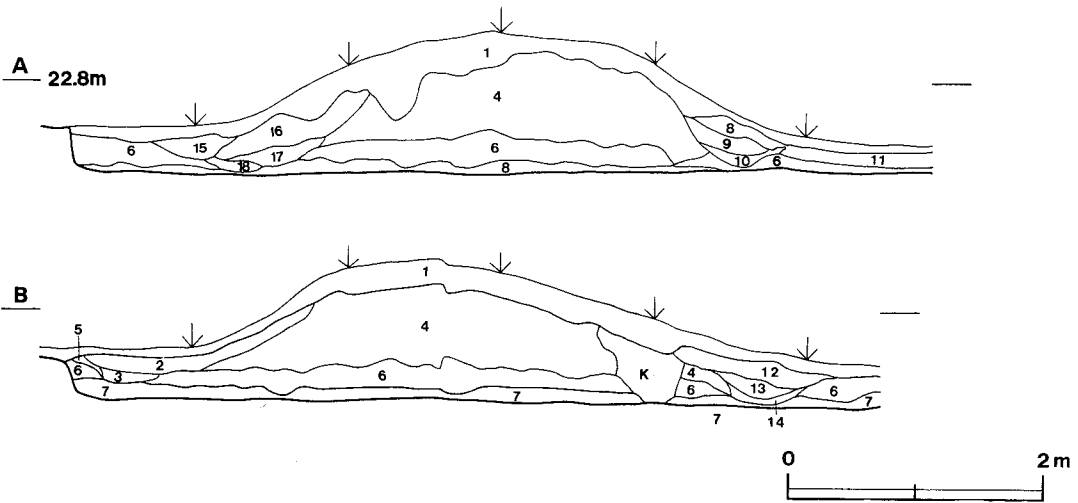
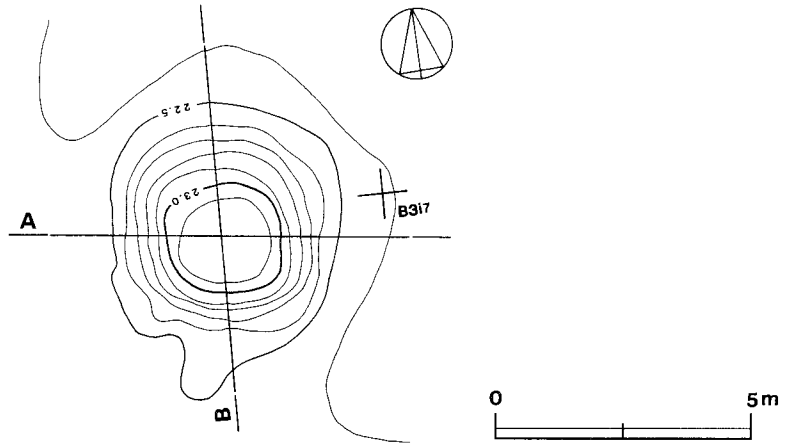
2 塚

第1号塚（第247図）

位置 B3区に所在し、調査区の中央からやや南東寄りに位置する。

規模と形状 基底面は、4.5×4.5mの比較的整った円形状を呈し、現地表面から塚頂部までの高さは0.8mを測る。塚頂部からやや東へ寄った位置には、石仏が祀られている。塚頂部の標高は、23.2mを測る。

構築状況 幅0.5m前後、深さ0.3~0.5mの溝を円形状に巡らせて区画し、その中に周辺の土を運んで盛り上げたものと考えられる。盛土内には層序が認められず、運ばれた土は当時の表土の部分であったものと思われる。



M-1《土層解説》

- | | |
|--------------------------|-----------------------------------|
| 1 褐色 表土 | 10 褐色 ローム粒子・炭化材極く々少量 |
| 2 褐色 ローム粒子・ロームブロック極く少量 | 11 褐色 ローム粒子極く少量, ロームブロック・炭化材極く々少量 |
| 3 褐色 砂質土多量 | 12 褐色 ローム粒子・炭化材・黒色土粒子極く々少量 |
| 4 褐色 ローム粒子多量, 黄褐色粒子極く少量 | 13 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック・炭化材極く少量 |
| 5 褐色 ローム粒子・黄褐色粒子極く少量 | 14 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量 |
| 6 褐色 ローム粒子少量, 黄褐色粒子極く々少量 | 15 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量 |
| 7 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量 | 16 褐色 ローム粒子極く少量 |
| 8 褐色 ローム粒子極く少量, 炭化材極く々少量 | 17 褐色 ローム粒子極く少量, ロームブロック極く々少量 |
| 9 褐色 ローム粒子・炭化材極く少量 | 18 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く々少量 |

第247図 第1号塚実測図

遺物 塚頂部からやや東へ寄った位置に、石仏が祀られていた。この石仏は青面金剛で、「天明三癸卯五月晦」の銘がある。また、裾から古銭が出土している。

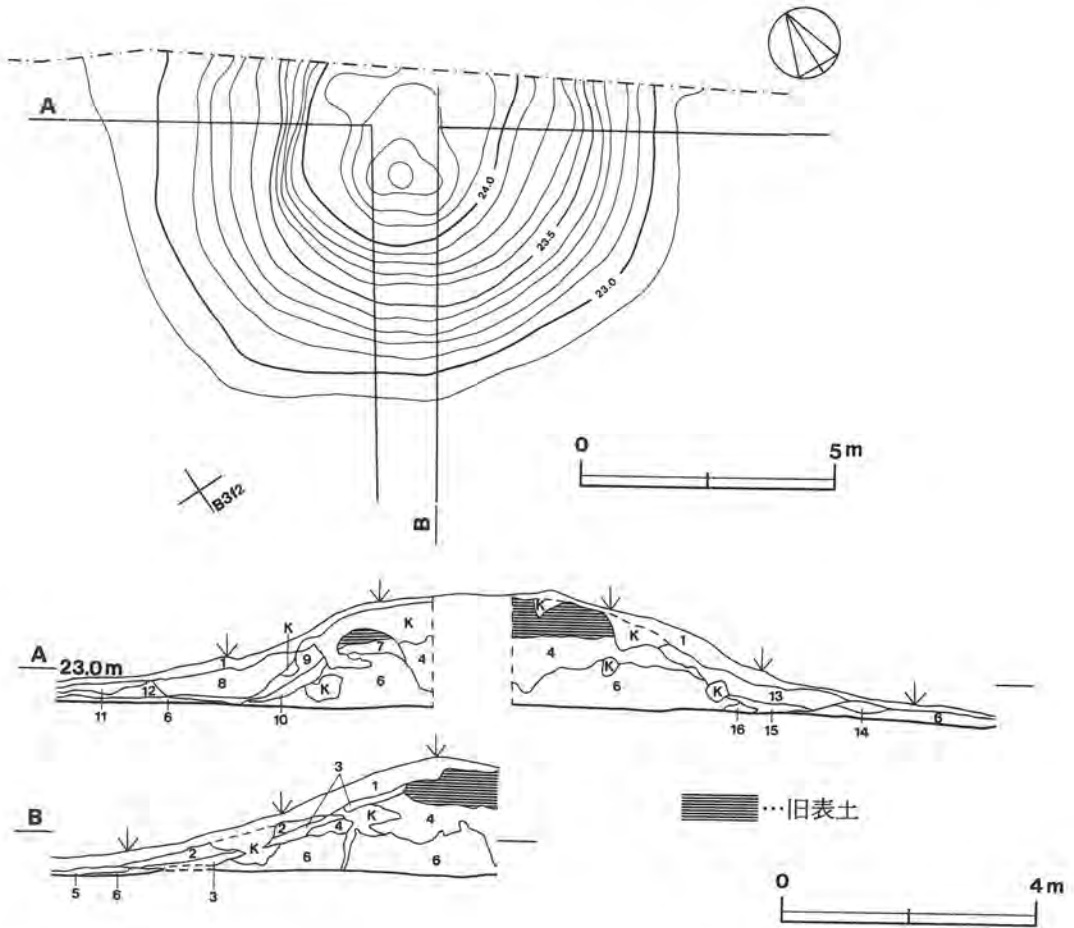
所見 盛土の流出等により形状が崩れかけているが、構築当初は直径3.5m前後の円形状を呈する

塚であったと思われる。塚頂部に祀られていた石仏の建立年代が天明3年（1783）であることから、塚は天明3年またはそれ以前に構築されたものと考えられる。

第2号塚（第248図）

位置 B3区に所在し、塚の北東側三分の一程が調査区外にかかる。

規模と形状 基底面は、直径10m程のややいびつな円形状を呈し、現地表面からの高さは約1.7



M-2《土層解説》

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 1 褐色 表土 | 9 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック極く少量 | 10 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量 |
| 3 褐色 ローム粒子・ロームブロック多量 | 11 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量 |
| 4 褐色 ローム粒子・ロームブロック極く少量 | 12 褐色 ソフトローム極めて多量, ローム粒子少量 |
| 5 褐色 砂質土少量, ローム粒子極く少量 | 13 褐色 ローム粒子少量 |
| 6 褐色 ハードローム層 | 14 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量 |
| 7 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック・黒色土粒子極く少量 | 15 褐色 ローム粒子・ロームブロック極く少量 |
| 8 褐色 ローム粒子少量, 炭化材極く少量 | 16 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極く少量 |

第248図 第2号塚実測図

mを測る。塚頂部には、直径1.5m程の浅い皿状の凹みがある。塚頂部の標高は24.3mを測る。

構築状況 館築造時に、高さ1m程の台状に削平されずに残った部分があり、そこへ周囲の土砂を運んで積み上げて構築されたものと思われる。土層セクションから、ハードローム層の上に直接盛土している部分と旧表土と考えられる暗褐色土の上に盛土をしている部分があることが確認され、館築造時に削平されなかった部分が、整った形状を呈していたわけではないことが判断できる。盛土には、後世の攪乱や木の根の攪乱が数か所認められる。

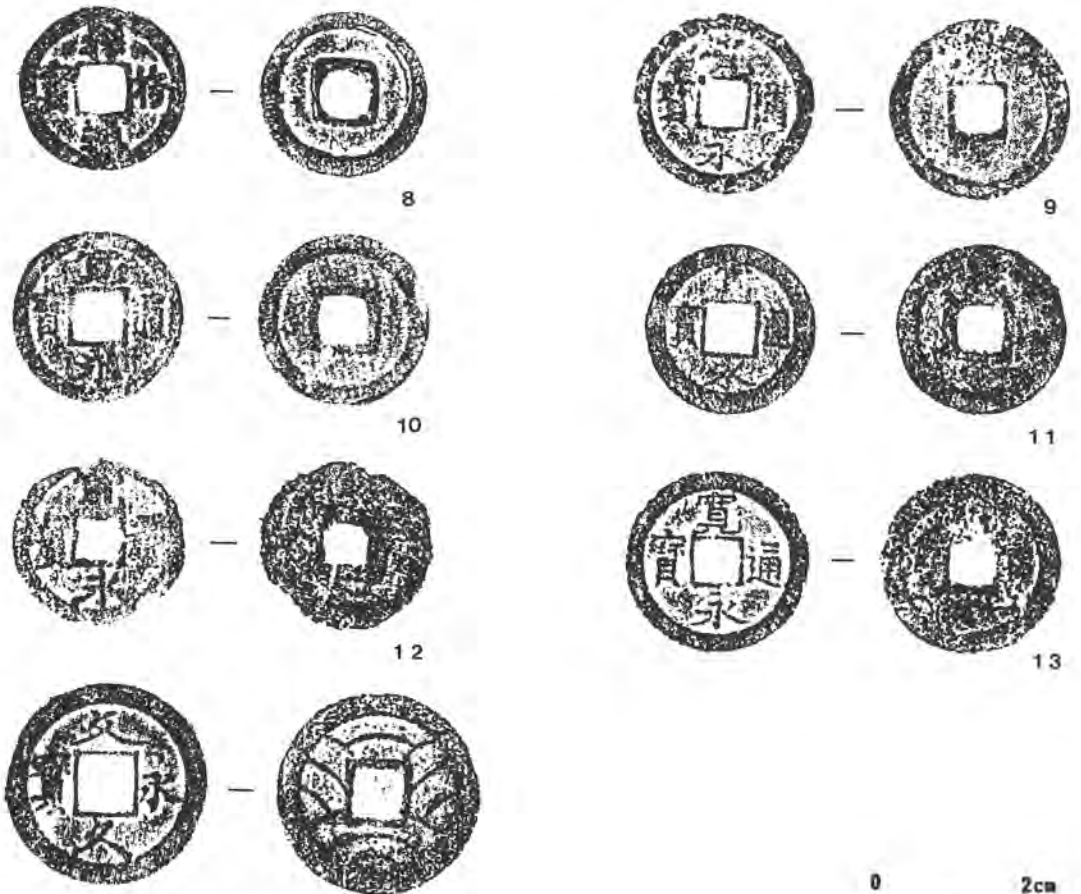
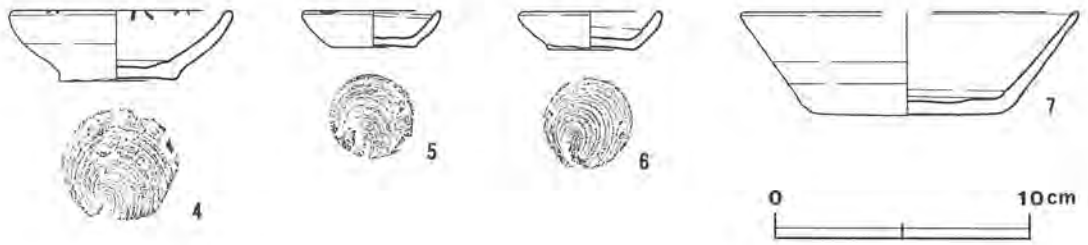
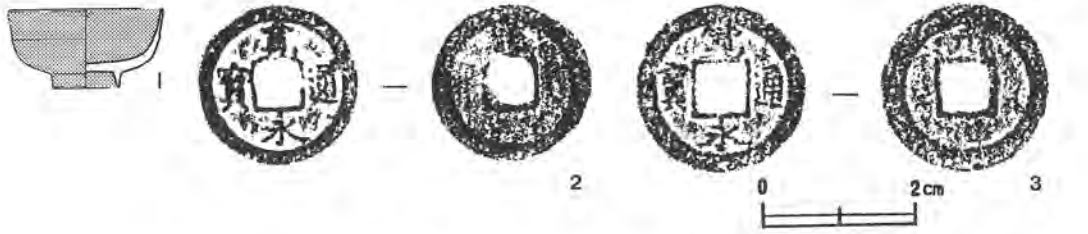
遺物 南側裾部から、土器や古銭が出土している。

所見 盛土の流出等により形状が崩れているが、構築当初は直径9m程の比較的整った円形状を呈する塚であったと思われる。構築年代は、盛土とハードロームの間に間層が認められないことから、館の廃絶後明確な表土が形成される前と考えられる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	盃 磁器	A 6.1	体部は強く内彎して腰を持ち、口縁下位に稜を持つ。口唇はやや尖り、高台は直立する。	水挽き、横ナデ、削り出し高台 畳付を除き全体に施釉。	(釉)透明 (胎)白 良	P1 60% 供献遺物
		B 3.2				
		D 2.8				
		E 0.6				

図版番号	器種	法量(cm)	備考
2	寛永通寶	直径 2.15 厚さ 0.1 重さ 1.8g	Q1 南東側表土
3	寛永通寶	直径 2.26 厚さ0.12 重さ 2.0g	Q2 南東側表土 裏面上位に「元」の文字

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	皿 土師質土器	A 8.6	体部は外傾して立ち上がり、中ほどから内彎する。底部はやや下方へ突き出す。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	砂粒 橙色 普通	P4 98% 裾部 口縁3か所に灯明の煤付着
		B 2.8				
		C 4.6				
5	皿 土師質土器	A 5.4	体部は外傾し、中ほどで内彎する。内面口縁直下に凹線が周回する。	水挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	砂粒 橙色 普通	P2 100% 裾部 口縁に煤付着
		B 1.5				
		C 3.3				
6	皿 土師質土器	A 5.4	体部は外傾し、ゆるやかに内彎する。口唇はやや尖る。体部はややゆがむ。	火挽き、横ナデ、底部回転糸切り後無調整。	砂粒 橙色 普通	P3 100% 裾部
		B 1.5				
		C 3.4				
7	環 須恵器	A (13.3)	体部は外傾し直線的に立ち上がる。口縁はわずかに外反し、口唇はやや尖る。	横ナデ、底部回転ヘラ切り後底部全面と体部下端に手持ちヘラ削り。	長石・雲母・石英 にぶい橙色 不良	P5 60% 裾部
		B 4.1				
		C 7.4				



第249図 塚出土遺物実測・拓影図

14

図版番号	器種	法 量 (cm)	備 考
8	祥符通寶	直径 2.25 厚さ 0.11 重さ 1.6 g	Q 3 裾部表土 北宋大中祥符元年 (1008)
9	寛永通寶	直径 2.41 厚さ 0.11 重さ 1.8 g	Q 4 裾部表土
10	寛永通寶	直径 2.3 厚さ 0.11 重さ 2.3 g	Q 5 裾部表土
11	寛永通寶	直径 2.29 厚さ 0.11 重さ 2.4 g	Q 6 裾部表土
12	寛永通寶	直径 2.34 厚さ 0.13 重さ 2.3 g	Q 7 裾部表土
13	寛永通寶	直径 2.46 厚さ 0.15 重さ 2.9 g	Q 8 裾部表土
14	文久永寶	直径 2.72 厚さ 0.13 重さ 4.4 g	Q 9 裾部表土

第4節 考察

1 館跡について

右靱館跡の選地は地形を十分に考慮して行われており、低湿地に囲まれた台地の先端部を利用している。さらに、台地面の幅が最も狭くなる位置を切断するなど、工事を少なくする工夫がなされている。また、1号堀跡と1号土塁を南東側の防禦施設としており、その外側には台地面や台地斜面に手を加えた痕跡が認められないことから、ここが最も外側の防禦施設であったものと考えられる。内郭から館跡に伴う遺構が検出されなかったことや、2号塚の基盤が削り残された旧台地面を利用していることを併せ考えると、右靱館跡は未完成のまま放棄されたものである可能性が高い。しかし、館跡北東側の調査区外の部分については不明であることから、これはあくまでも可能性とするに留めたい。

館跡の築造年代は、1号堀跡の折りの様子から戦国時代と考えられ、『東村誌』（矢口豊司、1934）の第2章「各大字の概要—右靱—」に、「小田天庵の盛んなりし時本字に塚原内記なるものあり。小田幕下の勇將にして右靱小山に城を築き居りしが、小田没落と共に亡びしも、小山には今尚當時の城跡を存す。」とあり、これに従えば永禄6年（1563）前後となる。

2 塚について

1号塚に祀られていた石仏から、1号塚が「庚申塚」として信仰の対象とされていたことは明らかである。また、土浦市内に所在する庚申信仰関係石仏・石塔は46基が確認され、その中で39基の建立年代が判明している。最も早い例は宝永7年（1710）、最も遅い例は昭和55年（1980）である。1号塚に祀られていた石仏は、天明3年（1783）の銘が認められることから、この地方に庚申

信仰が広まりつつある頃に建立されたものと考えられる。

2号塚は、1号塚よりも大規模であり、構築時期も早いと判断されることから、「庚申塚」とは異なる性格のものである可能性が高い。土浦市を含む茨城県南部地方一帯には、近世初期には広く大日信仰が行われていること⁽²⁾から、「大日塚」として築かれたことも考えられる。しかし、判断する資料がなく、文献や伝承も残されていないことから、断定することはできない。

註

(1) 土浦市教育委員会 『土浦の石仏』 1985

(2) 坂本源一 『常陸国南部の大日信仰』 1988

第10章 内路地台遺跡

第1節 遺跡の概要

1 地形概観

内路地台遺跡は、土浦市右掬字内路地台に所在する。調査対象となったのは、一般国道125号阿見土浦バイパス予定地内の同所1064番地外8筆、6384㎡である。

当遺跡は、陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地の北約1.2km、右掬館跡の北西約80mに位置しており、右掬館跡とは支谷によって隔てられている。当遺跡が所在する台地は、右掬館跡の地形概観に述べた「三つに分岐した舌状台地」の中央にあたる。基部は幅約70m、中ほどで幅約160m、先端付近で幅約80m、全長は約380mを測り、細長い形をしている。調査区は、この細長い舌状台地の幅が最も広がった部分で、台地面は平坦である。台地面の標高は24m前後、低地面との比高は約13mを測る。台地と低地との境界は、高さ9m前後の急崖になっている。調査区の北西側と東側には、小支谷が入り込んでいる。北西側の小支谷は台地の中央付近まで入り込み、谷は一様の傾斜を示しているが、谷頭では台地面との境界は不明瞭となる。一方、東側から入り込む小支谷は、30m程台地に入り込み、谷の傾斜は緩やかであるが、台地面との境界は、谷頭で高さ5m前後の急崖になっている。

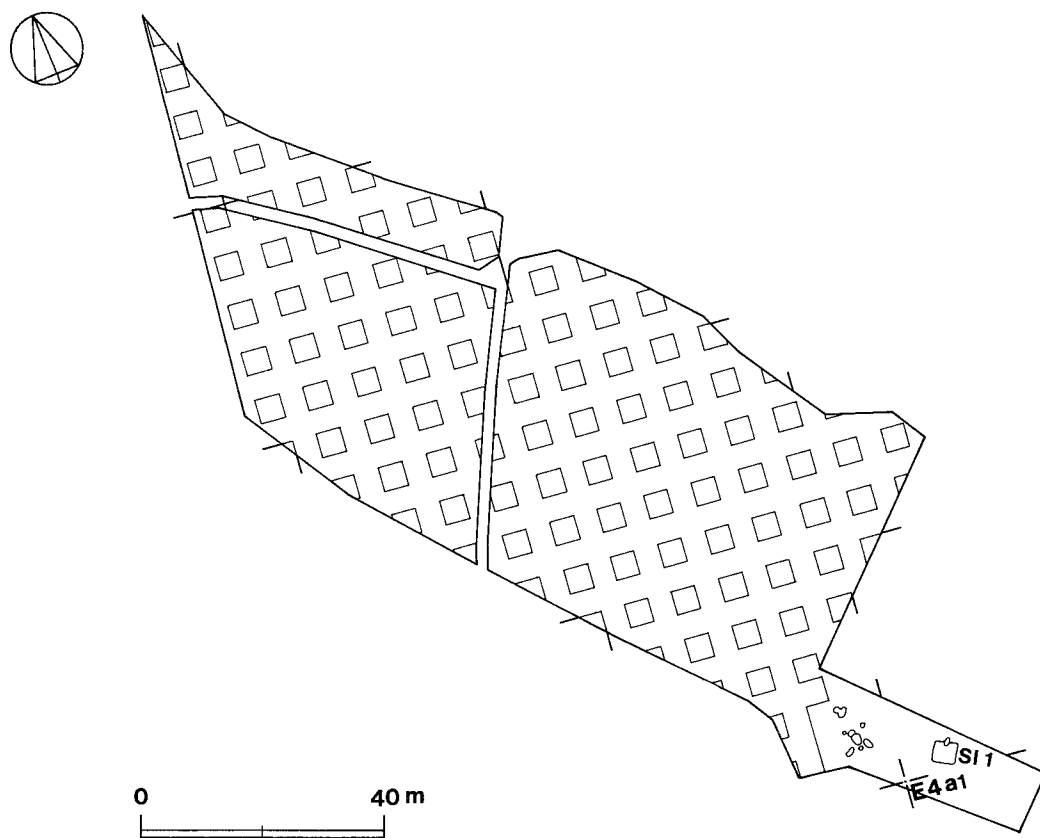


第250図 内路地台遺跡周辺地形図

土地利用状況は、調査区の30%が山林、50%が畑地で残りの20%は雑地であった。なお、雑地はかつて畑地として耕作されていたものと見られる。

2 検出遺構

当遺跡で調査された遺構は、住居跡1軒、炉穴8基である。炉穴は、調査区南東端の小台地上に位置し、8基が集中している。住居跡は炉穴群の東側に位置し、同じ小舌状台地の先端付近に占地している。遺物は、炉穴から縄文式土器片が少量出土し、住居跡からは土師器を中心として須恵器片・縄文式土器片等が出土している。

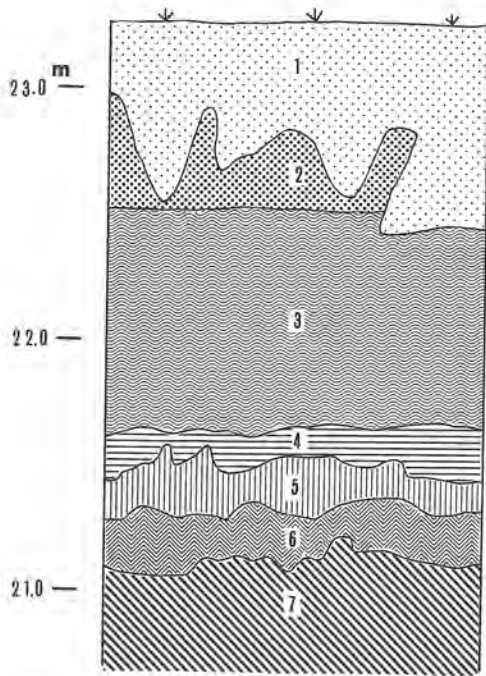


第251図 内路地台遺跡全体図

第2節 基本層序

第252図は、当遺跡の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、遺構が検出された調査区南東端寄りのD3f₅区を選定した。

1層は耕作土である。2～6層はローム層で、色調や含有物等により分類した。2層は一部ソフト



第252図 内路地台遺跡土層柱状図

ローム化しており、3層は全体に非常に硬く締っている。4層は鹿沼パミスを多量に含み、5層は強い粘性を有している。6層は粘土の混入が見られ、硬く締めり粘性も強い。7層は、常総粘土層である。

当遺跡の遺構検出にあたり、2層上面を確認面としたが、炉穴は2層下位から3層上面を確認面としている。また、遺構の掘り方は全て3層中にとどまっている。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 炉穴 (第253図)

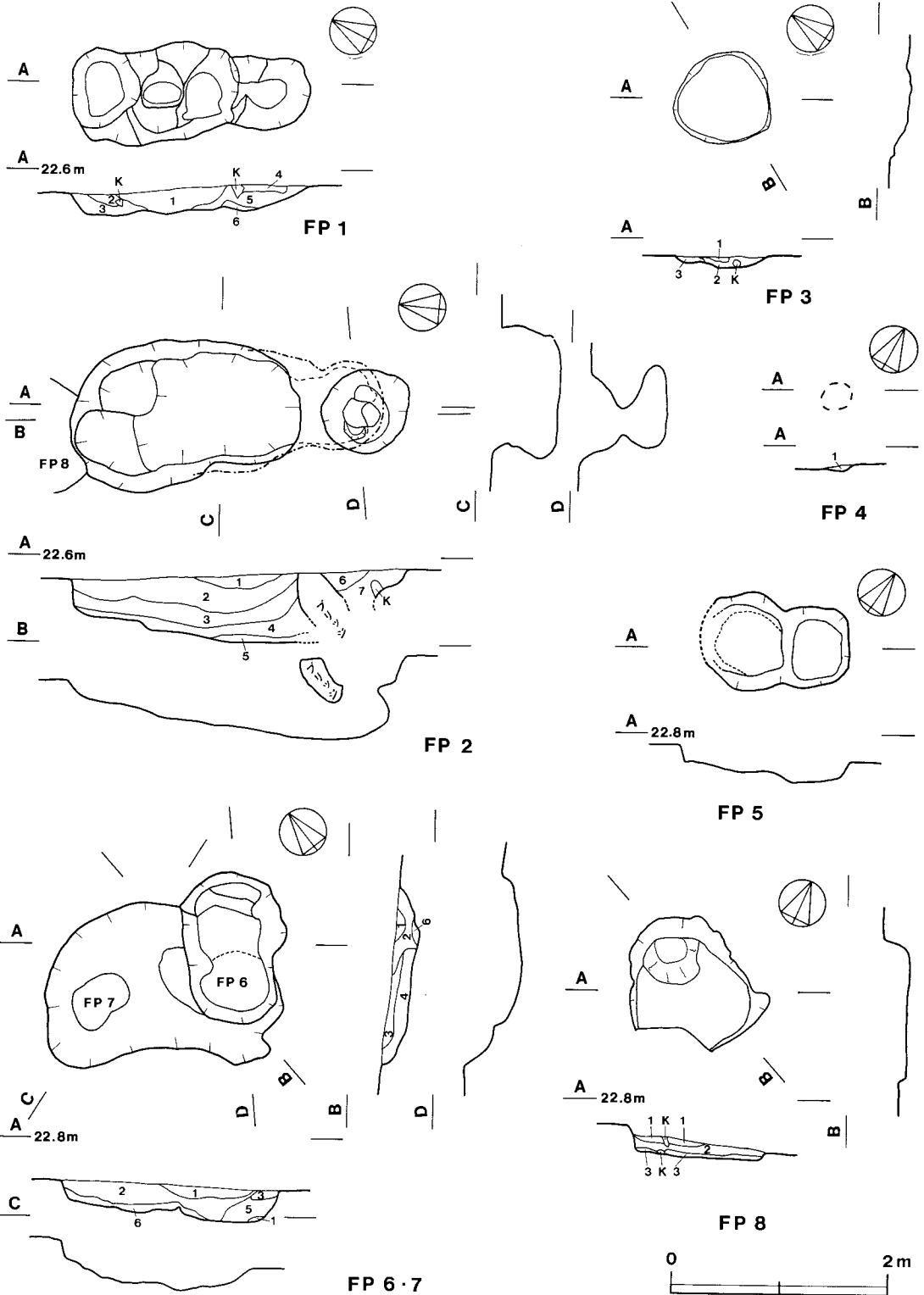
先述したように、当遺跡からは8基の炉穴が検出された。これらは、調査区の東側から入り込んだ小支谷の最奥部南側に面し、小舌状台地北側の緩斜面上に集中している。8基の中で特に遺存状態の良い第2号炉穴については文章で解説し、他は一覧表にまとめた。

第2号炉穴 (第253図)

位置 調査区南西部のD3h₀区に位置している。

主軸方向 N-173°-E

規模と形状 長径3.15×短径1.35mで、焚口部と炉部に分かれている。焚口部の上位は215×135cmの楕円形状を呈し、焚口の底面は、出入口付近で緩やかな段を有し、中ほどから奥の炉床にかけては平坦で舟底形を呈している。炉部の上位は幅20cmほどの天井部がブリッジ状に遺存し、開口部が直径80cmの円形を呈している。炉部の奥壁は、袋状を呈し、大きくオーバーハングして立



第253图 炉穴実測図

FP-1《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 3 褐色 焼土粒子多量, ロームブロック少量
- 4 褐色 焼土粒子・黒色粒子極く少量, ロームブロック少量
- 5 褐色 焼土ブロック, ロームブロック少量
- 6 赤褐色 粘土ブロック多量

FP-3《土層解説》

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 2 赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量
- 3 褐色 ロームブロック多量

FP-6・7《土層解説》

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 焼土粒子・焼土ブロック少量
- 3 褐色 焼土ブロック極く少量, ローム粒子極く少量
- 4 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 5 褐色 焼土粒子・ローム粒子極く少量
- 6 褐色 焼土粒子極く少量, ロームブロック極めて多量

FP-2《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子極く少量, ローム粒子極く少量
- 2 褐色 焼土粒子少量, ロームブロック少量
- 3 褐色 焼土粒子・ロームブロック少量, 炭化材極く少量
- 4 褐色 焼土粒子極く少量, ロームブロック多量
- 5 褐色 焼土粒子・黒色粒子多量, ロームブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子極く少量
- 7 褐色 焼土ブロック・ロームブロック少量

FP-4《土層解説》

- 1 赤褐色 焼土ブロック極めて多量

FP-8《土層解説》

- 1 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化材極く少量
- 2 褐色 焼土ブロック・ロームブロック少量
- 3 褐色 焼土粒子極く少量, ロームブロック極めて多量

ち上がり開口部に至っている。開口部はすり鉢状を呈し、40～60°の傾斜でなだらかに立ち上がっている。

壁面 焚口の壁は、出入口側では外傾し、炉側ではオーバーハングして立ち上がっている。燃焼室の壁は強くオーバーハングしてすぼまり、開口部ではすり鉢状を呈している。

底面 焚口の入口付近は段状を呈し、他は舟底形を呈する。

炉床部 南端に位置し、60×80cmの楕円形状を呈する範囲と壁面が焼土化している。

覆土 自然堆積の状態を示している。

遺物 縄文式土器（4・6）が、焚口の炉側に寄った底面付近から出土している。

所見 縄文時代早期後半に構築されたと考えられる。また、炉床・壁面の焼けた状態から火熱が非常に強かったことがわかる。

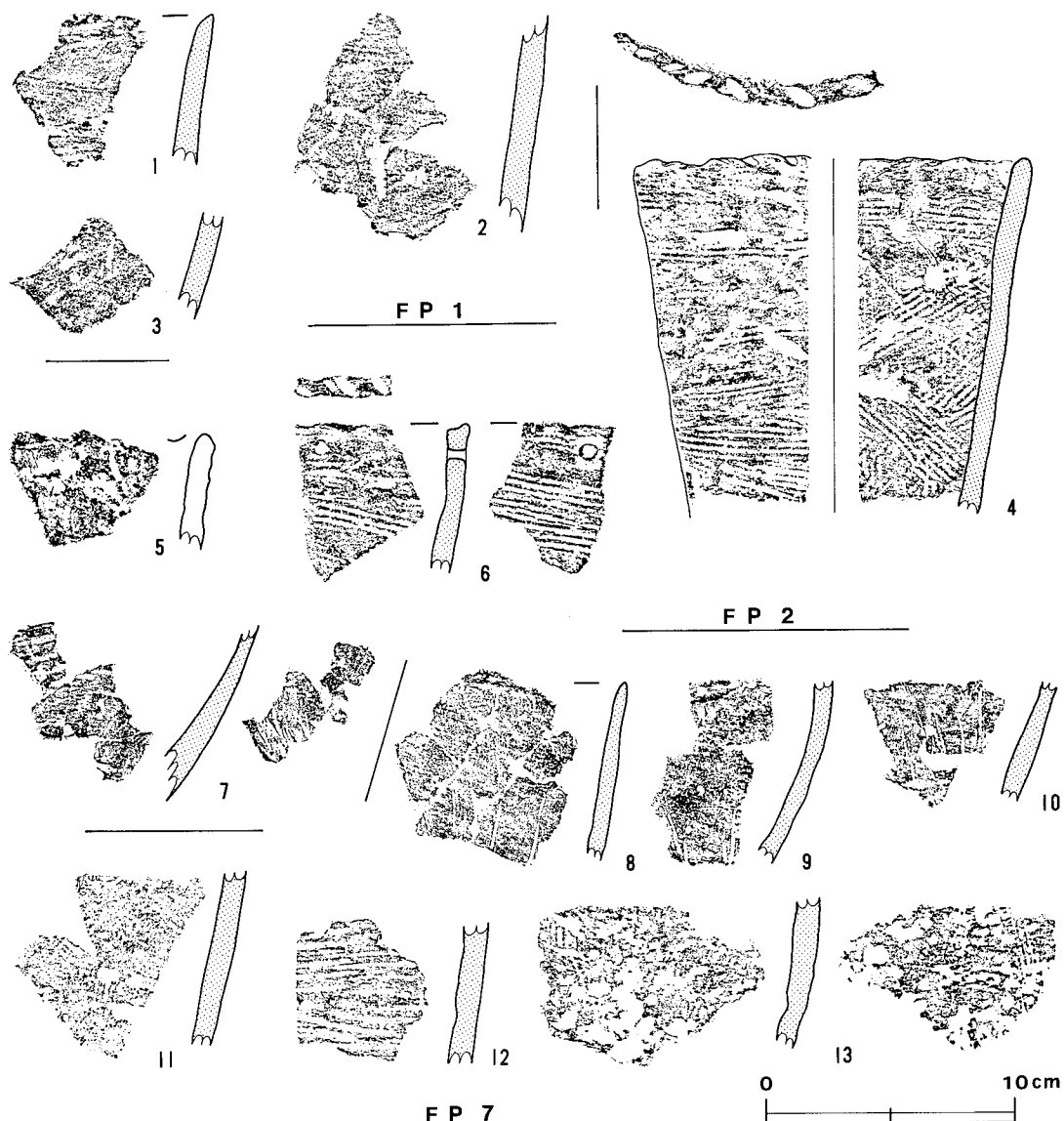
表 8 内路地台遺跡炉穴一覧表

番号	位置	長径・長軸方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	高さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
1	D3i ₀	N-26°-W	団子形	2.2 × 0.9	0.3	緩斜	皿状	N	縄文式土器片4	両端に炉部	253
2	D3h ₀	N-173°-E	ひょうたん形	3.2 × 1.4	0.8	垂直	傾斜	N	縄文式土器片9	ブリッジ遺存	〃
3	D3h ₀		不整円形	0.9 × 0.9	0.1	緩斜	皿状	N		炉部のみ検出	〃
4	D3h ₀		不整楕円形	0.3 × 0.25						炉床(焼土)のみ検出	〃
5	D3i ₀	N-64°-W	ひょうたん形	1.25 × 0.75	0.2	外傾	傾斜	N		炉床は足場底面よりも高い	〃
6	D3g ₀	N-33°-E	ひょうたん形	1.4 × 1.0	0.3	緩斜	傾斜	N		7号炉穴を切る	〃

番号	位置	長径・長軸方向	平面形	長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
7	D3g _s	N-76°-W	不整楕円形	(1.3) × 1.2	0.3	緩斜	傾斜	N	縄文式土器片11	6号炉穴に切られる	253
8	D3h _s	N-45°-W	不整楕円形	1.3 × 1.15	0.2	外傾	平坦	N	石皿1	2号炉穴と重複	〃

(2) 遺物 (第254・255図)

炉穴出土遺物の中で、土器片13点について拓本・実測を行った。(14の石皿は、第8号炉穴出土



第254図 炉穴出土遺物実測・拓影図

と判断したが、第8号炉穴は第2号炉穴の出入口と重複しており、第2号炉穴の出入口の傍に置かれていた可能性も考えることができる。）

第1号炉穴出土遺物（1～3）

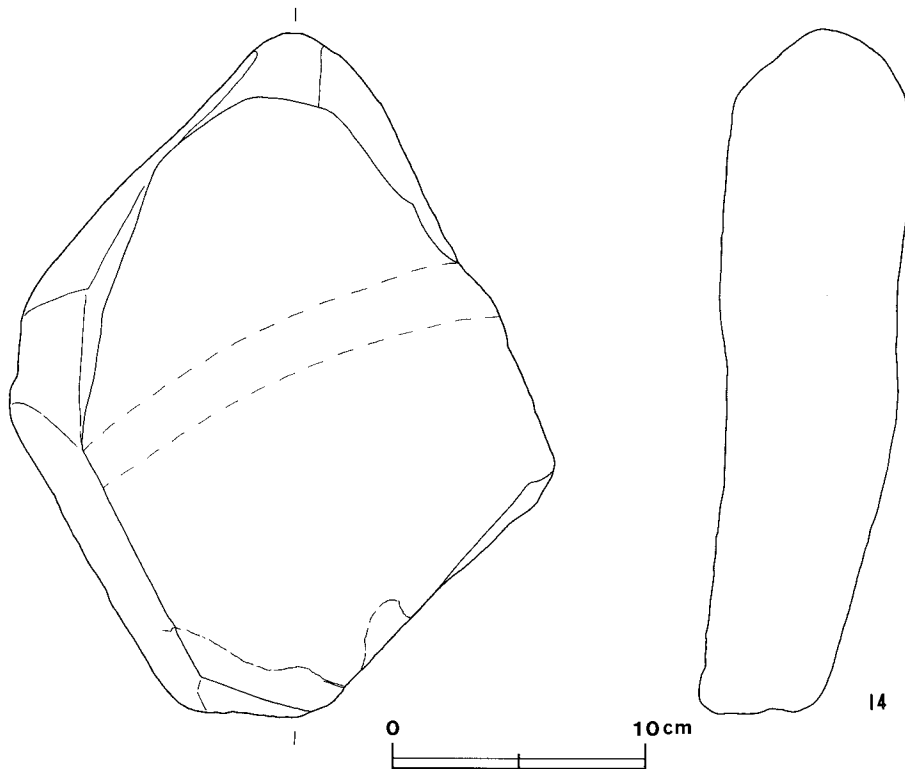
いずれも胎土に多量の繊維を含み、外面に条痕が見られる。1の下部にアナグラ属の貝殻条痕が認められるが、他は断定できない。

第2号炉穴出土遺物（4～7）

4・6・7は、内外面ともアナグラ属の貝殻条痕が見られ、胎土に繊維を含んでいる。4・6は口唇部に棒状工具を押圧した刻みが付され、6はさらに頸部が穿孔されている。4・6は同一個体と思われるが、7は繊維が極めて少なく、別個体と考えられる。4は推定口径15.6cm、現存高14.3cmを測る。5は、胎土に多量の雲母や長石・石英及び少量の繊維を含み、刺突文が列点状に施されている。

第7号炉穴出土遺物（8～13）

全て胎土に繊維を含むものである。8～10は同一個体と思われ、棒状工具による従位の浅い沈線がほぼ等間隔に施されている。11・12は外面、13は内外面にアナグラ属の貝殻条痕が認められる。



第255図 第8号炉穴出土遺物実測図

第8号炉穴出土遺物 (第255図)

14は、砂岩製の石皿である。長さ26.9cm、厚さ7.1cm、重さ5.5kgを測る。

2 平安時代

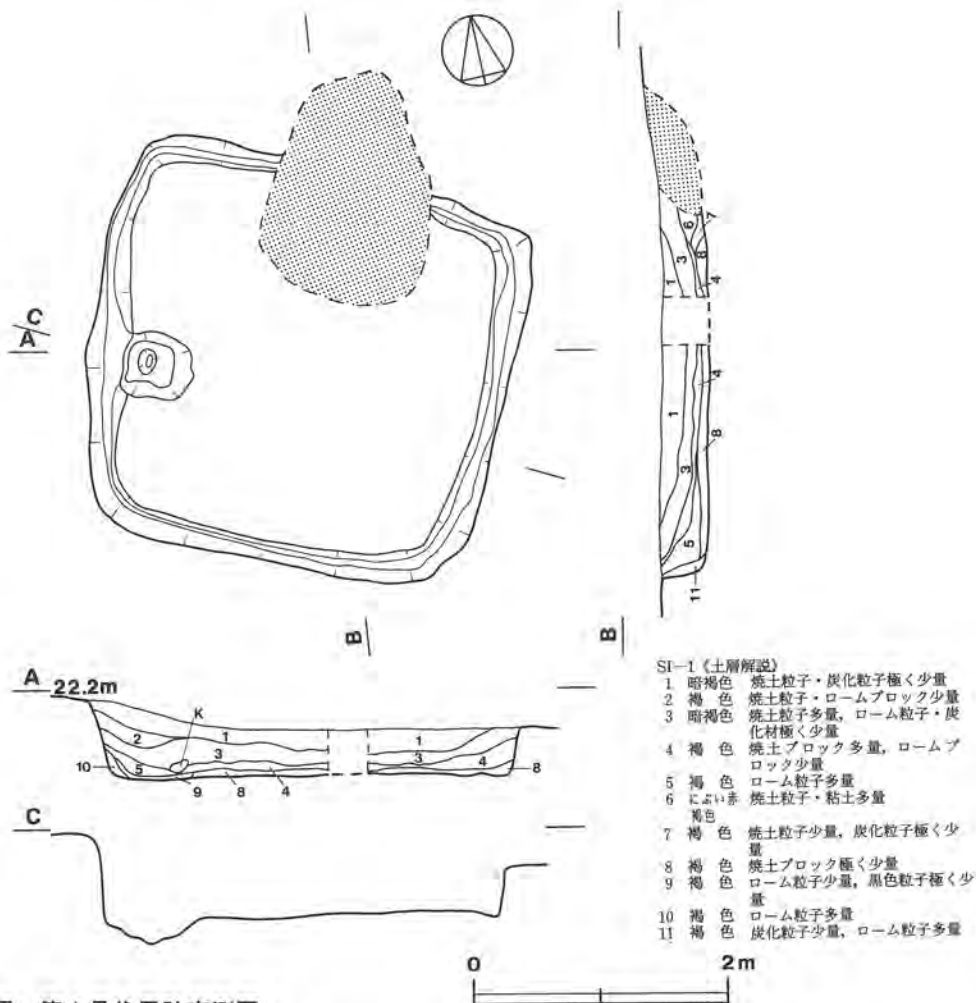
第1号住居跡 (第256図)

位置 調査区南東端部のD4j₂区を中心に確認された。

規模と平面形 東西3.3m、南北3.2mを測り、隅丸方形状を呈している。

主軸方向 N-27°-E

壁 ロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。西壁の北西コーナー寄りの部分はわずかにオーバーハングしており、東壁の南東コーナー寄りの部分は80°~85°の傾斜を有している。



第256図 第1号住居跡実測図

壁溝 全体に周回している。東西の壁下は幅15~20cm, 南北の壁下は幅10~15cmで, 深さはいずれも5cm前後である。

床 ロームで平坦である。竈の前方及び中央付近は, 特に堅緻に踏み固められている。

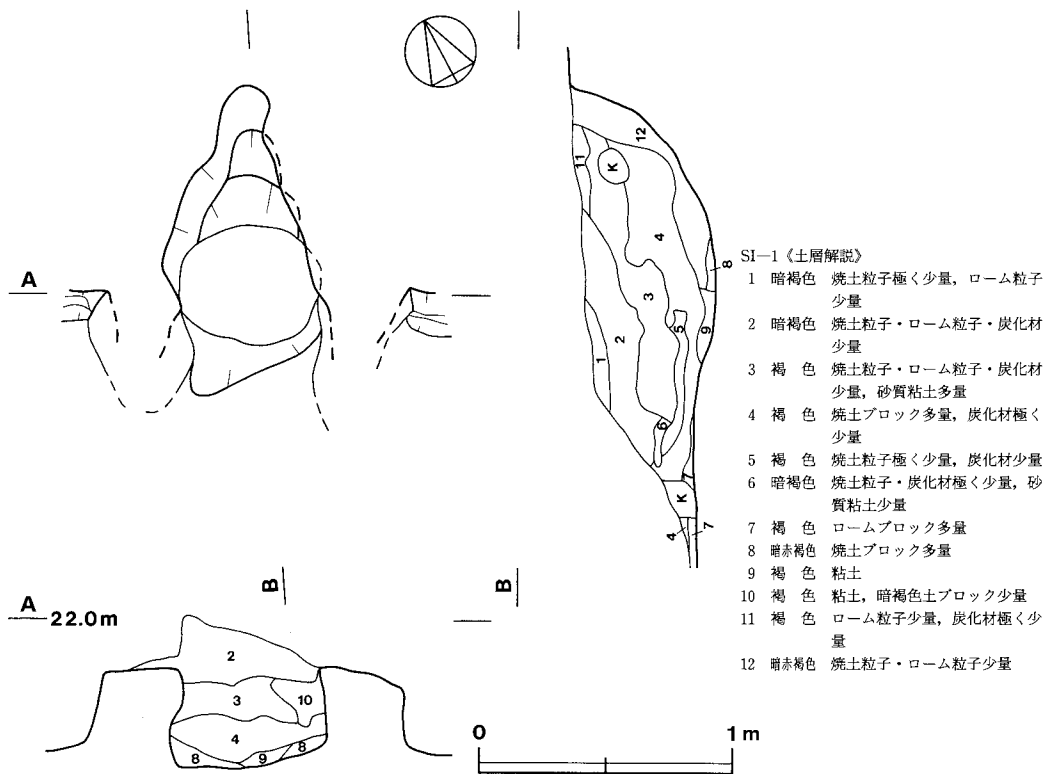
ピット 柱穴は確認できなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

竈 北壁中央からやや東へ寄った位置に付設されていた。全長130cm前後, 幅125cmを測り, 住居跡の壁を80cmほど掘り込んでいる。遺存状態はあまり良い方ではない。袖部は粘土を用いて構築されているが, 先端は崩れて不明瞭である。両袖とも基部において上幅35cm, 下幅40cmを測り, 長さは60cm前後を有したと思われる。右袖基部は, ロームを幅23cm, 長さ6cmの箱形に掘り残し, さらに粘土を付け足している。焚口部から火床部にかけて, ロームを浅い皿状に7cmほど掘り込んでおり, 火床は直径60cmの円形状を呈する範囲が焼土化していた。

覆土 11層から成る自然堆積である。中央付近は4層から成り, 中位には焼土・炭化材を多量に含む層が認められる。

遺物 竈及び覆土の焼土・炭化材を含む層を中心に出土した。土師器は坏18点, 高台付碗2点, 甕

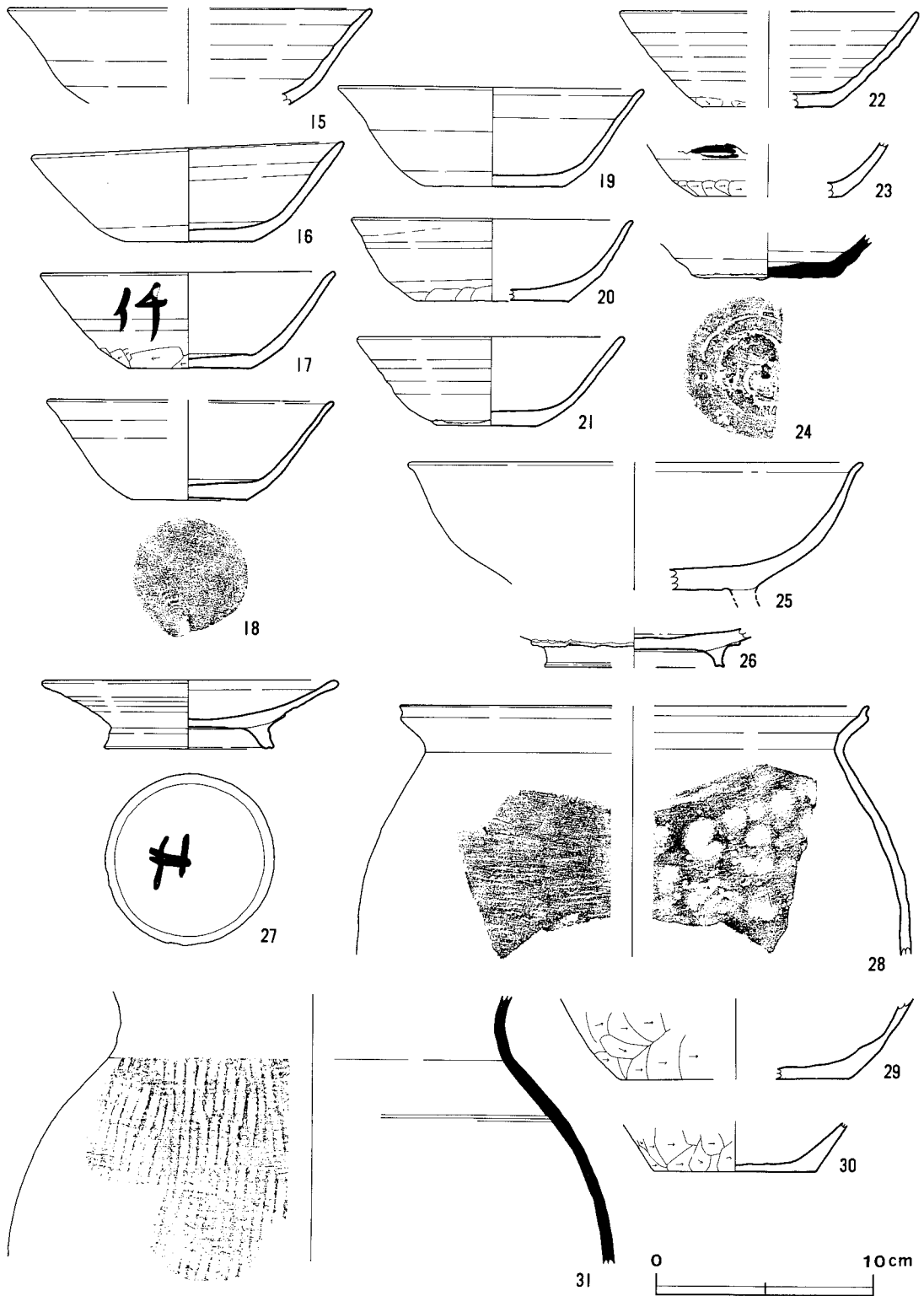


第257図 第1号住居跡竈実測図

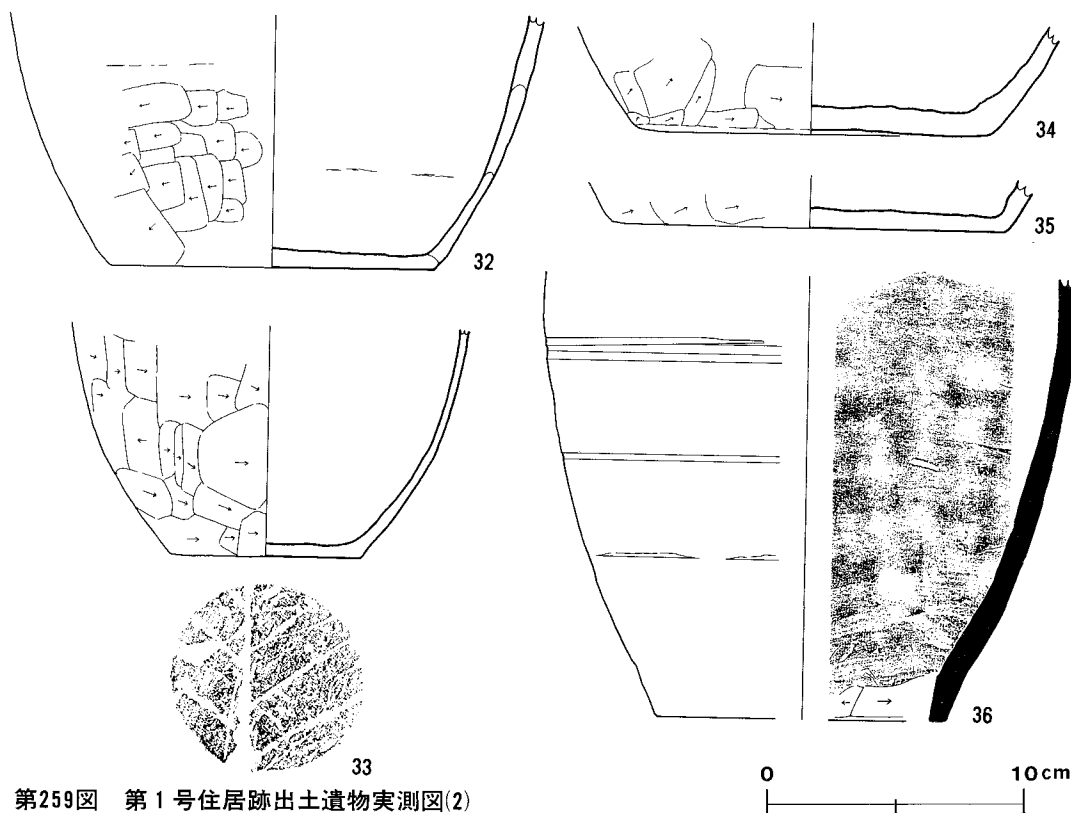
48点、皿3点、須恵器は坏3点、甕2点、甌1点、縄文式土器は16点である。この数は、丹念な接合作業の結果で、完形近くまで接合された遺物も破片も全て1点として数えている。実測可能であったのは土師器19点、須恵器3点である。土師器甕は、竈の補強に使用された例が多い。

所見 本跡は、住居跡の形態や出土遺物から、平安時代に比定されると思われる。また、覆土の状態から廃絶後半ば埋まった段階で火災に遇ったと考えられる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
15	土師器	A (16.8)	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。中ほどからやや外反し、にぶい稜を有する。	横ナデ、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・スコリアにぶい橙色 普通(二次焼成)	P5 10% 覆土下層
		B (4.5)				
16	土師器	A 14.4	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。中ほどから直線的に開き、口縁下がやや肥厚する。	横ナデ、体部下端及び底部入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・小礫にぶい橙色 普通(二次焼成)	
		B 4.7				
		C 5.9				
17	土師器	A 13.6	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁はやや外反し、口唇は丸い。内面底部は凹線状。	横ナデ、体部下端及び底部手持ちヘラ削り、内面入念な磨き及び黒色処理。	砂粒・スコリア 橙色 普通(二次焼成)	P11 60% 覆土上層 体部外面墨書(付)
		B 4.6				
		C 5.6				
18	土師器	A (13.4)	体部は外傾し、ゆるやかに内彎して立ち上がる。口縁はわずかに外反し、口唇は丸い。	横ナデ、底部回転糸切り後体部下端と共に手持ちヘラ削り、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・スコリアにぶい橙色 普通(二次焼成)	P10 40% 覆土上層
		B 4.8				
		C 5.4				
19	土師器	A 14.1	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。中ほどから外反し、口唇は丸い。内面斑点状剝離。	体部下端及び底部手持ちヘラ削り、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 橙色 普通(二次焼成)	P4 100% 竈下層
		B 4.7				
		C 6.4				
20	土師器	A 12.9	体部は外傾し、内彎して立ち上がる。口縁は外反し、口唇は丸い。体部外面ににぶい稜。	横ナデ、体部下端及び底部手持ちヘラ削り、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒・雲母末にぶい橙色 良(二次焼成)	P3 60% 覆土下層
		B 3.9				
		C 7.1				
21	土師器	A 12.3	体部は外傾し、下半は内彎して中ほどわずかに外反。底部は切り離し面が傾き、片側が段状。	横ナデ、体部下端及び底部手持ちヘラ削り、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 明赤褐色 普通(二次焼成)	P6 50% 竈下層 覆土下層
		B 4.3				
		C 4.7				
22	土師器	A (13.6)	体部は外傾し、わずかに内彎して立ち上がる。口唇は丸くおさめる。外面は稜が顕著。	横ナデ、回転糸切り後体部下端及び底部手持ちヘラ削り、内面やや雑なヘラ磨き及び黒色処理。	砂礫 明赤褐色 普通	P2 25% 覆土上層
		B 4.5				
		C (6.1)				
23	土師器	B (2.5)	体部は外傾し、内彎しながら外上方へ開く。外面にはにぶい稜を有する。	横ナデ、体部下端及び底部手持ちヘラ削り、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P1 5% 覆土上層 体部外面墨書
		C (6.8)				
24	須恵器	B (2.2)	体部は外傾し、やや内彎する。外面には顕著な稜を有し、底部はやや突き出す。	横ナデ、底部回転ヘラ削り、内面ヘラナデ。	長石・石英 緑灰色 良	P9 20% 覆土下層
		C (6.3)				
25	土師器	A (20.8)	体部は強く外傾し、直線的に開く。中ほどは丸味を以って内彎し、口縁は外反。底部は肥厚。	外面横ナデ、内面入念なヘラ磨き及び黒色処理。高台は接合後剝離。	雲母末・石英にぶい橙色 普通(二次焼成)	P12 20% 覆土下層
		B (6.0)				
26	土師器	B (1.9)	底部は皿状。高台は直立し、接合部外面は粘土がはみ出す。畳付は浅い凹線状を呈する。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合。	雲母末・砂粒にぶい橙色 普通(二次焼成)	P13 20% 覆土下層
		D (8.5)				
		E 1.1				



第258图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第259図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
27	皿 土師器	A 13.5 B 3.3 D 7.9	体部はやや内彎気味に開く。口縁はやや肥厚し、口唇は丸い。高台は開き、疊付には凹線。	横ナデ、底部回転ヘラ削り後高台接合。	雲母末・長石・石英 褐灰色 普通(二次焼成)	P8 100% 覆土上層 高台内墨書
28	甕 土師器	A (21.8) B 11.8	肩はなだらかにすぼまり、頸部は強く外反する。口唇部つまみ上げは外反し、外面は凹線状。	粘土紐巻き上げ、胴部外面平行線叩き目、内面あて具に替わる指頭痕。頸部横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P14 5% 竈覆土
29	甕 土師器	B (3.8) C (10.6)	胴部は外傾し、ゆるやかに内彎しながら外上方へ立ち上がる。底部は平担。内面は剝離が顕著。	粘土紐巻き上げ、外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英(多) にぶい赤褐色 普通(二次焼成)	P17 5% 覆土下層
30	甕 土師器	B (2.4) C 7.5	胴部は強く外傾し、直線的に外上方へ開く。底部は平担。内面は斑点状剝離が顕著。	粘土紐巻き上げ、外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英(多) 褐灰色 普通(二次焼成)	P18 5% 覆土上層
31	甕 須恵器	B (10.6)	肩は丸味を以ってすぼまり、頸部は強く外反する。	粘土紐巻き上げ、胴部外面格子状叩き目、頸部内外面横ナデ、肩内面ヘラによる横ナデ。	長石・石英 にぶい橙色 不良	P15 5% 覆土下層
32	甕 土師器	B (10.0) C (12.8)	胴部はやや外傾し、ゆるやかに内彎して立ち上がる。底部は平担。内面指によるおさえの痕跡。	粘土紐巻き上げ、内外面ナデ、胴部下半手持ちヘラ削り。	長石・石英(多) にぶい橙色 普通	P19 10% 覆土上層
33	甕 土師器	B (9.7) C 7.4	胴部は外傾し、ゆるく内彎しながら立ち上がる。内面は斑点状剝離。底部木葉痕。全体に薄手。	粘土紐巻き上げ、内面ナデ、外面手持ちヘラ削り。	長石・石英(多) にぶい赤褐色 普通(二次焼成)	P16 40% 竈覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
34	甕 土師器	B (4.9)	胴部は外傾し、わずかに内彎して外上方へ開く。底部は中央がやや高く、内面は剥離が顕著。	粘土紐巻き上げ、胴部外面手持ちヘラ削り。	長石・石英 褐灰色 普通（二次焼成）	P21 10% 竈袖補強材 底部周縁磨滅
		C 14.0				
35	甕 土師器	B (2.1)	胴部は外傾し、外上方へ開く。底部は平坦。	粘土紐巻き上げ、内面ナデ、同底部周縁入念な指ナデ、底部外面一部手持ちヘラ削り。	長石・石英（多） にぶい赤褐色 普通（二次焼成）	P20 5% 竈覆土
		C 15.4				
36	甗 須恵器	B (17.6)	胴部はやや外傾し、ゆるく内彎する。内面に整形時の指痕。外面に横位の筋。	粘土紐巻き上げ、横ナデ、孔はヘラ切りによって穿たれる。	砂粒（少） にぶい橙色 不良（二次焼成）	P22 30% 覆土上層 内面黒色
		C (11.2)				

第4節 考察

1 縄文時代

土器は全て縄文時代早期後半に位置付けられ、石皿も同時期と考えられる。第2号炉穴出土遺物の中で、4・6は焚口部の炉部側へ寄った底面付近から出土しており、第2号炉穴で使用された土器である可能性が高い。広義の芽山式期前半のものと思われる。

遺構では、第2号炉穴について触れてみたい。炉穴は、通常1～3か所の炉床を有するが、第2号炉穴の炉床は1か所であった。炉穴としては大規模で、全長3.2m、深さ0.8mを測る。この炉穴は天井部がブリッジ状に遺存しており、本来の姿そのままでは無いにせよ、掘られた当時に近い状態で観察することができた。焚口の底面は、出入口付近では平坦であり、低い段を経てから炉に向かって緩やかに傾斜している。出入口付近は本来、階段状を呈していたものと考えられる。炉に近い部分の壁がオーバーハングしていることや覆土下層に多量のハードロームブロックが含まれていることから、本来は出入口以外はトンネル状を呈したと思われる。焚口の覆土最下層に見られる焼土をトンネルの天井下面が焼けたものと仮定すると、本来の出入口と炉の間には長さ1m前後のトンネルが存在したと思われる。炉の燃燒室は袋状を呈し、上位の開口部との接点は強くくびれている。

2 平安時代

第1号住居跡出土遺物は、覆土から出土したものが圧倒的に多く、しかも大部分が二次焼成を受けている。これは、住居跡の火災の影響によると思われる、特に27・36は竈と北西コーナーの中間にあつて床面中央に向かって傾斜する状態で出土し、しかも下位には焼土を多量に含む層が検出されていることから、この位置に投棄された段階で火災に会い、二次焼成を受けたと判断される。明らかに住居跡に伴うと見られる遺物は無く、出土遺物相互の時期差を見出すことは困難である。また、24の内面に見られるヘラナデ調整は、22の内面調整痕と近似しており、実際には磨きであったと推定される。須恵器坏には稀な例である。

結 語

西郷遺跡は、断続的ではあるが、縄文時代から中世にわたって営まれた複合遺跡であることが明らかになった。検出された竪穴住居跡は、古墳時代後期から平安時代中頃にかけてのもので、土師器・須恵器などが出土し、なかには墨書土器などもみられた。調査区外へかかる竪穴住居跡が何軒かみられることから、集落は当遺跡よりもやや小高い北側及び南西側に延びているものと思われる。中世になると、当遺跡は人間が生活を営む場所と言うよりも、墓域的な性格を持つ地域へと変化していくことがわかった。

南丘他5遺跡は各々その性格を異にし、調査範囲が道路幅という制約はあっても、土浦市南東部に残された先人達の生活の一端を窺い知ることができた。

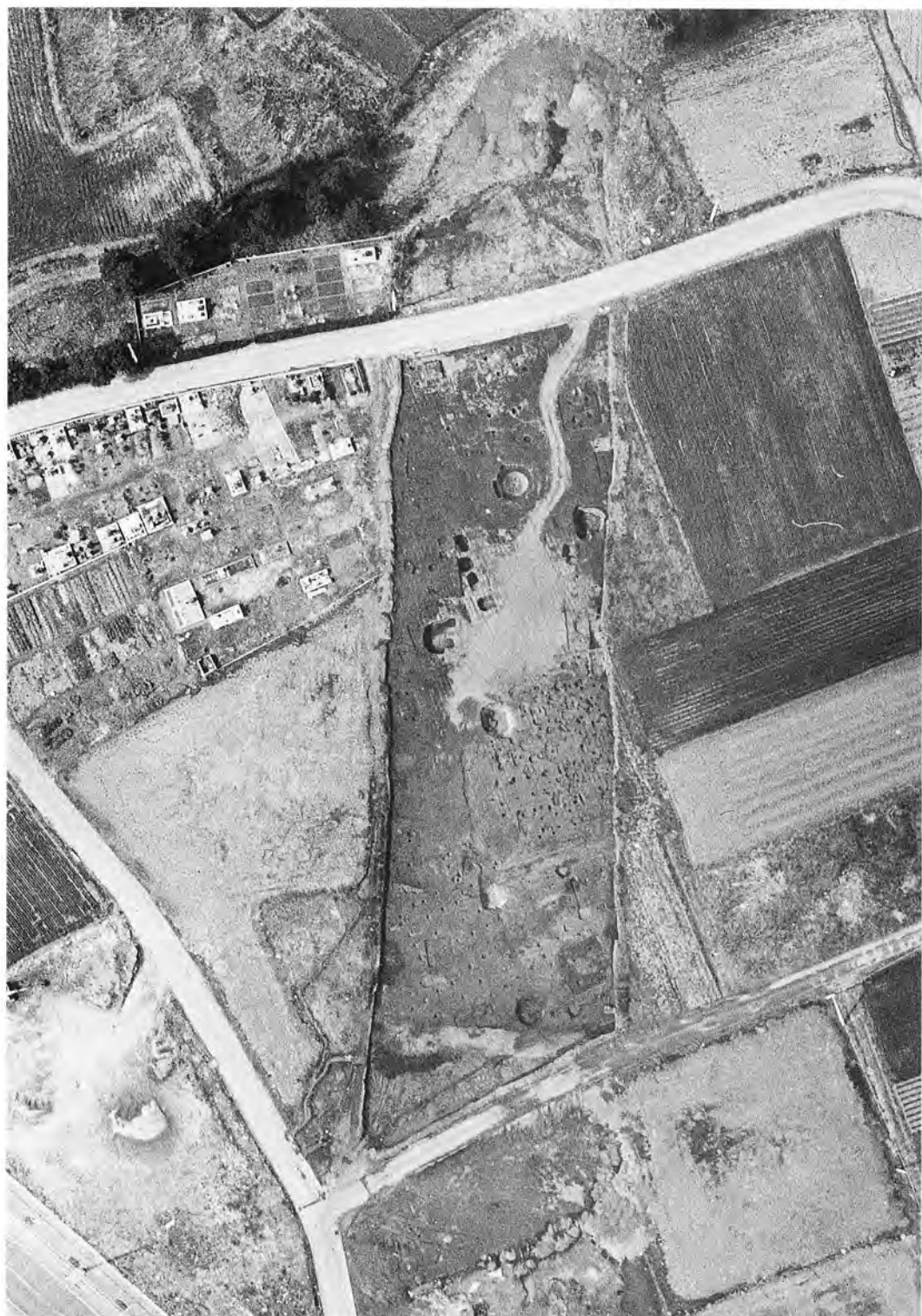
南丘遺跡は、縄文時代早期から中世に至る遺物が見られ、人々が断続して生活していたことがわかる。長峰遺跡は、その集落構成において数軒が1単位となる可能性を示唆しており、集落全体の調査ではないものの、10世紀の集落構成の一端を示すものとして興味深い。数光・宮塚両遺跡は後世の攪乱や土取りの影響が大きく、本来の姿は失われている。右杖館跡は、築造途中で放棄された可能性が高く、近世に至って信仰の場となったようである。内路地台遺跡の住居跡は、廃絶後に土器が投棄され、さらに火災が起こっている。

本書をまとめるに際し、可能な限り多くの情報を収集するように努力したが、時間的な制約もあり、結果的に多くの不備や検討不足の点を残してしまった。

最後に、発掘調査から報告書作成に至るまで、関係各機関・関係各位から、多くの御指導・御助言を賜ったことに対し、深甚なる謝意を表する次第である。

写 真 图 版

西 鄉 遺 跡



西郷遺跡全景

PL 2



調査前全景(東から)



遺溝確認状況(東から)



第1号住居跡



第 2 号住居跡



第 6 号住居跡



第 7 号住居跡

PL 4



第 8・14 号住居跡



第 9 号住居跡
遺物出土状況



第 10 号住居跡
遺物出土状況



第 16 号住居跡

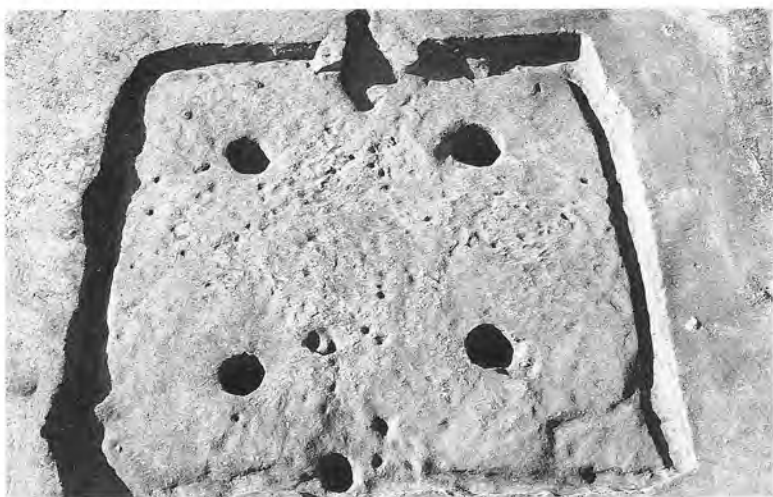


第 17 号住居跡



第 22 号住居跡

PL 6



第 27 号住居跡



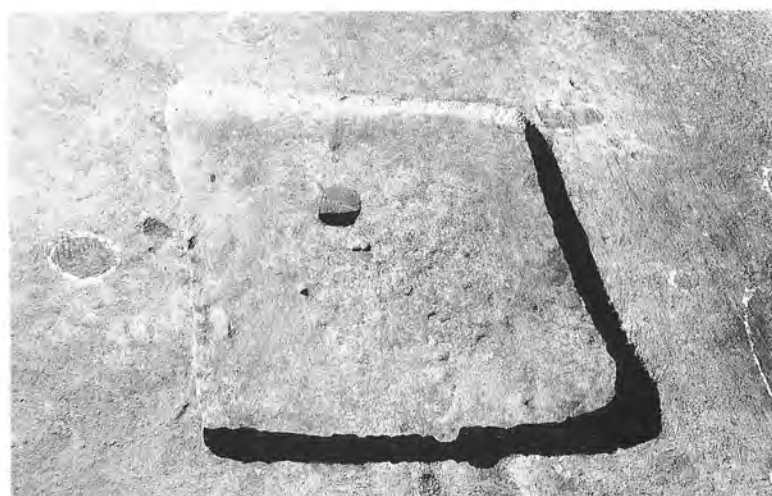
第 28 号住居跡



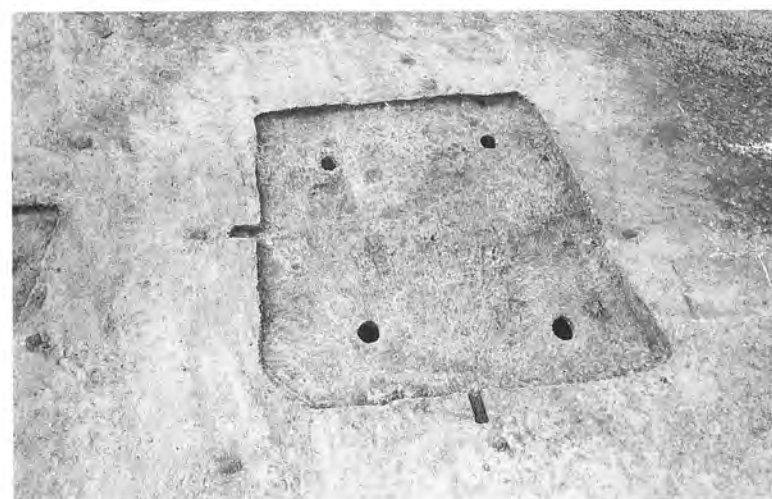
第 30 号住居跡



第3号竖穴遺溝
遺物出土狀況



第3号竖穴遺溝



第29号竖穴遺溝

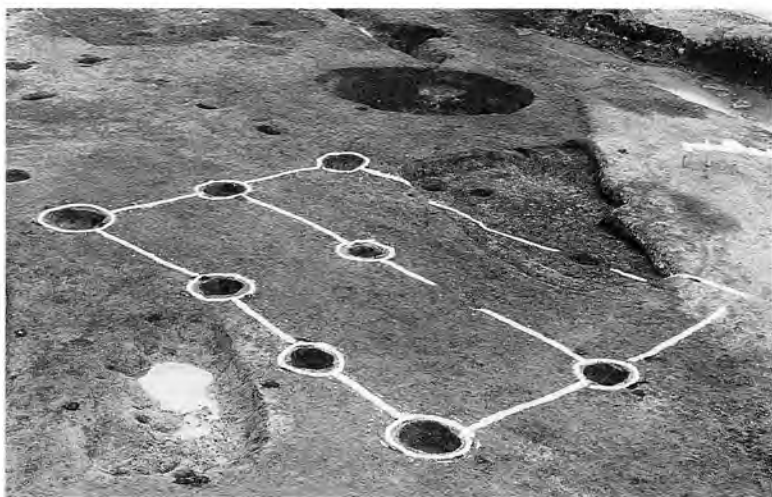
PL 8



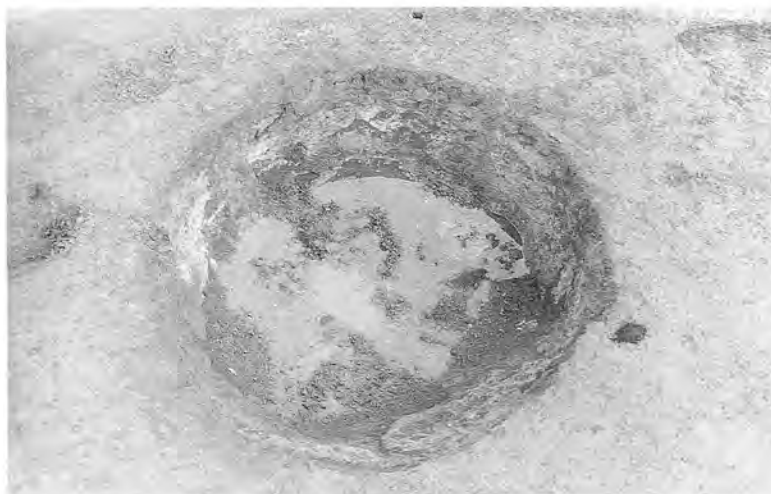
第 1 号掘立柱建物跡



第 2・4 号掘立柱建物跡



第 3 号掘立柱建物跡



第 2 号井戸



第 3 号井戸土層



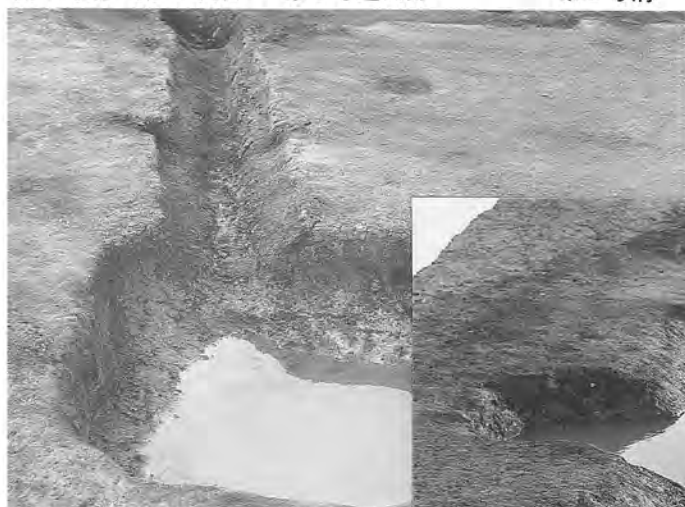
第 3 号井戸



第1号溝・第3号井戸・第3号道路跡



第2号溝



第3号溝



第4号溝



第 1 号道路跡

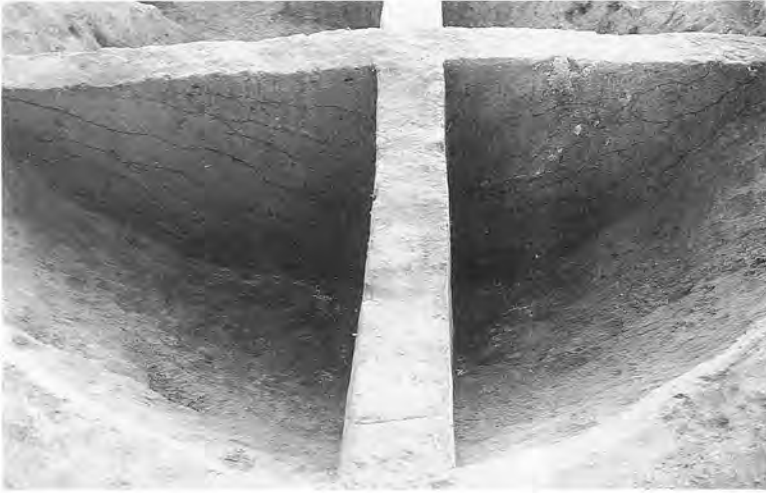


第 2 号道路跡



第 1 号道路跡遺物出土狀況

PL 12



第1号性格不明遺溝
土層



第1号性格不明遺溝
遺物出土狀況
(下層)



第1号性格不明遺溝



第1・2号地下式墳土層



第1号地下式墳
遺物出土状況



第1・2号地下式墳

PL 14



第3号地下式壙土層



第3号地下式壙
遺物出土狀況



第3号地下式壙



第 4 号地下式墳



第 4 号地下式墳



第 5 号地下式墳



第 122 号墓坑人骨出土状况



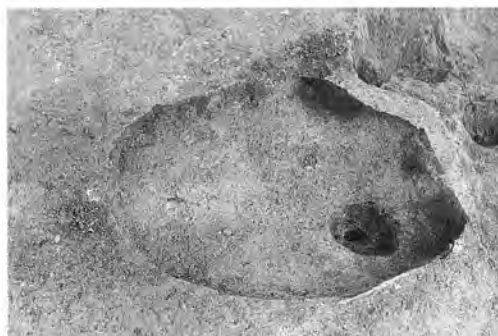
第 122 号墓坑



第 4 号土坑



第 11 号土坑



第 22 号土坑



第 25 号土坑



第 41 号土坑遗物出土状况



第 44 号土坑



第 71 号土坑



第 82 · 83 号土坑



第 89 号土坑



第 93 号土坑



土坑群



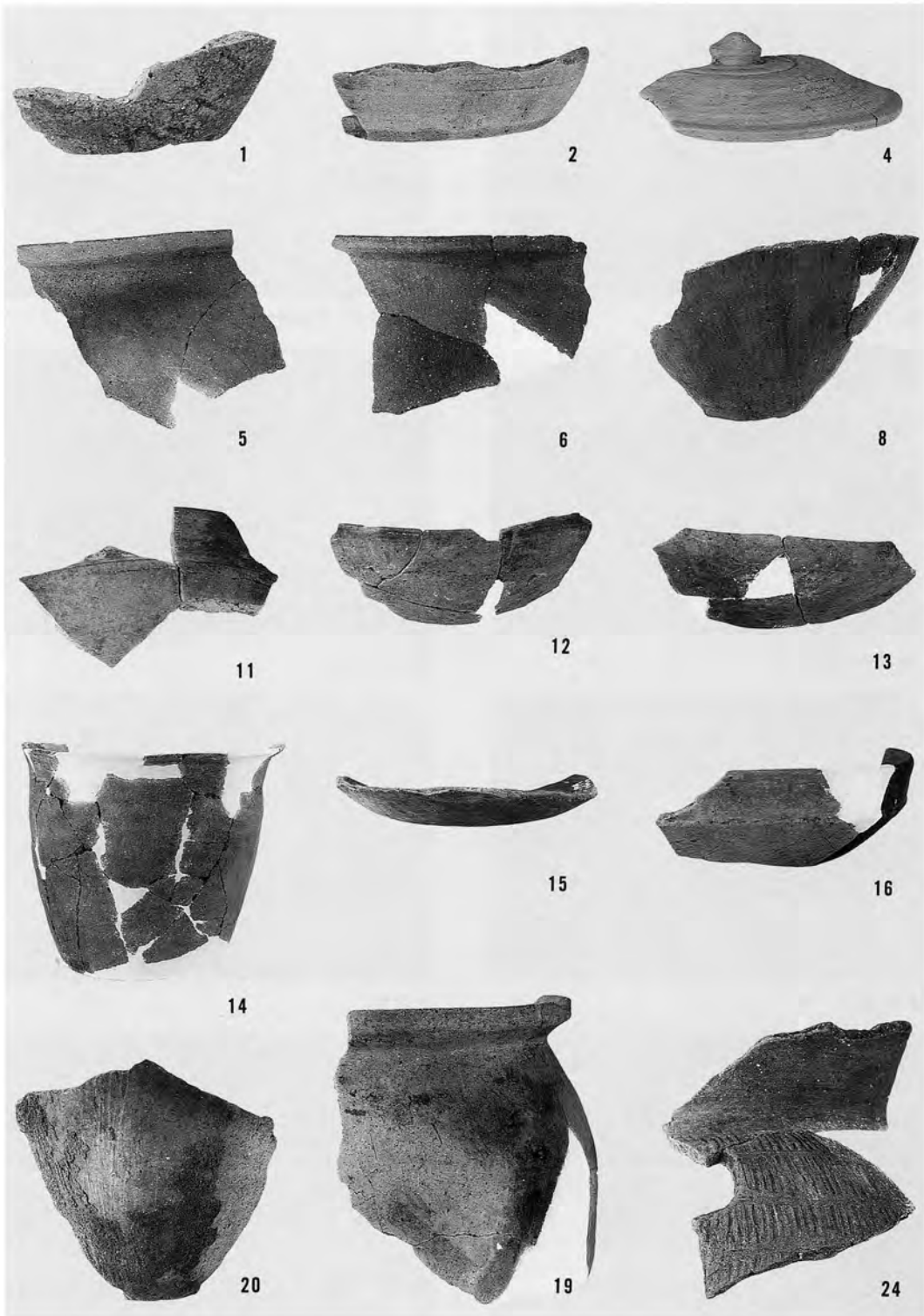
土坑群



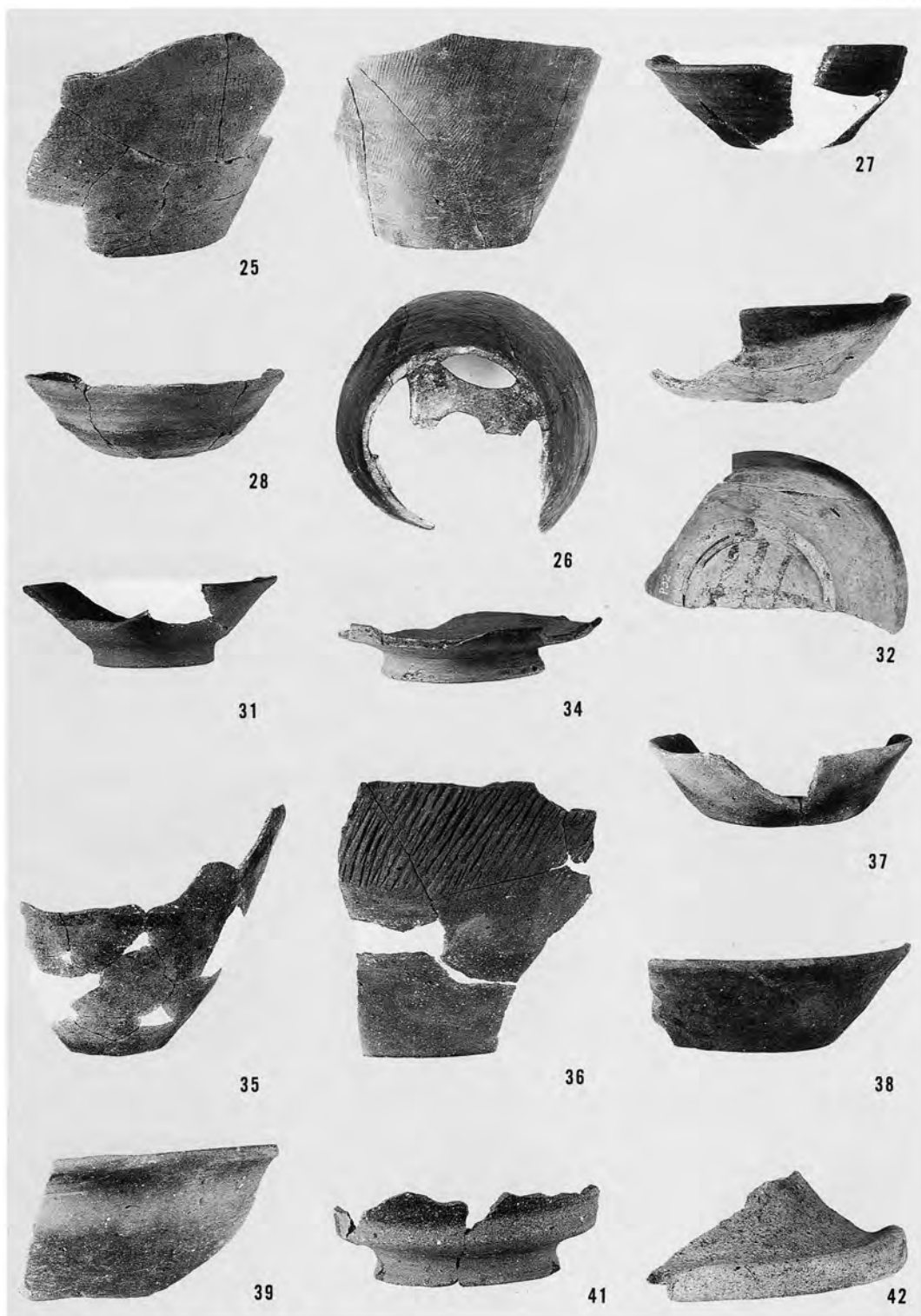
土坑群



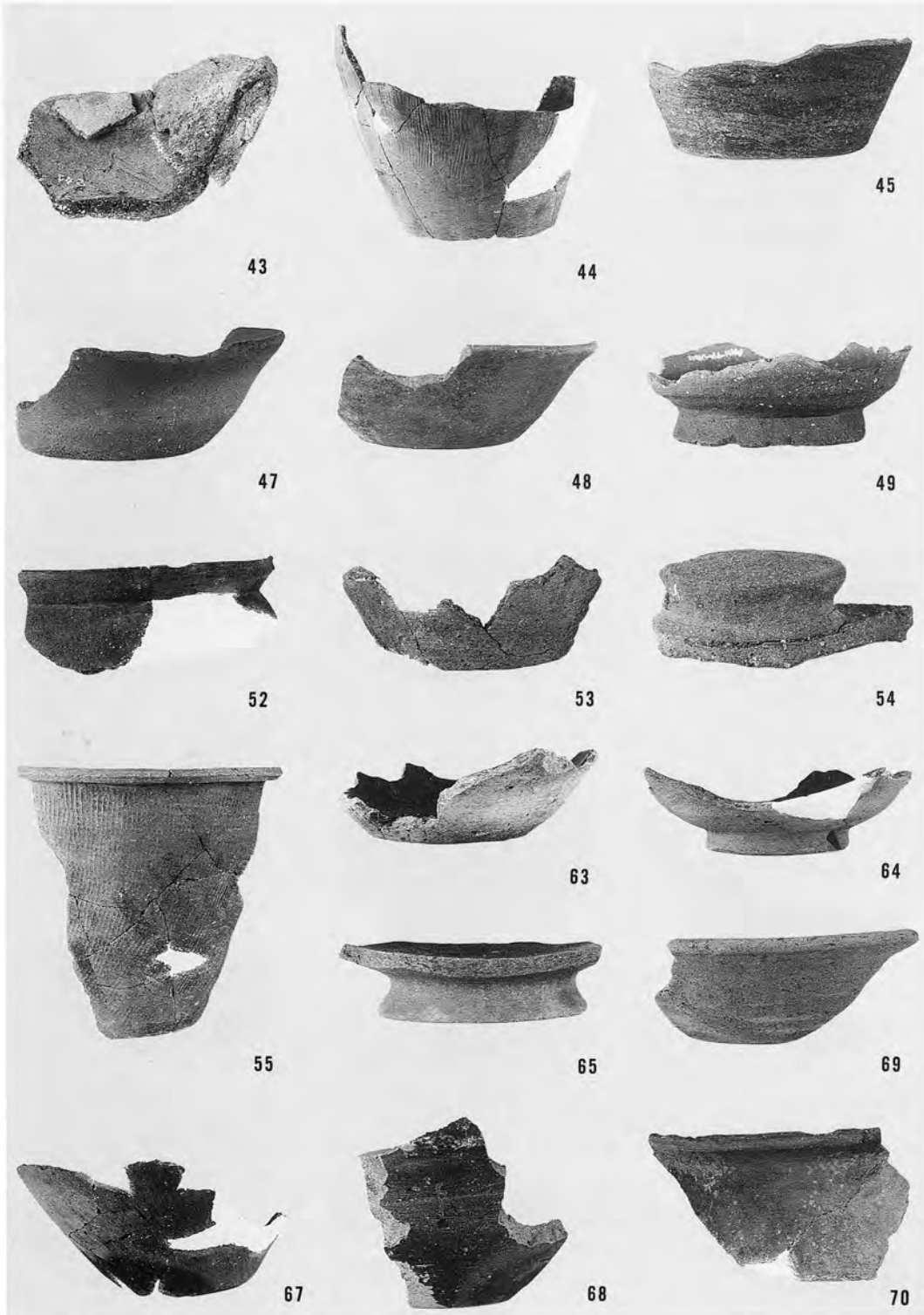
土坑群



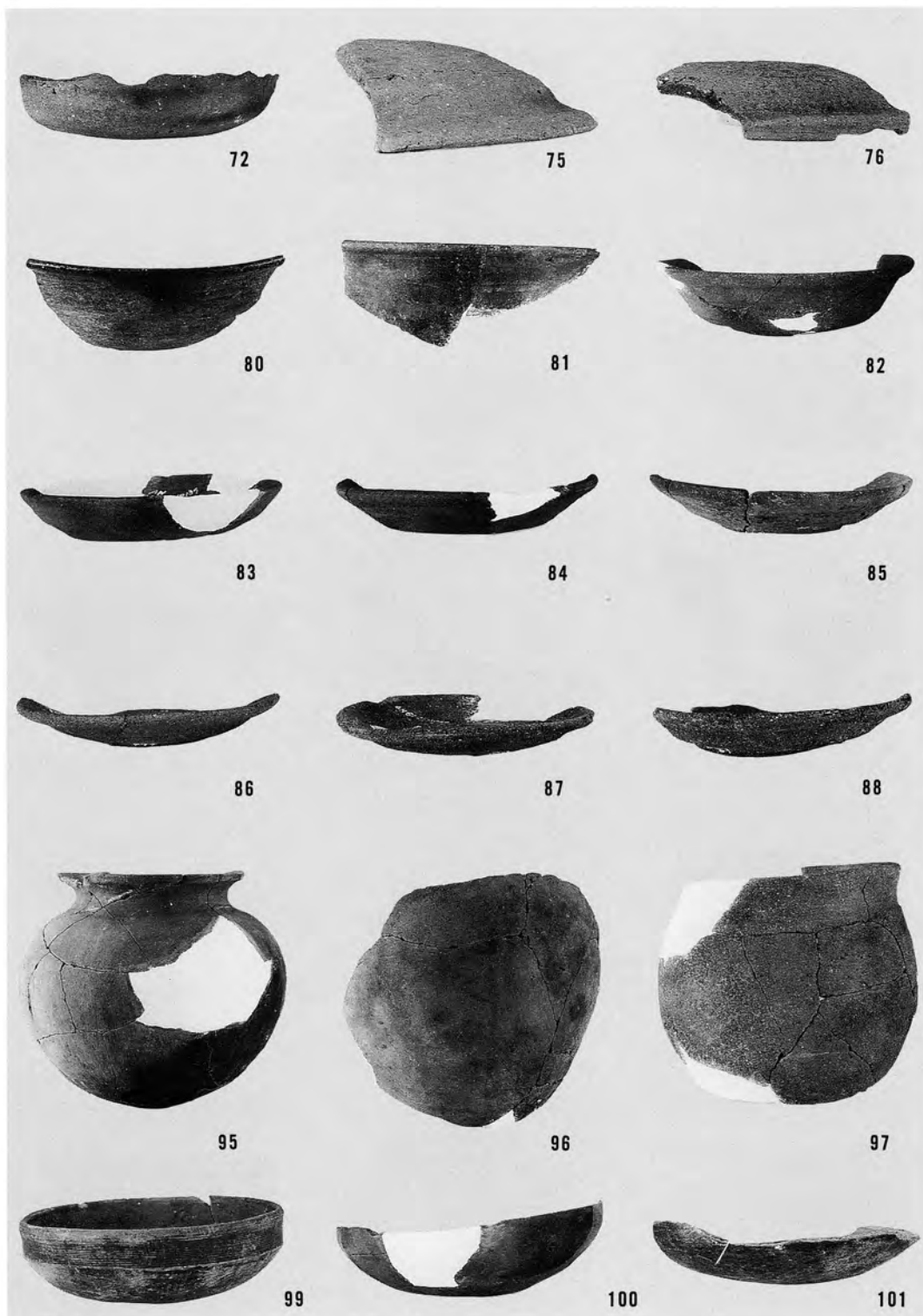
出土土器(1)



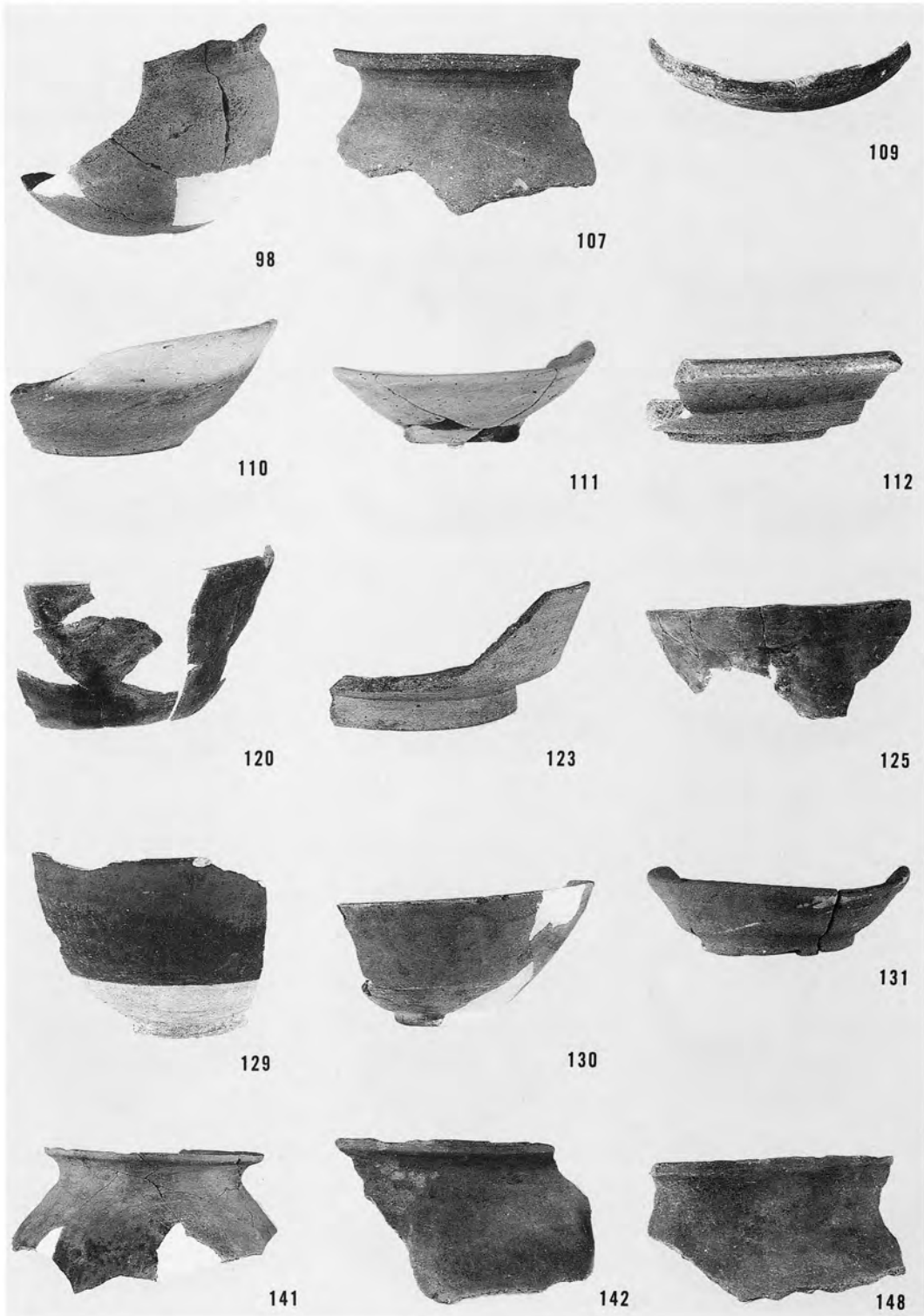
出土土器(2)



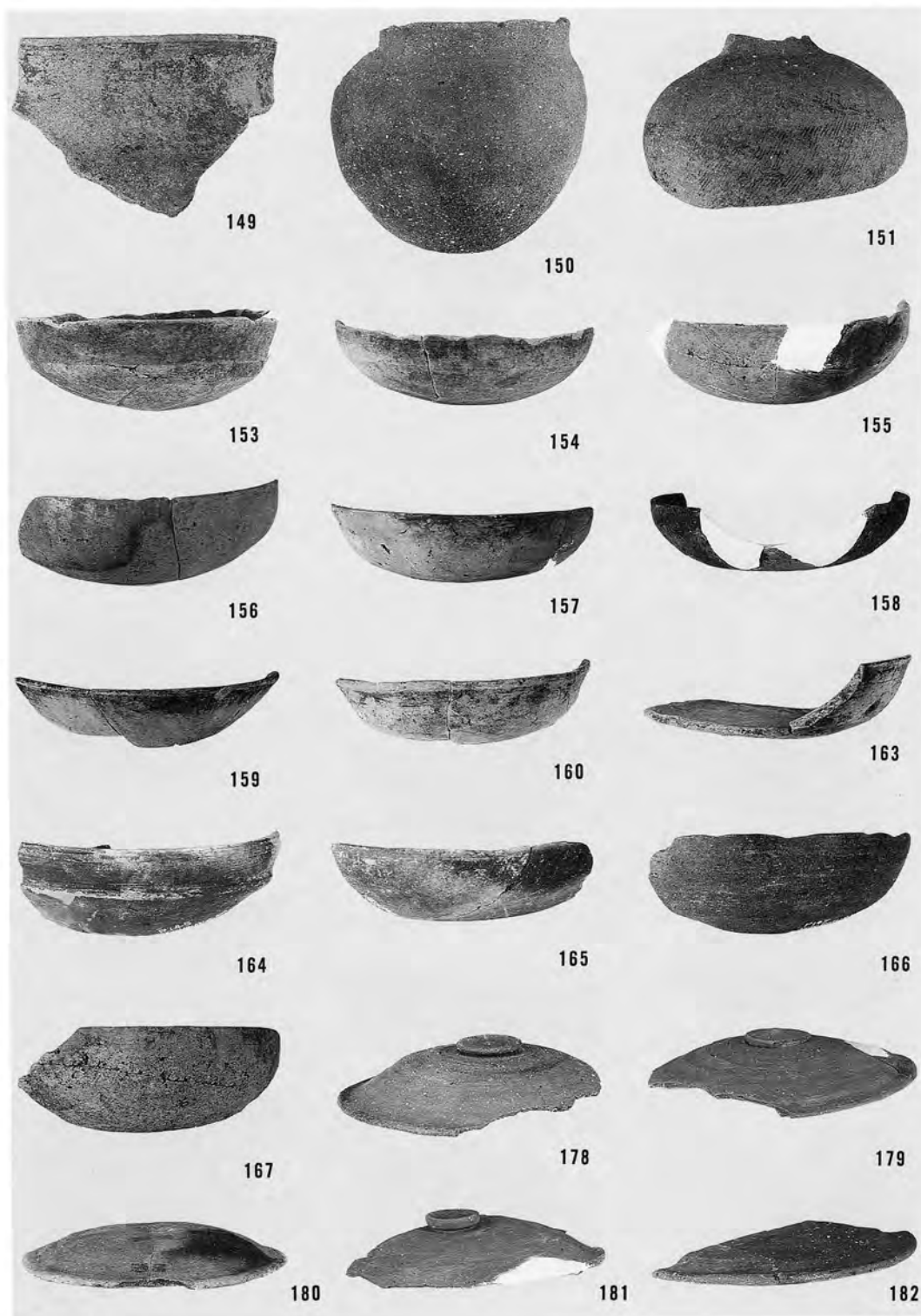
出土土器(3)



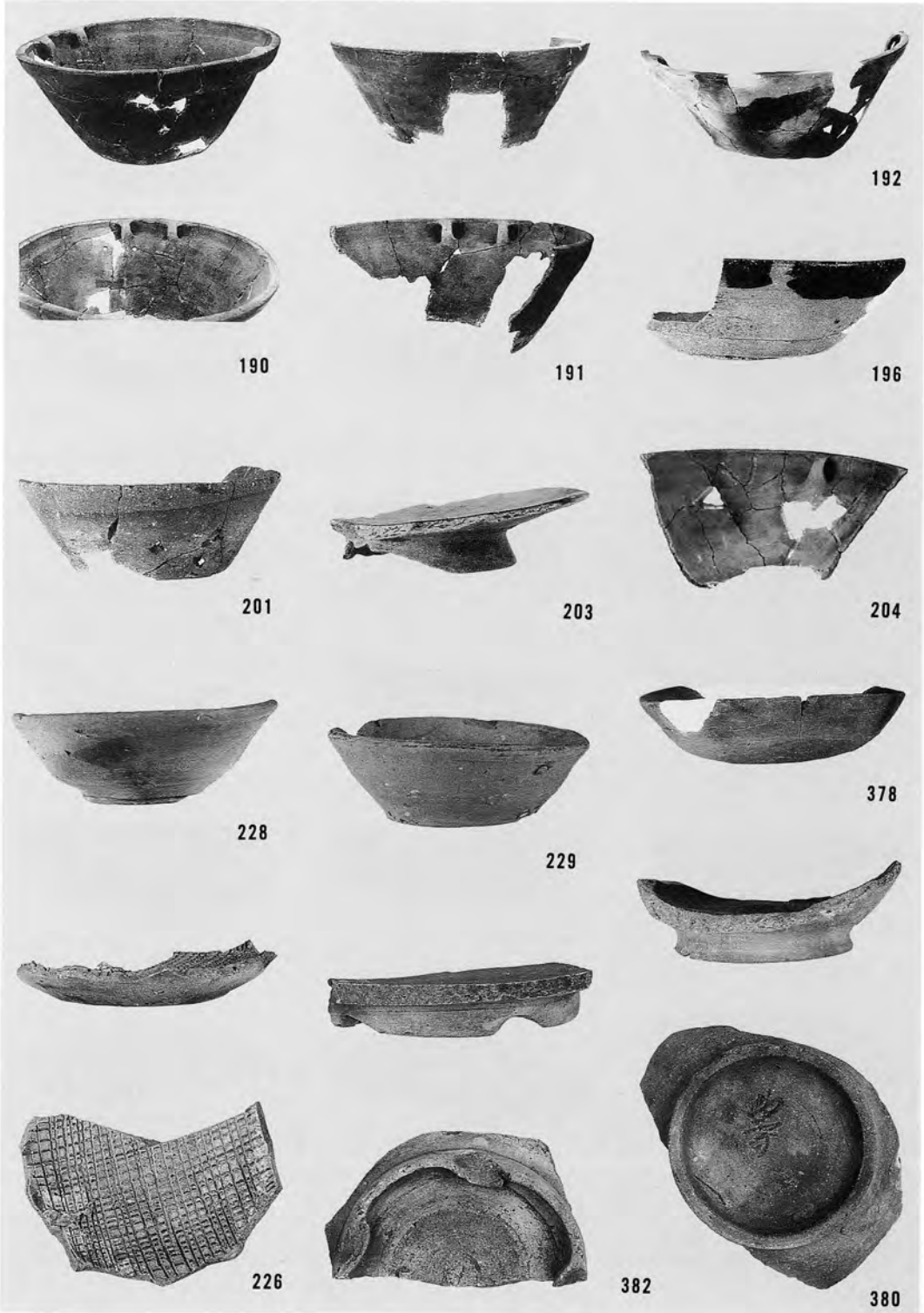
出土土器(4)

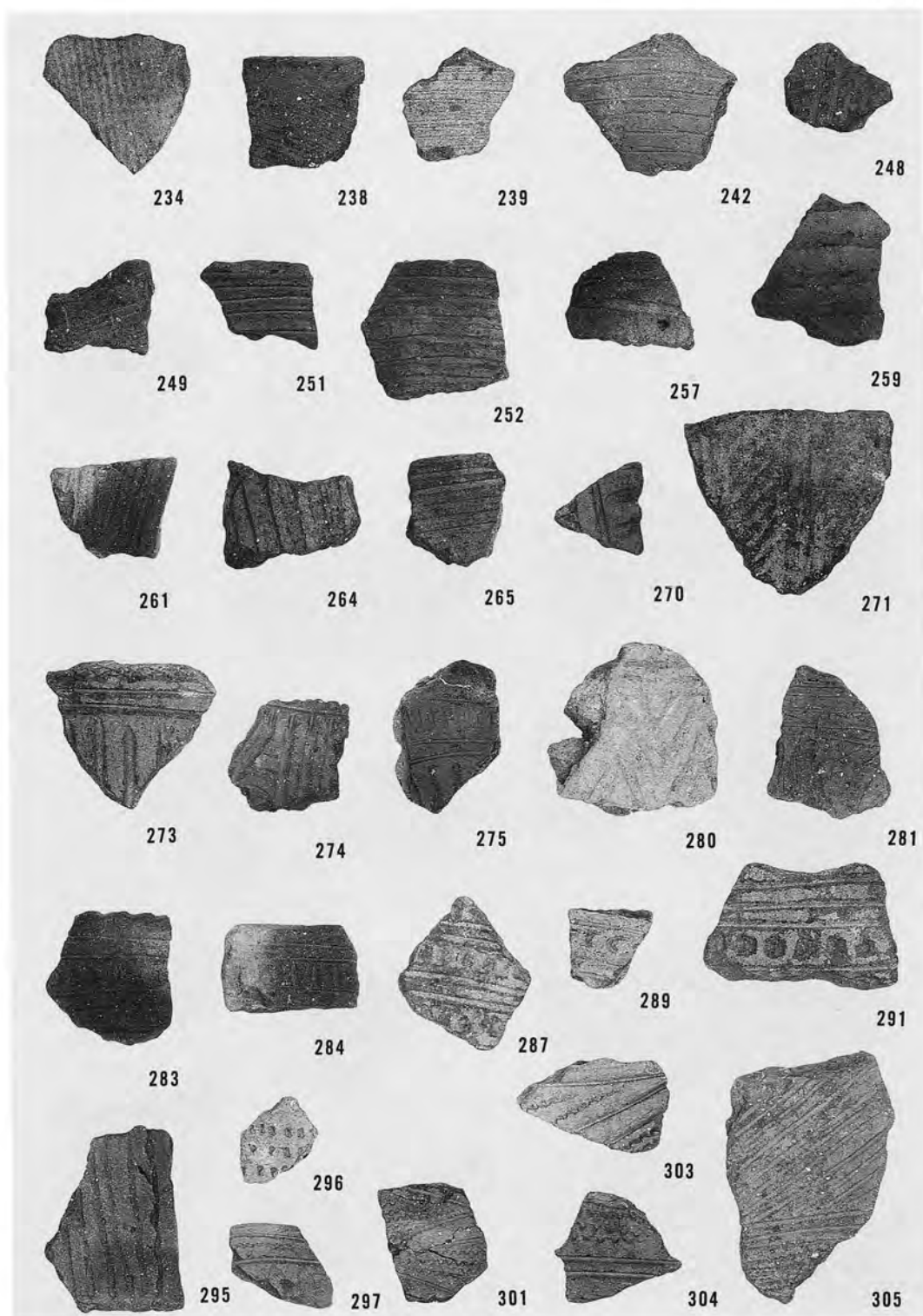


出土土器(5)

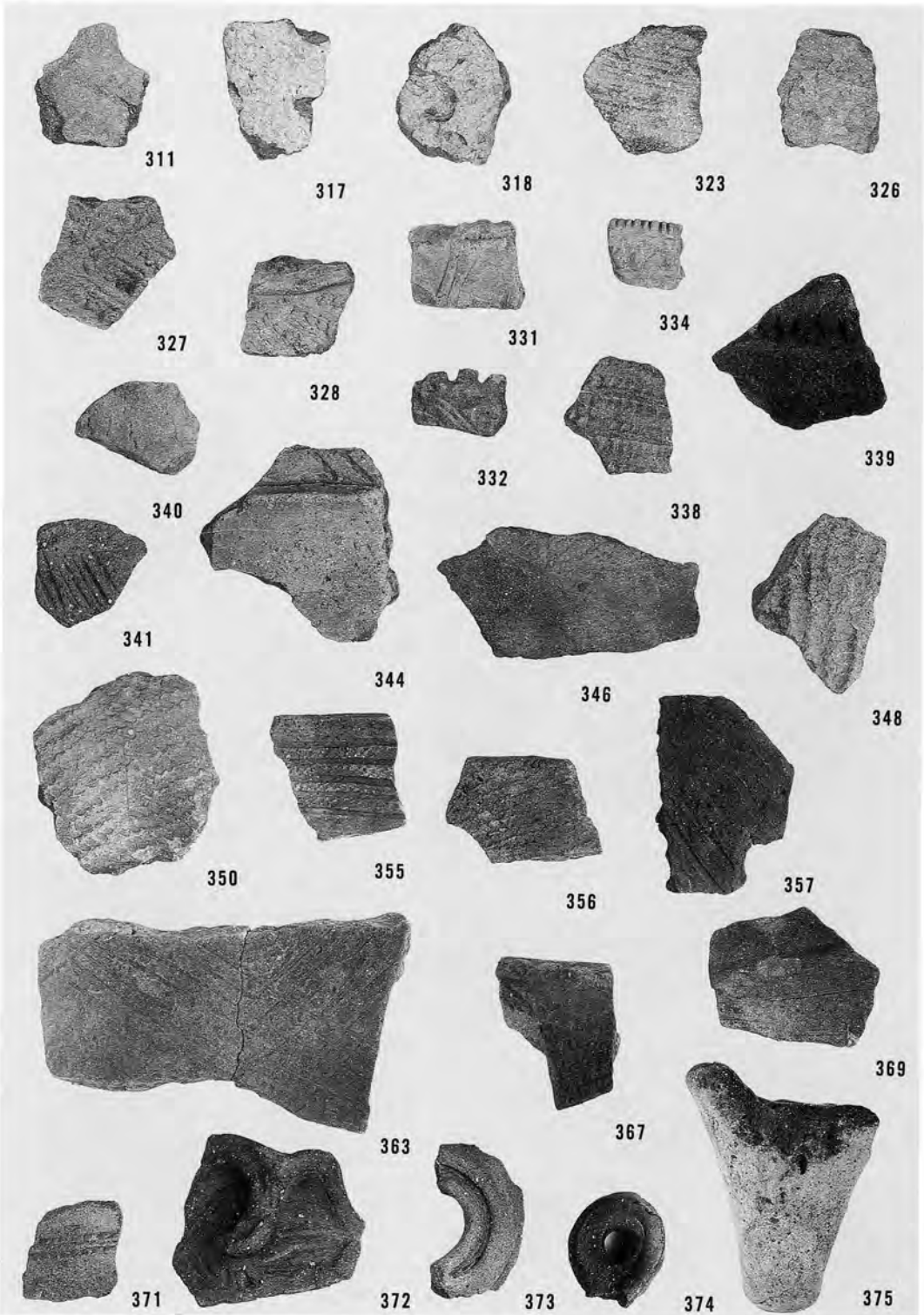


出土土器(6)

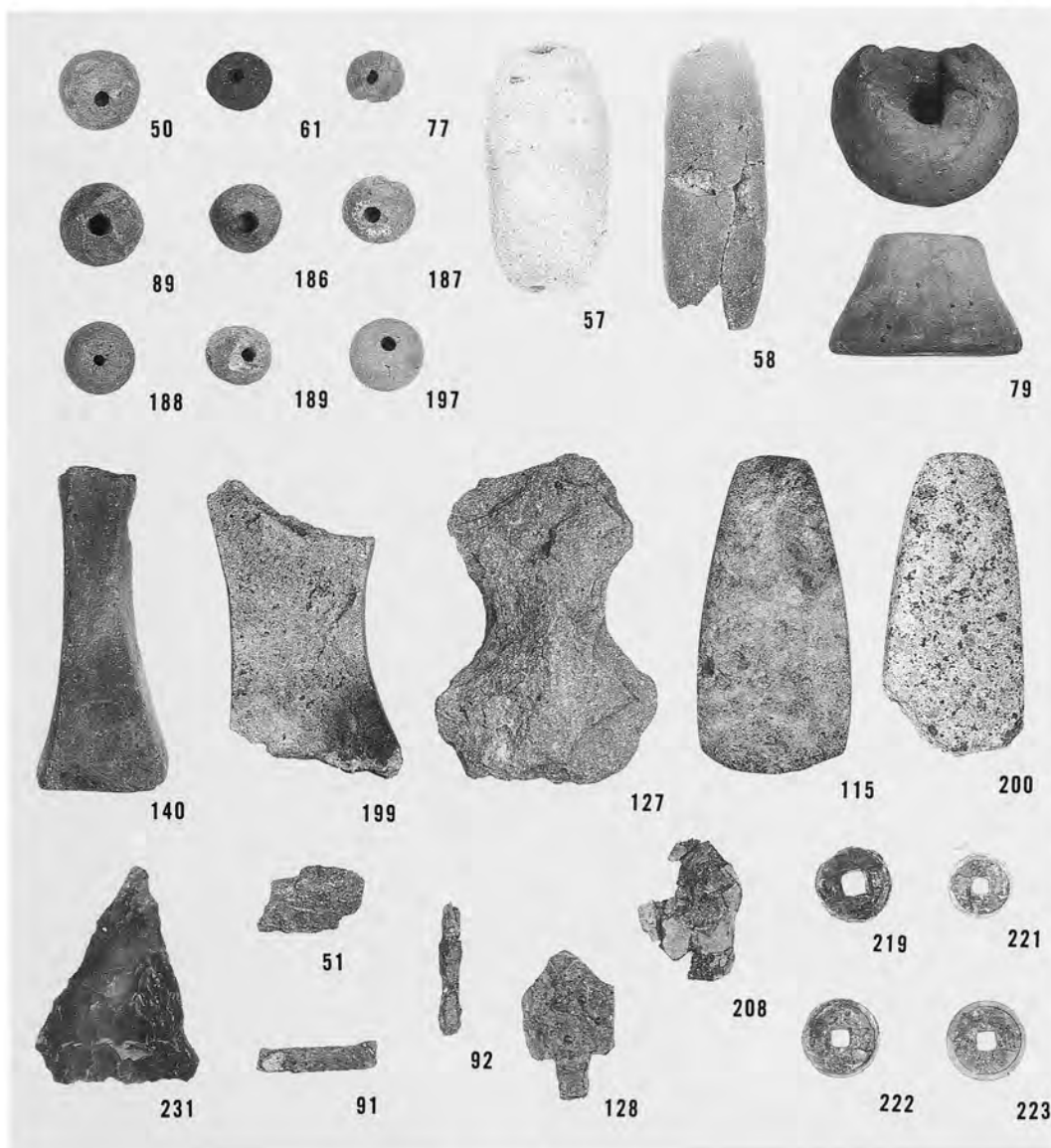




出土土器(8)



出土土器(9)



土製品・石器・石製品・鉄製品・古銭・馬齒

南 丘 遺 跡



南丘遺跡調査前全景



南丘遺跡調査終了時全景(1)

PL 29



調査終了時全景(2)



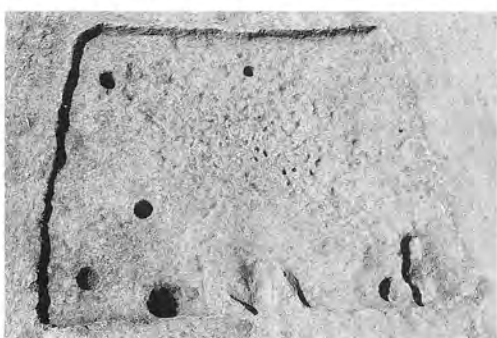
調査終了時全景(3)



第 1 号住居跡完掘全景



第 2 号住居跡完掘全景



第 3 号住居跡完掘全景



第 4 号住居跡完掘全景



第 5 号住居跡完掘全景



第 6 号住居跡完掘全景



第 7 号住居跡完掘全景



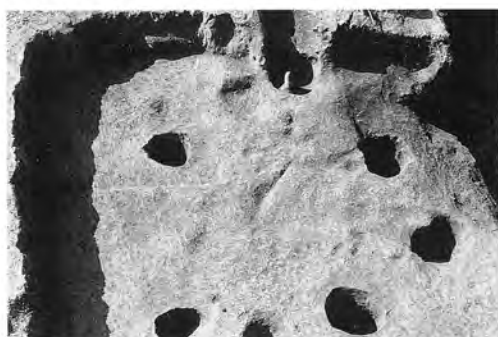
第 8 号住居跡完掘全景



第 9 号住居跡完掘全景



第 9 号住居跡遺物出土状況



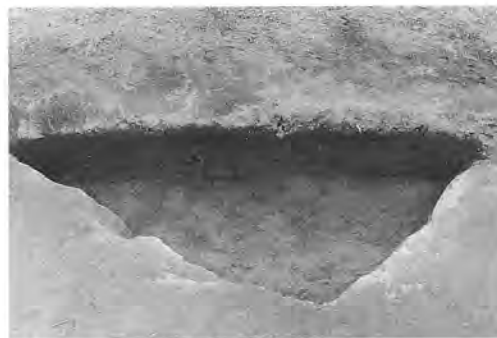
第 10 号住居跡完掘全景



第 11 号住居跡完掘全景



第 12 号住居跡完掘全景



第 13 号住居跡完掘全景



第 14 号住居跡完掘全景



第 15 号住居跡遺物出土状況



第 8 号住居跡竈



第 10 号住居跡竈



第 14 号住居跡竈



第 9 号住居跡遺物出土状況



第 1 号土坑完掘全景



第 6 号土坑完掘全景



第 7 号土坑完掘全景



第 8 号土坑完掘全景



第 24 号土坑完掘全景



第 1 号沟完掘全景



第 2 号沟完掘全景



第 3 号沟完掘全景



第 4 号沟完掘全景



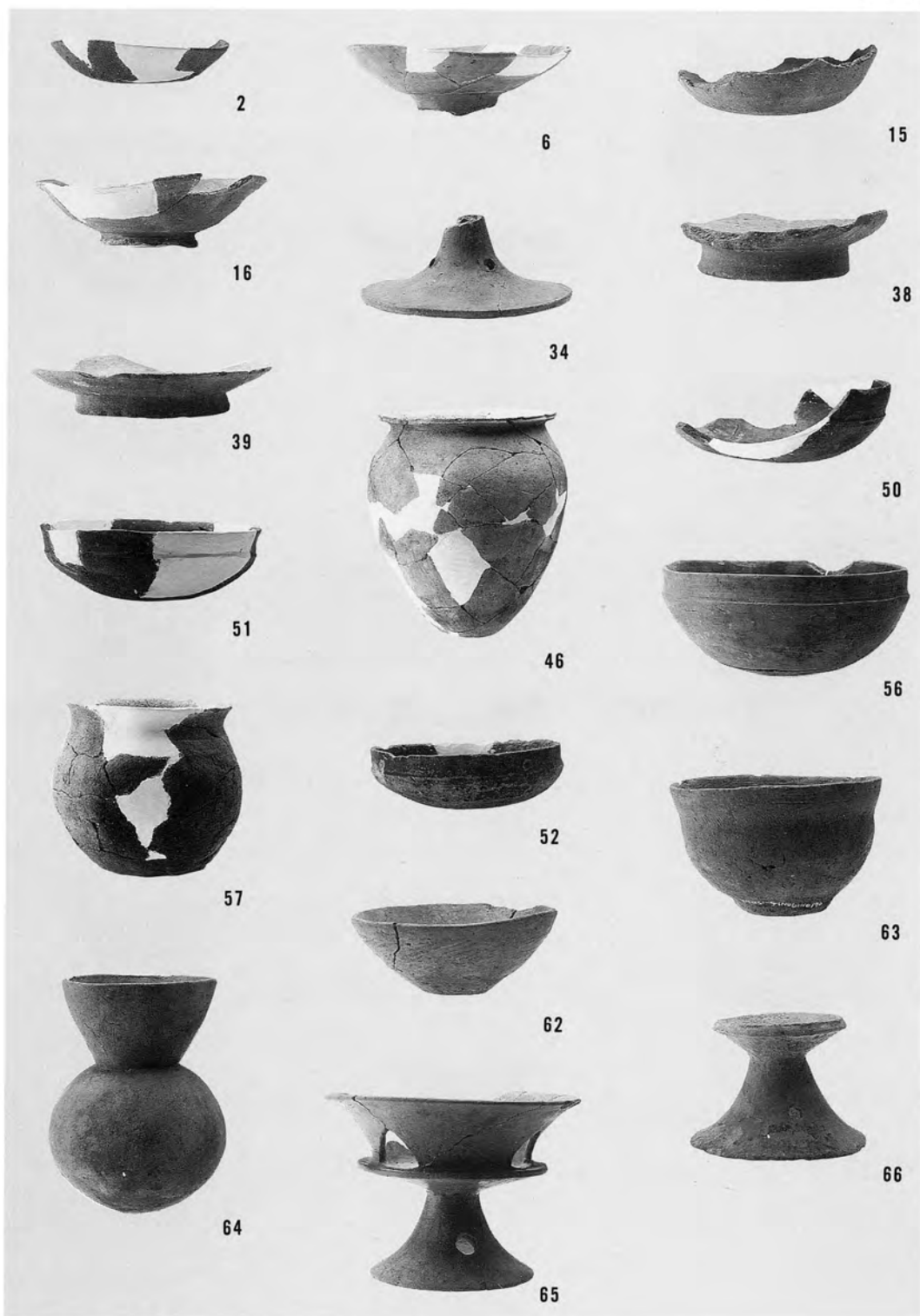
第 1 号性格不明遺構



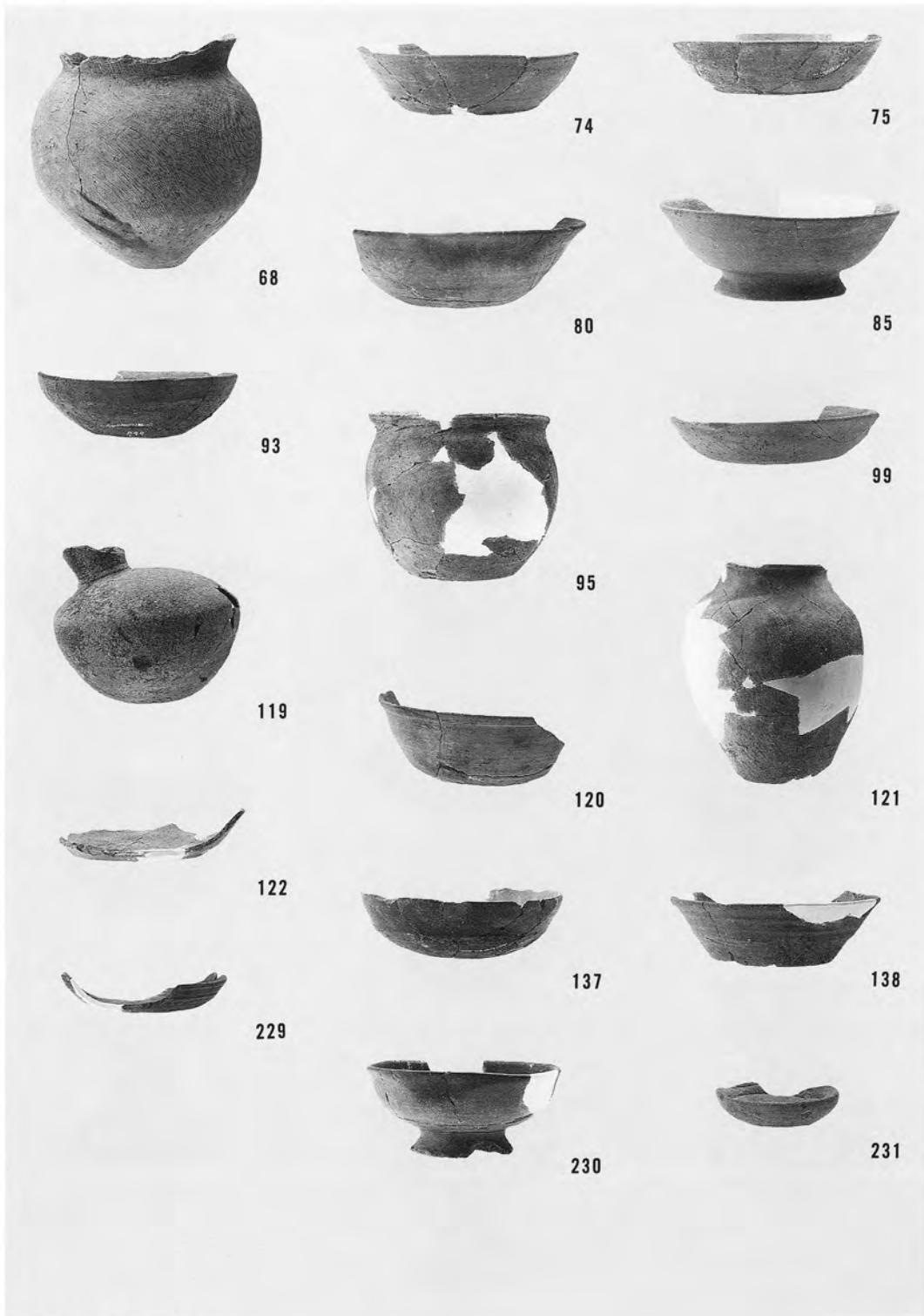
第 2 号性格不明遺構



第 3 号性格不明遺構



南丘遺跡出土遺物(1)



南丘遺跡出土遺物(2)

長 峰 遺 跡



長峰遺跡調査前全景



長峰遺跡伐開後風景

PL 37



遺構確認状況



調査終了時全景



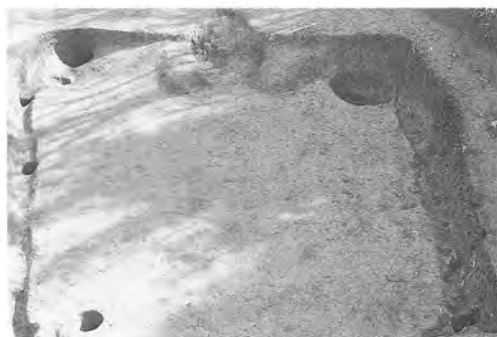
第1号住居跡完掘全景



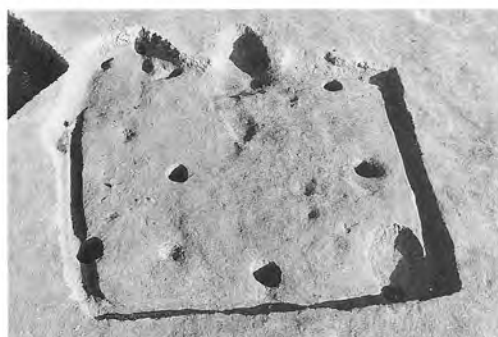
第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡完掘全景



第3号住居跡完掘全景



第4号住居跡完掘全景



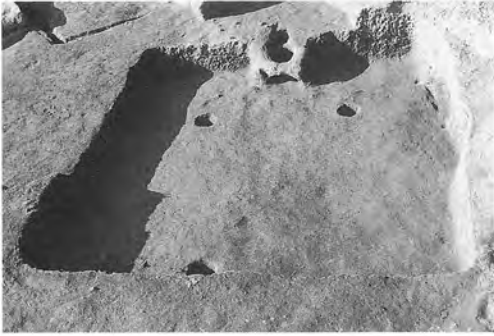
第5号住居跡完掘全景



第6号住居跡完掘全景



第7号住居跡完掘全景



第 8 号住居跡完掘全景



第 9 号住居跡完掘全景



第 10 号住居跡完掘全景



第 11 号住居跡完掘全景



第 12 号住居跡完掘全景



第 12 号住居跡遺物出土狀況



第 1 号性格不明遺構完掘全景



第 1 号性格不明遺構土層断面



第 1 号住居跡竈



第 3 号住居跡竈



第 8 号住居跡竈



第 12 号住居跡竈



第 1 号炉穴完掘全景



第 4 号土坑完掘全景



第 9 号土坑完掘全景



第 10 号土坑完掘全景



第 11 号土坑完掘全景



第 12 号土坑完掘全景



第 19 号土坑完掘全景



第 21 号土坑完掘全景



第 22 号土坑完掘全景



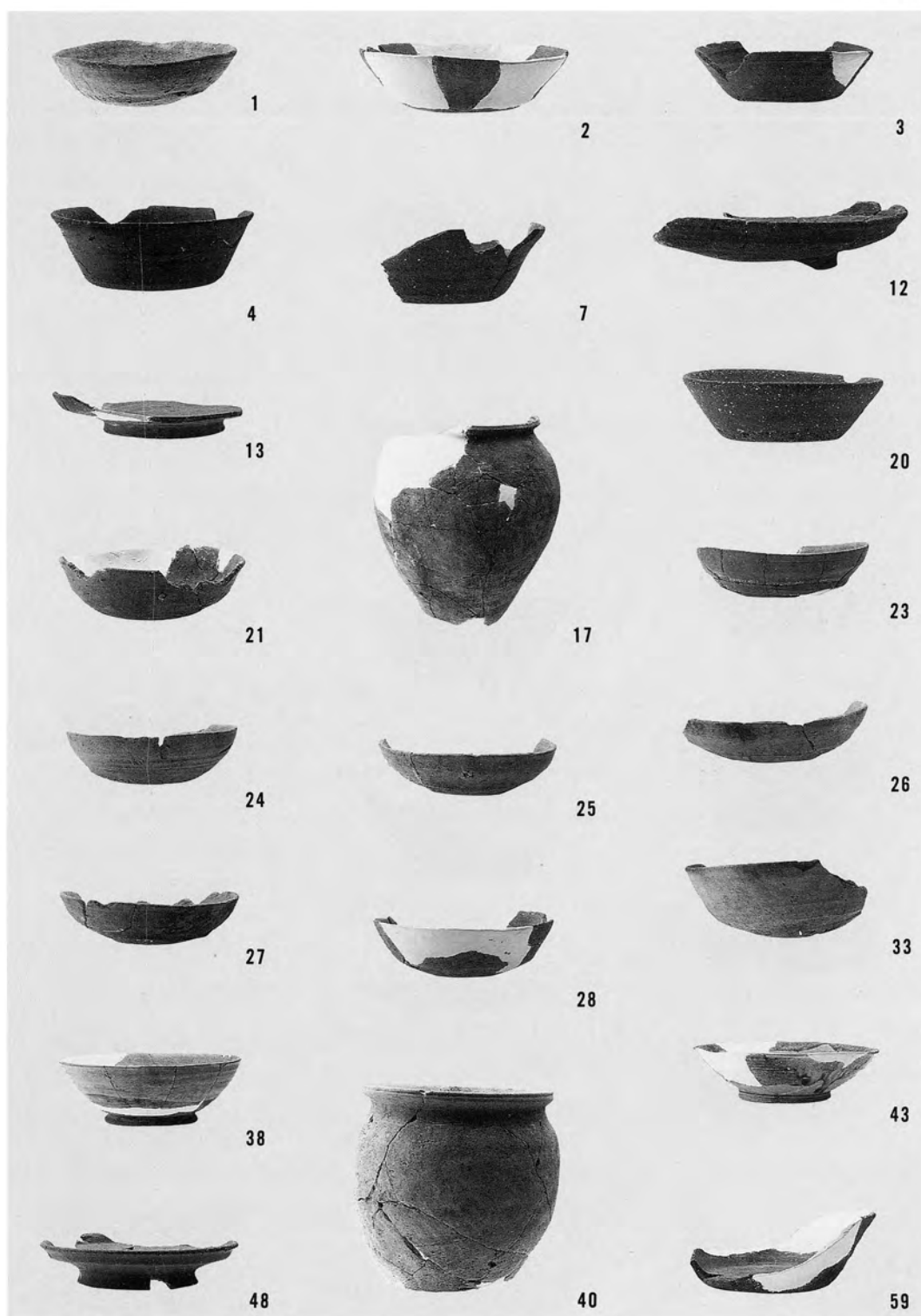
第 24 号土坑完掘全景



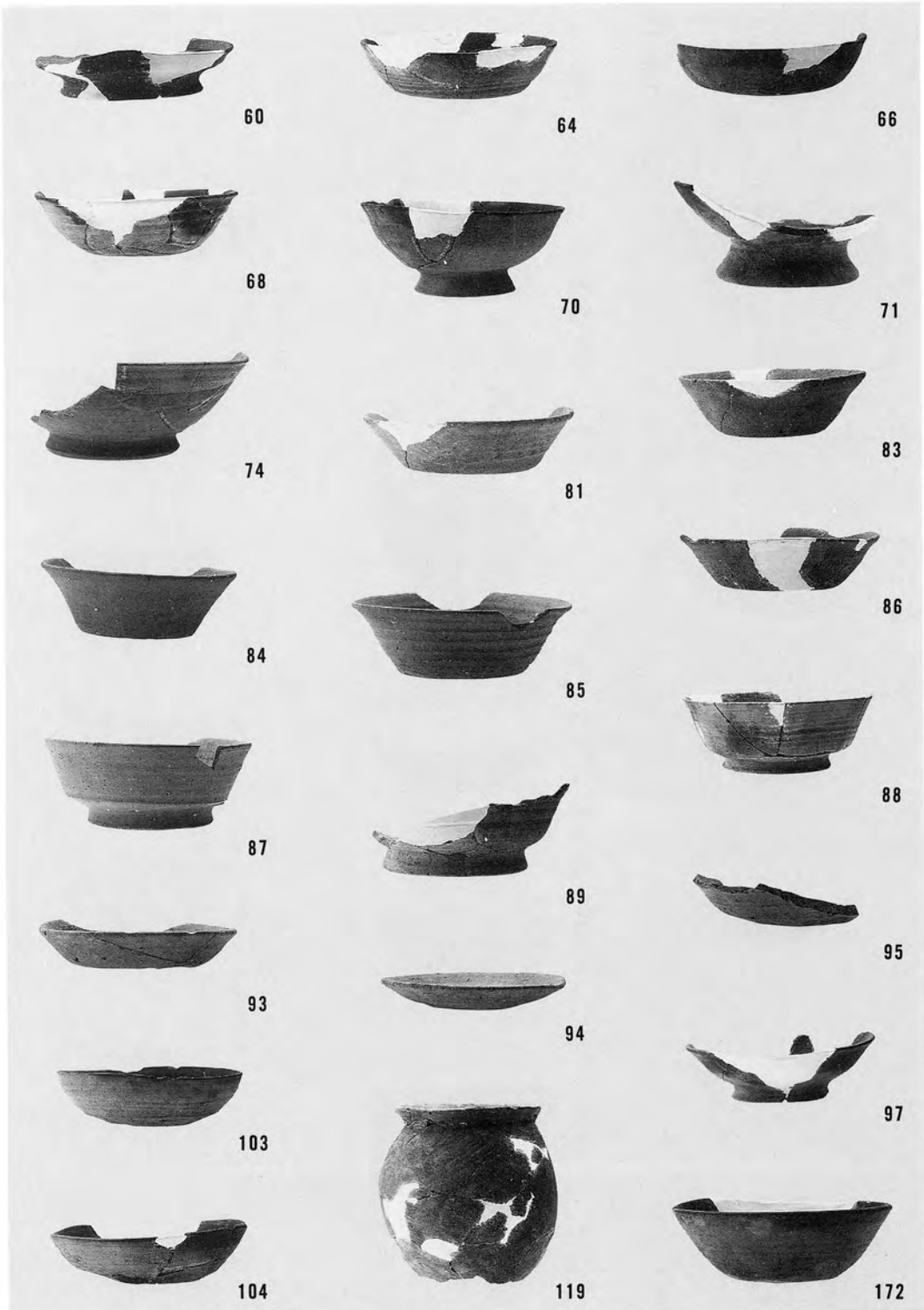
第 26 号土坑完掘全景



第 27 号土坑完掘全景



長峰遺跡出土遺物(1)

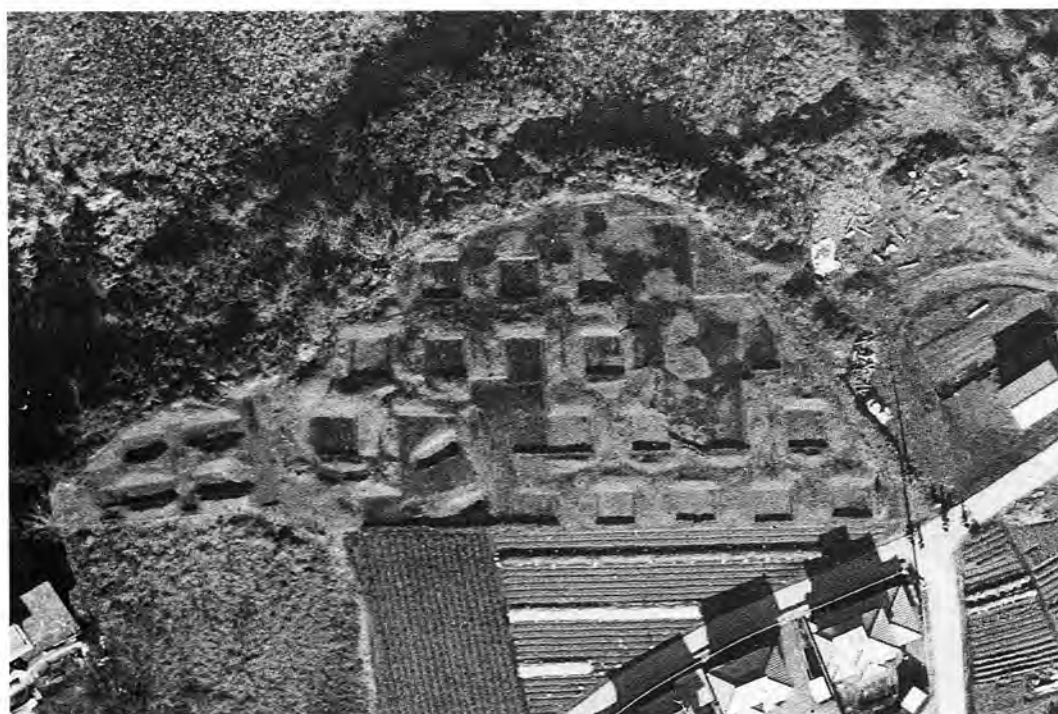


長峰遺跡出土遺物(2)

数 光 遺 跡



数光遺跡調査前全景



数光遺跡調査終了時全景



第 1 号土坑完掘全景



第 2 号土坑完掘全景



29



33



34

宮 塚 遺 跡



宮塚遺跡調査前全景



宮塚遺跡調査終了時全景



第 1 号地下式墳完掘全景



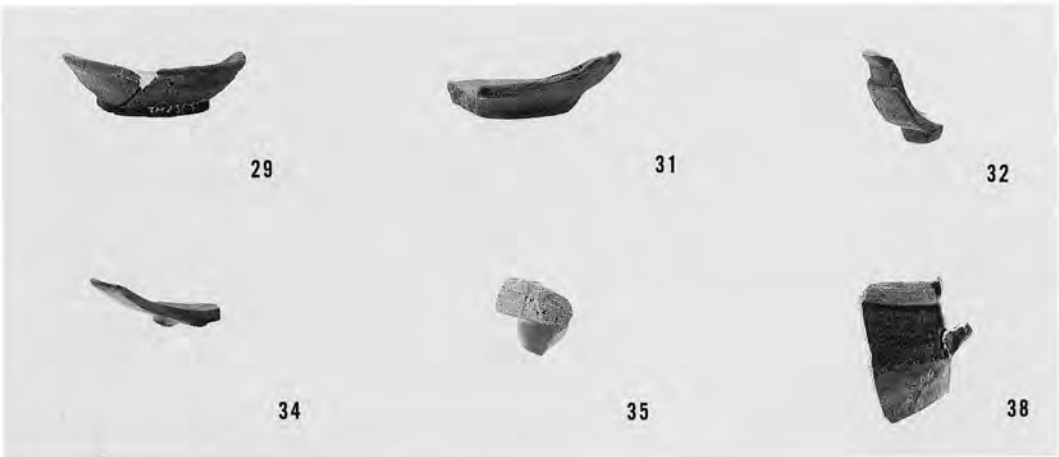
第 2 号地下式墳完掘全景



第 3 号地下式墳完掘全景



第 1 号溝西側部全景



右 粃 館 跡



右榎館跡調査前全景



伐開後風景



調査終了時全景(北西から)



調査終了時遠景(南東から)



第1号土塁東側部分



第1号土塁(内郭側から)



2号トレンチ断面(1)



2号トレンチ断面(2)



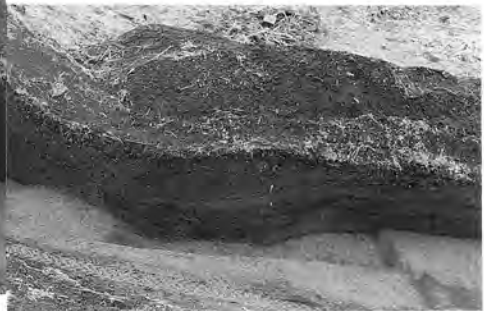
3号トレンチ断面(第2号堀跡)

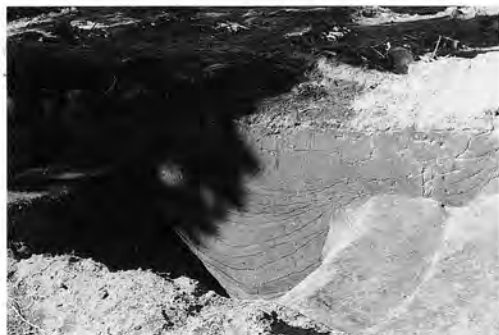


3号トレンチ断面(2)



4号トレンチ断面(第2号堀跡)





6号トレンチ断面(第1号堀跡)



6号トレンチ断面(土塁)



7号トレンチ断面(第3号堀跡)



7号トレンチ断面(2)



第1号堀跡(1)



第1号堀跡北西側折り部分



第1号堀跡南東側折り部分



第1号堀跡底面の段差



第1号塚全景



青面金剛像



第1号塚土層断面(西から)



第1号塚土層断面(東から)



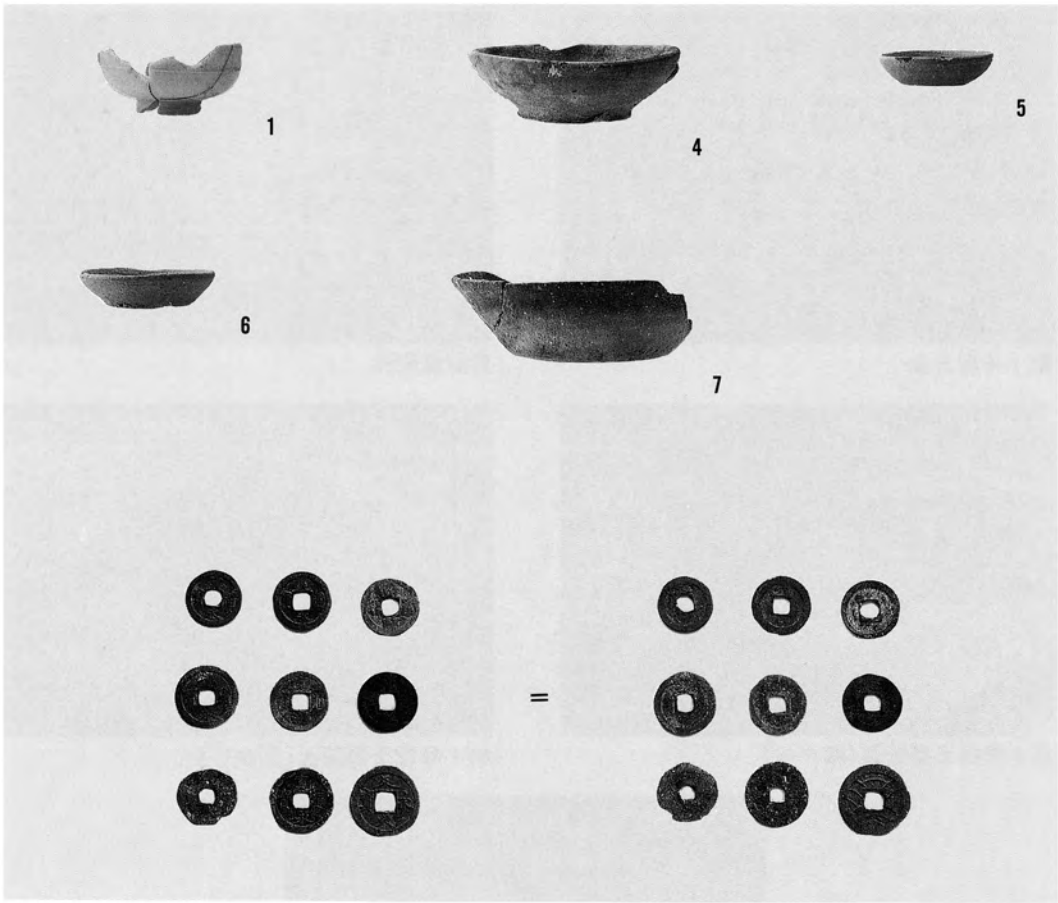
第2号塚全景



第2号塚土層断面(南西から)



第2号塚土層断面(南東から)



右靱館跡出土遺物

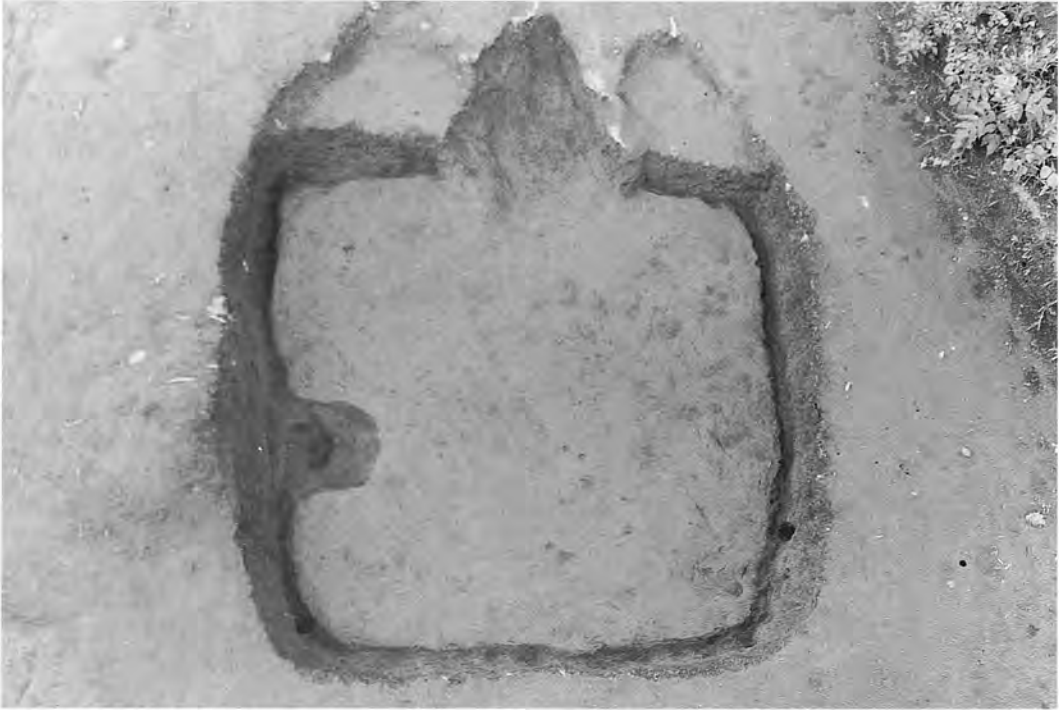
內路地台遺跡



内路地台遺跡調査前全景



調査終了時全景



第1号住居跡完掘全景



第1号住居跡遺物出土状況



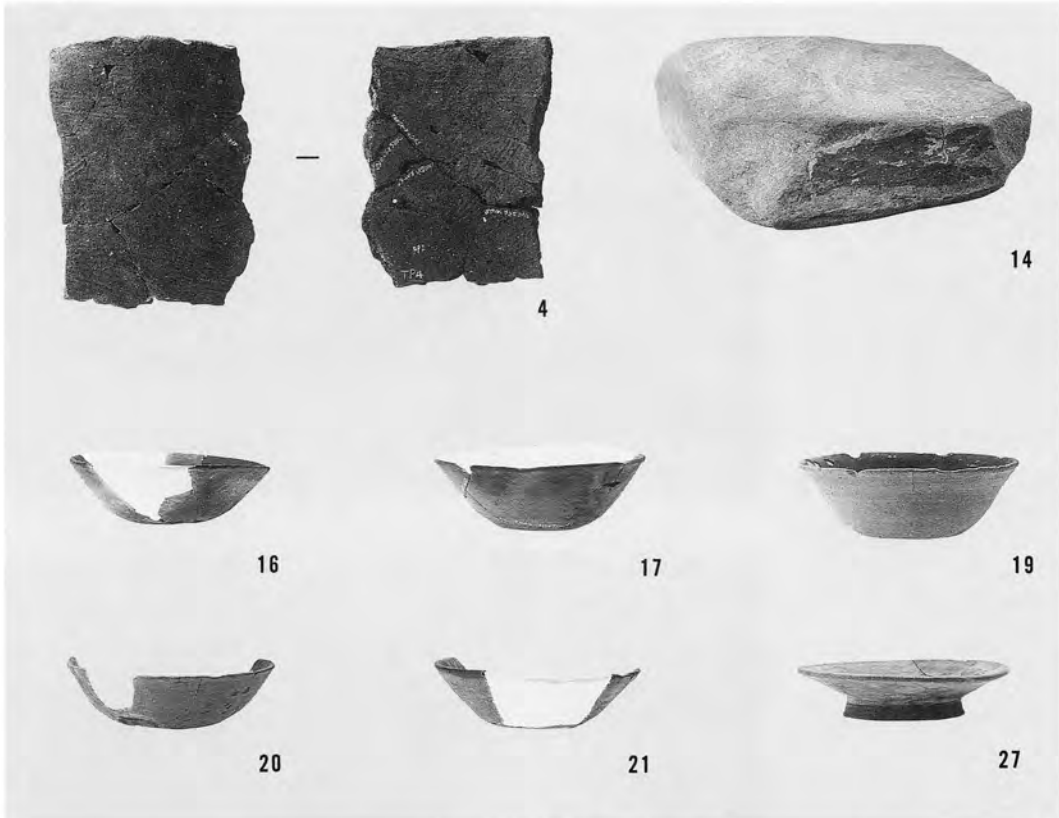
第 2 号炉穴全景



第 2 号炉穴開口部



第 2 号炉穴土層断面



墨書(17)



墨書(27)

茨城県教育財団文化財調査報告第64集

一般国道125号改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

西郷遺跡 ・ 南丘遺跡
長峰遺跡 ・ 数光遺跡
宮塚遺跡 ・ 右粃館跡
内路地台遺跡

平成3年3月25日印刷

平成3年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
Tel 0292-25-6587

印刷 株式会社 三栄印刷
水戸市谷津町1-50
Tel 0292-52-6501

